

笑顔をつくる物語

エヌラス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平和と笑顔が好きな少年“八意想”

彼は最低な父親と最高の母親の間に生まれる。父親から母を守りながら毎日を過ごす彼は彼女を作る。

——だがそれら全てを壊され生きる意味を見失う。

失意のまま歩くと、トラックが子供に突っ込んでいる状況を見た。

「危ねえ！」

咄嗟に動いた足で子供を守るが自身は死んでしまう。そして記憶を失い、この世界へとやってきた

右も左も分からない。大切な何かすら思い出せない彼は運命なのか、夢を追い続ける個性的な5バンドと出会い、運命を共にする

超古代から蘇った化け物、通称“グロンギ”が再び動き出す。

超古代の恐怖が現代に目覚めた時、人類の希望も復活していた。そして八意想の危機に動き出す…！

記憶を取り戻しながら、時に迷い、時に彼女たちとの仲を深めていく。

そして彼の記憶が戻った時…

「俺…よかったと思っています。じゃあ…見ててください」

未確認生命体事件から2年、全てが終わり平和に暮らしていた八意

想だったが、突如として襲いかかる不可能犯罪に巻き込まれ…!?

A New Hero. A New Legend

・仮面ライダークウガが分からなくても大丈夫なようにしてあります。

- ・これは主の妄想から出来た作品です
- ・できる限り誤字脱字やキャラ崩壊はしないつもりです
- ・初作品なので暖かい目で見守ってくださいると大変嬉しいです
- ・恋愛要素も出来れば追加します
- ・オ리지主!

page14に主人公立ち絵追加

プロローグにも追加します!

最初のほうはかなり読みにくくなっています。現在修正しております

2021年1月完結しました!!短編などを投稿しています

アギト編から台本形式辞めました!

作途中で台本形式まじっています。

目次

第0章 始まりはいつも突然に

プロローグ 1

第1章 戦士クウガ 俺の変身

page 1 夢の世界で起きたアニメ的現象 4

page 2 まるで漫画のような世界 7

page 3 目覚めはアルコールの匂いがする病室 11

page 4 ようこそ！circleへ！ 14

page 5 波乱のバイト、そして生まれる後悔 19

page 6 circleでの戦闘 25

page 7 病室での出来事 30

page 8 ハッピー(?)なりハビリ そして波乱の予感…

35

page 9 ハロー、ハッピーワールド！ 39

page 10 至福のひとつとき…? 44

page 11 女子校に男子1人は地獄 50

page 12 目覚めし戦士 その名はクウガ 55

page 13 クワガタとクモとコウモリ 60

第2章 4つのフォームと5つのバンド

page 14 羽丘の天才 襲来！ 64

page 15 トライチエイサー 69

page 16 戦前のひとつとき 74

page 17 闘いの朝 79

page 18 決着、羽丘女子学園 そして恋情 87

page 19 第2ラウンド開始 97

page 20 青龍 長き物 | 105

page 21 微笑みの鉄仮面と仮面ライダーとお見舞い

113

page 22 護衛と弓道と親友 | 117

page 23 Pastel? Palettes | 124

page 24 ゲゲル 初めての殺人 | 127

page 25 ホテルの出来事 | 135

page 26 緑のクウガ | 143

page 27 バイクとイカとNFO | 150

page 28 紫の鎧 | 160

page 29 記憶とポテト | 168

page 30 殺意と紫の鎧と剣 | 175

page 31 青薔薇とズ集団のボス | 186

page 32 乱入 | 192

page 33 関わり | 196

page 34 救出：そして | 203

page 35 特訓 | 214

page 36 強化キック | 222

第三章 メ集団

page 37 勉強会とカッターと協力 | 227

page 38 了承 | 235

page 39 協力 | 239

page 40 日常と次なる敵 | 244

page 41 馬の鎧 | 250

page 42 はた迷惑な機械 | 259

page 65	決着	本当の自分と新たな友達	449
page 64	商店街での対決と夜の決戦開始		441
page 63	新学期と過去		433
page 62	切り札の赤の金		425
page 61	鉄球と酸っぱい物		415
page 60	ルールレット		408
特別編	ミッシェルINポツシブル		404
page 59	青の金と過去との再開		394
page 58	海でのひととき		382
page 57	お泊まり会は邪魔しない		375
page 56	災難な午後		367
page 55	煽り運転		362
page 54	弦巻家の出来事		357
page 53	緑の金		347
page 52	身体の痛みと心の痛み		340
第四章 過去とゴ集団			
page 51	紫の金		333
page 50	アイサツ		325
page 49	予兆		316
page 48	遊戯		306
page 47	再会		302
page 46	変異		296
page 45	霊石		288
page 44	喪失		280
page 43	虎と発酵少女		269

page 90	金のゴウラム	630
page 89	正体	620
page 88	I love your way!	613
page 87	二刀流	598
page 86	新たなバンド	591
page 85	船上ライブ計画!	586
page 84	異質な気配	579
page 83	究極の闇	568
page 82	こころの抱擁と警察との公式タッグ	560
page 81	最凶のゴ集団	553
page 80	溶解液と早朝の出来事	547
page 79	大怪我の後	543
page 78	守るために振るう拳	538
page 77	友達：いや親友だから	532
page 76	憎しみのために振るう拳	523
page 75	恐怖	516
page 74	日菜	510
page 73	残虐	503
page 72	合同体育祭!	495
page 71	連携	488
page 70	一難	484
page 69	また複製、そして借り物だけの戦い	475
page 68	おんぶ	470
page 67	慈愛の女神と複製	463
page 66	破損	456

page 1	circleの飾り付け	638
コラボ回！	八意想	645
page 2	破壊のカリスマ	661
page 3	何人もその眠りを妨げることなかれ	676
page 4	覚醒	683
page 5	生まれた迷い	692
page 6	迷いを打ち切った先	696
page 7	ありがとう	704
page 8	黒の金と力	711
page 9	奇跡、希望の力	717
page 100	泥沼の先に…	725
page 101	最高のプレゼント	733
page 102	悲劇の始まり	740
page 103	惨状	746
page 104	別れ	752
page 105	最後の变身	764
page 106	悲壮の拳	775
最終回	戻ってきた日常	786
IF最終回	おかえり	792
6章	戻ってきたはずの日常	800
page 1	新たな始まり	806
page 2	伝説再び	812
page 3	はじめよう	817
page 4	当たって砕く	825
page 5	最悪は再び動き出す	825

page 6	崩壊と再び	830
page 7	人だから	836
page 8	darkness	844
page 9	勇気・愛・誇り	853
page 10	“絆”	862
page 11	A New Legend	876
page 12	銀色の巨人	888
最終回	笑顔を作る物語	903
特別篇	今井リサの誕生日	912
第7章 不可能犯罪		
page 1	あれから2年	920
page 2	突如壊された平穏	924
page 3	G3システム	930
page 4	共鳴	938
page 5	G3とクウガ	946
page 6	敵か：味方か	954
page 7	平和をとるか、戦いをとるか	958
page 8	2人のその後…	965
page 9	苦悩	969
page 10	呪い	974
page 11	俺に力を	982

第0章 始まりはいつも突然に プロローグ

俺はただ、普通に生きてかった……

普通に友達を作って

普通にバイトをしたりして

でも現実には、そんなに甘くなかったことを思い知らされた。トラツクに轢かれて：謎の光に包まれて、そうして気がつけば俺は白い奴になっただけで、謎の化け物から5人の少女を後ろに戦っているんだ：!?

その化け物は気持ち悪いくらい蜘蛛って分かる。だから俺は蜘蛛野郎と呼ぶようにする。

「なんなんだよ：!?!お前は一体：!」

「…死ぬ…!」

「はあ…!?!」

いきなりの死ぬ発言。俺はそんな悪いことした記憶が無いんだが……?

「グ…アアアアアッ!!」

「…っ!?!」

次の瞬間、凄まじい気迫とともに、俺のみぞおちに拳を叩き込まれ、俺は怯む。

「…くあ…?」

そんな間拔けな声が漏れる程、その一撃は俺の命を刈り取るには充分な一撃だった。

自分の腹に異物が“刺さりこんだ”感触。

「…は?」

自分の下を見る。

血が流れている。

血は赤く、白い体ではよく目立つ。

目でその血が流れている根元を見る

それは自分の「腹」だった…

そしてその腹に蜘蛛人間の「爪」が刺さっていたことにすぐ気づいた。

その傷を見た瞬間に寒気と熱さと激痛が襲ってくる。まだ頭で現在の情報が理解出来ない。だがそれを一瞬で埋めつくした感情。

『痛い、苦しい、怖い』

それだけで俺の戦意を削ぐのは充分すぎるくらいだった。

「があ…！ あがあ…!?!」

刺された場所が痛い、ただひたすらに痛い。俺は激痛に絶叫することすら忘れ、視界が白く染まりかける。

——このままじゃ、死ぬ。

そして1つ、自分に感情が芽生えた。

『もし俺が死んだら、彼女達はどうなる』

何故今俺がこうなってしまったのか、早速死にかけてるのかに対する怒りもある。なんでこんな目に会わなきゃいけないのか、それも思う。だがしかし——

彼女達が死ぬのは、今1番やってしまったてはいけない。そんな気がした。

「クッ…があ…!」

俺はただ“守りたい”その一心で爪を引き抜こうとした蜘蛛野郎の腕を掴む。早く抜きたいが抜いたら大量出血で多分死ぬ。この激痛に耐えて奴を倒すしか——俺も、後ろにいる彼女達も助かる方法がない。

「う、うあああああああ…!!」

慣れない暴力、俺の拳は震えながらも、恐怖で閉じた目でただひたすらに殴りつけた。手に伝わる嫌な感触、皮膚が衝撃に打たれる嫌な音。

俺は相手が暴れて逃げようとするのにも構わずに、拳を振った。

早く終わらせたい。こんな感触を味わいたくない、その一心で…

「クッ…!」

俺がもう一撃を叩き込もうと左拳を振った時、相手はその拳を受け止め、ドロップキックを決めた。

「がはっ…!?!」

俺は後ろに転がり倒れ、蜘蛛野郎はその場に倒れる。だが蜘蛛野郎は立ち上がると、口から糸を出して逃げた。

「はあ…はあ…」

とにかくひとまずは何とかなった。そう思い気を抜きかけた瞬間、俺はその場から動けなくなっていた。爪が引き抜かれ、そこから大量出血している。止めようにも手が動かない。ほぼ感覚がない。

――再び体が冷えていく。

「貴方…大丈夫ですか!?!」

さっきまで座り込んでた5人の少女が、俺の周りを囲み、震えながら話し掛けたり救急車を呼んでいた。

「大丈夫…って凄い血! あこ! 救急車!」

「わ、わかったりサ姉!」

「……」

話しかけようと口を開く前に、前が暗くなった。

そうして俺は、意識を手放してしまったのだった

第1章 戦士クウガ 俺の変身

page 1 夢の世界で起きたアニメ的現象

「…っ」

誰かに呼ばれた気がして目を覚ます。

目に入ってきたのは1面白の世界だった、病院の蛍光灯の光にしては明るすぎる。

てか床も白だし…俺普通に立ってるし

「……」

まだなんだかぼんやりとする頭を振り考えて、今の状況を口に出す「なんだこれ…漫画とかよく見る夢の出来事くみたいなのは…」

『正解、というべきか』

不意に後ろから声がして咄嗟に振り返る。振り返った先に映ったのは“俺”だった。

まだぼんやりとする頭で考えて、そして一言

「俺…?」

『まあな、実態がないから装着者の姿を借りてるだけ。』

「そうか…ってあの子たちは!?俺の後ろにいた5人!」

『自分より他人の心配かよ…!!』———無事だ。お前が守ったんだ。』

俺はそれを聞いてほっとした。頑張りは無駄じゃなかったんだ

「…で、俺は死んだのか?」

『…まだ、死んではない。ここは生と死の狭間、と言っておく。あと死ぬか死なないかはお前次第だ。』

「…そうか、まあ俺が死んでも、誰も心配しないさ…早く死んだ方が“????”にも会える」

なんだ?名前が言えない…?

????? 誰だ?

『お前、面白い奴だな。自分に不都合な記憶を思い出そうとするって』

「なんだと…？お前、俺になにかしたのか？」

『まだ、してない』

「まだ、まだって…」

『なら早速本題に入る。お前、俺と戦う気はないか？』

「どういう事だ…」

『色々めんどくさいことになった。この世界にさつきみたいな化け物が大量に復活したんだ…』

「あんな化け物が…大量に…!?!」

恐ろしいなんてもんじゃない。あんなのが大量に街にいるなんて

…

『ああ、しかもお前が戦ったのは“ズ”の奴だ、一番下だな』

「あれで一番下…」

『ああ、俺もお前と無理矢理一体化したせいで本来の力が使えない。お前の意思が、戦士として戦う心には到底足りないんだ』

「そんなの…だれだってそうだろう？」まだここがどこかで…そんなのすらわからないのに…」

『なんなら今死にかけてるもんな』

「…お前、名前とかないのか？」

『…俺の名前はアマダム、お前が今つけてるそのベルト、アークルの霊石だ』

「アマダム…」

俺は無意識にいつの間にか着いていたベルトに手を触れた。ひんやりとした機械的感触。その瞬間

俺の記憶に多大な情報が流れ込んできた。

遺跡にいる大量の化け物

それに単身で挑む青年

その青年は俺と同じベルトを装着している。

そのベルトの真ん中の色は赤で、そうして

「なんだ今の…!?!」

意識が引き戻された。またあの白い世界

『見たんだな、俺の記憶の一端』

「記憶の一端……」

『さあどうする？——俺と一緒に戦うか？』

「俺が戦ったらどうなる？」

『彼女達を守る、人を守る』

「なら……俺は……」

『……』

「……戦う……もう、自分の知らないところで、目の前で命が消えるのはごめんだ」

『そうか……ならお前の体をちよっくくらいじくって傷を治す。まる2日寝てたんだ、彼女達もさぞ心配してるだろう』

「おい、ちよつとまで……彼女達って……!?!」

白い世界が壊れていく、現実に戻される合図だと何となくわかった。

『まあ、頑張れ〜』

その言葉を最後に、俺の意識は元の世界へ

最初は本当に、訳が分からなかった

いつも通りに皆で集まって

いつも通りに練習をして

みんなで教えあって

でもその日の帰り道：アタシ達の日常を壊すかのような信じられないような事が起こった。

Roseliaのメンバーの一人、宇田川あこが言った。

「最近、未確認生命体？ていうのがいるらしいんです！噂によれば人を殺しちゃうとか…」

「ち、ちよつとあこ…もう暗いんだからやめよ…そういうのさ…」

アタシ、今井リサは怖い物が大の苦手だ。おばけとか、聞くだけで泣きたくなくなってくる。

「でも…実際、長野県のある警察署に…こんな大きな蜘蛛の巣がはられてたり…」

白銀燐子がスマホを見せながら言ってきた。ネットニュースの大きな見出し一面に乗る凄まじく大きな蜘蛛の巣。少し拡大すれば人が見えている。それを見ながら歩く

「ココ最近、東京でもその未確認？とやらが何かをしているらしいわね…にわかに信じ難いけども…」

氷川紗夜もこれには難しい顔をする、燐子もネットニュースを見ただけで実際にはあつていない。

「友希那はどう思う？怖い…つてなる？」

リサの幼なじみであり、Roseliaのボーカルである湊友希那はというと、曲のフレーズを確認していた、微塵も興味が無いらしい「友希那はさ…こうゆうの興味あるの？」

あえて聞いてみる。答えはほぼ分かりきっているのだが…

「私は興味無いわ、そんなの存在するとはおもえないもの」

「だよね…」

それにしても今いる場所は森林公園、木が沢山あり、少し夜は不気

味だが、人気の公園。

今日はやけに人が一人もいなかった

こんなこともあるのかなとおもいつつ…不意に、前から来る人の気配に気づき前を見る。

「…!？」

そこにいるのは……………

「…え？」

そんな声を漏らしたのは誰か？

あまりの衝撃に鞆を落とす

そこにいたのは

人間ではなかった。

一言で表すなら、二足歩行の蜘蛛だ。

「ドツキリか何かですか…!？」

紗夜がそう言い、全員がそういうことかと気を抜きそうになる

が

辺りを見回すが、カメラらしき物はない。

紗夜が再び何かを話そうとした時には、もう相手は手から何かを出しこちらへと迫ってきていた。

「これ以上近づいたら…貴方捕まりますよ…!」

紗夜の忠告にはまるで目もくれず、手から生やした爪で刺そうと振り上げるが

咄嗟に皆で避ける。勢い余って電信柱に刺さった爪は、貫通していた。まるで豆腐のように

煩わしそうに爪を抜き、再びこちらへ来る。

そこでようやく言葉を出せたのは隣子だった。

「(…これが、未確認…生命体…)」

足が震え、今にも泣き出しそうにしている。あこもたっているのが精一杯に見える。

「とりあえず逃げるよ！」

リサは2人の手を取り、走り出そうとしたが足が動かなかった。

(足…！動け…！動け！)

それはいわゆる恐怖からくるものだった。当たり前だ、怖いに決まってる、紗夜も動けなくなっていた。

友希那もだ、後ろにあるのはベンチ、どうすればいいのか分からない。声を…絞り出す。

「嫌だ…死にたくない…」

「はあああああッ!!」

「…!?!」

『ッ!?!』

その時だった。別方向から誰かが飛び出してきて、蜘蛛人間と転がっていった。

突然した声に私達も、蜘蛛人間もびっくりする。その証拠として蜘蛛人間は反応出来ず、アタシ達は全員腰が抜けた。

「…ぐわあッ!!」

草むらでマウントを取り合っていたはずの人がこちらの前へと転がってきた。

ぽかんとしていた思考が、現実の世界へ引き戻される。目の前でアタシ達を庇ってくたのが、人ではなかったのだ。

目の前に居たのは白い人だった、というかまず人なの!?!いやでも二足歩行だし…まだあの蜘蛛人間よりは人間っぽい見た目してるし

…

「こんやろく…!?!」

立ち上がり、再び構える白い人。

そこから先はまるで漫画みたいだった。でも演技じゃない、それだけは分かる。蜘蛛人間が有利かと思いきや、白い人(?)が有利になったり、それをしばらくしていると、ふいに、白い人の動きが止まる、それに首を傾げ声をかけようとする

次の瞬間白い人は刺された、血を垂らしながら倒れ呻く白い人、だ

が蜘蛛人間もダメージをおったのか、逃げてしまった。

とにかく現実味が無すぎた戦いが終わった。白い人は腹部に刺さった爪を引き抜く、次の瞬間――

腹から明らかにやばい量の血が出てきて、白い人は倒れた。

「大丈夫ですか!?!」

得体の知れない人なのに、心配の声をかけずにはいらなかった

「……………」

「…!?!」

そして白い人の白い鎧が自然と消えていき、人間としての姿が顕になる。

同じ年くらいの男の人…

「リサ姉！救急車呼ばないと！」

「あ、うん！そうだね！大丈夫ですか!?!」

そうして彼は、駆けつけた救急隊の方に連れていかれた。

――後日、これはRoseliaだけの秘密にしようとなり、許されたのであった。

目を開けると、蛍光灯の光が目に入ってきた。
くっそまぶしいやんけ、と思いつつ辺りを見回す。

身体中に刺さった大量の管、誰も入れないようになっているガラス
張りの部屋

「…あれ？」

アマダムの言ってた通りならと思い、起き上がる。手を動かす、足を動かす、刺された箇所は相変わらずズキズキするがマシな方だ。

そして、突然動いたせいかなぁつちこつちの点滴やら電極やらが取れて機械音が鳴り響いている。慌てたように医師や看護師が飛び込んできて、俺を見て固まる

「あつ…おはようございます」

と気さくに挨拶する。俺以外の人間の笑みが、引きつっていた

それから検査が始まり、腹の刺された傷以外は完治していたのである。医師は絶句していた。正直いつて自分も驚いていた 俺…人間だよね…?とも思う

そして3日後 退院した。

最後まで引きつっていた笑みを浮かべた医師たちにお礼を言い、歩き出す。

この制服に袖を通すのも久しぶりだな……………

「つておい!!」

俺は叫んだ、今自分が置かれていた状況にようやく気づいた。ざつとまとめよう

- ・家無し!
- ・高校無し!
- ・おまけに(こ)こ(ど)い!?

「歩けば何か見つかるか…?」

これから俺異世界ホームレスと化した俺。

「あ、そうだ」

と眩きポケットをまさぐる。あつた、人類の最強兵器「スマホ」、これさえあれば何とかなる。

「…」

電池がつかなかった…：そらそつか、まる3日は放置だしそりや電源も落ちるよな…

詰みじゃねえかアアアアアア!

心中で絶叫しながら歩こうとすると、不意に後ろから声がした。

「あの…貴方は確か…」

ん?なんか見覚えあるぞ?、黒くなびく髪、少しオドオドとした目…

「こんにちは?えつと…たしか前にいた子…であつてる?」

「あ、そうです…名前は…白金燐子です…この前はありがとうございます…」

丁寧な頭を下げながら彼女は名乗った。

「燐子さんと言うのか…よろしくね、俺の名前は八意想、八意って呼んでも想って呼んでもどつちでもいいよ」

「分かりました…じゃあ八意君で…いいですか?」

「おう」

「それにしても…お腹の怪我…大丈夫ですか?」

「全然大丈夫だよ、あんなのへっちゃら!」

嘘である、めっちゃズキズキして痛い

だけどカツコつけさせて、うん…

「なら良かったです…あの時は本当にありがとうございます…!」

もう一度頭を下げてお礼を言ってくる、それほど怖かったのだろう…いや当たり前か、あんなの怖くない方がおかしい…

「うんうん、全然大丈夫!むしろ君たちに怪我がなくて良かったよ!」

「優しいん…ですね…」

「!?」

顔を少し赤らめながら言ってくる彼女に思わずドキツとなる

…?なんだ今のドキツは…と思いつつ、でも悪い感覚では無かつ

た。

「私…そろそろ用事があるので…失礼しますね…」

「あ、ちよつといい?」

俺は去ろうとする彼女を止め、聞きたいことを聞く。

「…?」

「とりあえずここどこか分からないからさ…ついて行ってもいいかな…?」

「大丈夫ですよ…でもどこか分からないって…外国人の方ですか…

??」

「うくん…まあ燐子さんになら話してもいいか」

「…?」

「俺実は、記憶喪失なんだ」

「…えっ…?」

気軽に言った俺に対し、燐子の反応はあまりに驚いていた。

くある廃墟く

一方、その頃、蜘蛛怪人“ズ・グムン・バ”は白いアイツに殴られた腹を擦りながら座っていた。

「効率よくゲゲルをし…俺はいち早くメに昇格する…!そのためには…」

人が沢山集まる場所…俺は知っているて

そいつが持っていたポスターは、ライブハウス

circleのポスターだった…

自称記憶喪失の俺は、たまたま出会った燐子さんと様々なことを聞きながらcircleに向かう

意外なことに燐子さんはバンドをやっていた。見た目はすごい大人しそうな人なのになと思いつつ、ついて行く

この世界で分かった事はふたつある。まず、俺の通ってる高校は存在していない

2つ目は……圧倒的女の人の多さだった、どうなってんだ？この世界……ってか俺本当にこれからどうしよう……

と考えていると

「あの……ここです……」

「……え？ああ」

「何か……悩み事でもあるんですか……？」

意外と感は鋭いのだろうか。はたまた俺がわかりやすいだけなのだろうか……

「少し……ちよつと悩んでた」

まともに生活ができない、という悩みだが打ち明ける訳にはいかない。そう思いながら前を見るとそこにはライブハウスcircleと書かれている看板があった。外にはカフェもあるらしい。

「……」

——コーヒーのいい匂いが鼻をくすぐった。

途端にお腹が鳴り響く……あ、そう考えたら俺……なにか最近食ったっけな？病院食昨日食ってそれきりだった……

「お腹……空いてるんですか……？」

「あーうん、なんか頼もうかな」

鞆の中に財布が残っていたのは奇跡だ。そう思いつつ鞆を漁る。

「私……奢りましょうか？」

途中、財布を探す俺を見兼ねてか、燐子さんは俺を見ながらそう言った。俺は首を横に振りながら答えた

「いやいや！大丈夫だよ！そこまでしてもらおうと、流星に男としての

プライドが傷ついちゃう…」

「そうですか…でもお金…持つてるんですか…？」

「そりゃあもちろん！」

ようやく取り出せた財布を出し、お金を見せる。

「ほらー！」

隣子さんは首を傾げていた。

「…？」

その反応が気になり、財布を中身を見る。

「……………」

そこには、500円玉1枚とポイントカードだけしかなかった…あれ？小銭は？と思いつつ見るが、無かった。

てか少なくてね？あれ昨日バイトの給料日だったんだけどなーおつかしいなー

結局、奢ってもらった

「……………」

自分のプライドが無くなっていつて悲しくなりながら

パンケーキを頬張る。

美味しいなこんちきしようと思いつつ辺りを見回す。女の人が多い、とにかく多い、女の人しかいないんじゃないか？これはと思う。

隣子さんは今ライブハウスの中へ行きスタッフさんと何か話しているようだ。時々2人してこちらを見ながら、パンケーキを口に入れて、ブラックコーヒーを飲む。コーヒーも美味しい。

「……………」

その時、こつちを見る視線を感じ前をチラ見した。赤メツシユを入れた人を先頭に5人の集団がこつちを見ていた。

「あの人じゃない…？あこちゃんの言ってた人って…？」

「どうする？話しかけるか？」

「でも男の人だねー」

「すごい…あの人ブラックコーヒー飲んでる…」

「つぐ…それ今言うこと…？」

「あたしは話しかけてくる！」

なんかゴソゴソ言うてるなあ…てか明らか不良だよねあの人達と思ってる。こちらに1人、身長が高い人がこつちに来た。

「ちよつとその人…少しいいか？」

「はひ？」

パンケーキを頬張りながら答える。正直いえば怖い、この人殴り合いたい。あんな姉貴キャラか？と思えば身構えようとする。

「あこが言ってた、Roseliaを救ったヒーローはあんたでいいの？」

「はい…？」

………？ヒーロー？Roselia？なんやそれ…？、疑問が浮かびまくる様子に気づいたのか。スマホを取りだし写真を見せってきた、その写真にはバツチり白い姿の俺とあの蜘蛛怪人との戦いがうつされていた。

ここで嘘をついても多分面倒なことになる。でももし姿をバラされたら…？——それも困る。

「もしかして…人には言えないとか…？」

めちやくちや小声でそう言った姉貴っぽい人、俺はなんとなくだが信用しようと思いつた。

「あー…多分それ俺です？」

「なんで疑問符なんだ…？」

「だってヒーローとか別に名乗ってるわけじゃないし」

「そ、そうか…まあいいや、私の名前は宇田川巴！よろしくな！」

うお…めつちや元気あるねと思いつつ俺も名乗る

「俺は八意想、よろしく巴さん」

「おーいみんなー！この人大丈夫なひとだぞー！」

…大丈夫なひと…？俺…不審者扱いだったの？さつきまで？なんかシヨックだなあ…そうしていると後ろの影から4人出てきた。それぞれが挨拶と自己紹介を済ませる。少し会話をし彼女達は行ってしまった。

A f t e r g l o w…ねえ…バンドやってたんだなあ、見た目からしてロツクなあれかな？と思つてると中から燐子さんとスタツフさんが出てきた。

「君が…八意くんではないのかな？私の名前は月島まりな、ここ c i r c l e のスタツフなんだ！よろしくね！」

「よろしくお願いします、まりなさん」

もう女の人と喋るのにも慣れてきた。いつか男の人と話せますよーにと願う。燐子さんは練習があるらしいので抜けた。

まりなさんと2人きりで椅子に腰かけ話し始める

「君は記憶喪失なの？」

「はい…そうなんです、右も左もわかんなくて…」

「そうなのね、それは大変だっただろうに、ところでさ君、最近未確認生命体事件って知つてるかな？」

その単語にふと何かを思い出す。未確認生命体…グロンギ…ズ集団、メ集団、ゴ集団を思い出す

どのようなメンツでどんな能力かは分からないが、それは思い出した。

「最近ここら辺で悪さしてるらしいよ、怖いよね、」

その1人が俺なんです…はい…と思いつつ話を聞き進める。てかカフェ人多すぎない!?と思ひ、まりなさんに質問する。

「まりなさん…今日何かあるんですか？」

「今日はね！c i r c l e の5バンドの初の合同ライブなの！私達も忙しくてね…あ、そうだ、君、今日ここで体験的な感じでバイトしない!?人手がちよつと厳しくて…」

「えっ？」

………はい？

バイト？記憶喪失の明らかにやべーやつを？……ここで？

まりなさんはきつと、優しいのだろう…

バイトの件は断れるはずも無く、承諾してしまった

早速仕事が始まる。波乱のバイトが始まった

page 5 波乱のバイト、そして生まれる後悔

「え…!? 燐子さっきまであの人といたの!？」

リサが驚く

「どんな感じの人だったの!? 優しかった!? りんりん!」

あこが 一気に詰め寄ってくる、燐子は押され気味にたじたじしながら話す。

「記憶喪失してる…みたいで…」

「記憶喪失…ですか」

紗夜が呟く

「紗夜…? どうしたの?」

「いえ…なんでも」

「そんなこと言いながら紗夜さん、昨日心配してたじゃないですか」

「…!? 宇田川さん!？」

「え? そうなの? 紗夜?」

「…今井さんも! からかうのはやめてください!」

「友希那く! あの人無事だつてさ!」

反対に1人、ぽつんと座り歌詞を眺めている友希那にリサが言う。
だが帰ってきた返事は…

「そうなのね」

「え? それだけ…?」

「私達は今すべきことがあるわ、今日はライブの日よ」

「そ、そうだね…なんか緊張してきちゃった…」

「リサ姉もですか! 実は私も…」

「あはは、でも頑張ろうね!」

また、Roseliaらしい空気になった。

忙しい…あまりにも忙しすぎる。今何分だ…?

「嘘だろ…」

まだ30分かよ…

今自分は、ライブハウスCircleの新人アルバイトとして働いている(30分前から)8時に始まるライブ

今はまだ7時だというのに、めちやくちや人がいた。

しかも大半女子。てか女子しかない。なんか居づらいでも接客は悪くないようだ。まりなさんにそう励まされ

何とかやっつけていける。

「いらっしやいませ」

「コーヒーを2つ、かしこまりました」

などと様々な言葉を何十回言っただろう。そうかと思いきや機材の移動など力仕事をやらされる。様々なスタッフ(全員女の人)に励まされると何だかやりがいがある。人に感謝されたりするのは悪い気分では無いと思いつつ今は接客をしている。

そーゆーチンピラに絡まれるシチュエーションも特に無く、テキパキと仕事を終わらせる。

私、月島まりなは驚いていた。だって彼、様々な事ができるから、料理や接客、機材の移動など全部何一つ嫌な顔せずやってくれる。これは…すごいぞ!と思いつつ、私も仕事と思ひ、機材の最終チェックに入る。

そうして8時になった

今、俺は今回参加するバンドの様子見をまりなさんと一緒にしに行

く、全員女子らしい。なんか緊張するなあ…と思いつつながら部屋の中に入る。まりなさんを見たあとの反応が意外につらい…

「はーい！みんなー！今日も頑張ろー！」

「あ！まりなさん…と？」

「ああ…紹介するね！」

「今日から働かせてもらう新人アルバイトの八意思です…！よろしくおねがいます！」

やっべ噛んだ。恥ずかしい！

「あれ？あの人って…？」

「前に私たちを助けてくれた人だー！」

「宇田川さん…!？」

「え!?!なにそれ聞きたい聞きたーい!!」

まりなさんが話を片付ける。俺はこの後、質問責めにあうらしい。なんか怖い…てかさつき2人ほど皆とは違うなにか関わるとやばそうな目をしていたな…

黄色い髪の子と水色の髪の子だった気がする…

あとクマの着ぐるみ…?もいたし

あのRoselliaもAfterglowもいた

他の三バンドは名前がわからん。今自分はこうしてまりなさんにお礼としてライブを見させてもらっている。

1バンド目がPoppinPartyらしい。

「どうもー!PoppinPartyです！」

まりなさんいわく期待の新人バンドらしい

演奏がおわる、え?上手いしなんか聞いているこっちも楽しくなってきたきそうメドレーだった

次はAfterglow

ロックなりズムが特徴の幼なじみ5人で結成されたバンド

まりなさんから貰ったメモ帳にはそう書いてある

幼なじみ情報はいるのだろうか…?

そう疑問に思ってしまう

演奏が終わる

Poppin Partyとは違い、なんだか凄かった。連携もすごい、流石は幼なじみ！

次はPastel? Palettes

芸能事務所の新人アイドルで結成されたアイドルバンド

皆それぞれ芸能活動をしているらしい、高校生なのに忙しいだろうと思う。

演奏が終わる。

流石はアイドル、みんな可愛かったし曲もアイドルぽかった。途中水色の髪の子と目が会い、背筋に悪寒が走った気がするが気の所為だろう、うん！気の所為だ！

次はRoselia

circleのバンドの中でもトップクラスの实力を誇る本格派ガールズバンド…らしい

演奏がおわる

…：…：すげえ、すげえしか言えなかった。ボーカルもギターもドラムもベースもキーボードも、そしてとても強い絆を感じた。彼女達…：本当にすごいな…：と思った

次はハロー、ハッピーワールド！

世界に名を馳せる資産家、弦巻家の娘、弦巻こころ率いる。常識が覆りそうなド派手なパフォーマンスが特徴のバンドらしい。お嬢様っぽさがありそうだなと思いつつ聞く

演奏が終わる

…：…：？お嬢様っぽさは？欠片もなかった、ド派手なパフォーマンスと弦巻こころってという人の異常な運動神経、ギターの人の異様な人氣、そして何よりクマ、

なんか情報量が多すぎて俺クマっちゃうなH A H A H A

とにかく派手だった

最後は5バンド全員で演奏だった。機材は1つ、みんなで演奏交代しながら演奏するらしい。

はえ〜すつごいね。と、同時に外がやかましいことに気づくが無視した。それが過ちだった事もしらずに

演奏が始まる、みんな凄い器用だ。俺たち見てる人もたのしくなってくる。サビに掛かろうとした、その時だった。

「…っ!?!」

ライブ会場のドアの破碎する音を聞いた。

ドアを突き破り、3人の警察官が飛んできた。

椅子の1列目辺りでようやく3人とも止まったきり動かない。演奏が止まり、周りが静かになる。

「きゃあああああっ!?!」

次に聞こえたのは悲鳴とそして、血の匂い、ドアの向こうに目をやると、10人ほど警察官血を流し倒れていた。

「な、なんだよこれ…!?!」

俺の知ってるスタッフさんも数人いた。みんな首に噛まれた後がある。

そこら中に発砲したであろう銃弾が散らばっていた。そして、ドアから1人歩いてくる。

「…ッ!?!」

否、それは人では無い。コウモリのような見た目をしている化け物だった。奴は…いやそれより…、考える前に咄嗟に動き出す。

「八意くん!?!」

「おっらア!! —— はアッ! —— タアッ!!」

腹に1発、横っ腹に1発叩き入れ、蹴りをし――

俺の身体は白に変化した。あの時と同じように…

「…。」

相手に手応えは無さそうで、すぐに立ち上がってきた。

そしてやはり殴る感触は気持ちのいいものでは無かった。だがそんな事言ってる暇はない。彼女達を守らなければ行けないのだ。

少し後ろに下がったコウモリ男は口を開く

「まだ白か…、俺が殺す!!」

おれを指さし、そう言ってきた。何を言ってるのかは分からない：それに気を取られていると、コウモリ男はこちらに突進してきて――

「…?!?しまっ…。」

その言葉を言う暇なく、自分は殴られ、蹴られる、首を絞めあげながら彼女達がいる場所まで投げ飛ばされた。

「うわあああああっ!!」

ドラムセットを巻き込みながら転がり、壁にぶつかり止まる。次に来るのは吐き気と血の味だった。体に激痛が走る

「…づあー…ゲホツ…ハアハア…い」

彼女達にはケガは無い、そしてみんな逃げていた、

よかったと思いつつ、Roseliaはまだステージ上にいた。なぜ逃げてない…!?!

「…丈夫!?!…夜先輩!」

耳鳴りを起こした耳から途切れ途切れにあこさんの声が聴こえる。目を凝らすと、そこには…

右手を怪我した氷川紗夜が、そこにはいた。

そこには…右手を怪我した氷川紗夜がいた。

(どうすれば…!?!?)

出血量も少しばかり多い。まずい、本気でまずい、ギターリストにとって手は命だ。

「…っー、クソツ!!」

俺は必死に考える、だがだめだ、考えれば考えるほど白くなる。焦りに視界すら白く染まりかけたその時――

ステージ袖からまりなさんが来てくれた

「紗夜ちゃん!?大丈夫!?皆がすごい勢いで事務所まで来たからただ事じゃない事は分かったのだけ…れど…」

まりなさんは辺りを見回し絶句する。

「なに…これ?」

無理もない、血を流して倒れている警官が数人、そして真ん中で行われている2人の殺し合い。コウモリ男にしがみつき殴るが、蹴り飛ばされ彼女達の横に転がる。

「ぐはっ…!! ――― ツ!?!」

隣にいたまりなさんと目が合う。まりなさんは震えていた。仕方ないことだ…こんな得体の知れない姿は…

「人間の女…!!ガアアツ!!コロス…!・コロスウ!!」

「させるか…!!」

彼女達を襲おうとしたコウモリ男の足を掴み、なんとかかして引きずり下ろす。向こうではリサ達が紗夜を運び逃げようとしていた。

「ジャマをするのか…!?!」

「彼女達の元へは…行かせない…! ――― 絶対にだ…!」

俺はそう叫び再び戦闘を開始した。

紗夜を抱っこし、最後列に並び皆を裏側にあるcircleの事務所へと連れていく。事務所に入り鍵を閉めた。

「おねーちゃん!?大丈夫:!?」

日菜が駆け寄ってきて半泣きで紗夜の心配をしていた。

「出血量が多いわ:皆!タオルを1枚貸して!」

まりなさんがテキパキと指示をし、紗夜の応急処置をする。斬った箇所が深い。このままではまずい::

事務所にあるもので応急処置をし救急車を待つ。その間は事務所内の空気は重かった。誰もひと言も喋らない——というより喋れなかった。

あんな物を見てしまえば尚更だ。

「皆、どうしてそんなに重たいのかしら?」

その沈黙を破ったのは弦巻ころの一言だった。こころは首を傾げて続ける

「だってあのコウモリさんは白い人が倒してくれるわ!何も心配はいらないのよ♪」

「ちよ:~:~:~:空気を読みなよ:~:」

「:~:~:美咲、空気は読むんじゃないやなくて吸うものよ?」

そんなやり取りに思わず笑ってしまう。

「それにしても:~:未確認が実在するなんて:~:」

「にわかにはまだ信じ難いですよね」

「Roseliaは知ってたの?」

まりなさんの素朴な疑問にあこが答える。

「うん!前にも似たような状況があつてね!その時にずばーん!てやってくれたんだ!敵には逃げられちゃったけど私達をまもってくれて!すごかつこよかつた!」

「:~:あこちゃん:~:Roseliaの秘密:~:」

「あ、忘れてたくりんりん」

そんなことお構い無しに2人がくる。氷川日菜と弦巻こころの2人だ。彼女達の好奇心という名のロケットに火がついていた

「なにそれ!? 誰々!? すごく聞きたい! るんってきた♪」

「あちやく、るんって来たのか」

諦めの溜息をするリサ

「私も知りたいわ! リサ! ぜひ教えて!」

「んー…まあ…アタシ達もまだ分からないことだらけなんだなく!」

危うく全て明るみになりかけた秘密を、なんとかリサが持ち直す。弦巻家が動き出したらそれこそ終わりだが…

「…大丈夫ですかね…私達を守って…」

燐子が半分泣きそうになっている。それをリサが撫でながら言う。

「大丈夫、簡単に負けないと…」

まだ2回しか会ってない彼に、リサは不思議と…自らの期待を擦り寄せていた。

「ぐっ…!! —— ぐあああ!! —— がはっ…!」

壁に頭を叩きつけられ、投げ飛ばされ、壁にぶつかりマスク越しに吐血する。

経験の差が違う。俺が一撃与えれば相手は3回も4回も攻撃を仕掛けてくる。躲すのすらままならず、俺はひたすら蹂躪されていた。

(足が……!)

もう立つ足も動かないほどに疲弊していた。片方の足は変な方向に曲がり、見るだけで痛みが増す。立ち上がれない俺を見たコウモリ男は

「ソナモノナノカ…? お前のチカラは…?」

まるで何かを期待していた。それを壊された時の落胆、そのような声をしていた。

「…ぎけるな…!」

俺は無理やり立ち上がる。

全身が悲鳴を上げ、骨が軋み、苦そうな顔をする。マスク越しだから相手からは見えていないのだがな

「ドゾレザー・ギベ!・クウガ!」

そう言われた直後、コウモリ男に引きずり回され、ステージ袖に転がり、事務所前まで吹き飛んだ

「…づあ!・オエ…!」。

「!?!」

事務所のドアの前から物凄い音がし、みな立ちどまる。まりなさんが恐る恐るドアを開けると、そこには白い人、八意想が横たわっていた。まりなが駆け寄る。

「大丈夫!?!」

返事は無い、体を揺さぶるが、反応もない。そうして足音がして横を見ると

そこには、コウモリ男がいた。

「…そんな…!」まりなさん!?!どうしたんで…!?!うわああ!」

リサが叫ぶ。

そこに日菜が出てくる。

「コウモリみたいな見た目してるね〜それならこれ通用するかも!」

そう言っただけで彼女が取り出したのは事務所にある緊急用の懐中電灯だった。ちなみに、弦巻家制作なので明るさはお墨付き。

「えいっ!」

スイッチを入れると…

「わあ!・眩し!?!」

1面真っ白になるかと思う程の明るさが視界を覆い尽くす。

「!?!」

これにはコウモリ男も悲鳴を上げ、逃げ去る。そうして、日菜は懐中電灯を切ると、その場にペタンと座り…

「おねーちゃん…すごい怖かった」

と半泣きで言ってるのであった。その後ろで何かが解除する音がしたので振り返ると、傷だらけの身体で横たわっている。元の人間の姿の八意思がいた。

「八意くん！大丈夫!？」

そうして、戦いは終わった。

あの事件から3日が経った。私、月島まりなはもう大忙し、警察に質問攻めされたり、circleの後処理も手伝って：でもライブ会場は散々なことになっていた。あつちこつちの壁にへこみや穴があり、様々な物が散乱し、そしてなにより、様々な人の血が1番ダメだった。吐きそうになったくらいだ、この事件はニュースにデカデカと取り上げられ、新聞も一面を飾っている。羽丘女子学園も、花咲川女子学園も休みだった。もちろんcircleも休みだ。そして八意くんは今、弦巻財閥の病院にいるらしい、こころ曰く

「お医者さんたちがきーつと治してくれるわ！」

だそうだ。弦巻家って：秘密が多いなって思いました。はい。その時、今井リサから連絡があった。

「八意くん、1日前に目が覚めました」

「えっほんとに？今行くね！」

彼が目覚めた、そう聞いた。タクシーを呼び病院へ行く。リサから病院がどこか聞いている。着いて、中に入る、面会許可証を持ち3階へ上がると待合室には友希那以外のRoselia集合だった。友希那は遅れてくるらしい

「紗夜ちゃん、右手：どう？大丈夫？」

「ええ、私は大丈夫ですが…」

手をさすりながら紗夜が答えた

「ですが：？」

そう考えるとなんだか雰囲気が悪い、リサが説明してくれた、

「彼：紗夜を怪我させたのは自分のせいだって酷く自分を責めてて…」

とあこが続ける。

「それであこ達、追い出されちゃった…」

「そうなのね…」

彼、八意はそんなにも自分を責めているのだろうか…

「私：行ってくる…！」

「まりなさん…私達も…いいですか…?」

「もちろん!」

目を覚ます、白い壁、白い蛍光灯…では無かった、シャンデリアだった。しかも目に優しいカラー、こうして病室で目が覚めるのも2回目だなど苦笑する。1回目とは違って、全身が痛いのがあれだが、さつき、Roseliaのみんなが来てくれたな…でも追い返してしまっ

た。

「っ…!」

あの状況を思い出す…

自分のせいで紗夜さんの手を…ギタリストの命を奪ってしまった、俺に…彼女達と関わる資格はないのかもしれない。

「…」

そんな風に思いながら机に目をやると、丁寧になにか置いてあった。手紙を見ると、リサさんのクッキーらしい。手紙にはRoseliaメンバー皆から一言ずつ書かれていた

「なんで…どうして…!」

何をどうして、なんの理由があつてそこまでしてくれるのか…俺にはわからなかった。しかも出会ってまもないのに…そして余計に悔しくなる。何回涙を流したのだろう、食欲もあまり無かった。もういつその事なら、この世界から消えたかった。

『それは、彼女達を見捨てて、逃げるってことだ』

頭の中から声がする。

「ああ…そうだな、俺は薄々気づいてたんだ。俺が死んだ時お前は俺に力をくれた。戦うための力を、名前は覚えてないがな…なぜお前が俺に力をくれたのか、そして何故この世界に来たのか…もう俺は戻れないんだろ」

『ああ…その通りだ、それよりもお前、客が来たぞ』

素晴らしいアマダムは気配を消した。次の瞬間扉を叩く音がした、そ

して…

「入るよ〜」

との声、そして来たのはまりなさんとRoseliaの4人だった。

「八意くん…身体大丈夫?」

「ええ…おかげさまで…大丈夫ですよ」

そう笑顔で答える

私から見た彼の笑顔は、とても弱々しく感じた。目も少し腫れている、沢山泣いたのだろう、沢山自分を責めたのだろう、でも私達には何も出来ない領域なのだ。

「本当に…大丈夫なの?」

口から自然とそんな言葉が出ていた

「大丈夫ですよまりなさん、なんだか…お母さんみたいじゃないですか」

「絶対嘘だよ、すごい泣いた後もあるし…辛かったん…」

「分かったような口、聞かないでください」

彼から冷たく言い放たれたその言葉が私の心を突き刺す。

「え…でも…」

つい言葉につまる。

「まりなさんには…分かりませんよ…」

「八意さん、そのような言い方はよくありません」

紗夜が言う、それにリサが続く

「そうだよ…!まりなさんだって心配してくれてるんだよ…?」

「私なら何回も言いますが、私は大丈夫です、怪我也すぐになおりますから…」

「あんたらに…!お前らに何が分かるってんだ!」

「!?!」

そこで初めて私達は、彼が今まで思っていた気持ちを知る。

「人庇ってトラックにひかれて!!成仏かと思いきや訳の分からない！
！右も左も分からない世界に放置されて！化け物と戦わされて！そ
して恩人の1人に怪我負わせて！本来なら関係なかった人も巻き込
んで…！」

とめどなく涙が溢れ出す。これまで言えなかった事を…洗いざら
いぶちまける。

誰も…何も言わずに俺の話を聞いてくれた。明らかにおかしいこ
とを言ってるはずなのに、誰も疑うような眼差しは無かった。まりな
さんがこちらへ近づいてくる、そして何も言わずに、俺を抱きしめた。

「!?」

俺が困惑する

「!?」

Roseliaのみんなも困惑する。俺は抵抗しようとしたが、出
来なかった。すごく…すごく懐かしい。そんな気がした。そうだ…
俺の母親だ。最期は弱つてるところを無理やりクソ父親…あんなや
つ父親とも呼びたくない…コイツに殺された。

「母さん…！かあさん…！」

また泣き出してしまう。そうして俺は泣き止むまでまりなさんに
抱き続けられた。

「あー…なんかすつきりした…皆…なんかありがとう…つてかなんか俺クソ恥ずいことしちやってね!」

と病室で叫ぶRoseliaの皆も、まりなさんも、笑っている。俺はその中…下を見て俯いていた。みんなの笑顔はとっても美しかった。だから俺は…決意する。

この笑顔を…circleの皆を守ると…絶対に…そう誓う。

そしてリサさんのクッキー美味しい…!そして喉詰めた

「八意くん…!?!大丈夫…ですか…!?!」

「そんな一気に食べるからだよくもう…」

紗夜さんから水を貰い、飲み干す。死ぬかと思った。

page 8 ハッピー(?) なりハビリ そして波乱
の予感…

めちやくちや恥ずかしい俺の黒歴史1位になりそうな事から2日
が経った。

なんだかRoseliaの皆(友希那さん以外)の距離が縮まった
ようなそんな気がしている。そしてまりなさん曰く、あれ以来未確認
生命体は来てないらしい、circleも着々と復旧作業が進み、学
校も再開したらしい。

「…」

今日は土曜日、俺は今、病院の中を歩いている。何故かって?リハ
ビリさ!そして迷った…どうなってんだこの病院は…デカすぎな
いか?内装もすごいオシャレだし…、まりなさんか言ってた弦巻ここ
ろって人には感謝しないと…!そういうえばこんなこともあったな…

↳2日前

泣き終わって、落ち着いて様々なことを話し合っていると

「え!?八意くんて高校なのなんですか!?!」

語尾無茶苦茶だそ…と思いつつ答える。

「え…?高校生ですけど…俺のいた世界では」

「じゃあ今は?」

おつとあこさんやそれは聞いてはいけませんぜえ!俺は考えた。

そして結論は

「異世界ニート?」

だった。

「つてか俺今までなんて思われてたの?」

「社会人」

「大学生」

「大人！」

「中学生…でしょうか？」

「制服を着ていたの…で…つきり高校生か社会人か中学生かと…」

「うんうん、微妙な身長に生まれた自分を殴りたい」

「あはは…そういうえびさ、八意くんは家とか、服とか、高校とかどうするの？」

「あ…うん」

完璧に忘れていた。

「服ならアタシ達を選べたりするけど…」

「出会ってまもない、しかも男の人を家に招き入れるのは…いささか…」

「いや、大丈夫ですよ…そんな事よりほら、もうこんな時間、大丈夫なんでしょうか？友希那さん待たせてるのでは？」

「あっ!?ほんとだもうこんな時間！」

「リサ姉〜！私も忘れてた…！」

バタバタと準備する。

「では私達はこれで」

「ばいばーい！」「じゃあね〜」

「お邪魔…しました」

「じゃ！またね〜！」

そういいバタバタと帰ってく、5人が居なくなった病室は、酷く静かで何故かそれが、落ち着かなかった。

と、まあこんなことがありまして。そして、俺今、何処にいるんだ？おかしい、歩いてるはずなんだ。なのに、景色が一向に変わらない。気がつくくと小児科にいた。

「へえ〜ここ小児科もあるんだ…」

俺の中で弦巻こころという存在はでかくなっている。どれほど偉い人なのだろう。ライブでははっちゃけていたが実はめちやくちやお嬢様なんじゃ!?!?と思う、本当に何者なんだろう。そう思い、小児科の奥から何やら楽器の音が鳴り響いている。無性に気になり、引き返そうとした足を戻し、再び歩く。そしてそれなりに開けた場所では小さなライブが行われていた。子供達はニコニコ笑顔で聞いている。

そのライブをしているバンドはボーカルにギターにベースにドラムに…クマのDJ…?すごいバンドだなあ…

「こんにちは皆! 私達はハロー、ハッピーワールド! よ!」

その名前を聞いて、ん?となり、思い出す。あーcircleで無茶苦茶派手なライブしてた子だったな…てことは…思い出した。リーダーは弦巻こころさんだった。命の恩人目の前にいるやんけえ!

「お目覚めですか? 八意様」

「ああ…うん、この病院にはお世話になってるって…? え!」

そこには黒い服の人達が3人で並んで俺の後ろにいた。

「あんたら誰!?! ってかなんで俺の名前しってんの!?!」

半場警戒している。

「貴方様が持っていたカバンを拝見させて頂きました」

「え? ああ…って人のカバン勝手に見ないでくださいよ…」

「すいません、これ、お返しします」

そう言つて2人目の黒服さん(仮)がカバンを返してきた

「えっ…あつどうも」

そのカバンを受け取る。ん? なんだかカバンの色が違う気がしなくも無いような…?

「後、制服と生徒手帳も」

「ありがとうございます?」

ちよつとまで、制服もおかしい、手帳も違う気がする…

「あの…名前聞いてもいいですか?」

3人は顔を合わせ、答える

「黒服とお呼びください、八意様。貴方様は我々にとっての命の恩人でございます。こころ様を守って下さり、ありがとうございます」

「いえいえそんな、俺はただ…俺のできることをやる…ただそれだけですよ…」

「では、私達はこれで、ライブの片付けなどもありますので」

その一言を発し、黒服達は消えていく

「忍者かな？あの人達は…」

てかいつの間にかライブも終わっていた。ちくしょうめ

「どこの学校のやつだ…?これ…」

黒服の人達から渡されたカバンと制服を見て唖る。カバンがやけに重いので、中身を見ると教科書とご丁寧に病院の地図とスマホが入っていた…?スマホ?あれ?と思い、病院の少し開けたところの椅子に腰掛け、重いカバンを横に置き中身を見る。とりあえずスマホだ。起動すると100%と書いてあった

「ちゃんと充電済みなんですネ…」

あと充電器もあった。メールと電話、Google?でも確実にロゴがGoogleなんだが…と思いつつ、電話帳を開く、本来なら1件もないはずの電話帳なんだが、あら不思議そこには…

黒服の人の電話番号が入っていた。

怖っ!?!と思ひ、スマホをしまう。次は教科書だ。これは高校2年のやつか…本当に準備が凄いな。本当に…どこで知ったんだよ…

「はあ…」

自然とため息がでる。なんだろう、なんか疲れた。カバンを肩に担ぎ…重い…制服が入った紙袋を持ち帰ろうとすると

「あれ?それって花女のカバンじゃ…」

前からそんな声がし、前を見る。そこには2人、1人はなんかノーマルっぽい見た目をして冷たい目で見える女子、2人目は青い髪の毛をして、怖がる目でこちらを見ている女子

「花女…?どこそれ?つか君達誰?」

1歩近づくと、2歩下がっていく

「…?ちよつと?俺何かした?」

「警察呼びますよ?」

「えっ?」

なんだろう今、事情を説明しないと警察行きになる。そんな気がした。

「そのカバン、花女のです。花咲川女子学園の生徒のカバンです。しかも女子校ですよ?」

「えっ！女子校!?!いやつでもほら！見て！制服ちゃんと男用のズボンだよ!！」

「美咲ちゃんこの人…危なくなさそうだよ…?」

「私はすつごく怪しい人だと思います。」

「ええ…」

俺はどう説明すればいいのか分からず…このまま捕まるしかないのか…?と思っていると女子2人の後ろからすつごいスピードで2人こちらに駆け寄って来ている。

「美咲く！探したわよー！花音もいるわね！」

「みーくーん！かのちゃん先輩く！と誰…?」

2人の横に来るとこちらを見てきた

「貴方…誰かしら！」

「こころ、絶対近づいちゃダメだからね？分かった？」

「どうしてかしら？美咲？」

「あの人が持つてるカバンよく見て」

「そのカバン…花女のカバンね！それがどうかしたのかしら？」

「いや！あのねこころ…?うち女子校だよ？」

「おや？そのカバンは…中々悪いことをするね…君」

後ろにいつの間にか高身長の子の紫髪の子…多分女性が立っていた。

「えっ…?」

「笑顔パトロール隊、出動だね…こころ」

「えっ?は?」

そうして俺は、出会ってまもなく人達に捕まり、病室の1つに連れ

ていかれ、正座させられ、抵抗したらよかつたって？出来ないんだよ
：理由は察してくれ、男の人達なら誰でもわかる。あつちこつちに当
たるんだよ！

そして更に10分後

「なんか…すみません…」

「い え い え 奥 沢 さ ん」

キレちやダメだキレちやダメだ…

「いやもうほんとすみません…まさか黒服が渡してたなんて…」

「お 知 り 合 い な ん で す か
？」

俺たちは今、病院の外にいる。俺は飲み物片手に、遊び回る北沢さ
んと弦巻さんを見ながら座って奥沢さんの話を聞いていた。

薫さんと花音さんの2人は買い出しに行ってるらしい。

「はい…こころのSP的な存在というか？ハロハピのガードマンてき
な？」

「そうなんです、弦巻さんにはお世話になってますよ、俺を助けてこ
うやって病院にいるのもあの人のお陰なんですから」

と笑顔で返す。なんか奥沢さんそっぽ向いてしまったけど…

「大丈夫…ですか？」

「…ついえいえ！大丈夫です！」

「そう…ですか？」

(やばい…よく見るとイケメンかも…)

「さてと…そろそろ俺も帰ります。」

「分かりました。私達はもう少し、ここにいます。」

「では…」

「さようなら、あとコーヒーありがとうございます」

「いえいえ…お詫びとして…」

「もう気にしてないですよ」

2人揃って苦笑する。そして俺は帰る、病室に

「足痺れてんなこれ…」

エレベーターを使い3階まで上がり病室に帰る。そして今は晩御飯だ。病院食って味付け薄いなあ…と思いつつスマホが鳴っていることに気づく、

「ほんなじはんにだれは？」

相手は、黒服だった。

まあ…でてみるか、と思い、電話に出る

「もしもし」

「こちら、八意様で間違いないでしょうか？」

「間違っていないですよ、どうかしたんですか？」

「単刀直入に申し上げますと、明日日曜日、退院です。」

「はい？」

「退院しても家がないという点については問題ありません、先程、弦巻家がマンションの一部屋を八意という名前で借り、花女にも転校、という扱いで入学してもらいます。資金面は弦巻家がしばらく支援させていただきます。どうでしょうか？」

「え？いや、あの…それはつまり？」

「先程言った通りです」

「ええええええええええええ!?」

「どうかされましたか?」

「いやいや、驚くよ?そりゃ、だつてさ退院してからの扱いが凄いですからー・なんでそこまでするんですか?」

「貴方様はこころ様達を怪物から救ってくれた恩人です。これくらいは当たり前かと、以前高校や、家の件で悩んでいられたので」

何も言い返せない……ここは甘えちゃって、いいの?俺は?まあ……いか

「分かりました……でも花女は女子校って聞いたんですが……」

「その点については大丈夫でございます」

「あつ……そうなんですネ」

「それではまた明日、お昼頃にお迎えにあがります」

電話が切れる。消えた画面にはアホ面の地面が映っていた

「はあ……」

なんかもう、疲れた。残りの晩御飯を詰め込み、俺は寝た。

朝、病院で目覚める。昨日の事はひよつとしたら悪い夢何じやないかなと思ひ、スマホを開き電話履歴を見る。

「…。」

夢じゃないらしい…この病室にも世話になつたなと思いつつ荷物をまとめる、そんなに、いや全くもって何も無いが。そして昼頃黒服達が迎えに来た。リムジンで

「…。」

絶句する俺を席にさせ、リムジンに荷物をのせる。そうして特に話すことも無くマンションに着く。

俺はまた絶句した。なんかもうThe高級な感じが出ている。オートロック、パスワード入れないと入れない厳重な警備付きの玄関。

「すつげえ…。」

そこを通り、5階へ行く。最上階だ。家賃なんか…ちらつと見えたが見なかつたことにした。部屋の鍵をもらひ、黒服さん達はテキパキと作業をしている中で俺は自分の部屋を探検する。

デカイ、ただ一言、デカイ。

トイレも自動で開く。風呂なんかすごい機能いっぱいある。他の部屋も広い、キッチンの設備もすごい。リビングもダイニングもすごい。ひとり暮らしには勿体なさすぎる。のはさておき、机とか冷蔵庫やテレビがあるのは何故だろう。ソファもあるぞおい、と思つてると黒服のひとりが話しかけてきた。

「居心地はどうでしょうか？」

「もう凄いです、俺なんか勿体ない、本当に大丈夫なんですか？」

「はい、ごころ様のお願いを叶えるのが私達ですから」

グラスンの下から表情は読み取れない。が今の黒服さん達は生き生きしている。

「それでは、失礼しました。またなにか御用があればお呼びください」
そう言い、帰つてく黒服達を見送り、部屋に戻る、自分の寝室にはカバンなどをかけられてなんかすごい機能付きの机と、タンスとベッドが置かれていた。ベッドはふかふかで大きい。その誘惑に負けそうになるが踏みとどまる。とりあえずシャワー浴びるか…

シャワーを浴びて冷蔵庫から取り出した水を飲みながらテレビを付ける、うおつめつき最新やんけ…画質いいな

と思いつつ、晩飯でも買いに行くかと考え服を着替え(弦巻家提供)靴を履き(弦巻家提供)扉を開け、オートロック！鍵もあるらしいから一応持っている。

閉まつてるのを確認し、歩き出す。意外と駅近、コンビニ近い、商店街も近いらしい。あ、そうだ。あれ使うか、慣らし程度にと思い、駐輪場に行くとそこには俺のチャリが置いてあった。もちろん弦巻家提供だ。それに跨り漕ぎ出す

コンビニに5分で着き、適当にコンビニ弁当と水を買う。レジに行く…

「あれ？八意じゃん」

という声がし

「はい…そうですが…ってリサさん？」

意外だ。リサさんがバイトをしているとは、

「八意、退院したんだね、おめでと！家とかどうしてるの？」

「それがですね…」

俺は事情を説明した。

「へえ…そんな事があったんだね、てか八意、こんな弁当ばつか食べてると、バランスおかしくなるよ、そうだ！アタシが作ってあげようか？」

「ああ…助かりま…す？」

いやちよい待てや俺、今なんで言った？すなわちそれは女子を家にあげるのか？綺麗にしてるし大丈夫だろうと思いつつ

「でも、なんか申し訳ないですね」

「いいのいいの！この前のお礼と思ってくれたらさ！アタシもそろそろシフト終わる時間帯だから少し待っててくれない？」

「いいですよ、時間潰してます」

リサさんのシフトが終わり、2人で買い物に行く

もちろんスーパーで調味料や具材を買い集め俺の自転車のハンドルの部分にかけて2人で話しながら歩く。

リサさんが話すのは基本的にRoseliaが中心だった。

その時の笑顔は、夕日に照らされとても綺麗で、俺の記憶にもこのような人がいた。料理が上手でいつも笑顔で、名前も顔も分からない。でも俺にとって大切な人で、守ると誓った次の日、とあるクズのせいで殺された彼女にそっくりだった。だからこそ心中で思う。この笑顔を守りたいって、そんな事を考えながら

「リサさん、家に着きましたよ」

「確かマンションだったよね、気になるなく…？」

「どうしたんですか？リサさん？」

「八意くんって…もしかしてすごい金持ち？さっきの費用だって全部払ってくれたし」

「弦巻家には感謝しかありません。」

「あっ…そうなのね…」

「言えない、なんか銀行の通帳に8桁の額が振り込まれてたなんて…口がさけても」

「とりあえず…入りましようか」

「あ、うん…そうだね！」

リサさんすっげー困惑してるな。

鍵を開け、中に入れる。先程から雨が降り始めていた

「じゃあ！早速はじめよーか！今日は…生姜焼きと味噌汁でも作ろっかなー！」

「俺も手伝いますよ」

「おっ！助かる〜！」

2人して作業に取り掛かる。何かと驚いたのは、リサさんが、高校3年だったことだ。

「アタシ：今までどう思われてたんだらう…」

「大学生くらいだど…」

「料理も上手いし、みんなのお姉さんのな？」

「嬉しいような…なんだか複雑になるね、あはは」

料理が完成し、2人で食卓を囲む。

「めちやくちや美味しい…！」

いやもうほんと美味しい、やばい金出せるこの美味さ

「そう？ありがとね！ところでさ…」

「ほうひらんへすは？」

「飲み込んでからでいいよ…！」

「すいません、どうしたんですか？リサさん」

「君のその力っていうのかな？とあの化け物ってなんなの？」

「リサさん…？」

「正直言ってアタシ怖いんだ…あんな化け物に2度もあつてね、実際に紗夜も怪我した訳だし…」

「まあ…そうですね、でもなんでそれを俺に？」

「いやだって八意くん、あんな姿になれるじゃん。だから知つてたりするのかなーって」

「それが…分からないんです、何のためにこの力を手に入れたのか、アイツらを全て倒したとしてもきつとこのベルトは死ぬまで取れない、壊れたりしたら別ですがね…」

「記憶喪失って前言つてたもんねくなにか思い出したりした？」

「いえ、特に何も…」

「そつかくまあいいや！それよりほら！食べよ！」

「そうですね」

食べ終わってしばらくするとリサさんがこっちに来た。

「どうしたんですか？」

「八意くんってスマホ持つてる？」

「持ってますよ?」

「じゃあさLime交換しない?」

Lime? なんやそれ、もしかしてLIEみたいなのなのか?

「えーつと…なんですか?それ…」

「えっ知らないの?アタシ知らない人見たの初めてかも」

Limeをダウンロードし、交換した。

「これで連絡できますね」

笑顔でそう言うのと突然リサさんが顔を真っ赤にして俯いていた

「…?どうしたんですか?リサさん?顔真っ赤ですよ?」

「イヤイヤ!なんでもないよ!なんでもない!」

「…?そうですか」

「アタシそろそろ帰るね!もう時間も遅いし!」

「分かりました」

ドアを開ける

なんかもうえげつい、滝が降ってるような雨が降っている

「…」

「雨止むまで…俺ん家居ます?」

「八意くんが迷惑じゃ無ければ…いいかな?」

「ええ…大丈夫ですよ」

リサさんは家族と連絡していた

時刻は夜の7時、雨の音が響くなか、さつきよりなんか口数が減ったりリサさんを不思議に思いながら洗い物をする。し終わって机を拭き、ソファに座る

「リサさんもほら、いつまでも地べたに座ってないで、ソファに座ったらどうですか?」

「あつ…うん!そうだね!」

「リサさんどうしたんですか?さつきから静かですよ?」

「いやーなんでもないよ!なんでもない!」

雷もなってるし怖いのかな?そうだ気晴らしにテレビ付けようと思ひ、つけるとパスパレがライブをしていた

「あれ？どつかで見た事あるような…？」

「いたじやん：circleの5バンドの1つだよ」

「へえ、そうなんだ。って俺すげー人気な人守ったのか？俺って実は凄くないか？」

「ぷっ…あはは！面白いね、八意くんは」

「そうですね…？」

「雨もマシになったし、アタシ帰るね！」

「俺の傘貸しますよ」

「えっでも」「いいですから」

半場強引にリサさんに渡す、そして見送る。

「さて…明日…学校だな…しかも女子校だよね…」

俺は、明日に始まる地獄に備えて、寝ることにした

page 11 女子校に男子1人は地獄

朝、布団から身体を起こし、目を擦る。時刻は6時半

まあまあいい時間だろう。パンをトースターに入れ、改めてこの現実味の無い自分の部屋を見渡す。

「俺…本当にひとり暮らし+こんな場所に引っ越してきたんだな…」

そう呟き、なんか焦げ臭い匂いがしてる事に気づく

「あああああああ!?!」

パンは炭になっていた

「俺の朝ごはん…」

しょぼんとしながら学校の準備をする。時計を確認する

「ああー!」

時刻は8時10分、始業は確か8時30分のはずだ

「まずいぞ…!」

そう言い、荷物を放り込み、慌てて家を出て自転車に跨り、こぎ始める。

花咲川女子学園、生徒会室ではなんとなく重苦しい空気が流れていた。今日朝、風紀委員と生徒会は来てねと先生からの呼び出し、はて何かあっただろうか?と思いつつみんなと集まる。先生から出た言葉は

「転校生くるよ」

「それは…!急ですね…」

「しかも男子、初男子ね、プロフィールはこの封筒にあるよ。私は丸つけするから帰るわね」

そう言っただけで帰って

しばらくその場にいた氷川紗夜、白銀燐子、市ヶ谷有咲の3人は封筒を見つめて

「ええ!?!」

と声を上げていた。そして今に至る

「どうします…?!紗夜先輩?」

市ヶ谷有咲が助けを求めかねるように尋ねる

先程、3人でプロフィールを見た。男子とだけで驚きだったが更に3人を驚かせたのは

「まさか…転校生が…八意さんだなんて…」

「そうですね…私も驚きました」

「すいません、2人は知り合いなんですか？」

「ええ、前に少し」

「あの時も…私達を助けてくれました…」

「本物のヒーローかよ…」

「はあ…」

そして先生がそれを告げた生徒が他の生徒に言って

今じや校内騒然、もうハチャメチャだ。

「カッコイイかな!？」

「優しいかな!？」

などと、言って話し合っている反対

「男子なんかが…大丈夫ですか？」

「ちよつと怖いかも…」

と心配する女子もいた。男子だけど普通の男子じゃない…紗夜は
そう思う、多分みんなそ

う思っているだろう。

「うおおおおあああああ!!」

「!？」

校門辺りからすごい大きな声が聞こえびつくりする。そして見た
のは全力で自転車を漕いで遅刻5分前で学校に着いた八意想がそこ
にいた

「ぜえ…ぜえ…はあ…」

意識が朦朧とする。久しぶりだこんなに全力で全身を使ったのは
…H A H A H A…全身が笑ってらア…

明日筋肉痛確定だなど思いつつ、職員室に足を運ぶ

「失礼しまーす!」

教職員みんなポカンとし、3秒後にみんなああという反応をする。

そこから1人、いかにも校長と言う奴が出てきた。

「君が八意くんではないのかい?」

「はい、そうです」

なんだろう、この校長の目は、じとーつとして気持ち悪い。まるで獲物を品定めするかのような下品な目だ。

俺は嫌悪感を覚えつつ、コイツには気を付けようと思った。決して女子にはしてはいけない目だ

とりあえず校長室で色々説明され、自分のクラスは…

2年B組だ。クラスメイトにこころがいた。あれから少し話していたので割と仲はいい。知ってる奴がいてくれて助かった…内心安堵した。

チャイムがなる、俺は担任と一緒にクラスへ向かう。教室に行くまでの道のり、他の教室の前を通るわけだが…めっちゃくちや見られる。ナニアレコワイ

教室につく、中に入る。先生が落ち着かせてから自己紹介

「八意想です。よろしくおねがいます」

拍手喝采がわき起こる。

「…?」

俺は首を傾げた、はて俺はなにかしただろうか

先生が「趣味とか特技あるの?」と聞いてきたので

「俺は、基本的にアクセサリーや指輪を作るのが好きですよ、あとはみんなの笑顔を守る、ですかね」

拍手喝采と歓声が教室に響いた。はて、俺何か言っただろうか。無自覚である。

「ほらー!お前ら落ち着けー!…席は山吹の隣でいいか?」

「えっ…私?!いいですけど…」俺は山吹さんの横に座った。

「よろしくね、八意くん!」と言ってきたので

「よろしくおねがいます」とだけ返した。

時は過ぎ…昼休み

「…」

俺はカバンを見つめ絶句していた。弁当を忘れたのだ。俺はダツ

シユする。まだ購買と言う手段がある。「…。」神よ…俺はなにかしたのか？俺の目の前には売り切れと書いてある看板があった。

「はあ…」

1人ため息を零し、中庭付近をほつつき歩く。別に用があるわけでも無く、

「はあ…」本日2度目のため息。その時

「あ！八意くん！」と声がして振り返るとそこには…

「えつと…山吹さん…でしたよね？」山吹さんがいた

あとの4人は…確かポピパのメンツだ。

「何してるの？」山吹さんが聞いてくる

「実は…」俺は全ての事情を説明した。

「それは…災難だね…良ければこのパン食べる？私んちパン屋なんだ」

「そうだよ！さーやんちのパンすっごく美味しんだよ！」「チョコココロネ…おすすめだよ！」

チョコココロネを一つ貰い口に入れる

「美味しい…」うん、こりゃあ美味いわ。毎日行こう。そう誓った瞬間だった。ポピパのみんなとなんやかんや話し合い昼休みを終える。みんな、あのことに関してはあまり話さなかった。気にしてくれていいのだろうか。

助かる、うん。そうして学校が終わり、今度はバイト

circleへ自転車を飛ばし、着く。今日は少し遅めから入る。職員室に連れてかれ部活やこの学校1年のルーティンなどを聞かされた。パンフレットも貰った。そしてcircleの自転車置き場に自転車を入れ、中に入ろうとした時、ふと嫌な気配を感じる。circleにしては中が静かすぎる。ドアを開け中に入る、する遠くのライブ部屋から悲鳴が聞こえた。

「今の声は…まずい…」まりなさんだ今の声は

そして奥に走りドアを蹴り飛ばし開けた。半開きだったからね仕方ないね

そこにはcircle2バンド、Roseliaとパスパレとまり

なさん

そして…「てめえしつこいんだよ…！」思わずそんな声が出た。端
に追い詰めているクモ人間がいた

「てめえ…どんなけしつこいんだよ…!」

思わずそんな声が出た。クモ人間、再臨だ。

俺は走り出す、そしてクモ人間の後ろから数発、殴って蹴ってをし、俺はまた白くなった。

「う…」

相手は化け物だとしても、殴る感触はあまりいいものでは無い。でもやるしかない、俺はそう決めたんだ。もう二度と、あのような事を、かつての俺の大切な人、名前も顔も思い出せない人、でも愛しい人。俺は彼女を目の前で、酒に酔った父親に殺された。相手は化け物だ。酒に酔った父親でもない。でも…もう、誰かを目の前で殺されたくない…!

その時、かすかに俺の視界に写った

赤、青、緑、紫色の…俺みたいな姿、俺は白だ…これは不完全な状態なのか? 誰かが俺に歩み寄ってくる

「誰だ…? お前は…」

そして誰かが俺に向かって一言

「お前はまだ、覚悟が足りない」

そして意識が引き戻される

「…!?なんだ…!?今の…!ぐっ…」

意識が現実に戻った瞬間、俺はクモ人間に殴られていた

「…っ!」

首を掴まれる、もう反対の手には爪が生えていた。まずい、このままでは…!と思う反面、

もうこれでいいんだ…俺さえいなければこうならない、と望む自分がいた。確かにそれが1番手っ取り早いかもしれない。それを否定したい…否定してやりたい…だが俺の体は力を抜き始めていた

「やめなさいっ…!」その悲痛な声が聞こえるまでは

私、氷川紗夜は今日もRoseliaの練習のため、circleにギターを持ち立ち寄る。みんなはもう揃っていた

「紗夜、今日は風紀委員無かったの？」今井さんが尋ねてくる。

「ええ、今日は何も、」

「あ！おねーちゃん！」

「日菜…!？」

「あ、紗夜、今日はパスパレも一緒なんだ、あはは…」

「でも何故パスパレの皆さんがここに？」

「他のライブスタジオが空いてなくて…もしかして迷惑だったかしら？」

白鷺千聖が奥から出てきた。

「迷惑ではありませんが…珍しいと思つて」

喋つて、日菜と話して、Roseliaのメンバー、パスパレのメンバーと話合つて、教えあつて、私達も練習して、何も変わらない、いつもの日常。

でもそんな日常はすぐに破壊された

最初、まりなさんの悲鳴が聞こえた。ちょうど休憩中だったのでみんな何があつたのだろうと思ひ声をかける

「まりなさーん！大丈夫ですかー!？」

真つ先に声をかけたのは宇田川さんだった。

扉を開けて…。「はやくっ！こつちに！」とまりなさんが走つてくる。何事かと思ひ

「虫でも出たんですか…？」前を見ると、クモ人間がいた。前に1度襲われかけているからよく知つている

「きやあああー！」

丸山さんと白鷺さん、他の人たちも声をあげる

それをまるで音楽のように聞きながら迫ってくる。

品定めをするような目で、

「日菜…!」「おねーちゃん…!」

みんなパニックになるなか私は日菜の手を繋いだ。日菜の手から

は震えが伝わる。他のみんなと後ろに下がる

だがしかしすぐに端に来た。

もう終わりだと思った時、

「バタン!!」ドアを蹴り開ける音と共に

また彼が来てくれた。知り合って間もない、花女に転校してきた男の人、彼はクモ人間に殴りにかかり、またあの姿になる。横にいる日菜から

「あれがおねーちゃんの言ってた人？」

と言われ、

「ええ、前も私達を守ってくれた人よ」と答える

ほかの人たちも、彼が来てくれた事に安堵しているが、

彼が不利なことには不安が途切れなかった。

でもなぜ、ここまでして、1度あれほどの傷を負い、それでも尚、なぜ私達を守ろうとするのか、話したこともない人だっただけ中にはいる。なのに彼は何故…？

「あつ…い」

あこが声を出す。前を見ると、首を絞め挙げられ、刺されようとしていた彼がいた。でも何かがおかしい、まるで抵抗する気が無いような、そんな雰囲気、彼にはあった。まるで自ら死を求めているような…そう考えが至ると私は立ち上がっていた

「おねーちゃん…？」「紗夜…？」

日菜と今井さんが突然立ち上がった私に声をかける。

私は…震える足を落ち着かせ、手に力を入れて叫んだ。

「やめなさいっ…い」

俺は…馬鹿なことをしようとしてたな…だっただけ、俺はコイツらと闘えるのに諦めかけて、たった1人の、いや、よく見れば、紗夜さんの周りの人たちだっただけ…諦めてないじゃないか

「誰がためえに殺されてやるか…い」

そう言い、突き出してきた反対の手を押さえ、腹目掛けて両足でキックした。クモ人間は後ろに吹き飛び、

俺は無様に後ろから倒れた

「ゲホッ…ハア…?」

足を見ると、少し煙が出ていた、クモ人間が立ち上がり、呻き声を出している。その腹にはうっすら紋章みたいなのが見えていた。

「なんだ…あれ」

だがその紋章は消えた。多分、威力不足なのだろう

だがそんな事より…

俺は紗夜さんに、いや後ろにいる皆に対し親指を立てた。

紗夜さんは目に涙を浮かべている、リサさんもだ。

クモ人間がこちらに襲いかかってくる。それを殴り、受身をする。

体をつかみ投げ飛ばして、俺は叫んだ

「こんな奴らの為に！この人達の…みんなの涙を見たくない！皆に…笑顔で…！」走ってきたクモ人間にしがみつく「いてほしいんです

！」肘打ちを背中に決める

頭を蹴り飛ばす。

「だから見ててください！俺の…！本当の変身を…！」

「本当の…?」

皆困惑している。まあ当たり前だよな…。内心苦笑し、俺はベルトに触れる、するとオレンジの石が赤へと変わる

「…!?赤に…なった…?」

ポーズを取る、

絶対に お前達を悲しませやしない

その覚悟を胸に

「超変身！」

白をベースとしたカラーが赤へと変わる。足から目の色まで

…ちよつと角伸びた…?

「…!?!」

クモ人間が驚いている

「クウガ……」

確かにそう聞こえた

「クウガ……そうかクウガか！」

ようやく思い出した。クウガ

八意思の記憶のピースが1つ、埋まる

残り5つ

「さあ……反撃開始だ！ズ・グムン・バ！」
「!?」

「さあ……反撃開始だ！」

俺はグモンにそう言い放つ。グモンがもう一度、爪で刺そうと近づいてくる。俺はその爪を掴み、へし折った。

頭を殴り、後ろに飛ばす。俺は人生で1度は言ってみたかった決めゼリフをここで叫んだ。

「お前を止められるのはただ1人！俺だ！」

刹那、その場が凍る、俺はただ1人決めゼリフと共にポーズを決めていた。

後ろをむく、みんな苦笑いを作ってこつちを見てる。

グモンを見る。なんか悲しい目してる。

「え……何この空気……ええ……！」

なんか恥ずかしい、やばい穴があるなら入りたい。

そして俺は目の前のグモンに体当たりしてやった。

「ぐっ……!？」

後ろの人から「あれ……腹いせだよね……」と聞こえたが聞こえなかったことにした。

「オオリヤアア！」

グモンを持ち上げ、ぶん投げる。

なんか色々巻き込んでグモンは床に伏す。

ふう……気持ちよかった……と思ったのも束の間、グモンさんの口から糸が吐かれる

「っ!？」

俺はそれを右腕で受け止めるが、その糸は俺の右腕に巻き付き離れなかった。俺は左腕に力を込めてその糸を引きちぎる。ブチツと音を立てちぎれた糸を両手で掴み、俺も負けじと引っ張る。さながら綱引きのような状況だ。

でも綱引きというものは絶対に人の後ろに敵はいない。

「あつ……後ろ！」まりなさんが声を出す時すでに遅し、いつの間にか後ろにいたコウモリ野郎、ゴオマさんがいた。足をゴオマに掴ま

れ、体勢を崩す。

「うおおおああ?! てめえええ!」

一気に引つ張られ…いやもうこれ引きずられてるわ。グムンは勝利を確信したかのような顔をしていた。

まずい…! 本格的にやばいぞ…! これ! と思った時、

俺の頭にさっきの光景がフラッシュバックする。あの時、キックをかました時に出た紋章…

「もしかしたら…!」

俺はそう呟き、足に全神経を集中させる。間合いにまで引きずられグムンが爪で刺そうとした時俺は

「おらあああ!」

と叫びながら相手の腹にキックをかました、ついでもう1発。グムンは転がっていき壁にぶつかる。俺は立ち上がり、足を見る

「やっぱり…!」

足には先程よりも多めの煙が出ていた。そしてグムンの腹には先程よりも濃い紋章が浮かび上がっている

「クウガ…ゴラゲパ…ゴセグボソギデジャス…!」

相変わらず何言つとるのかわからん…と思った時だった。

「クウガアアア!!」

と叫び、爆発する。

「うおお!?! びっくりした!?! ええ!?! 爆発すんの!?! 嫌がらせかよお…あつ!?! ゴオマ!?! お前忘れてた!」

俺はそう言いながらゴオマの方を見るが…いなかった

「なにあいつ…嫌がらせしに来ただけ…? ええ…」

俺の初戦闘は、これにて閉幕した。

「まりなさん…他のみんなも大丈夫ですか?」

「大丈夫…だけど八意くん、まだその身体のまんまなんだね…」

「あはは…また襲いかかってきたら嫌ですもん、まあそんな事、多分無

いか」

俺はそう言い変身を解除する。と同時に

「うお…!?!」

俺は気が抜けたのかその場に倒れかかる。

「大丈夫…!?!」

この声…リサさんかな…

「すみません…ちよつと体が限界で、寝ます」

そう言った瞬間、まるで糸が切れたかのようにその場に倒れた。

「大丈夫!?!」

リサが近寄り肩を揺らす

「少し、寝てるだけみたいです、今井さん」

「そ、そうなんだ…ありがとうと紗夜…」

「とりあえず…事務室まではこぼつか」

5分後

眠る彼の周りを約10名が囲む

「紗夜ちゃんから話は聞いてたけど、本当なんだね…」

丸山彩がそう言う

「ジブンも…嘘かと思ってました、あはは…」

時折彼はうなされていた。

「うう…」

「なにか…悪い夢でも見てるんでしょうか…」

「あこの魔術で甦れー!」

「あはは!なにそれ変なの!」

「日菜…も宇田川さんも静かに…」

「まあまあ紗夜…」

「今井さんは…甘いですよ…」

「甘いで思い出した!クッキー作ってきたけどいる?」

「私はいるわ」

「友希那なら言うと思ったよ、はいどうぞ!」

「わたしも!」「わたしもいいですか?」

「リサさんのクッキー！ゼヒトモ欲しいです！」

結局、みんなで分けて食べている、会話も小声だが結構弾んでいる。だがしかし会話内容がほとんど彼についてだった。記憶喪失やの、あの化け物やの、八意の力についてやの、まあほとんどが考察だが、あとは彼は花咲川ではどんな感じなのか、紗夜いわく、緩いらしい。でもやる時はやる。そんな人という評価がついている。

あとは…彼をどうおもっているか…

パスパレの皆は話したこともないからあれだけど…

Roseliaは…

その話は10分続いた。今井さんが少し顔を赤くしていたが大丈夫だろう。うんと燐子は思うことにした。

1時間くらいして

「ん…ん？」

彼が起き上がった。

「おはよ〜」とリサがこえをかける

「ああ…うん、おはよう…？どれくらい寝てた？」

「1時間くらいかな〜他のみんなはもう帰ったよ、まりなさんは今片付け」

「うげっ…だいぶ暴れた記憶があるんだけど…」

「そうだね〜」

意地悪な笑みを浮かべる

「ナニソレコワイ」

そんな会話を陰からコソツと見る人が1人

「八意想くんかあ〜るんつてきたかも…！」

第2章 4つのフォームと5つのバンド

page 14 羽丘の天才 襲来!

今日はとても清々しい朝だ。雲ひとつない空、小鳥たちはちゅんちゅんとさえずり、高校生は昨日の話で盛り上がる。たった一人を除いて

「ああ〜：身体がだりい〜：眠たい〜：しんどい〜！」

今の時刻は朝8時55分だ。彼は今、学校にいる。1時間目が始まろうとしていた。皆すごい元気な中1人、今にも死にそうな雰囲気醸し出してる人がいた。

「ど、どうしたの…？八意くん…」

隣の席の山吹沙綾が声をかける

そこには椅子に座り、朝から盛大に突っ伏している八意想がいた。彼は昨日、あんなことがありながら睡眠を全く出来なかったのである！心身ともに疲労が溜まり、限界を迎えていた

1時間目 数学 (⊗ ω ⊗) スヤア

∴

2時間目 音楽 (⊗ ω ⊗) ス

ヤア：

3時間目 体育 ? (?) ?

4時間目 英語 (⊗ ω ⊗) スヤア：

5時間目 社会 (⊗ ω ⊗) スヤア：

6時間目 国語 (⊗ ω ⊗) スヤア：

とまあ眠りほうけていた。昼休みも、体育に関しては奇声をあげたせいか先生に保健室へと連行された。英語に関しては息してる？と聞きたくなった。気にせずところが突撃をかますが八意くんは全くもって聞いていなかった。

「なにがあったの？良ければ聞こうか？」

と聞いてみるが、帰ってくる返事は

「ああ…紗綾か…俺は未知の体験をしたんだ…」

「え？あ、うん…そうなんだ…？」

とまあ、こんな感じのよく分からない返答をされた。

今は掃除の時間だ。だが八意くんは机を動かす気力が見えず、机につつぷして寝ていた。廊下に目をやると、

「あつ…！」

そこには、教室へ帰ろうとしている氷川さんがいた。私は話しかける

「紗夜さん、ちよつといいですか？」

「どうしたんですか？山吹さん」

「実は…」

そう話しながら彼、八意想到指を向ける。

「実は1日…ずっとあんな感じで…」

「彼は…仕方ないですよ…」

「えっ？」

「でも、さすがに動いてもらわないと困りますね、ちよつと注意してきます」

「お願いしまーす…」

さっきの一瞬の紗夜さんの優しい目はなんだったのだろう。後で聞こうと思った紗綾である。

俺は今、見るまでもなく全身筋肉痛などの重症だ。

久しぶりにあんな運動(?)したわ、まだあんな野郎が沢山いるのかと思うと更にげんなりする。そんなことを考えていると、誰かがズカズカとこちらに迫ってきて、

「…!?いつてー！」

教科書で頭をスパコーン！と行かれた。

「いてえ…紗夜何すんだ俺は今死にかけてるんだぞ」

「知ってますよ、でもあれとこれとは別です。周りを見てください」

周りを見回すと…

「なんだ。掃除始まってんのか、よし！俺は今すぐに…」

「なにかようですか？」

「え…いや、あの…」

「何かようですか？」

「ヒイツ!?ゲホン スイマセンソウジシマス」

なんだあの覇気は…あの笑顔が怖い…

その後2度ほどサボろうとしたが…失敗に終わった。

その日の帰りの用意中の出来事

「ちえ…紗夜はツンケンしすぎなんだよ…はあ…」

「それは君がゆるゆるすぎだからじゃないかな?ほら、今日何回先生に注意されたの?」

「沙綾…やめてくれ、もうその話はやめよう…」

ピコン!と通知音がなる。スマホを取りだし、Limeを見る。送り主は

「…あ、リサからだ珍しい」

なになに…内容は

『この後じかんある?あるなら羽丘来て欲しいな!生徒会室で待ってるよ!』

だった。

「行かせる気まんまんじゃねえか…しゃーね、どうせ暇だし、」

『いいですよ』

とだけ送った。

一方、羽丘女子学園生徒会室

「あつ、Lime帰ってきたよ!いけるってさ!」

「りさちーありがとー!」

「えっへん!おやすい御用だ!」

「りさちーも一緒にいる?」

「え?いいの?いるいる!」

「何しようとしてるんですか…?日菜先輩…」

「大丈夫だよつぐみちゃん!」

「ほんとかなあ…」

「なんかるんってする!!」

「るんってきたのかー…」

こうなればもう日菜は止まらない、止められないのだ。
ごめんね…八意くん、そう思うリサだった。

下駄箱にいつて、駐輪場に行き、自転車に跨り花咲川を後にする。
漕いでる間、俺は考えていた。

リサさんもしかして生徒会やってるのか？まあたしかに人あたり
とか良さそうだし…まあいいか

羽丘に着いた。やっぱり沢山の生徒からの視線が痛い。俺はその
視線をくぐり抜け、職員室に行き許可証もらって生徒会室に行く。

「たしか…あつた、生徒会室ここだ。」

とにかく全身が痛い。早く済ませたいのが本脳だ。

コンコンとノックする

「入っていいよー！」

中からリサさんの声が出た。

「はいりまーす」

ドアをガラガラとあけ、中に入ると…

「よーし！つぐちゃん生徒会長命令！鍵を閉めて！」

「えっ…はい分かりました！すみませんっ！」

ガチャ…！とドアの鍵が閉まる音がした。後ろを振り向くと、コー
ヒーのような髪をした女の子が1人いた。

「は？」

と思わず声を出す、一体なんの真似なんだか、こっちは早く帰りたい
いつてのに、

「とおおおー！」

突然後ろから誰かにタックルをかまされ、俺は前にコケた。

「いつて…！」

誰かが俺の背中に乗っている。俺はキレそうになるが、飲み込み
乗ってる人へと視線を向けるが…

「…」

体制がまずかった、あともう少いでスカートの下が見えてしまうと

ころだった。正直結構焦ってしまった

視線を前へと戻し、背中に馬乗りになってる少女に向け、一言発す。

「で、あんたは誰？俺は今なんでこんな状況になってるんだ？」

その少女は俺からのいて俺の前に来る。俺は立ち上がり、ホコリを払う。

「ふっふっふ！我は氷川日菜！羽丘の生徒会長だく！」

そんな間抜けな自己紹介を聞いた

「…は？いやいや、初対面の人を…」

いや、どこかで見たことある。確か…

「パスパレの…あの水色の人か」

「水色の人って…まあいいや！」

あの時、めちやくちやキラキラしてた子だったはず…

「で、なんの用ですか？」

彼女は、驚くべき発言をした。

「そのくクウガの力ってやつ？私にちよーだい！」

「えっ!?!日菜先輩!?!」

「…は？」

俺は少し怒りの色を込めて発言した。

そのクウガってやつ、私にちよーだい!」

この発言に俺は驚きと怒りが現れた。

「日菜先輩!?!何言ってるんですか!?!」

「えーだってー?それがあつたらもつとるんって事がおきそうだもん!!」

「ちよつと日菜?」

これにはリサも少し表情を曇らせた。つぐみさんはあたふたして
いる。

「なんで…貴方に渡さなきゃいけないんですか?」

「さつき言つたじゃん!もつとるんってなりそうだもん!」

「ふざけないでください、もういいですか?俺は帰ります」

今の俺は筋肉痛だったりして機嫌が悪い。冗談なのかもしれない
が今の俺には余裕がなかった。俺は生徒会室の鍵を開け、外に出る。
正直言つて俺的には日菜さんは苦手かもしれない、そんな思いと共に
羽丘を出ようとすると、

「きゃあああ!!」

と数名の悲鳴が聞こえた。俺は自転車を止め、現場に走り出した。
渡り廊下につくとそこには、ピンクの髪、赤色の髪、灰色の髪をした
子がいた。その右には…「!!?」あいつは確か…いや、思い出せ
ねえ、俺は考えるのをやめ、走り出す。走りながらベルトを出し
「変身!」

ヒョウ型を怪人に向けて、蹴りをくり出し、ストレートをすると俺
は赤のクウガになった。

「クウガ…!」

確かこいつは昨日のニュースに出てたやつだ。第5号として扱わ
れている

グムンが第1号

ゴオマが第3号だぞ!

ちなみに俺も未確認扱い、第4号とされている

あと今知ってるのは0号

それ以外は不明とされている

俺はヒョウ型の女に向けて容赦なく飛び蹴りをかまし、壁に追い詰め殴る、右腕から左腕からパンチを繰り出す。いける…！そう思った矢先女は俺を蹴り飛ばしていた。

「あ…う…」

俺は壁に激突する。背中に激痛が走り悶えようとするが相手はその時間もくれない。まるで反撃かのように俺を蹴っては凄まじいスピードで走り、また女装をつけて蹴る。俺はいつの間にか壁を突き破り、教室まで蹴り飛ばされていた。机を何個か巻き込みながら止まる「クソっ…あいつ早すぎだろ…！」

もつと…素早さが欲しい、アイツに届く程の…！

俺は勢いに任せ地面を蹴る。その時、足の部分が青くなっていた。それに八意は気づいていない

「…!!」

早いスピードで迫ってくる俺にあいつは戸惑いを隠しきれてないようだ。俺はあいつの首を掴み教室に投げ飛ばす。さっき俺にしたように、俺は構えながら近づく。

相手はジャンプしながら俺に襲いかかってきた。俺はそれを低めの体制で躲す、そしてあいつはそのまま屋上へと飛んでいく

「逃がすか…！」

俺も飛ばうとした時だった。

ベルトの霊石が青くなる

「うおおああー！」

屋上まで飛べた、だか腕の色に違和感があった

「…!?!」

あいつも驚いている

「なんだこれ…青くなった…!?!」

俺は、自分が青くなつた事に驚いていた。

「なんだよ…これ…っ！そうだアイツは！」

辺りを見回すがいない。

「くそっ！」

俺はフェンスを殴りつけた。空は茜色に染まっていた

そしてそのまま、あの子達の元へ柵を乗り越えて屋上から下りる。常人なら死んでいるが俺は綺麗に着地した。

向こうではピンクの髪の子がつぐみさんに抱きついて泣いていた

「怖かったよおくん!!うわあああん!!」

よかつた…無事みたいだ。

次の瞬間、俺の体が赤へと戻る。

「はあ…なんなんだこれ…」

と言っている

「あの…」とつぐみが声を掛けてきた。

「助けてくれて…ありがとうございます！」

「あーうん、無事でなにより」

「あれ…?その声は…!」

「アーオレヨウジオモイダシタ！イカナキヤ!!」

「恐ろしいほどのぼうよみ」

「サヨナラ!!」

俺はそう言い走り去った。

「いてえ！」

走り去る途中、石に足をつまづき、転けてしまった。めちやくちや後ろから笑い声がした

「つぐちやーん！」

「日菜先輩!？」

「あの人どこ行つたか知ってる!？」

知っているのだが…今はやめておこう、

「知らないですよ」

「ちえーまた今度もう一回聞こー！あー！そうだりサちー!」

「どうしたの日菜ー?」

「あの人のLimeちょーだい！」

「ええ、大丈夫かな…」

「大丈夫大丈夫!!」

私は日菜に彼のLimeを渡した

自転車を押して帰る俺、理由は簡単足が痛すぎてこげない。

「へっくしょん！」

今誰か俺の噂でもしたか？ってなんか鳥肌たったわ、寒いか？今、そんな事を考えながら歩いていると、横に見覚えのあるリムジンが止まった。

「あれ…？」

案の定、弦巻さんとその黒服さんが中にいた

「お話があるのでいいですか？」

「はい、別に大丈夫ですが…」

「立ち話もあれです、少しお乗りになっっては？筋肉痛もひどいでしょう、」

「なんで知ってるの…？」

俺はリムジンに乗って黒服の話を聞く、半分はここから聞いた話、もう半分は羽丘の戦いだった。いつ見てたの疑問が残るが追求しないことにした、なんか怖かった。

しばらくするとLimeが鳴る

相手は…

「?!?!」

なんとあの日菜さんだった。とりあえず既読無視しといた

そしてしばらくして着いたのは

こころのお家だった

「めっちゃでかいやん…」

俺はそう呟く。だってもう見る限りの緑とかあるし

奥にはめちやくちやデカイ家？があるし…

「今日は少し、貴方様に用があまりまして、説明するよりついてきて見て

もらった方が速いかと」

「分かりました…」

俺は歩き始める黒服について行く、エレベーターに乗り地下へ、駐車場の中にある一室に案内された。

部屋は暗いが…黒服さんが電気を点けた

「うお…?」

少し眩しい位の電気の部屋の先あった、1つのバイク

「あれが我々弦巻家が制作した試作品、トライチエイサー2000GTとなっております」

「へ?バイク?」

「本来ならば完成品をお渡ししたいのですが相手の登場が早く、そしてスピード型となると…」 「いやいやいや!ちよつとまで!俺免許無い!犯罪なる!」

俺はそう叫んだ。

「免許ないよ!?俺!」

その絶叫がガレージに響き渡る。

「問題ありません」

黒服さん:「すげえ推すな

「いや、でも俺:バイクとか乗ったことないし:」

「問題ありません」

「:。」

八意想はトライチエイサーを手に入れた!!

確にかっこいいよ!?だけどさあ:」

「試し乗りは如何なさいますか?」

「へ:~?」

「やはり一度試し乗りは必要かと:」

「確かに乗ってみたいけど:~?」

俺はそこでふと違和感に気づく、

「バイクの:片方のハンドルがない?」

そう、このバイクには片方のハンドルが付いていないのだ

「ええ、こちらが鍵となっております」

そういつて黒服さんから渡されたのは:バイクのハンドルだ。

「え:~?これが鍵?もしかして:」

俺はもう片方のハンドルがあるはず場所を覗き、そこにはめる。カチツと音がして固定された。

「あとは、ここに液晶にパスワードを入れると」

黒服さんがパスワードを入れると

ライトが光る、ハンドルを回すと。ブオオン!とエンジンがいい音を立てた。

「:。えつと:~試し乗りにいいですか?」

俺は負けてしまったのだ。俺は、好奇心に負けてしまった。待つてましたと言わんばかりの雰囲気醸し出す黒服さんに連れていかれ、

弦巻邸のデカイ運動場的な場所に来た。

「どうぞ、練習場所はここら辺がいいかと」

「ほんと、ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ今でも感謝しています」

「そうですか…じゃあ、行ってきます」

「いつてらっしやいませ」

ドガシャーン！

転倒した。

そこから始まるバイク練習、何回も何回も転倒し、

立ち上がる。それを何度も何度も繰り返す。アイツに勝つにはこのバイクが必要かもしれない。そんなことを考えまた転倒する。

「うあく！しんどー！」

大の字になって運動場で寝転ぶ、途端に襲ってくる睡魔と激痛、俺…筋肉痛だわすっかり忘れてた。

「こんばんは！想！」

頭上からそんな声がしてうえを向く

「…こころか、おうどうしたパジヤマ姿で」

「想がここにいたから話しかけてみたのよ！あと想！とつても泥だらけよ！早く洗わないと！」

自分の身体を見る。あつちこつちに擦り傷等が出来、血が出ている。制服は泥だらけだ。

「やつべ…制服のまんまだったわ…」

「お風呂を貸してあげるわ！そこで洗ったらいいわよ！」

俺はとりあえずさっぱりしたいとしか考えられなかったので

「おう、助かるわ」

といい、ここに案内されて屋敷に入った。メイドさんや執事など、様々な人とすれ違う。皆

「ご苦労さまです」

などと声を掛けてくれて、少し小っ恥ずかしくなった。

「ここがお風呂よー」

「風呂というよりかはホテルにありそうな温泉だな…」

俺が案内された風呂はめちやくちやデカかった。露天風呂も外にあるしとりあえずホテルにありそうだった（語彙力消滅）

「ふう…こうやって、風呂に入るのもいつぶりだろうな」

ココ最近、シャワーで済ませていたな、

「ふう…」

さつきは

「私も一緒に入るわ！」

と言い出したところを何とかしてとめた。

その代わり

「ふんふーん♪」

何かあったら大変という事で扉の向こうで待機している。こころは優しいな、そんな事を思いながら

風呂を出る、

「ちよつとこころ、後ろ向いててくれ」

「私は大丈夫よ！」

「俺が大丈夫じゃないから」

「わかったわー！」

俺は脱衣場に入り、自分の制服を入れたはずのカゴを見て、困惑する

「なあこころ？俺の制服しらないか？」

「さつきメイドさんが持っていったわよ？」

そう、なんか綺麗なパジャマっぽいものが用意されていた。下着も

ちゃんとある。まさか…

「私達が洗濯させて頂きました」

「ありがたい…?」

「あと今日は1日、我々の屋敷に泊まってはいかがですか?その方が
こちら様もお喜びになります」

「いや、流石にそれは…失礼ですよ」

「想は泊まりたくないの?」

うわっ…可愛く上目遣いで話してきたところに

「分かりました…今日泊まらせていただきます」

俺は負けたのだった。

「それではお客様、晩御飯の用意が出来てますゆえにこちら様と御一
緒にどうぞ」

なんだもう用意してたのか、元から泊まらせる気だったなこんちき
しよう。口には出さないが

「美味そう…」

人間食べ物を目の前になるとお腹が空く

現に俺はいま、腹の虫が大絶叫しているのだ。

「一緒に食べましょう!」

「そうだな」

「いただきます!」

2人で食べ始める

こちら…食べるスピード早くない?結構食べるんだなと思いつつ
俺も食べる。卵焼きにサバの味噌煮に味噌汁にご飯、The和食だが

…

「美味い…!」

本当に美味しかった

途中

「想!あーん!」

とこちらがしてくる。いやそのお箸今貴方使ってませんでしたか
?え?いいの?大丈夫なの?

「お、おうありがとう」

俺は渡された卵焼きを食べる。ここは俺もすべきだなと思い、サバの味噌煮の一寸片をここに

「ほらここに、あーん」

としておいた。

なんやかんやありつつ、晩御飯を食べ終わる

「はあく…美味かった…最高だわ、あ、そういえば」

俺はスマホを取りだし…

「!？」

日菜さんからのLimeが嫌がらせかという程に来ていた。

内容はやはり、クウガについてだった。俺はこう返した

「俺は誰にも渡しません」

と返しておいた。あとはリサさんからも来ていたので返しておいた

「ねえ想！今日は一緒に寝ましょ！」

「ああ…うん…え？」

俺としたことが、スマホをいじってたせいで適当な返事をしてしまった。ここからは…

「やったわ！沢山お話できるわね！」

とご機嫌なようだ。

「え、あ、その…」

その機嫌を損ねる訳にも行かず、一緒に寝ることになった。

沢山お話するといいながら、布団に入って5分で寝てしまった。俺は身動きが取れない、どうゆう意味だった？

いわゆる抱き枕つてやつをここにされてるんだ。

結局俺は一睡も出来なかった。

「おーい……ごころー朝だぞー」

朝の6時30分、弦巻家にて迎えた朝、そして横で寝てる金髪の天
si……ごころを揺すぶってみる。

「うう……」

ダメだ確実に寝ぼけてる。もう一度、揺すぶる

「ごころー？朝だぞーおーい」

「ん……あら！」

「うおっ!？」

突如飛び起きたごころにびっくりする。

「びっくりした……」

「あら？想、とつても眠そうね！まだ朝よ！」

「ああ……うん、眠たい」

あの後はとりあえず離して貰えたのだが……めちやくちや擦り寄つ
てくるんだよね、ネコかって思いたくなるほどに

コンコン、そんな音が扉からした。外からメイドさんが1人、入っ
てきた

「おはようございます八意様、ごころ様」

「おはようっ♪」「おはようございます……」

「お疲れ様です、八意様。ごころ様に手を出さなかったかとひやひや
しました。」

「えっなに？なんでしつてんの？」

「朝食の準備が出来ております、こちらへ」

「いや、なんでしつて……」

「行きましょ！想！」

なんで知ってるのか、真相は聞けずにごころに連れていかれた。

「おお……朝から豪華……」

朝食はスクランブルエッグや、パンなど様々な料理に囲まれてい
た。

「いただきまーす！想も食べましょ！」

「ああうん、そうだな」

俺も椅子に座り

「いただきます」

「美味かったなあ…」

「コックさんの料理はいつも美味しいわよ!」

「いやあ…すごい」

俺達は今、こころの部屋にいる。学校までまだ時間あるもんね仕方ないね

コンコン、本日2度目のノック音

「こちら、八意様の制服です」

入ってきたメイドさんに渡された制服は、シワひとつないまるで新品のようだった。

「ありがとうございます」

「いいえ、では失礼します」

そう言っ出ていくメイドさん

「あれ?俺どこで着替えりやいいんだ?なあここ…」

そう言っ後ろを見ると、制服に着替えている下着姿のこころが鼻歌を歌っていた。

「はうあ!」

俺は慌てて、後ろを向いた。

「どうしたの?想!」

「いや、とりあえず制服着てくれ頼むから」

あの後、俺も制服に着替えた。もちろんこころには後ろを向いてもらった。なんかこの制服いい匂いがする…

「そうだこころ、お礼と言っちやなんだが、俺が髪をといでやろう」

「想はそんなことも出来るの?」

「ああ…なんとなく、お前が似てる気がするんだ」

「…?」

「いや、俺の話だ、ほらさっさと鏡向きな」

片手にくしを持ち、こころの髪をとく。サラサラしたこころの髪を丁寧、丁寧に、なんとなく懐かしい感じがした。確か髪の毛が長くてもボサボサだった彼女…

「っ!？」

途端に頭に激痛が走り手が止まる

「どうしたの! 想?」

「…いや…なんでもない…」

一瞬だったがめちやくちや痛かった。

「…? 想?」

「どうしたところ?」

「想はどうして泣いてるの?」

「…!」

俺は自分の頬に手を触れる。そこには涙があった。

「なんでだ…? なんで泣いてるんだ…?」

「お腹が痛いのかしら?」

違う、どこも痛くない。でもまるで、ぽっかりと心に穴が空いた気がする。

「いや、大丈夫だ。こころ」

俺は涙を拭って髪をといた

「んで…? なんで?」

それぞれ用意を終え、屋敷を出ると、黒服さん達やメイドさん達。それまでではない

「なんで俺のバイクが用意されてるんですか?」

「今日はバイク通学かしら!」

横でこころがはしやぎながらバイクに駆け寄ってマジマジと見つめている。

「昨日の今日ですから出てくるかもしれません、あともう一つこれをもう貴方様のです。家に持って帰らなくては、もちろんメンテナンス等は弦巻家にお任せ下さい」

「あははありがとうございます…って流石に学校はまずいですよ? 免許も無いし第1俺まだ免許取れる歳ですか?」

「bグツ…」

「何そのグツは…」

黒服の1人が問答無用でヘルメットを2つ渡してきた

「2人乗りつすか…？まさかの？」

「あのごころ様のはしやぎようを台無しになさるおつもりで？」

「分かりました、行きます行きますよお！」

完璧に黒服の手の中だ。俺は早々と抵抗を諦め、大人しく従うことにした。

「ほらごころ、ヘルメット頭につけろ」

バイクまで近寄り、ごころにヘルメットを渡す。

「…？」

「うそやろ…ヘルメットわからんのか？」

ヘルメットをごころの頭に被せる。自分も被りバイクにまたがる、ごころも後ろにまたがる。

「ごころく捕まってるよ〜」

「ええー！」

そう言うところろは俺に抱きつく形で腰に手を回す

「しゅっぱーっ！」

「おお〜…」

テンションが高い心に対し、俺はテンションが地面より下だった…
だって…

「これは一体どうゆうことですか？八意さん」

ほら、鬼の風紀委員が見逃してくれるわけが無い。

「すいません…」

「すいませんじゃなくて、貴方…なんでバイクなんかで学校へきたのですか？免許あるんですか？」

「免許あったら大丈夫なの？」

「ダメに決まってるじゃないですか！」

「ですよね…」

「で？どう説明するんですか？しかも弦巻さんを後ろに乗せて」

「えーと…あー」

助けを求めようかと周りを見る。めっちゃザワついとる

「バイク…」

「千聖ちゃん…あれ…あの人って…」

「ふええ…」

「八意さんって意外とヤンキー？」

とかめちやくちや言われてた。

「あー！バイクだー！」

その中、無駄にキラキラとしながらこちらに近寄ってくる猫耳へ

アーの女子、その後ろについてきた4人

「香澄…!?突然はしるなって…バイク!?!」

「ほんとだ…バイクだ」

「ここ女子校ですよ？あれ？うちの生徒さん？」

「八意くん…ヤンキー？」

「やめてください沙綾さん…」

「バイクかつこいいですね！あ私戸山香澄っていいいます！」

「さらっと自己紹介…」

「花園たえです」

「えっ…！私は牛込りみだよ…」

「私は沙綾って…もう知ってるか」

「私は市ヶ谷有咲だ。であんたなんでバイクできたんだ？」

「弦巻家のせいだ。俺は悪くない」

「はあ…？とりあえずもう朝休み終わるから放課後、生徒会室な」

「私も行きます」

「紗夜先輩もですか？」

「ええ、多分何かしらあるのでしよう。」

「紗夜さん許して」

「理由を聞くまでバイクは没収です」

「あっはい」

この後、先生からも怒られた。

〜昼休み〜

「はあ：放課後生徒会室かあ…」

「まあバイクなんかできたらですよね…」

「美咲か…こんちゃ」

「こんにちは、お疲れ様です。随分とやられてましたね」

「ああ…うん、疲れた…」

あの後はまだもう散々、教師に怒られ紗夜さんからも怒られて

「反省文とかダルいわ…」

「何がだるいんですか？」

「いやほら、反省文…」

途中まで言い後ろを振り返ると…

「げっ…」

今にもぶち切れそうな紗夜さんが隣子さんといった

「奥沢さん、こんにちは」

「こんにちは」

「あはは…」

逃げよう！俺はダツシユした。

「あつ…こら！待ちなさい！」

「いやもうほんとすんませーん！」

俺はダツシユした。

～放課後～

俺はいま、生徒会室で土下座している。理由は簡単

「反省文を5000文字」

「…はっ…」

そう言つて紗夜さんから渡された紙とペン。これは流石に市ヶ谷
さんも

「紗夜先輩…？」

隣子さんも

「少しやりすぎでは…？」

「昼間逃げた分も頑張りなさい」

「いやです」

「頑張りなさい」

「いや！」

「やりなさい！」

「やうだー！」

「やりなさい」

「キエエアアア！ごめんなさい！」

とまあこんな感じだ。

「いやもうごめんなさい」

「なら質問に答えてください」

「質問…？」

「なぜバイクできたのかです」

「どうしても？」

頷く紗夜さん。

俺は仕方なく（半強制的）話した。羽丘の事、黒服に渡された事。

「やはり…日菜の言ってることはホントなのね」

「またあの化け物相手にしてたのかよ…」

「弦巻さん…一体何者なんでしょうか…」

その時、俺のスマホが鳴った

「失礼、少し電話が」

俺はスマホを取りだし、相手は…

「黒服さん…」

電話に出る

『八意様、今はどちらに？』

「花咲川にいますけど？」

『近いですね、』

「どうかしましたか？」

『羽丘に、第5号が現れました。至急来ていただけませんか？』

「ほんとですか!？」

俺は椅子から立ち上がる

「どうかしたんですか？」

「羽丘に未確認が来たらしい。」

「戦うんですか？」

「それがクウガだからな」

「反省文、ちゃんと書いてくださいよ？」

「あーうん、考えとく」

俺はそういい、生徒会室から出ていく。ここは3階、本来なら階段を使うんだが…

「変身！」

俺は降りるのももどかしく、赤のクウガになり、3階の窓ガラスを割って飛んだ

「意外と高い!?」

俺は何とかして受身をとって無様に着地

上から紗夜さん達がなんか言ってるが無視!

「あつた…!」

俺の相棒、トライチエイサーに跨り走り出す

「間に合ってくれ…!」

それ一心で花咲川を出た

「きゃあああ!」

「みんな落ち着いて!」

羽丘は今、混乱の渦に飲まれていた。

「あれが未確認なの!？」

「始めて見た!」

「早く逃げて!」

警備員が吹き飛ばされる。後から来た3人も軽々と飛ばされる。それを氷川日菜は後ろ目に今井リサと湊友希那と宇田川あこと走って逃げていた。正直あの化け物については気になることが沢山ある。だけど話を聞いてくれそうにない、だから諦めた。

「日菜!こつち!」

「あ!日菜さん!」

「麻弥ちゃん!」

「リサさんも!ご無事だったんですね!」

「おや:子猫ちゃん達:私が守って:」

「薫さんもほら!逃げますよ!」

「:」

「あ!リサ先輩達だ!」

「ひまり!Afterglowの皆も!」

「おねーちゃん!」

「あこ!無事か!」

「無事だったんですね!」

「そつちも無事?」

「みんな無事です!」

つぐみがそう言う

「あの化け物:羽丘を荒らし周りやがって:!!」

「巴ちゃん落ち着いて!」

その中、日菜は確かな確信を抱いていた。

彼は絶対に来る

リサと目が合う、同じ事を考えていたらしい。2人で頷きあう
「るんってきたかも！今度こそ彼を！」
クウガってどんなものなのか知りたい、そんな気持ちが渦巻いてい
る日菜であった。

「とりあえず体育館に逃げれる!？」

「確かに！そっちの方が安全かも！」

「しっかりしろひまり！」

「うう〜…」

体育館へ走る途中、今井リサは倒れている警官を見てしまった。目
が片つぽくり抜かれているのだ。

「ひっ…」

吐き気がする。

「どうしたんですか？リサ先輩…」

「絶対に見ちやダメ！」

「リサ…？」

あんなもの見ては行けない。

「着きました！早く！」

みんな中に入り、鍵を閉める

「はあ…はあ…多分これで大丈夫…」

「他のみんなは…？」

「多分無事だと思うよ…」

「ダイエツトにしては内容が地獄…」

「リサ先輩？リサ先輩！」

リサは友希那の背中に倒れていた。

「気を失ってるみたい…」

「リサ姉大丈夫かな…」

ガシャーーン！窓ガラスの割れる音がある

「!？」

割った方面には…あの化け物がいた。身体には血がつき、その臭い
が鼻をとおる

「うつ…」

「ひまり！つぐみ！大丈夫か!？」

「巴ちゃん…」

「あの怪人さんつぐつてるね」

「モカ：今それ言う時じゃない…」

「てかあの化け物こっち近づいてきてるよ！」

「リサ先輩起きて！」

「子猫ちゃんには…手出しはさせないよ…！」

「薫さん…！」

～花咲川～

「紗夜さん…やっぱり心配…ですか？」

「ええ：日菜は大丈夫なのでしようか？」

「彼が行ったから…きつと大丈夫かと…」

「彼の信頼すごいな…」

「でもガラスを割った件は別ですね」

(想さん：強く生きてください…)

そう願わずには居られない隣子だった。

～羽丘～

「薫さんダメじゃないですか！」

薫さんはあんなこと言いながら立ちながら気絶している。

「いやだあゝ死にたくなあゝい！」

「…？」

「どうしたつぐみ？」

「外からバイクの音が…」

そう言いかけた瞬間、体育館の横にある扉が吹き飛んだ

「?!?!」

「おつ邪魔しまああす！と同時に轢いてやらあ！」

そうヤケクソに叫びながら前輪を上げてこちらへ来るバイク。そのバイクはそのまま化け物を跳ね飛ばした。化け物は綺麗に飛んで体育館の壁にぶつかり呻く

「待 た せ た な☆」

「あつ！」

そのバイクの主は、未確認生命体第4号。八意想だった。今は赤の鎧に覆われているが

「あれゝ前は白かったようなく」

モカの質問

「色々あつて赤くなった」

「そうなんですか…」

つぐみが返事をする

「で、あんたらは大丈夫か？」

「私たちは大丈夫です」

「そうか、よかつた間に合つたあくほら、さつさと逃げろ、俺はあいつを倒す。」

「分かりました…」

薫とりサをそれぞれ2人で背負い体育館を出る。

「さあ…かかつてこいや…」

俺は相棒のエンジンを鳴らし目の前にいる化け物に宣戦布告した。

『!?!』

体育館から凄まじい音がして後ろを振り返ると

「えっあの人バイクで校内入っていったよ!?!」

あこが声を出す。皆は呆れ半分驚き半分でいた

「めちやくちやするなあ…」

「…ん?ここは…?」

「あつりサちーおはよ!」

「日菜…?あつあの化け物は!?!」

「第4号が来てくれたんです」

「来てくれたんだね…」

良く考えればまりなさんとRoselia、パスパレしか八意の名前を知らないことに気づいた。

「今回も…勝つよね」

「るんってきた！私見に行ってくる！」

「ちよっ日菜さん!」

そう言うのと日菜はもう校舎内に入っていた。

「はや…」

「アタシいつてくる…!」

「リサ先輩!」

リサは日菜を追い走って中に入っていた

「待てやアアア!」

様々なものを蹴散らしながら廊下をバイクで疾走する。

こいつ、めちやくちやすばしっこいし煽ってきやがる。俺のイライラゲージが溜まっていく。落ち着け俺…俺はやればできる子八意想だ!

「え…」

相手を追いかけると途中で消える。消えた方向を見ると…

「階段…」

2階、3階へと続く階段があった。おそらくやつはこの階段を昇つたに違いない…

「もうこれ映画のワンシーンじゃねえかあああ!」

恐怖を叫びで誤魔化し、バイクの前輪を上げ階段をバイクで走る。足から来る衝撃がすごい

「あばばばばばばばばばばばばばばばば」

めちやくちや揺れるのでそうやって叫んでおいた。2階に着く

「どこ行きやがった…!」

俺はそのままの勢いで3階、そして屋上まで行く。屋上に入るための扉をバイクでこじ開け外に出る。時刻は夕方、屋上を茜色に染め上げる夕日

「ご丁寧な扉まで閉めてくれやがって」

その夕日を背中に浴びる俺に対し相手は

「ふん」

とだけ言いこちらに襲いかかってきた。

「おらあー！」

前輪を上げ相手にぶつける。途中右に逸れるので上にあげた前輪を右に倒す。見事ヒットし相手は手すりまで飛んでいく。手すりにぶつかり形が変わる。

ガシャーン！バイクが横に倒れる

俺もバイクから倒れ尻もちを着く

「いてっ！」

相手が馬乗りになり首を絞める

「くっ…おっ…」

女のくせに化け物みたいな握力してやがる。あー！こいつ化け物だったか、そんな呑気なことを考えているが…

やばいこれ本気で死にそう…相手の腕を掴み精一杯引き剥がそうとする。

「当然だが…俺は死ぬ気はねえよ…！でもな…！アイツらにも手出しはさせない…！例え…命に変えたとしても…！」

今ここは2階、途中で合流したりサ、日菜の2人

「リサちー動いても大丈夫なの？」

「ちよつとしんどいけど大丈夫…！」

「あの人多こいったんだろー」

「屋上じゃない？」

「あー！そうかも！」

そう言つて屋上まで駆け上がると…

「あつ…！」

馬乗りにされ、首を絞められている彼がいた。そんな光景を目の当たりにする。当然動けるはずがない、もしかしたら邪魔になるかもしれないから、

「当然だが…俺は死ぬ気はねえよ…！でもな…！アイツらにも手出しはさせない…！例え…命に変えたとしても…！」

彼からそんな言葉が聞こえた。その言葉が日菜に突き刺さる。日菜の心に罪悪感が生まれる。その罪悪感は後悔へと変わり日菜をよ

り追い詰めた。昨日一緒に帰ったりサの言葉を思い出す

『彼もね…きつと望んであの力を手に入れたわけじゃないと思うの、記憶が無い彼が、でも、記憶喪失で混乱してるはずなのに、ああやって私達を守るために死にそうになるまで戦ってたでしょ？だから日菜もあんなこと言っちゃダメ、冗談かもしれないけど、また会った時謝って見たら？彼優しいから許してくれるかもよ☆』

『はーい』

あの時ははーいの一言で受け流したが今は違う。彼は本気だ、命を捨てる覚悟でああやって戦ってる。だけど自分はどうか？あんな覚悟は無い。遊び半分で言ってしまった

(あたし…なんであんなこと言っちゃったんだろ…バカだ…)

「日菜…？」

日菜を見ると顔に大粒の涙を沢山零していた。

「わたしっ…！彼にあやまるう…！」

「昨日言った事、覚えてたんだね、うん！戦いが終わったら一緒に彼のところ行くー！」

「うんっ…！」

「ほら、ハンカチ」

「ありがとう…！」

『勝ってよね…！想！ここに女の子一人待ってるよ』

「うおおおおあああー！」

腕にありつただけの力を込める。腕が少し浮く、押し返す、この腕を…！？」

相手は困惑するがさらに力を込めてくる

「っ!?!?おおおおー！」

一瞬押され返されたがまた押し返す。

足は使える！そう考えた瞬間、体は動いた。相手のみぞおちに蹴りを入れる。体制を崩した相手にさらにパンチを2発。形勢逆転と行ったはずだが…俺は激痛で立てなかった。腰が痛い、腕が痛い。相手が立ち上がり、こちらに襲いかかる。まだだ…まだ足が使える…！

「おりやあああー！」

足にありつたけの力と精神力を込め、蹴り飛ばす
相手は飛んでいく、ふらつきながらも立ち上がり、足を見る、煙が
出てる

「てことは……！」

相手を見ると……

腹に紋章が浮かんでいた

「っ!?ぐっ……！」

体がひび割れていく、抵抗しようとするが抵抗できない

「クウガアアア！」

相手はそう叫び、爆発した。

「はあ……はあ……ぐっ……」

変身解除した途端、吐き気と全身の痛みに襲われる。だがここで倒れる訳には行かない。そう言い聞かせ、倒れたバイクを持ち上げる。

「早速派手に戦ったな……途中で抜け出てきたし紗夜さん怒るだろうなあ〜」

そう言いながら歩きだそうと屋上の扉を見る

「……なんでいるの?」

リサがニコニコしながら日菜の背中を押す。そのままリサは扉の向こうへ行つた

「……?」

日菜と二人きり、確実に不味い状況だ……何をいえばいいのかわから
ん俺に対し日菜が口を開く

「ごめんなさい……」

「え……?」

「あんなこと言つて……ごめんなさいっ……」

「ちよ……泣くなよ……」

「私遊び半分であんなこと言っちゃった…!ごめんなさいっ…ごめんなさいっ!」

「落ちつけ…」

わあああんと泣き出す日菜、それに困惑する。何の件で謝ってるのかは想像が着いた。日菜さんなりに考えて謝ってるんだな…だから…

頭に手を置く、日菜が少しびくつとした。優しく抱き寄せて頭を撫でる

「!?」

「大丈夫、俺は気にしてないよ。」

何かが決壊してさらに泣き出すと日菜が泣き止むまで静かに撫でつけた。優しく、ずっと

「あちやーこれ寝ちやつてるね…はいこれお疲れ!」

「ありがとうリサ…多分きつと泣き疲れて寝ちやつてるんだろうな…」

リサから缶コーヒーを貰い、プルタブを開け、飲む

疲れた身体コーヒーがしみ渡るのを感じながら屋上に座っている。膝枕状態の日菜さん。頭を撫でるとくすぐったそうにするのでその反応に隣に座るリサと苦笑する。

「今…時間は?」

「夜の7時だね」

「バレないように学校出ないとな…?w」

「そうだね…?w」

ふと、日菜のポケットにあるスマホが鳴っている。

俺はポケットから取り出すと

「紗夜さんからだ…」

出してみる

『やつと繋がった…日菜大丈夫だった?』

「大丈夫ですよ」

『なんで貴方が日菜の電話から?日菜はどうしたの?』

「俺の膝の上で眠ってますよ」

『…ふしだらな事してないですよね?』

「横にリサさんがいるのにそんなことするわけないじゃないですか、
第1、俺を好きな人なんて誰もいないですよ」

横でリサさんかピクつとなつたが気にしないでおい

『…そうですか、では私はこれで、日菜が起きたら電話ありましたとだけ伝えておいてください』

「へいへい」

電話が切れた。横を見ると、リサさんが顔を真っ赤にして俯いてい

た
「どうしたんですか?リサさん?」

「えっと…その!あのねっ…!」

「…?」

次の一言で驚く

「私…想くんの事が好きです…」

「…はい?」

俺はそんな間抜けな声を出した

「私…想くんが…好きなんだ…」

今にも消えそうな声でリサさんがそう呟く

「はい…？」

俺はあつげに取られた。俺は今、告白されているのか？リサさんに…？

「返事は今じゃなくてもいいよ！うん！」

めちやくちや慌てふためくりサさん。でもなんで俺のことが好きなんだろう。

「リサさんはなんで俺の事が？他にいい人なんていっぱいいるでしょうに」

「なんで…だろうね、私もわかんない」

でもココ最近彼と話していると胸がドキドキする。最初はただの命の恩人だった。だけど彼と話して行って少しずつ仲良くなって…好きになった。

「えっと！私帰るね！」

そう言つて立ち上がる。扉に入る前、

「答えはいつでもいいよ…！」

とだけ言い、帰つていった。

「はあ…」

俺はどうすればいいんだろう…実は少しづつ、記憶の断片断片が見え始めている。俺には、

彼女がいた。

まだ名前も、顔も分からない。でもリサさんに似ているような…そんな気がした

「ん…ん…？」

下からそんな声がして目をやると日菜さんが目覚めていた

「おはよ…日菜さん、こんばんはが正しいか」

「おはよ…つて!? 想くん!? え!? 膝枕!」

日菜さんの顔が一気に赤くなる

「ん? どうしたんですか?」

「私…どれくらい寝てたの?」

「えーっと今7時半なんで…多分1時間くらいかと」

「えっそんなに?」

「はい、あ、そうだ紗夜さんが電話くれーって言っていましたよ?」

「ほんと? ちよつと電話してくる!」

「はーい」

スマホを持って走り出す日菜さん。手すりにもたれ掛かりがら

「あ! おねーちゃん?」

とかなんやら話している。しばらくして

「おねーちゃんが迎えに来てくれるらしいよ! 私たちも校門まで行くっか」

「そうだな…そして日菜…? なんか近くない?」

「気にしなーいの!」

「え? あ、おう?」

何とかバレずにバイクを持ち出して2人で校門から出る

「あー! 楽しかった! なかなかスリルいっぱいだったね!」

「出来れば二度と経験したくない…」

だって日菜さんしがみついたりするんですもの。驚かしては来るし…

「日菜!」

「あ! おねーちゃん!」

「心配したじゃない…」

「おねーちゃんは心配症だな」

「そして想さん」

ビク!! 「はい…」

そろりそろりと逃げようとしたがバレた。

「えつと…その…日菜達を守っていたいてありがたいとごうごうございます…」

「え？」

「なんですかその目は」

「紗夜さんつて人に感謝するんだなつて…」

「失礼ですね！後、窓ガラスの件は別ですよ」

「そこをなんとか…」

「ダメです、失礼な事を言う貴方が悪いんですから」

「やめてくれよお…」

「あははく！何その顔面白ーい！写真撮らせて！」

パシヤ！

「いや、答えてないよね？問答無用じゃん」

とりあえず、こんな時間に女子二人は心配なので、送ることにした。

双子だし仲良いなあ…とか思う

「どうしたの？そんなに見て、さては…！可愛い日菜ちゃんに見とれちゃった〜？」

「いや、双子だから仲良いんだなくつて」

「そんな速攻拒否しなくていいじゃーん！」

「これでも私達、前まであまり話さなかつたんです」

「え？そうなの？少し詳しくいいかな？よければいいから」

「ええ、別に構いませんよ」

そう言いながら話す紗夜さんの話を黙って聞いた

「壮絶だな…」

「雰囲気きまずくなりますね…」

「るるん〜♪」

日菜はもはや聞いていたのかすらわからない。

「日菜さんも気遣いとかできるんですね」

「えっ私そんなに気遣いできない人だと思われてたの？」

「イイエチガイマス」

「めちやくちや棒読みだよ〜!」

と突っ込む日菜に

「あははは!」

歩道を歩く、日菜さんと紗夜さんと様々な事を話ながら、その時間はとても幸せで

ずっとその時間が続けばいいなと思った

だが…

「きゃああああ!」

「!?!」

突如誰かの叫び声がし、辺りを見回す…さっきした声は…上か?

「…!」

上を見上げる

「あ!あれ!誰か落ちてきてる!」

日菜が指を指し、上を見ている。今は夜、暗くてよく分からないが

…

「変身!」

俺は赤のクウガになり…

「あ!」

間一髪!女の子をお姫様抱っこという形で受け止める。

「多分ここ、6階くらいの高さがあるぞ…大丈夫で…」

落ちてきたのはなんと…

「リサさん!?!」「リサちゃん!?!」「今井さん!?!」

そう、リサさんだった。

「大丈夫か!?!リサさん!?!」

「気を失ってるみたい…」

ひとまずほっとする、が

「誰がこんな高さから落としやがった?」

上を見る、目を凝らす、誰か1人人物を捉えた。

「いた…!でも未確認だ!新手の!」

そこにいて、俺たちを見下していたのは、バツタの人だった。

「バツタ野郎…!」

「行くんですか？」

「ああ：リサを頼む、そして俺のバイクのあのボタンを押せ、黒服がきてくれる」

「わかりました、ご健闘を」

「死んじやダメだよ！」

「ああ、そんな簡単に死なねえよ、多分」

俺はそうカツコつけておいたのだが：

「これどうやって1番上まで行けばいいんだ？」

「はあ…」

「おねーちゃん？大丈夫？」

うーん、とりあえず：

「いつせーのっ…！」

俺は足に力を込めて飛んでみた

「うわあああ!？」

結構飛べたのだが：

「うわああ!!へぶっ！」

落ちた、2階くらいの高さから落ちた。

「つあゝ…いつてえ！」

立ち上がり周りを見る、あそこまで登れないか：

「…！」

あつた…：外階段だ。これなら…！俺は早速外階段から登り始めた

「ヒーローにしては微妙な絵面だねおねーちゃん…」

「ええ…：まったくだわ…」

という双子の会話が聞こえたが、聞こえないふりしておいた。タ
ンタンタンと走りながらおもう

(あれ？意外と疲れないぞ？)

そうして4階まで登った時だった。突如上から殴り飛ばされる
「!?」

当然俺は回避できずに登った階段を落ちていき手すりにぶつかる。
目が回る。場所はどこだ…？視界が戻って：

「ぐっ…！」

俺は何者かに踏まれている。相手は…

「勘弁してくれ…また未確認かよ…!」

バツタの未確認だった。相手はまるで楽しむかのように俺の腹を踏んではぐりぐりと押してくる。

「っ?!?ぐっ…!っ!」

脚を掴む

「!?」

脚を引っ張りこかしてやろうとするが…相手は器用に左脚を使い、俺の腕を蹴った。

「っ…!」

今度は足をふんづけてくる

「ぎい…!ぐあああ…!!」

右足に激痛が走る。

「ゴンバロボバ?クウガ」

相手が言う、そして俺の首を絞め、6階までひとつ飛び、

「!?」

流星にビツクリする。そして…

「ギベ!クウガ!」

俺を6階から落とした

「うおおあああ!?!」

視界がぐるぐる回る。

「ぐはっ!?!」

俺は仰向けに落ちた

「大丈夫ですか!?!」

「大丈夫!?!」

日菜と紗夜が駆け寄ってきた

「お前ら…まだいたのか…」

「ええ、今待っています。そんな事より…!」

慌てる紗夜を止め

「大丈夫だ…ほら、立てるだろ」

俺は立ち上がった。右足の感覚がおかしい、多分折れているのだろ
う

『俺が少しはカバーしてやるよ、変身解除の後は知らん』

「ああ…助かる」

もう1回、ここから飛ぼう、あの時みたいにもっと高く、もっと…

！

足に意識を集中させる。そして…

「うおおおおあああああああ！」

「!?」「あつ…!」

俺は一気に6階まで飛んだ。屋上に着地し、

「はあ…はあ…はあ…?」

腕を見る

「あの時と同じ…青だ…!」

「ゴングガダパ…!」

相手が明らかに違う反応をした。

「お前の弱点か…?」

相手が横のマンションに飛ぶ

「おいまて…!」

俺も追いかけるように飛ぶ。受身をとりながら着地

「はあ…こつわこれパルクールか?」

相手は確実に驚いていた。俺は相手に飛び掛り、殴る、蹴るをした。
だが…何かがおかしい、殴る蹴るのスピードは上がっている…

「パンチ力もキック力も弱くなってる…!?!」

いやいや、スピードは上がってる…ならそれだけ連撃すればいいん
だ。だがしかし、現実を待ってはくれない

相手に殴られ叩きつけられ蹴り飛ばされた。

「ぐお…!?!」

あと一歩で落ちる…前に何とか踏みとどまった。

相手が突っ込んでくる。俺はそれをジャンプして躲した

空中で綺麗に一回転しながら、相手の後ろに回る

「青のクウガはこんな使い方ができると…」

また1つ学習した。

「おりゃああああー！」

カウンターで後ろからキックをする、だが…

「あつれ？おかしいな…」

紋章はでてこない、

「…!？」

相手が俺を蹴り飛ばす。俺は倒れる、立ち上がる暇もなく次の一撃、まるでボールを蹴るような仕草で俺を蹴り飛ばす

「…あ？」

俺は、空中に身を投げ出していた。

そして…

俺は地面に背中から激突した

「げっほー！げほっ！はあ…！はあ…！」

圧迫され、一瞬呼吸が止まった。

「想くん！」「想さんしつかり！」「大丈夫!？」

リサさんの声がある、よかった。目が覚めていたのだろう。

俺は立ち上がる。

「はあ…はあ…大丈夫か？お前ら」

「今は自分の事を優先してください！」

「白くなってるね…」

腕を見ると、白くなっていた。俺は変身解除をする

「っ!？」

した途端、膝から崩れ落ちた。足が動かない。背中が痛い、吐きそうだ。体が様々な不調を訴えている

「大丈夫…！」

「そ…様！」

「黒…ん!？」

霞んだ視界に黒服さんが見える…

それを最後に俺の意識は沈んだ

「大丈夫かな…」

ここは弦巻家の病院の一室、死んだように眠る彼を見ながらリサがつぶやく、医者曰く

「足折れてる、疲労困憊、他にも色々、よく普通に生活できたね、彼」
「彼…そんなに苦勞していたんですね…」

紗夜も同じくつぶやく、いつもヘラヘラ笑ってはしゃいで、まさかこんなに疲れているとは思ひもしなかった

「大丈夫かな…想くん…」

隣に座っている日菜もそんな声を漏らす。そんな空気を打ち消すかのように

「アタシ飲み物買ってくるね！」

リサがそう言い立ち上がる

「今井さん…私も行きます」

「OK！日菜は？」

「私はここにいるよ、お水買ってきてくれる？」

「ええ、大丈夫よ」

「ありがと、おねーちゃん！」

リサと紗夜は部屋を出る

自然と二人きりの空間ができて上がる

「想くん…」

彼の寝顔を見つめながら日菜は言う

「私…想くんが好きだよ…だから早く目覚めてね」

あの優しさが忘れられない。あの時酷いことを言ったのに、彼は優しく「大丈夫」と言ってくれた。

「あたしって…チョロいのかな…」

扉が開く

「おっまたせ〜！」

「リサちゃん、おねーちゃん！」

「ほら日菜、水よ」

「ありがとー！」

水を受け取り、キャップを開け飲む

「もうこんな時間…今日は帰ろっか」

時刻はよる10時、

「そうね、日菜も帰るわよ」

「ええ〜…はい」

「良く考えれば制服のままだったね…あはは」

「そうですね、少しお腹も空きましたし…」

「あつ、想くん。また来るね！」

そんな会話をしながら病室を出る。

帰りは黒服さんが送ってくれた、各自家に帰り、母や父に心配されながらも部屋に戻る。

「疲れた〜…」

ベッドに入ったがあまり眠れなかった。

「眠たそうですね…氷川さん…」

Rosealiaの練習中、隣りに声をかけられる。

「リサ姉もすごい眠たそう！大丈夫？」

「紗夜、リサ、大丈夫かしら？」

「ええ…大丈夫ですよ」

「アタシもまだできるよ？」

はあ…と友希那がため息をつく。

「今日の練習はここまで、皆で帰りましょう。」

「昨日の夜…確かここら辺の近くでちよつとした騒ぎがあった…と聞きました。」

「そう、だから早く帰った方がいいし、2人とも少しは休みなさい」

荷物を直し始めながら会話をする

「りんりんも知ってたんだ、私も朝のニュースで見た！未確認また来たんじゃないか〜って言われてたよー！」

「あなた達…もしかしてそれに巻き込まれ掛けたんじゃ…」

「そんなわけないじゃ〜ん！」

何とか誤魔化す

「…まあいいわ、帰りましょう」

circleを出て話しながら帰る

「ん…？」

重い頭を振る。また懐かしい夢を見た

「そうだ…！俺は落ちて…！」

俺は飛び起きる。

「いって…!？」

右足に包帯が巻かれている。

「ここは…病院か…？」

間違いない。ここはあの病院だ。

「また運ばれたのか…俺は」

とりあえずどうするか、部屋にある時計を見る

「2日も寝てたのか…」

時刻は朝10時

「みんな学校に行ってる最中だな」

とりあえずナースコールを押す、しばらくすると看護婦さんが…

「なんで黒服さん…？」

少し焦った表情できた黒服さん（3人組が）俺の部屋に来たのだ。

「ご無事でしたか…よかったです」

黒服さんから渡されたお茶とおにぎりを食べる。

「腹減ってたんで助かりました。」

黒服さんによればここ2日は何も無かったらしい。

「寝起きでそんなに食べて大丈夫なんですか？」

「お気ずかいありがとうございます、でも大丈夫ですよ。」

「そうですか、」

その後、色々と話し合いをする。

「黒服さん…今退院て出来ます？学校に行こうかと」
「はい？」

「なんとなくです、嫌な予感がして」

「出来ますが…通院ということになりますよ？」

「それでいいんです。」

「…分かりました。今手続きをいたします」

黒服さんには無茶を言ってしまった。

俺は学校まで送ってもらい松葉杖をつきながら歩く。今は休み時間のように皆に色々言われた。その騒ぎを聞きつけてか

「大丈夫なんですか…！」

少し息切れしながら走ってきた紗夜さんがいた。俺は笑顔で答える。

「ええ、大丈夫ですよ？すぐ治りますから」

「そうなんですか？」

めっちゃ見てくる。過保護なおかんか

とりあえず4時間目から授業に参加した。

そんな分からなかった

く掃除時間く

俺は二階の廊下を山吹さんと担当している。

「大丈夫なの？想くん」

「山吹さん、大丈夫ですよ」

「そっか、でも無理しないでね！」

「あたしが手伝うわ！想！」

「自分の持ち場を頑張ってください。こころ？」

「もう終わったわよ？」

「まじか…」

「あら？やけに外が騒がしいわ！」

「…？」

窓を見る。

「…！アイツ…！」

窓から様々な人が見ている。紗夜さんや燐子さんも、他にも見たこ

とあるような人達がいた。

あのバツタ野郎が松原さんを狙って歩いてた。端へ追いつめられ腰を抜かし座る松原さん。

「花音ー！」

「花音さんー！」

「……こころと美咲が同時に叫ぶ、俺は体に無茶をさせ、動いた。

「多分死なねえ!!」

「そういうや否や二階の窓から飛び降りる。そんなに高くはないが足に負担をかけた

「っ！」

激痛が走る。だがその激痛だけじゃ終わらない。その次に来た痛みは肩からだった。

「ぐあああ!?!」

草がある場所に落下したが左から落ちた

「くそがアアー！」

「そう叫び痛みを紛らわせる。

「それ以上近づくな!バツタが!」

俺は立ち上がりそこら辺にある石ころを掴み投げ飛ばす。見事頭にヒットする。こつちへ向くバツタ野郎、

「想さん!?!」

美咲が叫んだ

「花音ー大丈夫!?!」

その途端、多分金髪の子が花音に近づき

「怖かったよおおく……千聖ちやああん……」

「よしよし……花音大丈夫よ。」

俺は変身しようとするが……ダメだ見てる人が多すぎる。

あまり目立ちたくはない。でも……どうすれば……てかなんでみんな拍手してんだ?

「よくやったー!カッコイイ……!」

とかなんとか、じゃなくて!

「走っても……すぐ掴まってENDだろうな……」

でもやるしかない…

「いや…まてよ…」

相手のジャンプを利用して屋上まで行くのはどうだ？

「男は度胸…！試してみつか！」

だからこそ演技が必要だ

「や、やめてくれ…！来るな！」

俺は尻もちをつき後ずさる。尻痛い。相手は近づいてきて容赦なく俺を掴み、

「うおお！」

一気に屋上へと連れ去った。屋上に飛ぶ途中、3階に居た紗夜さんと燐子さんと目が合う。俺は任せろとウイंकをしておいた。ん？燐子さん顔赤くない？紗夜さん呆れてない？

屋上へ連れ去られ投げ捨てられる。

「いってえ…！人使い荒いぞ！」

俺はそういい、屋上の床に寝転んだ状態でベルトを出す

「!!」

相手は何かを察知し俺を殺そうと首を絞めようとするが

「変身！」

俺は両足で腹を蹴り殴って変身した。

構えをとる。が…

「いきなり青か…!?!」

俺はいきなり青だったことに驚いていた。

そこから俺はとにかく攻撃を避けまくった。アマダムのおかげでなんの支障もなく動ける。変身解除したらヤバいが…あとこの青のクウガ、赤の時より速く動ける。

ただ1つ…問題があるとすれば…

「相変わらずパンチ力とキック力落ちてやがる…」

そう、ゆういつの武器であるパンチが使えない。何かあるのだろうか…なにか…!!

「!」

俺は屋上の扉を見る。紗夜と燐子が覗いていた。本来なら何して

んだとキレたいのだが…燐子が手に持っているほうきを武器にしようと考えた。よく小学生がやるやつ。そう考えがまとまり、青のクウガの身軽さで一気に彼女たちの横に到着、手を出し

「燐子さん、そのほうき、貸して」

「あ、はい…いいですよ…?」

「何する気ですか…?」

「いやちよつとほうきを武器にしようかなと」

「子供ですか?」

「辛辣じゃない?もしかしたら武器に変わったりするかもじゃん!」

「はあ…」

俺はほうきを手に取りロッド見たく回転させて構えた。すると

キュイン!と音を立ててほうきが青いロッドに変わったのだ。

「えっ!」

リン!と綺麗な鈴の音を立てロッドが伸びる

「武器に変わった…」

「氷川さん…私も驚いてます…」

目を開いて驚く2人に対し俺は

「すげええ!変わった!!おー!」

と興奮状態。あ、おつとまだ敵がいたな

ケホン!と咳払いをし

「よーし…やるぞお…!」

俺はもう一度構えた

「ふっ…!」

飛んできた相手に向けロッドを使い叩く。地面に伏せる敵めがけ頭にロッドを打ち上げる。転がっていく相手、俺は構えをとる。相手は起き上がると俺、ではなく紗夜さんたち2人めがけ飛んでいく。

「させるかっ!」

俺は青の力の跳躍力で飛び、紗夜さんたちの前に着地し相手の顔めがけロッドを振るった。2度頭に当たる

「痛そう…」

と後ろから聞こえた気がするが気にしない。

「そろそろ終わらせっぞ…」

でもどうやって終わらせるの？必殺技あるの？ロッド…腕に全神経注いで思い切り突き刺すとか？

「やってみるか…」

俺は腕に全神経を注いで飛ぶ。そのとんだ勢いで相手にロッドを突き刺した。確かな手応え、

「きた…い…」

俺は相手を押し後ろにさがらせる。相手がひび割れていく、やがてそのヒビはベルトまで響き…！

「クウガアア！」

爆発四散したのであった。

「ふう…ふう…」

我ながら無茶をした。とりあえずふらつきながらも紗夜たちのもとへ行き、ほうきを返す。青いロッドだった物は鱗子に渡すと、すぐに普通のほうきへ戻った。

「本当に武器になるなんて…」

紗夜さんは未だ信じられないと言う顔をしていた、そんな紗夜さんに

「なっ！人は試さなきゃわからない！つと…！」

「大丈夫ですか!?!」

ふらつき倒れかける。次の瞬間俺は変身解除された。

俺は倒れる

「大丈夫…ですか…！」

やべ…これちよつとヤバいかも…！

また俺は気絶した。

ちよつとヤバい俺の金曜日だった

言うてその日の夜に目覚めた。医者からは絶対安静と言われ病室でボケーツとしている。今日は土曜日か、そんなことを考えていると誰かがノックして入ってきた

「花音先輩と…誰？」

そこには花音先輩と金髪の誰？がいた

お見舞い

「花音先輩と…誰？」

俺の第一声はそれだった。失礼だっただろうか？

とりあえず椅子を2つ用意しそこに座らせる。

「こんにちは…想さん、身体…大丈夫？」

「ご心配ありがとうございます。花音先輩、大丈夫ですよ？日々治つてますから！」

「花音先輩じゃなくて花音でいいよ…？」

「じゃあ花音さんで、後横にいる方誰ですか？」

そう言うのと知らないの？…みたいな顔をされた。

「えつとね…想くん、この人は」

「大丈夫よ花音、自己紹介はできるわ」

花音さんの言葉を遮り話す

「貴方が八意想でいいのよね？」

いきなり呼び捨てかよ…

「そうですが？」

なんか話し方がムカつくので俺も素っ気ない態度で話す

「私の名前は白鷺千聖よ、よろしく」

「よろしくお願いします」

「…貴方…本当に知らないの？私の事」

「知らないも何もこれが初対面でしょうに」

有名人なのか？この人は？とりあえずGoogle先生に聞いてみよう。

「白鷺千聖…天才子役と呼ばれている。へー」

「へーって…」

「いやだって興味ないですし」

千聖さんのスマホが鳴る

「少し席を開けるわ」

そういうや否や部屋を出た

「花音さん…なんなのあの人の？」

なんか態度が腹立つ。

「えつとね…千聖ちゃんは普段はあんな人じゃないんだよ…」

そこから始まる千聖さん語り。つまるところ自分が天才子役の白鷺千聖だと分かればなんか周りの人が関わらなくなると、

「ふーん…」

扉が開く、

「時間もあまり無いから本題を話すわね」

「ああ、はい。」

「あの時、花音を助けてくれてありがとう」

「ええ、どういたしまして」

「それだけよ」

「あつ、そうなんですわね？」

千聖さんから渡されたカゴ、中身はフルーツだった。

「美味そう…ありがとうございます千聖さん」

「本当に貴方…私のこと知らないの？」

「知らないですよ、まさか自分が天才子役だから関わらないとでも？」

微かに表情が変わる。やはり、気にしていたのだろう

「天才子役だから、人気な人だからなんですかね？1人の高校生には変わりないんですから」

ここまで話して俺はわかったことがある。この人は何か沢山のものを抱え込んでいる。仮面を被って生活しているな。ある特定の人物の前では素で話せるタイプか

「そうなのね…」

「はい？」

彼女は少し笑顔になりながら

「貴方は私を役者として見ていないのね、1人の高校生としてみてくれるのね、」

「ファンにでもなりましょうか？握手とサインお願いします。Twitterで自慢してやる」

悪い笑みを浮かべながらそう言うと、笑いが起こる

「仲良くなれて…よかったね…」

「花音？」

「最初…なんとなくだけど…2人とも警戒した感じだったから…」

「あつはつは、最初はなんだコイツって思ってたか…らあ!？」

千聖さんが笑みを浮かべこちらを見てくる。が空気が冷たすぎる。これが圧というものか、恐ろしっ!

「千聖ちゃん…怖いよ？」

「花音…ごめんなさいね」

千聖さんの空気が元に戻った。助かった…てか…千聖さん花音さんには弱いな、アメとムチを上手く使い分けてる…流石役者(?)

「こんにちは〜!」

「こら…日菜…!」

ノックもせずに入ってくる1人、その1人を追いかけるもう1人、

「日菜さんと紗夜さんですか」

「あら、日菜ちゃん」

「千聖ちゃん!なんでここに?」

「花音に着いてきただけよ」

「こんにちは、白鷺さん」

「紗夜ちゃんもこんにちは」

とりあえずまた2つ椅子を出す、お見舞いの人が4人に増えた…

「目覚めてたんだね!おねーちゃんから聞いたよ!片足折れてるのに闘ったって!あの人は無茶しすぎってね」

「日菜っ…!?!」

紗夜さんの顔が一気に赤くなる。日菜はニヤニヤとしている

「紗夜さん?顔赤いですよ?」

「気にしないでください!」

「えっ…なんで怒られたの?俺は」

「想くん…もしかして鈍感かしら?」

「?」

「…」

「千聖ちゃん…？」

千聖さんは頭を抱えている。うーんわかんないや、その後、様々なことを話したのである。

「なんかどつと疲れたな…」

そうして土曜日をすごし

日曜日は黒服さんが来た

「明日から登校できますよ」

「折れた足ももう治るらしいです、まだ杖はいりますけど…」

「そうなんですか」

（回復速度はやくない？）と感じた黒服

アマダム有能☆

と思つた八意想

とりあえず家に帰りたいというワガママに答えてくれて俺はすこし久々に家に帰つてこれた。

「案外散らかつてないもんなんだな」

意外と綺麗に保たれていた自分の部屋に感心する。

明日からは学校だ！そんな思いで日曜日をすごした。

『ねーねー！想くん！パスパレの護衛してよー！』

「はい？」

月曜日の昼休み、屋上で過ごしてる途中にかかってきた日菜さんからの電話、めんどくさいと思いつつ電話に出ると第一声がそれだった。

「パスパレってなんですか？護衛？なんで？」

日菜さん曰く、次の土日に少し離れた遊園地のPV撮影にパスパレが選ばれたと、でも最近未確認がいるから護衛という名の人員が欲しいと、日菜さんがそこでいい人を知っていると、それが俺

「もう行かせる気満々じゃないですか？」

「あ、バレた？」

「はあ…日菜さんってアイドルだったんだね」

「知らなかった？」

「いえ、全然知りませんでした」

「それで護衛のお話！どうかな？」

土日は特に何も無い。日菜さんは確実に行かせる気満々、あれ？詰んだ？

「分かりました…」

「やったー！早速今日事務所に伝えとくね！」

プチッ…

「返答待たずしてか…」

流石は日菜さん、と思いつつ、

「あ、そうだ。」

俺は思い出した。そう部活だ。

「なんか決めないとなあ〜」

俺は紙を取り出し唸る

「弓道部…天文部…剣道、いっぱいあるな」

「何してるんですか？」

突然横から誰か覗いてきた

「おわっ!?!なんだ紗夜さんかびつくりした〜:」

「そこまでビックリしなくてもいいじゃないですか」

「すいません:」

「で? 貴方は何を?」

「部活に入ろうと思ひましてね、弓道部とか」

「体験に来ますか? 私弓道部ですよ、今日はちようど活動しますので」

「まじっすか、じゃあ行ってみます!」

「分かりました。そして八意さん、」

「:??」

「ボツチなんですか?」

「グッ:!!」

いやいやそもそも女子高に男子1人ぶち込まれて女子の友達作るだあ? そんなどこぞのハーレム展開になってたまるか!

「いづらいんですよね教室に、」

「まあ仕方ないですよ、周りに女子しかいないんですから」

「よくお分かりで」

「もう昼休みが終わりますね」

「あっホントだ。」

「放課後、ここに来てください」

「分かりました〜」

そう言い、俺は紗夜さんと別れた。

〜放課後〜

「確か:~:ここか、」

俺は紗夜さんから貰った紙の場所へ向かった。本格的な施設だなあ:~:と思いつつ、

部屋をノックし、開ける。そして

「きゃあああ! 変態!!」

「うおおおおあああすいませんでしたあ!?!」

ものが飛んできた。とりあえず扉を閉める。

「はい…すみませんでした…」

俺は今、弓道部の部室で正座をさせられていた。目の前にいるのはどす黒い怒りを出している紗夜さん。正直いって、詰んでいる。

俺は土下座をしながら謝った。

〜10分後〜

「もういいですから、とりあえず見学してって下さい」

「はい…」

とりあえず解放された。割とマジで今回の件はごめんなさいと思っている。今度なにか差し入れしておこう、夏だからスポーツ飲料か？

「おお〜…」

そんなことを考えながら見学していると、そんな声が聞こえそつちを見る

見ると紗夜さんが弓を持ち矢を引き構えていた。その矢を放つ、そして…

「すげえ…」

見事真ん中の赤い点に刺さった。命中率1000%…

「八意さんもやってみますか？」

「えっいいんすか？ぜひぜひ」

持たせてもらう、意外と重い。

「ここをこうして…こうです。」

紗夜さんが構えから撃つ時まで教えてくれた。

「1回やってみますね」

なんか周りからめちやくちや視線を感じる。弓を構え、引き絞る。
「!?」

その時、俺の目に何か映った。

緑のクウガだ。弓を持っている…？そこで終わる。

「なんだ今の…？」

「八意さん…？」

「なんでもないですよー」

とりあえず弓を引き絞り、撃つ

「えっ?」

「あれ?」

俺の放った矢は、見事に赤い点に刺さっていた。

「八意さん…もしかして経験者ですか?」

「いえいえ紗夜さん、全くもって未経験者ですよ?」

「そう…なんですか?もしかしたら記憶を無くす前の貴方が弓道をやっていたかも知れませんね」

「そうなのかな…」応気には止めておきます」

そして部活は終わり、俺は帰りに弓道についての本を1冊買った。家に帰り読む。

精神統一やらなんやら書いてあった。あとはそんなに覚えてない。難しかったからね仕方ないね

適当にコンビニ弁当を買いに行き、

「あっ」

店員はリサさんだった。突然気まづくなる。

「またコンビニ弁当?」

「料理出来ないんですよ…あはは」

「また作ってあげよーか?」

「おっ…リサさんの料理好きですよ?」

「じゃああともう少しだから待っててくれる?」

「なんかデジャヴ感じますね」

「そうだね?」

2人してくすくすと笑う。

「じゃあ待っておきます」

〜30分後〜

「ゴメーン!遅くなっちゃった!」

「大丈夫ですよ!」

そう言いながら2人して俺の家に向かうために歩く。あまり口数は多くない

家に着く、

「あれ?想くんって弓道してるの?」

「いや、少し興味があつてですね」

「そうなんだ」

リサさんはテキパキと料理を進める。その間はほぼ無言に近かった。

並べた料理を二人で食べて、俺が洗い物をしてる時だった。ソファに座ったリサさんが言う

「想くん…あの時の…返事…聞きたいんだけど…いい?」

「ちよつと待つてくださいね」

洗い物を終え、リサさんの隣に座る。

「リサさん…俺は貴方と…」

「うん…?」

俺は勇気を振り絞る

『ifルートへの分岐点』

「お付き合いできません」

リサさんの顔が悲しみに染まる、それに胸が痛くなる

「そつか…そうだよね…」

嫌われちゃったかな…アタシ…

泣きたくなる。多分半泣きにはなってるだろう

「でも、付き合えなくともリサさん、俺と親友になつてくれますか」

「あ…」

リサさんが泣きそうになっている。きっと今、嫌われたと思つているのだろう。

「リサさんを嫌いになんかなりませんかよ?むしろ好きですよ、料理だって美味しいし、面倒見がいいし、美人だし、でも俺には似合わない。もしかしたら戦つて死ぬかもしれない。リサさんに毎日そんな心配かけたくありませんから、」

「想くん…」

そこまで、アタシのことを考えてくれてたんだ…そう思うと少し嬉しくなる。

「アタシ…帰るね…」

彼の前で泣く訳にはいかない

「リサさん…目瞑って」

「…？」

帰ろうと立ち上がった時に彼にそう言われる。とりあえず目を瞑る。前に彼が来て、

「あ…」

「ちよつと…恥ずかしいですね…」

彼に抱かれていた。優しく頭を撫でられる。そこでアタシの何か
が崩壊した。

「想くん…！想くんっ…！」

「すいません…リサさん、せつかくの告白を断ってしまつて…」

「ばかあ…！わあああん！」

アタシが泣き止むまで…ずっとずっと撫で続けてくれた

「落ちつきました？」

「うん…」

「ティツシユいります？鼻水出てますよ？」

「あつ：／／恥ずかしいね、ありがとう」

彼の制服はアタシの涙で少し濡れていた。

「制服汚しちゃつた…！ごめんね！」

「大丈夫ですよこれくらい、あと告白、ごめんなさい、せつかくしてく
れたのに」

「もうっ！あ！そうだアタシと親友になるんだよね！」

「…？」

「ちよつと屈んで！ほら！」

「別にいいけど…って!？」

俺はリサさんに頬にキスをされた。

「ふふつ、アタシのファーストキス、想くんにあげちゃつた。」

「まつたく…」

「っ…！／／／」

俺もお返しで頬にキスをしておいた。

「自分を大切にしないと…」

「そつそれ！想くんも言えないじゃん！」

どうしたりサさん…やけに早口だ…

「私帰るね！」

「分かりました。夜も遅いですし送ります」

リサさんをトライチエイサーに乗せて夜のドライブデー…いやリサさん宅まで送り届けたのであった

「今日と明日はよろしくお願いします。お名前は…?」

「八意思です。こちらこそ分からないことだらけですがよろしく願いします」

「こちらこそ」

3人のスタッフさんに頭を下げられ少し恥ずかしくなる。俺は今、パスパレの事務所にいる。前に日菜さんに護衛の件で電話された。最初は断ろうとしたが未確認の件、そしてもしかしたら給料が来る、そしてもうスタッフさんに話していることを聞かされ断れなかった。第1未確認は俺がまいた種でもある。もし彼女達が未確認に殺されようならば目覚めが悪い。

「こちらにパステルパレット様がいらっしやいます。中に入って自己紹介を」

そう言つて1つの部屋に案内される。扉を開ける。5人組が座つていた。

「え?」「あれ?」

日菜さんはもう知っていた。だが…

「千聖さん…アイドルしてたんですか…?」

その5人組の中に天才子役こと白鷺千聖がいることにはさすがに驚いてしまった

「なになに!2人とも知り合い!?!」

とはしやぐ日菜さんを落ち着かせとりあえず自己紹介「八意思です、よろしくお願いします」

そして5人組の中で1番初めに自己紹介したのは…

「まん丸お山に彩りを!丸山彩です!」

?

「え…?はい?まん丸お山さん?」

「彩ちゃん?」

「ひいつ!?す、すいません!丸山彩です!パスパレのボーカルですう!」

千聖さんに圧を掛けられ縮まる彩さん。どうやら今のはそーゆー挨拶だったらしい(?)

「白鷺千聖です。パスパレのベースよ」

はえ〜ベースなのか

「氷川日菜!パスパレのギターだよ!」

ギターか…

「大和麻弥です。パスパレのドラムです」

ドラム…

「ブシドー!若宮イヴです!パスパレのキーボードです!」

ブシドー…?

ブシ〇ード?ん?

「えー…うん、よろしく」

ふむふむ…この人達本当にアイドル?そんな疑問が渦巻き、これから先が少し思いやられた

バスが出るまであと20分あるらしいのでとりあえず雑談、彼女達の過去を聞いて

「うん…ズビツいい話だ…」

「うわー…大号泣してる…」

だっていい話だもんね仕方ないね。

涙を吹き終わり、思い出した。カバンから1冊のノートとペンを取り出す。アイドルならやっぱ…

「サインください」

やっぱサイン欲しいよね?ね?

皆ほかんとしてから、1人ずつ書いてもらった。

「家の壁にでも飾つとこ…」

そう言いカバンにしまう。その時丁度

「準備が出来ました。皆様こちらへ」

外に出ると大きなバスがひとつあった。

「八意さんも…」

「大丈夫ですよ、バイクあるんで」

「え？免許は？」

「ちゃんとあります」

「…分かりました」

そう言いながら財布から免許を出す。実は前に、黒服さんに免許を作ってもらった。これで安心！

みんなはバスに乗る。俺もその後ろでトライチエイサーに跨りエンジン音をふかす。

「そう言えば…」

黒服さんがメンテナンスした時にアップデートしたとかなんとか

…

「まあいいか」

バスが発した。俺もそれについて行く

波乱万丈の2日間が幕を開けた

高速道路を約1時間、途中サービスエリアに行きまた30分、景色が山から海へ変わる。1面綺麗な青だった。

「綺麗だな…」

スタッフさんから海と遊園地がすごい町と聞いていたことを思い出す。

高速を降りてしばらくすると、ホテルに着いた。

バイクを止め、みんなと合流。

「流石におしりが痛い…」

「大丈夫ですか？」

「ちよつとおしりが…あはは」

周りに小さな笑いがおこる。俺は懐かしおりのなやつを取りだし見る。自由時間が明日少しあるな、

「明日の自由時間海見に行きたい！」

「私もさんせー！」

「2人とも…！」

「私も良いと思うツスよ」

「わたしもです！」

とまあ…満喫する気満々だな…仕事忘れなきやいいが…さすがに心配しすぎか…？まあいいか

その間にちやつちやつとフロントでの受付を終えたスタッフさんがこちらに来る。

「皆さんの部屋の鍵渡しておきますね、あと八意さん、スタッフの印付けといてください」

そう言つて渡されたのは肩からかけるやつだ。

「分かりましたー」

部屋割りは…ん？

パスパレみんな一緒、スタッフさんも一部屋、なのに俺だけぼっちなんだが…

「あの…これ…？」

よくよく考えろ…女の人しかいないじゃんか…まったくもって忘れてた。

「どうかしましたか？」

「いえいえ！なんでもありません…！」

「…？そうですか」

荷物を部屋に置きに行き、またみんなでフロントに集合、途中何回か声をかけられているあたりそれなりに人気者なんだな…俺は一応スタッフ兼ボディーガードと化していた。

次は遊園地に向かう。決して遊びに行く訳では無い。これは仕事だ。

その途中、黒服から通信が入る。

「八意様、聴こえますか？」

「うお!!ビックリした…！」

「聴こえてるんですね」

(完璧無視だな、うん)

「どうしたんですか？黒服さん」

「実は現在地付近に未確認の目撃情報が…！」

「ええ!？」

危うく事故りかける。

「大丈夫でしょうか…？」

「だ、大丈夫ですよ？続けてください」

「分かりました…！」

「空飛ぶの？え？」

また厄介な敵が来たもんだ。てか最新機能まさかの無線通信とGPS？・ストーカーセット？ などとおもっている

「…ここか…！」

目的の場所に着いた。黒服さんとの無線通信を切る、今日は土曜日、めちやくちや人がいる。子供から大人、チャラそうなやつ。十人十色だ。しかもこっちはアイドルと来たもんだ。

ここからは凄い単純

早速目立つ

正体バレる

はいオワタ

「ぜえ…はあ…なんとか追い払ってやった…しんどすぎる暑い…」

「なんか…お疲れ様です。護衛忙しいですね…」

「護衛ってこんなに辛かったですかね？もう死ぬ…」

「お疲れ様、災難だったわね、でもなんとかしてくれてありがとうございます」

「千聖さん…」

千聖さんが笑顔で立っていた。その手にはスポーツドリンクがある。

「これ飲んで元気だしてね、私は行くわ」

「アザーっす」

投げられたペットボトルを受け取り早速飲む

「いやあく…癒されるわあく…」

「お待ちせしました！」

奥の着替え室から5人出てくる。アイドルだからあれだが…

「フリフリだな…」

「初めて見た感想がそれ!？」

「…ってか千聖さん…アイドル…」

笑いをこらえながら発言する。千聖さんからの気配が変わった。

その場の空気が重くなる

「すみません!？」

「…次はないわよ?…」

空気が元に戻る。今絶対人間の闇をみた。

「そろそろ現場にお願いします」

「分かりました！みんな！行こう！」

「おーっ！」

いい気合いの入れ方だ。とかなんとか、
そして撮影が始まる。

「にしても…遊園地のスタッフさん少ないか？」

という疑問が浮かんだ。

「すみません、少しトイレに行きます」

と言いその場を離れる。俺は走りながら周りを見る。

(客もさつきより少ない…)

今はショーがあるらしい。俺はスタッフ専用の部屋の近くを通り
過ぎかけて…その光景を見て足を止める。

「え…？」

そこには…3人のスタッフさんが…

死んでいた。

「は…う…おい！おきろ大丈夫か!？」

俺はすぐさま近寄り肩を揺らす。3人の息と脈を確認する

「ダメだ…死んでる」

死体を目の前にして俺は吐き気がした。初めて見た死体は酷い死
に顔をしていた。口を開き目を開きという顔だ

せめてこの顔が人目につかないようにと目を閉じさせまるで穏や
かに寝てる顔にする。

(なんだ…これ)

死人の首を見ると何かが刺さったような後があった。

(何かが…刺さってる…?)

狙撃なのか…なら…

(今外で撮影してる彼女達が危ない!!)

俺はまた走り出す。今回は逆方向に

そしてなんとかたどり着く

「はあ…はあ…！」

同時に 空から降ってきた、ひとつの針

「あ…」

音楽が止まる。皆静かになる。当たり前だ。

撮影途中の会場に人が1人倒れていた。カメラの近くにいたスタッフさんが撃たれた

「きゃあああ！」

「みんな！早く裏側に！って八意さん!？」

千聖さんが咄嗟に冷静に判断、俺はまた違うところに走り出していた

「彼はそつとしといてあげて！」

「日菜ちゃん!？」

「早く逃げよ！」

「あとでちゃんと理由聞くわよ！」

俺は走りながらベルトを出し

「変身！」

赤のクウガになる。変身の瞬間は見られてなかったらしい。だが…俺の走った所に針が飛んでくる。俺はそれを感覚で避けていた。

(かなり遠距離だ…いや…さつきとは音が違う)

俺は周りを見回す。そして…ジェットコースターのレールにいた未確認を捕える。

(アイツか…！)

「超変身！」

青のクウガへ変わる。底上げされたジャンプ力とスピードを使い一気にジェットコースターのレールに飛び乗る。まだ少し距離はあるが一瞬で詰められるが…

(武器が…武器が周りにない…！)

青のクウガはジャンプ力とスピードは赤のクウガより強い、だがしかしパンチ力とキック力が落ちているのだ。その代わり長きものを使いそれを武器に変え闘う。だがその長きものが周りにない

相手の姿をくつきり捉える

(ハチ：うならあの針には毒か：！)

相手は蜂のような見た目をしていた。こちらに目をやると

「ジャゴボソゴグ、ゴラゲグクウガザバ」と言う

「どうゆう事だ：？」

相手は嘲笑し

「八意想：お前がクウガザバ」

「は？」

今こいつはなんと言った：？微妙だが日本語を喋ったのか？俺は混乱する。その隙をつき、相手は空に飛ぶ。俺は飛び相手の足をつかみ引きずり下ろそうとするが振り落とされた。ギリレールに落ちる

「いつてえ…」

相手を見るがない。

ブーン：

今、右から音がして振り返る。誰もいない

ブーン：

今度は左：？だが誰もいない。錯乱か？

ブーン：

前か!?だがない。もつと：ちゃんと聴け：耳を研ぎ澄ませ：！

ブーン：

確かに左から聞こえた羽音に対応するが蹴り飛ばされる

「うわああー！」

なんとか下にあるレールにしがみつく、そして腕が視界に入り、

緑になっていた

「緑になった：!？」

その姿に驚愕する。が次の瞬間、様々な情報が耳に入る。近くなのか遠いのか分からないたくさんの車の音。誰かの叫び声、大人の声、子供の声、携帯の着信音、遊園地に流れるBGM、海のさざ波

「っ！ああー！」

うるさい、全てがうるさい。なんとか登りきり耳を塞ぐが止まらない。呻く、もがく、そして俺は落ちた。

地面に背中から落ち激痛が走る。さつき見たくうるさい音は聞こえない、揺れる視界に腕を捉える。

(白色…?)

ぐらんと視界が揺れる。耳鳴りが酷い。頭も痛い。三半規管が揺れる。誰かが走って来る

「くん!？」

「してー！」

誰かと誰かの声がある。耳鳴りが酷くて殆どが聞こえない。俺は必死の力で変身解除をする。途端に来る酷い吐き気が追加され俺はその場で吐く。吐瀉物が散らばる。

体が冷たい、冷や汗が止まらない

(本格的に…まずいかもな…いっつも…気失ってる気がするぞ…俺…)

俺は意識を手放した

「彼が…未確認第4号…?」

千聖が言う。

「その呼び方やめて、クウガだよー！」

日菜が頬をふくらませながら言う。

話は全て聞いた。パスパレのみんなで、

「ジブン…気づかなかったす」

麻弥が言う

なんとなく、空気が重い

「私もです…」

イヴが言う。

「でも八意くんは八意くんだよ…！クウガだったとしても私は変わらないよー！」

彩が立ち上がりながら口にする。それに皆ほかんとして

「ふふっ…そうね、彩ちゃんの言う通りだね、」

「ですね…」

「はい！分かりました！」

みんな笑顔になる。その時外から音がした、

「!?」

誰かが落ちる音だ。

「まさか…私見てくる！」

「危ないでしょ！待ちなさい！」

日菜が走り出す。千聖はそれを追いかける。

「あー！」

日菜が指をさしながら走る。それを追いかけて視界に入る。彼が倒れて呻いていた。

「想くん！大丈夫!?!」

「日菜ちゃん…」

悠長にしてる暇はない。自分も彼に近寄り声をかける

「しっかりして！」

彼は白い姿から人に戻ると盛大に戻した。私達の方に見せないように戻したのは彼なりの配慮なのだろう。できる限り吐瀉物も見ないようにして彼を2人で運び出したのであった。

『ほらー！こっちこっち！』

ん…？なんだここ…俺は…

『何ぼーつとしてるの？』

『ほらー！笑顔笑顔！』

『私が作るご飯が一番なんて…大袈裟だなあ…でもありがと！』

懐かしい…

『あ…』

やっぱり顔は見えない。それがもどかしい

シーンが変わる

〜とある夜道〜

『お前の癖に彼女なんかいたのかあ〜』

なんでお前がいやがる…母を殺し、俺は遠くに逃げたはずだった。

泥酔したクソ親父が酒瓶片手に近づく

やめろ…近づくな…触るな…！

『生意気だな！ああ!？』

『やめてよー！』

『女の癖に生意気だな！』

酒瓶を振り下ろす。俺はそれを頭で受ける。血が流れる。

俺は彼女の腕を掴み何とか逃げれた。

だが次の日…殺されていた。彼女は玄関先で

服は破け、無茶苦茶にされ

首を絞められて…

その日、俺が住むアパートに来て料理を作ってくれる約束をした。

玄関を開けた時にストーカーしうしろから…

きつと屈辱だっただろう

後にそれがクソ親父を含むグループだったと警察から聞いた。そ

の後、クソ親父グループは捕まった。

『その罪を忘れるなよっ!』

法廷で笑いながら叫んだクソ親父のその言葉

『お前みたいな奴と付き合ったからだよ! あー可哀想だよな! あはははっ! 俺から逃げられると思いやがって…でも彼女は気持ちよかつたぜ!』

俺はその時、血管がちぎれるかと思うほどの怒りを感じた。それと同時に、俺は罪を背負った。

『俺のせいで彼女は死んでしまった』

決して消せない罪、

「…ん」

俺は目を覚ます。

「あ! 起きた! みんなー!」

「日菜…か?」

「そーだよ!」

「そうか…俺は…一体…」

「凄いうなされてたけど…大丈夫?」

記憶がまたひとつ蘇る。

消せない罪とクソ親父への決して消えることの無い憎悪

「ああ…大丈夫だ」

奥から4人慌てながら来る

「大丈夫?」とか沢山の言葉を受ける。

「俺は大丈夫だから…」

「あれ? 喋り方少し違う?」

「日菜? 俺はいつも通りだが…」

「んー? まーいっか!」

「ここは…?」

「えーっとホテルの私たちの部屋!」

ん…?

辺りを見回す、 あらパジャマ姿の女子高生に囲まれとるやん…

「仕方なくよ」

「本当にありがとうございませう！」

「ええ!? 八意くん!？」

俺は寝転んだ体制から一瞬で土下座に変わる。床に頭をぶつける。痛てえ…

彩さんがあたふたする。

「えーっと…凄いいましたけど大丈夫ですか？」

「麻弥…だったか、大丈夫だ。」

「呼び捨ても悪くないですね…フへへ…」

照れ臭そうに笑う麻弥、日菜の視線が鋭い気がする。そして…

「日菜ちゃんタツクルー！」

「ぶべらっ!？」

背中から盛大にタツクルを受けた。

「日菜さん!？」

「体術ですか!？」

「イヴちゃん…」

「怪我人に何してるの…」

うつ伏せに倒れる俺から音が鳴る

『くう〜…』

「あ…」

(お腹の音…可愛い)

「晩御飯って…まだ間に合います?」

ここはバイキング形式のはずだ。だが…

「残念だけど…もう五分前に終わってるわ」

千聖が言う。日菜が笑顔で

「とっっても美味しかったよ!」

という

「日菜さん…」 「日菜ちゃん…」

麻弥と彩がはあ…となりながら言う

俺はただ1人、部屋の明かりを見上げて

「泣きそう…」

と呟いたのだった。

結局晩飯を近くにあるコンビニで買い、部屋に戻ろうとするのだが

…

「なんで君たち当たり前のように入ってきているわけ？」

「お邪魔します…」

「おじやましまーす！」

「お、お邪魔します！」

「ソウさん！こんばんは！」

「ごめんなさいね…八意くん、止めたのだけど」

「まあ…別にいいですよ。適当にくつろいでてください、俺は今から晩飯食べるんで」

俺はそう言いながら唐揚げ弁当を出す。

「レンジは…ないけどまいつか」

俺は緑茶のペットボトルを取りだし

「いただきまーす」

割り箸を割り食べ始める。

「じーっ…」

(無視無視…)

日菜からの猛烈な視線。狙いは唐揚げだろう

「じーっ…」

「ああもう…唐揚げだろ！」

俺は割り箸で唐揚げをつかみ日菜の口に入れる

「むぐっ!？」

途端に顔を赤くする日菜

みんなも少しばかり顔を赤くしている

(大胆…)

「どうしたみんな？」

(関節キス…になるよね?)

千聖からの覇気が上がる、部屋の空気が重くなり皆黙る

「日菜ちゃんは…アイドルなのよ？」

「ええ…!?俺なんかしました!？」

(まさかの無自覚)

「…まあいいわ…それより」

(…いいんだ…)

千聖は真面目に

「貴方がクウガなのは日菜から聞いたわ」

「日菜…話しちゃったのか…」

「てへっ」

「私達に敵対したりしないのかしら？」

「俺は敵対したりはしないと思うけど…」

正直アマダムはあんな感じだが中々信用出来ない。暴走したりとか…ヒーロー系ならよくあるじゃん？

「…そう、今は大丈夫なのね」

「今は…ですけどね」

「千聖ちゃん…千聖ちゃん…」

「どうしたの？彩ちゃ…」

千聖に釣られ俺も横を見ると…

寝息を立てて気持ちよさそうにねるイヴ、日菜、麻弥がいた。いやそこ俺の布団だけど…？

起こすのも申し訳ないのでそのままにしておく。

何故か千聖も彩もそこで寝始めようとしている。自分達の布団をかけて

「…。」

俺はツツコむ気力も無く眠れぬ夜を過ごす。

く午前3時く

「ふわあ…あ？」

俺は自分のスマホにLimeが来ていることに気づき見ると黒服からだった。

『海には近づかないでください。特に午後は』

と来ていた。

『え？なんで？』

と返すと返事は直ぐに帰ってきた。黒服さんちやんと寝てる？

『あの未確認の殺人場所と時間には規則性がありました。』

『そうなんですか？アイツら知能あるんですね』

そう言えば…俺の正体を知っていた…だから一応気にかけておくことにする

『分かりました。一応気をつけます。』

『あと、今そちらに送り物を届けに行ってます。ボディガードにはピッタリですよ』

いやいや、なんで場所知ってる訳…？

俺は考えるのをやめた。

〜朝7時〜

アラームが鳴り響く

「ん〜…」

「ふあ〜…」

などとそれぞれ可愛らしい欠伸などを立てて…

「ええ!？」

「ジブンもいつのまに!？」

「想くんのエッチ!」

「おいまてい日菜あ!」

最後は確実に風評被害じゃねえか!これで警察行きとか死にたくなるわ!

起きた千聖に説明してもらい、なんとか被害を避ける。

後からスタツフさんが騒がしい部屋を見に来てまた一悶着あったのは別のお話

「ああ…うめえ…」

「あはは、大袈裟だよ想くん」

「うるせえ日菜、俺は食ってなかったんだ」

俺は今、バイクングをもうそれはそれは堪能していた。
途中眠気が来るがコーヒーを飲み誤魔化す。

「うへえ…千聖ちゃん…八意くんめちやくちや食べるね…」
「そうね…」

周りから少し引かれた気がするが…大丈夫だろ！うん！

「八意さん…朝こんなものが届いてました」

「はんれふか？」

え…？みたいな顔をするスタッフさんから小さな箱が渡される。
手紙も渡されたのでそれを読むと

八意様へ

これは部屋でお開けください。

黒服より

と書いてあった。

「そういえば…」

Lim eで話してた気がする。

「よし…ごちそうさん。俺は部屋戻ってます、出発時間になったら呼んでください」

「どこいくのー？」

「部屋だ部屋」

「ふーん」

「着いてくんなよ…？」

「うんうん！」

俺は部屋に戻り早速箱を開けると…

「んだこれ…」

6 発装填式のリボルバーとホルスターが中にあった。

しかも拳銃には丁寧なマークが掘り込んである。なんか厨二病っ
ぽい…

「うわあ…ん？」

また手紙だ。

想へ！

パスパレのボディーガード頑張つてね！

こころより！

それと

八意様へ

このマークはこころ様がお選びになられたものです。さすがに拳銃は見せてませんが

ボディーガードにはいいかと

黒服

そんなこと言われちゃあ…ねえ…

「しゃーねー…とりあえずつけとくか…使うタイミングないかもだが」

俺は微笑んだのであった

「ホルスターも本格的だな…」

ズボンを履いて、その腰部部分にホルスターをつけ中に拳銃を入れる。なんとなく腰にかけるポーチみたいに見える。

「カモフラージュをバッチリか…さすが黒服だ」

俺は少し笑いながら…それと同時に部屋の扉が元気よく開く

「おつはよー！もう出発だよ！」

「おいこら日菜、ノックしなさいノックを」

「えーいいじゃん！」

「俺が良くない」

ぶーすか言う日菜を連れロビーまで行く。みんなでチェックアウトしお札を言い出ていく。バスに乗り目的地へ、俺はいつも通りバイクに跨りバスの後を追う。

遊園地は昨日の事を隠して営業していた。まるで何も無かったように、

「どうなってやがる…！」

あの3人の犠牲は一体なんだったのか。俺は少し腹が立った。

そうやってモヤモヤしたまま撮影を開始、何事も無く早く終わった。そうして遊園地を出ていく

「ねーねー想くん…？」

日菜が裾をつまんで話しかけてくる

「どうした日菜」

「さっきからずっと…怖いよ？」

「…！」

「どうしたの？」

「いや…少しな、俺は大丈夫だ。ありがとう、日菜」

俺はそう言いながら日菜の頭を撫でる

「…／／／」

「嫌だったり…する？」

「いや全然！そんなことないよ！」

「そうか？ならいいんだが」

「日菜ちゃん！バス乗るよ！」

「はーい！じゃまた後で！」

「へいよ」

バス目掛け走り去っていく日菜、俺もバイクを動かす。

「自由時間だ〜！」

と海めがけて走り出す彩の腕を掴む

「ちよいまてい、色々あるんだから勝手に行くな」

「なんかお母さんみたいですね」

「麻弥：なんか言ったか？」

「なんでもないです」

「そうか」

「私は砂でお城を作ってきます！」

「ちよいまてい、イヴ今の話聞いてた？」

なんかもう自由人過ぎない？この人達、ただ1人、真面目な千聖を除いてだが

「海に入るのは足だけな」

「ええー！」

「またちゃんとした休みの日に行け」

「あとあまり遠くに行くな、はぐれたらやばいから」

「はーい！」

「…。」

ここは保育園か何かか？

「わーい！」

「ぶべっ!？」

早速走り始める4人…1人転けたな麻弥転けたな

「ほら言わんこっちゃんない。顔かせ」

「え？」

俺はカバンの中からタオルを取りだし顔を拭く、メガネもついでに

拭いておく、

「麻弥：メガネよりコンタクトでいいんじゃないか？その方が可愛いぞ」

「かっかわわ!？」

「こら八意くん？ナンパはダメよ？」

「やっべえ…背筋が凍る。前は砂だらけ後ろは雪だらけじゃないのか…？」

「千聖：ナンパなんかしてないぞ？俺はただ拭いてただけなんだが…」

(無自覚なのね…やはり)

「…？」

「…なんでもないわ」

俺は砂の上で棒立ちする

「うーん…」

上を見上げる、日光が眩しくて目を細める。

「どこにもいないよなあ…」

黒服から言われたことを気にかけて、俺は空を見ていた。

「にしても…雲ひとつない快晴っぷりだな…」

耳を済まし、眼を凝らす。

ブーン…

「…!？」

俺は衝撃に見舞われた。今、羽音がした。確実に

「きゃあ!？」

「何今の羽音！虫!？」

「みんな俺のところにこい！速く!」

「え…ええ?」

「さっさとこい!」

俺のただならぬ感じを察してくれたのだろう

「どうしたの?いきなり」

説明を求める千聖、

「後で説明する」

とだけ返し、ホルスターから拳銃を抜きだす。

「え…それって…」

「言いたいことはよくわかる。でも今は…うん」

「う、うん…」

俺はベルトを出し

「変身！」

クウガになる。途端、大量の音が俺の耳に入ってきた。

俺は地面に膝をつき、息を荒らげる。

(よりによつて緑かよ…！)

「大丈夫…!？」

「八意さん!？」

ブーン

「しっかりして！」

ブーン

(聴こえる…やつの羽音が…！上に意識だけを向ける…俺！)

俺は集中する。羽音だけを捉えろ。やれ、やれ！

そして…

羽音以外聞こえなくなる。

人間の極限の集中力だ。

拳銃を構える。

「!？」

拳銃は形を変え、ボウガンに変わった

(そうか…そうゆうことか…これでやつを撃ち抜くと…！)

黒服さんありがとう。すごい役に立った。

上から降ってくる音がする。

「ふっ…！」

俺はそれを指で受け止める。

「すごい…」

奴の針だ。それを砂に投げ捨て今度はボウガンを構える。

姿は見えなくとも気配はわかる。

俺はボウガンを引き、上に構える。そして…
放つ。

(どうだ…！)

空中で爆発がおこった。

「相変わらずよく爆発するもんだ…」

人間、集中力が切れると…

「っ…!?!」

忘れてた。また耳に入る情報量上がる。何とかして変身解除
こうしてまた1人、未確認を倒したのだ

あの時よりかはましだが

「耳鳴りがすげえ…頭いてえ…」

完全ダウン状態

それに対し、

「あれはかつこよかったね」

「あれは白刃取りですね！」

「針だけどね…イヴちゃん」

とまあ盛り上がっている。

さすがにこの状態でバイクはキツイので運んでもらっている。ス
タッフさん方も俺の変身を見てたらしく戦闘シーンも録画したらしい

「それ、テレビとかで流すなよ？」

と言っておいたので大丈夫だと思うが…あともう1つ。俺は何故
か、パスペレの命の恩人と言われていた。俺は別に何もしてないと
言っているのに、なんだが金の話まで出ていた。

「はあ…」

事務所に戻ってきて社長室に呼び出され社長に頭を下げられてい
る

「この度は本当にありがとう！君の望みならなんでも叶えよう！」

「なんでも?」

「ああ、なんでもだ。」

「じゃあパスパレのライブチケットと握手会チケットくれ、それだけで充分だ」

「え…? 本当にそれでいいのかい?」

信じられないみたいなお顔されても…やっぱアイドルだからな

「おう」

「そ、そうか! すぐ渡すから待っていてくれ!」

周りにいる秘書やスタッフさんにも

(こんなんでもいいのか? 寂しい人なのかな…?)

と思われていたことを知らない。

社長からチケットを2枚貰い

「毎度あり」

と言いつ社長室を出ていく。この2日間はまあまあ楽しかったな。そう考えていたせいで日菜からのタックルに気づかなかつた。

「とおー!」

「オンドウル!」

「あはは変な声!」

「おい日菜あ…」

「日菜ちゃん!?! 何してるの!?!」

「助けて彩さん…」

「…頑張つてね!」

「オンドウルラギツタンデイスカ!」

「日菜ちゃん…? なにしてるの?」

「千聖ちゃん…! いや何もしてないよ!」

「そんな状況で言われても説得力がないのだけれど…」

背を向けて倒れてる俺に馬乗りになる日菜、ファンが見たら俺殺される光景である。

「助けて千聖…」

「じゃあ…皆さん、ありがとうございます！」

「2日間ありがとうございました！」

「あ、そうだ」

俺は5人に近づき…

「お疲れ様だな、お前ら。楽しかったぜ」

と言いながら5人の頭を撫でた。

「…／／／」

「ん、じゃあな」

俺はバイクに跨り家に帰ることにした

「あーゆーの、本当卑怯だよねー」

「まさかの不意打ち…」

千聖は怒るかと思いきや…

なんとなく、顔を赤くしていた。

「おはようございます…」

俺はとぼとぼ歩きながら校門をくぐる。今日は月曜日。日曜日に帰ってきて疲労が溜まったまんまだ。

「おはようございます。八意さん」

でたな鬼の風紀委員め…

「ああ、紗夜さんおはようございます」

俺はそう言いながら通り過ぎようとする

「待ってください、私がこのバイクを見逃すとも?」

やっぱりダメかあ…

「大丈夫ですよ途中から降りて押したんで」

「大丈夫ありません。第1高校生がバイク登校なんて…不良かなにかですか?」

「私は健全な高校生です。でもこのバイクは必要なんです。紗夜さんなら分かるはずですよ」

「…。」

よし…このままならいける…通せる…!だが現実甘くないんだなそれが

「ダメです」(鋼の意思)

あーだこーだ言い合う二人を見て周りの人は大体(またか…)と思うだけだった。

「またバイクかよ…」

「あ、ツインテール。」

「ちげーっ!私は市ヶ谷だ!いい加減覚えろ!」

「いやあ…最近物忘れがひどくてねえ…」

「そんなこと言っているのか?」

ニヤニヤしている市ヶ谷。まさか…

「バイク、没収だ…「すみませんでした市ヶ谷様」

「あの一…」

後ろから声がしてみな振り返る

「白金さん…」

生徒会長である白金燐子が立っていた。

「白金先輩…こいつのバイク…どうにかしてください…!」

「その件で…話に来ました…」

「くり…」

「その…NGです…」

「ソナア…ウゾダ…」

「めっちゃ萎れるじゃん…」

「今日は…こちらで預かっておきます…」

そうして、バイクはどこかへ連れていかれた。俺はめちやくちやシヨックを受けながらも歩こうとすると…

「八意さん」

紗夜に呼び止められる

「ハイ…?ドウシマシタ?…」

少し恥ずかしそうな顔をして

「日菜から話は聞きました。その…日菜を守ってくれて…ありがとう
ございます」

それ今言うタイミングかい?とおもいながら

「大丈夫ですよ…うん…」

俺はとぼとぼとあるき教室へ行った。

昼休みまでふて寝してやった。

〜昼休み〜

「そういえば…図書室まだ行ったことなかったな」

昼飯を終え、特にすることがない。女子高の図書室も見てみようかとおもい、廊下を歩く。反対の校舎ではこころを追いかける美咲が見えた。

「大変そうだなあ…」

「何してるのかしら?」

「千聖と…花音か」

「こんにちは…」

「ごんちは」

「何？その挨拶…」

「全部言うのがめんどくさいんで、ちなみに俺は図書室向かってます」

「そう、邪魔したわね」

そう言いながら違う方向へ花音を連れ歩いていく。

なんか冷たいなあ…と思いつつ図書室へ足を進める

「……あのく…う？」

図書室に入るや否や燐子さんが見えた。ずっと机をトントンして
いる。

「キーボードの練習？」

にしては上下右左…

「ん？」

横に置いてあるノート、ずっしりと色々書いてある。生徒会長でも
あるので勉強か？とノートを見てみる…

「なんじゃ…これ？」

ボスやの戦術やスキルが沢山載っていた。

「攻略方法？」

まさか…ゲームやってんの？この人

「あつ…！」

そこで気づく燐子さん。取り返そうとするが避ける。

「燐子さん、ゲームしてたんですか？」

「あわわっ…返してください…！」

「誰にも言いませんから…落ち着いて…」

「…NFOです…」

「…？」

なに？S〇〇〇？あのゲームで死んだら現実の死ってやつ？

「S〇〇〇ですか…」

「S〇〇〇…？」

「嫌なんでも…これPCゲームなんですか？へえ〜！楽しそう。俺も

やろっかな」

「本当ですか?!?」

突然テンション上がったなこの人…目きらきらしてますよ?

「やりますやります…」

「なら…」

メモ帳を取りだし俺に渡してくる。

「LimeのIDです…」

スマホを取りだし早速追加

「よし、これで話せるな。また始めた時言いますよ。他にもやってる人とかいるんすか?」

「あこちゃん…紗夜さんです…」

「え?」

あこは分かるよ?紗夜さん?ええ?あの人ゲームすんの?

人は見かけに寄らないということをよく知った昼休みだった。

「(???)」

「んー?…これがいいのか?」

俺は今、家電量販店にいる。ゲーミングPCをさがしているのだが…種類が多すぎる。値段が安いものから高いもの…確かに高い方が動作環境もよくなる。なら1番高いのを買えばいい。そうかそうすればいいのか。俺は考えるのがあまり好きではない。

「ありがとうございます!」

そう言われながら店を出ていく。とりあえず20万円のそれなりに高いやつを買ってきた。

「そういえば…制服のまんまで来たな…」

誰かに見られたらまずいな…とりあえず帰るためにはしろうと
した瞬間…

「あ…」

「あっ…」

氷川紗夜と出会ってしまった。紗夜は私服だ。俺は制服

「制服でこんな所歩いて、貴方はなにがしたいんですか?しかもなに

か大きなものを買われたそうで」

丁寧な口調だが顔が怖い。鬼だ…

「すいませんゲーミングPC買いました」

俺は馬鹿正直に伝える。

「そうですか…」

「それではさよなら…」

「逃がしませんよ?」

「俺たち朝もこんな会話しませんでしたか?」

「知りませんね。しかも貴方、またバイク使ってますね。」

「プライベート!学校じゃないから大丈夫だ!」

「まあ…そうですが…」

ドオオン!

後ろで爆発が起こる

「!?!」

二人も周りも思考が停止する。

「またか…!」

俺は走り出す。バイクより走った方が速い。

「ちよつと待ってください…!」

その後ろを着いていく紗夜。一体何がおこったのだろうか。そんな気持ちで

「これは…」

何かが爆発したような後があつちこつちにあつた。血を流して呻く人達の真ん中で楽しそうにしている。未確認

「イカ…?」

人型のイカはこちらに気づくと

「バンザゴラゲパ!」

と言いつきに手をかざし、何かを放った。咄嗟に地面に転がり避ける。後ろで爆発音がした。

「この…!」

俺はベルトを出し

「変身！」

赤のクウガへと姿を変えた

「クウガ……」

「おらあ！」

俺は先制攻撃を仕掛けるべく飛び立つ。爆発弾は手をかざせなければ撃てないはずだ。俺はそう見込み、一気に畳み掛けるべく後ろに周りみぞおちにパンチをくりこむ
が……

「聞いてない……!?!」

手応えがない。

「ゴンデギゾバー！クウガ！」

相手は俺の腕を振り払うと肘で顔に1発入れた。

「ぐっ……」

軽く後ろに飛ぶ。背中から地面にぶつかる。

「なら……」

近くにある木の棒のひとつを取り

「超変身！」

赤のクウガから青のクウガへ姿を変える。

木の棒をロッドに変え、構える。

相手は口を手をかざし放つ。俺はそれをロッドでガード

したはずだったが爆発した途端。当たった場所が折れていた

「なんでやつだ……」

俺はそんな声を出す。爆発の威力が違う。もう1発放ってくる。

俺は思考を放棄しロッドを捨て横に転がり避ける。

(緑のクウガは……いや、使うには場所が悪すぎる……なにかほかの手を打たないと……防戦一方じゃ……)

また1発、さらに1発。1発1発がまるでグレネードだ。

俺は避けながら策を考える。体力だって無限じゃない。

(なにか……なにか……)

避けるんじゃないかって防御は……そうだ。あいつの爆発弾を防御すれば……ロッドは折れる……ボウガンはダメだ……

いや…まで？盾か？いや、盾のフォームなんかない…

「やめなさい…！」

そう言いながら走ってくる一人の人を見て思考が乱れる。

「あいつ…！…何考えて…!？」

先がとがった木の棒で何が出来ると…ダメだ間に合わない。

相手に切りかかる。

ぶしや…つと音がなり

「ふっ…!？」

イカは肩を押さえ膝を着く。だがすぐに立ち上がり紗夜ん目掛け爆発弾を放つ。

「うおおあー！」

俺はギリギリ背中中で防御する。青のクウガのスピードで間に合ったことに安心して、背中に衝撃が走り吹っ飛ぶ。

「ぐっ…大丈夫ですか…？紗夜さん…！」

背中を見る。黒く焦げていた

(ヒリヒリする…)

「あの…！」

「どうした…紗夜…？」

右手がやけに柔らかい。まさか…

「風紀が乱れます…！」

ラッキースケベ発動だ。こんなタイミングで？

「すいませんっ！悪意はありません！」

すぐさま手を離し詫げる。

「悪意がないのはわかってますよ…第1飛び出した私が悪いので…」

「ドゾレザ！クウガ！」

「っ!？」

俺は紗夜さんを庇う形で立ち上がる。相手が口に手を添え…吐き出そうとした時、相手が動きを止めた。身体から煙みたいなのが出ている

「なんだ…？」

「ギンヂチソギギダバ」

といい後ろを向いて走ってどこかへ行ってしまった。

「…。」

爆発音も無く、ただ静かな空間になった。遠くから聞こえるパトカーのサイレン。

「やべっ…紗夜さん失礼」

「貴方…なにを…ひや…」

俺は紗夜をお姫様抱っこし、青のクウガの身軽さでその場を離れた。

「今下ろしますね」

紗夜を下ろし変身解除、背中はまだヒリヒリするがさつきよりかはマシだ。

「その…ありがとうございます」

「大丈夫ですよ。速く帰らないとな…」

「ところでそのゲーミングPC…何に使うんですか？」

歩きながら話す。家は逆方向だが夜も暗いし女子高生1人で帰らせるのにもなんだかと思う。

「隣子にゲームする約束してしまっただ。俺PC持ってないから買いに行っただ。てか紗夜さんもゲームするんだな」

「つつ…！なんでそれを…!?!」

「たまたま見たんだよ。昼休みにな」

「…そうですか」

「もう着いたぞ？」

「ありがとうございます。」

「じゃーな、また明日」

俺はバイクのエンジンをかけて走り出す。

家に帰ってパソコンをダンボールから取り出す

「立派だな…」

机に置いてコンセントやらなんやら繋いでスイッチON

NFOを買って起動する。

設定画面に行く

プレイヤーネーム…？

クウガ？いや…ソーダでいいか

職業？

剣士だろ！出来たら二刀流しよ。目指せキ〇ト！

見た目…

なんかキ〇トみたいになった…まあいいか。背中に剣をさしておこう。

待ち合わせ場所は…ここか

Li meのグループに招待してもらってそこで通話しながらしている

「あ！いたよりりんりん！」

「あこちゃん…あ！ソーダ…さん？」

「俺だよ？八意だよ？」

「あ！想くん！」

見た目でわかるな…

燐子さんは…ウィザード、魔法使いみたいなものか…強そう

あこは…ネクロマンサー死霊術師か…強そう

紗夜は…ロイヤルナイト？強くね？

「紗夜さんガチ勢か…」

「いつの間にか私も…」

照れくさそうに笑ってる紗夜さん

「まあいいや、」

「背中…大丈夫ですか？」

紗夜さんから心配そうな声で聞かれる

「少しヒリヒリするけど大丈夫だ。それよりほら、せつかくだし色々教えてもらおう」

「確かに、剣士は私たちのチームには居ないので、八意さんには強くなってもらわないとですね」

「リサ姉にも友希那さんにも言っておこー！」

「え？まさかあの二人も？」

はえ〜…あの友希那さんが…
本当に、見かけによらないなと思ったのである

「ふっ……」

鋭い気合と共に放たれる剣の一閃。俺は今、NFOをプレイし始めてから2時間くらい経つ、それなりに慣れてきた。ただいま深夜の1時、

みんなとは夜中の1で辞めてそれからずっとソロ状態だ。レベルもまあまあ上がりそれなりに強くなってきた……と思う。

「あ……」

自分が使っていた鉄の剣がパリンと言う音を立てて潰れた。

「あらま……」

そういえば、ずっとこの武器使ってたな、耐久値だつて無くなるわな

「おつかれさん」

とだけいい新しい武器を取り出すべくキーボードを叩きアイテム欄を開きドロップ品などを見る。

「ハチの針…カメのウロコ…なんかそこら辺で手に入りそうなアイテムばっかだな」

そう呟き目頭を抑える。ハチの針…なんか最近見たような……

「目も痛くなってきた…てかもうこんな時間かよ…!?やべ早く寝ないと……」

俺はセーブをして……

「意外と楽しかったな……」

と呟きパソコンを落としてその日は寝た。

「ふわぁ……」

「どうしたの？八意くん、今日ずっと眠そうだけど」

「山吹か…昨日夜更かししてな、猛烈に眠たいんだわ」

「夜更かしかく何してたの？」

「ゲーム」

「えっゲーム？」

「うん」

「八意くんってゲームするんだ…」

「り…」

「り？」

あぶない、ここで燐子に勧められてなんか言ったら生徒会長としてのイメージが崩れる…

「あこがすすめて来たから仕方なくな」

すまん…あこ…

〜羽丘女子学園〜

「へくちっ！」

「どうしたのあこちゃん？」

「誰か今私の噂でもしたかな…まあいいや！」

〜花咲川女子学園〜昼休み〜

騒がしい廊下を歩く。

「あのイカめ…背中まだヒリヒリしてやがる…」

あのイカに対応するにはもしかすると前に見た夢にいた紫のクウガの力じゃないとダメなのかもしれない。

それにしても背中がヒリヒリする。一応冷やしてみたらマシにはなったが地味にヒリヒリする。うざい。

「どうかしたのかしら！」

「うおっ…こころか」

「こんにちは！想！」

後ろから美咲がやってくる。

「あ、こんにちは、八意さん」

「よう美咲とこころ」

こいつらいつも一緒にいんな、すげー仲良いんだな

「どうしたんです？何か変態みたいな目してますよ？」

「いや…二人仲良いんだなって」

「あ…そう見えますか？」

「うんうん、なんなら付き合ってるのか？て聞きたいレベル」

「あ…ってはい!？」

「どうした?」「どうしたのかしら?」

「付き合ってるって…そんな訳ないじゃないですか!」

「お、おうわかったから落ち着け…な?」

やけに慌てる美咲を見ながら一言

「そして…ころ、なんでお前は俺の背中にしがみついていた?」

周りからの視線がなんかすごい。

「想!…とってもいい匂いがするわ!」

「あーそりゃあどうも、てか人の制服に顔を埋めるな!美咲! H e l p m e !」

「ちよつと…ころ…!」

「そこでなにをして…弦巻さん!」

騒ぎを聞きつけてか風紀委員氷川紗夜が現れた!

「助けてくれ…」

「男の人と肌を触れ合わせるなんてそんなふしだらな!」

「紗夜!想と…ってもいい匂いがするわ!」

「それは分かりました!まずは離れてください…!」

ドオオン!

「!?!」

周りが騒然とする。近くで爆発がおこった。パトカーのサイレンも聞こえる。

「皆さん落ち着いて!体育館へ!」

風紀委員流石の対応力で体育館へ避難させる。俺は…ころと美咲を体育館へ行くよう促す。体育館へは行かず、自転車置き場に置いてあるバイクに跨り校門から出ていく

(後で紗夜たちに謝らないとな)

…思いながら

…体育館

みな、何があったのだらうと不安な気持ちで体育館に集まっている。唯一みんながちゃんと体育館に来てくれたのがあるがたかった。

「何があったのかな…」

「もしかしてテロ…?」

「未確認かもよ…」

「静かにしてください」

体育館に沈黙が訪れる。壇上でマイクを持つ氷川紗夜は全員が集まっているなと思い…

「…？」

そして違和感がある。1人いない…そして…

「まさか…！」

「氷川さん…！」

壇上に走ってきた燐子が

「八意さんがいません…バイクも…もしかして…」

と耳打ちする。

「多分…そうでしょうね…」

と返した。先生に降りていいよと言われあとは先生に任せる。先生は的確な指示をしていく。それに従い暫くは体育館にいることになった。

不安が入り乱れる場所で

「白鷺さん…」

「また、彼絡みの事件なのね」

「なんで知って…！」

「彼にパスパレが1度助けてもらったからよ」

「そうなんですか…」

「あなたも知っていたのね、氷川さん」

「私も…いやRoseliaも1度助けてもらってるので…」

「私たち、似たもの同士ね」

「そうですね…」

不安を紛らわせようとしているのだろう。そんなことを思いながら氷川紗夜は白鷺千聖と話すのであった。

バイクに乗りながらベルトを出す

「変身…！」

俺はバイクで走りながら赤のクウガへ姿を変える。バイクも色が変わり、まるでクウガみたいな色になった。

「すげえ…流石は弦巻家だな…」

最後のひとつの機能はこれかと思いつながら場所へ向かう。

「んだよこれ…」

現場に近づくとつれ、あつちこつちにパトカーが散らばりそこに人が倒れ呻いている。そして…銃撃音が聞こえた。その次に爆発音、そして悲鳴、

「!?」

俺はようやく見えたイカ野郎に対し怒りを覚えた。まれで遊ぶように人をいたぶり…

「やめろおおお！」

考えるよりも先に行動する。前輪を上げながらイカ野郎に追突、

「ぐっ…！」

相手は吹っ飛び転がる。すぐさまバイクを立てて降り、近くにいる警官に

「大丈夫か!?おい…しっかりしろ！」

と声をかける。息はある。意識を失っているだけだ。

「…！」

俺はイカ野郎の方を向き、構える。相手は手を口にかざし爆発弾を放つ。俺は避けようとしたが後ろに警官がいるのを思い出し腕をクロスして受け止める。

「ぐっ…！」

衝撃、何とかふみとどまる。腕が黒く焦げていた。

「うっ…！」

二発目、同じ衝撃が身体を震わせる。それに耐えれず後ろに吹き飛ば

ぶ
「うわあっ!?!」

背中から地面に倒れる。すぐさま立ち上がりジャンプして背後に回る。後ろから絞める。そしてみぞおちにパンチ、膝蹴りを繰り返す

が…

「やっぱりだ…！やっぱり効いてない！」

「ビガランボグゲビパゴンデギゾバ！」

相手が後ろに下がっていく、後ろには柱があつた。そこには電気のスイツチがある。まずい…！と思つて避けようとするがイカ野郎が俺の腕をつかみそのまま激突、火花を散らし小さな爆発がおこる

「うわああー！」

俺は感電によるダメージで倒れる。何とか立ち上がるが

イカ野郎は口に手を添え爆発弾を放つ。それをモロに受け爆発しながら俺は後ろに吹っ飛んだ。

「ぐっ…はあ…！」

相手が仰向けに倒れる俺を踏みつける。

「ぐうああああ…」

そして蹴り飛ばす。横に転がる、転がった先には気を失つた警官がいた。イカ野郎は口に手を添え…爆発弾を放つ。俺は立ち上がり腕をクロスし防御の構えを取る。爆発、衝撃が走る

「っ！」

また一撃、もう一撃。

「ぐっ…ああ…！」

痛い、今すぐにでも逃げ出したい。だがそんな気持ちを抑える。警官立ちを見る！俺みたいないな力もないのに気を失うまで闘つたんだ。やれ！俺が！

己を鼓舞する。目の前のイカを調理して食つてやる！

そんな思いが通じたのか…ベルトが紫に光る。

「っ！」

俺は足から姿を変え…紫のクウガになった。

「バゼ…！」

相手も驚く。そしてまた爆発弾を放つ、だが…

「痛くない…？」

相手の爆発弾は赤のクウガとは違い全くものともしなかつた。俺は試しに一步2歩と前に歩く、その間も放ち続けるが全く痛くない。

そして相手の目の前に近づき…

「こんちきしよおがああー!」

全力のパンチを出す…

「あれ…?」

防御力は上がっていても…攻撃力は上がってなかったみたいだ…
あと腕折れてるな2本とも、くそ痛てえわ。

そして相手から煙が出てくる。

「!?」

まさか自爆か?と思い身構える。が…相手は後ろを向いて…近くの川に逃げた。

「待てっ!!」

だが赤のクウガや青のクウガとは違い…

「走るのおっそー!」

走る速度が遅かった。この鎧のせいだろうか?

とにかく追いかけるのを辞める

「ん…」

「やべっ…」

警官が一人、呻きながら立ち上がろうとする

俺はとにかく赤のクウガになりバイクに跨りその場を離れ花咲川女子学園へと走らせた。

バレーずにバイクを元の場所に戻し、何事もなかったように体育館に行くが…まあバレた。

腕は2本ともほぼ使えない。アマダムが修復しているがとんでもない激痛が俺を襲っていた。

「くっ…!」

「大丈夫?八意くん…?」

「ああ…?山吹か…俺は…大丈夫だから」

「大丈夫そうには見えないって!冷や汗もすごいから!」

「ほんとか…?やばい…」

激痛に意識を保てなくなってきた。

「山吹…」

「ちよ…大丈夫!?! 八意くん!」

「沙綾く! って八意くん!?!」

香澄も慌てて近寄る。

俺は気を失った。

「またここか…」

俺は白い世界に招かれていた。背景が黒くなる。

「あれは…?」

紫のクウガが見える。右手には剣を持っていた。

「剣…?」

あの姿は剣が使えるのか? 途端に紫のクウガはいなくなる、

そして誰かの声が頭に響き渡る

「邪悪なるものあらば、その姿を彼方より知りて疾風の如く邪悪を射抜く戦士あり」

「なんだ…!?!」

「邪悪なるものあらば鋼の鎧を身に付け、地割れの如く邪悪を切り裂く戦士あり」

「邪悪な者あらば、その技を無に帰し流水の如く邪悪を薙ぎ払う戦士あり」

次々と流れ込んでくる。

「邪悪なる者あらば希望の霊石を身に付け、炎の如く邪悪を打ち倒す戦士あり」

目の前に移るクウガが緑や紫、青に赤になる。そして…

周りが火で燃える。悲鳴が聴こえる

『聖なる泉枯れ果てし時 凄まじき戦士雷の如く出で 太陽は闇に葬られん』

「凄まじき戦士…?」

『心清き戦士 力を極めて戦い邪悪を葬りし時 汝の身も邪悪に染まりて永劫の闇に消えん』

『清らかなる戦士 心の力を極めて戦い邪悪を葬りし時 汝自らの邪悪を除きて究極の闇を消し去らん』

「あれは…」

クウガが街の人々を殺し回る様を見た。角は4本、
「!?!」

近くにcircleがある。中に居るのは…

「やめろ…やめろ！やめろやめろ！」

俺は声を上げ絶叫する。そして世界はまた白くなり…

「っ!？」

そこには白い青年が立っていた。

その青年は笑顔で

「いつか君も僕みたいになれるよ」

とだけ言い消えた。

「っ!?!はあ…はあ…」

ベットから飛び起きる。

「大丈夫ですか？」

「はあ…はあ…ここは…俺はたしか倒れて…」

周りを見渡す。病院だ、そして横を見ると…

「紗夜さん…」

「やつと気づきましたか…大丈夫ですか？随分とうなされていましたか…」

「ああ…大丈夫だ。」

『いつか君も僕みたいになれるさ』

なんなんだあの言葉は…誰なんだアイツは…

「あの後、なにがあったんですか？貴方、一応両腕折れて背中も火傷な
んですよ?…」

「やっぱり…バレてた?…」

「当たり前です。やはり…未確認ですか?…」

「その通りだ。2度も敗北してるなあ…俺」

「負けたんですか?…」

「うん、そしてこのザマだよ…」

「別にザマとか言いませんが…疲れないんですか?…」

「そうだな…ココ最近スッキリ眠れたことないな…あはは、でも大丈夫だ。若さがあるから!…」

「ふぎけないでください!そんなにボロボロになって!誰かに褒めら

れるわけでもなく！自分が記憶喪失なのに！ただ誰かを守りたいだけでその命さえも捨てようとするなんて…！」

堪えきれない涙が、紗夜の頬を伝う。

「私…！なんで泣いて…」

紗夜にも紗夜なりの考えがあるのだろう。

「紗夜…」

俺は泣く紗夜を右手で頭を撫でる

「八意…さん？」

「確かに…俺はあんまり戦う理由が無かった。最初はな、だけど今はある。」

「ただ、お前らの笑顔を守りたい。それだけじゃダメか？」

紗夜の身体が震える。

「それだけの理由で…あそこまでするんですか…？」

「俺は別に見返りが欲しいからって理由でこの力を使ってるわけじゃない。そういえば俺には今、あまり夢がないからな、でもお前らは違う、バンドという夢がある。俺はそれを支えたいんだ」

そこで八意はハッ！となる。

「どうしましたか？八意さん？」

「俺にも夢できたかも…」

「聞いてもいいですか…？」

「お前らの笑顔を守るために闘う！」

ガバツと立ち上がりそう言って…

「あっ!?いって〜!?俺怪我してたわ忘れてた!くわあ〜いってえ!」

「ふっ…」

そんな彼に思わず笑ってしまう

「あっ!今笑った?」

「私だって笑いますよ!貴方は私をなんだと…」

「風紀委員という名の校則違反野郎 Killing マシーン?」

「さっきの涙を返してください…」

くう〜…

部屋にそんな間抜けな音が響き渡る。音の正体は…

「お腹すいたの？紗夜さん…」

部屋にある時計を見る。夜8時

「…／／／」

顔を真っ赤にしながら睨んでくる紗夜さん。恥ずかしいのだろう。

「なんか…奢るよ、これでさっきの事はチャラにしよう！」

「ほんとですか…？」

「ほんとほんと！」

「なら…ハンバーガー屋に行ってもいいですか…？」

「…へ？」

ハンバーガー屋

めっちゃ美味しそうにポテトたべるなあ…紗夜さん。肝心のハンバーガーには手をつけず、ポテトを2つも平らげた、

俺はチーズバーガーを食べているが、

「ポテト…いります？」

「っ!？」

なんか見てるだけで腹一杯になってきた。

「貰います…」

そういえばこの時間のバイト彩だったな。さっきびっくりしたわ

『いらっしやいませーって八意くん!』

『彩…お前こんな所でアルバイトしてたのか?』

『紗夜さんも…まさか2人は…付き合ってた…?』

『違う違う、奢りに来ただけ』

『その左手…包帯巻いてあるけど今日のことと関係あったり?』

『まあそんな感じ、それよりメニュー、頼んでいい?』

『あっどうぞー!』

とまあそんな感じのやり取りをして席に着いた。

〜15分後〜

明らかにガラの悪い5人組が店内に入ってきた。

(うわあ…彩大丈夫かな?)

案の定、彩は構われていた。

「君かわいいね！俺達と遊ぼーぜー！」

「やめてください…」

「お客様…おやめ下さい…！」

「お前には用はねえよ！うせろ！」

5人組のひとりが店員目掛け拳をはなとうとする。その拳を俺はトレーで受け止める。トレーにヒビがいく。

「うっそやろ…お前ゴリラかよ？」

「なんだテメエ…ヒーローツラか？あ？」

俺の周りを5人が囲む、みなやる気満々だが…

「ちよつとまった！ここでやりあうのはあれだ…」

俺は前髪をかきあげながら

「表出ろやお前ら」

1度は言ってみたかったセリフなんだよね〜わかってくれ（真顔）

「上等だ！コラ！」「お前なんかぶっ殺してやる！」

「あーはいはい分かりましたから、」

そう言いながら店を出ていく。

店内では

「なにあの人カツコイイ…」とかなんやらで騒然としていた。

紗夜と彩は目配せをし…（大丈夫かな？あの人…）とおもっていた。そして警察を呼ぶのであった。

近くの路地裏に入る。途端に逃げ道を塞がれ…

「俺たちはこんなものまで持ってるんだぜ…！」

みなポケットからスタンガンやナイフを取り出した。

「さつきはよくも舐めやがって…！」

「五体満足で帰れると思うなよ！」

（…治安悪くね？）

そんなことを思いながら屈伸をする。

「おらああ！」「死ねやああ！」

2人、俺を挟む形で迫ってくる。スタンガンはあれだがナイフは痛い。いやスタンガンも痛いわ。

俺はナイフの方をいなし鳩尾に1発、スタンガンは普通に避ける。

2人は追突し

「あつ…」

片方スタンガンでやられた。気を失う。
それと同時にパトカーの音が近くなる。

「やつべ…まずいなあ…」

正直こんな事に力を使いたくなかったが…俺は近くにあるゴミ袋を手当り次第に投げつけ視界を奪ったと同時に青のクウガに変身、跳躍力で逃げたのであった。何とか店内に戻る。変身したからか身体が幾分か治っていた。

(この回復?まるでアイツら未確認みたいだな…)

と思う。

「あついた!」 「いました!」

「あ、やあ2人とも?」

「「やあじゃないですよ!」」

「……………はい」

その後少しだけ説教を受けた。店の人たちからはお礼を言われ、色々あり、病院の部屋に戻ってきたのは夜の九時半だった。

看護師に

「抜け出さないでください!分かりましたか?腕の包帯とかどこやっ
たんですか!」

と言われ

「腕ちゃんと動きますよ?もう完治ですわ!」

いやまだ多少痛むが…

「え…」

そう言われ引かれた。なんか傷つく、

次の日に検査を受け退院、最後まで引かれていた、二度と病院行きたくねえなと思って歩く。とりあえず学校に向かい教室へ入り席に着く。

「八意くん、昨日大丈夫だった?」

「山吹か、俺はもう大丈夫、ちよつと疲れてたみたいだわ」

「ゲームのやりすぎはよくないぞ」

「分かった分かった…」

そんな会話をしながら平和なひとときを過ごす…

そう…この時、水を伝ってここまで来る化け物に気付かずに…

「剣道部見に行ってみようかな…」

昼休み、そんなことを呟く

周りはめちやくちや喋ってる中教室で考え：

俺はふと思いついた。あの夢で見た紫のクウガは剣を使っていた、なら剣を特訓すれば行ける、でも近くに剣を使うような…

あつた。剣道部だ。あそこならイヴがいるからそれなりにやりやすいかもしれない。

剣と言うよりかは刀だな…

と思いつながら体育館へ向かう。

とりあえず体験という扱いらしい。

体育館に着いた。剣道部らしき人は見つからない。

「あれ…？まだ更衣室か？」

その時、右側から気配がした。そして…

パン！と澄み切った音が耳をつんざく。

「っ!？」

俺は間一髪、その竹刀を受けとめる。

「へえ…いまの受け止めるんだ。」

一瞬クウガになるという思考が働いたが相手は人間だった。

(一撃なのに腕が…痺れる…！)

竹刀を受け止めたまま俺は話す。

「お前は…何もんだ…？遊びにしては冗談がきついぞ…！」

「お前こそ…ここに何しに来たの？男の人は僕信用出来ないんだよね。」

一気に腕にかかる負荷が大きくなる、

(まずい…！腕が折れる)

俺は辛くも竹刀を受け流し体育館の床を転がって立ち上がる。

「あー八意さん！つて何してるんですか!？」

「あ、イヴ先輩、あまり近寄らない方がいいですよ。後竹刀借ります。」

「え……？」

イヴから丁寧な竹刀を取ると俺の方へ投げてきた。床に転がる竹刀を見つめる。

「どうしたの？早く取りなよ」

「チツ……」

俺は舌打ちをしながら床にある竹刀を取る。ずつしりと伝わる重み、表面には少しの傷が沢山ついていた。イヴは沢山努力したのだから。

「やめてください……！」

「イヴ、大丈夫だ。舐められっぱなしも癪だからな」

（腕の痛みはだいぶ引いた……だが勝てる自信があまりない……）

「へえ……大口叩くじゃん。なら……僕から行くよ……！」

言うやいなや凄まじいスピードで走ってくる

（嘘だろ……！速すぎる……）

俺は感覚で竹刀を振り竹刀を受け止める。

「っ！」「……」

ギシツと竹刀が軋む。俺はゲームの知識を使い、竹刀を流す。

「おお……それ使うんだ。ならこれは？」

今度は下からの斬撃。

「っ!？」

俺は後ろに宙返りし避ける。青のクウガのお陰だ。相手は道着、俺は制服。明らかに動ける範囲が違う。いつの間にかたくさんの人が体育館周りに見物していることを知らず俺と相手は竹刀を打ち合う。だが圧倒的に俺が劣勢だ。

「っ！」

肩にかすり制服が少し破ける。

（なんちゆう速度と威力だよ……）

かすったからわかる。あれをもろに受ければ大怪我だ。

俺はただ踏み込めず防戦一方を強いられた。

「どうしたの〜！さつきから守ってばつかじゃん！」

「るせえ…！」

「もしかして守ることしかできないの？」

「…！」

「凶星か…てか君、大口叩いた割には弱いね、その竹刀には何もこもつてない。そんなんじや守る人も守れないんじやない？」

「…!!」

守れない…？俺が弱いから…俺が…もつと強ければ…守れてたかもしれない…

その時、俺の中で何かがちぎれた音がした。

「殺してやる…」

自分でも背筋が冷たくなるほどの声で言う。そして…

信じられない速度で放たれた一撃が相手目掛け当てようとする。

さつきとは違う。ただ殺意だけの一撃

「…っ！」

相手が何とか竹刀で受け流す。そこに繰り出すもう一撃。普段の彼からは考えられない気配が彼にはあった。氷川紗夜はたまたま体育館で騒ぎがあったので駆けつけると…彼がいた。まるで氷のように冷たい眼をした彼が、足が竦む。声が出ない…それほどに…怖かった。それは他の人たちも同じらしい。燐子も、ポピパの皆も…

「八意さん…」

そうつぶやくことしか出来なかった。

殺す

殺す殺す

殺してやる

今自分はただ、殺意だけに囚われていた。ただ目の前の女が憎い。憎い…

『おい八意…！それ以上はまずいぞ…！』

アマダムが声をかけるが聞いてない。

「君…さつきとは全然違うね…！」

「…。」

「まるで殺人マシンだ…！」

「…。」

さつきよりだいぶおせている。これならいける…

「そこまでっ！」

誰かが精一杯叫んで試合を終わらせた。

「テメエ…紗夜…どうゆうつもり…だ？」

紗夜の顔を見ると半分泣きそうになっていた。

「俺は…」

頭が痛い。さつきまで何をしてたんだ？辺りを見回す。皆、怯えた表情をしていた。

「あ…ああ…」

力ない声が漏れる…竹刀を体育館の床に落とす。俺は何を…？

「はっ…紗夜先輩。邪魔しないでくれる？」

「そうゆう訳にも行きません。小川さん！貴方本当に殺しあっていたでしょう！」

「ちえー、バレてたか」

「八意さんも…落ち着きましたか？」

「ご…ごめん…」

「え…っ？」

俺はそう言うとも一目散に校舎裏へ走り出した。

「はあ…はあ…」

校舎裏、誰もいない場所で俺は膝を着く。涙が出てくる。

(人を殺しそうになった…イヴの竹刀を折りかけた…)

『お前：過去になんかあったのか？』

アマダムが話しかけてくる。

「過去に1度：守れなかった人がいた。俺の初めてで最後の彼女だったんだ。殺されたよ…」

『そうだったのか：さっきのあれは：』

「ああ：ただ殺すとしたか考えられなかった。俺もまだまだガキだなあ：凶星当てられてブチ切れるなんて…」

『たまにはいいんじゃない？それにほら、お前ここ最近お前は頑張りすぎだ』

「それは女の子に言ってもらいたかった…」

『なんだよそれ：人が心配してやってんのに：』

「お前人じゃなくて石だろ」

『失礼な！石じゃなくて霊石だ！』

「変わらねえじゃねえか。石だ石」

『ちえ：おっとお客さんだな。俺は失礼するぜ』

「…？」

気配がして振り返ると：走ってきたのだろう息を切らした紗夜がいた。

「紗夜…」

「なんで：逃げたりなんかしたんですか？」

「なんで：ほんとなんでだろな」

言葉の温度は冷たいが目を見ると、複雑な感情が入り交じっていた。その目から逃げるように視線を逸らす。

「なんであんなにキレてたんですか？」

「率直だな：言わないなんて言ったら？」

「言うまでここを通しません。」

道を塞ぐように立つ紗夜。俺がその気になれば紗夜を突き飛ばして進むのに、まるで紗夜は俺がそんなことをしないと知っているかのように感じた。

「そうかよ：分かったよ話すよ。」

「誰にも言いませんよ」

「知ってる」

そして俺は話し始めた。今わかってる記憶の事を、酷く、たどたどしかったはずだ。それを紗夜は静かに聴いていた。

「そんな過去が…」

全て話し終わると紗夜がそんな一言を呟いた。

「何も面白くないだろ？」

俺はそれを言い紗夜を通り過ぎ行こうとすると…

「紗夜…？」

紗夜が背中に抱きついてきた。

「お前、風紀委員だろ…風紀とか気にしないのかよ…」

「別に…いいんです…！」

「そうか…」

「辛かったですよね…悲しかったですよね…」

「そうだな…辛かったな…」

「でも…あまり自分を責めては行けませんよ。彼女もそれは望んではいないはずです…」

「ありがとな、紗夜」

俺は紗夜の方を向き、頭を撫でる。

「…」

紗夜の胸の中に暖かいものが溜まっていく、なぜか落ち着かない。心臓の鼓動が早くなる。

(なぜでしょうか…)

ドオン！

「っ!？」

体育館付近から爆発音が聞こえた。

「大丈夫ですか!？」「おい！大丈夫か！」

俺達が走って体育館辺りへ着くと……まるで地獄だった。部活途中の様々な生徒や警備員が血を流している。その中にはイヴもいた

「イヴ！大丈夫か！」

気を失ってはいるが特に怪我も無さそうだ、俺はこの主犯の人物に耐え難い怒りを覚えた。

「八意さん……」

「行ってくる」

俺は主犯がいる体育館内へ行く。

「ジヨパギビンゲンダバシザ！」

警備員2人を投げ飛ばしたグロンギがそこにいた。相手も気配に気づいたようだ、俺の方向を向き

「ゴラゲバ……」

俺はベルトを出す。構えて……

「変身！」

「ボンゾボゴギベ！」

相手が爆発弾を撃ってくる。爆発が起こる。紗夜は爆発が起こった運動場に走る。

（八意さん……！）

「あ……」

爆発した場所には、紫のクウガが立っていた、

（紫か……）

もう突然変異（？）にも慣れた。俺は近くに落ちてるイヴの竹刀を拾う。半分から上が折れていた竹刀を構える。

すると……紫の剣へと変化した。

俺はそれを右手に持ち歩き始める。

「ギベ……！」

1発、

「ギベ！」

また1発打ち込んでくる。だがしかし俺にはダメージは来ない、俺は歩く。殺意も何も無い。ただ歩く

そして剣の射程に入る。俺は立ち止まる。

「バゼ……！」

相手はなぜ攻撃が通用しないのか困惑している。俺は剣を両手で持ち

「うわああああああ！」

俺はその剣を相手目掛け突き刺した。

「ぐっ！」

刺した感触が腕にまで伝わってくる。

「……っ！」

俺は顔を下に向ける。速く、終わって欲しい。

「うわあああ！」

そして次の瞬間、相手は爆発四散した。

「はあ……はあ……」

俺は顔を上げそこに立ち尽くすしか出来なかった。

「八意さん……」

遠くから見守っていた紗夜は考えていた。

相手は化け物だ。でも八意さんにとっては1つの命を奪ったのとおなじ。話し合えば分かると言う考えが一瞬頭をよぎったが……その考えはすぐに切り捨てる。今のところだが知能があるとは思えないヤツらばかりだったからだ。

俺は変身を解除する。まだ刺した感触が右手に残っていることに若干気持ち悪さを覚える。

「八意さん……大丈夫ですか？」

「紗夜か、俺は平気だ。」

その後、俺達は駆けつけてきた警察官に色々聞かれたが知らないと言ってその場を凌ぐ。それぞれ各々家へ帰宅する。

朝10時

学校は明日明後日休校、しばらくは短縮授業だ。近くにある羽丘女子学園も同じ措置を取っている。

ニュースではまた未確認生命体第4号が倒したんじゃないかと騒がれている。

自分達学生は自宅待機を強いられた。circleも休み、Roseliaの集まりも危ないということと通話しながら話すという事に、最初は練習ムードだったが今は雑談になっている事に紗夜は苦笑する。たまには悪くないと

『ねえ紗夜〜』

『どうしたんですか？今井さん』

『昨日の事紗夜知ってる？確か現場が花咲川女子学園だったからさ！』

『見ましたよ、彼の鬨いを…』

『そつか…あまりいいもんじゃないでしょ』

『今井さんも…見たことあるんですか？』

『1回だけね』

『あこも見てみたいなあ〜！』

『あこちゃん…』

『紗夜…後ろに誰かいるわよ？』

『湊さん…つて日菜!?!いつの間に!』

『あつバレた…Roseliaの皆!こんにちは!』

『日菜ちゃん!』『日菜じゃん!』

そしてここからはRoseliaに日菜を加えた6人で会話をしたのであった。

「八意様…身体の神経が…」

黒服さんに言われる

「知ってますよ、俺もアイツら未確認みたいになっていつてるんでしよう?」

「はい…」

「大丈夫ですよ、俺は」

弦巻邸、一室。ここはもはや俺の実験室的なものになっていた。まあ実験と言うよりかは検査室だが

端的に言えば

俺はこの力を使い続ければ、アイツらグロンギと何ら変わりない生き物になるってことだ。むしろわかっていた気がする。だから怖くもなんともない。

その日の検査を終え、こころと少し談笑して家に帰る。

時間は昼の2時。暇だ。特に何かをする訳でもなくソファーに寝転ぶ。スマホを取りだし適当にネットサーフィン。

「みゃ〜」

下から黒い毛玉が歩いてきて俺の太ももに座る。

「どうしたタマ?」

と言いながら撫でる

「ゴロゴロ…」

モフモフの毛並み、

こいつは子猫のタマ、あの日の帰りに捨てられていた子猫だ。そりゃまあ丁寧にケースに入れられて手紙にあったのは

「拾ってください♡」

だとよ、何がハートだよクソツタレたご主人だな

7月、クソ暑い。1回は無視しようかと考えていたが中を見るともうそんな気は無くなり拾った。水と冷蔵庫にあったツナ缶あげたらめっちゃ懐いた。可愛い

そんなことを考えながらあいつの顔を思い出す。小川だったかあの野郎。ぜってえ許さねえ…

「…?」

Lime が来る。誰からだ?と思いつつ開くと紗夜からだった。

(そういえば Lime 交換したんだったな)

すっかり忘れていた。内容は

『貴方の家に Roselia のメンバーでお邪魔してもいいですか?』

だった。

ん？

今自宅待機強いられてるよね？

なんでそうなったか事の経緯を聞く

リサが俺の家について話した

← あこ達が興味を持つ

← じゃあ全員突撃

← 拒否る

← 強制（友希那、燐子）

← NFOの誘惑に負けた（紗夜）

「…。バカか？」

とりあえず…暇だし…

「はいですよ」

と送っておいた。

「どうぞ…」

俺は5人組を家に招き入れた。

「おっじゃましま〜す！」

「おじゃまします」

「お…おじゃまします」

「お邪魔するわ」

「おじゃまします！」

「リサとあこはテンション高いな…」

「え〜！想くんが低すぎるんだよ！」

「そうだよ！想兄が低いんだよ」

「誰が兄貴だその呼び方やめろ…」

俺は今、両手に大量の荷物を抱えている。スーパーで買った様々な食材が入っている。悲しいかな晩飯まで作って家で食べるんだそうだ。皆母親や父親には勉強会と説明してるらしい。

「はあく〜！」

キッチンに荷物を運び置く。

「ありがと〜！冷蔵庫に入れとくね〜」

「うわっ！何も無い！」

「あのなあこ、もうちよいオブラートに包め」

「PC…あ、NFOだ…」

「隣子…ゲーム好きだな」

キッチンではリサと紗夜がガヤガヤしている。何かを作り始めるらしい。2人とも鞆からエプロンを取りだし作業スタートした。

「わあく〜！お金持ちみたいなマンションだね！」

「そうだなあ…お金持ちのマンションだもんな…」

ベランダも少しでかい。そういえば友希那はどこへ？

振り向くと…友希那さんがねこをじーっと…見つめていた。

「触ります…？」

「っ…少しいかしら…？」

俺はタマを持ち上げ友希那さんに渡す。

「はう…」

はう…？なんか友希那さんらしくないなあ…もしかして…ねこ好き？

“ 狂い咲く紫炎の薔薇 ” なんて呼ばれてる人が？ 普段めちやくちやクールだよな？

俺は友希那さんとは何回か話したことあるがはう…なんて言うよ
うなキヤラじゃないぞ… A f t e r g l o w のボーカルの人とも多
分よく喧嘩？してるし…ライブも見たけどめちやくちや凄かったよ
？

そんな人達が俺の家来て色々してるって…ファンが見たら殺され
る…

「ねえ…想兄…これ…拳銃だよな？」

部屋をなんか散策してたあこが震えながら俺に拳銃を渡す。

「黒服の人に貰った。」

物騒な会話内容、そんな横でノートを広げ、勉強してる人が1人。

「燐子…お前真面目かよ…人の家に来たんだからせつかくだし話そ
ぜ…」

「いえ…そうゆう訳にはいきません…！もう少して期末テストです…
！生徒会長として頑張らないと…！」

随分やる気な燐子さん。

そういえば…テストの点数で生徒会長とか変わるんだっけ？ここ
は

「あ…」

「どうしたん…ですか？」

「テスト勉強もしてねえや」

多分今のままじゃ全部赤点。だって勉強する暇ないからね仕方な
いね！

台所から戻ってきた紗夜とリサが並んでソファーに座る。リサが
察してくれたのだろう。

「まあ…ここに來てから多忙だしね…！」

紗夜も

「そうですね…ですが多少は頑張ってください」
後半なぐさめでも無かったよね？

「そういえば友希那！」

「…！どうしたのリサ」

「勉強やってる？」

ねこを撫でていた手が止まる。

「…え、ええ…もちろんしているわ…」

「嘘だね…よし！そこ座って！勉強しよう！」

「私は…」

「やろう！」

「…分かったわ…」

「八意さんはねこを飼っていたのですね」

紗夜がねこを撫でながら言う。

「ほんとだー！可愛い！」

リサも猫に近づくと

「今気づいたの？」

「アタシ達キッチンにいたから分からなかったよ？」

「そうか…」

そこでふと。思い出したから口に出す。

「なあ、紗夜。お前日菜と双子だよな？」

部屋の空気が少し変わった。

「ええ…そうですが…？」

「いや、それだけだ。あんま仲良く無さそうに見えたからな。」

「…！」

明らかに動揺している。

「なんか、ごめんな」

「いえ、少しだけ話をしていいですか？」

「ああ、みんなに聞かれるとまずいだろ。ベランダ来い。」

2人でベランダに行く。紗夜から話を聞く。

つまるところ紗夜は日菜に対し強烈な

コンプレックスを抱いているのだ。どれだけ努力してもすぐに追いつかれ追い越され、ギターでさえも勉強でも勝てなかった。

確かに日菜は天才だ、天災でもあるがな。勉強も凄いいしギターも運動神経も、しかも妹、そりゃあ高校生だし色々あるわな、

「なあ紗夜、お前は日菜の事をどう思ってるんだ？」

「…それは…」

「はつきりしろ、嫌いなのか、好きなのか」

「…今は…まだ分かりません。」

「…そうか、なんかすまなかつたな」

「いえ、話したのは私です。」

とりあえず話を切り上げみんなの元へ、あこがテレビをつける。ニュースだった、

【速報】未確認生命体第22号現る

と書かれていた。キャスターが告げる。

「ただいま警視庁が未確認生命体第22号と名付けた未確認は次々とトラックや車などを粉砕し運転手を殺すなどとしており」

「粉砕!」

あこが叫ぶ。

「警察は未確認生命体第4号と連携を取りたいと告げていますが第4号の所在は未だわかっていません。」

「あー…」

リサが俺の方を見ながら言う。俺は警察とつるむ気などさらさらない。今のところだが

「物騒だわね」

「友希那さん…怖くないんですか？」

「要するに車に乗らなければいい話よ」

「友希那さんさすが…!」

友希那さんのメンタルは強い…のか?と思いつながら机に鍵を置いてヘルメットを持つ

「どこに行くのですか?」

紗夜が尋ねる

「ニュース見たら分かるだろ、ちょっと行ってくる。多分夕方までには帰るから待っててくれ。出かけるなら鍵置いてあるから鍵して行けよ」

誰も、止めるものはいなかった。その代わり

「行つてらっしゃい、死なないですよ?」

とりさが言ってくれた。俺は親指を立て

「任せとけ」

と答えた。

バイクに跨り走り出す。

『八意様、聞こえますでしょうか?』

「ああ、このバイクやっぱすげえな。無線できるんか」

『ええ、それより22号は只今商店街で暴れております。』

「商店街…!まずいぞ…山吹ベーカーリーが…」

『…』

黒服から伝わる指示に従いながら走らせる。そして商店街に着いた。

「あれか…!」

トラックが暴走している。珈琲店やベーカーリーから少し離れていたが粉碎すれば危ない位置にいる。そのトラックにしがみついているアホが1人。言わずともわかるのでそいつ目掛けバイクの前輪をぶつけてやった。相手はトラックから叩き落とされ地面を転がり、起き上がる。

「バンザゴラゲパ!」

と耳が潰れるくらいの音量で叫ぶ相手に俺は

「うるせえ!何言ってるのかわかんねえよ!」

と叫び返した。それを近くの珈琲店から見る影が5つ

「ねえ蘭ちゃん…あの人が…」

つぐみが皆を見ながら言う

「あの人がよな?」

「だね…」

「あの人がバイク乗れる歳なの?」

「乗せてほしいですなー」

その姿に気付かずベルトを出し

「変身ー！」

「変身…?」

俺は赤のクウガに姿を変えた、

「クウガ！」

「だからうっさい…！機嫌の悪い子供か！」

「ええ…!?!」

「しーっ、バレるでしょ…!」

蘭が落ち着かせ、

「私たち見たら行けないもの見たのかな…」

とげんなりするひまりだった。

相手はプロレスラーみたいな見た目の成人からサイのような鋭い

角をもった化け物へと変わった

「ゴラゲゾボソグボパボン！ズ・ザイン・ダ！」

「うっせえよー！」

俺はそう言い、構えた。

「うわあああー！」

俺は持ち上げられ投げ飛ばされて壁にぶつかる。ぶつかった箇所が少し凹むのを背中に感じ地面に落ちる。

「ぐっ……！」

やつは考える知能がないように見える。だが戦闘能力は馬鹿みたいだ。攻撃一つ一つが単調だ。だが足が早く、威力が桁違いすぎる。「どうした！クウガ！お前はその程度か！」

俺は立ち上がる。構える前にか前にか前にいた相手にタツクルされまた吹き飛ぶ。

「ぐおあああー！」

転がる。三半規管が刺激されマスク越しに吐瀉物を巻き散らかす。

「げほっ……！」

視界に捉えたのは珈琲店の看板とその店の奥にいた5人組だ。皆それぞれの表情をしているが大体が恐怖だ。だが今の俺には余裕が無い。立ち上がり構える。

「うおおおおあああああー！」

と叫びながら突進してくる相手を見て避けようとするが……

(後ろには彼女達がいる……！避ける訳には……)

避ける訳には行かず。だがしかし……

「ふっ……！」

俺はベルトに手を当てる。真ん中の霊石が紫色に光る

「超変身！」

足から紫へと変わり俺は赤のクウガから紫のクウガへと姿を変えた。

そしてやつのタツクルを受ける。

「ぐっ……！ぐううう……！」

タツクルは受け止めたが足が後ろに下がっていく。奴はこのままゴリ押しする気にいるようだ。

「おおおおおー！」

何とか踏みとどまる。そして相手の頭目掛け肘打ちを右と左で決める。相手が少し怯む。俺はそのまま頭を持ち、顔に膝打ちを決める。後ろへ下がった奴に顔面パンチを食らわせ後ろにノックバックさせる。相変わらず他人を殴るのは気持ち悪い…俺は殴った方の拳の震えを何とかして止める。相手は起きがり

「やるな、クウガ」

と言った。

なんなのだこいつは…今まで戦った奴らとは何かが違う…そんな考えに頭を回してしまい…

それが隙となった。

「っ!？」

いつの間にか前まで突っ込んできた相手に顔面を殴られ地面に転ぶ。追い打ちをかけるべく俺に跨り…

「超変身！」

俺は紫のクウガから赤のクウガに姿を変え、足に精神を集中させ腹にキックを決め込んだ。相手は綺麗に吹っ飛ぶ。起き上がり足を見ると煙が出ていた。

「よし…！」

相手が起き上がる。腹には紋章が着いていたが…

「はあっ！」

その紋章が消えた。

「!？」

相手は鼻で笑い

「そんな蹴り俺には通用しない！」

そういうや否や俺は怒涛のラッシュを決められた。殴られタツクルされ蹴られ、そして持ち上げられる、上に投げ飛ばされ…

「トドメだ！死ね！クウガ！」

「うわああ！」

俺の腹に頭の角が突き刺さろうとした時、俺は何とか動いた。角を両手で掴み右に体重をかけて背負い投げ。俺は地面に背中をうちつける

「っ……いつてえ！」

だがすぐさま立ち上がり空いてを見る。ちょうどおなじタイミングで立ち上がった相手が動こうとした時、
「っ!？」

不意に相手の右側の胸が抉られていた。

俺と相手は何者かが着地した方を見る。そこには……まるでピラニアのような見た目をしたやつが鋭い刃物が着いた腕を振り上げていた。相手はその腕を受け流し掴む

「ピラン……！」

「お前……ルールを破ったな！」

「ルール？知るか！そんなもの！」

俺は交戦する2人を見ながら考えた。

(ルール……？一体あいつらは何をを考えて……)

俺も構えて2人めがけ走り出す。ピラニアみたいなやつ目掛けて殴ろうとしたが交わされた。その時、左肩に激痛が走る。

(肩が……切り裂かれてる……！)

左肩の鎧が切り裂かれていた。そんな俺を見下しながら

「今、お前に用は無い！ザイン！こっちに来い！」

「いいじゃねえか！」

2人は素早いスピードでどこかへ行ってしまった

「まで……！」

俺は走り出そうとしたが視界が反転する。倒れて仰向けになる。

辛うじて腕を見たら……白だった。

(また……白か……ダメだ……意識が……)

「ちよ……つぐ……！」

「あんなの見てほっとけないって！みんなも手伝って！」

「つぐるね〜」

「おうよ！」

「し、仕方ないなあ……ほら、蘭も！」

(誰だ……？)

俺は意識を手放した。

「…ん？」

俺は妙な倦怠感と共に起き上がる。体の節々に違和感を感じる…

「わっ！起きた！」

横にいたピンクの髪の子が扉を開け…

「みんなー！あの人起きたよー！」

と叫ぶと下から4人組が入ってきた。

「大丈夫…ですか？白い人…？」

茶色い髪の子に聞かれ体を見ると右肩に包帯が巻かれていた。姿は白いクウガだ。

「とりあえず…応急処置はしておきました…！」

「ありがとう…でも大丈夫」

そう言う俺は肩にある包帯を取った。

「えっ!?出血も酷いのは何して…血が…流れない？」

俺は頷くと変身を解除した。いつまでもこの姿ってのもアレだし彼女達も変に警戒してる

「おわっ…男の人だ…」

「いやひまり…声でわかるでしょ…？」

「なんか言ってる所悪いけど…君たちは…？」

なーんかどつかで見たような人達だなく…と思いつつ

「私だ！忘れたか？巴だよ！」

「巴…あつ…！」

思い出した！まだ来てまもない頃に1回話したし…

「君たち…Afterglowか！」

「うんうん…」

「まさか想さんが高校生だったのか…しかも花咲川…」

つぐみが色々言いたげな目で呟き

「まあ色々あってな、」

「そして未確認第4号…」

蘭が俯きながら呟く。

「警察が探してるって言ってる人が目の前にいるんだけど…これって夢？」

ひまりが目を擦りながら言う。

「なんで警察達と協力しないんだ？」

巴が俺の顔を見ながら言う。

「そうだよね…巴ちゃん、警察と想さんが組めば無敵だと思うんだけどなあ…」

「まあな…」

「でもさ…」

そこで黙り込んだモカが口を開く

「さっきの回復力といい…人間なの？」

部屋の空気が変わった

「ちよつとモカ…！」

「今はこうやって正義のヒーローみたいになってるけどさ、私達を襲ったりしない保証ある？」

「…」

確かに、モカが言ってることは正しい。あの夢で見た姿。みんなを殺す、4本角のクウガ。いずれ俺もそうなるのだろう…薄々気づいてる。

「モカちゃん…やめなよー！」

つぐみが我慢ならないという風に叫んだ。

「さっきだつて私達を守ってくれたじゃん！」

「つぐみ…」「つぐみちゃん…」「つぐ…」

「うーん…」

モカはまだ信じてないようだ。俺は立ち上がる。

「ケガ、治してくれてありがとう」

そういうと部屋の扉を開けその場をあとにする。

「ちよつ…」

後ろからつぐみの声があったが無視をする。胸が鋭く痛んだ。

(彼女達と…Roseliaやパスペレ…は俺の事どう思ってるんだろう…)

想が居なくなつた部屋に静寂が訪れた。

「つーちゃ…!」

乾いた音が部屋に響く。つぐみはモカを…しばいていた…

「つぐみ…!」

「モカちゃんのバカ!」

そう言うかつぐみは部屋を出ていく。彼を追いかけに行つたのだらう。

「モカ…?」

「つーちゃん…」

「待つてください!」

バイクを走らせようとした彼をギリギリ間に合つた。

「どうした?」

その声は…何かを決めたように聞こえて…酷く悲しくも聞こえた。

「あの…!私!」

「…?」

何を言おうとしたか…何故か頭がくちやくちやになる。

「えーつと…その…助けてくれてありがとう…つぐみ…!…なにかお礼を…!」

そう言うとき彼は目を丸くし…くしゃつと笑つた。

その笑顔を見て胸がドキドキする…

(あれ…?…なんでドキドキしてるんだらう…)

お礼…お礼ねえ…とぶつくさ言いながら近寄ってきて頭に手を置く…

(あ…落ちつく…)

撫でられていた。

「これがお礼と言うことで…」

しばらくすると彼は手を離れた

「お礼って…こんなのでいいんですか?」

「充分だろ。女の命である髪を撫でさせてもらってた。男にしちやあたまんねえだろ」

割に合わなさすぎるとつぐみは思った。同時に、少し胸が苦しくなった。彼はこれしか出来ないんだろうと

「羽沢珈琲店…また来てください!」

と笑顔で言うと、

「おっけー、明日にでも行くわ」

「明日っ!」

「そうだな…あ、」

彼は紙とペンを懐から取り出し何かを書いて渡してくる

「これ、俺のLime。なんかあったら連絡して、最新作出来てそのの試食係としても読んでくれてもいいんだぞ」

「本音…出てますよ?」

くすくすと笑う。面白い人だなあって

「気が向いたら呼びますよ」

「毎回呼んでくれてもええんやで、さつき一瞬通ったがめちやくちやいい匂いしたな、つぐみよ。お前なんかあったのか?そんな顔してるぞ?」

「バレました?実は…」

「なるほどね…つぐみは良い奴だなあ…」

「え?なんで?」

「だってほら、こんな姿見たら誰もがああなるよ。俺だってもしかしたら敵になるかもしれないよ?」

「そんなことはないって信じます！」

「おお：めつちや強気：でもありがと、なんか自信ついたわ。」

「よく分からないけど：どういたしまして！」

「で、つぐみよ。」

「…？」

「モカしばいちゃったの…？」

「あ：はい：あの時はつい…」

「そう思ってるなら今からでも謝りに行ってみたら？多分まだ間に合うしモカもきつと怒ってないよ。じゃ、俺はこれで」

「また来てください！」

「おうよ！」

そう言うのと彼はバイクを走らせていった。そこでふと思うことがあった。

「想くん：免許持ってるの…？また後で聞こう…」

そう言いながら店へと足を運ぼうとして…

「…ん!？」

何者かに布で口を押えられた。

(身体が…力が入らない…想…く…)

せめてもの抵抗。彼のLimeが書いてある紙切れを落とす。

そして車に運ばれた…。

「私：つーちゃんに謝るね…」

「そうだな、それにしても蘭」

「つぐみ遅くねえか？」

「確かに：1回見に行ってみよつか」

4人で見に行く。そして…

「これ：つーちゃんの靴…！」

「まさか誘拐か！」

「これ：紙が落ちてたよ！」

「ひまり!?これって…」

「ああ、八意のL i m eだな」

「警察呼ばないと!」

「まってひまり!」

「蘭ちゃん…?」

「まさか蘭も同じ考えを…?」

巴が言う。蘭も頷く。わかってないふたりに言う。

「彼の…八意の力を借りよう…都合がいいかもしれないけど今はそれしかないよ。あまり騒ぎも大きくしたくないし…」

「もしかしたらつぐみが落としたんじゃない?」

「つぐみは彼を信じて…」

「早速連絡〜」

モカが気合いの入りにくい声と共に追加し早速連絡したのであった。

「誰だ…?」

1度コンビニに寄りトイレを済ませた俺がたまたま来たL i m eの通知を見ると…

パン好きの美少女があなたを追加しました。と書かれていた。しかも通話めちやくちや来てるやん…

また鳴る。俺は仕方なく出る

「もしもし…?」

『八意想で合ってますか〜?』

「その声…モカか?何の用だ?」

『モカ…!貸して』

やけに騒がしい。声の主が変わる。

『もしもし、私だよ。美竹蘭。』

「蘭か、何の用だ?」

また声の主が変わる。

「私たちに力を貸してください…!つぐみが…つぐみが誘拐されたか

ら…!」

ひまりだ。

声の主が変わる。

「都合がいいのは分かってる!でも頼む!」

巴になる。

誘拐?

俺は言葉を理解するのに2秒かかった。そして…

「は…?」

そんな声が口から漏れた

トライチエイサーを走らせる。俺は今、羽沢珈琲店に向かっていた。

(つぐみが…誘拐…)

まだ信じられない。だが俺のやるべき事は一つ、(つぐみを出来る限り穏便に取り返す…！)

リサ達には少し遅れるとLimeで伝えておいた。感がいいのか『帰ってきたら何があったのか教えてね！』

と書いてあった。帰りになんか買って誤魔化そう

「よし…」

羽沢珈琲店に着いた。扉を開けると如何にも重苦しい雰囲気なだれ込んでくる。席につぐみを除くAfterglowのメンバーとつぐみの父母がいた。

顔を合わせると父母が泣きついてきた

「どうかつぐみを…！」

「あの子を…！」

「分かりました、落ち着いてください…」

「とりあえず…つぐみさんの部屋、行かせてもらっても？」

つぐみの父親が言ってくる

「はい…！でもどうしてですか？」

「企業秘密です。」

部屋に招待される。Afterglowのメンバーを入れて母だけは1階に待機してもらった。

「なあ、蘭？」

「なに？」

「俺の事、なんて話した？」

初対面であんな泣きついて来るはずがない

「…別に」

「いやなにめちゃくちゃ気になるんだが…」

後で追求することにしよう。なにか一気に探せないか…

「あ…」

俺はベルトを出す。

「おお…」

「お前らあんま喋んなよ…50秒だけしかなれないがこの姿意外と疲れる。」

「わかりました…!」

「変身!」

俺は緑のクウガになった。

「っ…!」

やはり情報量が多くなる。車の音、歩く音、喋る音、誰かが呻いてる音、携帯が鳴ったり怒鳴る声が聞こえたり…

(まて…今呻き声が…)

俺は呻き声に意識を向ける。タオルなどで口を塞がれているのか？

『んっ!』

確実につぐみの声だ。方角も分かった。

「超変身…!」

赤のクウガに戻る。耳鳴りが残る頭を振り、

「えっ…!」

窓を開けそこから外に出る。2階からなら赤のクウガでも受け身で着地できる。

「見つけたの…!?!」

「ああ!分かった!見つけた!」

俺はひまりの質問に答えバイクにまたがる。モーフイング機能が起動してバイクがクウガのようなカラーに変わる。

(本来なら人の姿になりたいが時間の無駄だ…!)

走らせようとしたとき…何かが一瞬だけ見えた。

「っ!」

なんだこれは…機械?赤の目をしたクワガタの機械が見えた。

一瞬だけ見えたそれを考えたくなるが…

(後回しだ…)

俺はバイクを走らせてつぐみがいるであろう方角へと進むのであった。

「あの人…大丈夫なのかな…?」

A f t e r g l o w はつぐみを助けると言って今飛び出した彼を見ながら、やはり心配は尽きなかった。

「あの人を信じればいいんじゃないの?」

「巴…そんな簡単に…」

「その時はその時、今はあの人にかけるぜ」

「この道を…こつち…!」

街中を右に左に曲がる、もう街中大騒ぎや

(後でどうなるんだろな、これ…)

走らせること5分、街外れの倉庫みたいな場所に着いた。一応付近は歩きで移動(赤のクウガのまま)

草が生い茂ってるのでそこに身を隠しながら近づく

(ここか…大型車が4台…それなりに大きなグループなのか…)

だがその車の周りには人が4人いた

(どうするかな…)

俺は細かいことが嫌いである。

(バレーに気絶させた方がいいか…)

とりあえず赤のクウガでその辺にある石ころを掴み全力投球。

ガスっ…!

と音を立てて1人の頭に激突。血を流しながら倒れた

「おい…!大丈夫か!」

「誰かボスに連絡…!」

また1人、手刀で首をガスリと、

(青のクウガの力をこんな風に使いたくはない…)

と思いつながらあつという間に4人氣絶させる。

「失礼〜…」

4人の服をまさぐり車の鍵っぱいを取り出す。
車の鍵を使い扉を開ける。

(香水くっさ〜)

とりあえず後部座席を覗いてトランクの中身を…

「なんだこれ…」

中には拳銃やら縄やら布やらスモークグレネードやら薬物が突っ込んであった。

「相当イカれてるな…縄と布借ります」

おまけに布には睡眠薬のスプレーを掛けておいてあげた

縄で4人を縛り俺特製の布を口と目に付けとく。最後に手を合わせ

「南無…」

と念仏を唱える。

「よし、車の物資何個かもらおう。」

結局催涙ガス3つとスモークを2つ、拳銃を一丁貰っておいた。クウガから変身解除する。

(勿体ないなこんなヤツらに使うのは)

「ポーチかけといて良かった…」

正面から行くバカではない。裏道を探すべく歩き出して…

「そうだ。緑のクウガになれば…」

あれ？ついさっきまで使わないって？知らないなあ…

緑のクウガになって極限まで強化された聴力と視力を使えば多分楽。

「変身…」

小声で変身する。

「…山奥つてのもあるが、街中より全然ました。」
音で気配を探る。

(裏口があるがその場に2人…俺危ねえな。)

中には人が30人程度、声も聞こえる

『どうする？この女、まだ若いけど』

『最初はやっぱ、遊ぶでしょ』

『やっぱりー?』

『んー!』

『そう慌てんな、まずはこのお香を炊いて…』

『また30分したら来るからな』

『んー…?』

(不味いぞ…!だが場所が近い。ここは…)

俺は強行突破すべく近くの壁を蹴り破ろうと赤のクウガになる。

そして…

ドガアアアン!

と方向にも似た音が町外れの倉庫に響いた。

知らない人達に連れていかれて目を覚ました時、知らないところの知らない部屋の椅子に縛り付けられていた。

周りを見るが変な人が3人いた。とても大柄で怖くなった。

目を覚ましたのを気付くと話しかけてきた

「ようやく目が覚めたかお嬢さん」

下心丸出しの、とてもじつとりとした声に鳥肌が立つ。

「なあに、そんなにビビる事は無い。あともう少ししたら気持ちよくなるからね。」

(やめて…!みんな!誰か!想さん!助けて!)

と叫ぶが自分の口から出るのは

「んー…んー!」

という声だけだった。

「おいお前ら、あのお香取ってこい」

ボスみたいな人が指示して誰かが部屋を出ていく

ボスみたいな人はまるで舌なめずりするように見てから

話しかける

「ここはな、ヤリ部屋なんだぜ、今までたくさんのお前さんもその女と同じようにしてやる」

嫌だ…怖い…

「持ってきたか、つけてと、また30分したら来るからな」

と言いつつ部屋の扉を閉める。部屋の隅にあるお香から匂いが漂う。

甘いような…そんな匂いだ…意識が持っていられる時…

雪崩のような、爆音が鳴り響いた。

「おらどうした！ああ！」

「な、なんだよコイツ…！めちやくちやだ…！」

もう何人と殺りあっただろう。痛覚なんかとうに消えていた。他の姿になる暇もなく銃弾やの人やのが飛んでくる。斬られ、弾丸を撃たれた箇所は血が出て、でもしばらくすると治って、生き地獄だ。

だがその呪われた能力のお陰で進めている。服をつかみ、投げ飛ばし、殴って、叩きつけて

(まるで俺が化け物みたいだ…)

だけどこいつらは許せない。さっきの話を聞いた。今までどれだけの女の人達が屈辱を味わされたのか

だから心を無にする。俺は突き進んだ。

「攻撃が…終わった…？」

気が付くと攻撃は止み、静かな空間へなっていた。変身解除をする。

「っ！」

途端激痛に身体が倒れそうになる。出血が多すぎてフラフラする。

「つぐみ……」

何とか部屋に辿り着き

「何だこの匂い……」

扉を開けるとつぐみが椅子に縛りつけられていた。

匂いの元を探し出し破壊する。

「大丈夫か……!? 今外すからな!」

縄を解きつぐみの顔を見る。顔を見ると……すこし頬が赤い。返事

もぼけーつとしている。

「想さん……私……身体が疼くんです……」

「……へ?」

『おい、八意。』

なんだよアマダム

『この子さっきの匂いをそれなりに吸ってる。ちなみななアレは媚薬な』

「てことは……おい待てつぐみ! 落ち着け! 落ち着くんだ!」

「え……?」

服を脱ぎかけていたつぐみを抑える。失血で足がもたつきつぐみの上に覆い被さる形で倒れる。

「想さんは私とするの……嫌ですか?」

こりやあ重症だな……

「嫌じゃないかもだけどこういうのは好きな人とするもんだ……分かったな?」

そう言いながらつぐみをおんぶしてその場をあとにする。撃たれた身体の傷は治ったが失血まではさすがに無理らしく足取りがふらつく、頭も重い。服も血だらけだ。

つぐみも落ち着いたのか寝息を立てながら俺の背中にいる。乗せて帰るのもありだがバイクの音で起こす訳にも行かないのでバイクの電気だけつけて膝枕状態で座る。

くつぐみ side

「ん…ここ…ってんえ!？」

「あ、つぐみおはよう」

「おはようございます? ってこれ膝枕…ですよね?」

「そうだけど…寝心地悪くない?」

「いやいや全然! そんなことないです!」

「そうか、ならよかった」

安心したように微笑む彼を見て、胸がドキドキする。半分は好きな気持ち?ともう1つは恥ずかしさだった。不審者逮捕まって助けてもらった時の記憶が鮮明になると…

(こんなの私変態じゃん…!)

と叫びたくなる。なんとか誤解を解こうと口を開こうとして

「さっきのはこの媚薬のせいだな。」

と言いながらペットボトルを出した。

「一応ある分だけ回収した後で捨てる。あいつらは今頃警察だよ。」

「そうですか…ってその血!」

服を見ると血だらけだった。

「ああうん、傷は一応塞がってるから大丈夫」

服にはあちこち穴が空き、そこから血が流れていたんだろう。

「私…っ!ありがとうございます…!」

私なんかのために…ここまで傷いてまで助けてくれた人

「ちよつぐみ!泣くなよ!」

困ったような顔をして、そして微笑みながら頭を撫でてくれた優しい人に

恋をした。

〈八意side〉

「落ち着いたか?」

「うん…ありがとう…」

「よし、ほら後ろ乗れ」

バイクに跨り後ろのスペースを開ける。つぐみが静かに座って背中から手を回して…

「あの一…つぐみさん？」

「どうしたの？」

「あの一…これは少し…」

なんとというか密着度が高すぎる。女子特有の柔らかいのが当たってるし頭を背中にくつつけてるし…まあこれくらいは仕方ないのかな

「まあいいか、なんでもない」

(もしかして…鈍感?)

そう思うつぐみに気づくはずもなく、俺は羽沢珈琲店までバイクを走らせた。

〜羽沢珈琲店〜

みんなまだ集まって椅子に座って待っていた。部屋の空気を上げようとするが全て失敗。そこからは誰も話さなかった。その時、入口の扉が開く

「!!」

そして…

「みんな！ただいま！心配かけてごめんね！」

「つぐみ!!」

みんな椅子から立ち上がりつぐみに抱きついた。

「心配したよ〜！」

「うわああんつぐ〜！」

「みんな苦しい…！」

「ごめんつぐ…」

蘭まで抱きついてきて少し驚いた。

「あれ？八意は？」

外を見た巴の顔が少し青ざめる。みんなも見て青ざめる。その中つぐみは…あー…それはそうだよねって1人思ってしまった。

彼は血だらけの穴だらけ服を着て外に立っていたからだ

蘭たちには心配され父母にはめちやくちや泣かれた。

「俺は大丈夫ですから！ほら傷も！」

「ちゃんと…」

「もうやめて本当にげんか…」

「どうしたの!?!」

くうく…と腹の音が鳴り、俺は意識を失った。

大量失血と疲労が原因である。

くつぐみsideく

あの後、もう夜も遅いので蘭ちゃんたちには帰ってもらった。時計を見ると夜8時、彼が寝てから30分たった。私の部屋のベットで眠る彼を見てくすつと笑ってしまう。

(さっきまで、あんなにカツコイイのに…今は弟みたい…)

て…何考えてるの私!?!と思い首を振る。顔がちゃんと見れない。ドキドキする…

誤魔化そうとお母さんが持ってきてくれた食べ物に口をつける。もちろん彼の分も用意されていた。

(…。)

飲み物をすすする音と自分の心臓音だけ響く部屋。

つぐみはこれが恋だというのを自覚した。そしてミルク入りのコーヒーを吹きそうになる。

「げっほ…」

コーヒーカップを置き彼の横に座る。頬をつんと触ってみる。

「ん…」

意外と可愛らしい反応をする。もう1回やってみる。今度はちよつと嫌そうにして…何故か手を繋がれた。

「…!?／／／／」

頭が混乱する。でも…

(暖かい…おちつく…)

手は少し男の人らしい、だけど優しい温もりがあった。この拳を戦いに使ってるんだなと思うと胸が苦しくなる

「ん…?」

「んひゃ!」

思わず変な声を出してしまった。

「あれ…つぐみ?ここは…俺もしかしてつぐみのベットで寝てた?」

申し訳なさそうに布団から降りる。

「んで…手を繋いでた…ごめん…」

「謝らなくていいよ!全然大丈夫!」

「つぐみ…優しいな…きつといい嫁さんになるよ」

「!?あぁ!」

盛大に飲み物を吹いてしまった。しかも八意直撃

「うわっ!?大丈夫!?つぐみ!」

明らかに被害が大きいのは八意くんなのに私を先に心配してくれる。君の方がよっぽど優しいよ

「それよりかけちゃった!大丈夫!」

「うわっ!?ほんとだ!ペロ…」

「何してるの!」

「ブラックもいいがつぐみが飲んでるやつも美味いなって」

「〜!／／／」

騒がしい部屋が収まったのは10分後だった。

「おい八意起きろー！」

「はびっ!？」

先生に教科書でたたかれる。周りに笑いがおこった。

短縮授業1時間目で俺は爆睡してたらしい

「罰としてこの問題を…って寝るなあー！」

「トウルーセ!？」

あの後、家に帰るとRoseliaの人達はまだ居た。カレーを作って待っていてくれたらしい。もう食べてきちやったが断るのもあれだ。事情を説明するとその服装でいるのにも納得してくれた。何かまずいのかと思えば服を見たら…これは確実につくみの私服のシャツに父のズボンだった。

(洗って返そう…)

出された分のカレーは全部食べてRoseliaのみんなを見送ったところまでは良かった。

俺は食べ過ぎによる腹痛と吐き気、貧血による頭痛やのなんやのでトイレにずっと入ってた。

(本気で死ぬかもしれない…!)

と思う程ヤバかった。その格闘は朝まで続き今に至る。正直貧血はどうしようもないし今も気持ち悪さが残る

「八意くん…大丈夫？顔真っ青だよ？」

隣の席の山吹が声をかけてくる

「大丈夫…！全然大丈夫！」

「全然大丈夫くないじゃん…!」

「大丈夫だから…!」

「お前らア！授業中に何してる…!」

この先生怖くね？流石は花咲川女子学園1の数学の鬼教師とだけある。しかも俺だけ当たりが強い。正直鬱陶しい。

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴る。

「今日はここまで、じゃまた明日！」

「次体育だね〜」「ハードル走らしいわ！想！」

目をキラキラさせて俺の肩を揺らすところ。

「やめろ〜ところ、俺は今気持ち悪いんだ〜」

「あら！そんなのね！大丈夫かしら！」

「今日はA組と合同らしいよ〜」

「そうなんだね」

体育は休もう。ついでに休む時間で

(あいつ、ザインの攻略法を考える…)

俺は女子の着替えを見る訳にも行かず教室を出て廊下を歩く。

そしてまた、何者、いや機械の気配が映った

クウガのバイクに合体する…

「馬の鎧」

と誰かの声があったのを最後に現実へ引き戻される。

「なんだったんだ…今の…」

そんな眩きは…廊下の騒音にかき消された

体育を欠席し、一応ハードル走の話は聴いておこうと木陰から見守る。時折こころと香澄が騒いでそれを有咲と美咲が止めるのが見える。類は友を呼ぶ…なんの類かは言わないが…

「馬の鎧…一応覚えておこう。」

ザインの攻略法を編み出すべく頭を使う。時期は夏、7月と言うのもあるのかすぐ頭が熱くなる。座ってるだけなのに少し汗が出る。

(あともう少しで夏休み、の前に…期末テストか…)

その時、体育の教師の言葉が耳に入る

「いいかー！ハードルはな普通にジャンプじゃ多分超えられない。ちゃんと助走で力をつけて飛ぶと楽だ！頑張れよ！」

女の人のはずなのに異様に声がデカいと思いつつ…赤のクウガの

考察を立てる。あのキック、今までは苦し紛れの的なことになっていたが…

『助走で力をつけて飛ぶと楽だ!』

先生の声が頭の中で響く

「そうか!」

思いっきり叫んでしまった。視線が一気にこちらへ集まる
「すみません、なんでもないです。」

俺は少し、恥をかいた…

その後の授業も俺は考え続けた…何回怒られたのやら…

「なんか今日ずっと上の空じゃなかった?」

鞆にももの突っ込んで廊下を出ようとした時、山吹に言われた

「なんでだ?」

「なーんかいつもの君ならありえないミスとかしてたし」

「俺は優等生でも何でもない、ちよつと考えることが多くてな」

「そっか、気をつけなよ。最近は何騒だからね」

「ありがと、気をつけとく」

俺はそう返し教室を出た。

教室からバイクに跨るまでの間に黒服さんに連絡をした。

『特訓できるようか部屋…あります?』

『ありますよ?22号に関わるんですか?』

流石は黒服さん、飲み込みが早い

『そんな感じですよ。』

『分かりました、手配します。今日お使いに?』

『いいですか?』

『もちろん、大丈夫ですよ』

と、こんな感じで許可を貰った。その代わり…

「想のバイクはやっぱり凄いわ!」

そう、今俺のバイクで2人乗りしている人物、弦巻こころだった。

『その代わり、私達からお願いがあります』

『はい、』

『ごころ様と御一緒に帰って来て欲しいのです』

『なるほど…分かりました』

なんの狙いがあるかは知らんがとりあえずこころを迎えに行き（あつちこつちさまよつてるところを捕まえてバイクに乗せる）なんか女子達からはキャー！やのなんやのいわれてたがなんだったんだ…

「赤信号だわ！想！」

「え…おわっ!？」

あつぶねく…あともう少しで信号無視になる所だった…

「さつきから難しい顔をしてるけどどうしたの？」

「いや、なんでもねえよ。それより行くぞ」

「…?ええ！」

く弦巻邸く

「お帰りなさいませ、こころ様。いらっしやいませ八意様。」

「ただいま！」「うっす」

「こころ様はこちらへ、八意様はこちらへどうぞ」

手際がよすぎるメイドさん達に感心しつつこころと別れる。

案内されたのは体育館みたいな広い場所だった。倉庫があるのでチラ見すると…バレーやバスケのセットなどがあり便利だなと思っ
た。

「しばらくお待ちください」

と言われ1人になる。やる事が無くとりあえず周りを走りながら色々な場所をみていく。倉庫やトイレがあり、何故かは知らんが更衣室まであった。

「どこの運動施設だよ…」

と呟く。だからこそ…後ろから迫ってくる気配に反応が遅れた。

「っ!…っつて黒服さんかあ…」

「反応が遅れましたね?何か考え事でも?」

貴様はエスパーか?

「エスパーではありませんよ?」

「なんで分かるんだよ…」

まあ追求はやらないとして…

「唐突に後ろから急襲とか…黒服さん何者？」

「ただのSPですよ。」

「ナニソレコワイ」

「ところで、今日はどんな御用で？」

「えっと…」

俺はこうなった経緯を全て話した。

「つまり…赤のクウガのキツクの時に全力で助走を付けてジャンプし低軌道から飛び蹴りをぶちかますと…？」

「そゆことです」

「それなら空中回転しさらに威力を挙げるといふのはどうでしょうか」

「なるほど…流石は黒服さん…！」

「その練習ですか？」

「はい！」

「まず空中回転出来るんですか？」

「クウガになれば…多少身体能力も上がってるみたいですし…」

「…わかりました」

そうして俺は特訓を開始した。

「ぜえ…はあ…」

初めて2時間、ようやく成功した。頭を打ったり背中ぶついたりして痛い思いしながらようやくだ…もう一度立ち上がる。手順としてはこうだ。

両腕を開いて腰を落とした構えを取る

敵(的)に向かって走り出す。右足に精神を集中させるこの際、足の裏から炎が上がる。

タイミングを見計らってジャンプ、ここで空中回転しさらに威力を挙げる

と叫びつつ飛び蹴りをぶちかます。
敵の身体を蹴り、膝をついて着地。

「はあ…はあ…出来た…！」

崩れ落ちて仰向けに倒れる。そして変身解除。時計を見ると時刻は夕方6時。ざっと2時間していたことになる。

「想〜！」

誰かが走ってきて寝転んだまま上を見るとところ達がいた。

「あ、想さん。こんにちは、こんな所だなにしてるんですか？」

「美咲か、よう。ただの運動だ気にすんな」

「その割には汗すごくないですか？熱中症になりますよ？」

「あ〜…」

あとから3人が入ってくる、ハローハッピーワールド全員集合だ。

「お前らこんな所で何してんだ？」

「ハロハピ会議よ！」

「会議…？」

意外だ。コイツら会議出来るんだ。

「会議室に招待するわ！」

俺が褒めたのはすぐに打ち壊された。

「なんだ…これ？」

「ホワイトボードよ！」

「いやそれは知ってるよ？」

俺が気になるのはホワイトボードに書いてあることだよ。ハッピーやのミッシェルやのなんか色々な絵が書いてありしかも微妙にわかりにくい。

「はあ…なんか頭痛くなってきた」

頭を抱えながら椅子に座る。横にいた美咲が声を出す

「私も最初は頭が痛くなりましたよ。でも今じゃ慣れました」

淡々と告げるが俺にはそれが嬉しそうに見えた。あえて口には出さず「そうか」とだけ答えた。

「出たよ、薫の謎の1人芝居」

はぐみに対してなにかしているがはぐみはキョトンとしていた。多分分かってない

で結局、夜の7時になって解散となった。なんのために呼ばれたのだろうと言う疑問と共に弦巻邸を後にしコンビニへ向かう。

(キックはもう多分大丈夫)

あとは運次第で勝てるという自信と共にコンビニへはいる。弁当と水のペットボトル2本、明日の朝と昼の菓子パンを持ってレジへ行
く…

「あ、「おおく」

「げっ…」

レジの人は…リサとモカだった。

「また弁当じゃん」

「食えりや何でもいいんだ」

「健康に悪いですぞ」

「食えりや何でもいいんだ！」 ↑2度目

「なんの帰り？」

モカが袋に詰めてる間に金をリサに渡して話す。

「ハロハピに拘束されてた」

「何それどういう状況…？」

「まあ色々あってな、」

「はい、どうぞ」

「ありがとモカ」

袋とお釣りとレシートを貰い店を出る

「ありがとうございました！」「しゃいーん」

「しゃいんってなんだよ…？」

家に帰りまずタマにご飯をやり撫でくり回す。ご飯をめちやく

ちや食べるタマを微笑みながら弁当を温めるべく袋から取り出して
…なにか紙が落ちる。

「なんだこれ…？」

畳まれた紙を開いて中に何が書いてあるか見る。

「モカめ…」

微笑みながら言う

『このあと空いてるから連絡ちよーだーい』

とLimeのIDが書いてあった

「もう交換してるだろ…あいつめ」

タマが足に擦り寄ってくる。

「どうしたこの甘えん坊め〜」

その夜は久しぶりにゆっくり寝れた気がした

く花咲川女子学園く朝休みく

昨日はよく眠れたからか結構体の調子が幾分かいい。

「おはよう！想！」

「おはよう、こころ。朝から元気だな」

「ええ！私はいつでも元気よ！」

ほんと、元気なのは尊敬するよ。ちゃんとタマにはご飯や水やもあげたし、

「そういえば…おやつもう少しで無くなるな」

帰りに買って帰ろう。そんなことを考えているとチャイムが鳴る。ホームルームが始まった。みんな色々言いながら席に着く。俺も席につき欠伸を殺す。

3時間目、あと1時間で終わると言う時に

外で何かが爆発する音がした。その次に

放送が流れた。いつもより慌ただしい先生の声でただ事じゃないことを察す。

『花咲川女子学園に未確認生命体22号が入ってきました！』

「え!？」

『生徒の皆様は速やかに先生の指示に従い避難を開始してください！』

みんなで廊下に出て、やはり混雑していた。

俺は1人、抜け出すタイミングを見計らっていた。

(くそ…！早くしろよ…！)

心配の声などが聴こえる。一瞬校門を見た。

「なんだ…あれ」

トラックが校門を突き破ってそこで爆発していた。あの爆発音にも納得が行く。後に警察車両が何台か止まっていた。

1階まで来てようやくやくタイミングができて走り出す。窓から身を

乗り出し走る。何名かの生徒が気づいたが自分最優先で無視をした。
俺は裏まで行くとベルトを出し

「変身！」

青のクウガに姿を変えた。

「青……移動用にはもってこいだ……！」

ジャンプし屋上まで飛びそのまま運動場へ、みんなが逃げているのを背景にし、俺は向こうをむく、あっちこっちに拳銃が転がり、人が転がり、生徒はそれを見ないように必死に走る。俺は近くにある外掃除用のほうきを取り出し武器に変えた。

「ようやく来たな、クウガ！」

最後の警察官をぶっ飛ばしたサイ野郎

「俺の名前は、ズ・ザイン・ダ、貴様を殺す名だ！」

と言うと叫んで突撃してくる。避けようとするが後ろにまだいるのに気づく。ロッドを足にぶつけ、コケさせる。

その姿を後ろにいた紗夜や千聖、彩や燐子は見ていた。皆それぞれ（負けないで……！）

という思いを込めて……

俺はロッドを構えて詰め寄る。ザインは起き上がり腕を振るう。

「っ!?!」

間一髪ロッドを盾にするがへし折れる。後ろにバク転し躲す。

「超変身……！」

俺は同時に赤のクウガに姿を変えて殴りにかかる。ここからはだの肉弾戦だ。

「……っ!?!」

腹に2発入れる、相手が後ろに下がる、俺はその隙を逃さず肘打ちを入れる。相手が負けじと腕をつかみ回す。

「っ……ぐあ……!?!」

変な方向に曲がり掛けている左腕がミシミシと音を立てる。

「ふっ……！」

右腕でしがみついているザインをぶっ飛ばす。仰向けに倒れるザインに馬乗りになり顔を殴るがすぐに横に投げられ転がる。

ザインは俺の後ろに立ち首を絞めた

「くおお……」

肘打ちで何とかひっぺはがす。ザインは後ろに、俺は前に倒れた。息付く暇も無しに両方同時に立ち上がり同時に、俺はザインの顔を、ザインは俺の顔を殴る。鈍い音が響き、俺は顔の骨が折れるという経験をした。しばらくすれば治るが。

ザインが突撃をかまし殴ってくるが腕でガードする。そして今度は俺が2発腹にパンチを決め顎めがけアツパーを決めた。

ザインが呻いてる間に俺は数歩後ろに下がった。

「ふっ……」

両腕を開き、腰を落とし構えを取る。

精神を足に集中させる

足に確かな熱を感じザインめがけ走り出す。

この際、足の裏から炎が上がっていた

「ウオオオアアア！」

ザインが立ち上がり吠える。

あと数歩というタイミングを見計らってジャンプ

「はっ……」

ここで空中回転しさらに威力を高める

「うおりゃあああああ!!」

俺はザインの頭めがけキックを放つ

バキンという音が鳴り響いた。

片膝をつけて着地する。

「はぁ……はぁ……」

右足からは煙が出ていた。相手を見ると角がへし折れそこに紋章が出ていた。このタイミングを逃せば次がない。

「この程度のキックで……っ!?!」

ザインはこの前見たく紋章を消そうとするが…

消えなかった。

「そんな、俺は…こんな所で終われない…！」
そして…

「クウガアアアアア！」

ザインは、爆発四散した。

俺立ち上がってザインに向けて一言放った。

「来世ではいいマッチョメンになれよ」

俺には何故か、悲しく見えた。

闘いは…終わった。

俺は今、ある意味戦っていた。それは…どうやってみんなの所に戻ればいいのか。

「八意さん？」

「はいっ…!?!」

後ろには紗夜が立っていた。

「あなたはふらふらと…なんてのは嘘ですよ。倒せましたか？」

「一瞬怒られるかと思った」

「もう…」

俺は親指を立てながら

「もちろん倒した」

と答えた。

「そうですね、ならよかったです。」

そう言いながら振り返り向こうへ歩いていく。俺はその後ろをついていく。

「期末テストはどうですか？」

「うっ…」

「その反応…」

「やってないです…」

「はあ…今日、暇ですか？」

「暇ですけど」

「なら私の家に来てください。勉強を教えますよ」

「まじっすか…！ありがとうございます…？」

「どうしましたか？」

「紗夜さんっ…風紀とか気になさらないんですか？」

「…。貴方はそんなことをする人には見えません。」

「今の一瞬なに？え？」

「行きますよ…！」

歩く速度を速めた紗夜について行く。夏場の日差しが俺達を照らしていた

第三章 メ集団

page 37 勉強会とカッターと協力

ザインの件から2日たった。店も殆どが閉まるか時短営業。外で見かける人も少なくなり街の賑わいも少し消え悲しい雰囲気が漂っているなか俺は…

「そこそこそこも違います」

「ええ〜…!」

「想くんって意外と頭悪いんだ〜意外…!」

「うぐっ…」

俺は今、双子の女子に挟まれながら勉強している。しかも2人ともスペックが高いのである。普通なら嬉しいかもしれないが今は早く帰りたい。だって…

「はあ…」

俺は目の前に大量に積み上げられている教科書やワークをみてため息をついた。

「ここここここは…」

「紗夜、ストップ。これ以上すれば俺は死にたくなる」

真顔で紗夜に言う。日菜も

「おねーちゃん、少し休憩しようよ、さすがに2時間ぶっ続けは想くん死んじゃう」

「日菜まで…はあ…少し休憩にしましょう」

日菜と紗夜も仲が良くなってきたのか前より会話が多い。俺は微笑ましく思い見ていた。

「可愛い日菜ちゃんに見とれちゃった?」

「んなわけあるか」

「いてっ…おねーちゃああん!想くんがいじめる〜」

日菜がにやにやしていたので軽くデコピンをしておく、
(ほんとに日菜は姉好きだな)

「そういえばお前ら、母親父親はいないのか?」

「お父さんもお母さんも海外出張で1週間はいないってさ」
「へー、このご時世あれなのにな」

日菜がテレビをつける。

『決して川には近づかないでください!』

と女性ニュースキャスターの声。

「なんだなんだ?」

俺も日菜も紗夜もテレビを見る。

文字には

『先程、警視庁で公表された未確認生命体23号、2日で40人殺害』
「40…」

『水上バスや釣り人を次々と襲撃。中にいた大人も子供も全員死亡』

「そんな…」

日菜が怯えたような声を出す。そんな声、初めて聞いた

隣にいた紗夜も

「ひどい…」

と手を口に当てて震えていた。その中俺は1人、微かな怒りを感じていた。前に聞いたゲーム。つまりこいつらは殺人をゲームとしか考えていない。子供も関係なく殺す。

『警視庁は、今後嚴重な警戒態勢と共に操作を進めております。』

俺はテレビを消した。なんというか見てられなかった。

「八意さん…?」「想くん?」

2人が心配そうに見てくる。俺は

「あんまり残酷なニュースは見たくない、それよりも昼飯にしよーぜ! 俺料理はほとんど出来ないし出前か俺が適当にハンバーガー持ち帰りするぞ。俺の奢りだ」

と怒りを悟られないように言うが…

(八意さん…)(想くん…)

(私達の気を使ってくれてるんだね…)

2人は視線を合わせ、考えてることが同じだとわかると少し微笑んで

「奢り！やったー！じゃあね…」

「日菜、あまり食べすぎは…」

「おねーちゃん！このポテト美味しそうだよ！」

「…。」

「もしかして紗夜さん…」

（5分後）

「行つてきまーす」

靴を履き玄関から出ていく彼を2人で見送る。

「おねーちゃん。想くんっていつもああやって一人で溜め込んでるのかな」

「日菜…？」

「なんとなくだけどね、今の想くんなんか複雑。あのままじゃ精神が擦り切れちゃうよ」

珍しく声を落として喋る日菜

「そうね…彼はそういう人だもの。力になってあげたいと思うのだけれど…」

「私達の次元じゃないもんね…」

はあ…と二人でため息を着く。

「ところでおねーちゃん！」

いつものトーンに戻った日菜が呼んでくる

「どうしたの日菜？」

「おねーちゃんって想くんの事好きなの？」

「ええ!？」

思わず叫んでしまった。

「その反応…好きなの!？」

「好き…なのかわからないわ」

おかしいのだ。最近彼の近くにいると身体は落ち着くのだが心はなんとなく忙しくなる。正直にそんなことを日菜に話すと

「それ恋じゃん！」

と言った。

「逆に日菜はどうなの？」

「私は好きだよ！優しいしカッコイイしまた違うるんっがするの！」
まさかの認めた。だが同時に少し心の奥がチクリとした。

(…？何なのかしら、今のは)

日菜にこの気持ちを伝えようとして…日菜はトイレに行っ
てしまったようだ。

紗夜は妙に落ち着かない雰囲気ですマホを取り出したのであった。

「やっぱりポテト好きだな…あの二人…」

ポテトやハンバーガーを冷めないうちに持って帰ろうとバイクを
走らせる。

「うわああー！」

「!？」

橋を通りかかった時下から悲鳴がした。俺は慌ててバイクを止め
る。バイクから降りて下を見ると、川で作業していた作業員達が次々
と襲われていく。ここは花咲川でもそれなりにでかい川…マップで
見たが…

俺は橋の上でベルトを出して「赤のクウガ」に姿を変えた。

橋の上から飛び降り怪物を殴る。川に飛んでいき水しぶきをあげ
る

近くにいた作業員を助ける

「よ、4号…！」

「いいから早く逃げて！」

みんなを走らせ逃がす。

「ウオオオアアア！」

川から足音と咆哮がし振り返ると右腕で切りかかろうとしていた。

左腕で受け止め右腕で殴る。

また切りかかろうとするので体勢を低くして右で肘打ち、後ろへ少

しノックバックした相手目掛け蹴りを入れようとするが上に飛び避けられた。

「っ!？」

超低空飛行しながら左から突っ込んで切りつけようとする腕をころうじて避ける

「っ!」

速い。攻撃がはやすぎる。今度は右から

「…!」

これも何とか避けるが石で体勢を崩し後ろにあつた鉄骨を何本か倒す。

「うっ…!」

左から来た攻撃を後ろによるめきながら避けるが…休憩所のテントの骨にあたりテントが崩落する。その下に巻き添いになる

「くお…!」

何とか屋根が降ってくるのを両腕で支えるが…上に誰かが乗る気配がし両腕を離して何とかほぼ這いずり状態でテントから出る。テントは確実に崩壊した。立ち上がり後ろを見ると相手が目の前で攻撃モーシヨンに入っていた。後ろに下がり…だが鉄の柵にぶつかり柵と一緒に後ろに倒れた。

「っ!」

仰向けに倒れた俺を踏んづけてくるが両足で尻を蹴飛ばしこっちに倒れようとしたので手で押し向こうに倒す。さながら尻もちだ。

俺はその間に立ち上がり相手と同時に殴り合う。奴の腕に付いているカッターみたいなのには当たったたらダメというオーラを放っていた。第一さつきからやつは攻撃はそのカッターを俺に切りつけてこようとしている。

攻撃をいなし、殴り蹴り飛ばす。後ろにノックバックした相手にすかさず追撃し2人も足が川に入っていく。足が水に取られて圧倒的に不利だがそこは気合いで

「いける…!」

俺はジャンプし殴りかかろうとした時

またあの機械が目映った。空を飛び、動き回っている

「まただ……なんだ今のは……！」

その一瞬に俺は気を持っていかれ、攻撃を避けた相手が俺に反撃をする。

左膝に痛みが走り力が抜ける。水の中で膝立ち状態になった俺に對し容赦ない攻撃をする。

胸の辺りに、右腕に痛みが走る。

「くっ……！」

膝立ちで相手の猛攻をなんとか止める。両腕を両腕で掴み相手が引きはがそうとするのを阻止するが相手は鋭い牙で俺の胸あたりに噛み付いてきた。しかもさっきの攻撃で切込みが入った場所に、肉がちぎれる不快感をと激痛に悲鳴をあげる

「ぐっ……ああ！」

「ふっ……！」

俺は引き剥がすべく肘打ちする。相手が後ろに下がり……

「超変身！」

俺は紫のクウガになる。相手が走り俺に腕のカッターを切りつけてくるが「キーン！」と言う音がしそのカッターは俺の鎧を傷つけることなく防御していた。

「……っ！」

俺はその腕を払い除ける。相手は驚いていたが諦めずに何度も切りつけていた。だが一撃も通らない。だが俺もトドメがさせなかった。紫のクウガは剣がないとただの防御馬鹿。今は川のだ真ん中にいて周りに剣に変換できそうなアイテムが無いのだ。

……

殴ろうとして飛んで避けられた。そして右腕の肘あたり、鎧がないところに噛み付いてくる。

「ぐっ……うああ……！」

俺は激痛に絶叫しだが噛み付いてくる相手の顔をぶん殴る

「俺は食っても美味くねえよ……！」

さらに殴りをいれようとしたその時、後ろから銃声が出た。

「!?」「?」

たちまち俺の目の前にいた敵に玉が数発ヒットし相手の体から煙をあげる。

(この匂いは…ガス弾か…!)

相手はたまらないというふうに入りにどこかへ泳いでしまった。

岸の方を見ると、何人もの警官がいた。一応助けてもらったから礼を言わねばと思い、青のクウガになり一気に岸へ飛ぶ。「うおっ」とみんな警戒するが

「援護ありがとうございます!」

と言いきくめがけ飛ぼうとすると…

「ちよつと待ってください!」

と声をかけられた。服装を見るから立場が上なのだろう

「なんですか?」

と不機嫌に声を出す。待ってる人がいるから早く帰りたい…ポテトとハンバーガー…冷めただろうな…しかも地味にあっちこっちが痛い。早く帰りたい…

「俺達警察と…手を組む気は無いか君、」

「手を組む?」

俺は考える素振りをする。確かに警察を手を組めばあれかもしれないが…

「考えておきます」

「そうか、決まったらここに連絡してくれ。待たせて済まなかったな。」

そう言いながら紙を渡してくる。そこには電話番号が書かれていた。

一条悠介…彼の名前か…

俺は頷いてバイクを跨りその場をあとにした。

「たっだいま〜！遅れた！」

「嘘はつかなくて結構ですよ。ニュース見ましたから」

と紗夜

「服ちよつとボロボロだしすぐバレルよ〜」

と日菜

「なんだよ、分かったのか」

俺たちは遅めの昼食を取った。なんとというか日菜めちやくちや食
べる：紗夜もなんやかんや言いながら結構食べていた。そんな光景
を見ながら俺は考える

（一条悠介：電話してみるか）

「ちよいと電話してくる」

昼ごはんを食べる3人でゴロゴロしていた。

「はーい!」「ええ…」

「部屋借りていいか?」

「私の部屋行ってもいいよ!」

と日菜が指さすので

「ありがと日菜」

と言い部屋に入る。

「なんだ、意外と綺麗な部屋じゃないか」

あの日菜のことだから部屋は少し汚いかなと思ってたが想定外。普通に綺麗であった。

「俺は部屋を見に来たんじゃないだろ…」

と自分でつつこんでおく。スマホをズボンから取りだし「いてっ…」

右腕に痛みが走りスマホを落とす。画面は割れていない。

「まだ治ってなかったか…」

大丈夫!?!と向こうから聞こえたので大丈夫!と言い少し震える
右で電話番号を打ち電話をする。

プルルル…プルルル…

3コール目繋がる音が聞こえ

『もしもし、どちら様でしょうか』

と声が聞こえた。

「一条悠介さんであってますか?」

『あつてるが君は…?まさか…』

「はい、4号と呼ばれる人です。名前は八意想です」

『そうか、八意くんか。この電話の意味は…』

「まだ協力するとは言ってません。少し話がしたいんです」

『ふむ、わかった。今日の夜、ファーストフード店があるだろ、そこで

『どうだ？もちろん俺一人だ』

「わかりました。」

部屋から出ると…

「ばあー！」

「おわっ!?!」

日菜が出待ちしていた。

「なんだよ…びっくりするっての…」

「何話してたのー!」（盗み聞きしたけどね）

「教えるわけないだろ…」

「どうせ未確認生命体関連でしょー」

「うぐっ…」

なんでこいつはこう鋭いんだ色々…

「あつたり〜!」

「日菜…なんか奢るからそれでチャラな」

「どうしよつかなくま、いいよー!」

なんとかなったと思いつつ時計を見る。ちょうど4時、待ち合わせにはまだ3時間もあるが…

「紗夜、日菜、俺帰るわ」

「ええ、わかりました」

「ええ〜!」

「また来るから…な?」

「それならいいよー!」

さつきとは一転し笑顔になる日菜。なんかこう犬っぽい

「:／／／」

気がつけば俺は日菜を撫でていた。

「おっと…すまんすまん…:…:…:日菜?」

なんか急にしおらしくなった。

「い、いやーなんでもないよー!」

多少だが顔も赤い…まあいいか

「あ、それと紗夜」

「?」

「今日、NFOしようぜ。周回がしたい」
笑顔で言う。

「いいですよ。宇田川さんと白銀さんも一緒でもいいですか？」

「そりゃあ賑やかだな。俺は大丈夫だ。じゃあ2人とも、」

「ええ」「まったね〜！」

そうして俺は氷川家を後にした。

〜夜7時〜ファーストフード店〜

俺はバイクを止め中に入ると端にいた。

「すいません。八意想です。」

と声をかけると少しぼかんとして…

「君が八意想か…まさか高校生？とりあえず座ってくれ」

俺は一条と名乗る人物の反対側に腰掛けた

「高校生ですよ」

「そうか…高校生でこんな事件に巻き込まれるとは…災難だったな…」

「大丈夫ですよ。慣れましたから」

「本来なら慣れたらダメだけどな…危なすぎる」

「俺がやらなきゃ誰がやるんですか」

「確かにそうだな、ちよつとまで俺たちは嫌味を言いに来たわけじゃない」

そう言いながら鞆から資料が入った茶封筒を渡してきた

「とりあえず、俺からアイツのことを話そう」

「奴の名前は未確認生命体第23号、アイツは川を泳ぐ速度が異様に速い、そして大体の死因が失血死だった。そして君が助けたあの作業員は当時手を怪我して血が流れていた。このことから奴は嗅覚が異様に発達して血の匂いが好きなんじゃないかと言う推測が出る」

「血の匂い…」

「あくまで推測だがな、そして我々は今、人工血液を作り出した。それを俺がボートで振りまきおびき寄せ君がその力で叩く。どうだ？」

「人工血液…」

「本来は医療だが…今は仕方ない」

「わかりました…協力しましょう」

「そこまでされると断りにくい…」

「本当か!？」

ガタンと立ち上がり叫ぶ…周りを見渡し少し顔を赤くして「すみません…」と言い座り咳き込んだ。

「本当にいいのか?」

「ええ、」

「ありがとう…済まないな…本当なら勉強に励みたいだろうが…」

「そんな顔しないでください。頑張りましょう」

「君は優しいな、ありがとう」

俺と一条雄介は握手をし今日は終わった。

『作戦開始は明日になった…急だが行けるか?』

とメールが来て

「えええ!？」

と叫んでタマに引っかかれたのは別のお話

「ふわあ〜…」

盛大な欠伸と共に起き上がった。

「タマ〜」

冷房は朝の4時から予約してある。ちなみに冷房は一日中着いている。こんなクソ暑いのにネコが可哀想だろ！

とりあえずコーヒー片手にテレビをつける。朝のニュースというのはやけに騒がしい。朝飯を食い終わり食器を洗いタマとじゃれ合う

「午後2時か…」

ふとタマを撫でる手を止める。今は午前11時、作成開始まであと3時間。1時間前には俺は警視庁で待機となっている。妙に緊張してしまうのだ。

／ピンポン／と音が鳴る。

「はいは〜い誰だ？」

扉を開けると…

「やつほ〜☆」

「こんにちは」

笑顔な今井リサと真顔の湊友希那がいた

ボタン…

扉を閉めてしまった

『えっ！ちよつと…?!開けてよ！外暑いんだよ!?!』

扉を開け…

「なんで連絡も無しに来たんだ…?」

今井リサを家に入れたのであった

「いや〜涼しいね〜」

「おばあちゃんか?」

「立派なJKですう〜」

俺は冷蔵庫から麦茶を取りだしコップに注いで出す。向こうで幸せそうな顔をしてタマと触れ合う友希那にも渡す

「何の用だ？俺は2時から予定があるぞ」

「なんとなく？暇だし」

「そうか帰れ」

「ひつどーい！」

「ふふふ…にゃーんちゃん…」

ダメだ確実に1人別の世界へお行きになさってる…

「その子、タマって言うんです」

「!? そうなのね、失礼したわ」

いや凛々しくなられてももう遅いよ？という疑問をもつが凛々しくなっても口が緩んでいることに気づく

「こちらこそ…」

これ以上時間を邪魔しないようにリサの方へ行く。

「友希那ってほんとネコには弱いんだよね」

「へえ…：そうなのか」

その後、様々な話をした。友希那の過去やのRoseliaのお話を聞いた。

なんていうかこうグツとくるものがあり泣きそうになった

〜午後2時〜

リサと友希那たちには帰ってもらい（友希那は最後まで名残惜しそうにしていた）とりあえず帰ってもらった。

「作戦予定地は…ここか」

前戦った場所よりも大きい川に着いた。

着くと既に待機していた。一条さんだけ？なにしてんの？

「来ると思ってたよ、こっちは準備満タンだ。いつでもいけるが君は？」

「いやいやその前に、俺達だけなんですか？」

「ああ、他の人達にはまた違う調査をしてもらってる」

「そうですか…」

ボートを見ると中には銃があった

「あの…これは？」

銃を指さす

「君の援護用を持ってきた」

「そうですか…」

突然腕時計を見た一条さんがボートに乗り込む

「作戦開始だ」

「一条さん！拳銃貸してください！」

「…？いいが…何をやる気だ？」

腰から拳銃を取りだし俺に投げ渡してくる

「変身！」

俺は拳銃片手に緑のクウガになる。握っていた拳銃がボウガンに変わり、一条さんは「おお…」と声を出していた。

「っ…一条さん、この姿はあまり持ちません！早くお願いします！」

「ああ、わかった！」

一条さんはボートを走らせ始めた。後ろから人口血液が流れ出す

「っ！」

頭に激痛が走る。聴覚強化はこれだから…集中だ！俺は途切れかけていた集中をなんとか川に戻す。

30秒たっただろうか…まだやつはいない。

(なぜだ？なぜこない…)

時間切れを感じ

「超変身」

赤のクウガに姿に戻す。一条さんもボートで首を傾げていた。

「なぜこない…？」

その時だった。一条さんの乗っていたボートが右に左に揺れていた。操作がきいていない…いやよく見ると、後ろのエンジン部分に誰かがしがみついていた。正体なんか嫌でもわかる。

「超変身！」

俺は青のクウガになりジャンプしボートに乗り込んだ。ボートは

大きく右に傾いて……転倒し俺を含めた3人が川に沈んだ。俺と相手はしがみつきながら水上に上がる。俺は左肩を切り裂かれ右は何とか阻止。

「っ！」

左肩の傷に川の水が染みる。だが俺は粘り強く戦う。腰から下は水の中、相手は魚。不利だが俺は青のクウガの身軽さでカバーする……（いなすことしか出来ない……！近くにロッドになりそうなものは……）

「っ！」

胸を切り裂かれる。痛みに膝を着きそうになるが耐える。俺も腹に1発拳を入れるがあまり効いてはいない。

「ふっ！」

右と左から攻撃がくる。躲して、また躲して、相手が右肩に飛んで噛み付いてきた

「ぐあ……！」

横腹を殴る。周りを見渡す……

「あつた……！」

水の上に木の棒が浮いていた。しかし川の流れが少し早く流れていく

「はっ……！」

敵の攻撃を躲すため飛び上がりそのまま木の棒を腕を伸ばして取る。

「……！」

自分でも器用だと思う。少し短い木の棒をロッドのように扱います。青のロッドに変わる

リン……リン

という綺麗な鈴の音を鳴らしロッドが伸びる。

泳いで近づく相手にロッドを叩きつける。右腕のカッターをロッドでガードしよう片方を相手にぶつけ両足で飛び蹴りをぶちかます。相手は後ろに下がり俺は背中から全身を水にドボンした。何とか起き上がりロッドを構え直す。そして……

「ふっ……！」

俺は高くジャンプし

「おりゃあああ！」

ロッドに全力を注ぎ先端を相手の右胸に突き刺す。キュイン！という確かな手応えと共に俺は土手下に離れる。直後…

「ウワアアア！」

という断末魔と共に相手は爆散した。

「はあ…はあ…っていつてえええ!?!」

俺は気が抜けたのか全身の痛みを一気に感じロッドを落とす転がり回る。ロッドは元の木の棒に戻りその場に留まる

「いつてえ！肩も胸部分も切り裂かれてるいてえ！」

「おい！八意想！大丈夫か！」

「一条さん!?!ああえつと痛いです！」

「そうか！痛いのか！救急車呼ぶからな！待ってる！」

変身解除した俺は全身びしょ濡れの傷だらけのヤベー奴だったしいい歳したやつ2人が騒いでたら人目に付く。

「一条さん…！目立つから少し静かに…」

「お、おう…すまん、あと少しの辛抱だ…がんばれ！」

「俺は妊婦じゃないですよ…」

ほんと、一条さんは真面目なのか馬鹿なのか…わかんねえや…

この後駆けつけた救急隊員に

(またこの人?)

みたいな顔をされて早く帰りたくなった。

〜羽沢珈琲店〜

「体調はどうだ？ 八意想」

「相変わらずフルネームですね。大丈夫ですよ、ほら肩もちやんと回る」

実演してみせる。右肩を、次は左肩をくるくるとすると俺の話し相手、一条悠介は目を丸くしながら注文したコーヒーを飲んでいた

「君の回復力は凄まじいな。それもベルトの霊石の力なのか？」

「ああ、俺はそう思ってます」

そう言いながら俺もコーヒーを飲む

「学業のほうはどうなんだ？」

と気さくな質問。コーヒーを飲む手が止まる。

「うっ……全然ダメです……」

「確かに未確認生命体で忙しいのはあれだが出来る限り勉強しておけ、将来の役にも立つ」

「将来……ねえ」

俺に将来の夢をみつかる期間なんてあるのだろうか。いつ死ぬかも分からない戦いをやって、もしかしたら死ぬかもしれないのに。

「死ぬかもしれない、そう思ってるな？」

ケーキを一口食べ飲み込んだ一条さんが聞いてきた

「えっ、なんで分かったんですか？」

「なんとなくだ」

「はあ……なんとなく……」

「死ぬなら死ぬであれだから死にたくないっていう理由を探してみたらどうだ？ 例えば……そうだな……すいませーん」

そう店員さんと呼ぶと

「はーい！ 今行きますー！」

奥からパタパタとつぐみが走ってきた

「よっ、つぐみ。さつきぶりだな」

「あ……／＼さつきぶりです……」

どうしたつぐみ？いつもより声が小さいし顔も赤い？

「これは脈アリか？」

一条さんがニヤニヤしながら言ってくる。

「みや……脈アリ……!？」

つぐみが更に俯いてしまう

「……? 2人ともどうしたんですか? 人間生きてたら脈ありますよ?」

俺はそう言うと……なんか……空気が変わった?

一条さんがありえないみたいなの顔をしながら聞いてくる

「八意思……お前まさか……」

「はい?」

「鈍感か?」

「感覚がありますし……痛みも感じますよ?」

俺は自分の腕をつねったりして

「いてて……」

「はあ……」

一条さんにため息をつかれる

「なんで? 今ため息つかれたの?」

疑問が絶えない俺であった。

「なあ、つぐみ。俺なんかした?」

「いや……何もしてないと思います……!」

「なんで敬語?」

(想さん……めちやくちや鈍感だ……でも気づいてもらうように頑張らなきゃ!)

そう心に決意したつぐみだった。

「暇だなあ……」

羽沢珈琲店を出ていき、一条さんとも別れた。俺は今、公園のベンチで日向ぼっこをしている、とりあえず暇だ。未確認生命体は出てくるなって話だが暇だ。何かないのか? 暇だ。

「ふええ〜…」

という何ともまあ可愛らしい鳴き声（？）が聞こえて振り返ると「花音？なにしてるんだ？」

私服の松原花音が、スマホを片手に半泣きで歩いていた

「八意さん…実は…迷子になっちゃったんです〜」

「迷子…？」

ん？ここは遊園地だったかな？えつと迷子センターは…じゃなくて！…ここ普通の公園だよ！？子供もいるしおじいちゃんおばあちゃん
が散歩してるのどかな場所だよ！？

「まあいいよ。んで？どこに行きたいんだ？」

見て声をかけたからには案内してあげなければ

「えつとね…ここに千聖ちゃんを待ち合わせなの…」

「ほらほら俺に任せなs…」

スマホに表示された場所をみて俺は固まる

「どうかしたの…？」

「い、いやっ！なんでもない！」

（おいー！めちやくちや遠いやんけ逆にここまで来れたよ凄いや！？）

極度の方向音痴ということを知った俺である。

「ほら、とりあえず乗れ」

「ええっ…！」

俺はバイクに跨りヘルメットを花音に差し出す。その事に花音は少し戸惑うがおずおずと乗ってくる

（あ…想くん…いい匂い…）

花音が背中に抱きつく形でバイクを走らせる。

「花音〜大丈夫か？言ってくれれば速度落とすぞ！」

道路を走りながら花音の心配をする

「全然…！平気だよ…！」

「そうか！ならこのままで行くぞ」

「う、うん…！」

法定速度をちゃんと守りながら向かった先は、少しオシャレなカフェだった。中に入ると殆ど女性客しかいない。そのなか…変装的な感じで帽子とメガネをしているのだろうか、それでも目立つ人物がいた

「あ…遅れてごめんね…！迷子になっちゃった…」

「ええ、大丈夫よ…？なぜ貴方がここに？」

「たまたま公園で日向ぼっこしてたら花音が。な？」

大体察してくれたようで

「とりあえず、座りなさい」

そう千聖に言われ花音は千聖の横、俺は花音と千聖と真正面を向く場所に座りそれぞれ注文する。

「あ…ありがとう八意さん…」

「いえいえ、どういたしまして。」

「ところで八意くん？」

「はい？」

「花音に変な事、しなかったわよね？」

「なんでしなきゃいけないんだよ…」

「そう、ならいいのだけれど」

「なあ千聖」

「何かしら？」

「サングラス、似合ってるな」

「…！あ、ありがとう」

「うんうん。女優も大変だろうなあ」

「そうね、1回くらいは変装もせずにつきり楽しんでみたいわ…」
疲れてそんな雰囲気醸し出している。ああ…やっぱ大変なんだろうな…

「そうだな…あ、もしかしたら出来るかもしれん」

アテがひとつあった、弦巻家ならどうにかしてくれるんじゃないだろうか。そう考えた

「あらそう、楽しみにしておくわ」

発言はあれだが笑顔の千聖が見れた。運ばれたコーヒーとケーキを食べながら

「今の笑顔。ファンが見たら大騒ぎだな」

「冗談交じりに笑いながら話すと…」

「ふふっ…そうかしらね？」

(この素の姿を見せられるのはかーちゃんと花音、貴方ぐらいよ)

千聖はそう心の中で言う。そして…

「八意くん、クリーム着いてるわよ？」

「どこ…？」

「もう…」

千聖は紙をひとつとりクリームを取った

「ありがとうな」

「いいえ、どういたしまして」

「ふええ〜…2人って…夫婦みたい…」

「花音？何をおっしゃいますの？」

「花音？そんなわけないでしょう」

「2人とも…息びったり…」

「あははー…」

「お客様…お店ではお静かにお願いします」

「はい…」

店員さんが向こうに行って俺達は顔を見合せ…また再びくすくすと3人で笑ってしまったのである。

『バックします…バックします…バックします…バックします…』

女性3人を標的にし、バックしながら行き止まりへと追い詰めていく。

「やだ…やめて！」

「いやだ！」

「いやああ！」

トラツクの主は楽しそうにしながら

「ソノ顔ダアア…!!」

と愉快に笑う。

壁とトラツクとの間に女性たちを挟みこむとトドメと言わんばかりにアクセルを全開にし圧殺した。「グシヤツ」という嫌な音と共に

「これはひどい…ぺっちゃんこだな…」

一条悠介が3人の遺体を見て顔をしかめる。

「今日だけで3件、昨日で2件…未確認生命体の仕業ですね。目撃情報もでてますし」

「24号…か…」

「肝心の4号も身元がわからないし…でも我々を守ってくれてるし…」

そんな中一条悠介は

(また、八意想を頼ってしまうな…)

と考えていた

『本日、警視庁は未確認生命体第24号を公表しました。』

パンとコーヒー片手に朝のニュースを眺めているとこのような項目が出てきた。

『被害は昨日と今日で5件。その殺人方法は極めて残虐であり…ナンバーなどは分かっています。ですがトラックを目撃した際にはすぐその場を離れてください。決して囲まれているところには行かないでください』

テレビを消す。

「またか…それにしてもトラックの運転手はたまったもんじゃないな…」

と俺は呟きながらタマを撫でてやる「ゴロゴロ…」と喉を鳴らすタマ…相変わらず可愛いなあ…

「そう言えば今日は確か…」

(???)

〜1日前〜

『想く〜ん!』

「なんだよ日菜、突然電話なんかかけてきやがって…」

『えーとね!明日パスパレの事務所来て!』

「え?あ?ちよおい…」

プツンと切れる電話

「あいつ…次会ったら頭ぐりぐりだな…」

— (?) (?) ? —

「なんてことあったな…やれやれ時間は…」

時計を見ると…まだ余裕にあった。

「はあ…とりあえず準備すつか…ガソリンも入れときたいし…」

俺はクローゼットから私服(半袖と長ズボン)を取りだし着替える。

ポーチを肩にかけて…

「ハンカチと…」

財布を入れる

「行ってくるな。タマ」

と言い扉を開けて鍵をかけた。

〜ガソリンスタンド〜

「〜♪」

鼻歌を歌いながらガソリンを入れていく。横に車が止まる

(覆面パトカー…初めて見たな)

中から降りてきたのは…

「一条さん…!?!」

「八意想!?奇遇だな、ガソリンか?」

「ああ、はい。一条さんも?」

「そうだな。ニュース見てるか?未確認生命体関連だ」

「はい…残酷すぎる殺人方法です…」

自然とグリップを握る力が強くなる。俺は話を変えようと…

「一条さんはこれから仕事ですか？」

「現場の調査だ。君は？」

「俺は…まあ無茶ぶりですよ」

少し笑いながら答える。一条さんも少し笑い

「君も大変だな…とところで…ガソリン注入終わってるぞ」

俺は一条さんに言われメーターを見る

「あ、ほんとだ。よいしょ…慣れねえな…」

チューブを外し元の場所に戻す。一条さんも終わったらしく同じ行動をした…そして2人はガソリンスタンドを出たのであった

「…で、どうして一条さんは俺の前にいるんですか？」

バイクの無線を俺の前にいる覆面パトカーに繋げ会話をする

「たまたま方向が一緒なだけだろ。てかどうやって繋いだんだ？無線を」

「ギョインってやったら繋がりました！」

「…そうか」

その時、無線通信から女の人の声が聞こえた

『未確認生命体第24号を発見。犯行に使われたトラックのナンバーは花咲川1103685』

一条さんは覆面パトカーのサイレンを鳴らす。そして…

「だそうだ。行けるか？」

「もちろんです」

俺はバイクのモーフイング機能を使いバイクの色を変える。そして一条さんのパトカーを追い越す時には赤のクウガになっていた。そのままバイクの速度を上げていく。

道路は片方4車線、しかもそれなりに渋滞している中を追い越していく

「お母さん！あれって…」

「4号ね…初めて見たわ」

「なあ…あれって…」

など皆それぞれ声を出す。俺は気にせずに道路を右に曲がり進む。

さつきよりかは車が少ないので通りやすいが歩いてる人が多い。しかも子連れが特に、俺はその中を走り抜けるので注目の的だった。

くパスパレ事務所く

「想くん遅いね〜」

日菜が退屈そうに窓を見る

「やつぱり急は厳しいんじゃないですか…？日菜さん？」

日菜が窓際から目を離さなくなり麻弥が声をかける

「麻弥ちゃん、あれって」

他のメンバーも釣られて日菜の指さす方向を見る

「あつ！あれって…」

バイクに乗りクウガに変身していた彼が前を走っていったのだ

「なんかあつたのかな〜」

「うわ…ネットもすごい…！」

彩が『未確認生命体4号を拝む会』とかいう謎すぎるサイトを見ながら言う。

「ねえ…なんか飛んでない？」

千聖が空を指さす

「見えないな〜ついていた！」

日菜が椅子から立ち上がり指をさす

クワガタみたいな形をした機械が空を飛びながら彼を追いかけ行って。

「なんででしょうか…あれは？」

イヴが首を傾げる。

何かが起ころうとしているのは5人とも気づいていた

「…っ！あれは！」

反対車線にトラックが走り抜ける。速度が異様に速いが何とかナンバーを捕える

「花咲川1103685…あれで間違いない…！」

俺は急ブレーキを掛けながらドリフトし反対車線に乗り込むとい

う荒業をして相手を追いかけた。相手も俺のことが分かったのか速度を上げる。その時俺の頭上を機械が反対に飛んで行った

「なんだ…!?!」

機械は1度通り過ぎたと思いきや回転してこっちに突っ込んできた。俺の真上まで飛んできて…半分に分裂したのだ。

「ギャアアアア!?!」

その機械はバイクに合体し、なんか見た目がすごいバイクになった
「速度がさつきより上がってる…」

俺はとりあえず機械を信じて右のレバーを捻ったのであった

「夢でみた馬の鎧って…これか!バイクだけど」
「」

くパスパレ事務所く

「あら、また通ったわね」

「さつきより派手になってません…?」

「何あれカツコイイ!!」

「どういう仕組みなんでしょうか…フへへ…」

パスパレの質問責めに会う…そんなことを知るよしもなかった

(. . ? . .)

俺はトラックを追いかけるがなかなか差は変わらなかった、むしろこんなもんが着いたせいでまがりにくくなってるし…そして周りがいつの間にか工場地帯になってたことにも驚くが…さらに驚くことがおこる、

「っ!?!」

前を走っていた相手が突然急ブレーキを掛けて止まったのだ。そしてものすごい勢いで後ろに下がってくる

『バックします…バックします…』

このままじゃ衝突する…それを回避すべく俺は右にバイクのハンドルを倒し何とか回避する。

右には道があったがすぐに行き止まりになる。そこには火気厳禁やらなんやら書いてあった。何とかその看板にぶつからずに済んだことに安堵してバイクを走らせようとしたが…

「…」

ハンドルをまわしてもビクともしなくなってしまった。

「なんでだ…!?おい…!」

車体を叩く。スイッチやボタンを弄りまくるがなにもおこらない。そんなことをしている間に

『バックします…バックします…』

とバックで道に入ってきた。

「おい!動け!」

まずい。このままじゃ圧死だ。ハンドルを捻る。スイッチを弄るボタンを押す、何も起こらない。

「超変身!」

俺は命を守るべく青のクウガになりバイクからジャンプしてトラックを躲す。

「…!」

トラックはそのままバイクを巻き込みながらバックし壁に追突。俺は避けたがバイクが挟まれてしまった。

そのタイミングで覆面パトカー。一条さんが来て止まる。

「バイクが…」

相手は今度はアクセルを全開にし俺目掛け走ってくる。

「ふっ…!」

俺は構える…走ってくるトラックの上を飛び…

トラックが止まり中から人が出てくる。ドアを閉め辺りを歩きながら見渡し…

「どこに行った!クウガ!」

と叫んでいる。俺はトラックの上から飛び降り相手に手刀をする。

相手は地面に倒れて俺の足にしがみついて人間から化け物に姿を変えた。俺はしがみついた相手に拳を打ち込もうとするが右手で受け止められる。

「俺の名前はメ・ギャリド・ギだ！」

そう言いながら俺の拳を払い除け、掴んだ右足を上に持ち上げ投げた。通常ならバランスを崩しコケるのだが：青のクウガの身軽さで空中回転しながら体制を立て直す。

「っ…！」

相手は両腕のカッターをクロスさせながら近づいてくる。

俺は後ろにあったコーンバーをとりロッドのように振り回す。コーンバーにモーフィング機能が働き青いロッドの武器に変わる。相手が走って突っ込んで来たので体制を低くし相手の足にロッドを置き、引っかけたタイミングで上にあげる。

「…っ…おりゃあ！」

相手は引つかかり上に持ち上げられ体制を崩しながらタンクがある場所に顔からつつこむ。タンクが崩れ近くにある物が潰れて火花を散らす。そしてタンクから煙らしきものが噴射され…

相手もろとも爆発した。一条さんが俺の横に立ち…

「倒した…とはいいいにくいな…」

「はい…」

「油断は禁物…か」

「一応見に行ってみます」

「分かった。気をつけろよ」

「はい」

そう言いながら俺は爆発し炎上した場所に歩いて見に行く。

「どこにも…いない…逃げられるような場所もないか…」

炎上した場所から歩き一条さんの元へ戻る。

「いませんでしたし逃げられるような場所も多分無いです」

「そうか、でもよ…めっちゃうくちや燃えてるが大丈夫か？」

「消防車…ですね」

「はあ…」

2人は揃ってため息をついた

「はあ…」

俺は無駄にでかくなったバイクを押しながら帰る。めちやくちや目立つし最悪だ…しかも7月だし暑い

「ごめん…ちよつといいかな？君」

こうやって職質に会うのも3度目だ。毎回同じ質問をされテンプレのように答える

「やつとついた…」

約束の時間から1時間遅れたがようやくやく着いた。

「このバイク…どうすりゃいいんだ？」

とりあえず停めて…改めて大きさにビツクリする。

「さつきはなんで動かなくなつたんだ…？」

とりあえず触ってみると…背中の緑の部分が輝き…

「おわっあああああ!?おい！何してんだ止まれ!!」

突然周りにある自転車の金属部分やバイクの金属部分を吸収した。

「他のスタッフさんのバイクや自転車が…最悪だ…」

ひとしきり吸収し終わったバイクが上機嫌そうにアクセルを鳴らす

ブオオン！と。

俺は何も見なかったと言いつい聞かせ事務所に入った

その後、スタッフさん達が発狂したのは別のお話し

「多分事情は分かってるわ…」

「ありがとう…助かる千聖」

「日菜ちゃん特性ドリンクどうぞっ！」

「ありがとう…つてまず!?何入れたんだこれ！」

「なにそれひどい！」

「飲んでみるよ！」

「ごくごく…まずっ！なにこれまずい…」

「お前が作ったんだろ…！」

「あのく八意さん。あの機械…調べさせてください…フへへ…」

「バラバラで戻ってきそうだからやめとく」

とまあ忙しいわ忙しいわ…疲労が溜まる…

「みなさーん！レッスンの時間です」

「はいー！」

俺も確かパスパレのレッスン見れるんだっけか…部屋に入り見ていく

「おお…」

みんな大体上手い。歌唱力も演奏力もすごいが…

演奏が終わったパスパレに声をかける

「彩、少し緊張しすぎだ。途中声が上がってた。千聖の、大体が出来てたが途中少しミスりかけてあせったな。イヴ、途中ミスったな？。日菜。お前にしては少しミスがあつたぞ？麻弥、お前も少しミスがあつた…っってお前らなんでそんな目で見るんだ？」

「すごい…なんで分かったの？」

「聴いてたらわかるだろ…？」

スタッフさんもみんなビツクリしている

「え…っ？」

新たな才能が開花された気がした、

「あれ…いつの間にか…」

俺は事務所を出て帰ろうとした時だった。バイクに引っ付いていた機械はどこにもいない。駐輪場には俺のバイクしかない。

「うわ…最悪だ…」

俺はみんなの悲鳴を聴く前バイクを走らせて晩御飯を買いに行こうとした。

～ファーストフード店～

「い、いらつしやいませー…」

レジに並び店員の顔を見ると…

「花音?」

「八意くん…?」

「意外だな。バイトしてるなんて」

「そ、そうかな…」

「うん、似合ってるし可愛い」

「ふえっ!?かわっ…ご注文をどうぞ…!」

少しおちよくりすぎたろうか。顔を真っ赤にして俯いてしまった花音に対して俺は少し申し訳なくなる

(またなんか買っていくか)

と思い注文した品を受け取ってレジにめちやくちや近い席に着く。俺が頼んだのはコーラとポテトとチーズハンバーガー。やっぱりこれが一番。俺が食べ始めようとした時、香水の臭い匂いが鼻を刺激した。レジを見ると花音がガラの悪い野郎共にナンパされていた。

(前にもこんなの無かったか?)

トレーを持った店員が

「困りますお客様…!」

「うるせえー!ババアは呼んでねえよ!」

と言いつトレーを弾き飛ばす。上に飛んで行ったトレーはどうゆう

訳か俺の頭に降ってきてトレイが頭にぶつかり、トレイに置いてあった飲み物が俺の頭にぶちまけられた。

「ぶっ…あはは！見ろよアイツだっせー！」

1人に釣られ他のふたりも「あはは」とか笑い出す。俺はブチ切れた。もう知らん

俺は無言で立ち上がり一番最初に笑った奴に近づく。

「なんだお前…！」

勢いつけて腹パンし後の二人も頭をぶつけさせて気絶させる。一番最初に笑ったやつはまだ気絶していなくて床に這いつくばっていた。俺はそいつの横に屈む

「あ…あ…！」

「二度と来んじやねえ」

そう言うとうとう限界が来たのか気絶する。俺は3人を手際よく片付け（外に放り投げた）そして自分の席に座って無言で机の紙ナプキンで頭を拭く。今日は最悪な日だ。ろくなことが起きない、早く帰ってタマと触れ合いたいと思いつつ拭いていると

「お客様申し訳ございません！」

と花音を含めた数人が俺に頭を下げてきた。

はて？謝ることがあるのだろうか。悪いのはあいつらで店員さんは守ろうとした。

「頭にかかったの…コーヒーとコーラで…」

「へ？うわっ!?ほんとだ最悪な相性だうわあ！」

ほんと…今日は一体なんなんだ…

その後、あーだこーだ言う店員さんを何とかして受け流し帰った。タマには近づくなとひっかかれ泣く泣くシャワーを浴びて戻るとタマはまるまって寝ていた。

すげーシヨックなのでふて寝した。

「はあ…学校始まったな…」

バイクを駐輪場に停め、靴箱めざし歩き出す。最近バイク通学も許して貰えた（弦巻家）なので大分楽だ。

「お、おはよう…」

「花音か。よう」

「2日前はごめんね…!」

「気にするな気にするな」

花音の肩を叩きながら笑顔で言う

「あと助けてくれてありがとう…」

顔を赤くしながらもじもじと言う花音に

「どういたしまして」

と答え教室へ足を運ぶ…まではよかった

「すいませんすいません!大丈夫ですか!?!」

俺は今、教室の扉を開けたら美少女が飛んできてそれに巻き込まれて廊下の壁まで吹っ飛ぶという経験をした

「牛込さんだっけ…とりあえず俺の上からどいてくれ…」

「ああ…すみません!」

俺の上から起きて立ち上がる。俺も少し遅れて立ち上がる。まだ少し後ろの方が痛むがそれより

「ケガは無いか?」

「うん…どこも大丈夫だよ…八意さんは?」

「俺も大丈夫だ。お互い無事でよかったな。牛込さん、なんでそんなに急いでたんだ?」

教室から悲鳴。扉を開けると壁に黒光りしている生命体Gがいた。あーなるほど大体察したわ

「…あれを使うか…」

俺のカバンの中には今、ホルスターが突っ込んでありその中には6発装填のリボルバーがあった。大体がお守りか緑のクウガの時に使う。俺も虫はあまり好きじゃないのでこれを使って遠くからズドン!とやりたいのだが…

「人が多すぎるな…」

如何せん人が多すぎる。あまり使つてるところは見せたくない、と言いか見せたらやばい。

どうするべきか頭を悩ませ…選択肢から拳銃を除外。いくらGでも生き物は生き物だからね仕方ないね

(殺さず平穩に…)

その時さらに悲鳴が起きた。Gが飛んだのだ、教室を

「Gって飛ぶのかよー！」

俺は咄嗟に走りGをキャッチ。そしてそのまま外へほおり投げ窓を閉める。そして廊下をダッシュし御手洗にいき執拗に右手を洗った。

「はあ…」

俺はひとしきり洗い終わり教室へ帰るとみんなは「おおく…」と感嘆の声を漏らしていた。

「はあ…汚ねえ…」

出来ればもう二度と相手にしたくないかもしれない

「おはようー！」

後ろから突っ込んでくる感覚。俺はなすすべなく前に頭から倒れる。完璧に気を抜いていた。

「お、おはよう…」

「あらー！大丈夫かしら？」

こころが起き上がりそれに遅れ起き上がる

(デジャヴがすげーい…)

それと同時にチャイムが鳴る。みんな席に着き俺も座る。

4時間目が終わり休憩時間。俺はいつも通り中庭のベンチに座っていた。向こうの方ではポピパのみんなとハロハピの2人(美咲とこころ)が何やら楽しそうにしている

「…」

不意にこころが空を指さしそれに釣られ美咲もポピパも空を見る。

その時、隣子も紗夜も花音もはぐみも千聖も彩もイヴも小川も花咲川にいる生徒は見ていた

空から…クワガタの機械が飛んできたのを

「はあ…う」

俺はベンチに座りながら飛んできた物体に理解が遅れ…

そして理解してベンチから立ち上がり走り出す。

「はあ…はあ…」

案の定、俺のバイクにくっついて自慢げに待機していたクワガタ、周りの自転車はあっちにこっちに散乱していた。とりあえず押して校門近くまで寄せる。周りを見れば何事かと見に来た生徒でいっぱいだった。その中にはポピパや美咲や花音やこころやはぐみや燐子や紗夜や千聖や彩やイヴやいた。その中から紗夜が出てくる

「なんですか…これは？」

「俺に聞かれても困る」

そう言った時バイクから無線の音がした。

『本部から連絡！未確認生命体第24号は…』

「え…？本部？なんですか？」

困惑する紗夜をよそに俺はバイクに跨り

「悪い！ちよつと行ってくる！」

「え…ちよつと…！」

その先を聞かず俺は門を出て走り出した。

「ちゃんと後で説明してくださいね…」

紗夜がぼつりと呟く。大体は理解してくれていた。彩も千聖もイヴも紗夜も燐子も。八意思の正体を知る者は

く羽丘女子学園く

「あーあれって！」

屋上でいつも通り過ごしていたafterglowのひまりが指をさす。みんなもそれに釣られて見ると

「八意さん…」

つぐみが呟く。

「なに…あのバイク…」

「派手でカッコイイな！」

赤のクウガの姿の八意想、モカは

「頑張れ〜」

といつも通りゆっくり応援していたのであった。

「あー！」

廊下を歩いて氷川日菜も一瞬だけがクウガの姿を見た事に驚き

「後で何があつたかきこー！」

とるんつと来たらしくご機嫌だった。

「あ…」

今井リサも一瞬だが八意想の姿を見ていた。今日も戦ってるんだ
など思う。なにか自分に出来る事が無いかなとも思う

「どうしたんですか？リサ先輩」

「いや！なんでもないよ！」

（ケガがありませんよーに…）

彼の無事を祈るのだった。

バイクを走らせながら八意想は考えていた。

（このクワガタみたいなのやつ…名前あるのか？）

意思疎通が出来るかどうか試そうと話かけてみる

「なあ…名前とかあるのか？」

『自分の名前はゴウラム』

「シャベッタアアア!!」

普通にびっくりした。こいつ喋るのか

「ゴウラムか…OK分かった」

その時、無線が繋がった

『八意想！聴こえるか？』

声の主は

「一条さん!? 一体どうやって!?!」

『前に君が繋いできただろう!』

あ、そういうえばそんなことしてたな。

『それよりも…』

「聞きました！出たんでしよう？」

『なら話は速い！またトラックのナンバーが違うから伝える！』

伝えられた番号を脳に記憶し

『こちらも探している！また後で連絡する！』

無線が切れた。俺も探すため速度を上げる。

しばらくするとトラックが1台。異様な速度で走って行った。

(まさか…)

後ろに書いてあるナンバーを見ると…一条さんの言ってた番号と一緒にだった。即座に進行方向を180度変えて走り出す。

「速い…トラックであんな速度出たか…？」

トラックの後ろを走り始めてから約3分。一向に近づいた気がしないのだ。そして場所も色々たまずいことになってきたのである。

(花咲川が近い…てか近づいてる…)

そうなのだ。花咲川がだいぶ近い、今は授業中、こんなものが突っ込んだら大騒ぎにも程がある。

(頼む…このまま通り過ぎてくれ…！)

だがそんな願いも儂く散った。

トラックは器用に右に曲がり門に突っ込んでそのまま中へと入り運動場へと入っていった。

(…)

俺は心を無にして中に入り運動場の端っこへ行きそこで止まる。ちようど反対側にはギャリドが乗ったトラックが待機していた。校舎側を見るとみんな窓に張り付いて見ていた。知ってる顔もちらほら見かけ…何故か呆れている人もいた。

(後で紗夜辺りに呼び出し食らうかなあ…)

視線を戻しエンジンを吹かす。相手はアクセルを踏み込み加速していく。相手との距離はあまり無い。俺も加速する。

「こうなったら突っ込んでやらあああ！」

絶叫と共に走り：ゴウラムの角の先に炎がともっているのを見た。キックの時とおなじ。だがそれを確認する前に身体を凄まじい衝撃が伝わる。

「うおおああ!？」

トラックは後ろに下がり横転。それを視界の端に捕え、校舎側から悲鳴が聞こえる。俺はようやく収まった衝撃から身体を持ち上げ立ち上がる

「あ……？」

バイクからぶっ飛んだのだろう。俺はバイクから少し離れた場所に横たわっていた。慌てて横たわったバイクを確認すると：少しパーツが欠損したりしてボロボロだった。ゴウラムは：バイクの周りに転がっているあの石片だろうか？

「1回技を放てば暫くは動けない……か」

次にトラックを見る。

「……」

トラックにはあの紋章が大きく出ていた。ギャリドは中から出ようとすがその前に：トラックは爆発した。ギャリドを巻き込んでそうして、ギャリドとの戦いは幕を閉じた

「貴方は一体……」

「……ハイ」

「まったく……」

「……ハイ」

放課後、今は生徒会室にいる。目の前にいるのは風紀委員の氷川紗夜。俺は今、どえらい説教をされている。なんなら精神が死んでもおかしくない。それもこれもトラックを運動場で大爆発させた俺が悪いのだが……流石の燐子さんも庇いきれないようだ。

あの後、消防車などが駆けつけ鎮火作業などを行いながら警官らが事情を生徒に聞いていた。一応大丈夫そうなので授業はそのまま続

き…俺はちゃんと途中から入ったがんで色々あつて今に至る。

「ほんとすんません…」

俺は正座してしゅんと項垂れていた。割と本気で申し訳なく思っていた。

「もう…次からはちゃんと場所を選んでください」

そういえば…ズ集団の時とは違ってメ集団は爆発する範囲が少しばかり大きい気がする。

「聞いてますか？」

「えっあつ…はい」

紗夜さんに言われ意識を戻すと呆れ顔の紗夜さんが立っていた

「聴いてなかったです…」

「まったく…貴方って人は…」

「紗夜さん…ちよつといいですか？」

「…？」

俺は立ち上がり紗夜さんの頭を撫でた。燐子さんも少しあたふたしている

「え…／＼／＼ちよつと…／＼／＼」

「紗夜さん、表情柔らかくなりました？」

「…え!？」

「いやなんか…出会った時より柔らかくなったな…つて…」

「もう…でも…」

「…？」

その先を聞く前に部屋の扉が開いた

「一条さん!？」

「八意想!…つて…お取り込み中だったか?失礼した…」

そう言つて扉を閉めようとした一条さんを止める

「違います一条さん!誤解です!だよな!?!紗夜!」

「そうです!」

その後、一条さんを紗夜に紹介してその日は解散ということになった。紗夜は俺が家まで送り届け（日菜に捕まった）何とか家に帰れたのである。

もうその時から…時間は進んでいた…

期末テストというものが…八意想に襲いかかる

くその日の夜中く

「ウワアアアアア！テストダアアアア！」

しかも次の日く（へっへ）く／

「酷い顔してますよ…大丈夫ですか？」

いつも通り門にいる紗夜に声をかけられふりかえる

「紗夜か…顔が酷いのは気にするな。昨日徹夜して勉強しただけだ」

あの後とりあえずワークや教科書を見たりしてなんやかんやしていたらいつの間にか朝になっていた。

「テスト勉強してなかったのですか？」

「する暇がねえだろ…」

「それもそうですね…少しだけなら教えられますが？」

「悪い…ちよつと頼む」

そうして紗夜と向かったのは3年の階の3年A組だった。周りがざわざわしてやけに視線が痛い気がする、とりあえず周りを見渡すと千聖と花音、燐子を見つけた。1クラスで知ってる奴が4人もいる事に驚きながら紗夜からの講習を受ける

くチャイムが鳴る5分前く

「とりあえずこれで一通りは大丈夫でしょう。チャイムもなりますしそろそろ帰って準備を始めないと」

「教えてくれてありがとう紗夜、全然分からなかった。」

紗夜がありえないみたいな顔をする。俺はそんな紗夜から逃げるように教室へ帰り…

テストが始まった。

「はあ…」

俺はバイクを押しながら歩く、その隣にはポピパの5人がいた。なぜかって？山吹ベーカーに寄って帰ろうとしたらたまたまである。

「いいなー！バイク！有咲もそう思わない!?!」

「うるせー！私に聞くなあ！」

「あはは、元気だなあ香澄ちゃん…」

「バイクのハンドル取れるんだ。何に使うの？」

「ちよつおたええ!? 分解しちゃだめだよ!？」

「あー大丈夫。くつつくから」

「くつつくの？」

(何に使うかは教えてくれないんだ)

沙綾に聞かれウンウンと頷き実演する。俺はたえから渡されたトライアクセラーをバイクにはめ込む。バイクは弦巻家にメンテ&修理をしてもらいゴウラムの破片も預けておいた。色々と研究するらしいので任せておく。

「へー…すごい…」

「それは思う」

「乗りたい乗りたーい！」

香澄が目キラキラさせて近づいてくる

「あー…乗せたいのはいいが今は無理だな。また今度の機会だ」

その時、不意に近くの路地裏から声がして…警官が1人転がってきた。血を流してぴくりともしないので恐らく死んでいる

「え…」

有咲も沙綾もりみもたえも香澄も何が起きたか分かっていない。俺も理解するのに少し時間がかかった。そして路地裏から人…いや化け物が1人歩いてきた。猛獣のような見た目、プロレスラーのような体格。間違いなく生身なら死ぬ

「ひっ…」

そんなか細い声を出したのは誰か、俺は近くにいた沙綾に鞆をわたして

「えっ…ちよつ…八意くん!？」

「逃げないとやばいですよ！」

有咲が叫び、相手がこちらを視認する。俺はベルトを出して…

「変身！」

赤のクウガへと姿を変えた。

「えっ!？」

「え…」

香澄達がそんな声を出すと同時に相手も

「クウガ！」

と言い突進してくる。

「はっ……！」

俺は後ろに人がいるので避ける訳にはいかず突っ込んでくる相手をなんとか両手で受け止める。

「っ……！」

思ったより力が強い。俺は突進してきた相手の背中に両腕で肘打ちを入れ怯んだ所に顔めがけ肘打ちを打ち込む。相手は後ろによるめく、追い討ちに俺は拳を2度打ち込み距離をとる。後ろで香澄が

「すごいーすごいよ有咲ー！」

「し、信じらんねえ……八意が4号……」

と有咲と会話をしていた

「超変身……!?!」

やつの突進に剣で迎え撃とうと紫のクウガになるべくベルトに手をかざそうとした時。相手が右腕にある鎖で俺の右手首に巻き付けてきた。

「くっ……！」

フォームチェンジを封じられてしまった俺はやむを得ず左手で相手の鎖を握り引つ張ろうとするが……鎖はビクともせず逆に俺が振り回されることとなった。

「うおおああー！」

俺は近くの停めてある車に激突し左半身に激痛を感じた

「っ……！」

相手はいつの間にか鎖を縮ませ俺との距離を詰めていた。至近距離で後ろから鎖を回し首を絞める

「ぐっ……かはっ……！」

追い討ちと言わんばかりに首を絞めてる反対の手で俺の頭を掴み車のトランクに2度、3度とぶつける。車のトランクが凹みビービーと機械音が鳴り響く。

「ふっ……！」

後ろにいる相手に肘打ちをいれ鎖をほごうとするが意外と絡まりてまどう

「なんだ…これ…!」

その間にも相手は起き上がり俺に体当たりしようとするが俺は地面に座る体勢になり足に意識を入れて相手を蹴る。右足に炎があたり相手にヒツトする。

「グオー!」

相手は後ろに吹き飛び鎖も衝撃でちぎれる。その場しのぎのキツクなので威力は期待できず…

「…!」

やはり目の前で相手の腹にあった紋章は消された。相手は起き上がり吠える

「ウオオオオアアア!」

「超変身!」

俺は青のクウガへと姿を変え構える。

「すごいね…あの人」

戦いを見守っているポピパメンバー、たえが口を開く

「信じられないね…あの人がニュースでやってた4号だなんて」

沙綾が八意のカバンをぎゅつと抱きしめながら言う。

「でも相手もすっごく強いね…!」

香澄も少しは怖いのだろう。だがそれでもその恐怖を紛らわせるように口を開く。

「香澄ちゃん…大丈夫…あの方は負けないよ…!」

八意想と出会ってまだ間もないりみが言う

「りみりん…」

「だってあの人は悪い人じゃないもん…だからきつと強くて優しい人なんだ…!」

「そうだね、りみりん!」

そういうと香澄は息を吸い…

「頑張れ!負けるな!」

と叫んだ

「ちよま！なにして…」

「何って…応援だよ？」

「それは分かるってーのー！」

有咲が叫ぶ。俺はそれを聴いていた

「まったく…！無茶苦茶言ってくれるぜ…！」

飛んできた鎖をあえてよけずに両腕で掴む。そこから始まる鎖の引っ張り合い

「っー！」

「ふっー！」

無声の気合と有声の気合いがぶつかると。だがしかし、着々と相手の方に俺は近づいていた。

「くそっ…！」

そして相手との距離が近くなり…また俺は首に腕を巻き付かれ首を絞められる。

「ぐっ…ああ…！」

青のクウガはロッドが無ければあまり強くない。

「超…変身…！」

俺は赤のクウガに姿を変え腕を引き剥がし腹に肘打ちを打ち込む。相手の方を向き拳を数発入れて距離をとる。俺は持つてる鎖をそこから辺に投げ捨て相手目掛け走り出した

「あ…戸山さん」

香澄は呼ばれた方向に振り返ると…学校帰りの after glow がいた。

「蘭ちゃん！」

「ポピパは何してるんだ…？」

巴が言った時、後ろから音がした

「おりゃ…！はあ！」

「あ！」

ひまりが指をさす。そこでは赤のクウガと怪物が激闘を繰り広げ

ていた

「八意さん…」

「おーおーやってますな〜」

「正体知ってるんですか？」

沙綾が聞くとモカが

「しつてますよ〜」

つぐみが

「前に…助けてもらいました…／＼／＼」

と少し顔を赤くしながら言う。その事に有咲は少し不思議に思う。

「すごいですよね、あれ」

たえが指さしながら言うどひまりが

「ほんとだよ〜私達が初めて見た時 motto 凄かったですもん」

「見たことあるんですか？戦いをしてるとこ」

「うんうん、あの時はボロボロになってて、私達が連れて帰って治したんだよね…」

「そうだね、その時につぐみとモカが喧嘩したんだったな！」

「それでつぐみが誘拐されて、八意くんが助けてくれたんだよね〜！」

「う、うん！」

「へえ〜！そんな事があつたんだ！」

「貴重な経験だね」

「おたえ…」

沙綾が頭を抱える。

「今もこうやって頑張ってるんだね。八意くん、話聞いてみたいかも…」

皆が八意想を見る。

「はあ…」

俺はジャンプしながら相手の顔に拳をぶつける。鈍い音が響き、相手が後ろによろめく。そこにもう一撃入れようとするが避けられ俺の腰を掴み投げ飛ばす。

「ぐわっ…」

トライチエイサーにぶつかり一緒に倒れる。後ろから破砕音がして振り返りすぐに視線を戻す。

「っ!？」

タツクルをかまされ後ろに吹き飛ぶ。さらに歩みよった相手がトライチエイサーが踏み火花を散らす。立ち上がった俺にメリケンサックで殴ってくる。

「ぐあっ……い！」

左胸にメリケンサックの猛攻

(こいつ……心臓でも潰す気かよ……！)

俺は両腕で防御する。左腕も右腕にも激痛が走る。

「ぐっ……はあー！」

俺は攻撃の隙を何とか見極め拳を打ち込む。後ろに下がる相手にさらに追い討ち……そして

助走をつけるべく後ろに数歩下がる。相手の腹には傷がひとつ、そこを弱点と見た俺は傷にむけてキックを放とうとした

両腕を開いて腰を落とした構えを取る

敵に向かって走り出す。足の裏から炎が上がるのを感じながら、夕イミングを見計らってジャンプ

「うおりゃあああああ!!」

と叫びながら飛び蹴りをぶちかます。相手の腹に見事命中し俺は膝をつけて着地する

「はあ……はあ……」

足から煙が出ていた。そして……

「グワアアアア！」

と叫びながら相手は爆発的した。気を抜いたせいか左半身が痛む

変身を解除し、ポピパの方を向き…

「なんでafterglowまでいるんだ?」

何も気づかずにいたので、俺は少しばかり困惑した。

「今から練習の時にたまたま通りかかってこうと」

状況が分かり、皆と歩く。バイクは黒服が回収して行った。

ポピパとafterglowは仲がいいんだなと思いつながら俺は歩く。そして分かれ道で

「じゃーなー」

「あ…あの…!」

「ん?どうしたつぐみ?」

「また…明日…一緒に帰れませんか!」

「え?」

afterglowもポピパも固まる。その中俺は

「…?、べつにいいけど、迎えに行けばいいの?」

頷くつぐみ、その顔は紅く染まっていた。俺は不思議に思いながら別れた

　　afterglow side

「もしかしてつぐー」

「な、何かなモカちゃん!」

「八意くんの事好きなの?」

「ええっ!」

キーボードをセッティングしていたつぐみの手があたふたする。

「うん、なあ蘭、あれは大胆な告白だったな」

「そうだね、本人は気づいて無さそうだけど…」

「巴ちゃんも蘭ちゃんも!」

「つぐー抜けがけはよくないぞ」

「ひまりちゃんまで!」

その後、質問責めされたつぐみであった。

　　popipaside

(あれはもう好きって言うてんのと変わんねえじゃねえか…)

「どうしたの有咲？分かれ道だよ？」

「え、あ、ほんとだ。」

（香澄達も本人も気づいてないし…）

有咲は考えるのをやめた。本人がどうにかするだろうと言うふうに結論付けて

く山吹ベーカーリーく

「やつとついた…」

「あはは、お疲れ様。今用意してくるね」

「おう…」

俺は店の奥へと消えた沙綾を待ちながらパンを選ぶ

「なんだこれ…ポッピンパン…？古代パン？」

見るからにハンバーグ定食なパンやシナモンロールなパンがあり意外と面白いのが増えてる。

「ポッピンパンか…なんとなくアイツらポピパが頑張つて考えたっばいな…ひとつ買おう。…でかいな」

古代パンとポッピンパンとやらをトレーに乗せた所で沙綾が帰ってきた。

「おう、沙綾。エプロン似合ってるぞ」

「えっ！そうかな…？」

「うん、」

（初めて言われた…男の人に…）

「そういえばさ…八意くん」

「なんだ？」

「あの姿、なんなの？」

トングを止めて沙綾の方を振り返る。その目には疑問と少しの警戒が見えた。

「見た通りだ、アイツら化け物と同じ分類。世間一般では4号だったか？」

「もしかして…私達を襲ったりしない？」

「どうだろうな、今はあれだがもしかしたらあるかもしれない。ま、そう
なったら自害してでも止めるがな」

「自害…どうしてそこまでしてるの?」

「さあな、ただお前達の笑顔の人知れず守りたいだけだ。それが記憶
を無くした俺の今のやりたいことだ。」

「そうなんだ、ね、よかったら話聞かせて?」

「別にいいが…つまらないぞ?」

「いーの!」

沙綾はなぜかは分からないが。今の彼は無性に守ってあげたい。
そうでもしないと…

どこかへ消えてしまいそうな危うさが今の彼にあったから

だからこそ沙綾は話を聞いて少しでも彼の気持ちや和らげばいい
など思ったが…

聞いた話が思った以上に残酷で少し気分が悪くなりそこで沙綾の
意識は途切れる。

「ん…」

「あ、起きたか。おはよう沙綾」

「えっ!?!」

気を失っていたのだろう。そこまではいい

「なんで…八意くんが私のエプロンを?」

「ああ、これか。気を失った沙綾の代わりに店番してた。」

沙綾の父母には少し疑われていたが母が思ってたより優しくすぐ
にうちとけ代わりに店番をさせてくれたのだ。

「お前の父さん母さん優しいな。余り物のパンまでくれた。これで明
日の朝飯がどうにかなった…よし!」

小さくガッツポーズをとる彼に

「ふふっ…」

沙綾は微笑んでしまう。

「なんで笑った、まあ…いいや笑顔みつけたてことで」

「なにそれ、変なの」

「じゃ、俺帰るわ。歩きだけど…」

「ちよつとまつて…」

沙綾はなぜか八意の服の裾を掴んでいた。沙綾自身も分からない。

「ん…う…どうした？」

彼は優しい声で沙綾の頭を撫でていた

「聞いたぞ、妹と弟から、沙綾は凄く頑張ってるってな、そんな頼りになる人でもたまには甘えたくなる時があるんだよ。」

少しズレているような八意想の意見に沙綾は笑う余裕すらなかった

(心臓が…ドキドキしてる…もしかして…)

「やべ…タマにご飯あげないと」

彼は沙綾の頭を撫でるのを辞めたあと、店の外へ出ていく、

「変身…!」

周りを見て静かなこえで青のクウガへ姿を変えた

「本来ならあれだが遠いからね仕方ないね…じゃーな!沙綾、また明日!」

そういうや否や彼は恐ろしいほどの跳躍力で飛んで行ってしまった。

「これが…恋か…」

沙綾は綺麗な夜空を見ながら1人呟いた

テストが終わり終業式を迎えた。

「よっしゃああああ！夏休みいいいい！」

夏休み初日、俺は特別やることも無いがとにかく今日はダラダラしようと思いいソファに寝転ぶ

「タマも涼しいほうがいいもんな〜」

にや〜お。とエアコンの下で丸くなってるタマ。1番涼しいところ行きやがってこんちきしょう。

「あ…そういうえば色々切らしてたな」

ネコ用おやつに水にインスタント食品。

「買いに行くか…」

そう言いながら服を着替えてバイクに跨る

「黒服さんには本当にお世話になってるなあ…今度なにか買っていくか…あとまりなさんにもバイトの件で色々やっちゃってるしなあ…」

そうゆうのを一気に見れるのといえは

「シヨップピングモール…行くか…」

にしても熱い。バイクで走っているのに体に来るのはクソみたいな熱風。おまけにヘルメットのせいで顔は余計に暑い。早く帰りたいので少し速度をあげたのだった

「ふんふんふーん♪」

鼻歌を歌いながら歩く弦巻ごころを先頭に、ハロハピが歩いていた

「あつつく…アイスも溶けるよこれ…」

「美咲ちゃん…大丈夫？」

「大丈夫だよ…花音さん」

「みーくん大丈夫？」

「はぐみは相変わらず元気だねえ〜」

こうなったのは30分前のハロハピ会議にて

『今日は暑いから皆でアイスを買に行きましょう!』

『またそれは突然な…』

『はぐみはだいさんせー!かーくんは?』

『私も賛成だね』

『私も…美咲ちゃんもどう?』

『…わかりました…』

という感じである

「にしてもいつ着くの…?」

「あともう少しよー!」

その時、近くから男性の声がした。

「なんだね君は!」

そして…

「うわああ!」

こころ達も前に倒れる男性。男性が着けてたであろう眼鏡がそこから辺に落ちる

「え…?」

「あら?大丈夫かしら!」

「ちよこころ…!?!」

とりあえず5人は近寄るとその近くには人が1人、立っていた。不思議な雰囲気…男性だろうか…女性だろうか

いまいち性別が分からないが奥沢美咲はこの人には近づいちやダメだと言うのが伝わってきた。それは隣にいたはぐみも分かるらしい。暑くて出る汗とは違う汗が流れていた。

「これ…逃げた方がいいんじゃない?」

「え…?」

美咲はこころの手を掴み走り出す。それにつられはぐみや薫、花音も…だが

「きゃ…!?!」

「花音さん!」

「かのちゃん先輩！」

「花音……！」

花音はつまづいてこけてしまった。相手は気味の悪い笑みを浮かべながら歩いてくる

「やだ……！」

そして……

その時だった。ブオオンと音がし花音の目の前にいた人がぶっ飛ばされフェンスにぶつかり……

「!?」

キノコみたいな見た目の化け物に変わった。そして花音のまえにいる人物は……

「八意さん！」

ヘルメットを外しバイクから降りて花音に手を伸ばす。そのバイクには荷物が吊り下げられており買い物帰りだったことが伺える

「大丈夫か？花音。立てるか？」

「う、うん……ありがとう」

「お前らも大丈夫か？」

「はい……大丈夫です。じゃなくて八意さんも逃げましょう！」

「いや……大丈夫だ。」

咄嗟に言われた言葉に美咲は理解出来なかった。だが……

「変身！」

八意想が4号になるのを美咲たちは見た。

「え!?!」

俺はそんな声が後ろからして……そういえばもうこれで全員にバレたなど苦笑する。

「クウガ……！」

と言った相手の方を見る。俺は飛びかかり拳を入れる、見事腹にヒットし相手は後ろによるめく。俺はさらに追い打ちを入れて蹴り飛ばす。その相手にまた追い打ちをかけるが避けられる。

「すばしつこいな……！」

壁にもたれかかっていた相手に拳を入れようとするが躲された……そして相手は隙を狙い俺に抱きつき……

口移しで首に何かを注入した。

途端、全身に力が入らなくなる

「あ、あ　ああああ……」

呂律が回らない。思考ができない。よろめきながら逃げる相手を追いかけようとするが……足に力が入らなくなりその場に倒れる。その時に俺は白のクウガへと退化した。そして変身が解除された

「あ、あああ……」

「大丈夫ですか!?!八意さん!しつかりして!花音さん救急車!」

「わ、分かった!死なないでね想くん……!」

そんな声が耳に伝わるが既に体の感覚がなくなりつつあった。

(だ……め……だ……いし……き……が……)

体の内側が腐っていく。それはやがて血管に達し脳に達してどこかダメなところへと毒が回って……

(お前ら……ごめん……)

八意想の心臓は……止まった

「想くん息してない!」

はぐみが口に手をかざしながら叫ぶ。

「想くん!想くん!」

「そんな……」

花音はスマホを落としてしまった。カシヤンと音がして画面が割れる。美咲もその場にへたりこんでしまった

「私達のせいだ…私達のせいだ…」

美咲は後悔した。あの時外に出るのを止めてさえいれば彼は死ぬことなど無かったのだ。

しばらくして救急車がやってきた。

だが病院に着いても、医者たちは首を横に振るばかりで何もしてくれなかった。

その間も…誰も喋らなかった

八意想は病院で1番大きくて豪華な部屋に運ばれた。

彼にはもう、心電図モニターも点滴も必要ない

しばらくしてガールズバンド全員が集合した。

安らかに眠る彼の姿を見て日菜、つぐみ、沙綾、紗夜、リサが彼に駆け寄る。その目には大量の涙があった。

「そんなあ…！想さん！」

「つぐみ…」

巴が声を出すがその声も弱々しい

「こんなの…こんなの無いよ…！」

「リサ姉…想くん…ゲームしよって終業式にりんりんと約束したじゃん…」

だが彼は目覚めない

「ねえ…想くん…うるんってこないよ…？何かのドッキリなんでしょ？」

「日菜ちゃん…」

ドッキリじゃないなんてことは誰にでもわかる。だが日菜はそれを受け入れたくない

パスパレメンバーはあんな日菜の姿を見たのは初めてだった。あんなに泣く日菜の姿を…

「想くん…！」

「さーや…！」

香澄もいつも通りの元気さは無かった。

「八意さん……」

あの紗夜があんなに取り乱している。そしてしばらく……
彼女達の泣く声だけが部屋に響いた

「……久しぶりに見るな。この世界」
「よっ」

後ろから声がして振り返る

「アマダムか」

「ああ、お前あの毒で死んだ」

「そうか、まあ……悔いしかねえな」

「そこでひとつ、お前を生き返らせることをする。ただし条件がある」
「なんだ？」

「この能力を使えばお前の毒を取り除いて蘇らせる事が可能だ、だが……」

「だが？」

「お前もアイツらグロンギと同室の存在になる。そしてもし俺が破壊されたりしたら……お前は死ぬ」

「ネビユ○ガスかなにかかよ……ま、いいぜ」

「随分あっさり決めたな」

「ああ、言わなきゃバレないからな。」

「……そうか、じゃ始めるぞ。」

「ああ」

～次の日～

「リサ……紗夜……」

Roseliaは集まって練習をしていた、だがリサも紗夜もいつ

もよりミスが多くとても練習と呼べるものではなかった。その理由は友希那でも分かる。

「今日の練習は終わりにしましょう…みんな各自休むように、リサ、紗夜、あまり無理はダメよ?」

「分かった…」「わかりました…」

↳ after glow

「つぐみ…大丈夫か?」

「えっ…うん、大丈夫だよ…」

after glowも練習と呼べるものではなかった、特につぐみが、蘭達が心配しても大丈夫の一点張り、大丈夫じゃないことくらい…痛いほどわかるのに

「今日はやめにしよっか」

「蘭ちゃん…」

↳ パスパレ事務所

「日菜さん…ずっとあんな感じで…」

麻弥が困ったように口を開く。千聖もイヴも彩もみんな接触を試みるが返ってくるのはどこか気が抜けた返事、お手上げ状態だ

「今日のレッスンは中止にしましょう」

「千聖さん…」

事務所の社長もスタッフさんも事情を知っていた。だから余計な口出しはしない

だが一方で

「撃て…い…うわああ!」

「くそっ…何で効かなくなった…!八意想はなにをしている…!」

一条を含めた警官は必死に戦っていた。だが奴にガス弾は突如として効かなくなり、4号が来てくれない状況のなか、1人、また1人と死んでいく。毒を注入では無く放てるようになったギノガは凄まじいものであった

「僕のこの毒で、あのクウガはもう死んだよ」

「なんだって…!?!」

一条は動揺してしまった。クウガが死んだ…つまり八意想が死んだという訳だ、相手は楽しそうに続ける

クウガからの攻撃を受けて休んでいた所に他のグロンギから

「相変わらず虚弱な奴だぜ」

「情けない奴」

と嘲笑われたギノガだったが、

敵の攻撃を受ける度に体質を変化させる能力を持っており、クウガや警察との闘いを経て、警察のガス弾にもビクともしない体質に変化したのだ

「だからこれからはもつと楽に、もつと沢山の人間を楽に殺せる…きつと、すごく楽しいよ!」

心底楽しそうに笑う。

「貴様…!」

一条悠介は激怒した。効かぬとわかっていてもガス弾入りの拳銃を放つ。

まだ未来がある子供を守れなかったことへの悔しさ

そして…目の前の化け物に対する怒りとともに

「…?」

不意にギノガは違う方向を向いた。そして…

「もうクウガもいない。今日は見逃してあげる、でも明日は、たくさん殺すよ!」

そういうと、どこかへ行ってしまった。

「くそっ!」

一条はパトカーを殴った。拳から血が出る。周りを見渡せば、大量の死体だ。みんなガスマスクを付けているからわからないが死に顔はきつとひどい。一条はパトカーを動かした。

後日、八意思の遺体は弦巻家へと運ばれた。あの黒服さんでさえ、目には滲むものがあつたことに一同は驚きを隠せなかつた。それよりも、八意思の死体が腐らなかつたことにも医者を含めたみんなが驚いた。

もしかしたらというありえない可能性も含めて：弦巻家へと運ばれたのだ。

「想くんってさ、不思議な人だよね」

八意思の髪を撫でながらリサが言う。今この部屋にいるのはリサと日菜と紗夜だった。後でつぐみと沙綾が来るらしい。

紗夜が口を開く

「確かに、隠し事があるような…」

「おねーちゃんもそう思うの？」

「日菜も紗夜もかあ…ほんと…」

そこでまたリサは泣いてしまう。

「私も…涙脆くなっちゃったなあ…」

「りさちー…」

「今井さん…」

「ご、ごめんね…！やだなあ私ったら！」

その時、コンコンと控えめなノックが聞こえ扉が開かれる

「失礼します…！」

「お邪魔します…！」

謎に緊張していた沙綾とつぐみだった。2人とも供えるものを持ち

「つぐみは…綺麗な花だね…！」

赤、青、緑、紫色の花がある束だった。

「山吹さんは…パン？」

「うん、お供え物とみんなの分。時間も時間だからね」

「ほんとだ…確かにお腹すいたかも！」

時刻は昼の12時、お昼時真つ最中だった

「このパン置いといたら復活したりしないかな…するわけないか…」
どこか寂しげに呟く紗綾の背中を見ながらパンを食べる。確かに美味しいはずなのに、どこか味気がない。

少しして皆食べ終わり、片付けて話をする。やはり話題というのは八思想のことばかりだった。

「不思議な人だよね！」

とか

「色々鈍感だったりしますよね…」

とか

まあ本人が聴いていたら耳を潰したくなるようなことばかり話されてきた。

「そろそろ帰ろっか」

リサの言葉に紗夜が反応する。

「ですね…」

「今日は楽しかったね」

荷物をまとめ、お礼を言い弦巻家を出る。少しして近所の土手を歩いていると

「あついね、あつ！ちょうどいい所に木陰発見！」

「1回休憩しましょうか…」

木陰と言うよりかは橋の下だが…とつぐみは思ってしまったが…

「ねえ…あれ…」

途端に顔を青くしたりリサが指を指す。指を指した方向には…人が倒れていた。その後ろには…キノコの化け物がいた。

「ひっ…」

一斉に後ずさる、だが後ろにコケてしまった。後ろからパトカーの音がしてリサ立ちを庇うように止まる。数は3台。中から警察官が数人降りてきた

「大丈夫か!?君達！」

「えっ…はい…！」

「よかった、パトカーに隠れておきなさい。絶対に出ちやだめだよ。」
「わかりました…！」

とりあえず指示に従いパトカーの後ろに隠れる。5人とも覗きをしていると

「ガス弾を持ってきました…！」

若い男性がシルバーのアタッシュケースからガス弾と呼ばれるものを取りだしライフルに入れる。その横にいた2人も同じ動作をする。

彼らの向こうでは、ガスマスクを付けた警官達が拳銃を撃っていたが…

「うそ…効いてないじゃん…！」

効いてなどいなかった。キノコが口に指を当ててピンクの何かを放つとたちまち周りにいた2人が苦しみながら死んだ、5人とも、すぐさまそれが何かわかった。毒ガスだ。

「くそ…見てろよ…！」

3人がライフルを構え撃つ。流石といえいいのか3人が放った弾は1発も外れることなく全て命中したのだ。

「すごい…！」

つぐみがそんな声を漏らす。だが…

「そんな物、もう僕には効かない」

当たったガス弾と言うものは効いていなかった。

『おい、終わったぞ』

俺は白い世界に立っていた。

「ありがとな、アマダム」

『やり終わってから言うのもなんだが…本当によかったのか？』

「ああ」

『女たちのためにカツコつけて、自ら人間を辞めるなんて…正気じゃ

ない』

「もうアイツらと戦うって決めた時から正気じゃねえよ…それにアイツらの夢を守ってやりたい、今の俺にはそれしかないんだ」

『ふっ…そうか、本当にお前はお人好しだな』

「うっせーよ」

俺の決意を汲み取ってくれたのか、アマダムは真剣な顔になって伝える

『毒は取り除いた、だが死んでから2日、相当体も衰弱してるだろう。リハビリはちゃんとしろ。飯も食べ、分かったな?』

「分かったよ…」

『ほら、行け』

「ありがとうな」

世界は元に戻っていく…

黒服は、彼の身体を確認するために部屋に入ると…

「彼の身体が…緑に点滅している…」

それはまるで、再生を始めたような、暖かな緑だった。その緑が消え…そして

「……あ…」

彼の口からそんな声が漏れた。さすがの黒服も驚いて数歩後ずさる。その間にも彼はベッドから起き上がろうとしていた。

「ただいま、黒服さん」

完璧に起き上がった八意想の目が開き、優しい眼差しでこちらを見てる

黒服は今自分が目の前で起きてる現象に理解が追いつかなかった。死んだ者が蘇るはずがない。そんな常識を覆されて…

「おかえりなさい…八意様…」

だがいつもの癖で返してしまう。八意想は窓を見たと思うとベッドから飛び降りた。まだ怪しい足取りで歩く

「黒服さん！理由は後で説明します！」

そういうと彼は窓から落ちていった。慌てて黒服が窓から見ると

白の姿となった八意想が走っていった。まだ状況が理解できないが…自分達のヒーローは、戦士は、英雄は帰ってきたのだ

「おかえりなさいませ、八意様」

そう黒服は言った。

お返しとばかりに口に指を当ててピンクのガスを放つ。また周りの警官がバタバタと倒れていく。3人は撃ちながら後ろにジリジリと下がる。だが…キノコの化け物は走ってきて警官を殴り倒していくのだ。3人も殴り飛ばされ後ろに転ける。そしてリサ達を含めた人を殺そうと口に指をあてて…

動きが止まりなぜかリサ達の後ろをみていた…そして…

「生きていたのか？クウガ？」

聞き覚えのあるフレーズ、みんなが後ろを振り向く。それと同時にジャンプしてキノコの化け物と一緒に倒れていく人物を見た。その正体は…

「あ…」

キノコの化け物を後ろを取り首を絞める人物は…

「八意…くん…」

5人とも、それぞれ涙がでてしまう。自分の好きな人が何らかの奇跡で戻ってきてくれたのだ

「2号か…!？」

「いえ、白い4号です…!」

警官達もようやくの登場におお…となっていた。一条悠介を除いて

周りに人がいた、リサにつぐみに沙綾に日菜に紗夜、そして一条さ

ん。本当に危機一髪だったことを体感する。それと同時にアイツらには迷惑をかけたとも思う。謝るためにも、まずはこの化け物を倒さなければ

「はっ……！」

相手の腹に拳を1発入れる、後ろに下がる相手に蹴りを入れるが：（やっぱりなまってる…）

それは沙綾でもつぐみでも分かるほどにかつての威力がなかった

「おらっ……！」

俺は相手の頭を掴みパトカーのガラスに思いつきりぶつける。ガシヤーンという破碎音がし相手が怯んだかのように思えたが：相手は俺の腕をつかみ、隙だらけの胴に肘打ちをくりだす。

「ぐっ……！」

俺は後ろによろめいて倒れて転がる。

「おい……！援護しろー！」

我に返った警官たちが次々と援護射撃を撃ち込むが：やはり効いていなかった。鬱陶しそうに警官を殺そうとした奴の後ろにしがみつき、横に持つていく、

俺たち2人は土手を転がっていった。視界の端には川があった。目が回る。三半規管が刺激され嘔吐しそうになるが生憎出すものがない、身体が暑い、目が回る、気持ち悪い

（熱中症……か）

もう残された時間も少ないだろう、俺は立ち上がり走ってきた相手に自分もジャンプして顔面パンチをする。

「くっ……！」

相手は姿勢を崩し後ろに倒れ込み、俺は顔面から地面に倒れた。揺れる視界を何とか振り切り立ち上がる。

相手から数歩離れて腰を落として助走をつけて跳び上がり空中で一回転して相手にキックを命中させる。ようやく立ち上がった相手は大きく後ろに吹っ飛ばされる。

だが俺の放ったキックは、自らでも分かるほどに威力が無かった
「こんなもの…効かない」

相手が紋章を消した。

俺はもう1度、同じことをしてキックを決める。さつきよりも少し
濃い紋章が浮かび上がるが…

「効くものか…!」

また紋章は消える

「はあ…はあ…」

もう一度決めるために両腕を開いて腰を落とした構えを取る。そ
の時だった、足の部分が赤くなったのだ、八意想はそれに気づかない

敵に向かって走り出す。足の裏から炎が上がる。

ジャンプし空中回転する

「うおりゃあああああ!!」

敵の身体を蹴り、膝をついて着地する。敵についていた紋章は、
さつきよりも濃くなっていた。

「こんな…:…クウガアアア!」

相手は爆発し、俺は何とか勝ったのだ…

「っ!」

途端、地面に倒れる。

「あっ!いた…!八意くん!」

「想くん!」

「わっ…熱中症かも…!」

次から次へと抱きついてくる影を振り払えず声を出す

「腹減った…喉乾いた…しんどいだるい…」

「声カッスカスですよ!?!」

「これをどうぞ」

「ありがとうって…黒服さん!?!いつの間にも!?!」

とりあえずリサは黒服から経口補水液を受け取りキャップを外し
変身解除した八意想の口にねじ込む

「ごぼごが…!?」

「ちよつりサ先輩！死んじやいますよ！」

「えっ…あつ…ごめん大丈夫!？」

「危うくりサに殺されるところだった。慌てすぎだ」

「喉ガラガラじゃん！余り喋らない方がいいって！」

「パン食べる？あまりもんだけど…」

「ごめん沙綾、それはキツイ」

そんな会話を見守る黒服の顔は少しだけ、笑顔だった。

その一方でまた何かが始まる…

メ・ギノガ・デは死んでいなかった

爆死したメ・ギノガ・デの飛び散った肉片の内のひとつが川を渡り、
復活を遂げようとしていた

「あ〜」

朝、弦巻家の一部屋で、ベッドに寝転びながら発声練習をしている人が1人いた。

「おはようございます。八意様、喉の調子もだいぶよろしくなってきたようです」

「おはようございます、メイドさん。本当にあなた達のおかげです。身体の方もリハビリでだいぶよくなっています」

「そうですか、朝ご飯はどうなさいますか?」

「ゼリーと…久しぶりに米が食べたいです」

「わかりました、ご用意致します」

「素晴らしいでいくメイドさんの次に…」

「想〜!おはよう!」

嵐がきたのだ。笑顔のハリケーンこと弦巻ごころ。彼女にも迷惑を掛けてしまった。あの後…

ギノガを倒し、リサに殺されかけた後、1度弦巻家に送り返された。身体を隅々まで調べられ、号泣しながら擦り寄ってくる沙綾やつぐみや日菜や紗夜やリサや、まあ…とにかく忙しかった。

次の日にはRoseliaやポピパが来てくれて、afterglowも、パスパレも、

「私達のせいです…すみません…!」

泣きながら謝ってくる美咲にはびつくりした

「別に謝ることは無いよ…だから落ち着いて…ほら」

俺は掠れる声でそうゆうと更に泣き出してしまった。とりあえず撫でてると…寝てしまった。

とまあそんな感じで一昨日を過ごした。その日は夜泥のように眠った

「ふあ〜…」

ベッドから起き上がり立って伸びをする。

「もう大丈夫なのかしら!」

「ああ、まだなんとなく鈍いけどな」

「なら無理せずに休んでいいのよ？」

「そうしたいんだけどなあ…」

非情な現実はそうはいかない。一条さんからのメールで、まだ奴が生きているかもしれないという事を聞いた。昨夜に5人、殺されていた

「おっと…」

視界がふらつく。まだ身体はあれらしい、そう言えば黒服さんは俺に電気ショック治療を施したとかなんとか…

「とりあえず、朝飯食いに行こーぜ、お前もまだ食ってねーだろ」

「ええー！」

腹が減っては戦は出来ぬ。とりあえず俺とこころは、朝飯を食いに
行った

〜公園〜

「あつついな、こんな中歩いてる俺すごくね？」

「何ボソボソ呟いてるの？」

「おわっ…なんだ日菜か」

ギターケースを背負った日菜がいつの間にか俺の後ろに立っていた。

「ふふーん、日菜ちゃんだよ！」

「なんかお前を見るのが久しぶりな気がする」

「失礼な！ちゃんと一昨日もいたよって…!？」

「俺の事、心配してくれてたんだってな。ありがとう」

撫でながらさういうと…

「…日菜？」

顔を真っ赤にして俯いていた日菜がいた

「どうした？」

(ほんと、ずるいよね想くんって)

「日菜っ！」

「えっ…?」

突然日菜を庇うような体勢になった八意想に理解が遅れる。ゴスツという音、地面に落ちる大きめの石。

「くっ…!」

「想くん!」

八意想は頭から血を流していた。

「大丈夫だ…日菜…」

「グオオオアアア!」

「きやあああ!」

「っ!」

石の飛んできた方向から異様な叫び声と悲鳴が聞こえる。

「あいつ…生きてたのか…!」

だが何かが違う。やつの周りの雰囲気がおかしい

俺はベルトを出す。

「変身!」

赤のクウガへと姿を変えて構える。

「グガアアア!」

「っ!」

相手の突進をよけれずにくらってしまい後ろに倒れる

「はっ…!」

立ち上がり相手に2発、拳を撃ち込むが…

「全然怯まねえ…なんなんだ…!」

「ガアアア!」

(明らかにおかしい…前みたいな毒攻撃を使わない…?)

「っ…!」

頭を掴まれ近くのベンチにぶつけられる。衝撃が頭を襲い、視界が白熱する

「ぐっ…」

いつの間にか地面に倒れていた身体を無理やり起こして突っ込んできた相手を躲す。

(こいつに知能なんかない…ただの殺人マシンだ)

こいつと戦ってわかった。意思が無い。ただ殺す、それだけに見える

た。ただ怪力で相手を倒す。それだけだ

「っ……！」

相手にキックを打ち込もうとするが隙が無い。

「超変身……！」

俺は青のクウガになり攻撃を躲す。相手の後ろにジャンプして背中に拳を打ち込む。前に倒れた相手から距離をとり

「……っ！」

近くに落ちてる木の棒を拾うい、青のロッドに変える。綺麗な鈴の音がしてロッドが少し伸びる。

「グガアアアアアア！」

「はっ……！」

右からのパンチをロッドで受けとめ、飛び蹴りをくらわせる。

「グッ……！」

「はぁ……!?!」

ロッドで横から攻撃しようとするが相手に受けとめられる。ギシギシと音を立ててロッドが軋む。何とか振り払い

「グガアアアアアアアアア！」

「ふっ……！」

攻撃を躲し、俺は右手に最大の力を込めて

「おりやあぁあぁあ！」

突き技を放つ。

「グッ……ガア……！」

「!?!」

相手が突然後ろに倒れる。俺は反射的に後ろに下がる

「もう倒したんじゃないの?」

「だめだ、近づくな」

近づこうとする日菜を右手で制し、変わりに自分が近づくと、腹には紋章が浮かび上がっており、徐々に身体に浸透して

「うわっ！」

「っ!?!」

日菜と俺が驚く。相手は1度大きく全身を跳ね

溶けていった。

ロッドには…電流が渦巻いていた。それに日菜も八意想も気づかない

「なあ、俺何か変わってたか?」

変身解除し、相手が溶けた後を見ながら日菜に問いかける

「想くんはいつも通りだよ?」

「じゃなくて、戦ってる時だよ」

「いや、何もうちよつと苦戦してたくらいじゃない?」

「ぬぐつ…」

俺は何故か痺れを感じる全身を不思議に思い、日菜に聞くが日菜もわからないらしい。痺れなら大体電気が関係している。そしてここ最近電気に触れたといえは

(黒服の電気ショック…まさか…)

最悪黒服を、いや弦巻家を敵に回してしまうかも知れない。

(そんな事…無いよな)

遠くから聞こえるサイレン音、そして俺のスマホがなる

「電話か?…一条さん?」

とりあえず電話に出ると…

「八意想か!今すぐ来てくれ!26号が同時に多発している!」

「ほんとですか!?!今俺も倒しましたよ!?!」

「やつは前倒した時に自分の体を分離させて生き残っていたんだ!それがあつちこつちで復活して暴れ回っている!」

「細胞の突然変異…」

「やつのは見た目はキノコだ!菌類の仲間であるキノコの特性を得た怪人故なのか、豊富に栄養が接種出来る川の水面に引っ掛かっていた細胞が急激に増殖したという説が出ている!」

一条さんの言葉を聞いて後悔した。

「くそっ!あの時…」

「どうしたの？想くん…？」

あの時、川辺でトドメを決めたことを後悔した。

「わかりました…！今行きます！日菜、早く帰るんだ！分かったな！」

ただならぬ雰囲気を感じたのかすぐに了承してくれた

俺はトライチェイサーに跨り走り出す。向こうでは、サイレンが鳴っていた

「今何体目だ…!」

俺はトライチェイサーを走らせ次の敵の現場へ走っていた。目撃情報が約6体、俺が倒したのは3体、

「あと3体か…」

もうすっかり日が暮れた。ニュースでもこのことは大々に放送され、市民に警戒を促している。そしてさりげなく4号大活躍とも書いてあった

「なんかこう…照れくさいな…!」

そう呟いた時、後ろから何者かが飛んで来る音を聞いてハンドルを右にたおし何とか避ける。飛んできた奴の姿を見て…

「あのコウモリ…3号か…!」

初めて赤のクウガになった時、逃がした一体がコウモリ野郎だった。

「だとしてもタイミングが最悪すぎるだろ…!」

左右から飛んで来る相手を躲すため人気のない道路を右へ左へとハンドルを動かし躲す。何とかせねば俺はこのままどこかへぶつかる。死ぬことはないだろうが、バイクを壊したらさすがにあの黒服さんでもキレたくなるだろう。

「ちっ…おら…こっちこい!」

俺は信号を左に曲がり近くの工場に入りバイクを止める。そのあと、羽ばたく音と同時に奴が降りてきた。廃工場の潰れた車の上に乗る、口を開く

「久しぶりだな…クウガ」

俺は相手の言葉には答えずに構える。そして…

「はっ…!」

相手の足を掴むべく一気に跳躍し車の上のり相手を蹴り飛ばし車から落とす。

「グッ…」

「はあ…!」

地面に倒れた相手に上からジャンプしてパンチを叩き込む。

「フツ……」

「っ……」

横から蹴られ地面を転がる。その間に相手は立ち上がり俺の首を掴んで立たせる。俺も負けじと肩を掴み2人して左に走って……置いてある大量の缶に激突し互いに転がる。俺は先に立ち上がり相手を向こうへ投げ飛ばす。大量のスクラップに体を投げ飛ばされた相手は大きな音を立てて転がる。

「よし……」

だが相手は腹を抱えて横に走り去ろうとした。俺も横に走り……太い柱をこえたところで見失った。大方、空に飛んだかしたのだろうか？（どこにいった……）

走りながら辺りを見渡す。少し広い所で止まり辺りを一通り見渡しながらか歩く。

「グガアアア！」

「!?」

後ろの物置から飛び出し俺の後ろにしがみつくと相手に一瞬驚くが、背負投げをして蹴り飛ばし距離をとる

「ふっ……」

腰を落として両腕を広げる……その時、足に電流が流れた。あの時と同じ電流が

「……!?」

そしてそれに戸惑った時だった。何者かがバイクでこちらへ突っ込んできた。それは3号を轢いてそのまま俺を轢こうとこっちに近づいてきたが……

「……」

間一髪で俺はジャンプして躲す。ギリギリ頭を掠めそうな高さだったが躲せた事に安堵する。

「お前は……いったい……?」

バイクに跨りながらこちらを見る人物。これといった特徴は無く、

顔はヘルメットで隠されて見えない。エンジンを吹かしこちらを見つめ…

「またな、クウガ」

「…！」

そういうと俺が答えるより先に走り去っていった。

「そうだ3号は…！」

3号ももうどこにもいなかった。

「なんなんだ…アイツら…ってやばい！」

俺はバイクに跨りその場を走り去った。

「最後の一体…！」

俺は相手に目掛けて剣を突き刺す。相手は最後、少しだけ跳ねながら…溶けていった

「はあ…はあ…これで全部…」

やっと終わったと思いい、一気に力が抜ける。いつの間にか、白のクウガになった自分の姿を見る。

「八意…」

「一条さん？」

「よくやった、ありがとう。被害もあまりでないから安心しろ」

「そうですかあ…よかったあ…！」

膝から地面に倒れるのを我慢してとりあえず一条さんと話して俺もバイクに跨り弦巻家目指して帰る。

ちゅんちゅんと、鳥の囀る声が聞こえ、目を覚ます。まだいくらか重い体と頭を働かせ周りを見て…

「おはようございます八意様」

「黒服さん…？あれっ？」

何故かベッドに寝転んでいる疑問に気づいたのか…

「はい、門でバイクと一緒に倒れてなされたので運ばせていただきました。」

「そうなんですか…すみません…」

「いえ、お気になさらず。」

折角黒服と話す機会があるので、俺は聞いてみることにした

「黒服さん…あなた達は…俺の敵、なんてことはないですよね？」

「…？」

「電気ショックに何か細工してないか…ですよ」

「いえ、何もしておりませんが…何かあったのですか？」

「いや…実は…」

俺は経緯を説明した

「なるほど…心当たりはございません。お役に立てなくて申し訳ございません」

「いや、別に何もしていないなら大丈夫です…」

黒服は敵では無いというのがわかり安堵する俺であった。

「なあ、お前が探してたのはアイツの事だろ？」

「ああ、ご招待ご苦労さま」

「そうか、なら俺はこれで」

その人物は舌なめずりをして

「まってるよ…想…今叩きのめしてやるからなあ、お前の大切な物を全部…目の前でひねり潰してやる」

「ショッピングモールに映画を見に行く？」

俺は通話越しに尋ねる。相手は

「そうそう！2人で見に行こっ☆」

「こんな暑い時に…？」

「うんうん！」

相変わらず、テンションが高いこつた。リサさんは

「いいですけど…何見るんです？」

「最近話題の恋愛映画！ひとりじゃちょっと寂しいし…ついてきて
！」

「…わかりましたよ。」

俺は通話を切り、立ち上がる。

「ゴロゴロ…」

「タマ…久しぶりだな。元気にしてたか？」

黒服さんに預かってもらっていたタマ。ちゃんと元気にしてたよ
うで何よりだ。

「俺買い物行ってくるから…よしよしお前の好きな物も買ってやる」

そういうと納得したのか離れてくれた。

「いい子だ…じゃ、行ってくるな」

扉を開けてバイクを取りに行く。跨りエンジンを吹かし、いざ出発

「これって…デート…!?!」

あわわわ、となるリサ、自ら誘っておいてなんだが無茶苦茶緊張し
ている。

「服何にしよう…！」

そっとういながら服を選ぶリサであった

俺がついて少ししてからリサさんがやってきた。

「おはよう、リサ」

「うんっ！おはよう！」

「やけにテンション高いな…そんなに楽しみなのか？」

「うん！そうだよ！」

「なありサ…気のせいかもしれないが少し近くないか？」

俺の右腕に手を回し抱きついていてる状態のリサに目をやると

「そ、そうかな…！」

「いやまあ、リサがこれでいいなら別にいいが…」

「うん、じゃあもう少しだけ…」

「はいよ」

映画が始まるまであと1時間はある。その間、店を回ろうと言う話になり絶賛回っている。

「これ買おうよ！」

「ペアネックレス？」

リサが出してきたのはペアネックレスだ。リサはカーマイン、俺は赤、しかも薔薇の形をしている

「想くんって、あんな危ないことしてるでしょ？だから、お守り代わりみたいな！」

「なるほど…」

ちらつと値段に目をやる…

(両方一緒に1万か…よし)

「なありサ、そのネックレスかしてくれないか？」

「え？別にいいけど…」

俺はリサからネックレスを借りると即座にレジへ走った

「ちよっ…想くん!?って1万!?!」

止めようと走ってくるがもう遅い。俺は先に会計を済ませていた。

「カード…便利だな」

「もー！先に値段言っちゃー！」

店を出て、頬をふくらませるリサに近づく。

「え…ちよ…?」

あわあわと顔を赤くしてテンパるリサの首にネックレスを付ける

「よし、似合ってるな」

カーマインの色をした薔薇の形のネックレス。リサみただと思
い苦笑する。自分も袋から取り出し首につける

「お揃いだな」

「うっ…うん！」

「なんだリサ、顔も真っ赤だし…大丈夫か？」

「いや全然！大丈夫だよ！」

「そうか、ならいいんだが…あ、映画始まるぞ」

「えっ！もうそんな時間!?早く行こ！」

「分かったから引つ張るな…」

俺たちはポップコーンとコーラを持ち、映画館に入った

くその一方く

「このショッピングモールには沢山の人間がいる、そいつらを殺せば、
俺もゴの仲間入りだな。まずは頭の悪いあいつらを呼んでからにし
よう。なんだ？警察だったか」

メ・ガルメ・レはショッピングモールをゲームの会場にするべく動
き出していた。

く未確認対策本部く

「ショッピングモールで殺害予告…!?!」

一条悠介は、殺害予告を話を聞き戦慄する。

「31号の仕業か…」

「はい、ここ最近殺害予告をしてから殺すという手段が、駆けつけた警
官も全て殺されています。こちらを」

見せられた映像は殺害現場のカメラだった

「相手はカメレオンか…?」

「そして5分たてばこうやって透明に」

「…厄介だな…」

頭を抱える一条悠介。

(また、彼をたよってしまいか…)

(おいまてまてまて〜い!)

俺は今、映画を見ているのだが…

(もうこれあれだ!あれ!)

リサの方を見ればもう俺の手をギュツと握って顔を赤くし俯いていた。

俺もリサも知らなかった。この作品、まあまあ過激な性描写があることに

「あ、あのく…リサさん?大丈夫?」

「えっ!?うん!大丈夫!」

(だめだ明らかに動揺してるな…)

その後はまあ普通に結婚して終わると言うハッピーエンドだった。

「あー…面白かったですね?」

「うん、そうだね…!」

さつきとは打って変わってしおらしくなったりリサを連れ歩く。時

刻は13時50分

「ちよつと、トイレ行ってくるね!」

「あ、俺も行こ」

とりあえず2人でトイレに行く。男性と女性で別れる。そして戻って来た時だった。向こう、玄関辺りで騒ぎが起こっていた。

「なんだろうね?」

「おい!あかねえぞ!どうなってんだ!」

「!?!」

「ちよつと…なにがあつたんですか?」

俺は近くにいた店員に聞くと

「何故かショッピングモールの扉という扉が閉まつたんです!」

「おい!八意!」

「あれ？一条さん!?!なんでここに？」

俺の目の前にぜえはあと息を切らした一条さんがやってきた。俺は何事かと聞く。隣にいるリサは誰？みたいな顔をしているが視線で察してくれたらしい

「それが、14時にここでゲームという殺しを行うと警察に連絡があつてな、馬鹿な警官に止められるかな？とも言われたらしい」

ちようど、14時になる。周りにいた一条さんを含めた警官の顔が厳しくなり、拳銃を構える。他の人は何事かとどよめく

その時だった。リサの右隣にいた男性が見えざるなにかで2階に引き上げられたのだ。悲鳴をあげる暇もなくその男性は首が180度曲がって1階に落ちてきた。死んでるかなんて見ただけでわかる。

一気に場所がどよめく。悲鳴と怒声が入り乱れる場所に1つ、笑い声が響いた。皆、一気に静まる

「こんなに集まるとは、いい獲物達だ。ゲームに相応しい」
「ゲーム…？」

一条さんは周りを見渡しながら探る。俺もリサを自分後ろにやり、辺りを見渡す。

「ルールに従って、如何に人間を殺すか、最高のゲームだ」
「ふざけやがって…本当の目的はなんだ！」

俺は反射的に、そう答えてしまった。
「だから…ただのゲームだ」

呆れた声をしながら姿を現す。吹き抜けの2階の柵に、器用に立つて腕を見せながら。その化け物は姿を表した

「獲物を追い、狩りをする。それ以外に意味は無い」
「ひどい…」

後ろにいるリサが震えながら声を出す
「そんな理由で人を殺すのか…ふざけたことを…！」
「ゲームを続けよう」

そういうと相手は消えてしまった。直後、警察がいた場所目掛けて発砲をしていた。だがそこに奴はいない。

次の瞬間、また1人さつきと同じ方法で殺された。一気に場所がぎ

わつく。俺はどうすればいいかと考えていた時、玄関の扉にパトカーが1台突っ込んできた。ガラスは割れる音が響く

「おう…ワイルド…」

そんな事お構い無しに扉を開けアタツシユケースを手を持った人物が一条さんに近寄ってなんやら話をしている。

そのアタツシユケースの中身をチラ見すると…

「おう…」

中にはグレネードのような形をした投擲物が6個あった。

(まさか吹き飛ばすとかいわんよな?)

不安になりながら見守る俺をよそに2人はピンを抜き、奴が居そうな場所に手当たり次第に投げつけた。

「おわっ！」 「きゃ…！」

それは爆発…ではなく目が潰れるほどのフラツシユをたき終わる

(閃光弾…！)

やがて光が無くなり…奴は1階の俺達の後ろにいた。すかさず警官が発砲するが、相手には通用せずに…

「…！」

相手は通路をとんでもない速度で走り出した

「追え！逃がすな！」

すかさず警官が後を追う。俺もそれに続こうと…

「想くん！」

リサが呼び止める。

「頑張つて…！」

俺は親指を立ててそれに応え走り出した。

「一条さん！奴は!？」

「こつちだ！なら…こつちから行けば先回りできる…！」

「俺行きます！」

そう言い走り出す。通路を右に走り左に曲がって…

「なんだお前は」

奴とちようどで鉢合わせた。

(毎日無駄に走ってただけあつてあんま疲れてないな)

そう考えながら俺はベルトを出し

「変身ー!」

赤のクウガへと姿を変えた

「クウガ……!」

そう言う相手の言い方は、喜んでいるようにも見えた。俺は無言で構える。相手は右に走り出しそれについて行く。お互い扉を突き破り外に出る。

「お前を殺す俺の名は、メ・ガルメ・レだ。」

「……!」

相手が舌を伸ばして攻撃してくる。俺はそれを何とか転がりながら避け相手との距離を縮めて腹にパンチを繰り出す。相手の腕を受け止め掴み、上から肘打ちを叩き込んで後ろに周り相手の首に腕を回し締め付ける。

そこに、拳銃を持った一条さんが走ってきた。腕時計を確認して、俺に言ってくる。

「八意ーもうすぐ消えるぞー!」

「えっ……消えるって……!?!」

俺は消えられたら厄介だと思い、俺の腕を振り切り前を向いた相手の腹と顔に拳を打ち込む、それに加えて4連続のパンチを繰り出し足を上げて相手を蹴り飛ばす、相手は後ろに吹っ飛び地面に顔から激突する。

「ふっ……」

俺はキツクの構えを取る。立ち上がった相手は消えた

「!?!」

俺はキツクの構えをやめて……一条さんに近寄る。まだあいつを倒せるチャンスはある。

「一条さん、拳銃貸してくれませんか?」

一条さんは俺を信じてくれたのか拳銃を貸してくれた。俺は頷いて少し離れて……

「超変身！」

赤のクウガから緑のクウガへ姿を変えた。それと同時に、空からクワガタの機械がやっときた

『お待たせしました』

「いや全然待つてない。むしろジャスト」

俺は苦笑しながら答え、拳銃に意識を向けた。モーフイングが働き拳銃はボウガンへと変わった。

「おお…」

後ろで感嘆する一条さんを無視し俺はボウガンを引き絞りゴウラムの足に手をかける。たちまち景色は上へとあがり…空へとあがり
とまる。

街の様々な声が入る。都会の喧騒。バンドの音。車が走り電車がはしり、誰かが走り…

「そこか…！」

俺は奴の姿を捕えそこに狙いを定める。

ボウガンを持つ腕に電流が走る。

俺は相手目掛けてボウガンが撃つ。それは見事に奴に当たり…
爆発した。その瞬間を、一条は見たのだった。上をむくと…そこには
彼がいた

俺は爆発したのを確認すると、赤のクウガへと姿を変えた。

その腕にはまだ電流の余韻が流れている。

「一条さん、これ、ありがとうございます」

「ああ、今回もありがとう」

俺は一条さんに拳銃を返し頷く。

「想くーん！」

「リサ…」

「撃つ瞬間見たよ！すごくかつこよかった！ほら！」

「なんで動画撮ってるんですか…？」

「いいじゃん！ん！」

「はあ…」

「お熱いな」

「一条さんまで…？」

〜次の日〜

いつものように、circleで練習をしているRoseliaの

休憩時間

「リサ姉そのネックレス似合ってる！」

「似合う？ありがとう！」

あここに続きその他の人も気づく

「そうだ皆！コレ見て！」

「今井さん？どうしたんですか？」

紗夜も友希那も燐子もあこもスマホを覗き込んで再生された動画を見る。

「すごい！カッコイイ！」

「これは…すごいですね…」

「かつこよかったね…あこちゃん」

「百発百中かしら？」

「リサ姉！RoseliaのLimeグループにその動画ちよーだい！」

「いいよー！」

〜その一方〜

「へくしっ！」

「どうしたの？風邪？」

「あ、まりなさん。お疲れ様です。なんででしょうかね？どこもだるく

「はいですけど…」
「そうなの？気を付けてね」

「夏休みも半分かあ〜」

ここ最近、未確認事件は2週間前から忽然と消えた。4号がやつてくれた。勝ったんだなどと言ってはいるが俺はそんなこと思わなかった。なにかでかい事をやらかしそうだったからだ。一条さんにもその事は話しておき一応警戒はしてもらっている。

「こうやって…落ち着いていられるのも後何日だろうか…」

そこに1本の連絡。日菜からだだった、悪寒がしつつもL i m eを開くと、要件はこんな感じだった。

『今日パスパレのみんなと隣町に遊びに行くんだけど想くんもどう？ちなみに許可取ってまーす』

みんなそうだが何故か俺を呼ぶ。そんなの女子だけで行けばいいじゃないか。女子会だ女子会、そこに男子を巻き込むでない。

『女子だけで行くのは…？』

即返信が帰ってくる。

『あ、もうみんなに行けるって言っちゃった。駅前で待ってるねー』

俺は危うくスマホをへし折りそうだった。こいつ、人の話を聞かないなど

「はあ…」

俺は最近、なんやかんや言いながらこいつらに振り回されると確かにめんどくさいが嬉しいとも思い始めてきた。

「って…何を考えてるんだ？俺は…」

確か隣町だったな、と思いながら身支度を済ませる。今回は電車なのでトライチェイサーはお留守番だ。家を出て15分くらい歩き駅前に着く

「女の子待たせるなんてひどいぞ想くん！」

「日菜か、こんちゃ」

「えっ無視!？」

「えーと他には…」

ぺしぺし叩いてくる日菜を無視しながら周りを見るとパスパレ全

員集合していた。みんなそれっぽい変装はしている。

「俺は何？ボディーガード？」

「今回はタダ働きだけどね、でもアイドルの素顔見れるからそれでチャラー！どう？」

「すみません帰らさせていただきます」

「えっ…うそ、うそだよ!?!ちゃんとみんなで遊ぶんだからね！」

「そうか、ならいいんだが」

「よろしくおねがいます！」

「お願いします！」

「久しぶり、麻弥とイヴ」

挨拶も程々に、一同は改札をくぐり…

「なんでみんなそんなに速いの!?!」

「何してるの? 想くん？」

みんな何故かスマホをかざすだけで改札を通ってしまうので、切符勢は俺だけだった。

(ICカード…作ってもらお…)

電車に乗って、10分が経ったところで俺達は異変に気づく

「なあ…日菜、なんかお香みたいな匂いしないか？」

「んー? そうかな、あつ確かにする…くんくん…」

匂いの元はすぐに分かった。

「彩ちゃんお香みたいな匂いする！」

「えっ…? 私? お香なんか炊いてないよ？」

「えー」

その中俺は、一人の女と目が合った。白いノースリーブの服を着た怖そうな女と、だがなぜか、異様な気配がした。俺の頬から冷や汗が流れる。だがその女は、別の車両に入っていた。

「ねー! 想くん？」

「あ、ああ日菜? どうした？」

「いや、なんでさっきから向こう向いてるのかなーって」

「いや、別になんでもない」

「ふーん、あ、次の駅で降りるよ！」

「分かった」

俺は思考を切りかえてつり革を握った。

俺たちが降りた駅は花咲川より少し大きく、周りにはショッピングモールやのが沢山あった。

「都会だ…」

「まずはどこへ行きましょうか？」

イヴが尋ねる。俺に聞かれても困るんだけどなあ…。

「とりあえず、行きたいところでいいんじゃないか？」

俺はそう言いながらスマホを取り出す、時刻は昼の11時。まだまだ沢山あるんだからね

「…で、なんで楽器店なんだ？」

俺は今、楽器店にいる。めちゃくちゃでかい規模の、別にいいんだがなぜここまで来て楽器店なのだろうか。まあみんな楽しそうだし別にいいんだが

「俺もギターとかやって見るか…？」

ギターが沢山置いてあるところを見て回る

「想くんもギターに興味あるの〜？」

「日菜か、まああれだな。やれたらの話だ」

「やるやる！絶対楽しいよ！うん！」

途端目をキラキラさせながら飛びついてくる日菜を止めてギターを見る。赤色や青色、モカがもつたギターなどがあり見れば見るほど引き込まれていく。そして俺は自然的に動いた手で1つのギターに触れた。

そのギターは、黒と金で彩られたギターだった。

「これに、しようかな」

口からそんな言葉が出る

「んー？うわっ、それ高いよっ？」

横から覗いてきた日菜が値札を見てギョツとする。

「ほんとだ…まあ大丈夫だ。」

自分の休める趣味を見つけたいなと思っていたが、ギターはもしかしたらいいかもしれない。

????

「お会計ありがとうございます！」

俺は新品のギターケースを担ぎ店を出た

「意外だわ、貴方がギターを始めるだなんて」

「千聖だつて見た目に遭わずベースしてるだろ」

「そのギター、とつてもカツコイイです！」

「ありがとう、イヴ」

「この種類は…めちやくちやいやつじゃないですか！」

俺のギターを見ていた麻弥がずり落ちたメガネを直しながら言う

「そうなのか？俺的にはかつこよかったから買ったんだが…」

「ええ…そんな理由？」

彩が苦笑いしながら答える。とりあえず店を出て…

「なんか、騒がしいね」

右の方を見ながら彩が言う。

「それに…なんかこつちに歩いてきてない…？ほら！」

日菜が指を指す。その方向を見ると…

「っ!？」

俺は戦慄した。さつきの電車にいた女だ。しかも右手には薙刀を持ち、気味の悪い笑顔でこちらに来ている。その後ろには…首の取れた死体が2つ転がっていた

「お前から見るな！目を閉じろ！」

「なんで…!？」

「いいから！」

とりあえず皆の目を閉じさせて先導しながら後ろに後退する。その女は、歩くのを止めて、息を大きく吸い込み…

「次は、こつちか」

と俺の方を見ながら歩いてきた。

(何かを匂いだ…電車の中…)

『彩ちゃんからお香の匂いがする！』

瞬間、頭の中に日菜の言葉が蘇った。

「お香…もしかして狙いは彩か…！」

俺は途中で立ち止まる。後ろには彩達がいるが、ベルトを出し

「変身！」

赤のクウガへと姿を変えた。相手は立ち止まり、俺の姿を一瞥すると、

「クウガ」

と少し微笑みながら答える。そして元の厳しい表情に戻り

「クウガ、貴様を倒すのは…このガリマだ」

と言い持つてる武器に反したスピードで俺に切りかかってきた

「っ！」

俺は何とかして頭を動かし躲す。振り向きざまに化け物に変化した相手を掴み、できるだけ彩達から離して蹴り飛ばす。右から斬りつける攻撃を避けると…俺の傍にあった看板が真っ二つになり転がる。

「切れ味抜群じゃねえかよ…！」

攻撃を避けるが薙刀を器用に使いもう片方の刃で斬りつける。俺は避けれずに右腕でガードする。その場に留まらず、近くの店の壁にぶつかる。

「っ！」

なんとか膝蹴りをして相手を左に逸らし壁から離れる。振り向きざまの攻撃を後ろに飛んで躲し、左からのもう1連撃を地面を右に転がって避ける、また1つ、今度は店のコンクリの壁を切り裂いた、俺の真横に落ちる、

(この切れ味、やばい…！)

飛んできた相手の右からの斬撃をを躲せず、みぞおちに当たる。

「くっ…！」

薙刀の持ち手を俺の首に押し付け後ろに下がらせる。近くの壁に

俺をぶつけ、ギリギリと首を絞めていく

「…っ…っ！」

少し宙に浮いた足を相手にぶつけ、俺は横に倒れ、相手を後ろにさがる。相手がまだ倒れている俺を斬りつけようと上から斬撃を繰り出す

「はっ…！」

俺は相手の薙刀の持ち手にキックを決め込む。すると相手の薙刀は真っ二つに折れて地面に転がる

「!?」

動揺した相手の腹にパンチをして相手との距離をとる、その間に俺は手をベルトにあてる。霊石が赤から紫へと変わり

「超変身！」

俺は紫のクウガへと姿を変えた。落ちた相手の折れた薙刀を拾い、紫の剣へと変える。

「わっ、紫色になった…！」

「剣を使ってます！」

彩とイヴが目を光らせながら見る。麻弥と千聖は何も言わずに見守っていた。日菜は目を光らせて見ている。

「やっぱりすごいですね。あの人」

麻弥が口を開く。それに千聖が反応する。

「そうね、だけど…」

「どうしたんです？千聖さん？」

(やっぱり彼、まだ何か隠してる。何か…深い闇が…)

それっきり口を閉ざした千聖を不思議に思いながら麻弥は視線を戻す。そこでは…

鎌のように反った剣で俺を斬るべく右から襲いかかるが、俺はそれを右手に持った剣で迎撃する。

「ふっ…！」

俺の肩辺りでせめぎ合う剣をなんとか片手で押し返しながら前へ進む。相手は後ろにさがりながら1度剣を離してもう一度、今度は左からの迎撃する。俺はそれを肘打ちで下に押しつけ、両手持ちにした剣で左から切り裂くが躲される。

「っ……！」

相手が俺の背中に斬撃を入れようとするが紫のクウガの硬さでなんとかガードする。だが背中には衝撃が走り地味に痛い。

「はあっ……！」

斜めに斬り下ろすが避けられ代わりに俺の胸の装甲辺りに一撃が入る。鎧は傷つかないが地味に身体が痛いのだ。

「っ！」

相手の2連撃を躲し後ろに下がる。そして両手で剣を構え直した時、剣に金の電撃が走る。

「なんだ……!?!」

それは次第に全身に渡り……剣の先っぽのほうに、金のパーツがついて伸びる……がすぐに全て消える。

「うぐっ……！」

意識を持つていかれたせいで相手の攻撃に気づくのが送れる。辛くも弾き飛ばされるのは免れたが5分の鏝迫り合いには持ち込めず、俺が膝を着いて上から押し込まれる形になった。

「……っ！」

俺は隙を作るべく相手の剣を横に流す。ギャリイイ！という金属どうしの擦れる嫌な音が耳に響くが無視して相手に左腕で拳を打ち込む。紫の剣をそこら辺に投げ捨てて更に拳で追い打ちを叩き込む。相手はさすがに耐えきれず後ろに吹っ飛んだ。

「っ！」

俺はその隙を逃さず赤のクウガになりキックの姿勢をとる。足に炎が宿り……そこに少し、先程の電流が加わるが気づいていない。

「おりゃああああー！」

渾身のキックは相手の胴体に命中する。俺は膝をつきながら息を整える。

「はあ…はあ…」

さらに吹っ飛んだ相手の腹には、紋章が浮かび上がっているが…

「うおおおお！」

相手は女とは思えない気合いを出して紋章を消した。

「なにっ…!?!」

俺は立ち上がり、もう一度やろうとするが相手は俺に蹴られた腹を抑えてどこかへ素早く逃げ去ってしまった。

「あちゃー…逃がしちゃったね」

後ろに駆け寄ってきたパスパレ、日菜が口を開く

「ああ、早く止めないと。あとお前ら、今日はもう帰るぞ」

「えっ」

俺は困惑する彼女達に状況と経緯を説明する。

「まさか彩さんが…」

「嘘…」

「あのお香が原因…」

それぞれ口に出す傍らで俺は相手の剣を持ち上げる。意外とずつしり来る剣を叩きつけてバラバラにする。俺が使いまくったせいなのかは知らないがもう耐久力がなかったのだろう。その破片を拾いながら考える。

(しかしあいつ…女の割には怪力だな)

破片を何個かポケットに入れる。とりあえず一条さんに届ければ今後の対策になるかなと考えたからだ。とりあえず電車に乗りその日は帰った。

く帰り道く

「なあ彩」

一応護衛をするために彩の家まで着いていくことにした。その途中、余り喋らない彩を気にして俺は声をかける。

「どうしたの?」

「気にしてるのか?お香のやつ」

「うん…またみんなに迷惑かけたなあって」

「大丈夫だ。あいつは俺がとっちめてやるから安心しろ」

「うん…分かった」

家に着いてそのまま別れた。

「さてさて…ギターの練習でもしますかな」

俺はそう呟いて帰路を辿る

「ギターむず…」

俺はギターをケースにしまいながら一言つぶやく。あれから一応警察署へ行き一条さんと会って剣のパーツを渡した。そこから家に帰り、早速ギターを始めたのはいいが…1時間で挫折。また紗夜か日菜辺りに教えてもらおうと思いつつ…

「タマ…？」

そう言えば、タマを見ていない気がする。俺は辺りを見回す。キツチンにも、トイレにも押し入れにもいない。

「まさか…外に出た…!?!」

いやそんなはずは、鍵だつてちゃんと閉めている。そんな事ないはずなのだ。

「…!」

俺は一応窓を見る。開いていたのだ。

「なんでだ…!」

俺は寒気を感じ、ベルトを出す。同時にゴウラムを呼び出して「変身!」

近くにおいてあるホルスターから拳銃を乱暴に取りだしボウガンへと変えてゴウラムに捕まる。

夕方の通勤ラッシュの音に耳が痛くなる。街の喧騒が聞こえるが意識を集中させる。

(タマ…どこだ…!)

「いた…!」

その中に微かに聴こえたネコの鳴き声、タマの鳴き声で違いない。俺はゴウラムから降りてトライチェイサーに跨る。その上からゴウラムがくつついて…

「トライゴウラムでいいか、よし行くぞ!」

赤のクウガになり俺はアクセルを全開にして走り出したのだ。

タマの元へ着いた。だがしかし

俺は視線を落とし下を見る

「タマ……？」

口からしわがれた声がでる。タマは残虐に……無慈悲に殺されていたのだ。死体は酷い状態で放置されている。

「おい……しつかりしろ……」

ふらついた足取りで近づく。そして手が触れかけたその時だった。

「……あ？」

俺の体を凄まじい衝撃が襲った。何者かに蹴られたのだ。俺は防衛出来ずにボロきれのようにとび近くのコンクリの壁に穴を開けて止まった。

「ぐほっ……」

吐血して倒れる。俺はなんとか立ち上がり姿を見て……こいつがタマを殺したというのがすぐさま分かった。俺の心を黒い感情が支配する。だがもうひとつ、その姿を見て俺は戦慄した

「俺と同じ……クウガ……？」

俺の色は赤、だが相手の色は黒なのだ。目は紫色で右手には黒い剣を持っていた。先には血が着いている

「てめえがタマを……！」

だがそんな事どうでもいい、今はこいつを殺す。タマの仇をうつんだ。

「うわああああアアア！」

俺は絶叫しながら地面を蹴り相手との距離を詰めるが……

「……？」

俺の視界は横に傾いた。

「ぐっ……あああ！」

腹から血が流れる。赤のクウガの装甲をいとも容易く斬り裂いた。

「ふっ…久しぶりだな。挨拶がてらだったがやりすぎたか？」

立つ相手から出てきた声にあっけに取られる。いや、なぜだ、おかしい。だって、この声は、この感じは――

「なんで…クソ野郎が…」

「相変わらず可愛くない息子だぜ…つと…！」

「ぐふっ…！」

「ちゃんとしつけてやらないとな」

相手は笑いをこらえる声で件を逆手に持ち、俺を刺した。刺されたはずなのに痛みを感じない。否、それは目の前に起きてる衝撃の方が大きいからか。

「うおっ…!？」

「シッ…！」

俺から自分でも引く程の気合いとともに放たれたキックは相手の顔に直撃し、隙ができた。俺は後ろに転がり距離をとる。腹に刺さった剣を取ろうとするが貫通し、背中から突き出している剣はビクともしなかった。俺は諦めて相手を殺すために立ち上がったが…そこにはいなかった。

「どこだ！でてこい！」

あらん限りに叫ぶ。それに対し相手はまるで俺を嘲笑うかのような声で

『だから言ったら、挨拶がてらだって。猫を殺した位でそんなにキレるなよ。またなあ！』

と言った

「うおおおおおおあああああああああああ！」

地面に拳をぶつけ、俺は喉が切れんばかりに叫んだ。また守れなかったことに対する悔しき。そして奴への怒り。

「タマ…」

俺は白のクウガになった身体なんか気にせず、剣を引き抜いてタマに近寄った。抱き寄せても、なんの反応も起こさない。冷たくなつたタマを抱き寄せて、俺は雨の降り始めた空を見て泣いた。

どれくらいがたっただろう。

あたりはすっかり暗くなり、周りの街灯が着き始めた時だ。傘を指した人が俺の前で止まった

「あれっ、想くんなにしてるのって何その傷!？」

リサだった。荷物にはベースを背負い、弦の入った袋をぶら下げている

「リサ…」

「あっ！」

俺が腕に抱いてるタマに気がついたのだろう。

「タマちゃんじゃん、久しぶりだなく！」

「タマは死んだ…」

「え…？」

「俺のクソ親父が…殺したんだ…助けられなかった…」

俺は腕の中で丸くなったタマをリサに見せる。

「そんな…」

リサが信じられないという表示を見せる。

「リサ…？」

リサの目から涙が出ていることに気づく

「アタシ…タマちゃんとはあまり一緒にいなかったけど…可愛かったのに…」

「もつと、会わせてやればよかったな…」

俺はそう言いながら立ち上がる。降りしきる豪雨が俺の体を冷やしていく、流れていく雨のように俺の何かが抜け落ちていく。そんな気さえした。

「想くん？」

「俺…帰るわ」

「え…でも」

「タマのことは心配すんな。お前だってあまりこんな所にいちやダメだし第1雨も凄いからな。」

無理矢理作った笑顔でそう答える。

俺はそう言いながらリサから逃げるようにバイクに乗り走った

「想くん…」

アタシは想くんが立ち去った場所に一人立っていた。タマちゃん
の死は、想くんにとってそれ程のダメージがあったのだ。

「アタシで…元気つけてあげたいな…」

自然と口からそんな言葉が出て、慌てて辺りを見回す。幸いにも誰
もいず、1人で安堵していた。

「早速…行ってみよう…！その前に荷物置いてからかな！想くんの好
きな物…ってなんだっけ？」

リサは多い独り言を言いながら家へと足を向けた。

「で…俺の家に来たと」

「えへへ…」

「びしょびしょじゃねえか、こんな雨の中来たのか？歩いて？」
「うん」

「はあ…シャワー貸してやるから浴びろ。服は置いといてやるから、
サイズあうかは知らんが」

そう言う彼の目は赤く腫れていた、きつと泣いたのだろう。

「ありがとー」

それに気付かないふりをしつつ、リサは家に入った。

「なにか温かいものを用意してやるか」

リサがシャワー室を使っている間、俺はふとそんなことを思いついた。とりあえず立ち上がりキッチンへ行く。いつもの癖か猫用のおやつを取りそうになり手を止める。行き場の無くなった手を下におろし、拳を固く握り締める。手のひらに血が滲むが気にしない

(アイツには…もう何も奪わせない…絶対に、殺してやる)

その目に宿るのは殺意のみだった。

「想…くん？…どうしたのその手」

横からそんな声がして振り返ると、少しダボダボな服を着たりサがタオルを頭に乗せて立っていた。

「ああ、リサか」

「ねえ…大丈夫なの？」

リサがこちらに近づいてきながら言う。その声は、不安にまみれていた。

「大丈夫、と言えば嘘になるかもな…」

初めて表してくれた彼の本音にリサは少しビクツとする。

「リサ…？」

リサはいつの間にか、抱きついていていた。これで彼の傷が埋まるとは思えないが少しでも、ほんの少しでもという祈りにも似た思いを込めて

「やつぱり、辛いよね。アタシには大切な人を失うって言うのはあまりよく分からないけど…でも、我慢しなくていいんだよ？アタシにだけでも…頼ってくれていいんだよ？」

「リサ…」

「だってアタシは…想くんの事が好きなんだから…」

「…」

そこから少しして、想くんはぽつりぽつりと今思い出している過去について話してくれた。そして想くんは、この世界では生まれてな

いことも、私には信じられないものばかりだった
「そんな…」

彼から奥歯が軋む音がする。

「ここに来るなんて…思いもしなかった…また…守れなかった…！」
彼が悔しそうに拳を握りしめる。その手から血が滲み滴る。

「ううん、そんな事ない…！想くんは悪くない！」

「タマちゃんだって、そんなに悔しがらないでって、そう思ってるんじゃないかな…」

ありもしないことを淡々と言える自分に少し恐怖を覚える。

「リサ…」

リサはきつと、俺を元気づけようとしてくれているのだろう。

(そうなのかな…タマ…)

俺は心で聞いてみる。答える声なんて無いはずなのに…不意に世界が白くなる

『にゃーん、にゃーん！』

不意に、俺の耳に…タマの声が聞こえる。

「！」

『にゃにゃ！にゃにゃにゃにゃ！にゃー！』

「何言ってるのかわかんねえよ…」

必死に何かを訴えてるタマに向かって笑みをこぼす。

「でもお前がそんな元気なのに俺がこれじゃああれだな…よし！」

『にゃ…!?』

俺は自分の頬を思いつきりシバいた。かわいた音が響く

「よし…！タマ！見ててくれ…俺、頑張るから」

『にゃ！』

く世界は元に戻るく

「想くん？」

突然黙り込んだ彼を不思議におもい名前を呼ぶ。すると彼は顔を上げて

「…！」

彼の顔は、さつきとは打って変わって晴れ晴れとしていた。

「リサ、俺はもう大丈夫だ。ありがとう、猫にも元気づけられるとか人間として情けねえな…本当に…！」

笑顔を作る彼、その笑顔には迷いは無い。

「まったく…」

「…？」

リサは立ち上がり

「猫に元気づけられるとか…おねーさん来た意味ないじゃん…！」

「いや、あるぞ。」

「え？」

直後、腹から絶叫が聞こえた

「リサが作ったご飯が食べたい」

「ふふっ…任せて！」

その後、冷蔵庫にある余り物を使い、リサは料理を振舞ったのだ。

「…ん」

リサは妙に柔らかい場所で寝ていたなと思いつきながら起き上がる。誰かの寝息が聞こえ、横を見ると

「…え!?!」

彼が寝ていたのだ、おかしい。昨日は確か…料理を振舞って…

「あ…」

そうだ夜も遅いからあれだったんだ!忘れてた…!

(あゝ!! やってしまった…! うわっ! 親から連絡沢山来てるし! どう説明しよう!?)

頭をブンブン振り回すリサ。今の頭の中はショート寸前だった。

「…ん? あ…おはよりサ」

「えええ! おはよよ!?!」

「…? どうしたよ、そんな困惑して」

(いやいや誰でも困惑するよ! ええ? でも何も考えてないってことはアタシの事なんとも思っていないのかな…? なんかそれはそれであれだなく…)

複雑な乙女心というものに気付かない八意想。

「昨日あの後俺が洗い物してたらいつの間にか寝てたからさ、起こすのもあれだし雨まだ降ってたから…今はもうめっちゃくちや晴れてる」
(最近他の子ともよくいるし…別に私達が付き合ってる訳でもないし…うーん…?)

「リサ…? おーい」

何か難しい顔になり唸るリサの頬を触ってみると

(あ、ぷにぷにしてる)

「?!?!」

正気に戻ったと思いきや、今度は顔が真っ赤だよ。本当にリサは忙しい奴だな

「えくつと…なにしてるの?」

「いや、リサがぼーつとしてたし、あとほっぺたぷにぷにだな。触って

て気持ちがいいや」

「どういたしまして…？」

その後、約5分はぷにぷにされていたリサであった。

～昼間～

「♪」

鼻歌を歌い、ご機嫌よく歩いている人物がいた。それはレッスン帰りの丸山彩である。

(エゴサしないと…！)

スマホを片手に歩いていたら、人にぶつかる。

「あ…ごめんなさ…い？」

その女性は白いノースリーブの服を着た人…ではない。

「あ…！」

その女性の右を見ると、カマキリの鎌のように反れた半分に折れた剣を持っていた。

「…ひっ！」

「お前で、最後だ」

笑顔で、そう言いながら剣を振り上げる。

「いやっ…！」

彩はすぐむ体を無理矢理奮い立たせ走った。

(どうして…！ちゃんと匂いは取ったはずなのに…なんで！)

「…いたっ…！」

考え事をしていたらせいで足元が疎かになってしまいコケてしまった。

「やめて…助けて…！」

涙ながらに言うが周りに人は誰もいない。

「もう逃がさないぞ」

相手はそう言うと、人の姿から化け物へと変わった。

(ここで…死ぬの…？想くん…！)

相手が鎌を振り上げて、彩を殺そうとする。彩は目をつぶり、最期

の時を待った。

「うおおおおお！」

「!?!」

その時、バイクが走ってきた。前輪を上にあげてこちらに突っ込んで相手を向こうの柱まで吹っ飛ばした。バイクを彩を庇うように停めてヘルメットを外しこちらを見る

「大丈夫か!?!彩!?!」

「八意くん……!」

俺は帰りに昼飯を買いに行くために、少しだけ離れた所にバイクで走っていた。

(あの後、リサずっと元気なかったな。また今度映画にでも誘おう、それか何かプレゼントか?うーん難しい)

そんなことを考えながら道路を走っていると、向こうの歩道から見覚えのある人物が走っていった。

(彩だ…あんなに急いでどうしたんだ?あいつドジだしなあ…俺が送って行ってやるか)

俺は昼飯を後回しにして、彩を追ったのだが…

(あいつ…まだ彩を狙ってやがったのか!)

一瞬だけ見えた鎌だけでも十分な証拠だった。しつこいことに奴はまだ彩を狙っていたのだ。

(追っておいて正解だったな…!)

俺はそう思いながらヘルメットを取った

「早く逃げろ!」

「う、うん…!」

彩は後ろに走り…近くの柱に隠れた。顔だけを覗かして、スマホをかざして

向こうから相手が立ち上がりこちらを見る。

「クウガ…」

俺は腰に手をあてベルトを出す。

「変身！」

霊石は紫、俺は紫のクウガへと姿を変えた。トライチエイサーのハンドルを抜いて、剣へと変える。俺は数歩前に歩き、剣を横に構える、その剣を電流が流れる。俺はその電流を見ながら、数十分前の会話を思い出した。

↳弦巻家、実験室↳

「30秒が限界かと…」

「30秒…」

俺は体を調べてもらい、自分に電気が流れていることを伝えられた。それを更に引き上げるために、自分に電気を流してもらった。だいぶ危ない賭けだがこれしかなかった。

何故黒服にそう時間制限を言い渡されたのか

クウガになった時に電流を意識すればさらなる力が使えらるが、筋肉の活動電流の増加、アマダムから脳に及ぶ神経系の増殖が著しくなってしまうことも、訳せば人間を辞める、そういうことだ。

俺は大量の汗を拭きながら黒服を見る

「できるだけ…使わないようにお願いします」

黒服の1人がそう伝える。

「はい、分かっています」

俺はそういうが

(多分これから先も、どんどん強い敵が出てくる。そいつらを倒すためなら俺は人間だって辞める)

普通に、恐怖は感じなかった。それが俺に与えられた指名。夢ある彼女達の笑顔を守る。いや、世界中の人達の笑顔を守る、そのために俺はいるんだ。そんな覚悟がなければ戦士失格だ

「30秒以上使うとどうなるんです?」

俺は一応聞いておく。

「最悪の場合…死に至ります…」

「そう…ですか」

「はい」

「わかりました。できるだけ使わないように努力します。となるとまず特訓だな!」

相手が鎌を持ち直し、上から斬り掛かる体勢で走ってくる。

「…っ!」

俺はそれを横でガードする、接触点が激しく軋む。俺は何とかして横に剣を持っていき、上から押さえつける。そのまま前へ進み彩から遠ざける。

「ハアッ!」

相手が俺の防御を突破し鎌を横に振る。俺はそれを頭ギリギリを掠めたが避ける。

「はあ…!」

俺は相手の隙を見て横に剣を振るが相手はさすがのスピードで鎌を振りガードする。そのまま後ろへ押され壁に背中をぶつける。相手が俺の剣を押さえつけようと鎌を左に傾ける

「っ!」

俺は剣を両手持ちにして、なんとか元の位置で鏝迫り合いをする。その時、剣に強めの電流が迸った。

「!?!」

俺は相手が驚いている所に左手でパンチを入れてぶっ飛ばす。

「くっ…!…うう…!」

やがてその電流は、剣を通して体までなだれ込む。刃先が金色のパーツへ変化していき、身体の鎧の色も変わる。

俺は全身の激痛に耐えて…紫の金のクウガになった。震える右手で剣を相手に向ける。

(思ったより痛てえ……くそ……！)

残り25秒、その間に俺はやらなければならない。

「ウォオアアアア！」

本当に女なのかという気合いを出しながら俺に斬り掛かる。俺は剣を両手に持ち、構える。

「はあっ……！」

相手の斬撃を避けて、腹目掛けて剣を突き刺す。さながらカウンターの攻撃だ。

「グツ……！」

「……っ！」

刺した感触が腕につたわり、気持ち悪さが体を支配する。

「ウワアアア！」

直後、腹を串刺しにされた敵が爆発して消えた。

「……。」

俺は無言で剣を下ろし、変身解除する。

「八意くくん！怖かったよおお！」

直後、後ろから抱きつき大泣きする彩がいた。

「もう大丈夫だからな、よしよし……！」

「うう……。」

その後、約5分間は泣き続けた彩だった。

「いや……なんで寝るの？彩さん？」

近くのベンチに腰掛けたのはいいが、泣き疲れたのか彩は眠ってしまった。しかも膝枕。起こしてしまいたいのだが……本人にも悪い。

(それにしても……雷の力……か、いや金の力でいこう。)

俺は金の力を習得？した。戦いは多分苛烈になるだろう。

(こいつらをあまり巻き込みたくは無いなあ……)

そう思い。とりあえずそのままにした

夕方まで寝てた。膝が痛い

第四章 過去とゴ集団

page 52 身体の痛みと心の痛み

夏休みも後半。俺は一条さんに呼ばれてファーストフード店へと足を運んだ。

「どうしたんです?」

「最近、調子はどうだ?」

「はい、未確認も何体が倒せてますし順調ですよ?」
「そうか」

一条さんが難しい顔をしながら話を進める。

「実は新たな未確認は空を飛ぶんだ。何回か目撃情報が入っている、ヘリを飛ばして搜索してみたんだが…」

「だが…?」

「如何せん飛ぶ速度が速すぎてヘリでは対抗しきれなかったらしい。」
俺は頭の中であのハチ野郎を浮かべる。あいつは確か連射はしてなかった。緑のクウガなら…

「花咲川の上空を50音順に移動し、各地区の人間を9人ずつ殺害して回るといふ推測が出ている。しかも居場所の特定は困難。」

「そんな…」

「吹き矢を使い標的を射殺する、連射も可能で、視力と精度が高く、駆けつけた警官は皆心筋梗塞で亡くなっていた」

連射出来るという話を聞いた瞬間、俺はどうすればと思ってしまうた。

「そこで、君のあの緑の力を貸してほしい…!あの力で地上から奴の羽ばたく音を捉えて攻撃してほしいんだ!」

「…わかりました。最善を尽くします…」

正直、あまり勝てる気がしない。となるとやはり金の力をつかって緑を強化するしかない俺は考えた

『あまり…使わないようお願いします』

黒服の声が頭をよぎる。

「俺はこれで、また何かあったら連絡する」

そう言いながら一条さんは会計を先に済ませて車に乗りどこか行ってしまった。俺はしばらく、その場に座り色々と考えていた

　　次の日、朝7時

「今日…そう言えば黒服さんに呼ばれてたな…」

クウガ関係のことは黒服さんに任せっきりにしていたので、その黒服さんがすぐ来いつて言うぐらいだしなにかあったのだろう。

「とりあえず…行くか」

一応拳銃を入れたホルスターを腰につけて、俺はバイクに跨り弦巻邸に行くために走り出した。

『こちら一条！聴こえるか？八意！』

「え？一条さん！」

『今37号が上空にいると言う報告がきた！今どこだ！』

「羽丘女子学園の近くです！」

『分かった！屋上から行けないか!?!』

「不法侵入はしたくないんですけど!?!」

『…。頑張ってくれ』

「ああもう！」

俺は一条さんとの通信を切り腰からベルトを出す。

「変身！」

バイクを走らせながら青のクウガへと姿を変える。そのまま羽丘女子学園の側へよりバイクを止め、青のクウガの跳躍力で一気に屋上まで飛ぶ。

屋上へ着いて拳銃を取り出す。

「超変身…!?!」

緑のクウガになろうとした時、どこから矢が飛んできた。その矢は俺の持っていた拳銃に当たる。拳銃は下に落ちていった。

「正確すぎだろ…！」

もう1発、またもう1発、矢の嵐だ。俺は避けて下に落ちる、青のクウガのおかげでなんとか飛び降りても綺麗に着地できた。

「どこだ…？」

拳銃が見当たらない。周りを見渡すと、木の近くに落ちていた。取ろうと走り出すが拳銃の前に矢を放たれ妨害される。

〜羽丘女子学園生徒会室〜

「つぐちやあくん！」

「日菜先輩…頑張ってくださいよ…」

今日は、二期期の文化祭や体育祭の色々な資料を作ったりまとめたりをしていた。ここだけの話、文化祭も体育祭も花咲川と合同である。それに向けて、両方の生徒会は動き出していた。

「あれ？今誰か落ちませんでしたか？」

「つぐちゃん？どうせ鳥とかでしょ？」

「パシン！と乾いた音がする。」

「!？」

何かが地面に落ちたのだろうか。だがその乾いた音は2度、3度と続く。

「なんだろうーねー？」

「あつ…日菜先輩！危ないですよ…？」

窓を開けて下を見る日菜の目が次第にキラキラしていく事に疑問に思い下を見ると…

「あ…」

青のクウガ、八意想が必死に何かから避けて木に行こうとしていたのだ。だが何かに妨害されているのか一向に近づけていない。ちなみに音がないのでただ八意が転がったりしてるだけというシユールな絵面である。

「何してるんだろ…早く取ればいいのに」

「あつ日菜先輩！地面！」

「ん？あ、ほんとだ」

八意が避けた場所に少し火花が散る。その後、そこには何かが刺さっていた。

「ん？上になにかいるのかな？見えないけどな」

「危ないですって！頭守りましょう！ね！」

「見守るしかできないか」

ため息を零す日菜であった。

「ふっ……よし！ようやく取れた！」

俺はなんとか木まで近づき拳銃を拾い屋上まで飛び

「超変身！」

緑のクウガへと姿を変えた。拳銃がボウガンになり、俺はそれを上空へ構える。

「……！」

羽ばたく音が聴こえる、そこに狙いを定めようとしたが……発射音が聴こえて左に回避する。

その時、地面に着いた左足に電気が迸る。

「またっ……くっ……うあ……！」

全身の激痛に耐えながらボウガンを上にあげる。そのボウガンの銃口に剣のような装飾がついた。

俺は緑の金のクウガへと変わった。

「いける……！」

さつきよりも更に良くなった感覚を使い、ボウガンを上に構え直す。ボウガンを引き……

「くっ……！」

その時、左肘に激痛が走った。左肘を見ると、血が滴り落ちている。(奴の攻撃に当たった……いや掠ったんだ……！掠っただけでこの痛み……！)

痛覚も、さらに底上げされていたのだ。

「くっ……！」

左膝を着きながらボウガンを構え直す。そこにさらに一撃、今度は

右膝だった。

「ぐあっ……！」

俺は仰向けに倒れる。痛いのだ、力が入らない。

また一撃、今度はみぞおち辺りに掠る。まるで相手は楽しんでるかのよう……

「ぎい……ぐあああー！」

俺は無理矢理ボウガンを引き放つ。3発連射で放った時に、限界が来たのか白のクウガへと姿が変わる。掠った場所を抑えながら上を見る

(せめて……1発は……！)

相手は2発避けて、1発翼に当たった。当たった場所に紋章が浮かび上がり相手がきりもみ状態で落下していくが……

爆発はしなかった。つまり、奴はまだ生きているのだ

「はあ……はあ……」

俺はまだ痛む身体を何とかして使い、仰向けに寝転がる。その時、屋上の扉が元氣よく開いて、影が2つ見えた

「わっ!? 大丈夫! 想くん!」

「日菜……?」

「血が出てる……! 直ぐに保健室に行かないと!」

「つぐみか……?」

「大丈夫!」

「いてえ……てかなんでお前らいるんだ? まだ夏休みだぞ?」

「今日は生徒会! それより立てる!」

「肩貸してくれ……それなら歩ける」

日菜の左肩に右手を乗せて、つぐみの右肩に左手を乗せて歩き出す
↳保健室↳

「しみる……いたい……」

「そんなワガママいわない! 我慢!」

「つぐみは母親か?」

そんな会話をしながらつぐみはテキパキと作業を進めていく。日

菜は呑気な事にトイレ!と言って走っていった

「どうしたの?じつと見つめて」

「将来つぐみをお嫁さんにした人はきつと幸せになるだろうなあって」

「ふえっ!?!」

「ははは、まあつぐみならいい人見つけれさ」

(タイミング:ここしか無いかもしれない:言おう、私の気持ち:!)

「想さん:実は」

「ん?」

「たっだいま〜!」

その時、保健室の扉が思いっきりあいて、日菜がやってきた。

「相変わらず元気なことまで:つぐみ?どうした?」

「いや:なんでもないです:!!」

つぐみは笑顔で言うが

(嘘だな:何かある。後で聞くか)

俺には何故かわかってしまった。つぐみは、隠すのが下手くそだな

...

「つぐみ、ありがと。」

「あれ?傷は?」

「塞がった:かな」

「え:??すごい回復速度だね:!!」

「だろ!これが男子だ!」

俺はそう笑顔で伝える。

(何か隠してる:想くん)

だがしかし、日菜には1発で見抜かれた。八意想も隠すのが下手くそなのであった。

その後、ついでに日菜達の書類を手伝い

(なんか壮大な企画だな:)

先生には変な目で見られたが無視しよう。

く帰り道く

「それでねそれでね〜！」

「私も…！」

「ごめん2人とも、俺は聖徳太子じゃないからいつぺんに聞けない」

「あはは！面白い！」

「ふふっ…」

バイクを押しながら2人を見る。見てるこっちが嬉しくなりそうな笑顔で話す2人

「ねえ〜聴いてた!?今の〜！」

「聴いてませんでした…」

「まったく…日菜ちゃんぶんすかだよ！」

「日菜先輩…ぶんすかって…」

「ぶんすかってきょうび聞かねえな…」

前に人が歩いてきて前で止まる。

「…？」

「…！」

「よお…想。両手に花じゃねえか…奪ってやるよ！」

相手は人ではなかった。あの時の、俺と同じクウガ。そして二度と聞きたくない声。

「テメエ…!!」

俺は怒りをあらわにして、日菜とつぐみを庇うように立った。

「デメエ…!!」

俺はその姿を見た瞬間に、怒りをあらわにした。あのクソ親父が…
今度はつぐみと日菜を奪おうと俺の前に現れた。

「おーこわっ?・w」

「ふざけるなよ…!」

俺は腰に手をかざさなくても出てきたベルトで赤のクウガへと姿を変えた。

「ねこちゃんはとうだったかな」

煽った口調で話す相手に感情が暴走する

「お前がタマを口にするなアアア!」

俺はありつたけの声で叫びながら距離を詰める。相手は剣を持っているので、肉弾戦がはじまる。

く日菜、つぐみsideく

2人とも、あんな彼を見るのが初めてだった。普段はとっても優しい彼が、今は氷のように冷たい。2人とも薄々は聞いていた。彼の父親は最低ということ

「大丈夫かな…想さん」

「つぐちゃん…大丈夫だよ」

く八意想sideく

「ハアツ!」

「うおっ…」

俺は飛び上がり殴り掛かる。だが横に躲され俺の横腹を蹴ろうとするが俺も器用に空中回転して躲す。そして相手と組み合う形で止まる。互いに拳に力を込めて、

「前よりかはましになったかあ?」

「…。」

「無視はないだろ…」

「うるせえ…喋るな」

「ひどいなあ、これでも父親だぞ？」

「お前を父親と扱いたくは無い」

「はあ…鬱陶しいんだよ！」

「ぐおっ…！」

俺は相手からの飛び蹴りに気づかずモロに腹に食らう。後ろに吹っ飛び、日菜とつぐみの横に置いてあつたトライチエイサーに激突する。後ろでガシャーンと音を立てて倒れる。

「大丈夫!？」

「あ、ああ…」

俺はそう言いながらトライチエイサーからハンドルを引っこ抜く。

「ダメ…」

トライアクセラーを握った右手を、日菜が遠慮がちに握る

「戦っちゃ…ダメだよ…！今戦ったら絶対何か嫌な予感がするもん！
るんってこない！」

「離してくれ…」

「嫌だ！」

そう言うてる内に、相手はベルトから剣を出し構えこちらに走ってくる。俺は日菜を庇う形になり…

「日菜…！」

「え…？」

日菜は視線を下にやる。制服には血が着いていた。いや、これは自分の血ではない、じゃあ誰の…？

「え…」

原因は、八意想から突き出していた剣にあった。腹を串刺しにされ、貫通しているのだ。その剣先がギリギリ日菜に届かなかっただけだった。

「ぐふっ…うあ…」

八意の口からそんな声が出る

「んだよ…カッコつけかよ…」

その後ろから呆れたような声がする。

「あ…」

その腹から剣が引き抜かれ、さらには出血する。白くなった彼はその場に倒れビクともしなくなる。

「次はどつちにしようかな」

剣先を交互に向けながら物色している。

「決くめくた、この茶色い奴でいいか」

「つぐちゃん！」

つぐみに剣を向けて、斬ろうとした時、不意に後ろから銃声が出て、動きが止まった。

「…！なんだ…？」

後ろから走ってきた人物は惨状を見て困惑する。

「なんだこれは…！」

その人はライフルを片手にもった警察官だった。

「八意…では無いな…君たち！大丈夫か！」

「刑事さん！」

「しまった…!？」

「死ねやおらアア！」

まだやつは倒れてなどいなかった。

『皆様！伏せてください！』

突然そんな声がひびき、みんな咄嗟に伏せる。

「なんだ…!？」

周りになにかが落ちてくる。そこから煙がたかれ視界が見えなくなる。

「きゃ…！」

「え…!？」

「うお…！」

それぞれは誰かに俊敏に担ぎあげられた。視界に密かに移る人物

をつぐみは捉え、声を出す。

「黒服…さん？」

「話は後で致します」

そう言うと、黒服集団は3人を車に乗せ、自分達も乗り、その場から立ち去った。

「逃げやがったか…チツ」

1人残された想の父はその場で舌打ちをした。

「あなた達は…一体？」

警戒する一条に向かって黒服が言う

「ただの黒服です。八意想さんの関係者…ですかね」

「は、はあ…」

「想さん！」「想くん！」

半泣きになりながら叫ぶ日菜とつぐみに黒服が落ち着いた口調で話す

「2人とも、落ち着いてください」

「落ち着けるわけじゃないじゃないですか！」

つぐみが叫ぶ。

「八意様の傷はもう塞がってます。恐らくは大量失血による貧血か疲労かです、しばらくすれば目覚めるでしょう。」

日菜もつぐみも肩を下ろす

「よかった…つぐちゃん…私どうしよう…また彼に迷惑掛けちゃった…怒られるかな」

「大丈夫ですよ、想さんはそのくらいでは怒りませんよ。」

「うん！」

「でも…凄い回復速度ですね…何かあるんですか？」

「……いえ、何も」

「？」

（言えるはずがない…人間をやめ始めようとしているなんて…絶対

に)

ハンドルを握る手を強くする黒服を疑問に思うが追求を諦める。

「リムジン…すごいですね」

沈黙を破る為なのか一条さんが声を出す。他愛のない話だが

「はい、耐久性もあり、座り心地も極めております」

「へ、へえ…そうなんですか」

『おきろつての…』

「…んあ？」

妙な感覚と共に目を開けると…白い世界にいた

『なくにがんあ？だよ。寝ぼけてんのか？』

「いや…って！日菜とつぐみが！」

『大丈夫だ…2人とも無事』

「そうか…よかった…」

『忙しい奴だな、お前』

「んで？ここにお呼ばれたってことは何かあったのか？」

『飲み込みが早くて助かる。が、何かあったでは無くこれから起きる

かもしれない、そう伝える。お前、あのもう1人のクウガ…お前の父

親だったな。アイツとは闘うな』

突如として言われたことに理解ができない。辛うじて言えたのは、

怒りを込めた

「は…？」

『はつきり言つて今のお前じゃ勝てない、あいつは凄まじき戦士。そ

れと同等になりつつある。お前に対する憎しみや殺意で操ってる。

ありやあ俺もびつくりだよ』

「ちよつとまで…アイツにもあるなら俺にも使えるんじゃないのか

！その凄まじき戦士ってやつ！」

『ああ、使える』

「なら…！」

『だが、使わせない。今のお前には、心の闇が深すぎる。励まされようとも消えないあいつへの憎悪や殺意、それが凄まじき戦士を…暴走さ

せてしまうかもしれない』

「でもそれがなきや…」

『いいのか？周りのヤツを皆、殺す羽目になる』

「っ…!？」

俺は言われたことを即座に理解出来た。だが…あいつを倒すには…でも…

「くそっ…！決断すらできないのか俺は…」

俺は地面を叩いた。拳に涙が滴る

リムジンは病院に向かい続けていた。その時、車の天井からパシン！と音が響いた。

「!？」

また1発。また1発。

その度に天井がビシン！バシン！となり、日菜とつぐみが

「なにになに!？」

「どうしたんですか!？」

「まさか…奴は倒せてなかったのか…！不味いことになりました黒服さん…飛ばしてください!！」

「分かりました…つかまっていてください!！」

「うおっ…!？」

リムジンの割には意外と出た速度に驚きながら後ろを見る。日菜とつぐみが恐怖で怯えていた。刑事である自分がどうにかしなければ…

(だが…どうやって…ライフルさえ届かないぞ…)

もう一度後ろを見る。まだ眠ったままの彼を見てしまう

(情けない…彼は高校生だ…守らなければ…!！)

素晴らしいライフルを構え直す一条だった

『なあ、八意想。』

「…?。」

『お前は どうした いんだ。 守る ため に 力 を 使 う ン じ や な い の か？ 笑 顔 を 守 り、 無 け れ ば 作 る。 そ れ は 嘘 だ っ た の か…！ は つ き り 言 っ て 今 の お 前 は 殺 意 し か 無 い。 奴 を 殺 す。 そ れ だ け だ！ そ れ で い い の か！』
「違 う…」

違 う。 俺 に は 守 ら ね ば な ら ぬ も の が あ る。 教 え て も ら っ た は ず だ。
タ マ に

「だ け ど…」

奴 の 前 に 立 つ と 自 分 を 制 御 出 来 な く な る。 ど う し よ う も 無 い 怒 り が、 俺 を 支 配 す る

『笑 っ て る 君 が 一 番 素 敵 だ け ど な あ… 私 は、 怒 っ て る 君 は こ う… も や も や っ て… わ か る ！？』

「!？」

不 意 に 耳 に 聞 こ え た 声。 花 と パ イ が ま ざ っ た い い 匂 い が 鼻 を く す ぐ る。 鈴 を 転 が し た よ う に 笑 う 声 が 響 く。 懐 か し い 光 景、 も う 二 度 と 戻 れ な い あ の 世 界 の 光 景。 死 ぬ ほ ど 望 ん で も 戻 れ な い 光 景。

「笑 っ た… 俺」

俺 の は ず な の に、 自 然 と ア イ ツ ら の 笑 顔 が 浮 か び 上 が る。 リ サ、 紗 夜、 つ ぐ み、 こ こ ろ、 日 菜、 そ し て 俺 が 関 わ っ て き た た く さ ん の 人 達。

「あ あ… ま た 俺 は イ カ れ ち ま っ て た…」

『ま ず い な…！』

「…！？ ど う し た」

『や つ が… お 前 ら を 狙 っ て る…！』

「…！？」

動 き 出 し た 俺 を ア マ ダ ム が 止 め る。

『ま て…！ 今 の お 前 は ま だ ダ メ だ…！ 金 の 力 を 使 う 気 だ ろ う！ 今 使 え ば 命 に 関 わ る ぞ！』

「あ あ、 構 わ な い。 俺 は そ う は 簡 単 に 死 な な い か ら な」

『…。』

ア マ ダ ム は 何 も 言 わ な か っ た、 そ の 代 わ り に 何 か を、 何 か を 信 じ る

ようにうなずいた。そして

『そうか…どうなっても知らないぞ?』

「ああ…」

「頼む…起きてくれ…!」

ライフルの弾が尽き、なすすべがなくなる一条をよそに空からは嵐のように矢が降り注いでいた。さすがの一条もこれには諦めざるおえなかつた

「きやあ!」

「つぐちゃん!」

「まずいことになりました…タイヤが…パンクしました…!」

「まずいな…」

その時、一条の手を冷たい何かが握りしめた。

「…!」

「一条…さん…!」

「想さん!」「想くん!」

日菜とつぐみも名前を呼ぶ

「八意…大丈夫なのか…!」

いや…見たらわかる。冷や汗をかいて、握りしめた手は震えていた

「拳銃を…俺に…!」

「何を言ってるんだ…!それ以上無茶はさせられない!」

「いいから…早く…お願いします…!」

「…」

もうここまで来たら止められない事を悟ったのか一条は無言で拳銃を渡す。

「変身…!」

緑のクウガへと姿を変える。

「黒服さん…このリムジン上開きます?」

「開けれますが…?」

「開けてください、相手が撃ち抜く前に狙撃します」

「!?!」

一同は驚愕したでできるわけが無い。これだけの速度を出し、しかも車という不安定な場所で撃ち抜くなど

「しかし…」

「やらせてください…」

「……分かりました」

黒服は腹を括ったのか俺にそう伝える。続いてゆっくりと上の扉が開く。

その間に俺は緑の金のクウガへと姿を変え、ボウガンを引いて待機する。

完全に開いた。凄まじい突風が体に叩きつけてくる。だが俺の耳は奴の羽ばたく音を聴いていた

「死ね…クウガ」

相手も吹き矢を口に当てる

「そこだ…!」

俺はボウガンを相手に放つ。今度は6発連射。

「ぐあっ…!」

俺が放った矢は6発中約3発が体にヒットした。相手は落下していく。そして……

夕方の町の空中で爆発した。

「お〜!」「すごい…」

日菜とつぐみ后感嘆の声を漏らす。だが…

「!?!」

八意想は事切れたかのようにその場で意識を失った。相当無茶をしていたのだろう

「大丈夫だ、息はしている。疲れているのだろう」
「よかったあ〜」

「なんか…大変でしたね」

「そうだね、疲れたよお」

つぐみが苦笑しながら言う。日菜も苦笑する。

「ありがとうございます！」

「妹が…すみません」

日菜と紗夜がが頭を下げ、例をする。

「いえいえ、お気になさらず」

黒服はそれに答え車で走り出す。つぐみも家に送り、後は自分達が帰るだけ…まだあと仕事がある

八意思の治療である

その本人は、だいぶ無茶をして意識を失っていたから

俺は妙なまどろみを感じながらまぶたを開く

「……知ってる天井だ」

この豪華な感じ、弦巻家だろう……てことは？

今、俺の右手は誰かに包まれてるかの様に暖かい。視線を動かし妙に暖かい右手を見る。

「うん……大方予想はついてた」

弦巻ところが、俺の右手を握って座って寝ていた。すやすやと寝息を立てて

「……ころなりに心配してくれてたんだな。ありがとう」

そう言つて撫でてやると

「想……」

と万円の笑みで寝ていた。

「よいしょ……」

時刻は朝6時。たつぷりと昨日の夕方から寝ていたせいお腹がだいぶ減っている。寝ているところを俺が寝ていたベッドに寝かせて俺は音を立てずに部屋を出る

「しっかし長えな……」

弦巻家の廊下を歩くと大体そんな感想がでてくる。

「おはようございませす、八意様。具合の方はいかがでしょうか？」

「おお……びつくりした。おはようございませす黒服さん。はい、今のところ大丈夫つすよ」

俺は笑みを作りながら肩を回して答える。

「……ならよかったです。トライチェイサーの整備も完了しました」

俺は頭を下げる

「ほんとすんません……気をつけます」

「いえ、お気になさらず。」

「あと……1ついいですか？」

「はい、なんなりと」

その時、くうくうという音が静かな廊下に鳴り響いた

「…承知しました」

「ありがとうございます…」

これだけで察してくれた黒服さんに感謝しつつ庭に出る。まだ夏場だと思わされる気温が、この時間帯にあることに顔をしかめる。

庭にあるベンチに座り、俺は空を見上げる。

「青空…か」

雲一つない快晴っぷりを見ながら考えた。

最近の俺は少し荒れすぎている、少し休もう。1日だけでもフレックスという日が欲しいかもしれない。だとしても、自分の趣味は無い、というよりは無くなった。

「タマ…」

俺もすっかり涙脆くなってしまった。視界がぼやけ、目から涙が滴り落ちる。

「これじゃまた怒られるな…」

俺は涙を拭き、立ち上がる。

「おにぎりとタオルです、どうぞ」

「うわっ!？」

いつの間にか黒服がいた事に驚きながら受け取る

「気配消してますよね?…ね?」

「いえ、今は1人がよろしいですか?」

「まあ、そうですね。気持ちを整理したいので」

「かしこまりました」

そう言うと黒服は消えていった。忍者かな?あの人たちは俺は再びベンチに座り、おにぎりを食べた

「朝からおにぎり4つはやりすぎた…」

後悔しながら弦巻家の廊下を歩く。朝、おにぎり4つを食った俺は腹が痛かった。さながら食い過ぎというやつだ。

「あつ！想！ようやく見つけたわ！」

「あ…こころじやないか…」

「どうしたの？想」

「お腹が痛いんだ…ははは」

「それは大変ね！大丈夫かしら？」

「うん、すぐ治ると思う。心配してありがとな」

「ええ！」

と胸をはるこころ。

「こころは何してるんだ？」

そういえば珍しくこころがトレーを持っていた。こころはトレーを見せながら

「ハロハピ会議をしているの！お菓子のトレーを今返しに行こうとしてる所よ！」

「そうか、邪魔したな」

「大丈夫よ！…そうだわ！想もハロハピ会議に参加してちよーだい！」

「強制的なのね…」

俺は暇だし特にやることもないのでここは大人しくこころに従う。

く会議室く

「お邪魔します」

「あ…」「あ！」

それぞれ色んな反応をする。だがひとつ、引つかかる点があった。美咲が気まずそうにしている…なんでだろう

ギノガの件以来、美咲は俺に対して遠慮がちというかなんというか…

(後で話…してみるかな)

俺はとりあえずそう思い、部屋を見回す。花音や薫やはぐみや勢揃いだ

「久しぶり！」

はぐみが元気よく声をかける。それに薫や花音が便乗する。

「久しぶり」

俺は3人にいい、美咲を見ると…視線をそらされた。なんか傷つく。

「美咲、ちよつとこつちこい」

そう言うのと美咲の肩がビクツと跳ねた。いや…そこまでビビる？

「わ、わかりました」

「美咲ちゃん…」

花音が心配そうな声を出す。俺は美咲を連れて、庭に行った。とりあえずベンチに座ってもらい俺も横に座る。とりあえず視線を合わせてみるが何故かそらされる。

「なあ美咲、なんでそんなに俺を避けるんだ？」

「…！」

「俺なんかした？」

極力優しく言う。下手に怖がらせてもあれだ

「いや、別に想さんは悪くないですよ…！」

「今だってそうだ。視線くらい合わせてくれたっていいじゃないか。俺は別に怒ってないぞ？」

なんのことも分からないが、と心の中で付け足した

「あんなことしちゃっても…ですか？」

「あんなこと？」

「私が…私のせいで想さんが死んじゃったんですよ…あの時から…謝りたくて…」

美咲の声が小さくなっていく。ズボンを握りしめた手に涙が滴り落ちる。

「はあ…」

俺がため息を吐く。

「…！」

美咲はビクツと震える。

「あのな、美咲。もういいんだ、終わったことだし、俺もこうやってピンピン生きてる。しかもみんな無事と言うおまけ付きー」

美咲の肩を持ち、俺の方へ向ける。目が合い、俺はその目を見つめ
…ニツと笑った

「はあ…こんなことで悩むなんて…気にしなくてもいいのに」
俺はそう言いながら美咲の頭を撫でる。

(ど、どうしよう…／＼／)

「美咲、ほら泣くな」

しばらくそこで泣く美咲をあやし続けたのだった

「ほら、落ち着いたか？」

「はい…ほんとありがたいがとうございます。迷惑ばっかかけちゃって…」

「別に全然いいよ。」

「あともう一つだけお願い、聞いてくれますか？」

「俺が聞ける範囲ならいいが？」

突然もじもじする美咲を不思議に思いながら…

「もう1回だけ…頭撫でてもらっても？」

顔を真っ赤にし、俯きながら言う美咲

「別にいいが…」

俺はとりあえず撫でる

(あつヤバ…落ち着く…／＼／)

「もういいか？ほら、時間もだいぶ経ってるしみんなも待ってるし…

花音だけじゃアイツらを抑えられる気しないし…」

「あはは…ですね。行きましょーか！」

そういつた美咲の顔は、笑顔で満ち溢れていた。

「ねー美咲？聞いているかしら？」

「あつ…ごめん」

「みーくんらしくないねー大丈夫？」

美咲は会議に集中出来なかった。なぜかと言うと…

(これが恋ってやつか…)

「うおおおおあああ！バイト忘れてたアアア！」

俺は発狂しながらヘルメットを被り、トライチエイサーに跨り弦巻家を出る。今日はバイトの日…なのだが

「忘れてたアアア！オーナーにドヤされるウウウ！」

オーナーは凄い人なのだ（どれだけ凄いか分からないが）めちゃくちゃ凄い人なのだ。だが…

（厳しい…あの怖い！）

俺はあの人が苦手だった、如何せん厳しすぎる。ごく稀に微笑むらしいが…いつになつたら微笑えんでくれるのやら…

「いつそげー！いつそげー！」

俺は道路を突っ走る。circleまでまあまあ遠いのだ。

「あつぶねえ!？」

その時、後ろからすごい勢いでバイクが追い抜かしてきた。それだけでも充分に危ないのだが…

「はあ!？」

しかも俺の前に来たと思いきや右に左と曲がつてきやがる。噂の煽り運転というやつか、いや落ち着け…無視してタイミングよく通り抜ければ…

俺はそう考え、通り抜けようとするが…めちゃくちゃ近寄ってくる、危ない。

「…。」

流石に俺も腹が立ってきた。俺はアクセルを回し、一気に加速して相手を追い抜く、

「フッ…」

追い抜きざまに相手に鼻で笑われた…まで…このバイク…そして黒いヘルメット…

「まさか…」

俺は背筋に悪寒が走り、とりあえず本来右に曲がる次の信号を左に曲がった。こつちを曲がれば確か少し広い工場があつたはずだ。そ

ここで正体を探ろう。

「っ…!？」

そう思考した時だった。後ろをすごい衝撃が襲う。2度、3度と衝撃がおそい何事かと後ろを振り返ると、前輪を上げて俺のバイクの後ろ部分に当たりに来ている。

「くっ…」

俺は何とか加速して追い払い、目的の場所に着く。やや遅れて相手も俺の前に止まる。相手がヘルメットを取る。首から赤いスカーフが舞い、素顔を露わにする。

この顔…俺は最近黒服さんに言われたことを思い出した。

『38号は…何故かライダーを襲っています。貴方ももしかしたら狙われているかもしれません』

「お前が…38号か…?」

乾いた口から声を出す。

「違う、俺は脅威のライダー…」

俺の変身と似たような構えを取り…

「ゴ・バダー・バだ!」

相手は化け物へ姿を変えた。

「丁寧な自己紹介ありがとう…!」

俺はバイクに跨ったまま腰からベルトを出して

「変身!」

赤のクウガへと姿を変えた。同時にトライチェイサーの色が変わる。俺はトライチェイサーのエンジンを吹かす。相手も肘から何かを取りだし、自分のバイクにくつつけると…

「…!」

そのバイクは俺のトライチェイサーみたく見た目を変えた。相手もエンジンを吹かす。

廃工場に、2つのエンジン音が鳴り響く。そして…

互いにエンジンを鳴らしながら2つのバイクは相手に向かい走り出した。互いに前輪を上げ

「…っ！」

前輪同士が激突する。相手はバイクを右に逸らし、俺はバイクを左に逸らす。互いに1度離れる。俺はそのまま走り出し、相手もそれを追いかけるように走り出す。そして互いのバイクを激突させ、火花が散る。2人はそのまま通り過ぎ…互いに回転してまた激突する。

「…っ！」

さつきよりも大きな火花が互いに散る。そのままある程度離れ…また2人ともバイクを回転させる。

「はあっ…！」

俺は相手との距離をある程度詰めた時、俺はバイクから飛び上がる。相手もそれに便乗し飛び上がる。一瞬の空中戦は、俺が2連撃を与え終わった。俺は何とかトライチェイサーに跨りもう一度、後ろを見る。

「どこだ…！」

相手がいない、俺は辺りを見回す。時刻は夕方、あまり周りが見えない…

その時、真横にあつたダンボール箱の群れを突き破り、相手が横から激突した。俺のバイクに火花が散る

「ぐあっ…！」

当然反応出来るわけなく、俺は横から激突された衝撃で近くの缶が大量に置いてあるところに背中から激突する。その大量の缶から何かの液体が流れ出す。地面に激突する寸前、俺は柱に手をだし、捕まろうとするがそれは運悪く何かの機械、その古びた機械から火花が散り…

「うわああー！」

周りが爆発したのだ。それなりに大きな爆発が

「ぐっ…！」

俺は爆発の衝撃で吹き飛ばされ、トライチェイサーの横に転がる。そのトライチェイサーの向こうには、相手がバイクに乗り、俺を見下ろしていた。

「フッ…」

鼻で笑い、バイクを後ろにし、走り去る…かと思いきや、ある程度後ろに下がったところで俺の方に走り出したのだ。

「嘘だろ…!?!」

俺は慌てて起き上がり、近くに倒れるトライチエイサーを起こし、それに跨り相手の方へ走り出す。また互いに激突。火花を散らし、通り過ぎる。相手が止まる。俺も止まる

「なかなかやるな、クウガ」

また鼻で笑い、どこかへ走り去って行った

「なんだったんだ…あいつは…つて!」

そうだ、バイトを完璧に忘れていた。

「お疲れ様〜!」

まりなさんが笑顔で店を出る。

「お疲れ様です…」

俺は今から、1人で片付けをしなければならぬ。自業自得と言っちゃ自業自得だが…

「もうこんな時間か…」

時刻は午後21時、全部やると言ったら明日になりそうだ…

「さて…頑張りますか…」

俺は骨が折れそうな仕事に気合と根性でがんばろうと決意した

〜3時間後〜

「終わった…はあ…はあ」

時刻は夜中の0時、周りの店も閉まっている。当たり前だ、

「まりなさんに給料上げてもらうように言っただけ…」

下手すら未確認より疲れたかもしれない。そんなことを考えながら鍵を閉め、駐輪場に行く。そこにあるバイクに跨りエンジンをかけ…

「ん…？」

エンジンがつかない。ハンドルを回しても何も起きない。

「あれ…俺なんかしたかな…」

そこまで考えて…いやあるわ、心当たりめちやくちやあるわ

「あのバター野郎…次会ったら叩きのめしてやる…」

そう言い、俺はその次にため息をひとつ。つまりところ俺は今からバイクを押しながら歩いて帰ると言う地獄が待っていた。

「はあ…」

俺は家に向けて、歩き出したのだった…

「…ん」

自分に差し込んでくる光が俺を叩き起す。

「ふわあ…体がダルいな…」

あれから結局バイクを押しながら歩いて帰った。当然疲労も凄まじく、結局晩飯も食わずにソファで寝てしまったわけで…

「腹減った…なにか買に行こ…」

寝ぼけ頭で俺は家を出る。時刻は昼の1時、それなりに暑い時間帯だ。

「あつっ…」

歩く度にどんどん眠気が覚めていき、コンビニに着く頃にはもう完璧に目が覚めていた。

「いらっしやいませー!」「らっしやーせー」

2人の店員が挨拶をする。聞き覚えのある声、まさか…

「あつ、想くん!」

「おーおー想さんではありませんか」

「モカ、リサ、お前ら2人組か…」

そう言いながら店を歩く、適当な商品を何個か取ってレジへ行く。

「今日はバイク、乗ってないの?」

レジをしてきている途中にリサが話しかけてくる。

「ああ、バイクな、潰れた」

「えっ…!」

慌てたりサが危うく俺のカロリーバーを落としかけた

「昨日の事件が関わってたり?」

「事件?」

「昨日の夕方に近くの廃工場で爆発が起こったとか」

モカが言う。

「あー…うん、多分俺」

「ですよね」

「あはは、大変だね…よし!袋詰め完了!」

「ありがとうございます」

俺は金を払い、お釣りを貰う。

「ありがとうございます！」「しゃいくん！」

相変わらずモカは：ちゃんと接客しろ…、そう思いながら帰路を辿る。帰路を辿りながらカロリーバーを齧り、スマホに目をやる。

「ほんとだな…」

昨日の爆発事故はちよつとしたニュースになっていた

『また未確認の仕業では』

と言いつているコメント欄をチラ見して、画面を切りかえ、電話帳を開く

「そーいや黒服さんに電話しよ」

とりあえず直してもらおう、そうしよう。

『どうしましたか？』

相変わらず早い、1コールもせずに出たぞ。

「実は…」

俺はワケを説明した。

『そろそろ新しいマシンが必要ですかね？』

黒服さんが言う。

「あるんですか？」

『まだ、形は決まっていますませんが名前は、ビートチエイサー2000です』

「名前だけですか…」

『はい、今はそれを実現化しようと設計図を立てています。ゴウラムの件もありますから』

『そうですね…』

『あと今日は空いております。弦巻邸まで持ってきてくれればあとはお任せ下さい』

「まじっすか！ありがとうございますー！」

『それでは、また後程』

電話が切れる。俺はスマホをポケットに入れ…

「また歩かなきゃいけないのかよ…」

この炎天下の中バイクを押しながら歩くことを想像してしまった。

「あ、そういえばリサさん」

「ん〜? どうしたのモカ?」

2人で商品を棚に詰める作業をしている途中、モカが話しかけてきたのでリサは答える。

「リサさんって、想くんのこと好きなんですか〜?」

「んえっ!?」

勢い余って手が滑り、商品が床に落ちる。それを拾い、手で払う。

「凶星って感じですね〜」

「なな…違うよ!?! うん!」

さらに慌ててしまい口調がおかしくなる。やはりこれだと…

「隠せてないですよ〜」

モカには隠せなかった。

「ほお〜…そんなことが…」

「うん…それで好きになっちゃったの…」

「つぐと似てますなあ〜」

モカが感心するように頷く

「つぐみも?」

リサは聞き返した

「うんうん」

(つぐみも想くんが好きなんだ)

リサは何故かライバルが増えたと思ってしまった。

「はあ…着いた…」

俺は炎天下の中、自宅からバイクを押しながら歩いて弦巻家までやってきた。とりあえず門のインターホンを押す。しばらくしてカ

メラが俺を捉え、門が開く。

「お邪魔します…」

俺はバイクを押しながら中に入る。中に入っただけでしばらく進むと、玄関の前に黒服さん達が立っていた。

「ではバイクはこちらでお預かり致します。八意様はこちらへ」

と手際よく案内される。俺が案内されたのは1つの部屋だった。椅子に座り、メイドさんが持ってきてくれたお茶を飲み干す。

「なにか…あつたんですか？」

俺は空になった瓶を見ながら黒服に言う。

「新たな未確認、第38号が活動を始めたそうです。海やプール、この時期に人が沢山いる所で、ですが決まった人数しか殺さない、それにはまだ幼い子供も入っていました」

（決まった人数しか殺さない…アイツらの言っていたゲームというやつか…）

俺には、いや俺たち人間にはあいつらの感性がよくわからない。同じ人間のはずだ、俺には分かる。殴って斬って刺して、感触が人だ。化物とはいえ、1人の命を奪ってしまっている。

（話し合えば分かる…そんなことは無いか…）

俺は内心でそう考えるがすぐにやめた。多分分かり合えることはないだろう。

「あ、そーいや」

「その件についてですが…何も掴めませんでした」

黒服が頭を下げる。俺はいいやいや大丈夫ですといいながら立ち上がる。あの件は、俺の父親の事だ。アイツがどうやってこの世界に来たのか、何かあるはずだと思えば俺は黒服さんに頼んでおいたがダメだったらしい。

「はい、了解しました」

「…？」

「トライチェイサーのメンテナンス、完了いたしました」

「ほんとですか！ありがとうございます」

「いえ、ではこちらへ」

俺は駐車場に案内された。リムジンやらパレード用の車みたいなものを通り過ぎた先に、トライチェイサーは置いてあった。

「ありがとうございます」

俺は頭を下げ、トライチェイサーにまたがる。アクセルを吹かすといつもの音

「じゃあ俺行きます。試運転がてらに街をぶらっと」

「わかりました。」

その時メイドさんが

「ごころ様遅いですね…」

「今日はハロハピのみんなとお泊まり会をするから花火を買ってくる
といい出て行って…」

「私たちですするのに、ごころ様は張り切ってたから止められなかった
しね」

あいつが花火を買うとか…ヤバそうと思いつつながら弦巻家を出た。

「意外と楽しかったな！警戒心無さすぎだろ」

大柄の男が豪快に笑う。

「この女を人質にとれば金がつぽりですね！ボス！」

「ああそうだ！それよりこの女スタイルいいな、流星は弦巻家だよ」

「そうっすね、でも手は出しちゃダメですよボス」

「ちっ…わかってらあ」

他の3人を含めた5人組の真ん中には、睡眠薬で眠らされた弦巻こころがいた。

「やっぱこのエンジン音いいわあ…」

俺は今、商店街に向かっている。パン屋と前々から行って見たかったコロッケ店に行こうとしているのだ。

「あー、腹減った」

そんな呑気なことを考えながら走っていると、やけに危なっかしいワゴン車がすれ違って行つた。そこに見覚えのある金髪少女が…

「……!?」

俺は急ブレーキをかけて止まる。今見たのはこころだった、間違えではない。

「あいつ……」

護衛の黒服はどうしたと内心舌打ちしながら逆方向にバイクを向ける、少々乱暴だったが何とか軌道修正を施し追いかけるべくはしりだす。あいつは極めて純粹だ。誘拐というものを知らないから多分ついて行ってしまったのだろう。

「待つてろよ……」

俺はワゴン車を追いかけるべく速度を上げる。

「よし……」

しばらくしてワゴン車の真横にくつつく

「なんだこいつ」

とかなんやらと、ワゴン車の中から声が聞こえる、しかも数人。

「おい！その女を返せ！」

俺はヘルメットを投げ捨て叫んだ。俺は慌てている、この道を真っ直ぐ行けば鉄柵があり、その先は工事中の穴がある。何とかそれまでにこころを救い出さなければならぬ。

「返せと言われて返すかバーカ！」

相手は俺が手を出せないのを知ってか煽ってくる。しかもなぜか木刀を持って

「おらあー」

「っ！」

俺は木刀を避けるために右にハンドルを倒し避ける。体制を崩しそうになるが、何とか踏ん張る。俺は懐から拳銃を取りだし2発発砲する。1発がタイヤにあたり、パンクする

「ゴウラムー！」

俺は靈石の意志を使いゴウラムを呼び出した。あとトライチェイサーの無線から黒服さんを

『お待たせしました』

「頼む……こころだけでも救ってくれ！あの金髪の女の子だ！」

ゴウラムは俺を一度見てワゴン車に向かつていく。俺もそれに続き速度を上げる。前では後輪がパンクしたワゴン車が右往左往していた。

「っ！」

そして右に曲がったワゴン車は倉庫の薄い壁を突き破り……

「クソツタレ！」

近くの沢山の物がある所に激突し、止まった。中には缶もあり、そこから液が盛れだして……

「まずいぞ……あれ！」

俺はトライチェイサーを止めワゴン車のガラスを突き破り内側からロックを開け中に入る

「いた……！」

眠っているところを何とかお姫様抱っこで外まで行き、トライチェイサーの横に座らせる。もう一度ワゴン車を見て……

「くそ……！」

見てしまったものは仕方がない、まだ中にいた野郎共を引っ張り出し外に投げ捨てる、扱いは雑だが命あるならいいだろう。外に黒い車が1台止まり、中から人が出てくる。

「黒服さん……！」

「こころ様！八意様！……無事ですか!?!」

珍しく焦る黒服に頷き、俺は最後の一人を担いで……その時だった、運悪く火花が飛び散り引火して……

「黒服さん！」

俺は咄嗟に最後の一人を黒服の方向へ投げ捨てる。

「くるな！」

「こちらに来ようとする黒服を止めて……」

「うわああああ!!」

「八意様！」
俺は爆発に巻き込まれた。

何か、とても熱い夢を見ていたはず…誰かを庇い…

『…さん…!』

誰かに…呼ばれてる…?

『しっかりして…さん』

複数人の声がある。思い出せない…曖昧だ…

誰かが俺を揺らしてる、ほつといてくれ…俺は今のまま楽になりたい…もう疲れた…

『逃げるのか…』

遠い、誰かの声…俺を…俺は…

逃げては行けない。

俺がまいた種を、消してからだ、消えるのはそれからだ

「うあ…」

目を開く、消毒の匂い。右眼が見えない…手を動かす、右眼が見えない原因を探る。

「包…帯…?」

「よかった!」

「…?」

誰かが俺の手を掴んだ。

「想さん!大丈夫ですか!」

「その声…美咲?」

「よかった…」

美咲のようだ。意識が覚醒していく過程で記憶が戻っていく。

「そうだ…ころは!」

確かだ…いぶ大きな爆発だったはずだ。俺はどうしても心配になつて聞く、

「それよりも自分の心配!と言いたいけど想さんらしいですね、みんな無事ですよ」

「よかった…ぎあ…!？」

「大丈夫ですか!？」

全身に激痛が走り、悶える。天井を見ればシャンデリアがあった
「あまり無理しないでください…」

美咲が落ち着かせるために背中を撫でる。

「今の俺の状態は…?」

恐る恐る聞いてみる。すると美咲は少ししてから答える

「一言で表せば…」

「表せば…?」

何だか不穏だ…俺は唾を飲み込み言葉を待つ

「全身包帯…でしようか、火傷がひどいので…てかまずあの爆発は普通の人じゃ生き残れないらしいですけどね…」

「まあ、普通じゃないから…」

「お前がいるって事は無事お泊まり会できるんだな」

よかったと思う。こころに何一つ怪我なくこうしてみんなとお泊まり会を出来て

「にしても…腹減ったな…あはは」

俺は腹を抑える、当初コロッケやパンを買いに行こうとしたことをすっかり忘れていた。外は真っ暗、そういえば美咲もパジャマであることに気づく

「ど、どうしたんですか?」

「いや、美咲のパジャマ可愛いなって…」

「そ、そうですか…?／／／」

「うん、女の子らしくていいんじゃないか?」

「ありがとうございます…／／／」

控えめに扉がノックされる。

「どうぞー!」

「こ、こんばんは」

「花音さん?」

「花音だ、久しぶり?」

扉向こうから来た人物は、おかゆがある器をトレーに置き、持った

花音だった

「そうだね…最近話してなかった気がする」

そう笑顔で言いながら美咲の隣に座り、机におかゆを置く。俺はとりあえず食べようとするが…

「っ…」

腕が動かない、俺は仕方なく二人を見て言う。

「すまない…2人のどっちかでもいい、俺に食わせてくれ」

「ええっ!?!」

「なんだ？素っ頓狂な声上げて」

(それって…あーん、てやつだよね…ふええ…)

(気づいてください…想さん、今自分が女子にやらせようとしてることを…!)

そんな美咲の願いが通じる訳もなく…

「美味かった」

俺はとりあえず満腹になり再びベッドに横になる。その横では、何故か顔を真っ赤にした2人がせえせえとくたびれていた

「なんだか疲れましたね…花音さん…」

「そうだね美咲ちゃん…」

「なんかめっちゃ疲れてるが…どうした?」

(いや大半あなたのせいですよね!?)

美咲は心中で叫ぶ。そこに3人がノックもせず突撃する

「美咲ー!花音ー!あら?想!起きてたのね!」

言うや否や俺に突撃して抱きつく。痛い

「ごころ…あとはぐみと薫か」

「想くん起きてる!いつの間にな?」

はぐみが目を丸くして驚いている、いやエスパーやないんやから分

かるわけなからう…

「お姫様を守った勇者…儂い…」

いや薫さん？貴方何言ってますのん？

「…」

確かに美咲が疲れるのも分からなくはない、こんなの毎日相手してたら疲れるな、俺は心の中で美咲に敬礼しておいた

「さてさて…」

改めて1人になった部屋を片目で見渡す。あの5人組はこころの部屋に遊びに行った。こころは

「みんなで想を看病しましょう！」

と言っていたが折角のお泊まり会。こんな事に時間を潰すのは可哀想だ。そう考えてる時、部屋がノックされ開く。黒服がいた、しかも3人

「こんばんは」

「お目覚めになられましたか、八意様」

そう言うところ組黒服は深く頭を下げ

「こころ様を救っていただき、ありがとうございます。」

と揃って言った。

「いやいや、大丈夫ですよ。無事だったんですから」

「ですが…」

「いいんですよ」

「……わかりました」

その後、とにかく謝罪やお礼やの言う黒服をどうにかしてその日は寝た。

〜夜中の1時〜

「ぐっ…ああ…はあ…はあ…」

俺は全身の激痛に耐えれず飛び起きた。なんなんだ、痛い、とにかく痛い、痛い以外何も考えられない。唯一痛くない顔を触り、包帯を

取る。

久しぶりに両眼を開けて周りを見回す。違和感があるがすぐ治るだろう

『着々と、人間を辞め始めてるな、お前』

頭の中に言葉が響く

「アマダムか…」

「ああ、着々と人間じゃなくなっていくてるのは何となく分かる」

『怖くはないのか?』

「いや、全然、アイツらを守ればいい」

『死ぬかもしれないんだぞ?』

「それは勘弁、俺にはまだやるべきことがある」

『父親か…』

「ああ、アイツらはリサ達を狙ってた。前みたいに…だから俺は阻止しなきゃならないんだ。もう…二度とあんなことにならないように」

俺は唇を強く噛み締める。

(それ程の覚悟か…俺には止められないな)

ため息をひとつ

『わかったよ、あまりに酷すぎたら警告を送る』

「警告?」

『多分ないだろうが一応のためだ』

そっくりいアマダムは消えた

「なんだよ…教えてくれりゃあいいのに」

俺はベッドから立ち上がり、全身の包帯を取る、近くに置いてある服1式を取りだし着る。その時そつと扉が開き、人が歩いてきた

「おじやましまさす…起きてますか?」

「美咲か、夜更かしは良くないぞ」

「わかってますって…なかなか寝付けなくて…ははは、すごい汗ですけど大丈夫ですか?」

「ああ…俺も似たようなもんだ」

「てかなんで立ってるんです!?あれ!?あれ程あつた怪我は!」

「しー……」

驚きのあまり叫ぶ美咲の口を抑える。美咲も分かってくれたようか静かになる

「治った」

「な、治った…？」

「ほら、身体もちやんと動く」

肩を回して美咲に見せる。実際のところ肩が少し重いが見せない

「すごいですね…人間じゃないみたい…」

「…」

美咲も鋭いところをつく、この世界の女子はみんな勘が鋭いのだろうか…

「あともう少しで夏休みが終わるが美咲は宿題終わってるか？」

俺は話題を逸らすために美咲に問いかける。

「はい、もう終わってますよ。想さんは？」

「俺も終わってる、美咲は真面目だからなあ…」

俺は頭を掻きながら答える。美咲は苦笑しながら

「全然真面目じゃないですよ、燐子先輩や紗夜先輩には負けます」

「比べる対象がおかしくない？あの二人めちやくちや真面目だし勝てないよ」

「想さんいつも紗夜先輩に怒られてますよね…」

「紗夜がケチすぎるんだよ…いつもあんなツンケンしなくてもいいのに…」

「あはは…、でもツンケンしてない紗夜先輩も想像出来ませんね」

「まあ…確かに…」

いや、ポテトを出せばツンケンしなくなる、あと犬。それは紗夜の名誉の為に伏せておくが…

「お泊まりはいつまでやるんだ？」

「2泊3日です、なんか今日の夜ご飯は凄く豪華でした…あまり見ない食材ばかりで…」

満腹そうにお腹を摩る美咲

「はは…頑張ってくれ…」

俺は苦笑いするしかなかった。ご飯の話をしていたせいだろうか

「グウ〜…」

「やっべ…腹減った…」

「やっぱりおかゆじゃあれですか？」

「あのおかゆは美味かった、だけど腹は満たせないなく…胃には優しいし助かるが」

俺は部屋の窓を開ける。

「何するんですか？」

「抜け出してなんか買ってくる」

そうと決まれば青のクウガになって…

「白いですね…」

「白いな…」

俺がなれたのは青のクウガでは無く白いクウガだった。まだ本調子じゃないからだろう。

「諦めるか…」

トライチエイサーは…多分どこかにあるが見つける前に見つかってあれだろう。

「美咲…？」

そういえば美咲の反応が無いなど思い後ろを見ると、立ちながら寝ていた

「どうゆう体勢だよ…」

俺はとりあえず美咲を自分のベッドに寝かせ、部屋を出る

「良いリハビリにはなるか…？」

夜中だからか廊下の明かりは着いていないので月の明かりを頼りに歩く。

「あといつまでこの世界に俺はいられるのかな…」

俺は窓から見た月を眺めながらそう言った。

想「海？」

俺は自分の電話に聞き返す

リサ「うん！海！ポピパとRoseliaのみんなと行くの！想くんも一緒に！」

どうやら明日ポピパとRoseliaと一緒に海へ行くらしい、まあ夏休みと言えば海だし楽しいのはわかるが…

なんで俺が行かなきゃダメなの？俺これでも一応病み上がりなんだよ？しかも…

想「拒否権なしかよ…」

電話を切られ、俺はソファアに座る

女子って恐ろしい…でも

想「海か…」

そういえばココ最近、いやこの夏休みろくな事がなかった気がする。大概死にかけてたし、いやー1回死んでるわ。しかもアイツらにも迷惑めちやくちやかけたし…

想「しやーね、行ってやるか…」

お礼といつちやあれだが、俺はついて行くことにした。となるとやはり準備から、だが水着とパーカーでいいか、人に肌を見せるのはあまり好きじゃないからだ。

想「トライチェイサーは…留守番だな」

〜次の日〜

想「待ち合わせ場所はここだけ？」

駅前の噴水に着く。確かこの噴水にはマネーを入れるといい事が起きるとか言われている有名スポットらしい。俺はポケットから10円を取りだして入れる。本当にいいことがおこるのだろうかと思いながら…

香澄「へえ、想くんそういうのやるんだ〜！」

後ろから呼ばれて振り返る。

香澄「お久しぶりです！想くん！」

想「香澄か、あとポピパのみんな、久しぶり」

沙綾「お久しぶり！」

りみ「お久しぶりです…」

有咲「久しぶり」

たえ「久しぶり…？」

想「なんでおたえ、お前は俺を始めて合う人、みたいな目で見てるんだよ」

たえ「どこかでお会いしました？」

想「ネタなのかマジなのか分かりにくい…」

有咲「多分ネタだと思うんで気にしない方がいいですよ」

たえ「有咲冷たい」

沙綾「あはは、八意くんも誘われたの？」

想「リサに強制参加だよ…」

リサ「誰が強制参加だつて…？」

後ろから肩を叩かれる。後ろを見ると笑顔のリサとRoselli
aの4人がいた

想「すいません許してくださいお願いしますなんでもしますから」

リサ「ん？今なんでもするって言ったよね？」

友希那「リサ…カツアゲも程々にするのよ？」

紗夜「カツアゲはいけませんよ？今井さん」

リサ「2人ともひどい!？」

想「ふっ…あはは！」

あこ「想兄笑った！」

あこが珍しそうな顔をする

想「いや俺だつて笑うし…」

あこ「最近難しい顔しかしてなかったし」

リサ「確かに！最近ずっと暗かったもんね！」

よく考えればそうかもしれない。

あこ「また難しい顔になった…！」

リサ「はーい！」

リサに頭を叩かれる。

想「いたっ…何すんだよ」

リサ「今日は何も考えずに遊ぶ！わかった？」

想「…わかった」

有咲「イチヤイチャするなら家でしてくれ…」

たえ「はーい、有咲が嫉妬してる」

有咲「なっ！してねーよ！」

りみ「ねえ…電車来ちゃったよ…？」

全員「「あっ!？」」

リサ「ダツシユダツシユ！」

改札をICカードで通り階段をダツシユする。

燐子「私…限界…！」

隣に走る燐子が限界そうなので俺はとある手段に出る。

想「ちよいと失礼！」

燐子「えっ…!？」

俺は燐子を抱きかかえ、階段をダツシユする、少々あれだが大丈夫だ。

想「間に合えええええ!!」

香澄「セーフ！」

リサ「危なかったね〜…」

沙綾「ねえ、有咲と燐子先輩と八意くんは？」

友希那「あら？」

あこ「あ！3人ともホームにいるよ！」

全員「「え!？」」

想「はあ…ひい…間に合わなかった…」

燐子「すいません…私のせいで…」

有咲「燐子先輩、私のせいでもあります…」

想「2人ともネガティブ思考ストップ！」

2人「…？」

有咲「随分余裕だな…」

燐子「なにか作戦みたいなの…あるんですか？」

想「ないぞ？」

俺は胸を張る

有咲「ドヤることじゃねえ…」

てかこの2人運動神経が悪いんだな、こころ見てたせいでなんか感覚麻痺してきたわ

想「さて…どうしたものか…」

次くるのは普通、たしか快速で1時間かかる場所のはずだったし…普通はないな、ならどうする…？

想「うくん…あ、そういえば」

2人「？」

俺は不思議そうな目で見る2人を見ながら一か八かの賭けに出たのだった

一条「俺はタクシーじゃないんだぞ？」

俺たちは今、一条さんの車に乗って海に向かっていた。

想「ほんとありがとうございます…」

一条「今日は非番だからあれだが…普通するときなら即刻拒否だ」

燐子「あの…ありがとうございます…」

有咲「あ、ありがとうございます」

有咲（警察が関係者にいるとか八意は一体なんなんだ…）

一条「いえ、お気になさらず、あとで八意にはしっかりとっておきますので」

想「何それ酷くない？」

有咲「あつ、アイツらに今行ってるって伝えとかねーと」

燐子「私も…」

く電車組く

リサ「あつ、燐子からLimeきた…なにになに…車…？」

香澄「私にも来た！有咲からだ…車？」

紗夜「八意さんは車まで運転するのですか？」

リサ「一条悠介って人の車らしいよ」

紗夜「ああ、あの人ですか」

リサ「知り合い？」

紗夜「前に1度だけですが…」

あこ「とりあえずこれで大丈夫だね！」

く車組く

『〇〇の海岸付近で未確認生命体第38号の被害発生、死者2名発見。付近の警察官は警戒してください』

車の無線からそんな声が聞こえ、俺たちは少し驚くが…

一条「〇〇海岸…そういえば君たちはどこに行くんだ？」

燐子「海です…」

有咲「私も、一緒に行くんです」

一条「海か…〇〇海岸は少し遠いからな…だが警戒はする必要はある」

一条が険しい顔をする。夏休みも終盤、確かに思い出作りをしたいし海も楽しい。だが、もしそのせいで死者が出たとすると自身の職務怠慢となってしまう。それは警官として許せなかった

想「一条さん、大丈夫です。俺が守ります」

一条「だがしかし…」

想「大丈夫ですよ。もしあいつが出たりしたら被害が出る前に俺が食い止めます」

有咲「本当にできるのか…？」

想「ああ、だって俺はクウガだからな」

親指を立てながら言う。

一条「お前らしいな、だがもしけが人がでたらすぐに待避だ。わ

かったな？俺も一応その場にいるようにする。本来なら非番だが今日は特別だ」

想「ありがとうございます」

俺は座席に座りながら頭を下げた。後ろでは有咲も燐子も頭を下げている。

一条「やめろ…なんか罪悪感があるから…思い出作り楽しめよ君たち」

有咲・燐子「わかりました」

一条さんが珍しくデレた…と思いつつ外を見ると、もう綺麗な海は見え始めていた。

燐子「綺麗…ですね」

有咲「そうですね…」

想「ほんとに…そうだよ」

一条「もうすぐ駐車場だ。降りる準備をしておけ」

一条さんは近くの駐車場に車を入れる。車から降りてとりあえず体を伸ばす。長い時間車に乗っていたせいか体のあちこちがパキパキと音を鳴らす。そうしながらしばらく歩き、砂浜につく、人がいっぱいいるのだ。やはり夏だからだろうか

香澄「あつ！いたいた3人ともー！」

有咲「香澄！」

リサ「燐子ー！こっちこっち！」

燐子「今井さん…」

そうしてみんなと合流する。

リサ「とりあえず、着替えよつか！」

たえ「覗かないでくださいね？」

想「誰もそんな趣味ねーよ…はよ着替えろ」

ざわざわとRoseliaもポピパも着替え室に入っていく。俺たちは少し離れた砂浜の石の椅子に座り、会話をする

一条「ほんと、楽しそうだな…」

想「楽しそうで何よりですよ…」

一条「ああゆう笑顔を見ると、守って居てよかったと思うよ」

想「そうですね、でもまだまだ未確認事件はありそうですね…」

一条「ああ、でも未確認対策本部はまだまだ警戒を強めるらしい。特殊弾も開発中だからな」

想「特殊弾ですか…」

一条「ああ」

想「ちよつとそこの自販機からコーヒー買ってきますね」

一条「ああ、ブラックで」

想「わかりました」

俺は立ち上がり自販機へ歩き、金を入れる。ボタンを押し、2本買う

一条「ありがとう」

一条さんの隣に座り缶コーヒーを開けて飲む。隣で一条さんも同じ行動をする。

一条「それにしても…遅いな…」

想「ちよつと心配ですね…」

一条「少し、見に行ってみるか」

想「そうですね、行きましょう」

野郎1「君たち可愛いね〜俺たちと遊ぼうよ！」

紗夜「嫌です。待ってる人がいるので」

リサ「そうだよ、だから離して…！」

隣子「やめてください…！」

野郎2「そんなつれないこと言わずにさ〜！」

一条「ちよつと君たちいいかな？」

野郎3「なんだよ！邪魔すんなよ！」

一条さんは懐から警察手帳を取りだし見せる。野郎共も顔が一気に青ざめる

一条「今なら見逃すが…どうする？」

野郎共「す、すいませんでした！」

野郎共は一目散に走り去っていった

一条「大丈夫か？君たち」

リサ・紗夜・燐子「ありがとうございます」

一条「八意…あれ？八意どこだ？」

想「おい…！誰だよこんな所に落とし穴作ったの…！砂だらけになつたわ…！誰か助けて!?しかも砂だし中々でられねえ！」

落とし穴にハマった八意がじたばたしていた。さつき、リサ達の場所に行く寸前にハマってしまったのだ。

一条「ふっ…なにをしてる…はやく…」

リサ「ふっ…あはは…！」

後ろにいる紗夜や燐子もぷるぷるして俯いている。

想「笑ってないではやく…！」

想「あーあ…服が…」

一条「水着に着替えたんだな、にしても八意、お前鍛えてるのか？」

想「ある意味鍛えてますよ…」

上からパーカーを羽織った八意想、だが羽織つてるので腹の筋肉などは見えていた。砂浜では女子たちが楽しそうにビーチバレーをしている

一条「あの子は？」

想「燐子か…あんまり動くの好きじゃないんですよねあの子」

砂浜にレジャーシートをひき、借りてきたパラソルの下に燐子はいた。持ってきた本を片手に楽しそうにみんなを見ている。

想「ちよつと行つてきますわ」

一条「おう」

俺はとりあえず自販機からなにか飲み物を買ひ、後ろから近づくと

想「よっ！燐子！」

燐子「ひゃあ!？」

冷たい飲み物を頬にくつつけると案外面白い反応が見れた

燐子「ビックリした…想さんですか…」

想「ごめんって、ほら飲み物」

燐子「ありがとうございます…」

想「隣いいかな？」

燐子「大丈夫ですよ……」

想「ちよいと失礼」

燐子の隣に座り、バレーをする女子達を見る。

想「燐子はやらないのか？」

燐子「はい……誘われたんですけど……」

想「まあ、海に浸かる位はしとけよ」

燐子「わかりました……」

想「浮き輪も確か貸してくれるはずだしな」

燐子「そうなんですか……？」

想「うんうん」

燐子「1つ、聞いてもいいですか？」

想「ん？」

燐子「4号……クウガになってどう思ってるんですか……？」

想「笑顔を守るだけだよ、俺は。それ以外は特に何も思っていないかな……それでも……」

拳に手を当て、彼は言う

想「元々は同じ人間だと思うと……あまりいい気持ちにはなれない……人を殺してるのと一緒だからな……」

燐子「私は……暴力とか分からないですけど……たまには、誰かに悩みを打ち明けてみるのもいいと思います……何も知らない私が図々しいかもしれない……」

想「いや、全然大丈夫だよ。この世界に来て一番最初に助けてくれたの、燐子だしな……そういえばお金返してなかったな」

燐子「いえいえ！全然大丈夫ですよ……！」

俺はカバンから財布を取りだし、金を渡す

想「そう言わず受け取ってくれ！」

燐子「……わかりました……」

想「ん、これで貸し借りなしだな！」

俺は笑顔で言う。

燐子「私達みんなは、ちゃんと八意さんを信じてますから、ちゃん

と頼ってください…！」

想「そうだな、また悩み打ち明ける時があったら頼るわ」

リサ「2人ともー！一緒に海入ろ！」

燐子「わかりました…！」

想「はいよ！」

???「次はここでゲームを行う。たくさんの人間をころして…ダグバと闘える…」

魔の手は着実に迫っていた…

一条「荷物は俺が見ておく！」

想「ありがとうございまーす！」

一条（本来なら…こうやってずっと生活して欲しいんだがな…）

燐子「うう…やっぱ恥ずかしい…」

胸元を押え抑えもじもじする。

リサ「何言ってるの！ほら行くよ！」

想「はは！何やってんだはやく…うおあ!？」

八意が波に足を取られ転ぶ

沙綾「あははっ！」

香澄「想くんなにしてるの…あはは！」

想「ゲホツ…しよっぱ…！」

俺は立ちあがり、口に入った海水を出す。めちやくちやしよっぱい、てかもう辛い、それを見てみんなは笑う。

あこ「追撃だー！」

想「フアツ!？」

あこから水がかけられる。

リサ「アタシもやる！」

香澄「私も！」

想「お前らやめろオ！」

燐子と入れ替わりで、友希那と紗夜がパラソルの下でなにかしてい

る。紙を手にとってるので音楽関連だろう。

想「アイツらほんと、人付きあいが悪いな…うわっ!？」

リサ「えいやー!」

燐子「え、えーい…?」

想「燐子までやる必要あるの!？」

きやつきやつとみんなから水を浴びせられる。これでも一応、帰らなきゃだから絶対にシャワーが必要だな、と思いつつ

想（こうゆうことも、たまにはいいな）

俺はスツキリしたのだろうか分からない、だがこの瞬間を楽しもう
と思

想「おまえらあ!次は俺の番だぞ覚悟しろ!らあ!」

リサ「うひやあ!？」

沙綾「なんで私まで!？」

りみ「私も巻き込まれた…!？」

一条「楽しそうだな…」

紗夜「お勤めご苦労様です」

紗夜達と少し離れた所に一条はパラソルを立てて借りてきた椅子に座っていた

紗夜が缶コーヒーを一条に渡す。

一条「ああ、ありがとう。君は確か氷川紗夜、だったな」

紗夜「紗夜で大丈夫ですよ。一条さん」

一条「そうか、ところで八意は学校ではどうなんだ？」

紗夜「あの方は…ダメな人ですね…いつもヘラヘラと…」

一条「そうか…」

紗夜「でも…いい人で優しいのは認めます…命懸けで私たちを守ってくれますから…」

一条「お、おう?」

それつきり口を噤む紗夜に一条は何となく察した

友希那「紗夜、次のLIVEの事なのだけれど…紗夜?」

紗夜「いえ…なんでもありません…失礼します」

一条「おう…」

一条は八意に対して、早く気づいてやれと願ったのだ。

サーフィンの男「うわああ！」

??? 「6人目」

海には…誰も気づかない凍死体が浮かび続けていた

ベミウ

一条「そろそろ16時だな…」

一条が右腕にある腕時計を見て呟く。周りでは着々と片付けが行われていた、自分達はまだ遊んでいる。そろそろ自分達も片付けを始めなければと思い海を見る…

一条「なんだ…？何かあったのか？」

海では、1人の周りを数人で囲んでいた。何かあったのだろうか、まさか溺れてしまったのかと思いい近づこうとしたその時だった。

一条「っ!？」

その若者たちの近くに化け物が1人顔をのぞかせた

場にいた若者たち「きゃあああ!？」

場は騒然として、沢山の人が海から離れていく。

想「一条さん!! あれって!」

海から彼女達を連れて離れてきた八意が緊迫した声で言う。

一条「ああ、38号だ」

燐子・有咲「!？」

紗夜「とにかく…逃げま…」

想「変身!」

皆「!？」

八意が走り出して赤のクウガに姿を変えた。

一条「君たちは絶対に動くんじゃないぞ!」

香澄「は、はい!」

俺は襲われそうになった1人を助けるために赤のクウガになり、走り出した

??? 「クウガ!」

想「はあっ!」

ジャンプし、顔にパンチを撃ち込む。相手が後ろによろめく。だが波のせいで自分も体勢を崩しかける、

想「大丈夫か!?早く逃げろ!」

男性「あ、ありがとうございます!」

素晴らしい男性は向こうへ走り去っていった。これで相手に集中出来ると思つた時、肩が急激に冷たくなり鋭い痛みが走る

想「ぐっ…!」

右肩は白くなっていた。それが瞬時に凍らされたと分かり、相手を見る。

ベミウ「美しい死の音色を奏でる。ゴ・ベミウ・ギだ」

そう言いながら足首からひも状の何かを取りだし右手に持つ、それが瞬時に鞭に変わる。先程の攻撃はそれから発せられたものだと理解した。俺は右に走り、波が来ないところまで行く。相手も右に走り俺から少し離れたところで構えていた。

ベミウ「フツ!」

相手から鞭が飛んでくる。

想「うおっ!」

俺はそれを右に転がり避ける。当たつたら不味いことになる。既に当たつた右肩の体温は分らないくらい冷たくなっていた。クウガでこれなら生身の人間なら…

想「っ!」

俺はその先の思考を中止し、目の前の敵に意識を集中させる。相手が鞭を右に左に振る、俺はそれをギリギリで躲し続けるが…

想「ぐっ…」

だがそんな躲しがいつまでも続くわけなく…俺は左胸に、そして右足にヒットした

想「くっ…」

身体が急激に冷えていく、このまま回避に専念したとしても攻撃の隙が無い。紫のクウガになればごり押せるかもしれないが…

想（いや…までよ）

素早く回避ができて尚且つ攻撃を打ち込める姿…

想（ある…青のクウガだ!それに金の力をプラスすれば…）

勝機は…ある

だが金の力を使えば…

想（俺はとんでもない嘘つきです許して黒服さん！）

俺はベルトに手を触れる、霊石が赤から青に変わる。

想「超変身！」

俺は青のクウガになり構えた。体には、まだ治ってない傷が残っていた

それを少し離れた場所から見ている彼女達の内、リサが口を開いた
リサ「なんだか彼、戦い方上手くなっているというか…」

紗夜「今井さん？それは一体…」

リサ「なんとなくね、私、彼がどんどん人間じゃなくなってる気がするんだよ。戦うための…道具みたいな？」

あこ「それ…大丈夫なのかな…？」

リサ「多分黒服さんに聞けば色々分かるんじゃないかな？」

よく彼も黒服さんに調べてもらっていると聞いていた。

燐子「また…聞いてみましょうか…」

リサ「うん、そうだね。友希那も一緒に行く？」

友希那「ええ、いいわよ」

そこに、車から戻ってきた一条が走ってきた。手にはライフルが握られていた。みんなはそのライフルを見て固まる。

リサ「それ…いつも持つてるんですか…？」

一条「一応持つてるんだ。現に今必要だろ？」

有咲「危ねえ…」

たえ「私も触ってみたい…」

沙綾「おたえ、ストツプ」

香澄「それで連携プレー…！凄い！」

一条「まあ…そうゆうことだ」

一条はみんなより前にでる、ライフルを構えて射撃体勢に入った

想（くそっ…武器になるもんがねえ…！）

さつきより回避は断然楽だ。だが隙がなく打たれる鞭の回避に全力を注いでいるので中々武器が見つからない。なにか隙を作りださなければ…

想「!?」

ベミウ「!?」

その時、銃声が聞こえ、ベミウの手から鞭が落ちた。向こうを見れば、一条さんがいた。

想「ナイスサポート一条さん!」

俺の足元に波が流れる。そこに流木が一本流れてきた。俺はそれを足で空中へ浮かして手に取る。今以外にチャンスを逃せばもう攻撃の隙はない。

流木が青いロッドへ変わり、鈴の音を鳴らし先端が伸びる。俺はそれを振り回し飛び立つ。

想「おりやああああ!」

ベミウ「ウアツ!」

ロッドを相手に突き刺す。腹に紋章が現れ、確かな手応えが腕に伝わるが…

ベミウ「ハア!」

想「っ!」

俺はベミウに蹴られ後ろに転がる。その間にベミウは紋章を消し、また足から鞭を取り出す。俺はロッドを構える。

体の感覚がほとんど無い今、残された時間も少ないだろう。一刻も早く決める。

俺は戦闘に意識を切りかえた時だった。ベルトに電気が流れる。

一条「!?」

香澄「ビリビリしてる!」

想「っ!」

俺は相手の鞭を躲し前に転がる。その電気はやがてベルトから体に伝わり…

ベミウ「!?」

青の金のクウガになった。青のロッドの先端には尖った金の装飾

が施されている。俺はそれを振り回す。

想「はあっ！」

振り回し俺は地面を蹴り飛ぶ。そして相手との距離を一気につめ
想「おりやあああ!!」

ロッドを突き刺す。今度こそ確かな手応え、相手は鞭を落とし、呻
く。俺は持ち方を変え、力を込める。そして相手を海に振り回し投げ
飛ばす。

海に落ちた敵は、その後すぐに爆発した。

一条さんたちが近づいてくる。

香澄「すごいすごい!!」

沙綾「すごいね…!」

たえ「しびれた…!雷だけに?」

燐子「やりましたね…!」

リサ「グッジョブ!」

紗夜「凄いですね…」

と色々な事を言われる。俺は親指を立てて頷いた。ベルトが消え、
元の姿に戻ると…途端に痛みが走る

想「っ…!!」

リサ「えっ?!ちよっ…」

俺はその場で倒れそうになるが、何とか抑え込む。体の感覚がほと
んど無いのだ。それを誰にも言わずに我慢する。どこか…精神も蝕
んでいるような…

想「ああ…少し疲れてな…」

リサ「ならよかった…でも無理しちゃダメだよ?」

想「うん、無理はしない…」

時刻は夕方、少し気温が下がった時間帯だった。

く帰り道く

一条さんとは海で別れた。あの人車で来てたからね
リサ「電車もあんまりいなかったねく!」

紗夜「もう空も真っ暗ですね…」

あこ「でも楽しかった!」

香澄「そうだね!」

たえ「うん、楽しかった」

りみ「また行きたいね…!」

有咲「わ、私も…」

沙綾「八意くん?」

突然歩くのが止まった八意が気になり沙綾は声をかける

想「…」

沙綾「えっ…」

突然前に倒れたつきり動かない八意。体を揺らそうとたえが体に

触れるが…

たえ「いたっ…」

紗夜「痛い?」

みんな咄嗟のことに理解が出来てない

あこがたえの代わりに触り、驚く

あこ「冷たすぎて痛いんだよ!ほら!」

リサ「そんなことより救急車!」

香澄「今呼ぶね!!」

あわてて救急車を呼ぶ香澄。周りには何事かと次々に人が集まる。

その中に2人、人影があった

???? 「なにかあったんですかね?」

???? 「私には関係ないわ、行くわよパレオ」

パレオ「はいっ!チュチュ様!」

チュチュ「新しいギタリストを探さないといけないんだから」

その2人は、急ぎ足でその場から去っていった。

そこにもう1人人影が…

小川「あれは…八意か、なんでぶっ倒れてんだ？まあ…いいか」
夏休み明け、また八意はめんどくさい奴に絡まれる…

とある冬の話、俺はいつも通りの道を一人歩き家前に着く。何故か、胸がチクリと痛むが寒さのせいだと誤魔化し歩く。

想「おお…寒…」

俺はかじかむ手をさすりながら家へと入る。そしてそこには…

???「あつ！おかえり！」

母「おかえりなさい！」

暖かい家庭が待っていた。当たり前前の日常。だがそれが無性に懐かしくて…

想「あ…」

母・???「ええっ!?どうしたの突然泣き出して！」

想「…いや…なんでもないよ…」

???「もう…おかえり！想！」

「ただいま…凜…」

凜は花が咲いたような笑顔で俺を迎えたのだった。

凜「不思議な夢？」

想「ああ…なんか俺が戦士になる夢だよ…ちよつとしか見てないからどう言えいいのかわかんないけど…」

母「なにそれ、変なの」

母親が苦笑しながら食卓を準備する。俺は首を傾げる、戦士なんてそんなバカげた夢があるかと自分でも疑いたくなる…

想「っ!？」

頭に鋭い痛みが走る。俺の頭に誰かの、知らない名前が、でも守りたい…そう決めたはずの名前が…今井リサ…

凜・母「大丈夫？」

想「ごめん…ちよつと…部屋に行くわ」

凜「うん…大丈夫？」

母「ご飯はどうするの？」

想「先、食べといてくれ」

やけに思い足取りで階段を登り自分の部屋に行く。頭が疲れた、俺は部屋に入つてすぐベットに体を預けた

想「今井：リサ：誰だ：？」

知らないはずの名前、そのはずなのに：

想「氷川：日菜：…羽沢：つぐみ：？」

誰なんだ。さつきからどんどんと他人の、知らないはずの人の名前が頭に入ってくる。

目を閉じると、様々な記憶が、声が、顔が浮かぶ…なにか忘れては行けない…だがそれが思い出せない

想「なんなんだよ：お前ら：誰なんだよ：！」

俺は謎の苛立ちに涙を流す。

想「：？」

ふと、目を開けると、懐かしい匂いが鼻をくすぐる。クッキーの匂いだ。そして：猫

想「タマ：？」

タマ：氷川日菜：氷川紗夜、今井リサ、奥沢美咲、山吹沙綾…！

想「なんでだ：!?なんで忘れてたんだ!？」

俺はベットから飛び起きる。 殆ど落ちたに等しいが：

想「戦士：クウガ！」

凜「どうしたの大丈夫!？」

想「っ…」

その心配そうな顔を見て、胸が痛む。本来ならここにいたい：暖かい家庭で：幸せに囲まれて：

想「ごめん…」

凜「え…？」

だがそんな現実はまだ無い。とつくに壊された平和な世界。仇だつてまだ取れてない。アイツらを守れてさえない。

悲痛な顔を見てしまい胸が張り裂けそうになる。歯を食いしばりそれに耐える。

想「俺…行かなきゃ…」

凜「まって…!」

行こうとしたところを腕を掴まれる。その手は異様に冷たく、それに驚く

凜「また、ほって行くの?」

想「っ!」

凜「あの時みたいに、また私たちを置いて自分だけ生きるの?」

俺は腕を振り払い睨みつける。

想「だまれ…凜が…凜がそんなこと言うと思うか!」

俺は激怒する。

想「俺の知ってる凜は!そんなこと言わねえんだよ!誰のまやかしだが知らないがもう俺は騙されねえぞ!!」

精一杯叫ぶ。それでもしないと目の前の悲痛な顔に精神がやれてしまいそうだから

???『こっちこっち!』

想「!?!」

???『想くん!』

俺は窓の方から伸びる手を握る。光が俺を包み…

想「っ…!」

飛び起きた俺が見たものは、シャンデリアだった、酸素マスクを取り外し、周りを見る、周りにはリサ達 Roselia が囲んでいた、リサが手を繋いでいる

リサ「よかった…生きてた!」

あこ「生きてる!よかった!」

腕や足には包帯が巻いてある。寝たら治るかもしれないが今はヒリヒリする。

アマダム『起きたかよ』

頭の中で声がする。

想『アマダムか…』

アマダム『本来なら即治療といきたいんだがな、邪魔された、見た
だろ？あの夢を』

想『ああ…』

アマダム『あれはお前の父親のアマダムが共鳴してしまったんだよ
…最悪だ…悪意が強すぎてどうしようもなかった』

想『助かったから多分大丈夫だろ…ありがとう』

リサ『バカ…無茶しちやダメって言ってたのに…』
リサから体をぽんぽんと叩かれる

想「みんな…いたのか？」

時計を見ると夜中の3時、普通なら寝ている時間帯だ

紗夜「どれほど心配したと思ってるんですか…!」

想「ごめんな…友希那は？」

リサたちの後ろを見ると座りながら寝ていた

想「寝ちやつ…てるな」

燐子「でも心配は…してましたよ…」

みんな安心したのか欠伸などを漏らしている。それ程疲れている
のだろうか…

想「みんな…ありがとう」

俺は目を閉じて皆に礼を言うが…誰からも返事がない

想「…?」

頭をあげると、みんな事切れたかのように眠っていた。

想「はは…やつぱり疲れてるんだな…」

自分も眠気に襲われたが何とか立ち上がる。まだあちこち感覚が
ないが点滴を杖代わりにしあるき扉を開ける、

想「やつぱり…いたんですね…」

黒服「八意様…」

想「彼女達を…寝かせてあげてください…」

黒服「わかりました…」

俺は彼女達が違う部屋でねかさされるのを見てから、自分も寝た…と
言うよりは意識を失った

特別編

ミッシェルINポツシブル

想(俺は今、ミッシェルの中にいます。決して変態ではありません)

黒服さんからの願いだ。いつも助けて貰ってるので中々断れない。今日は美咲の誕生日：らしい。知らなかったが黒服さんに教えられた。みんなでサプライズで祝うのにミッシェルは必要、だが美咲が主役なのでミッシェルがいない。

想「俺がミッシェルく!?!」

ということだ…

そう頭で眩きながらcircleの部屋に着く。この着ぐるみ、案外重たいのだ、

想(美咲はすげえよ…)

俺はこれを着てしかもDJをするミッシェル…美咲には敬意を払いたい、だが…

こころ「ミッシェルも美咲の誕生日を祝うのね!」

はぐみ「さすがミッシェル!!」

薫「夢いね…!」

この3人、本当に気づいてないんだな…だから3バカって呼ばれるのか…と思いつつ花音に目をやると…

花音「今日は…お願いね…想くん!」

と言ってくれた。まるで天使だ、まじで女神。と叫びたいのだが…

想(高い声なんか出ない俺は…喋れないよな…)

地声で喋ったらまあ色々とまずいだろ、さすがにバレるだろうし夢を潰すようなことはしたくない。

想(さて…どうするか…)

着ぐるみなので視界も悪い、

こころ「美咲が来るまであと30分くらいね!」

というキラキラした目をミッシェルに向けてとんでもないことを言い出した。

こころ「ミッシェルのDJを聴きたいわ!」

想「…？」

はぐみ「さんせーさんせー!!」

想「…!？」

薫「ミッシェルのDJ…美しくなりそうだ…」

想「!？」

俺は内心焦った。DJなんかやったことも無いただの初見だ、俺は断ろうとしたが…

花音「頑張つてね…!想くん…!」

俺はDJ台を眺める。スイッチやレバーがあつたりターンテーブルがある。しばらく眺めていたが…

薫・はぐみ・こころ・花音「!？」

半場やけくそになりとりあえずあっちこっちいじると、DJっぽくなった。リズムカルな音が周りに響き渡る。右、左と俺はリズムを刻む。横でこころやはぐみがはしやぎ出す。俺は構わずやり続ける。

想（意外と楽しいかも…!）

こころ「すごいわ…!ミッシェル!」

薫「夢いね…!」

はぐみ「なんだか踊りたくなるね!」

奥沢美咲は、今日は自分の誕生日だと言うことにドキドキしながらcircleへ向かう。もしかしたら…祝ってもらえたり…と思いつつながら歩くスピードを早める。

美咲「私…なんかあれだな…」

とブツブツ呟きながらcircleの扉を開ける。最初に飛び込んできたのは、DJの音だった。自分以外にあまりDJをする人は居

ないので珍しい

美咲「DJの音…？」

激しめに聴こえるDJの音。どこだろうと思いつつ歩き回る。

美咲「ここって…今日ハロハピが使う場所…」

いやそんなまさか…自分以外のDJを雇ったのだろうか…まさかそんなはずはないと思い、扉を開けると…

美咲「…？」

ミッシェルが立っていた。しかも軽快にDJをしている。美咲は理解が遅れた。まさか…ミッシェルは本当に存在しているのだろうか…

はぐみ「みーくん！お誕生日おめでとう！」

こころ「美咲！お誕生日おめでとう!!」

薫「お誕生日おめでとう…」

花音「お、おめでとう！」

美咲「あ、ありがとう…ごぎいます…う…つていやいや！」

美咲はズカズカと歩きミッシェルを外へ連れていく。途中でぐげげ…やの首！首！美咲！死ぬ！やの聴こえたが無視してミッシェルの頭を取る。

美咲「想…さん？」

想「げっほ…げっほ…死ぬ…」

美咲「…。」

想「あ、美咲。お誕生日おめでとう」

美咲「いやそんな爽やかな顔で言われても困りますよ！」

想「え？なんで？」

美咲「自分がいってる着ぐるみに異性が入ってたりしたら誰でも驚きますよ!？」

想「そうなのか? いい匂いしたけどなあ…」

美咲「くっ…／／／」

想は顎にミツシエルの手を当て、うくん? やのと唸っている…が何かに気づいたようで美咲に頭を下げる

想「俺が臭いからか…! すまない!」

美咲「いや違いますけど!」

ほんとにこの人はどこまで鈍感なのだろうか…

想「うーん…あ! そうだ美咲!」

美咲「はい…?」

想「俺にDJおしえてくれよ! 楽しかったし!」

明るい笑みで言う彼に毒気が抜かれた。美咲は苦笑しながら「いいですよ」とだけ言った

その後は、みんなからプレゼントを貰ったり

八意からはまさかの大きな扇風機

美咲「ミツシエルに入れられたらいいのに…」

その後はみんなで何故か踊ったり、八意とデュオでDJをしたりと
なんやかんやで楽しい1日であった

ベミウの件から1週間がたった。未確認事件はちらほら出ているが警察も中々動き出せず、配備や警備を固めて外出は控えるように言われていた。

P.M. 6:30

若者男「別に未確認とか大丈夫っしょ！」

若者女「それな！」

そう言つて笑いながら歩く若者が2人いた。その近くのマンションの屋上に、鉄球を振り回しながら周りを見る未確認がいた、そして

???' 「お前たちは運が悪かったな」

若者の男と女は、飛んできた鉄球に地面のコンクリートなどを破壊して、頭を潰され死亡した。

想「外出は控えるように…か」

前々からそう言われているが、あまり守ってる奴は見たことないな、と思う。だつて現に…

つぐみ「ぼーつとして…どうしたんですか？」

想「いや、なんでもないよ」

つぐみ「あつ…！試作品のケーキ！どうですか！」

モカ「おいひい〜」

そう、俺は外出自粛をガン無視して、羽沢珈琲店にいるのである：事の間緯は約2時間前に至る。珍しくつぐみからLimeが来たのだ。あのつぐみなのだから何か重大な用事なのだろうと思いい内容に目を通す

つぐみ『今日、試作品のケーキを味見してもらいたいです！いいですか？』

という内容だった。俺はもちろん

想『おっけー！いつくらいに行けばいいかな？』

と送っておいた。つぐみの家のケーキとコーヒーは美味いからね仕方ないね。

想「…」

いつも通りむぐむぐとケーキを頬張っている想到、モカが近づくと

想「なんだ…？ひとくち欲しいのか？やらないぞ」

モカ「いじわるだくじゃなくて」

妙に真剣なモカに俺は首を傾げる。モカはさらに近づき耳打ちする。その後ろでは巴やひまりが興味津々で耳を傾けていた。蘭は何を考えてるのかわからん…

モカ「つぐみのこと、どう思ってるんですか？」

想「つぐみ？」

モカ「優しいとかさそうゆうのだよ」

想「ふむ…まずは優しい、あと料理美味しいし面倒見がいいし可愛いし、将来彼氏や旦那になる人はきつとしあわせだろうな！」

モカ「おお…でも声が大きいですな」

モカがからかうようにつぐみを見る、俺もモカに並び見ると…

つぐみ「…／／／」

耳まで真っ赤にして、下を見ている。

想「どうした？熱か？」

つぐみ「ふえあっ!」

俺は近づきつぐみのおでこに手をやる、自分のでこにも手をやるが…そこでつぐみが突然ふらっと前のめりになり…

想「つぐみっ!」

頭から湯気が出てその場に倒れそうになるのを危うくキャッチする。どうやら気を失ってしまっただけらしい。

想「風邪？これ大丈夫なの？」

俺は腕の中ですうすう寝息を立てるつぐみとひまり達を見やる。

ひまり「あくもう！見てるこつちがもどかしい！想くん鈍感！」

ひまりがあーたらこーたら言っている。俺は恋愛などに興味はないし俺のことが好きなのやっだって居ないだろう。人間かどうかもわからないやつを

想「…？」

巴「八意…それは無いぞ」

巴からも冷ややかな目を向けられる。何故だろう。俺がそう考えていると、ひまりからとあるものが渡された…と言うよりは押し付けられた

想「メモ帳？」

ひまり「想くんは恋愛について学んだ方がいい！ここの本屋に行けば沢山あるから見なさい！」

想「いや…なんで恋愛なんか…」

ひまり「いろいろの！」

想「わかったわかった…また機会があればな」

俺はそう言いながら紙をしまう、そして…

想「つぐみ…どうすればいい？」

俺は片手でつぐみを支える。重くは無いんだが長時間持ち続けると流石にきつくなってくる、

蘭「…」

つぐみ父「ささつ、想さんこちらへ！」

想「ん？えっ？」

つぐみ母「こちらへ！こちらへ！」

突如として現れた2人に急かされ、俺はつぐみの部屋へと案内された。いや…なんでだ？確かにつぐみを助けてからというもの、つぐみの父母は俺が辞めてくれと言っても英雄的扱いをする。

想「…」

疑問尽きぬまま、俺はつぐみを布団に寝かせ、自分は座る。改めて辺りを見回すと、写真が飾ってあったり可愛らしい雰囲気の部屋だった。密かに幼稚園から同じだったのは驚いた

想（まりなさんが幼なじみって…言っただけどまさか幼稚園からは…仲がいいんだな）

俺には友達はいなかった。みんな俺を避ける、だから俺は自らの意思で人を避けた、ここで記憶を取り戻した時は…人を避けそうになったから…

想（やめろやめろ…！昔のことを思い出したって虚しくなるだけだ。今を生きよう）

そう言えば一条さんが言っていた。未確認生命体第39号の殺人はえげつないと…なんてったって周りのコンクリートなどが粉々になったり吹き飛んでたりとか…

想「はあ…」

俺はため息を着く。次の敵もこれまた厄介そうだ、今まで以上に過激かもしれない…

想（疲れるな…）

俺は少しだけ、ほんの少しだけ寝ることにした

〜2時間後〜

つぐみ「ん…」

つぐみはベッドからむくりと起き上がる。夕日が刺している時間帯らしい。

つぐみ「ふわあ…」

確か昼間に何かあって…そこから先が覚えてない。曖昧なのだ、でも周りに迷惑をかけてしまったような…そんな気がする。

つぐみ（後で謝らないと…？）

布団から起き上がり、床に足をつこうとした時だった。つぐみは、自分の部屋の床に寝転んで寝ている人物を見た。

想「ん…」

つぐみ「ええっ…!?」

大きな声を出してしまい口を抑える。幸い、八意にはバレておらず相変わらず寝ていた、そしてつぐみは、八意の横に転がっているスマホが震えていることに気づく、

つぐみ「想さん…！起きてください電話ですよ〜！」

想「えっ…ああ…寝てた!？」

飛び起きる八意

つぐみ「電話ですよ想さん」

つぐみが床からスマホを拾い上げて渡す。

想「一条さん…？」

俺はつぐみから受け取り電話に出る

一条『八意！聴こえるか!』

緊迫した一条さんの声が部屋に響く、

想「どうしたんですか!？」

一条『第39号が姿を現した！今どこにいる?』

想「39号が!？」

俺は立ち上がり部屋を出る、後ろにつぐみが着いてきてくれた。1階に行くとき客がそれなりにいた。父母も何事かと俺を見る。俺はスマホをしまい店を出る、バイクに跨り、つぐみに礼を言う

想「起こしてくれてありがとう、んで寝てしまつて悪かったな…あ！新作美味かつたぞ！」

つぐみ「え…うん！ありがとう！」

俺はアクセルを吹かし、店から走っていった。

つぐみが店に戻ると、少しざわざわしている、

客1「今度は39号かよ…」

客2「警察も大変だなあ…」

蘭「あの人、行ったね」

つぐみ「蘭ちゃん…」

Afterglowのメンバー達は、微かな心配の表情を浮かべて

いた

つぐみ（頑張つて…！想くん！）

想「変身！」

目的地に行く途中、俺は赤のクウガになる。トライチエイサーのカラーも明るい色に変わる。

想「!？」

しばらくすると現場に着いた。だが俺が見たのは…

警官1「…」

項垂れている警官が1人いた。横転した車に隠されていた。脈を
図ろうと近づくが…

想「!？」

首から上が潰されていた…跡形もなく

周りを再び見る、あちらこちらにパトカーの残骸が散らばっていた。人も…

想「一条さん!？」

俺は、俺をこの現場に呼んだ人物を見つけようとする、だが…

想「…!？」

背中に凄まじい衝撃が走る。

想「ぐおああああ!？」

そのまま数メートル前に飛び、横転したパトカーにぶつかる。前と
後ろから衝撃が同時に襲い、中身が圧縮される

想「げほっ…ぐふっ…!？」

マスク越しに血を吐く。

想「っ…?？」

倒れた俺が何とかして後ろにあるものを掴む…何かのストラップ
だろうか…

想「鉄球の…ストラップ…?？」

その時だった。
想「っ…!?!」

俺から数メートル離れた場所に誰かが降ってきた。それは地面に大きな穴を開ける。

想「うわっ…!」

俺はその衝撃に少し後ろに転がる、煙の中から誰かが歩いてくる。ズシン、ズシンと

??? 「クウガ…」

想「!?!」

ガメゴ「俺に狙われた者は運が悪い。それだけだ、この人間も、クウガお前もだ」

想「運が…悪いだと…!?!」

俺は多少の怒りを感じる。そんな理由で、殺しが許されるはずがない。罪もない人々を…

想「お前を…ここで倒す…」

俺は赤のクウガのまま、構えた。

想「っ！」

ガメゴの低めの突進を跳び箱のように飛んで避ける。俺はその背中にパンチを入れるが…

想「硬え…！」

振り向いた相手に殴り飛ばされ後ろに下がる。相手はいつの間にか鉄球を取り出し振り回す。俺は構えながら横に歩く。相手も鉄球を振り回しその場に佇む。

ガメゴ「っ！」

鉄球を俺に投げ飛ばす。俺はそれを転がりながら横に避ける。尋常ではないあの速度。この体勢で避けなければ今頃粉々だろう。

想「超変身！」

俺は赤のクウガから青のクウガに姿を変え、赤のクウガとは違う構えを取る。特訓というものをしたのだ、俺は近くに長きものが無いか探る。

想（ない…か）

ならば隙について赤のクウガになるのみ、そう考え、ジリジリと近づく。

ガメゴ「…！」

想「くっ…！」

ガメゴが鉄球を振り回す、右に、左に、俺はそれを後ろに回転しながら避ける。だがしばらくして背中が壁に当たる。相手が鉄球を飛ばす。

想「くおっ…!?!」

俺は右に転がり避ける。後ろの壁が粉碎するのを視界の端でとらえた。一体本当にどんな威力をしてやがるんだか…

ガメゴ「!?!」

想「はあっ！」

俺はそのまま後ろに下がり、トライチェイサーの横にたどり着く、避けるくらいなら、ゴリ押せばいい。やれ、俺ならできる。紫のクウ

ガ舐めんな!

想「超変身！」

トライアクセラーを引き抜き、紫のクウガへと姿を変える。トライアクセラーは紫の剣へと変わる。俺はそれを右手に持ちガメゴ目掛け歩き出す。1歩ずつ、確実に

ガメゴ「っ！」

相手がすぐさま鉄球を俺にぶつけてくる。

想「っ…！」

俺は鉄球をモロに食らうが、右足が半分後ろに下がるだけで済む。俺はまた、歩き始める。

ガメゴ「っ！」

想「ぐっ…！」

2度目、俺はまた鉄球が紫の胸当てにヒットする。痛みが体を襲うが、何とか後ろに倒れかけた体を踏みとどまらせた。

だが、容赦のない3度目の攻撃が運悪く防御の薄いところに当たる

想「ぐあ…！」

そして4度目が頭に当たり…

5度目の攻撃で、俺は耐えれずに右膝を地面に着いてしまった。

想「ぐう…！」

俺はもう一度、震える体を無理やり立たせ、ガメゴに近づこうとするが…

6度目の攻撃は、胸当てに当たった。だが、俺はそれに耐えれず後ろに倒れてしまう

想「ぐお…！」

てから離れた紫の剣が、トライアクセラーに戻り、その辺に転がり落ちる

ガメゴ「フン…！」

鉄球を何故か地面に捨て、指についで指輪のようなものを外し…

想「!?」

それを鉄球に変え、振り回す。

想「ふう…！はあ…！」

俺は地面に手を付き、立ち上がる。初めて紫のクウガが負けたことに対する恐怖を無理やり打消し心を奮い立たせ立ち上がる。

——その時だった

俺のベルト、アークルに電流が流れる。

ガメゴ「想「!?!」」

俺は瞬時に理解し、トライアクセラーを拾い立ち上がる。アクセラーを振り、剣に変えると同時に、紫の金のクウガへと姿を変える。剣の先端にも装飾が施され、鎧もパワーアップする。

ガメゴ「!?!」

俺はもう一度、剣を右手に持ち再びガメゴ目掛け歩き出す。

ガメゴ「っ!」

1度、2度、と俺に鉄球を投げるが、俺には通用しなかった。一気に歩き、間合いを詰める。

想「うおおおおああああ!」

ガメゴ「いいのか?」

想「!?!」

俺は剣の間合いに入ったことを確認し、相手に剣を突き刺す、だが剣は、浅い所で止まった、満足なダメージすら入らず、紋章は出ない。だがそれよりも…

想「どうゆう事だ…!?!」

ガメゴ「俺は爆発力が他の奴らとは違う、ここで倒せばどうなるか、お前ならわかるだろう?」

挑発するような口調で話すが、俺はその内容に戸惑った。今ここでもし倒せば…

周りにいる警官、建物を壊しかねない…そしてこの近くには、パス

パレの事務所が：

ガメゴ「甘いな、クウガ！」

想「っ!？」

ガメゴが隙を着いたかのように俺に鉄球を投げる、紫の金のクウガならどうにかなるはずだが：

その時、アークルが金から紫へと点滅している。

想（時間切れ…!？）

想「うわああ！」

紫のクウガになってしまった所に鉄球が胸当てにあたり、後ろに吹き飛ばされる。後ろに転がる途中、紫のクウガから白のクウガに姿が変わる。

ガメゴは、俺に刺された浅い腹の傷を抑えながら言う

ガメゴ「次は、他の色で来い」

そう言いながら俺と真逆の方向で歩いていく。

想「まで…！」

俺は立ち上がり、追いかけてようとするが、立てない、胸あたりがすさまじく痛い。骨がイカれたのだろうか？

一条「八意!? っつかしろ! 大丈夫か!？」

額から血を流した一条さんが、駆け寄ってきた

想「一条さん…いたんだ…」

一条「おい! っつかしろ! おい！」

俺は妙な安心感と共に、意識を失った。

月が、俺たちを見ていた

〜次の日〜

朝からそんなニュースが流れるのをつぐみは片手に見ている。昨日、彼が出ていったのだが、このようにニュースがやっているということは倒せてなかったのだろうか。

つぐみ「…」

妙に落ち着かない。でも…倒せてなかったと言うことは彼は一体どうなったのだろうか

つぐみ（想くん…!）

ご飯を食べ終わり、自室に戻ったつぐみは電話を掛けてみるが、誰も出なかった。

つぐみ「大丈夫なのかな…」

つぐみはスマホを握った。

〈病院〉

想「……………ん？」

俺はベッドから起き上がる。少し頭が痛い…確か気を失って…

想「…っ!？」

胸あたりがとてつもなく痛い。その痛さに歯を食いしぼる。骨が折れている、再生まで時間がかかりそうだ

想（最初は信じられない事だらけだったのに今じゃ普通に再生だなんて言ってる…）

やはり人間じゃなくなってる。金の力を解放してからは更に色々身体的に強化されている。筋力だってそうだ、

想（人間じゃなくなって…化け物と同じ存在になったら、どうやって生きてくかなあ…）

アイツらには迷惑は掛けたくない、かけさせたくはない。

想「世界を旅する…いいかもしれないな…」

俺がそう呟くと同時に、部屋の扉が開く。部屋に入ってきたのは、黒服さん達だった

想「毎回、ありがとうございます」

俺は頭を下げる。黒服さん達は「いえ」の一言で済ませた。

黒服「今回の敵も厄介そうですか？」

想「はい…とてつもなく、奴は言っていました、爆発力は凄まじいと…」

黒服「なるべく人がいない所で倒したい…と？」

想「出来ればそうしたいです。頼めますか？」

一条「八意、俺達も手を貸そうか？」

奥からもう1人、人が出てきた。それは額に包帯を巻いた、一条悠介だった。

想「一条さん、無事だったんですね」

一条「ああ、今日にも退院出来る。それよりお前は大丈夫なのか？」

想「大丈夫ですよ」

俺は笑顔で答える、が実は嘘だ。今もズキズキと痛む、少しでも気を緩めたら痛みでどうにかなりそうだ。

一条「ならいいんだが、無理はするなよ？」

想「はい、分かりました」

そう言うとな一条さんは頷いてどこかへ行ってしまった。その優しさに胸が痛む、

黒服「それよりも…八意様…金の力を」

想「使ってる…」

黒服が言いたげな顔をする。

想「俺、もしこれからアイツらと戦って、人間じゃなくなったら、世界をぶらり旅しようかなって考えてるんです」

黒服「!?!」

黒服が驚いたような顔をする。珍しい、こんな表情するんだなと思う。

想「こうやって生きてるだけでも感謝ですから」

俺はベッドに寝転びながら呑気に言う。

想「でも…こころ、リサやつぐみ達には迷惑は掛けたくない…」
黒服「…」

想「大丈夫ですよ！大丈夫！こんなこと言ってるけど、俺人間辞める気ないんで！」

その場にいる黒服はわかった。自分達にこの人は止められない。覚悟が違いすぎる。

なら…精一杯自分たちでサポートしようと、そうあらたに決意する

黒服「私達が精一杯サポートさせていただきます」

黒服はそう言うと、どこかへ歩いていった。

ガメゴ「今日はここか…」

ガメゴはルーレットで決めた場所に決めた人数を殺すため、マンションの屋上に立っていた。指10本に、鉄球にするための指輪をはめて、

それをひとつ取り出し、鉄球に変える。

それを振り回し、誰が死ぬかなど考えもせずに投げた

降り注ぐ鉄球に、逃げられるものはいなかった。車も、電柱も巻き込んで…

く病院の一室く

想「んなつ…」

テレビから入ってきた速報に俺は驚く。

想「20人…殺害…」

現場が映る。あっちこつちがボコボコに凹み、電柱や街灯がへし折れて散乱していた。俺は自然と布団を握りしめる。そして無理矢理立ち上がり…

想「ぐがつ…」

まだ完治していなかったせいかな足が上がり床に落ちた。
それと同時に、扉が開く。

リサ「ええっ…!?なにしてるの!？」

想「リサ…？」

リサは俺を見て、そしてテレビを見て察したようだ。

リサ「また無茶しようとしてたんだ？」

想「ぬぐっ…」

俺を起こしながら言う。女に起こされるとかなんか立場逆だなと思いつつベッドに座る。横の椅子の1つにリサが腰掛け色々な品を出す

想「どうやってここを知ったんだ…？」

リサ「黒服さんからだよ？」

なんか当たり前のように言いながらテキパキと作業している

想「えっ…あっ…そうなの？（思考停止）」

リサ「うんうん！はいこれ！食べれる？これアタシの好物！」

パックから取り出したものは酢の物だった。

想「ありがとう？」

俺は言い、酢の物を口に入れる

想「っ…!？」

リサ「どう？友希那と作ってみたんだけど…」

想（酸っぱ過ぎないか…？）

とりあえず酸っぱい。あの友希那がまさかの料理出来ない奴なのか…

リサ「アタシもたべよっ…!？」

リサも口に入れた途端ぶるぶると震えている。無言が続くが、2人は目を合わせた。今なら意思疎通が出来そうだった

（5分後）

リサ「けっほけっほ…」

想「…」

リサが水を飲んで落ち着く。

リサ「友希那…切るのは上手くなってるけど…調理がまだまだだなあ…」

想「はあ…口が酸っぱい…」

リサ「それよりも！おねーさんから説教があります！」

気を取り直したリサが口調を改めて言う。俺はそれを黙って聞いた。

リサ「燐子から聞いたよ？何かあったらアタシ達を頼ってって言うてくれたんだって？なのになんで頼ってくれないの？」

想「お前たちを…巻き込みたくない…」

リサ「誰もそんなこと気にしないよ！」

強い口調で言うリサに、少しだけ驚く

リサ「アタシ達、戦えるわけじゃない…一条さんみたいに…だけでも想くんの心の支えにはなれるよ？」

リサ「ちよつとは…頼ってよ…」

想「…」

脳裏に燐子と凜の言葉が蘇る。

燐子『私達を…頼って下さいね…？』

凜『何でも自分で抱え込むとこ…そこが君の悪いところだよ！』

昔、色々あつて溜まつてて…それを見抜かれて俺しばかれたんだっけな…

想「リサ…うおおあああ！」

リサ「!？」

俺は半ばヤケクソで酔の物を全てかきこんだ。とてつもない酸っぱさが体を襲う。だがそれを、俺の何かを目覚めさしてるようにも思えた

リサ「いやっ…ええ!？」

横でリサが慌てる。そらそうだ、頭おかしいことしてるもん。俺は

全て嚙んで飲み込んだ、そして：

想「うええええあああああ！すっぱあああああ!?」

リサ「あーもう…そんな一気に食べるから…：…ぷっ…」

リサが耐えきれないように吹き出す。

想「ふっ…」

リサ・想「あはは！」

2人して泣きながら笑う。はたから見たら変なやつらだが…

想「ひー…なんか吹っ切れた！ありがとうリサ！」

リサ「よかった役に立てた！」

想「ありがとうな！」

俺はしばらくして、今回の未確認について、ポツポツと話し出した

リサ「何それ卑怯じゃん！」

リサが頬を膨らませ怒る。かわいい…

想「そうなんだよな…だからどこか人気のない場所まで運びたいんだけど…いい場所知らない？」

リサ「うくん…私達の街にあるかな…」

リサもさすがに頭を悩ませている。

リサ「海に投げ捨てるのか…？」

リサが笑顔でそう言う

想「突然すげえ物騒だな!？」

俺は盛大に突っ込んだ。年頃の乙女がそんな物騒な…

リサ「でも…それだと海の生き物が可哀想だし…」

想「…。」↑過去に2度海にグロンギほおり投げたりしてる人。

リサ：すまん、俺それ何回かしてる。という言葉を何とか飲み込む。黒服さんも、一条さんも探してくれてはいるがこの街が都会すぎる。運び出すにしても中々苦難の技だ。ゴウラムだってあんな相手を長時間運べるかどうか…

リサ「ゴウラムちゃんを使えばどうかな？」

想「同じこと考えてた…」

リサ「その感じ…難しい？」

想「やれば出来るかもしれない…」

リサ「やれば…かあ…うくん…難しい！」

そう言った時、一条さんから電話が来た。俺はその電話に出る。

一条『八意か、爆発予定地、決まったぞ!』

想「ほんとですか！」

リサ「…?」

一条「花咲川の町外れだ! 今日も奴は出てくるはずだ、周辺の避難を只今から徹底させる! 君も来てくれるか!」

想「もちろん行きます!」

そうして電話が切れた。きよとんとするリサに説明すると「ほんと!?」と言った。俺はそれに頷く。流石は一条さん。優秀警察官だ。

俺は立ち上がる。まだ少し痛むが充分動ける。俺は少し歩いて肩を動かした。

想「行ってくるな、リサ」

俺はサムズアップをリサにして、その場を離れた。1人病室に残されたリサは、笑顔で

リサ「うん！気をつけね！」

とこれから闘いに行く彼を応援した。

想「ここビルの屋上か…」

一条さんから後々から入った連絡や他の警官の無線通信を聴いた情報だと、あいつはこのビルの屋上に出現すると予測されていた。

想（一体どんなことしたら予想出来るんだろうか…）

俺は思いながら助走を付けて一気に飛ぶ。飛んでる途中、霊石が青になり、俺は青のクウガになった。

想「よいしょっと…」

屋上について最初に思ったのは、ノールックでも姿を変えられたことに対する驚きだった。もうそこまで、自分の意思で姿を変えられるようになったのか…

闘いに関しては嬉しいが…同時に悲しくもなった。自分が戦うための兵器になりつつあると言われているも一緒だからだ。もちろんそれをリサ達に言う気などさらさらないが

想（どこからくる…？）

俺はそろそろ来るだろう敵に意識を集中させる。その時、横から何かの気配がして右に飛び退ける。

想「っ!？」

俺が避けたと同時に、そこに鉄球が飛んでいく。俺は転がりながら赤のクウガに姿を変え、鉄球が飛んできた方向を見る。

想「きやがったな…」

俺は構えながらその敵を見やる。相手は鉄球の元の指輪を指から外し鉄球へとかえ振り回す。

想「うおっ…!？」

相手が鉄球を飛ばすがそれを体勢を低くして避けそのまま近づく。鉄球を大きく振り回した後は隙が大きいのでそこを狙い一気に叩く作戦だ。だが…

想「はっ…!？」

鉄球はいい感じにブーメランみたいになり、俺の首に絡みつく。前から引つ張られ、俺はそれを全力で後ろに下がり、抵抗する。ギシギシと鎖の軋む音が聞こえる。だが力のステータスは相手が上だ。俺はどんどん相手に近づき…

バアン!

ガメゴ・想「!？」

謎の銃声により鎖がちぎれた。ガメゴは銃声が聞こえた方を向き、俺は後ろに転けて尻もちをつく。

想「いだっ…!？」

相手は銃声をした方向を向き、その相手を見つける。俺も遅れてその存在を視認した。それは俺と同じビルの上上にある

想「ええ…」

まさかの黒服と一条さんのペアだった。2人ともライフルを片手に微妙にドヤってる。てかエイムがすごい

ガメゴ「フン…」

だがガメゴは、鎖を下に捨てると、黒服立ちに見せつけるかのよう指を見せる。そこにはまだ、9個の変えが残っていた。それを取り出そうと…

バアン!

また同時に銃声。

想「ええ…?」

ガメゴ「なっ…」

相手の指に着いている鉄球の元を2つ撃ち落としたのだ。あの2人、エイムがおかしい。

ガメゴ「…」

ガメゴは俺より危機を感じたのか2人を先に殺そうと近寄るが…

想「させるか…!」

後ろから俺が飛び掛りしがみつく。腕を掴み、撃てるような位置まで無理やり持っていく。俺は必死に相手が進むのを止めながら腕を上げさせる。

想「ほら…!バンザイだ…!」

俺が何とか上げた両腕に2人が狙いを定める。1発、また1発と放たれた弾丸は鉄球の元を確実に撃ち落としたのだ。そして最後の鉄球の元を撃ち落とし、2人ともロード体勢に入った。

想「ぐっ…」

俺は相手から肘打ちを受け後ろに下がる。相手が自由になった腕を見ると、もう鉄球の元はなかった。そこら中に散らばっているからだ。

ガメゴ「…!」

それを拾おうとしたガメゴの腹を殴り、横腹を蹴り飛ばす。また拾わせて溜まるかこの野郎。

想「はっ…!てやっ!」

鉄球さえ無くなればただの硬いやつ。反撃開始だ…!

俺は相手を後ろに追い詰める。格闘戦なら赤のクウガも負けていない。

ガメゴ「!?!」

想「うらあ!」

俺は相手を端まで追い詰める。さっき自分が飛んできたところを目掛け蹴り飛ばす。相手は屋上から地面に落ちていく。

想「うそお…」

途中、建物と建物を繋ぐ歩道橋をぶち壊して穴を開けながら地面に落ちていくガメゴを見る。地面に激突した瞬間。少し大きな穴があり、えげつない音がこつちまで響いた。

俺は青のクウガになり降りる。道路に降りてからが正念場だ。

想「っ！」

俺はトライチェイサーに跨り赤のクウガになる。トライチェイサーも戦闘用に色が変わり、

ゴウラム「お待たせしました」

その上からゴウラムがくつつく。俺はトライゴウラムを動かしガメゴを轢く。そのまま車体に乗せて走り出す。

ガメゴ「クツ…」

想「…」

現場に輸送途中。ガメゴはバイクにしがみついている。俺はそれを極力見ずにいた。

一条『聞こえるか！八意？』

無線の音が聴こえ、その後に一条さんの声が聞こえる。

想「はい！聞こえます！」

一条『現場までどれくらいだ！』

想「あともう少しです！」

一条『わかった！もう周辺は大丈夫だ！いつでもいい！』

想「わかりました！後は任せてください！」

一条『頼んだ…！』

そして無線が切れた。俺はただひたすら無言で現場に走った

ガメゴ「グワツ！」

想「…！」

目的地の大きな廃墟につき、俺は急ブレーキを掛けた。ガメゴはその衝撃で前へ吹き飛んだ。木の板などを蹴散らしそこに倒れる。ホコリなどが降り注ぐ

想「っ…」

バイクから降りて、相手に歩いて近づくと

ガメゴ「ハア！」

想「っ!？」

相手が俺に低い体勢でタツクルをする。俺はそれを右に避け、相手に蹴りをかますが相手は両腕でガードする。

想「ふうっ！」

俺は相手に両腕でしがみつかれる。相手の背中に2度肘打ちをするが全く効いていなかった。

想「はあっ！」

ガメゴ「!？」

俺は相手の顔に膝蹴りをする。相手が怯み、俺から離れる。俺はそれに追い打ちをかけようと蹴りをするが足を受け止められ持ち上げられる。

想「うおっ…!？」

そのまま向こうに投げ飛ばされ転がるがすぐに立ち上がる。

ガメゴ「ウオオオオ！」

想「はあっ！」

俺は突っ込んできたガメゴの左胸に拳を打ち込み、怯んだところにアッパーを入れ、後ろに殴り飛ばした。

想「ふっ…！」

腰を低くし、両手を広げ構える。

その時、ベルトに電撃が走る。それは上半身を、そして右足に行き渡る。

右足に金のパーツがつく。上半身の所々に金の装飾が着く

想（出来た…!）

俺は赤の金のクウガへと姿を変えた。なぜ今まで使わなかったのか、それはアマダムに言われたからだ。

『金の力を使うのはいいが、赤の金はやめておけ。被害が出る。』

だから俺は今までそれを使おうとも思わなかった。だが現時点最強の紫の金のクウガを破られた今、これに頼るしかない。場所も街のはずれだ、ここなら行ける。

相手は「こい！」と言うふうに関腕を上げ、その場に佇んだ。

想「上等だ…」

俺は敵に向かって走り出す。

足の裏から炎と電撃が上がる。

想「ふっ…！」

タイミングを見計らってジャンプする

想「うおりやあああああ!!」

と叫びながら相手の胸に飛び蹴りをぶちかます。

ガメゴ「!？」

敵の身体を蹴り、膝をつけて着地する。

相手は更に後ろに吹き飛んだ。そして…

爆発が起きた。

後々から分かったのは、この爆発の威力は半径3キロに及んだことだ。だがそれに八意が気づくのはもう少し先のお話。

＼circle＼

まりな「!？」

afterglow「!？」

ライブハウスにいたafterglowやまりなさん、客やスタッフなどは爆発音に気づき、驚く。

＼病院＼

リサ「!？」

＼弦巻家＼

ハロハピメンバー「!?!」

く有咲の蔵く

ポピパメンバー「!?!」

くパスパレ事務所く

パスパレメンバー「!?!?!」

スタッフ「ガラスが!?!」

爆発音と、事務所のガラスがひとつ割れたことに対する驚きで皆固まった

く八意sideく

想「:?!」

爆発に巻き込まれたが何故か自分は無傷だった事に疑問を抱く。だが問題は:

想「あの大きな廃墟が:無くなってる:?!」

俺はいつの間にか変身が解けた腕で髪をかく。今の爆発にはそれぐらいの威力があったのだ、あちやく:やらかしたなと思いつながら立っていると、後ろからサイレンの音がする。

一条「これは:お前が?」

想「はい!でもちゃんと倒しましたよ!」

一条「あんな:お前のせいで被害が出てるんだぞ?」

想「えつ:?!」

一条「はあ:」

俺はため息をつく一条さんを見ながら、街を見た。

想「夕日が:綺麗だな:」

俺はそう呟いて、赤の金のクウガはできるだけ使いたくないと思っ

た

「朝5時、弦巻家」

想「金属疲労？」

俺はトライチェイサーの状態を確認しに朝早くに弦巻家について、見てもらっていた

黒服「はい、この状態だと…本格的なメンテナンスが必要かと、最
高級の整備士などで…」

それから色々なことをつらつら言う黒服に俺は思考力が落ちてい
く

想「なるほど…あ、そういえば」

黒服「…？」

俺は話題を逸らすべく話をする

想「新マシン、どうです？ビートチェイサー…ですっけ？」

黒服「ただいま、仕上げまであともう少しかと、とある人の協力で
だいぶスムーズに進みました」

想「とある人…？」

黒服「それは内緒です」

内緒って言われると余計に気になるのは俺だけなのだろうか…？

黒服「内緒です」

想「えっ…はい…」

黒服の威圧に負けた。だって本当に怖いんだもん…

黒服「ついではなんですけど…こころ様と朝ごはんを食べていつて
ください、八意様の分も用意しております」

想「ほんとつつすか？」

黒服がサムズアップで答える。俺もそれにサムズアップしようと
すると…腹がなった

黒服「行きましようか」

想「そうつつすね」

想「…」

朝飯を食い終わってそろそろ行く時間だ。俺は既に制服に着替えてこころを待っている。

想「そろそろ長袖の季節…?」

まだ9月1日と言うのに少し肌寒さを感じながら俺はその場に佇む。そして…

こころ「待たせたわ!想!」

後ろから飛びついてくるこころ、最初はあれだったが最近はまだ慣れてるせいかなんの抵抗も無くなった

想「ほら、行くぞ早く降りろ…」

こころ「ええ!」

想「ほら、ヘルメット被れ」

俺はそう言いながらこころにヘルメットを渡し、自分も被る。そうして2人でトライチエイサーに乗りエンジンを掛けた。

金属疲労を起こしかけているトライチエイサーは、割といいエンジン音を立てた。

こころ「何だか久しぶりね!」

想「ああ、そうだな。ほら!しっかり捕まってる!」

俺は笑顔でそう答えると、こころは腕を俺の体にまきつける。

そして、弦巻家から1つのバイクが、走り出していった

〳花咲川女子学園、校門〵

想「おはよう、紗夜」

紗夜「おはようございます」

想「もうツツコミすらしなくなっただな」

紗夜「はい…それが無いと貴方も大変でしょうし…」

想「ありがとう」

俺は紗夜に感謝しながら校門を通る。向こうでは美咲といつの間にか向こうへ行ったこころがわちゃわちゃとなにか話し合っている、

右では千聖と花音が、左ではポピパのみんなが話しあっていた。

想「2学期が始まったな…」

俺は微笑みながらそう呟いて、駐輪場へ向かった。

想「校長の話はどこの世界でも長いんだな…」

体育館で校長の話を聞く始業式ならではの光景、大体の生徒は寝かけているか友達と話しているかだ、俺は沙綾が前にいる、名簿が近いからだ

沙綾「確かに長いよね…」

沙綾もそう言う

想「終わったか…」

そうして次は生徒会長、風紀委員など様々な人達から話をされた

く放課後く

その日は4時間だったので、俺は帰宅しようとする。初日から部活はにぎやかで、俺はその中を歩く。

想（そういえば…未確認のやつらはどうしたんだ？）

そんなことを考えながら歩いていると、後ろから元気な声がかけられた。

イヴ「お久しぶりです!」

声の主は、イヴだった。道着を身にまとっているということは剣道部の途中なのだろうか…

想「どうした?イヴ」

俺は振り返り、イヴに声をかけた。

イヴ「実は…」

イヴの顔が一転して、気まずそうになる。

想「あいつが原因か？」

イヴ「…!?!」

俺はそう言うと、イヴの肩が跳ねた。俺はそれを見逃さず、体育館

へ向かう

想「どうせ狙いは俺だろ」

イヴ「はい、その通りです…でも…」

想「前みたいにはならないから安心しろ…」

そう言いながら頭を撫でてやると、心配が解けたのか、顔が元に戻る

イヴ「わかりました！」

く体育館く

想「さっきぶりの体育館だな…」

そう言いながら体育館に入る、バスケット部が活動しているのを見ながら1歩進む…

想「思わずの大歓迎に恐縮だな…」

右から飛んできた人影目掛け蹴りを放つ、竹刀が足に激突し、体育館に響く。バスケット部がみんなこちらを見る

小川「前より強くなってるね…！大体竹刀を蹴りで受け止めるとか人間…？」

そう言いながら距離を取る人物を目で見る

想「久しぶりだな」

俺は冷淡に言う。それに少し小川は驚いて…

小川「前よりマシンになってるんじゃない？」

と言い…

小川「手合わせしてみようよ」

と笑顔で告げた。相変わらず、底の知れない奴だ

想「ああ、全然いいが…前みたいにはならないからな…」

俺はそう言いながら竹刀を1つとる。イヴに「借りるぞ」と言うと、イヴは頷いた。それを了承の合図とみて、俺は構えた。

想「…」

小川「…」

周りの野次の声が遠ざかる。

周り「っ!?!」
イヴ「…!」

2人はまるでタイミングを知ってたかのように同時に踏み込んだ。
想「っ!」

小川「…!」
小川の右から迫る竹刀を左手に持ち替えたしないで受け止める。
足を踏ん張り何とか半歩下がるだけで済む。

小川「なっ!?!」

俺は一気に後ろに下がり、壁を両足で蹴り、一気に相手に近づく
想「…」

…

普通の人間なら出来ないことだ。

小川「っ!」

小川はギリギリのところまで横に逸れ俺の竹刀を避けた

小川「今の…人間じゃない動き方だね…!」

想「そりやどうも」

俺はそう言いながら踏み込み、右腕に竹刀を打ち込む

小川「っ!」

そのまま足をかけて相手をコケさせ、竹刀を首元に当てる。

想「勝負あったな、もういいだろ」

小川「…」

小川は無言で手から竹刀を離れた。それを負けを認めたとみて俺
は話し始めた

想「なぜ俺に絡む?前に言ったな…男の人が信用出来ない」と

小川「…」

想「なんでだ…」

その時、携帯が鳴った。俺は仕方なく取り出し電話に出る。
一条「八意!今どこだ!」

明らかに緊迫した声、俺は何事かと聞き返す

一条「41号だ！そいつが現れて次々とライダーを襲ってる！」
ライダー、バイク乗りか。最近よくバイクが倒れて放置されている
というニュースを見たがまさかこいつらのせいだったとは…

想「タイミングが悪いな…つたく！おいお前！後で話し聞かせろよ
！」

俺はそう言いながらトライチェイサー目掛けて走る。しばらくす
るとつき、俺はエンジンを吹かす

想「トライチェイサー…！頑張ってくれよ！」

それに答えるかのようにエンジンは高らかとなった。

イヴ「小川さんはどうして彼に関わるんですか？」

八意が居なくなつた体育館で、イヴは小川に問いかけていた。小川
はさつきとは打って変わって違う態度でイヴに話し始めた

イヴ「…!？」

その内容は酷かった。

父親を含めた半グレ共に自分は利用されていたこと

初めてできた友達を目の前で無惨に殺されてしまったこと

自分は逃げたこと

ただひたすら守れるだけの強さが欲しく竹刀を振り続けたこと…

小川「男なんかみんなクズなんだ…また出来た友達を失いたくは無
い…！」

イヴ「…小川さん…」

紗夜「小川さん…そんなことが…」

気づいて振り返ると、いつの間にか紗夜が立っていた

小川「紗夜先輩…」

小川は涙を流しそうになるのを堪えながら紗夜を見る。その目に
は、さつきのような余裕はなく、哀しさがあつた。

紗夜「彼は悪い人ではありません…」

紗夜は目を伏せ、言い始める

小川「なんでそういうことが言えるんですか…?」

怒りを含めた声で言う。

紗夜「彼は…彼もまた…大切な人を失っています…」

小川「!？」

紗夜「あの人はただひたすら、自分を攻め続けた。自分に守れるだけの力があれば…もっとあれば…私達はその話を聞いた時、どうしようもなかった…」

小川はそこで理解した、前に打ち合った時、あれだけキレたのか、溢れ出る殺意がでたのは

紗夜「今でも自分を攻め続けてる…この場所でも、暴力が嫌いでも、ずっと戦い続けてる、今までも…そしてこれから…」

小川「それは一体…どういうで？」

紗夜「彼は…クウガ…4号なんです」

小川「!？」

イヴ「サヨさん！それは秘密だって…」

そういうイヴを紗夜は見る、その目には、『信じて』と書いてあるような気がして、イヴは黙る。

小川「…」

イヴ・紗夜「!？」

小川が無言で立ち去り、そこにイヴと紗夜が残る。2人は、走り去る小川の背中がやけに小さく見えた

想「一条さん！」

赤のクウガに姿を変えて、目的地に走っていた俺は、途中で一条さんのパトカーと合流した。パトカーの横を八意は並走しながら会話する

一条「八意…！41号は犯行後、バイクに乗って移動しているらしい！赤いマフラーに黒のヘルメットをしているらしい！」

想「まさか…一条さん！」

一条「なんだ!？」

想「もしかしたら俺そいつ知ってるかもしれない!先走ります!」

一条「…わかった!場所は…」

俺は一条さんから言われた場所を目指すため、一気に加速して道路を走り出した。

くどある港のビルく

俺はトライチエイサーを走らせて目的の場所に到着する

??? 「うわあああ!」

想「!？」

俺はトライチエイサーから降りて声が出たはずの建物の屋上を見上げる。

想「…!」

その屋上に、化け物…未確認が1人たっていた。

??? 「…」

相手が右手をあげる、そして

親指を立ててサムズアップをした

想「!!」

とてつもない不快感が体を襲い、俺は走りながら青のクウガになり、屋上へ飛び立った

想「っ！」

屋上に着地し、俺は辺りを見回す。だがそこには誰もいない、さらに数歩奥に進み、さつき奴がいた階段を見るが…

想「いない…？」

俺は奥に進むと…柱に人影があった。項垂れている

想「っ！」

成人男性、人が倒れていた

想「大丈夫で…死んでる…」

体を触り、脈を確認するが…男性は死んでいた。俺がなんて言えばいいか分からない気持ちになっていると、下から車のブレーキ音が聞こえ、男性を寝かせ下を見る

想「一条さん！」

パトカーだ、そのパトカーから降りてきたのは先程別れた一条さんだった。

一条「そこにいるんだな！今行く！」

一条は、八意の場所に行くために建物に入ろうとした時だった。近くにあるエレベーターは貨物を運ぶための大きなエレベーターだった。それに入ろうとした時、そこにはバイクがあり、人が乗っていた。そのバイクはエンジンを吹かし、一条目掛けて走り出す

一条「ぐっ…！」

一条はそれを間一髪で避ける。バイクはそのまま走り出し、それを追いかける。

想「一条さん！大丈夫ですか！」

俺は青のクウガで一気に下まで降りて着地する。上で待っていた時、下から一条さんの声が聞こえたからだ

一条「大丈夫だ…！」

想「上で1人死亡ってました…早くあいつをとめないと…」

そう言いながらトライチエイサーに跨る。

想「先に行きます！」

一条さんが頷くのを見て、トライチエイサーのエンジンを吹かし、奴を追いかけるべく走り出す。

あいつはすぐ近くの道路にいた。それなりに人通りが多い。車も沢山通ってる中、俺と相手のふたりは熾烈なカーチエイスをしていった。

想「…！」

バダー「…！」

走る車の間を交互に走り抜ける。クラクションがなったりするがそんなに気を回せない、トライチエイサーじゃどうしてもやつに追いつけないのだ。

そのまま暫く走ると、相手が右に曲がりしばらくした所で停まった。目だけで周りを見れば、商店街の近くだった。

想「…！」

俺も右に曲がり、相手よりも先の場所に止まる。相手はエンジンを吹かし、前輪を上げて突っ込んできた

想「うお…！」

俺もバイクを回転させ前輪を上げ、相手に対抗するが…

想「ぐっ…！」

前輪同士がぶつかった瞬間、俺は体勢を崩され、バイクを倒しかける。なんとか踏みとどまり相手を見ると、そのまま奥へ行き、左に走り去った

想「待てっ…！」

俺は多少無理やりな体勢から起き上がり、バイクを走らせて追う。そのまま左へ曲がると…

想「…！」

相手が人間から化け物に変化し、俺を待っていた。バイクを吹かし、こちらを見ている。俺も、それに便乗して、バイクを吹かす。

バダー・想「…！」

俺たちはタイミングを同じに、互いに前輪を上げて激突すべく走り出す。

距離が縮まる。あともう少し…

想「っ！」

激突する瞬間、僅かに右にずれた俺の前輪目掛け相手が横から前輪をぶつける。

想「うわああ！」

スピードも相まって俺はバイクから振り落とされる。バイクも倒れて、その場に転がる。俺も青のクウガのまま少し遠くへ転がり、止まる。商店街に来てた人達が何事かとこちらを見る。

想「うっ…ぐっ…」

体を激痛が襲った。周りから悲鳴などが聞こえる。その中、1台のパトカーが走ってきて、俺の横で止まる。

想「一条さん…！」

一条「大丈夫か！」

ライフルを片手に駆けつけてきてくれた。一条さんは相手を見る、走りさろうと動いていたバイク目掛けライフルを構える。さすがに無理だろうと思っていたのだが…

想「嘘だろ…！」

思わず苦笑してしまう。一条さんの放った弾は見事相手のバイクにヒットした。バイクが急停止し、こちらを見る。

バダー「ウツ…」

バイクから流れる煙に目を擦る。その反応を、俺と一条さんは見た。相手はバイクを動かして、その場を走り去った。最後まで一条さんは狙いを定めていたが、やがて諦め、俺を起こし、続いてトライチェイサーを起こした

一条「だいぶきてるな…」

トライチェイサーの表面を触りながら一条さんが言う。

つぐみ「なんの音って…えええ！」

沙綾「つぐみ…？ってあ！」

はぐみ「あ！」

想「あ…」

人混みをかき分けて見に来たのは、商店街看板娘3人だった。俺はジェスチャーで静かにと伝えたと伝わったのか静かにしてくれた

一条「41号は手強いな…」

想「あの…一条さん？」

一条「ん？」

想「ひとまず…ここ離れましょうよ…」

周りには沢山の一般人が見ている、早く離れたかった

一条「そういうことか、とりあえず行こう」

俺はバイクに、一条さんはパトカーに乗りひとまずその場を離れた。

山吹ベーカー

沙綾「ゆつくり選んでね！」

想「おう！ありがとう！」

沙綾「さっきの…大丈夫？」

沙綾が周りの人に聴こえないように聞いてくる。心配してくれてるのだろう。

想「ああ、全然！」

俺は笑顔で答える。実際少し右半身が痛むが直ぐに治るだろうと思っている

想「にしても久しぶりに来たな…！」

俺は話を逸らす為に、話題をパンに向ける。

沙綾「この時間帯ってあまりないんだよね…」

沙綾が苦笑いしながら言う。

想「いやいや、全部美味そうだし、てか美味しいから！」

沙綾「あははっ！ありがとう！」

想「将来沙綾が結婚したりしたらあれだろうな、毎日美味しいパンが食えるし…旦那さんも幸せだな！」

沙綾「結婚…!？」

沙綾が「結婚…」と呟いて下を向いている。その顔は真っ赤で俺は

不思議に思った。

想「沙綾…？おい」

沙綾「あつ…えっと！ゆっくり選んでね!!」

そう言うときさっさと店の奥へ帰っていった。

想「俺…なんか悪いこと言ったか…？」

夕方

想「…」

俺はバイクに乗り走りながら帰路を辿る。あの後、沙綾は出てこなかった。会計時に沙綾の母親から「沙綾をよろしくね」と笑顔で言われたことに対してずっと考えていた。その時、スマホが鳴る。

想「紗夜から？珍しいな」

俺は電話に出る。

紗夜『もしもし？』

想「おう、俺だが？」

その声は少し、緊張しているような感じがした

想「なにかあったのか？」

紗夜「実は…小川さんが…」

想「またあいつか…」

紗夜「今日の夜、花咲川女子学園の体育館で待ってるって…」

想「あいつが？珍しいな…」

紗夜「いつもとは違って…」

想「わかった…一応行ってみる…あ！」

紗夜「なんですか？」

想「校則違反とか言わないんだな…」

紗夜「ほんとなら言いたいです…」

想「うん…ごめん…」

紗夜「あともう1つ、小川さんの過去について話しておきます」

俺は紗夜からそう言われ、電話越しに頷く

想「あいつにそんな過去が…」

紗夜「はい…だから男の人を憎んでるんじゃないかって」

想「そうか…わかったありがとう」

そう言い電話を切る。俺は近くの公園で少し早めの晩飯を食べる。

山吹ベーカーリーのパンは美味しい。

想「腹が減っては戦ができぬ…」

そういえば…自分が制服姿と言うのを忘れていた。まあいいかと思いつつ残ったパンを一気に食べる。

夕方・花咲川女子学園体育館

小川「…」

生徒がいなくなった体育館、先生もいない、いわゆる不法侵入というやつだ、その体育館の真ん中に、小川は無言で座っていた

友達『ほら！一緒に遊ぼう！』

友達『暗い顔しない！』

友達『逃げ…て！』

小川「っ！」

今でも思い出すと腸が煮えくり返る気持ちになる。それを誤魔化すために竹刀を振る。その傍らには木刀が置いてあった。

花咲川女子学園夜

想「よいしょ…」

時刻は夜の八時、もう外は真っ暗だ。その中俺はトライチェイサーを門前に止めて、門を飛び越え歩く。夜の学校といえば心霊現象が有名だなど思いつつ体育館へ向かう、扉は既に空いており、中に入ると想「紗夜…イヴ？なんで2人が」

小川「意外と早かったね…」

想「…!どうゆう事だ…なんで2人がいる…?」

小川「ボクも知らないよ…その2人は観客だとも思っておけばいいんじゃない?」

紗夜「もしもの時、2人だけじゃ止められないでしょう?」

イヴ「その通りです!」

紗夜は腕を組み、イヴはふんすつと立っていたその中、もう1人の声がした

日菜「おねーちゃん!」

紗夜「日菜!?!いつの間に!?!」

想「…。」

俺は視線を戻し、小川と目を合わせる

想「…!」

目を合わせた瞬間、足が後ずさりそうになった。覇気がえげつない、周りの空気が肌に当たる度に痛いのだ。

小川「君がクウガだつて…?」

想「なんでそれを…」

小川「紗夜先輩から聞いたよ」

想「そうか…」

それだけ言うと、相手は木刀を構える

小川「君が負けたら二度と先輩達に近寄らないでくれる?男はみんなクズだから」

紗夜「それはさすがに言い過ぎでは…」

覇気がさらに濃くなる。それに紗夜やイヴ、日菜までもが押し黙る。刀から紫のオーラのようなものが見える。

小川「使いなよ、クウガの力を…」

想「使わない」

小川「弱いとも言うのか、使う必要すらないと!?!」

想「お前は強い、だが俺の力はアイツらと戦う為にある。」

小川「そうやって善人みたいに…」

想「…」

俺はクウガと同じ構えをする。それに小川は少し驚いて、また無表情になる。

小川「っ！」

想「うおおお！」

夜の花咲川女子学園に、2人の声が響き渡った。

想「くおっ…！」

木刀が頬を掠め、そこからうつすらと血が流れる。そこに追撃でみぞおちに木刀が入る。

想「ぐほっ！」

口から血を流しながら後ろに転がる。俺が転がった場所には血が着いていた。

小川「守ってばかりじゃ何も出来ないよ…！」

相手の蹴りを胸部に受け、壁に背中から激突する。

想「…っ！」

身体の骨が何本か砕ける感触を味わう。とてつもない量の血を口から吐き出す。

想「お前…人間かよ…！」

小川「昔からクソみたいに殺しの技術は教わってきた…クソジジイがボクに殺しをさせるためにね…！」

想「それは…！」

小川「1回家出したことがあるんだ…あまりに嫌すぎて…その時に当時ボクの友達が人質に取られた…戻ってこい、さもなければ殺すと…！」

小川が木刀を握りしめた。

小川「戻ったさ…でも殺したんだ…目の前で…その日から思った。男はみんな善人ぶったクソ野郎どもだっ！」

そうして放った一撃は俺の頭に当たった。俺の頭から血が流れ、顔を染める。

小川「今の…よけたよね？」

想「ああ…よけたな…！」

小川「よける必要もないってこと…？」

想「いや…下を見る」

小川「…?」

八意に言われた通りに下を見ると…そこには2匹の虫が歩いてた。家族なのだろう

想「今俺が避けたらこいつらが死んでた。笑顔を守りたいって言ってる俺が虫殺しちやったらあれだろ?ゴキブリは…投げ飛ばしたか…」

小川「…」

小川は思った、こいつ本当に心の底からバカだと、何一つ欲がない。人の…どんなけ小さな生き物の為にも死ぬかもしれない一撃を受け、守った。心の底から、こいつは良い奴だと…

小川（いや…虫を守っただけだ…男はクズなんだ…!）

小川は一瞬芽生えた人を信じようと思う気持ちを捨てる。自分にそんなものはいらないと…

想「お前はどうかんだ?」

小川「…?」

想「俺は笑顔を守る為戦ってる。でもお前はどうかだ?」

小川「それは…」

その時、小川の額を凄まじい衝撃が襲った。ふらついて床に尻もちを着く。

紗夜・日菜・イヴ「!?!」

小川「…っ!?!」

八意が頭突きをしたのだ。

想「この弱虫が!なんのために強くなろうと思ってるんだ!?!未確認を倒すためか!違うだろう!」

小川「違う!そんなことのために強くなろうとした訳じゃない!」

そこで初めて、俺は本当の小川を知るのだ。紗夜も、日菜も、イヴもしらない本当の小川が

小川「ボクは…私は…!友達の仇をとりたいたんだ!あいつらに自分は強いんだって!昔とは違うって!」

子供みたいに泣きじやくりながら言う小川の本当の気持ち。

小川「だけど…どこかでは怖かった…!産んでくれた人達を殺し

ちやつたらつて思うと…！どうしようもなくして…！私は臆病者だよ！本当は…本当は…どうしようもない臆病者なんだ…」

「とめどなく溢れ出す涙、小川自身、人前で泣くのは久しぶりなのだ。

想「…」

小川「!?!」

俺は小川の頭を撫でながら言う。

想「よく言えた…でも臆病者なんかじゃない、ここにいるみんなはそう思ってるさ、泣いたからダサイとか…考えたらダメだ。一応お前だつて年頃の女だ、こんなこと辞めて普通に女の子しろよ。きつと友達もそう願ってる…」

小川「…」

俺は、こんな女の子に今までこんな道を歩ませた奴に怒りが湧いてくる。

想「だからもう辞めさせろ…隠れてないで出てこい」

想以外「!?!」

俺は体を反対に向ける。入口の方から誰かが入ってくる。大袈裟に手を叩きながら、だがその体に纏うオーラは俺の肌に鳥肌が立つくらいだった

??? 「流星はクウガだ…」

想 「なんでそれを…」

俺は小川達より前に出ながら相手を見すえる。左側は黒く、右側は赤色、オツドアイなのだろうか…

??? 「君なら検討がつかだろうか？」

想 「チツ…」

十中八九、クソ親父のせいだろう。

??? 「確かに…ボクはそこにいる出来損ないの父…」

想 「出来損ないだと…?」

怒りで拳が震える。きつく握りしめたせいか血が流れる

??? 「名前は…太郎にとでも名乗って…」

その時、俺の後ろにいる、小川の肩を組んだ日菜が

日菜「案外モブみたい！」

と言った。

紗夜「こら日菜…！」

???「…。」

想「…。」

痛いほどの沈黙が流れる。だが俺はその言葉のお陰でリラックス出来た。

???「ボクの名前は櫛…小川櫛だ」

想「櫛…」

案外女っぽいなと思いつつながら前を見る。後ろにいる紗夜が小声で

紗夜「気をつけてください…櫛と言う名前は、毒を持つ植物でもあります…」

と丁寧に忠告してくれた。それに俺はサムズアップで答える

櫛「そいつの言う通りさ、ボクは毒武器を主に使う…この毒はとても効果が強いんだ…ちなみに使い方は…」

そう言いながら見せてきたのは注射器の様なものだ。

櫛「例えばこんな風に…！」

そう言いながら針を発射した。狙いは俺ではなく後ろにいた紗夜だった

想「紗夜…！」

紗夜「きや…!?!」

俺は咄嗟に背中を受け止めた。背中から毒が回る

想「っ!?!」

刺された瞬間、俺は寒気を感じた。足に力が入らなくなり膝を着く
想「ゲボツ！オエ！」

次の瞬間、口から大量の血と吐瀉物を吐き散らかす。さっきの小川との戦いで体力を消耗してるせいか回復が遅い。毒の分解も重なってアマダムが追いつけていない…

小川「八意!!」

イヴ「想さん!!」

想「うあ…あ…」

呂律が回らなくなる。櫛はまた大袈裟に手を叩きながら言う。

櫛「流石のクウガもこの毒は無理でしょ〜！だってこの毒はボツリ
又ス菌がつくる毒素などの細菌毒素だもの！」

日菜「!？」

小川「なんだよそれ……！」

紗夜「今の地球で最強の毒……人が死に至る量はおよそ0.0000
6 mgといわれてるんです……！500グラムあれば全人類を殺せ
るって……！」

小川「そんなデタラメな毒……！」

その間にもどんどん八意は死へと近づく。体は動かせず息も浅く
なっていく。

日菜「死んじやダメだよ!!想くん！」

イヴ「ダメです！死んじや!!」

小川「……」

小川は床に落ちてる木刀を無言で拾い上げる。櫛はその反応に片
眉を寄せる。

櫛「逆らうのか？」

小川「許さない……私の友達を……！」

紗夜・日菜・イヴ「!？」

彼女は今、確かに八意の事を友達と言っただろうか？

???'「確かに許せないな……」

その時だった。櫛の持つてる注射器が破壊された。誰かが拳銃片
手に走ってくる。いつの間にか周りを警官が囲んでいた

イヴ「一条さん！」

一条「君達……よく耐えた、後は警察の仕事だ……八意！」

後ろでは大人しくなった櫛が警察に手錠をかけられ運ばれていた。
意外と呆気ない最後だった……だが問題はそこじゃなく

一条「しつかりしろ！救急車が来るまで持ちこたえろ……！」

八意「……い……よう……ん」

一条「頑張れ……！」

小川「こんなところで死ぬようなやつじゃないだろ……！」

紗夜「想さん！」

ダメだ…俺…やばいかもしんない…クソ…

だが俺の意志とは反対に、体は死へと着々と進んでいる。

— と思われていた

黒服「失礼します…！」

一条「うわっ…いつの間…！」

黒服「運べ！一刻を争うぞ！」

弦巻家の医者何人係で俺を持ち上げ運ぶ。それを紗夜達はぽかんと見ていたが、慌てて後を追う。

紗夜「え…ちよ…」

誰もいなくなった体育館には血と吐瀉物とあちこつちに破壊の後があつたが、それらはきちんと黒服が処理と回収をした。

想「ん…」

目を開く。シャンデリアだ…

想「知ってる天井だ…」

そう呟いて起きようとするが、身体に力が入らなく諦めてそのままの体勢でいておく。俺は結局生きていたのだ。

黒服「お目覚めになられましたか？」

想「あっ…！」

黒服さんに言おうとした時、黒服さんが静かに。という合図をす

る。どうゆうことだろうと思っっている俺の横に来て、ベッドを上げる。

想「お前ら…」

俺が横を見ると、日菜、イヴ、紗夜、小川、そして何故かこころが椅子に座ってたりして寝ていた。

黒服「皆様心配してくれていましたよ？」

なるほどなと思いつ計を見る。時刻は朝の五時、一応今日も学校なのだが…

想「今日…学校休むか…あ、黒服さん？」

黒服「どうしましたか？」

想「6時半くらいになったら起こしてあげてください…俺はもう1

回…寝ます…」

そう言っ俺は意識を手放した

想「…つて…?」

寝すぎたせいかわらか気持ち悪い頭を起こす。もう動けるようになったんだなと思いつながら辺りを見回すと、誰もいなかった。

想「よかった…ちゃんと学校行ったか…」

そう言いながらベッドから起きて用意してある服に着替える。黒服さん準備よすぎるだろ…

想「…」

肩を伸ばしながら俺は思った。

今、楽しく過ごせてるなど、これ程充実した日々を送るのは久しぶりだなと…これも全てアイツらのお陰で今の俺がある…

だからこそ、守らなければならない。俺にはその使命がある。戦うことしかできないから、それ以外は不器用な俺だから、だからせめて…この世界の人達の笑顔と夢を守る為に戦う。

想「最初は戦うだなんて思いもしなかったな…」

最初は感じた人を殴る気持ち悪い感触、あれは今でも慣れない、剣も弓も槍も、普通なら持たないよな…

でも今はこの力があって良かったとさえ思う。そんな思いにふけていると…

黒服「八意様?」

黒服の存在に気づかなかった。

想「ごちそうさまでした…」

俺は黒服から出された料理を食べていっぱいになった腹を擦りながら黒服さんと話をする

黒服「41号についてですが…」

想「…!」

41号…俺と数回バイクで戦いあったライバル的存在。名前はたしかバダーとかいっていた

想（前にもバダーみたいな名前がいたような…）

俺が青のクウガを使いこなそうとした時…えつと…

想「あ！」

俺はがたとんと席を立ち上がりながら叫ぶ。それに対し黒服がやや変な目でこちらを見てきた

黒服「…？」

想「すみません何でもありません…」

俺は恥ずかしさで顔を赤くしながら倒れ込むように座った。そして思い出した名前は、バズーだ。俺を落とそうと…いや落とされたわ。覚えてる。ほうき振り回したら武器になったやつだ

黒服「あの…八意様？」

また考えにふけこむ俺を、黒服さんが現実に戻してくれる。「ほえ？」とだいぶ間拔けな声をだした気がするが私は知らない（鋼の意思）

黒服「電話ですよ？」

八意「あ、ああ電話ね…一条さん？」

大体一条さんから電話が来る時は未確認絡み。今回も未確認絡みだと思ひ電話に出る

一条『え？ああ出た』

八意「はい？」

一条『体は大丈夫なのか？』

八意「大丈夫…ですけど？」

一条『大丈夫ならいいんだが…実は頼みがある…』

八意「分かりました未確認絡みですね今から行きます」

一条『え？あ…ああ！頼む！場所は花咲川海岸線近くだ！』

眠たいのだろうか一条さんは、いつもより言葉にキレがないそう思いなながら電話を切り、トライチエイサーまで走る。

黒服「ご武運を」

想「ありがとうございます」

俺はそう言うのとヘルメットを被り、弦巻家から走り出す。

〈同時刻、花咲川女子学園〉

紗夜「…」

時刻は昼休み、風紀委員の仕事をいつも通りこなそうとしている紗夜だが、燐子でもわかるくらいにいつもとは様子が違うかった。

紗夜（どうしてさつきから彼の顔がチラつくのかしら…）

大怪我をして弦巻家に運ばれて、そして朝起きた時には彼はまだ寝ていて…

紗夜（大丈夫ですよね…彼ならきつと戻ってきます…）

燐子「あの…紗夜さん？」

紗夜「白金さん…！」

燐子「さつきから…ブーツとしてますけど…何かあったんですか？」

紗夜「いえ…特に…」

燐子「もしかして…彼絡み…だったり？」

紗夜「…！」

凶星をつかれた紗夜が固まる。その反応を見て燐子は「やっぱり」と言った。

燐子「あの人を心配するのは…私も一緒です…なんとなくですけど…目を離すとふらつとどこかへ消えちゃいそうで…」

紗夜も、それには激しく同意した。危ういのだ、確かに命のやり取りをしている。人であり人あらざる者である怪物達と戦って、毎回ロボロになりながらも心が暖かくなる笑顔を向けてくれて…

紗夜は1つ、なにか気になることがあった

紗夜（私達は…彼になにかしてあげれるのでしょうか…？）

私達はいつも守ってもらえてる、最近はその当たり前とさえ思いかけているのでは無いか…？

紗夜「白金さん…」

燐子「はい…」

紗夜は、燐子に話すのであった。

く花咲川海岸線沿いくPM1:10く
想「どこだ…？」

俺はトライチェイサーを走らせながら辺りを見回す、この作業をさつきから何回もやっているのだが一向に見つからない。もう既に逃げたのだろうか…、そう諦めそうになった矢先だった。

想「…！」

俺はバイクのシルエットを見た瞬間に、急ブレーキをかける。

——赤いマフラー、黒いヘルメット、そして黒いバイク、

それだけであいつと断定するのは容易だった。

想「まで…！」

だんだん離れていく距離を縮めるために、俺はバイクを走らせ追いかける

想「変身！」

俺は赤のクウガに姿を変える。トライチェイサーのカラーリングを変え、速度をさらに上げて奴に近づく。

バダー「…！」

1度後ろを見た相手は、化け物に姿を変えた。バイクに肘のパーツを差し込み、バイクも姿を変える。

想「…！」

バイクの横に並び、道路を右に左に曲がりながら並走する。途中、車と数台ぶつかりかけたのだ、だが俺と相手はバイクテクニクで全て躲す。

しばらくすると、俺より前を走っていた相手は何を思ったか突然オフロードバイクが走りそうな場所へ入っていった。ゴツゴツした岩が大量にある

想「近くに海あるし…！」

俺は多少怖かったが相手を追い、その中に入った。

想「…！」

相手の横に並走するが、先にある道を狭く、俺はうしろにまわる。相手が曲がった道を少し大回りになりながら相手のよこに並ぶ。

想・バダー「…！」

そして岩場を思いつき同じタイミングで飛び上がる。互いに車

体のバランスを均等にしながら地面にタイヤをつける。バウンドしながらも着地した俺目掛け相手が上げた前輪を横に倒し攻撃しようとするが……

想「つらあ！」

前輪を強引に上げて岩場に引つ掛け思いつきり相手の前輪に叩きつけると……互いに火花が散る。相手は体制を崩し、何とかふみとどまる形になった。俺はその間に少し距離をとる。

想「……っ！」

バダー「……！」

俺は後ろに車体を向けると、既に相手が前輪をあげながらこちらに迫ってきていた。俺も前輪を上げながらすれ違いざまに激突する。互いの前輪から火花を散らし、互いに体制を崩す。体制を建て直した2人はまた並走しながら岩場をとびこえる。

想「……！」

俺の方が地面が高かったので、相手と同じ高さに降りる。そのまま後ろに振り返った相手の車体に、俺の前輪を乗せるが……

バダー「っ！」

想「くっ……！」

相手はそれを器用に払い除ける。タイヤを地面に着いた俺が相手の方を見ると、相手は前輪を上げて、俺自身に攻撃しようとしてきた

想「うお……！」

体を後ろに反らせて避ける。そして互いに逆に走り距離をとる。

想・バダー「……！」

互いに前輪を上げながら前を向く。

海の波音に重ねて、2つのエンジン音が鳴り響く。

想「……！」

バダー「……！」

2人はバイクを上げ、宙に飛ぶ。両方のバイクが激突し、2人ともバイクから落ちる。互いはそのまま地面に体をうちつけ呻く

バダー「グッ……！」

想「うあっ…!?!」

バイクが地面に落ちる。ガシャーンという音と共に、

バダー「…っ!」

想「おい…!」

バダーは慌ててバイクにまたがる。その跨ったバイクは俺のトライチェイサーだった。バイクならなんでもいいと言うのか…

俺も立ち上がり構える。相手はまるで楽しむかのようにエンジンを吹かす。そして、前輪を上げながら俺に襲いかかる。

想「ふっ…!」

痛む身体を引きずり何とか横に避ける。相手はこちら側に向き、またエンジンを吹かす。そしてもう一撃与えようと前輪を上げながら走り出した時だった。

想「っ!?!」

相手の乗るトライチェイサーから火花が散る。

バダー「!?!」

途端にトライチェイサーは動かなくなった、火花の散った場所には、煙がたなびいている。

バダー「…」

しばらく跨がっていたバダーだったが、しばらくするとそれを持ち捨てて自分のバイクに跨る。そして人の姿になり、走る去る際、俺に一言言った

バダー「お前を殺すのは最後だ…」

そう言つてヘルメットを被り、走り去る。

想「…」

さざ波が聞こえる岩場に、俺とトライチェイサーが残った。

想「…」

トライチェイサーを持ち上げて立たせる、エンジンを掛けてみるが何も起こらない。

想「…っ」

何故か両目に涙が滲む。ただの鉄の機械だと知ってても、涙が止まらない。その涙は、悔し涙でもあった。たまらなく悔しかった。

初めてこいつに乗った時は、ハチャメチャだった。それからメビ
才を倒したり、色々な人を運んだり、ゴウラムと合体させたり、色々
なところで壊れてたな……

想「お疲れ様……ありがとう……」

俺は車体を撫でながら言う。金属ボディが、まるで反応したかのよ
うに光った。

く想の自宅くPM6:30く

想「:はあ:」

あその後、一条さんに家に送ってもらった。俺のわがままで帰ってもらったトライチエイサーは、今は弦巻家のガレージに眠っている。修理も不可能らしい。そして家に帰ってずっと溜息をついている

想「腹:減ったな:」

とりあえずコンビニに行こうと思い、立ち上がるが:

想「歩きか:めんどくさいな:」

自分でも情けなくなってきた。それほどあのバイクに依存していたのだろう。誰か料理を作ってはくれまいか:

想「:。」

そう思い、玄関を見ると——インターホンがなった

想「いや:まさか:そんな奇跡が:??」

半場信じながら扉を開けると:

リサ「やつほー☆」

両手に袋を抱えたりサ:いや女神がいた。

想「女神がいる:」

俺は立ちながら思ったことを言う。

リサ「えっ:!?会って早々女神は照れるなく／＼」

そう言いながら袋を俺に渡し、中に入っていく。俺:何も言っていないんだけどな:、俺はそう思いながら扉を閉めた

リサ「いや:冷蔵庫も冷凍庫も空っぽだね:ちゃんと生活してる?」

想「会って早々失礼だな:ちゃんと生きてるぞ」

リサ「むにゃ〜!」

リサの頬をぐにーんと引つ張ると可愛らしい奇声を出す。それに俺は苦笑する。怒ったりリサが頬を膨らませながら言う

リサ「そんなことする人にはご飯作りません！」

想「すいませんでした」

俺は土下座する。そんな俺にリサは「嘘だけどね☆」と言いながら冷蔵庫などに食材を詰めていく、

想「俺も手伝うよ」

リサ「ほんと？」

それから色々なことを頼まれながら食材などを詰め込んだ。一瞬にしてパンパンになった冷蔵庫と冷凍庫。それらを眺めながら俺は財布を取りだし、リサに2万円を渡す

リサ「何この大金!？」

想「お礼だよお礼、年頃の女の子がわざわざ俺のために沢山買ってきてくれたんだ…これぐらいカッコつけさせろ、あと俺あんま金使うことないしな…」

リサ「寂しい人…？」

想「失礼だな？」

リサ「いやでも…」

想「はい！俺の金だし使い方は自由！よってリサに渡す！以上！」

リサ「ぬぐぐ…」

そう言いながら受け取る。

リサ「でも…ありがとう！」

ちゃんとお礼を言う辺り賢い子だなあ…凜も確か誕生日プレゼントとかは喜んで何回もお礼言ってくれてたっけな…

リサ「…？」

リサに不思議そうな目で見つめられる。

想「どうした？なんかついてるか？」

リサ「なんか遠い目してたな…って、ま、いいか！」

鼻歌を歌いながらキッチンで料理を始めるリサ。相変わらずの手際の良さに俺は「ほえ…」と眺めておくことしか出来なかった

リサ「よし！完成！」

想「おおく…！」

時刻は7時半、色々しながら料理を完成させたりサ。それを2人で囲んで食べる。

想「なんか夫婦みたいだな」

飲み込んだ俺がそんなことを言うとりサが「えっ!?!」といい突然顔を赤くする。

想「…ん?」

リサ「確かに…夫婦みたいだね…あはは」

それから先は、食べ終わるまで何も話さなかった

く想の自宅くPM8:30く

リサ「それで友希那がねく…」

楽しそうに話すリサから視線を外し、スマホを見る。あつ…なんか結構遅い時間だ…

想「そろそろ帰らなくてもいいのか?」

リサ「え…?あ!ほんとだ!もうこんな時間!」

スマホを開いたりサがやらかしたというふうに出す。今まで何をしてたかって?

学校での話とかRoseliaの話、リサのちよつとした愚痴を聞いていたんだ

リサ「想くんく!バイクで送って…?」

想「ごめんな…」

リサ「…?」

想「今日戦った時に壊れたんだ…」

リサ「…!」

突然悲しそうな顔をする彼。アタシはやったらダメなことをした気がした

リサ「ごめんね…?なんか…」

想「大丈夫だよ、俺が歩いて送るよ」

サムズアップをする彼の姿には、どこかもの寂しさがあった。

リサ「ひい…寒い…」

想「意外と冷えるな…ほら、リサ」
2人して背中を丸めてリサの家へ歩く。

リサ「うん、そうだね…」

想「明日も学校だし…風邪引きたくないな…」

リサ「体育祭も近いしね〜！しかも今年は合同！」

想「あ、そうだったか…」

あの日菜がやっちゃったやつ…つぐみの振り回される姿が目に見えかぶ…リサも同じことを考えていたのだろうか、目があいお互い苦笑する

リサ「なんてったって羽丘vs花咲川！張り切って挑まないとな〜！」

想「へえ〜…ん？」

ちよつとまで今なんて？花咲川vs羽丘？

リサ「ん…？どうかした？」

想「あ、いいや…何でも…」

リサ「今年は花咲川に男子が1人いるからねー！打倒男子！で燃えてるよ！」

想「骨が折れそうだな」

俺は肩をすくめる。大方日菜の仕業だろう。あいつまた会ったらとつちめてやる…

想「羽丘に負けないように頑張るさ、リサも頑張れよ！」

なんやかんや話し合っていると、時間もあつという間に過ぎ去る。

もうリサ宅前まで来た。

リサ「今日はありがと！」

想「おう、俺も楽しかった。またな」

最後にリサの頭に手を置く。そして丁寧に撫でる。しばらくして俺はリサから離れる

想「あまえたかよ…」

俺が見えなくなるまで手を振り続けるリサに手を振り返して、俺は帰路を辿る。

想「♪」

イヤホンを耳にさしながら鼻歌を歌う。周りも人が少ないので多
少なら大丈夫だ。だからそろそろ出てきて欲しい

想「そこにいるやつ、隠れてないで出てこい」

俺はイヤホンを外しながら後ろをむく。さすがに観念したのか、人
物は物陰からでてきた

モカ「さすがはクウガですな」

想「あくえつと…モカか」

モカ「美少女モカちゃんです」

笑顔で手を振りながら近づいてくる。こういう奴は何考えてるか
分からないから苦手だ

想「まず色々聞きたいんだが…」

モカ「バイト帰りにたまたま見かけたので後ろをつけてみました
」

想「別に普通に話しかけて見りやいいだろ…」

モカ「ふふふ…」

ダメだ…やっぱ何考えてんのかわかんない…俺はモカを振り切る
うとした時、右の方で悲鳴が聞こえた。

モカ・想「!?!」

俺は悲鳴のした方へ走る。その後ろをモカが着いてきた。

ピラン「…!」

俺は人に襲いかかろうとした化け物に飛び蹴りを食らわせて吹っ
飛ばす

想「大丈夫ですか!モカ、この人を頼む!」

モカ「りようかい!」

俺は自分と対峙するやつの顔を見て、驚いた

想「お前は…!?!」

ピラン「…」

俺は前に、こいつと戦った。一条さん達と初めて手を組んだ時だ。
なのに何故今ここにいる?確かにあの時、俺の前で爆発して死んだは

ずだ

想「変身！」

俺は疑問だらけのまま赤のクウガに姿を変えた。後ろでモカが「おおく…」と声を出す。

想「っ！」

こちらに走ってきた相手を殴り、蹴りを入れる。

想「…、」

俺はそこで違和感を覚えた。知性が感じられない…

ビラン「…！」

俺は相手のヒレを受け止め顔を殴る。十分な距離を取り、キックの構えをする。

想「おりやああああ！」

俺は気合いとともにキックを放つ。相手はさらに吹き飛び倒れる。

想「…。」

相手に紋章が現れて次第に体に広がり…

想「…！」

解けるようにビランの見た目が剥がれていき…

——中から人が、出てきた

想「人…!？」

俺はそこに倒れる人に駆け寄り声をかける。

社会人「…う…」

死んではいなかった。ではあのビランは…

モカ「コピーみたいなく？」

想「コピー…」

いつの間にか後ろにいたモカが口を開く。コピー…いや複製…？どっちにしろ許されることでは無い。それは死んで行ったあいつらをバカにするということだ

想「…！」

俺は耐え難い怒りに拳を握りしめた。

モカ「…。」

モカは拳をにぎりしめる想を見る。最初のイメージとは違ってとても優しくていい人だった。これはつぐみに叩かれても仕方がない。そう思ったのだ

想「…」

俺は社会人を寝かせ周りを見る。先程からヒリヒリと感じるドロドロとした覇気。忘れはしない。あいつの覇気だ、つまりやった本人は…

父「俺だよ、便利だろ？」

想「…！」

俺はいつの間にか前にいた父を見る。モカを庇うように立ち、構えをとる。

モカ「…！」

俺の背中に触れたモカの手は、かすかに震えていた。雰囲気から分かるのだろう。

父「なんだよ…別に戦いにきたわけじゃねえよ…俺の新しい力で挨拶をしに来ただけだ…」

想「なんだと…？」

父「このアマダム？だったがなんか複製するってさ、じゃあまたなあ！」

想「まで…！」

飛んでどこかへ行こうとするアイツを追うために青になり飛ばうとするが…

モカ「行かないでっ…！」

後ろから出された悲痛な声に足が止まる。後ろを見れば、モカが泣きそうになっていた。珍しいというかおかしい。そう思っているとアマダムが声をかけた

アマダム「ダメだ…この女…あいつから出てる覇気に飲まれてる…」

想「立ってるだけで迷惑だなアイツはよ…！」

アマダム「なんて言ってる暇あるか！はよ大人しくさせてやれ！最悪精神崩壊だ！」

想「まじかよ…！」

俺は変身を解除してモカを抱き寄せる。

モカ「…あ」

想「大丈夫だ…！モカ…！俺がいるから！」

俺が必死にあやすこと3分…

モカ「…：zzz」

想「寝ちやつたよ…この人…！」

とりあえずどうしようか、こんな街中にずっといると怪しまれる。かといって俺の家に…

想「ただの不審者だな…！」

とは言っても俺はモカを知らない。モカを知ってる人…いた、つぐみや蘭だ。今は夜の九時半、めちやくちや迷惑なのは分かってるが…か八かで蘭に電話をかける

想「頼む…出してくれ…！」

蘭「もしもし…？どちら様？」

想「俺だ、八意想」

蘭「なんで電話番号知ってるの？」

想「色々あつてだな…それよりモカが倒れた。今俺の背中にいる」
蘭から冷ややかな声が飛んでくる

蘭「…：警察よんでいい？」

想「すいませんそれはマジ勘弁です…！」

じゃなくて…俺はまじな話してるんだが…

蘭「今どこにいるの…？」

想「信じてくれるのか？」

蘭「だって…：嘘つくように見えないし…！」

想「蘭…！」

蘭「なに…？」

想「良い奴だな…ありがとう…！」

蘭「んなつ…!?!?…場所を早く教えてよ！」

突然焦り出す蘭。なんなのだろうか？

想「今から移動しようとしてる、公園で会おう！」

蘭「分かった…」

そう言うとそのくさと電話を切られた。俺はとりあえずモカをおんぶして歩き始める。

く公園くPM9:45く

想「着いた……」

寒さ+重くはないがそれなりに背中に来る重みで心身共に疲労していた俺は、何とか公園についた。モカは相変わらず寝てるらしい

蘭「いた……」

向こうから歩いてくる人が1人、赤メツシユをした蘭が来た。

想「蘭…きてくれてありがとう」

蘭「別に…行くよ」

と言うなり歩き出す蘭に着いて行く。この時間帯は周りも暗く、家からはまだ声が聞こえる。

蘭「……」

想「……」

その道を無言で歩く。話そうにもあまり話したことがないのでお互いどうすればいいのか分からない。

蘭「ふふっ……」

俺を見つめた蘭が突然笑い出す。

想「なんだよ……」

蘭「なんかお父さんみたいだねって……」

想「褒められてるととっておきな、ありがとう」

蘭「……」

想「……」

また無言が始まる。コミュ障2人組だところなる

想「afterglow…だったか？最近調子はどうか？」

蘭「いつも通り、元気だよ」

想「そうか、俺最近バイト休みつぱなしだしなあ…辞めさせられない辺りまりなさん本当に優しい人だよ…」

蘭「まりなさんも八意がどんな事やってるか知ってるからだと思うよ」

そうか、初っ端に知られてたか…

想「次行く時ちゃんとお礼を持っていこ…」

蘭「そういうとこ、八意らしいよね」

想「あはは、そうか？」

蘭「うん、あ、着いたよ」

想「ここがモカの家か、立派だなあ…」

蘭「すいません、寝ちゃったモカを連れてきました」

インターホンを押して、蘭が対応する。しばらくすると母が出てきた

モカ母「あら！蘭ちゃん…と？」

俺を見た母は一瞬凍る。しばらくしてから発せられたのは

モカ母「モカの…彼氏さん？」

蘭「ちがうよ…」

モカ母「ああ…！蘭ちゃんの彼氏さん！」

想「とりあえず何でも彼氏にするのやめませんか!？」

俺がつっこむと小さな笑いが起きる。

モカ母「貴方のことは、モカから聞かされています。あの時、モカを救っていただいてありがとうございます」

想「いえ…当たり前前のごとをただけです」

モカ母「あら、礼儀正しい子ね…モカを任せられそうだわ…!」

想「…?」

任せられる？なんだ？、俺は何を任せられるのだろうかと考える。
よこで蘭が少し固まっていた

モカ母「ふふつ…冗談ですよ。モカを運んでくださり、ありがとうございます
ございます」

そう言いながらモカを俺から母へと渡す。母の背中におんぶされ

たモカは、相変わらずやすやすと寝ている。いったいどれだけ寝れば気が済むのだろうか、いやモカなら永遠と寝てそうだが…

想「それでは」

蘭「じゃあまた」

俺と蘭の2人は、帰るために歩き出した。その後、モカ母の様々なエピソードを聞かされたのだ

蘭「あたし、こっちだから、じゃあまた」

想「ん、じゃあな」

そう言つて俺と蘭は別れた。

くモカ宅く

モカ「暖かったな〜」

モカは布団でゴロゴロしながら枕に顔を埋める。

モカ「…／＼」

いつも未確認と戦つて、みんなには優しく、笑顔でいる彼の背中には、暖かった。全身を…そして心まで、温めてくれるような感覚に…

モカ「これは惚れちやいますな〜／＼」

モカはつぐみが好きなのを分かっているながら…

それでも、初めて人を好きになった。

想「だあく……！」

俺は自分でも理解しがたい奇声で起き上がった。外で鳥が鳴いている

想「朝だ……」

朝だ、それは分かる。続いて、時計を見る

想「8：20分だ……」

ん……？HRが8：30……

想「大遅刻じゃねえええかああああ!!」

朝のマンションに、1人の絶叫が響き渡った。

く花咲川女子学園く昼休みく生徒会室く

紗夜「……で、遅刻したと？」

想「はい……反省してます……」

俺は今、めちやくちやくわあい顔をしてる紗夜に説教を食らっている、何故か生徒会室で、後ろではポピパの5人と燐子がなにやら話しながら食べているのに

香澄「ありさの卵焼きちよーだい！」

有咲「やめろお！がつつくなあ!!」

燐子「ふふっ……賑やかですね……」

紗夜「はあ……いつものバイクはどうしたんですか？」

想「前戦った時に壊れました……」

それに紗夜が驚いた顔をする

紗夜「今まで様々な戦いがあつてだいが無理な使い方をしていたからでしょうか……？」

想「多分そうなんです、こかしたり倒されたりしたしなあ……」

紗夜「修復は？」

想「不可能ですよ」

紗夜「…」

想「でも大丈夫！」

俺は笑顔でサムズアップをする。最近、癖になってるのだ。

紗夜「そうですか…じゃあ私は白金さん達とお昼ご飯を、想さんは？」

想「おれはちよつと、せつかなのに、すみません」

紗夜「わかりました」

そう言い俺は出ていこうとする。ドアに手をかけた時、紗夜が俺の名前を呼んだ

紗夜「想さん、無理…しないでくださいね…？」

想「うん、ありがとう」

俺はそう言い、生徒会室を出て行った。

りみ「いまの八意くん…元気ないね…」

香澄「確かに！いつもみたいいきらきらしてない！」

有咲「わかりにくいっつーの、まあ確かにいつもとは違うな」

たえ「おっちゃん見せたら元気になるかな？」

沙綾「それはおたえが笑顔になると思う…」

沙綾は内心、誰よりも心配していた。

く放課後・中庭く

メビオ（花音）「…」

千聖「花音…！」

千聖は、突然目の前で化け物に変わってしまった花音を見て、名前を呼ぶしか出来なかった。

想「おりゃあ！」

そこに、赤のクウガになっている八意が、メビオの顔に一撃を与え怯ませる

想「千聖！大丈夫か!？」

千聖「私は…それより！その化け物は花音よ！」

想「なにっ…!?!」

俺は飛んできたメビオの腕を掴み、その場で踏みとどまる。千聖から聞いた通りなら目の前にいる敵は花音だ。その能力を使う野郎は俺は知っている。複製を使って花音を化け物に変える。

想「どうすれば…!?!」

俺にとっても花音は友達だ。出来る限り痛く無く人に戻してやりたい

想「超変身…!」

後ろにバク転して攻撃を躲しながら青のクウガに姿を変えた。回避ならこれがもってこいなのだ

メビオ（花音）「…!」

想「っ!」

前より攻撃スピードが上がっている。俺はそれを肌で感じながら構える。

メビオ（花音）「っ…!」

想「ふっ…!」

花音から放たれたストレート2発を両手でいなしていく。そして後ろに飛んで回る

メビオ（花音）「…!!」

想「花音…!戻ってこい!」

俺は後ろから肩を掴んで抑え込む。離せと言わんばかりに抵抗するが離さない。

美咲「千聖さん…!」

千聖「奥沢さん…!?!」

美咲「あれが花音さんなんですか…!?!」

八意に後ろから取り押さえられながら呻く化け物、いや花音。美咲も千聖も信じられないとしか言いようがなかった。ただ彼を、見守ることしか…

想「…っ!」

メビオ（花音）「…!!」

突然そこで、花音が俺を払い除け、呻く。まるで近づくなとも言

うふうに。俺はそこに可能性にかける

想「花音！もどつてこい！花音っ！」

メビオ（花音）「はやく…！私を…！」

想「…！」

メビオ（花音）「大丈夫…！ちよつと痛いくらい…我慢するよ！」

そう言つて花音は親指を立ててサムズアップをする。俺がよくやる仕草だ。

想「花音…」

千聖・美咲「花音…（さん）…」

俺は木の棒を拾い上げ、蒼きロッドへと変える。そのまま距離を取り、ロッドをリンと、鳴らして突き技を放つ。

メビオ（花音）「…っあ!？」

想「…」

変身を解除した俺は花音を見る。花音に現れた紋章は広がり、やがて解けていく。

花音「…」

想「おつと…、大丈夫か？」

花音「うん…ありがとう」

倒れかけた花音を支える。花音の顔はどこかしんどそうだった。

想「ごめんな…俺がちゃんとしてやってれば…」

これ以上、アイツを野放しには出来ない。その時だった。慌ただしく誰かが走ってくる

想「一条さん!？」

一条「あつ…いた…はあ…はあ…とりあえず来い！話は後で説明する…！」

想「えっ…あつ…ちよ…千聖！花音を頼む!!」

千聖「はいはい…頑張つてね…」

想「ごめん最後の方聞こえなかつた…」

俺は最後まで言わせて貰えず、車に乗る羽目になった。

〈車内〉

想「また未確認ですか？」

多分現場に向かつてるであろう一条さんに言う

一条「ああ、またあのバイク野郎だよ…」

ようやく落ち着きを取り戻した一条さんが俺に言う。さつきはやべえ奴だったよな…

想「またですか…」

俺は静かにそう言うことしか出来なかった。

〈現場〉

現場について2人とも車から降りる

一条「杉田さん…!」

杉田「おお!来たか一条!」

周りには白バイやらイカつい黒いバイクが置いてあった。真ん中には、被害にあつたのか女子高生2人が警察官に囲まれてなにやら聞かれていた

桜井「杉田さん…すみません、あと1歩のところまで…」

杉田「桜井…大丈夫だ!人は守れた、それは誇りにおもっていいんだ」

桜井「やつは多分…まだ近くにいますはずです」

そんな中俺は、2人の女子に話しかけた

想「あれ…?その制服羽丘の…」

???「その制服は…花咲川女子学園の…もしかして貴方が…」

メガネをかけ、おどおどとした子を庇うように、金髪のいかにもヤンキーっぽいやつが俺に話しかけてくる

???「えっ…こいつ大丈夫なのか?あそこ女子校だろ?」

???「大丈夫ですよますきさん、あこさん達から聞いてますから…」

想「あこが…?」

ますき「そうか…?なら安心だな…?」

ますきといわれてる奴はまだ俺を疑ってるらしい。ま、女子校に通

う男子なんていないからなあ…

想「ものは相談だ…バイク…貸してくれないか？」

ますき「え…？いやだよ…」

想「頼む…！アイツを追わなければ行けないんだ…信じてくれ…」

俺は頭を下げる。その態度に、もう1人の女の子が

六花「信じてあげましょうよ！ますきさん！」

と明るいい顔を作り、ますきという人物に言う

ますき「六花…」

ますきはため息をつく。そしてポケットから鍵を出し

ますき「ほらよ」

想「おつと…」

俺に投げ渡す。俺はそれを受け取り、礼を言う。

想「ありがとう」

一条「八意…行くのか？」

隣に来た一条に頷く。一条は無言で頷き返し、俺に拳銃を渡した。

一条「…」

想「…」

俺は何も言わずそれを受け取る。そうしてバイクに跨り…

ますき「なあ！ちよつといいか？」

俺に近づいてきた2人のうち、ますきが声をかけてくる

想「…？」

ますき「名前、教えてくれ！」

想「俺は八意想。そこら辺の高校生だ」

ますき「八意か…、お前変なやつだな！」

ニコツと笑いながら言う。きつと悪意は無いのだろう

想「…ふっ…」

俺は笑いそうになったがヘルメットを被り顔を隠す。そしてその

まま走り去る。

六花「あこちゃんの言ってた事…本当なんですかね…？」

ますき「なんだ？なんのことだ？」

六花「あの人…ニユースでよくやってる4号さん…たしか…クウガ

「…ですっけ？」

ますき「え？そうなのか？」

その近くに2人の警官が走ってくる。

桜井「一条さん！」

杉田「一条…いま行つた子が…」

桜井「まさか…」

一条「はい…あの子が」

ますきや六花も含め、八意が走り出した方を見ていた。悪い方ではない。皆、彼を信じているのだから…

想「変身！」

俺は赤のクウガになりながら考えた。

ますきから借りたバイクはそれなりに改造されているのだろうか、意外と早い速度で走る。トライチエイサーよりかは大きいバイクで、近くの道路を走る。

想「…！」

黒いヘルメットに黒いオフロードバイクを見つけ、一気に加速して近づいていく。まだ奴は近くにいた。

バダー「…ふっ…」

バダーは後ろから迫り来る人物を見て、鼻で笑う。凝りもせず来たものだ。だがバダーはあえて相手をする。今は気分がいいからだ

想「っ！」

奴は人から化け物に変化した。バイクも、化け物のようになってしまったバイクへ変わる。

想「…！」

俺は、ようやく隣に追いつく。だが…

想「なっ!?!」

一気に速度を上げたバダーが俺の前をいき、ぐんぐん距離が開いていく。

想「…!」

俺のバイクはこれ以上加速できないのかアクセルを回しても速度が上がらない。そうしてる間にも距離は広がっていく、

想「どうすれば…!」

焦燥に駆られる俺の懐に、感覚があり、俺はそれを無意識に取り出す。取り出して見たものは、一条さんから借りた拳銃だった。

想「そうか…!」

俺は片手運転に切り替える。最近習得できたのだ

想「超変身!」

緑のクウガに姿を変え、そこに金の力を使う。

緑の金のクウガに姿を変えて、俺は相手のバイク目掛けて拳銃から変えたボウガンを放つ。

一撃目、二撃目と放つが一向に当たらない。相手はそのまま速度を上げていき、姿が見えなくなった。俺はバイクを止めて赤のクウガに姿を変える。

想「速い…」

確かにあのバイクを舐めていた訳では無い。トライチエイサーでも追いつけず…このバイクでも追いつけない。拳銃の果てには小回りも効いていて当たらない。それに弾を当てた一条さんは人間なのだろうか？

想「すいません…逃がしました…」

一条「そうか…」

現場へ帰り、一条さんにあつたことを話す。バイクはちゃんと、ますきに返しておいた。今頃2人は帰ってるだろう。

想「あの人からバイク借りたのに…負けたし…」

俺はそう言いながら一条さんに拳銃を返す。

想「これ、ありがとうございます」

一条「ああ、役に立てたか？」

想「あゝ…まあ？」

一条「そうか…？」

想「じゃ、じゃあ俺帰ります！」

一条「気をつけろよ！」

そう言いながら走る。

想（今日は朝から忙しかったな…）

そんなことを思いながら、家に帰るのであった

先生「体育大会まであと1週間だ！練習に励むように！」

生徒「はいーい！」

想「うーい…」

先生「目指すは優勝だー！」

生徒「おーー！」

想「おー…」

相変わらず元気なクラスだ。こころも沙綾もりみもすごい元気よく返事をしている。その中俺は、あまりその雰囲気馴染めずいた。

～昼休み～生徒会室～

想「ふわあ～…」

香澄「ありしゃ～！」

燐子「…」

紗夜「…」

想「なあ…紗夜？燐子？」

燐子「ど、どうしましたか？」

紗夜「どうしたのですか？」

想「いやいや、どうにもこうにも…お前ら今日1言も喋ってないだろ？今も近くにいて、なのお互い避けあってる感じがしてな…俺の勘違いなら聞かなかったことにしてくれ」

燐子・紗夜「…」

2人は黙り込む。やはりこの反応、何かあるな

想「Roseliaで何があった」

俺は声を低くしながら2人に問いかける。この2人が話さないのはなにか訳があるはずだ…

紗夜「貴方には…関係ないことです。これはRoseliaの問題ですから」

想「やつぱり…Roseliaで何かあったんだな…？」

燐子「…！」

燐子は立ち上がり、生徒会室を後にする。普段ならありえないその行動に、俺を含めたみんなは驚いた

紗夜「…」

想「おい…何があつたんだ…答えてくれ」

紗夜「…」

想「だんまりか？」

紗夜「…わかりました…話します…」

紗夜は語り始めた

そして紗夜から伝えられたことを聞いた俺は、事の重大さに気づく。そして…

想「バカかお前ら…?」

紗夜「な…!?!」

Roseliaが分裂、それはちよつと…だいぶやばい。けどその理由が?

想「1回ライブして上手くいかなかったから友希那がすげー厳しくなつてあこが耐えられずにどっかいつて燐子もどっかいつて、んでリサも紗夜も友希那と喧嘩して分裂?」

リサと紗夜以外分裂してるじゃないか…、しかも友希那逃げちやつてるじゃん…はあ…

想「今日circleこい、分かつたな?他の奴らも呼べ。来ない奴は俺が凸つてまでも連れていく。そう伝えろ」

俺はぶつきらぼうに言い放ち、その場を立ち去つた。

想「俺が出来る限りRoseliaを繋ぎ戻す…、それでも無理ならそれまでだ…」

紗夜「…!」

生徒会室の扉を閉める直前、俺はそう言い放つた。Roseliaは俺の命の恩人でもある。恩人に借りを返す時が来たかもしれない。

〈放課後〉circle〈

circleに來たRoseliaの全員は、とりあえず皆來たのだが誰も何も話さない。目も合わそうとはしない。その空気は重く、俺の肩にのしかかる。

リサ「ねえ：なんでみんなを集めたの？ 想くん…」

口を開いたのはリサだった。

想「Roselia分解を阻止するためかなあ…」

俺は髪を掻きながら言う。それにあこが「なんで？」と言う

あこ「だって：想兄には関係ないじゃん」

想「関係なくてもな、目の前で何かが潰れそうになつてるのを見捨てるほど俺も薄情じゃないから」

友希那「…もういいかしら？」

想「いい：とでもいうと思うか？」

友希那「関係の無いことでしょうか？」

想「このまま仲間を放つたらかしにして逃げる気か？」

俺は鼻で笑いながら言葉を続ける

想「Roseliaのリーダーがそんなのでいいのかよ」

友希那「…！」

俺は驚く友希那の目を見る。

想「確かに技術も必要だよ、FWF：？だったか？ あんな厳しく場所に行くなんて今のRoseliaには無理だと思う。」

Roseliaの5人の刺さるような視線を受けながら俺は続ける

想「だけどバンドは一人でやるものじゃない、仲間がいるからこそ成り立つ。それがバンドだよ…、だから友希那、まずはメンバー全員を理解しなくちゃダメなんだ…」

友希那「さつきから綺麗事ばっかじゃない！」

俺の頬を乾いた音が炸裂する。俺は友希那にしばかれたのだ。

想「いい加減にしろ!!!」

R o s e l i a 「!?!」

俺は叫ぶ。頬の痛みなど知ったことか

想「綺麗事だらけかもしれない…だけど仲間がいないとどうにもできねえだろ!!ドラムもキーボードもギターもベースも一人でできる訳じゃねえんだよ!」

友希那「…!」

俺は友希那の肩を持ちながら言う

想「逃げるな、お前が言わなければどうしようも出来ない R o s e l i a のことを考えてやれ…」

俺はそう言つて部屋を後にする。後のことは、アイツらがやるだろう。そう願いを込めて

まりな「どう…?上手くいった?」

想「後はあいつらに任せます。まりなさんも部屋ひとつ貸してくれてありがとうございます」

まりな「よし!その代わりじゃんじゃん働いてもらおうぞ!!」
想「うつす…」

バダーは死体を目の前にして自身の腕輪のものを数えた
バダー「98人…後はクウガ、お前だけだ」

ヘルメットを被り、バイクに乗りバダーはどこかへ行く。町は、少し月がではじめ、暗くなり始めていた

く花咲川女子学園く朝休みく

想「うへえく…」

俺は机に項垂れる。その隣に座った沙綾が心配そうな顔で

沙綾「朝から大丈夫？昨日circleでずっとバイトしてたでしよ…？」

という。やばい、天使がいる。

昨日、あの後は掃除からごみ捨て、機材運びにその他雑用を夜までやった。色んな関節が痛い、確かにしんどかったがそれよりも気になるのが…

想（アイツら…上手くやったかな…）

沙綾「…？」

沙綾が俺の顔を覗き込む。

沙綾「大丈夫…？無理しない方がいいよ？」

想「いーや！俺は大丈夫だ！沙綾、ありがとな」

きつとアイツらなら上手くやった。アイツらは、Roseliaはあんな所で終わるようなバンドじゃない。俺はそのままチャイムがなるまで椅子に座っていた。

く花咲川女子学園く昼休みく

スピーカー「八意くん、至急職員室まできてください」

想「んあ？」

放送で、俺が呼び出しされた、何もやらかしてはいないし至って普通に通っていたのだが、と思いつつ職員室へ向かう。途中、千聖と花音とすれ違い

千聖「なにかやらかしたの？」

花音「よくわかんないけど…がんばってね…！」

と謎に応援された。はてはてと思いつつ職員室の扉を開けると

…

杉田「おお……！来てくれたか！」

先生「……」

想「え……？」

前に、一条さんと一緒にいた警官、髪が薄くてでも正義感は強かった。忘れがたい人だった

想「確か……杉田さん？」

杉田さんはキョトンとしてから笑い出す。そして真剣な顔になると

杉田「話は一条から聞いている、君にも着いてきてもらいたい。」

と言った。話は一条さんから聞いていて……俺に用がある。未確認関連だろう。俺は頷き同意する。だが、後ろにいる先生たちの視線は少し冷ややかだった

↳車内↳

杉田「いま、桜井達がガス弾を使って41号を誘導させてる。上手くいくといいんだが……」

車を発信させてしばらく、杉田さんが口を開いた。

想「誘導……ですか？そんなことできるんですね！」

杉田「ああ、これも君や一条のおかげだ！」

↳作戦予定地↳

桜井「ここで待機だ！あともう少しすれば奴はここを通るはずだ」

桜井は、ガス弾の入ったライフルを片手に指示を飛ばしていた。その周りでは、様々な警官がライフルを持ち射撃体勢に入っている。しばらくして、桜井も指示を終え、射撃体勢に入る。

そして……その時はやってきた

桜井達「……！」

向こうからアクセルを吹かしながら近づいてくるバイクが1台あった。最初は点だったが、凄まじい速度でこちらに迫る。

桜井「ギリギリまで引きつけろ……」

あともう少し……

桜井「撃て！」

桜井が最速で弾を撃つ。それに続き、様々な場所から銃声が鳴り響く。弾は奴には効かない。だが本当の目的は…

バダー「…!?!」

バダーは自身に放たれた弾を無視しようとしたが、その弾は体内で炸裂し、煙を出す。

そう…バダーが嫌いな煙だ。バダーは堪らずバイクを止めて右に曲がる。それを警官は誰一人追わなかった。だって…

作戦通りだからだ

その後も誘導は着実に上手く成功していった。妨害されまくっているバダーは、自身にふつつつと湧き上がる怒りを感じ始めていた

桜井『作戦は順調です！ガス弾の中にひとつ、マーキング弾を体に打ち込んだお陰でやつ現在の地も特定できます！』

無線からそう伝えられ、横にいた杉田さんが「よし！」と声を出す。その中俺は、少し焦っていた

想（皆がここまで頑張ってくれたんだ…！俺も早く役に立たないと…）

シートベルを握りしめる力が強くなる。

想「…?」

その時だった。不意に、ミラーにバイクが1台映りこんだ

想「杉田さん止めてください！」

杉田「なにっ…!?!」

杉田さんは急ブレーキを掛けて車を停めた。俺は扉を開け後ろを見る。やや遅れて、杉田さんも扉を開けて立ち上がった

杉田「あれは…」

そこにやって来るのは1台のバイク。

その上に黒いスーツにヘルメットを被った人物は、俺たちの目の前でバイクを止めて、降りる。ヘルメットを外してこちらを見たのは、一条さんだった。

想「一条さん…」

つまりこのバイクは、ビートチェイサーだ。完成したのを一条さんが持ってきてくれたんだ。

想「でもなんで一条さんが？ビートチェイサー計画は俺と黒服さんしか…」

黒服『協力者のおかげで…』

その時だった、前に黒服さんと話した内容が頭にうかぶ。協力者は…一条さんだったのだ。

一条さんはバイクのボタンを押すと、バイクはカラーを変えた。トライチェイサーとは違う色だ

一条「頼む…八意、」

想「はい、頑張ります」

俺はバイクの横に立つと、ベルトを出す。

想「変身！」

杉田「おお…」

俺は赤のクウガへ姿を変え、バイクに跨る。そして一条さんたちの方へ向き、

想「…」

サムズアップをした。一条さん達はそれに無言で頷く。

俺は、奴を追うために走り出した。

マーキング弾の信号を車に乗っている時にある程度記憶しておいた。この付近は家もない一本道。見つかるのにも時間はかからなかった。

バダー「来たな…最後の一人だ…！」

バダーはもはや、最後の標的クウガを目の前にして気分が高揚していた。だが前とは違う、ビートチェイサーはあつという間にバダーのバギブソンへ並んだ。

バダー「…！」

アクセルを更に回しバダーは加速する。そして前輪を上げ、トライチェイサーに攻撃した時と同じく、ビートチェイサーの後ろに攻撃しようとする

想「…！」

俺はハンドルを右にまわしよける。相手はうしろについて、2度、3度と同じことをするが全て躲す。

想「同じことが通用するとおもうなよ…！」

横に並んだバダーから、後輪を上げた攻撃を避けた俺はそう言った。ビートチェイサーは機動力が高い。トライチェイサーとは比にならないくらい、そして速い。

想「…！」

俺はアクセルを更に回し、加速する。後ろのバダーがどんどん遠ざかる。

バダー「…!?!」

前まで自分の方が速かったのに、なぜ今は追い越されてるのだろう。どれだけ速度をあげようと一向に追いつく気配がしない。

バダーは怒りのままにアクセルを回した。

想「…！」

しばらく走り、ここら辺でいいだろうと言うところでバイクを止める。だが速度が速すぎて止まれない、これだけ速ければ、何かすぐ止まる策があるのだろうかと一条さんと黒服さんに期待をよせ、とりあえ

ず適当にボタンを押してみる。

想「流石は…」

3回ボタンを押すと、バイクのアクセル付近から小さなパラシュートが展開された。それを上手く使いながらバイクを止める。ある程度速度を抑えられたらパラシュートは勝手に切り離された。

想「…。」

俺はバイクなら降りて相手が来る方を見て立ち上がる。ほんの数秒後、相手が視界に映る。そのままこちらへ近づくと

想「…！」

俺は目で辺りを見まわし、金の力を発動させる。赤のクウガの鎧に金の装飾が施され、右足に金のアンクレットがつく。相手はその間にも、その距離を縮めていく、やがてバイクの走行音が耳に入ってくる

バダー「…！」

バダーは、自身に課されたルールさえ忘れ、クウガを、最後の一人を轢き殺すべくアクセルを回す。

想「ふっ…！」

俺は腰を落とし、両手を広げる

相手とのタイミングを測り、走り出す。右足が熱くなり、1歩を踏みしめる度に右足に炎と雷が走る。

想「おりゃあああああ！」

最大の声とともに回転を加えたキックを相手の胸部に叩きつける。

バダー「グア…！」

相手はバイクから落とされ後ろに転がる。

想「ぐお…！」

俺も、バランスを崩しその場に倒れる。後ろでバダーのバイクが転倒する音がした。

バダーと俺は同時に起き上がる。バダーが1歩、2歩と詰め寄り

だが3歩目は無かった。

バダー「グッ…ウウア！」

バダーの胸部に紋章が現れる。それはやがて相手のベルトに到達し…

巨大な爆発を起こした。

だが被害は無く、俺と警官達の本格的な連携がなされた作品だった。

一条「八意！」

杉田さんとともに車でやってきた一条さんは、俺を見ると、笑顔になった。

想「やりました」

俺はサムズアップをしながら変身を解除する。夕日が俺たちを、照らしていた

想「うへえ…」

俺はビートチェイサーを止めて、辺りを見回す。まだ入場前なのにこの父母や叔父叔母の多さ、しかも何故か俺は目立っている。まあ…確かに男だし…?

紗夜「おはようございます、バイク新しくなったんですね」
いつも通りの紗夜が俺に声をかける。

想「おはよう、今日体育祭だな」

紗夜「ええ、間違ってもクウガの力は使わないように」

想「使わねえし使いたくねえ!」

俺は大声でツッコミを入れる。それに紗夜はなぜか嬉しそうに笑みを浮かべた。

紗夜「と、とりあえず教室に向かいなさい…!」

なぜか顔を赤くした紗夜に押され、俺は教室へ向かった。

紗綾「おはよう〜!」

想「おはよう紗綾」

こころ「おはよう!想!」

想「ぐへえ!」

後ろから抱きつかれ吹き飛ぶ俺、大体これの原因は分かる、

想「こころ…?何してんだ?」

机と柔らかい物に押しつぶされそうになっている俺は、こころに話しかける。幸いこころはすぐ離れてくれた。

こころ「今日は体育祭よ!」

想「知ってるよ…」

こころ「とつても楽しみね!!」

想「元気だな…」

いつも以上にテンションが高いこころ。「頑張るわよ〜!」とめちやくちや張り切っている。それにりみが言う

りみ「こころちゃん…やっぱすごいなあ…」

想「どうしてだ？」

りみ「あんなに元気なんだもん…私は朝から緊張でお腹が痛くて…
チヨココロネも2個しか食べれなかった」

沙綾「あははく…」

これには沙綾も苦笑い。俺は

想（2個？チヨココロネを？多くない？）

と瞬きするのであった。

校長「本日は、体育祭日和の快晴であり…」

校長が壇の上に立ち、その他の先生が挨拶をするという体育祭なら
ではの光景、その間俺たち学生は体育座り、まあまあキツイのである。
生徒会の人達が競技リストを持ってくる。羽丘からは日菜とつぐ
みが、花咲川から燐子と有咲だ。その4人が競技を読み上げていく。

1種目目

玉投げ

想「本当にやるのか…？こんな小学生の運動会みたいな競技…」

俺たち花咲川女子学園は赤のハチマキを頭に巻いている。俺はハ
チマキを巻いて待機している中、そんな声を漏らす。

向こうチームを一瞥すると、日菜とリサとあこがいた。その他15
人程度、薫と麻弥は違う種目らしい。日菜と目が合う

想「んな…!？」

日菜にドヤ顔された。腹立つなあのだ天才美少女…

だがしかし、俺にも頼りにできる仲間が…

りみ、花音、有咲…その他15人程度

想「……………」

俺の困惑はほってかれ試合が始まった

日菜「やった〜！かったー！るんるんっ！」

想「ぜえ…はあ…うぷっ…」

試合にはぼろ負けした。ダメだ、強すぎる、俺は飛びながら片っ端から玉を入れていったが、あとの奴らが中々入らず、10以上の差を残して負けた。しかも相手の運動神経がよすぎる。これは運が悪かった。

巴「幸先がいいな！」

彩「ドンマイだよ！」

と励まされ、違う競技へとうつる

羽丘女子学園 1

花咲川女子学園 0

教頭「さあ1点を追う花咲川女子学園、羽丘女子学園はこのままリードを繋げれるのか！」

日菜「次は…障害物競走!!」

想「オヴェ！」

次は、障害物競走になった。

羽丘女子学園

蘭

友希那

つぐみ

六花

花咲川女子学園

彩

香澄

千聖

美咲

という編成と化した。

想「頑張れ〜！」

花音「千聖ちゃん…！美咲ちゃん…！みんな頑張れ…！」
こころ「頑張れ〜！」

隣子「走るコースは…これになります…」

まずはでこぼこの道。

次はネットの下をくぐり抜ける

最後は小さなお化け屋敷を通る

全員「?!?!」

想（まさか……黒服がなにか手回したか？）

日菜「試合つゝスタート!!」

出場者全員「…。」

試合は終わった。だがだれもが、ある意味死んだ。

想「おい…？大丈夫か？」

美咲「ああ…はい…大丈夫ですよ花音さん」

目が虚ろだ、もはや俺とすら認識できてない。一体あのお化け屋敷に何があったのか…それは俺達を確認する前に全て撤去された…誰も、中で起きたことを教えてくれなかった。

羽丘女子学園 1 花咲川女子学園 1

一応美咲がやってくれた。めちやくちやふらついていたが…

紗夜「次の競技は、パン食い競走です」

モカ「…！」

ひまり「モカがすごいやる気だ…」

アマダム「!?…お理想」

想「どうした…?」

アマダムが緊張した声を出す。

アマダム「あの女…何もんだ? 覇気が凄まじき戦士並だ…」

想「ああ…モカか、あいつはパンすきだしなあ…でもパン好きならこちらにも切り札がある」

りみ「グルル…」

沙綾「…りみ?」

りみが4本足でたっている。その目に映るのは、吊るされている
チヨココロネだった。

想「あく…うん…」

俺はもう考えるのを諦め、りみに任せた。

生徒「い、位置について…」

モカ「…」

りみ「ウウ…」

生徒「よーいどんっ!」

モカ「はあく!」

りみ「ウガア〜!」

体育祭に勇ましい2人の叫び声が響いた。

想「あ…は…?…」

俺達は目の前で行われているバトル(?)にただただ見ていること
しか出来なかった。目で追えないほどのスピードで繰り出される攻
防

想(ん…?パン食い競走ってなんだっけ?)

俺は首を傾げていると、どちらかがゴールテープを切った。だがそ

の姿は見えない、砂が舞っていて見えないからだ。

想「あ…」

ギリギリでモカが勝った

羽丘女子学園 2

花咲川女子学園

1

想「やべえよ…やべえよ…!」

俺も最初はあまり興味が無かったが、始まってしまえばスイッチが入る。俺は多少なりとも焦っていた

つぐみ「次は…二人三脚です!」

想「出たよ…てか俺オワタじゃね?」

俺以外女子だもん、確実に女子だね、

想（せめて知ってる人がいい…!）

はぐみ「私だよ!」

想「はぐみが?」

どうやらくじ引きをしたらしい、はぐみは運動が得意だからまだやれるだろう。

はぐみ「頑張ろうね!」

想「おお…?」

俺ははぐみと並ぶ。足が紐で固定された。息を合わせないとすぐに転ぶ。他に選手は俺たちを入れて4グループ。

「位置について!」

「スタート!」

はぐみ「おっつ!」

想「マジかよっ!?意外と足はええなはぐみ!」

グループ1「なんだありや…」

グループ2「速い…」

グループ3「…」

最初こそ俺はつまづき掛けたが、なんとかはぐみのペースに合わせていく。はぐみも微調整をしてくれて、コーナを曲がる時だった。

はぐみ「きやつ!」

想「はぐみっ!」

はぐみがつまづき、転ける。俺も一緒にこけてしまう。

グループ3「…ニヤニヤ」

グループ3が俺の横を通り過ぎる際、俺は嫌という程女子の恐ろしさを知った。慌ててはぐみが転けた場所を見ると、どこか土が膨らんでいるように見えた。

想「はぐみ…!立てるか?」

はぐみ「うん…大丈夫…いたっ…」

想「変なコケ方したせいで足がやられたか…?」

はぐみ「ごめんね…はぐみのせいで…」

そういうはぐみの顔は、悔しさのせいで目じりに何だか浮かんでいた。その顔を見た俺は、あることを決意する。

想「よし、はぐみお姫様抱っこな。」

はぐみ「え…?」

困惑するはぐみを抱き抱える。はぐみは軽く、十分に走れそうだが周りの女子達が困惑している。不正だという声も上がっている。

だが俺は、紗夜を目で探し、目が合う

想「…」

紗夜「…?」

想「アマダム…あれ使えるか?」

アマダム「思念通話か?」

想「頼む」

俺は頼み込む、ただしその能力はアマダムから伸びた第二の戦闘神経網が全身に侵食し、装着者をグロンギ同様の戦闘兵器へと作り変える、非人道的なシステムによって発生している。その1つが思念通話だ。

想『紗夜：聞こえるか？』

紗夜「：!？」

辺りを見回すが八意は見当たらない。今紗夜は自分の身に何が起こっているのか、分からない

紗夜『想さん：？』

とりあえず頭の中に思い浮かべると：

想『よかった：聞こえてたか、手短に話す』

紗夜「：？」

想『グループ3は、不正をやってる。俺とはぐみが走ったコーナー辺りを見てくれ、不自然な突起があるはずだ』

そう言い終わると俺は思いっきり地面を蹴って走り出す。右足が何故か熱いが：まあいいだろう。

グループ3「んなっ!？」

想「不正しやがってこの野郎共が!」

隣に追いついた俺は困惑する奴らに目掛けて叫ぶ。そしてそのまま：

司会「えつと：いまのは：八意&北沢チームの勝利です!」

想「どうつてもんよ：!」

その後、結局花咲川女子学園が負けた。だがしかし、みな今日のことを忘れないだろう。だって：

想「おわああああ!？」

こころ「すごいわ：!」

リサ「あちやく：大丈夫？」

みんなが1人残らず、笑顔になれたんだから：

ジャラジ「次は僕の番だ…」

そう言いながら片手で爪を噛み、もう片方の手でゲームの殺害人数と、日数を書いていく。ゴ集団になってからは追加ルールと言うものも増え、一層困難を強いられる。だがしかしこいつらは辞めない

ダグバに：ザギバスゲルに進むために

ジャラジが設定したルールはこうだった。

12日の間に90人を殺す。そして追加されたルールは

花咲川女子学園、羽丘女子学園の生徒だけを狙うと…

～花咲川女子学園～放課後～

生徒1「ね～！今日のあれやばかった…」

生徒2「確かに！でも凄かったよね！」

2人の生徒が並んで帰る。いつも通りの日常、他愛もない会話をし
て…だがその日は違った。

不意に後ろで、フィンガースナップの音がした。

ジャラジ「…」

生徒1・生徒2「きゃあ!?!」

2人の頭に何かが打ち込まれ。2人とも気を失う。だが気絶する
前、声がした

「4日後に死ぬ」

そして…その四日後、花咲川女子学園と羽丘女子学園の2つの高校

で、24人が死んだ。脳内出血による虚血性脳梗塞というものでだ。遺族の言う通りなら、みな最期は苦しんで死んだと…だれも…何も出来なかったと

く花咲川女子学園く昼休みく

想「…」

俺は屋上で寝転んでいた。昨日先生から聞かされた同級生や先輩、後輩の突然の死。

一条さんが、一応被害者の方々に生前話を聞いたそうだ。みなが口を揃えてこういった

「4日後に死ぬって…いやだ…死にたくない…」

だがレントゲンにも、MRIにも、何らかの原因があるはずなのに何も無かった、外的要因はなかったのだろうか

殺害された中にはリサやひまりが仲良くしていた友達がいたらしい。今日は葬式に行くと言っていた

想「未確認…」

俺は眩きながら立ちとうとすると

紗夜「そんなところで、何をしてるんですか？」

想「なんで分かんだよ…」

紗夜「いないと思っ生きてみれば…起きてください、制服が汚れますよ…」

想「へいへい、分かりましたよつと…」

そう言いながら起き上がる。紗夜が呆れたように俺の背中を払う

想「ありがとな」

紗夜「いえ、別に…それより」

想「ん？」

紗夜「昨日に花女と羽丘で亡くなった人達…24人…いくらなんでも不自然すぎませんか？」

紗夜が深刻な顔をして俺に言う

想「俺も思ってる」

狙われた女子生徒に共通点があるのかと言えば全く持つてなかった。無差別もいい所だ。

想（一条さんに頼んで暫くはどっちの高校も休みにしてもらおうしかないのかな…）

俺がそう考えていると、紗夜が覗いてきた

紗夜「またなにか考えてますか？」

想「いや、それにしても…」

その時、チャイムが鳴った。それと同時に、フィンガースナップの音もした

想「…？」

俺はその音が気になり屋上から下を見る。運動場から帰る生徒が見える

想「気のせいかな…？」

俺も先に行った紗夜を追いかけようと扉を開け…

紗夜「きゃあああ！」

想「…っ紗夜!?!」

今確かに紗夜の声があった。俺は嫌な予感を肌で感じ階段をかけ下りる。その間に赤のクウガへ姿を変えた

く花咲川女子学園く3階く

ジャラジ「…」

紗夜「…っ！」

周りの生徒が廊下の奥へ奥へと逃げていく。その先は行き止まりだと分かっている、

ジャラジ「…クク…」

人間の絶望や不幸がたまらなく好きなジャラジにとってはまるで天国のような空間だった。まずは追い詰めてから1人ずつ針を埋めようと、まずはその風紀委員という札を腕にかがけているやつからだ

想「はあっ！」

だが、1歩踏み出した途端、後ろから羽交い締めによって止められ

た

想「やっぱりお前らの仕業か！」

俺はそう言いながらこいつを紗夜達から離すべく羽交い締めのまま後ろへ下がる。そのまま俺の後ろに投げ捨てる。相手は廊下を転がり、しばらくして立ち上がる

俺は後ろにいる紗夜達を一瞥した。みんな特に異常はない

ジャラジ「クウガ……ゲームのジャマしやがって……！」

想「ゲーム……？」

ジャラジ「大切なゲームなんだ！ジャマするな！」

想「いや、邪魔するね！そんなくだらないゲームに人を使うな！」

俺はジャンプしてそのまま殴りつける。相手は後ろによるめき、俺は追撃を腹や胸部に叩き込む。

ジャラジ「クツ……」

俺は少し距離をとって走る。空中で回転し、キックを決めようと……

想「なにっ!？」

相手が突然前から消えたのだ。走る体制で、

想（瞬間移動か……？）

しばらく辺りを見回しながら構えるが、何も起こらない。

生徒「え……あいつは……？てか4号もいない……」

紗夜（ほんと……逃げ足だけは速いんですから……）

くその日の夕方

あの後、未確認が出たことについて、警察に話した。この殺人事件は、未確認の仕業となり、花咲川女子学園、羽丘女子学園両方はしばらく休校となり各自絶対に自宅待機になった

想「……」

俺はビートチェイサーで街中を走っていた

一条『どうだ！何かあるか？』

無線から一条さんの声がする。

想「なにもいません……！おかしいですね……」

一条『そうか…こつちもダメだ…』

想「…？」

自分のスマホが鳴っていたのでバイクを停めて電話にでる。通話の相手はリサだった

想「どうした？」

だが聞こえるのは悲鳴と…

ジャラジ「そうだ…その顔だ…ククツ…」

気味の悪い笑い声だった。俺は背筋に悪寒が走る。

想「くそっ…！」

一条『どうした…!?』

想「あとで説明します！」

俺は一気に反対の方へバイクを向けて急いで走り出した。

想「…！」

俺が着いた頃には遅かった。葬式場は荒れてそこら中に泣き崩れる人や絶望の表情を浮かべている人達がいた。亡くなった人の周りの花は荒らされ、遺影も落ちていた

想「…！」

俺は無言で遺影を拾い上げ元の場所に置く。写真を見ただけでもまだ若い。というか同級生だ。これからやりたいこともあって…なのにそれを理不尽に奪われ…安らかに眠ることも許されない

…なんだろうか…この感覚は…

体の奥からふつつつと…

リサ「想くん！」

何か感覚がわかる前に俺はリサに呼ばれた。無理やりその感情を沈めてリサを見る。リサもまた、涙を流していた

想「ごめん…1歩遅かった…」

俯きながら答える俺にリサが首を振る

リサ「ううん…想くんは何も悪くないよ…何も…！」

また泣き出してしまふ。俺はリサを抱き抱え、ただ慰めることしか出来なかった。

く夜く

一条さんに連絡入れ、しばらくすると警官隊がやってきてその後の処理をしていた。特に遺族の精神のすり減りようは見て痛々しいくらいに分かった。

一条「八意…」

想「…？」

処理をしている警官隊を見つめていたが、一条さんが渡してきた茶封筒を受け取る

一条「…」

想「……！」

遺体を解剖した解剖結果だった。脳に鉤針が埋め込まれていたらしい。それが脳内をじわじわと傷つけながら肥大化、4日後に死を招く。

想（なんでやつだ…）

一条「4日後に死ぬ、と言い伝えて相手の絶望を楽しみ…そして今みたいに葬式に現れて遺族の方々にも精神的ダメージを与えていく…許せないことをしているな…」

想「はい…見つけたら…けちよんけちよんですね…！」

振り返りながら言う八意は、いつも通りの笑顔だった

一条「君はほんと、いつも通りだな」

それに一条が苦笑する。

だがしかし、今にも八意想の心の奥には…

自分でも気づけないどす黒い憎しみと殺意があることに

く昼頃く

想「…」

羽丘女子学園、花咲川女子学園両方が休みになって1日目、だが昨日にも花咲川、羽丘合わせて12人が死んだ。死因はみんな同じ。

想「くそ…」

俺は今日も、朝早くからビートチエイサーを走らせて奴を探していた。早く止めなければ、あいつを…これ以上の犠牲は払いたくない。

一条『八意、聞こえるか!』

無線越しに一条さんが話す

想「はい、聞こえます!」

一条『何かあったか?』

想「何も無いです…」

一条『八意…1回休め』

想「え…でも…」

一条『いいから休め!以上!』

そう言つて無線を切られる。

想「おっと…」

無線を切られた途端、視界がふらつく。そう言えば朝から何も口にしていなかった。

想「…」

それを思い出したせいか、体が一気にだるくなる。これは流石にま
ずいと思ひ、俺はコンビニに走った

紗夜「さつきからなんなの…」

日菜「怖いよおねーちゃん…」

2人が肌を寄せあつて震えている。それも仕方がない。さつきか
ら鳴り止まない無言電話。しかも同じ番号からずっと鳴っていた

そしてマンションのはずなのに玄関やベランダ、もしかしては自分

達の部屋でなっているかもしれないフィンガースナップの音。怖い、ただ怖い

紗夜も流石の日菜も精神がどんどんすり減っていく感じを味わいながら紗夜はスマホを取り出した。

彼に：連絡を入れるために：

紗夜（はやく：！）

日菜「おねーちゃん：！」

連絡帳から彼の名前を調べ連絡をかけようとした時だった。不意にフィンガースナップの音が真後ろでしたのだ

日菜・紗夜「：！！」

恐る恐る後ろを振り返る。

紗夜「：！！」

日菜「っ：！？」

窓の向こう、ベランダに：黒い服の青年が立っていた。執拗に爪を噛んでいる。だがしかし、窓ガラスを割って中に入ってきたのだ。紗夜がスマホを落としてしまう

紗夜「なんで私達を狙うんですか！」

こちらへじりじり近づいてくる相手から逃げるべく後ろに下がる途中、紗夜が話かけた

ジャラジ「君達が苦しむのが：楽しいから：！」

紗夜・日菜「!？」

彼は微かに笑いながら言った。2人の背筋がぞわつと恐怖で埋まる。だめだ、

日菜「そんな理由で：酷い：！」

日菜は微かな怒りを込めて言葉を放つ。でもまるで聞いていない。どンドン、どンドン、楽しむかのように近づいてくる。

紗夜・日菜「：！」

逃げ場所が無くなり、壁に追い詰められる。そこで相手が人から化

け物に姿を変える。

——その時だった。下から聞き覚えのあるバイクの走行音がした。そして次の瞬間には……

ジャラジ「:!?!」

想「大丈夫か……! 2人とも!」

ジャラジに後ろからしがみつく青の戦士、八意がいたのだ。

日菜「想くん!」

紗夜「想さん!」

想「よかった……間に合った!」

俺はジャラジを掴み投げる。相手は体をソフアーにぶつけて少し跳ねて転がる。

ジャラジ「クウガ……ゲゲルの邪魔しやがって……」

想「クソが……!」

相手は微かな怒りを滲ませながらそう言うのと、俺をおしのけベランダから下に降りていった。俺もそれに続く。途中、日菜のシャーペンを持ち指でクルツと一回転させると、青のロッドに変化した。

想「はあああ!」

鈴の音を鳴らしながら相手の逃げる背中にロッドを突き刺そうとするが……

想「んなっ……」

体に当たるより先に相手が消えたのだ。俺は慌てて辺りを見回す。

フィンガースナップの音が右からした。

想「:~!」

次は左から

まるで人を弄ぶかのように

そして上から、

想（上はまずい……!）

俺は紗夜と日菜がいる場所のベランダに飛び上がって着地した時だった。こちらへ飛んでくるなにかに気づき、防御しようとロッドを回すが……

想「ぐあ…！」

紗夜・日菜「…！」

俺の右の太ももに鉤針が4本刺さった。

想「ぐあ…ああ！」

俺が痛みに片膝を着いた時に、今度は左腕に4本、痛みでロッドを落として地面に倒れる。その胸と背中にそれぞれ八本鉤針が刺さる。

想「ぐっ…！うあ…！」

全身に走る激痛に動けなくなる俺に、冷やかな声が届いた

ジャラジ「次…ゲゲルの邪魔したら…」

「コロスヨ？」

想「ふざけるな…！」

俺はもうどこかへ逃げたであろう相手に憤慨するが、体はやばい。

紗夜「大丈夫ですか！」

我に返った紗夜と日菜が俺の元へ走ってくる。俺はあっちこっちに刺さっている鉤針を引っこ抜くと、激痛が走り、傷口から血が出る。

紗夜「!?」

日菜「その針、先が曲がってるから痛いんじゃない…」

想「大丈夫だ…それよりお前は…？」

紗夜「私達は大丈夫です、それより自分の方を心配してください！」

今救急車を呼び…」

救急車を呼ぼうとした紗夜を止める

想「やめろ…後々めんどくさい…」

日菜「でも…」

想「心配してくれて…あり…がと…あれ？早く奴を追わないと…」

全ての鉤針を引っこ抜くと、身体が途端に重くなり意識が霞む。

痛みのせいもあるだろうが、朝からの疲労もあるのだろう。少し…
休もう…

さっきの激戦が嘘のように静かになった自宅で、彼はすやすやと寝
ていた。

先程の顔とは打って変わって、今の彼はなんというか…母性本能を
くすぐられる。無性に守ってあげたくなるのだ。

紗夜「…。」

隣にいる日菜を見やると、やはり双子。同じような雰囲気を漂わせ
ていた。目が合う。

紗夜・日菜「くすっ…」

2人は起こさないように静かに笑ったのだった。

〽昼頃〽

想「うっ…」

重い頭を起こし、俺は辺りを見回す。自分の体には、不器用ながら
頑張つて巻いてくれたのだろう包帯と、

想「…」

多分これ日菜の仕業と思われる猫の絆創膏が身体中にあつた。

日菜「あつ起きたの！って…何してるの!？」

俺は丁寧に巻かれた包帯と絆創膏を取り外す。それに日菜が
ぎよつとする。

日菜「え…」

だが受けた傷は全て綺麗に、何事も無かったかのように塞がっていた。

想「俺…本格的に人間じゃなくなってるみたいだわ」

俺は微笑みながら言う。それに日菜はしばらく黙っていたが…

日菜「そうなんだ…でも私は別に人間じゃなくても大丈夫だよ！」

想「…？」

さつきとは変わって顔を赤くした日菜が言う

日菜「この際だし…言うね…？」

想「うん…」

そして言われたのは、かつてリサにも言われた

日菜「好きです…想くん…」

好き。という言葉だった。

私はこの状況はダメだと…分かっているても口が動いた。それほど好きなのだ、たまらなく愛おしいのだ。

でも…

それでも…

想「ごめん…付き合えない」

日菜「だよね…」

大方予想は出来ていた。でも実際に言われると、心の何かが崩れ落ちていく。胸が苦しくなる。目から涙が溢れ出す。

日菜「っ…!っ!」

止まらない。自分でもこうなるのは初めてだ…

日菜が泣いてしまった…リサの時もそうだった。笑顔を守りたいと言いつつ泣かせてしまう。でも…こんな得体の知れない奴を好きになつてくれてありがとう…

日菜「…!!」

俺は日菜を抱きしめた。それしか出来ないから…

日菜「振つたばかりの女の子にそれをするのは…無いよ…もつと好きになるじゃん…」

想「ごめん…ごめん…」

紗夜「…。」

紗夜は全て見ていた。日菜が告白したのも、そして振られてしまったところも

自分も…無理なのだろうか…。

そう思うと切なくなる。だがそれを無理矢理飲み込み、部屋に入る

紗夜「2人とも…何をしてるの？」

日菜「いや！なんでもないよ！」

そう言う日菜の顔は、紗夜でも分かるほど涙のあとがあった。

想「…」

隣で俯く彼、その顔は、少し伸びた髪に隠されてイマイチ分からないがきつと深く後悔しているのだろう。彼は優しすぎる、そんな人だから

想（紗夜…もしかして聞いてたのかな…？）

俺はそう思うが、あえて口には出さなかった。せつかくの紗夜の気遣いを無駄にしたくはない。でも…あとで話くらいはしよう。

紗夜「妹を泣かせましたね…？」

想「いや…！ほんとにごめん…どうすりゃ…」

紗夜「くすっ…嘘ですよ…」

日菜「私はもう大丈夫だよ！言えただけでもスッキリ！だけど私は諦めないから！覚悟してね！」

ウインクをしながら悪魔的に微笑む日菜に俺は呟く

想「小悪魔美少女め…」

日菜「ああ！それは傷つくよ！」

日菜が八意に襲いかかりギャースカと笑いながら言い合う。そんな微笑ましい光景が、しばらく続いた

想「どうしょ…」

俺は顔を青くし、ぷるぷると震えていた。理由はこうだ

想「窓ガラス…割ってたな…」

俺は割ってはないが窓ガラスが割れていた。綺麗に…

日菜「あちやく…」

紗夜「母が帰ってくる前に治さないと…」

俺は迷わずスマホを取り出した。首を傾げる日菜と紗夜を後目に
電話をかける

想「ほんとありがとうございますっ!!」

俺は額を地につけて駆けつけてくれた人達に土下座した。

黒服「いえ、このくらい大丈夫ですよ」

結局黒服さんに頼った。ほんとすんません。

日菜「前よりガラスが綺麗になってる…」

紗夜「ほんとだわ…」

2人が口をぱくぱくさせていた。俺も流石にやりすぎでは…?と
思ったが…丈夫になったしいつか!

だがその一方…

親「うわああああ!」

医者「大変申し訳ございません…」

また：羽丘女子学園、花咲川女子学園で死者が出た

目標人数まであと一人：ジャラジはゲゲルを進めていった

その知らせを紗夜の家から帰ってる時に杉田さんから無線を通して聞いた俺はビートチェイサーのハンドルを殴りつけてしまった。

想「クソが：なんでだよ：」

日を経つ事に死者が増えていく。警察も俺も全力で探しているが見つからない。俺はあいつの残虐さを知っている。

その時、電話がなった。

想「蘭…？」

蘭『つぐみが…未確認に会ったって…』

想「っ!？」

〈病院〉

つぐみ「なんか：心配させちゃってごめんね…？」

想「いや：大丈夫か？」

つぐみ「うん、警察の人達がギリギリで来てくれて、ちよつとした怪我ですんだよ…」

ちよつとしたとつぐみは言っているが、頭に包帯を巻かれ、右腕にも包帯を巻かれたつぐみの姿は痛々しかった。

想「ごめんな…守ってやれなくて…」

つぐみ「いや…！想くんは悪くないよ！」

その時、部屋がノックされた

一条「八意…いたか…」

想「一条さん!?大丈夫ですか？」

一条さんにも、頭に包帯が巻かれていた。

一条「ああ、大丈夫だ。42号が彼女を狙っていた、たまたま助けられたからよかったが…」

想「ありがとうございます…」

一条「警察として当たり前のことをしたまでだ…それでも助けられなかった命は沢山あった。情けないよ…」

つぐみ・想「…。」

一条「そうだ八意、ちよつと来てくれ」

想「はい？」

俺は一条さんに連れられて病室の外に出た。

一条「さつきの羽沢さんだが…今は落ち着いているが、さつきまではだいぶ精神に来てるのか色んなことに怯えていたらしい」

想「そりやそうですね…」

いきなり狙われたりしたら誰だっておかしくなる。でもつぐみはそんな所をだれにも見せたくないのだろう。

想「俺、もう1回つぐみの場所行きます。一条さんは？」

一条「俺は本部に帰るよ。前線では戦えないだろうがその分情報収集などをおきたい」

想「分かりました、じゃあ俺はこれで」

そう言って、俺はつぐみの病室へ向かった

想「大丈夫か？つぐみ」

つぐみ「うん！あとで蘭ちゃん達も来てくれるって！」

想「そうか、それはよかったな」

俺は笑顔で言いながら椅子に座る。そしてつぐみを抱き寄せる。

つぐみ「え…?」

想「つぐみ、そんな無理に元氣にならなくていい…、別に泣いたって俺達は離れたりしないぞ?」

つぐみ「突然何言ってるの…?」

想「怖かっただろ?よく頑張った…」

つぐみ「でも…」

つぐみが震える。俺の肩に頭を当てて、安心したのか涙を流しながら言う

つぐみ「怖かった…怖かったよお!」

想「よしよし…」

つぐみ「私も…なんで私達があんなに狙われなくちゃならないの…!友達も亡くなって…!」

想「狙われる理由なんか無いよ…」

つぐみ「っ…!?!」

俺は、ただこう告げた

想「…だから、これ以上は殺させない」

つぐみ「…想くん…!」

その言葉がつぐみに響いたのかは分からないが、またつぐみは号泣してしまった。

その後、afterglowのメンバーにつぐみを泣かせたと勘違いされたのは思い出として…

だが変なのはそこからだった。

ピタッと、未確認の被害が無くなったのだ。しかも1週間。まるで

終わったかのように…

想「…」

俺は再開になった学校へ行くために用意をする。つぐみも最近はリハビリに励んでいるらしい。何か今度持つて行ってやろう、お菓子あたりがいいだろうか

そう思いながら玄関を開ける。

想「行つてきます…」

タマが亡くなってからも毎日欠かさず行つてきますは言う。もう癖なんだろうな

く花咲川女子学園く朝・校門く

想「ビートチェイサーになってから学校に着くのが速くなった気がする…」

俺は心無しかそう呟きながら校門を通る。

紗夜「おはようございます」

想「おはよう…ってというか紗夜、お前どんな時間に行こうが絶対にいるよな…」

紗夜「風紀が乱れないように毎日チェックする。それが当たり前です」

想「そうか、じゃ頑張ってくれ。風紀委員長さん」

俺はそう言うと、いつもの位置にビートチェイサーを止める。ココ最近は、もう俺専用の場所なのかと思うくらいそこだけ空いている。

想「よいしょ…っと」

そこから靴箱へ歩く。

美咲「あ、おはようございます」

想「おはよう、美咲」

千聖「おはよう、八意くん」

想「おはよう千聖」

とまあいつも通りの日常。未確認がいなければ今頃はこんな風に

向こうの世界で生きてたのかな…

「おはようっ!!」

想「ぶはっ!」

そう考え込んでいると、笑顔のビッグバンに気づかず後ろから元気に抱きつかれ俺を下敷きに倒れる。

想「いつてえこころ…」

「こころ「何だか難しい顔をしてたわよ?お腹が痛いのかしら?」

想「ちがうちがう…それとどいて?」

ここ廊下だし周りに人いっぱいいるし、変に勘違いする人が出かねない。

「こころ「わかったわ!」

相変わらずのすげえ運動神経で器用に立ち上がるこころに遅れて俺もたちあがる。ホコリを払っていると、そこに第二波が到着した

はぐみ「わくいい!!」

想「2度目ツ!」

はぐみ「あれ?ぶつかつちやつた!ごめんなさい!」

想「いてえよはぐみ…しかもお前は大丈夫か?」

はぐみ「うん!平気だよ!」

想「そうかそうか…元気そうだなにより…」

笑顔のビッグバン集団のうち2人が揃った。美咲曰くろくな事が無いらしい。

美咲「あくあく、出会つちやつたよあの二人…」

後々から美咲と花音が来た。美咲は頭を抱えながら

美咲「あの二人、元気なのはいい事なんですけど…」

花音「たまに…私達の言葉届かない時が…あるもんね…」

文句っぽいことを言うふたりだったが、顔はそれとは真反対、楽しそうな顔をしていた。

美咲「私もいつの間にかこころに毒されていますよ…」

花音「私も…、でも今じゃ出会えてよかった…そう思うよ」

美咲「それは…まあよかったとは思ってます」

想「みんながみんな、大事に思いあつてるんだな…いい事だ」

俺は微笑みながら言った。それと同じタイミングでHRを知らせるチャイムが鳴る。

想「じゃ、俺は教室へ…こころと同じだし連れてつとこ…」

美咲「それじゃあまた」

想「おう、おーい！こころー！」

こころ「どうしたのかしら！」

想「どうしたもこうしたも…チャイムなってるんだぞ」

こころ「ほんとだわ！行きましょ！」

俺達は、それぞれの教室へ歩いていった。

HRが終わった後、集会があった。

俺の予想通り、未確認についてだった。花咲川女子学園と羽丘女子学園の生徒だけが狙われたこと、そしてこれからの対応などを、やく1時間話された。扱われ方が、確実にもう終わったことのような扱いだった。

生徒「また4号がやってくれたのかな…！」

などと周りから声がする。俺は、拳を握りしめた。

想（ごめん…みんな…まだ倒せてないんだ…！）

紗夜「…」

事情を知っている紗夜は、壇上から八意を見つめた。

く花咲川女子学園付近く

ジャラジ「人っていうのはしばらく何も無ければ勝手に安心する…

そこに現れたらどれほど絶望が…恐怖が見れるだろう…」

ジャラジは、花咲川女子学園に入ろうとしていたのだった

そうだ、前仕留め損ねたブルーの髪の女を狙おう。あとひとり殺せ

ば…

想「…」

いつも通りの授業、先生も慌てているのだろうか授業はいつもより大雑把だった。

その時だった。突然、放送のチャイムがなる。

先生「たった今！校内に不審者が…」

そこまで言っ、声が途切れる。代わりに聞こえるのは肉が避ける音。そして

フィンガースナップの音だった

俺がその音を聞いた瞬間、先生が突然みんなを廊下に逃がす。緊急時には体育館に避難をする。それをみな守るために走る。

〜3年A組〜

氷川紗夜、白金燐子、白鷺千聖、松原花音、そしてA組の生徒がいるこの教室では、もう逃げられない状況になっていた。戸は塞がれ、先生は殺され、フィンガースナップをしながらこちらにじりじりと近づく1人の化け物、花音が泣き出す。恐怖によって

まるでそれを楽しむかのように、ジャラジは親指の爪を噛んだ。

俺はみんなとは逆方向に走った。定期的になるフィンガースナップの音を頼りに、そして…

想「まさか…！」

前に狙っていた紗夜、そして今いるのは3階、ということつまり…

最初から紗夜狙いだったのだ。アイツはいまA組にいる。

考えるよりも先に、俺はA組に走り出した

紗夜「なぜ私だけを狙うんですか…」

震えながらも声を出す。さっきからの確に紗夜だけを見ている。千聖も、隣子も後ずさるが目もくれない。

あと一步、そこまで来た時だった。

想「っ！」

教室の扉を開けた八意だった

ジャラジ「!?」

俺はなんとか間に合った、だがあいつの顔を見た時、俺の中でなにかが弾け飛ぶ。

怒り?…それとも殺意か

想「変身!!」

A組の奴らに姿がバレるのも構わず、俺はジャラジを掴み、窓ガラスを割り、3階から運動場に落ちる。

互いに身体に衝撃が走るがそんなものに気を使う必要は無い。

そこから紗夜達が見たのは、いつもの戦いとは違う光景が拡がっていた

想「うああ！」

そこには、ジャラジの上に乗る、マウントをとってただ一方的に殴りつけるクウガの姿があった

想「おアア！」

また殴る。

想「ウアア！」

また殴る

想「オウウアア！」

また殴り付ける。ジャラジの頬の肉が裂け、そこから血が出る。だが俺はそれに構わず、殴り付ける。ただ憎しみをこめて。

憎い、ただひたすら憎い。

想「オオリヤアアア！」

だが地面を転がってジャラジが攻撃を避ける。俺は砂を殴りつけて立ち上がる。相手は俺に背を向け走り出す

想「待てエエエ!!逃げるなあアア!!」

ジャラジの肩を乱暴に掴み、また顔目掛け拳を振るう。さらに顔から血が出、ジャラジは目を逸らしたくなるような顔になっていた。

想「オラアア!!」

千聖「八意くん…」

紗夜「想さん…」

燐子「…想…さん？」

花音「想くん…」

生徒1「八意くんが4号!？」

生徒2「写真!動画も撮ろう!!」

生徒3「でも怖いね…男子はやっぱ…」

教室がざわざわと騒がしくなり出す。紗夜達は、ただ無言で見守った……

いや…立ち竦んでしまった。彼のあるなに激怒した姿は初めてだった。彼に対して、心からの恐怖と…それほどの憎しみがあったのにも関わらず、みんなに笑顔で対応していた。気づけなかった

想「オラア!!」

相手を壁まで殴りながら押し付け、壁にぶつける。またもう一度、もう一度と拳を振るう

ジャラジ「っ!!」

相手が両手で俺の拳を受け止めるが

想「おアア！」

俺は顎にアツパーを入れて後ろにぶつけ、反対方向に投げ捨てる。
想「っ！」

近くの木の棒を拾い上げ

紫のクウガになる。

そして相手目掛け、ゆっくりと歩き出す。かつてアイツがそうしたように、俺もタダでは死なせない。今まで死んで言った人達の気持ち
を思い知ればいい。

ジャラジ「っ…アア！」

相手が胸から鉤針を取って俺に投げつける。だが青のクウガのよ
うに上手くは行かず、俺の紫の鎧に弾かれた

想「…」

俺は溢れ出る怒りを表すかの如く、金の力を使う。剣の先に装飾が
つき、鎧の色も変わる。

俺は1歩と歩く度にこいつがやってきた事が脳内再生される

じわじわと人を痛めつけて殺す

葬式を荒らし、遺族までもを追い詰める

俺はあの遺族の顔を見た時、とてつもなく悔しくなったのだ。

そして大事な人達にも手を出そうとした。

もはや相手は完全に戦意喪失、足が恐怖で動かず、手で来るな！と
言わんばかりに振ることしか出来なかった

俺は剣の間合いに入った瞬間、容赦なく刃を振るった。普段は好き
になれない感触も、今じゃ何も感じない。ただ己のうちに広がる殺意

のまま刃を振るう

想「うああああ！」

右へ

想「はああ！」

左へ

想「ああああ！」

また右へ

想「ああああ！」

身体を袈裟斬りにする。そして相手が倒れる。俺は刃を逆手持ちにして、相手のベルトに突き刺した

想「アアアアアアアアアアアアアアアア！」

相手が爆発する。その爆発の中、俺は何かを見た

先程の俺と同じように怒りのまま刃を振るう、4本角のクウガ、目は黒く、ベルトの霊石も黒い。

こうして：戦いは最悪な終わりを告げた

紗夜達が運動場へ走る。そこには一条の姿もあつた

ようやく爆発の煙が少なくなった場所に、夕日に照らされ、八意はただただ立っていた。握りしめた木の棒に血が滲んでいる。

一条「…」

美咲・花音・はぐみ・こころ「…」
ポピパ「…」

隣子・紗夜「…」

千聖・彩「…」

誰も、何も言わなかった。やがてこちらを向いた八意の顔は

煙に遮られて見えなかった。

戦いが終わって一日がたった。俺はいつも通りの日常を取り戻せたとおもっていたのだが、現実は違うらしい。

想「…」

生徒1「…。」

生徒2「…！」

生徒がみな、俺を避けていく。もちろん避けられた理由は分かっている。けども実際に避けられると傷つくもんなんだな

美咲「おはようございます…」

想「美咲：おはよう」

美咲「大丈夫ですか…？みんな避けてますけど…」

想「美咲もあんまり、俺と話さない方がいいんじゃないのか？お前も変な奴だと勘違いされるぞ」

美咲「…大丈夫ですよ。私は想さんの味方です、信じてますよ」

昨日の戦いはネットで瞬く間に拡散され、ニュースにも取り上げられた。もちろん俺の顔は隠されている

・やはり4号は危険、射殺すべき

・やっぱり未確認は未確認か…

などと言った世間の声を浴びた警察では…

杉田「こいつら…アイツがどんな殺しをしたか知らないくせに好き勝手いいやがって…！」

桜井「まったくですよ！」

と、誰も4号が悪いとは思ってはいなかった。誰もがみな、あいつの殺し方を知っている。4号は激怒して当然だと思っている。

一条「八意…」

一条は、ただ彼を心配した

く花咲川女子学園、昼休みく

放送「八意くん、至急校長室まで来なさい」

俺はその放送を聞いた時、大体何を言われるのかを悟った。でもわかった上で俺は行く

校長「言いたいことは、わかるね？」

想「はい」

そういいながら出された1枚の紙

校長「今日で君は花咲川女子学園を辞めてもらう。いいね？」
退学、だった。

もちろん分かってはいた。あれだけのことをして、しかも生徒が未確認、そんな重荷を背負うくらいなら捨てた方がなんぼもましだ

想「はい、お世話になりました」

俺は紙を受け取り、校長室を後にする。

紗夜・燐子「想さん？」

想「よお、2人とも」

俺は紙を隠しながら、いつも通り気さくに挨拶をするが…

燐子「その紙は…一体なんですか？校長室から…出てきたような気がしたんですが…」

燐子にバレていた

紗夜「ちよつと見せてください」

そう言つて紗夜から紙を取られる

紗夜「つな…!?これは一体！」

燐子「退学…!？」

2人が紙を見て啞然とする。まあ普通そうだろう

紗夜「これはいくらなんでも…！」

髪を握りしめたまま校長室に行こうとする紗夜を止める。

紗夜「なんで止めるんですか…!？」

振り払おうとする紗夜をなんとか止めながら俺は言う

想「いいんだこれで…いいんだ…!？」

俺がそう言うと、紗夜は止まった。次の瞬間、俺の腕を掴み、中庭まで連れていく。中庭に着いた紗夜は、俺の方を見て、一言発す

紗夜「仮に学校を辞めたとして貴方はこれからどうする気なんですか？」

想「そうだな…」

そこに遅れて来た燐子が紗夜の隣に並ぶ。俺は透き通った青空を見ながら言う

想「人知れず戦うヒーローにでもなろっかな！」

俺は笑顔で言う

想「今までクウガとして、高校生としてカツカツで毎日頑張ってきたでしょ？でも学校が無くなっただけでもっと早く現場に行ける、もっと早くアイツらと戦って倒して…平和が守れて…」

そこで俺の言葉が止まる。

燐子「…」

紗夜「…」

俺の目から涙が溢れ出す。何故だろうか、止まらない

想「あれ…」

燐子「本当は…いたいんじゃないんですか…？」

燐子のその一言で、俺はなぜ自分が泣いているのかわかった。その場に膝を着いて、みっともなく泣き出してしまう。

想「やめたくないなあ…！みんなと馬鹿みたいにはしゃいだりして…こころに後ろから突っ込まれたり…」

何気ない日常、今までは当たり前だと思っていた光景。でもそれを失いそうな時、何故か無性に当たり前でも、何気なくもたまらなく愛おしい物になるのだ

こころ「想く!!あら?なんで泣いてるのかしら?」

後ろから声が聞こえた。こころの声だ、それに続いて

美咲「想さん…ってなんで泣いてるの?」

美咲も追いかけるように走ってきた

燐子「奥沢さん…」

燐子が手招きをして紙を見せる。

美咲「なにになに…？ってええ!？」

驚いた顔をして口をパクパクしている。

花音「あれ…？」

千聖「なんでこんな所で泣いてるのよ…」

香澄「おーい!って…なんで泣いてるの?」

たえ「足折った?」

有咲「それ病院ものだわ!!」

りみ「何この紙…見せて燐子ちゃん」

沙綾「退学!」

香澄「ええ!？」

彩「ええあ!？」

たえ「彩先輩、すごい声」

千聖「一体どうゆうことかしら?」

イヴ「これはひどいです!校長は切腹を…!」

彩「イヴちゃんストップ!」

はぐみ「退学なんかダメだよ!!」

まるで計画でもしてたかのように次々と集まってくる奴ら、みんな紙を見ては驚き、また誰かが驚く

もはや何が原因か分かってないやつまでいた。

想「ははっ…」

俺はまた、考えすぎていたのだろうか。

紗夜「確かに、前の戦いはあなたらしく無かった」

そこに、俺の前に立った紗夜が言う。横にみんなが並ぶ

紗夜「憎しみのままに戦うあなたを…正直怖かったです」
想「…」

紗夜「でも、その位では私達は離れたり見捨てたりしません」
燐子「前に言いましたよね…？何かあつたら頼って…この位で見捨てるなら…そんなこと言いません」

美咲「私たちになにかできるかーって言われたら…全然出来ないけど…」

照れくさそうに彩が続ける

彩「私達はしってるよ…？その手はとっても暖かいって…」

沙綾「うん、だから誰も怖がらないよ」

たえ「暖かいの？電子レンジ？」

有咲「いいとこだから黙ってる…！とまあそういう訳だ！」

有咲がそつぽを向きながら言う。それにたえが「ツンだ」と言う。いつもの、ポピパラしい会話だった。

小川「前、ボクに説教垂れてたくせに…何してるのさ…」

小川がいきなり現れ皆ぎよつとする。

小川「それくらいでへこたれるようなやつじゃないだろ？八意」

想「小川…」

その時、後ろから誰かに抱きつかれた感触があった。次に頭を撫でられる感触を感じる。

想「…？」

「…」
「ここら…」
「いつも想がみんなにしてくれる事よ！私はいつも想に撫でられると嬉しい気持ちになるわ！だから想もなでなでされたら嬉しいよ！」

自信満々にここらで撫で回す。それに俺は涙を流しながら笑った
はぐみ「いい笑顔だね！」

はぐみがサムズアップを俺にする。みんなもバラバラにサムズアップを決める。

想「ありがとう…！みんな！」

やはり持つべきものは、友だ。

紗夜「親友…ですよ」

顔を赤くした紗夜がそう言う

生徒「きゃあああああ！」

みんな「!?!」

その時だった。1階辺りから突然悲鳴が聞こえた。

俺たちは現場に向かう。

もう、俺に迷いはない。信じられる

親友がいるから

想「…!!」

俺たちが廊下に走った時は、未確認…いや操られたコピーが三体いた

想（グモンにガリマにバヂス…）

だがまだゴの奴らはいない。そこまでコピー能力が強いわけではないのだ。

想「紗夜達はみんな連れて早く逃げて！」

生徒に襲いかかろうとしたグモンを蹴り飛ばす。相手は後ろに吹き飛び、おれは尻もちを着くというダサい着地をする

想「おい！」

生徒「ひっ…！」

想「早く逃げろ、あっちだ」

俺が手を掴み立たせると、凄まじい勢いで逃げていった。その事に少しガツカリしながらも目の前の敵に集中する

腰からベルトが出現する

想「変身！」

俺は赤のクウガに姿を変え、構える。

グモン・バヂス・ガリマ「…」

目の前の意識無き複製品の正体はおそらく花咲川の生徒だろう。なるべく傷つけないで助け出したい

想「はっ…！」

一体の攻撃を躲し、もう一体には足を掛けて転けさせる。最後の一体の攻撃は受け止め、カウンターで足を引つ掛ける

想（ここじゃやりにくい…！外に行くしか！）

なんせ狭い廊下だ。ぶん投げて窓ガラスを割ったり教室を荒らしたりなどできない。

想「…！」

俺は後ろに下がった時ノーモーションで青のクウガに姿を変えた。
相手も追いかけてくる。

く花咲川女子学園・中庭く

木々が生えた生徒にとつては憩いの庭に、3人の化け物と、1人の
戦士が戦っていた。

想「はあっ！」

俺は青のクウガのまま相手の後ろに周り、足を引っ掛ける

想「…！」

木の枝を拾い、青のロッドに変える。綺麗な鈴の音を鳴らしながら
ロッドを振り回す。

まず最初に、突っ込んできたグモンにロッドを突き刺す。

想「はああ！」

グモン「…！」

相手に紋章が現れ、皮が剥がれていくかのように人の姿に戻った。

生徒「…！」

俺は倒れる前に抱き抱える

想（気を失ってるだけか…）

あと2人、まずはガリマだ。

ガリマ「…！」

前に戦った時は、薙刀状の鎌をもっていたのだが、今俺が対峙して
いるガリマは爪の様なものを両手に付けていた。

ガリマ「…！」

意外な速度で俺に切りかかる。

想「うお…!?!」

俺はそれを屈んで避ける。そして足にロッドを叩き込む。

同じく皮が剥がれるように人の姿に戻った。

想「あと一人…!?!」

そう呟いた時、相手は既に空に舞い上がっていた。バヂスはハチの
未確認、空を飛べるのだ。

想「クソが…！」

ロッドを捨て、青のクウガの跳躍力で一気に飛び上がるが間に合わなかった。俺が地面に着地している間にも相手は上へ飛び上がり…

その時だった。

1発の銃弾がバヂスの肩に当たる。続いてもう1発、今度は腹を貫通した。

想「な…!?!」

相手は化けの皮が剥がれるように人の姿に戻りながら落ちてくる。

想「…!」

俺は飛び上がり上手く抱き抱えて地面に着地する。直後、人に戻った生徒から血が恐ろしい程流れてきた。

想「ちくしょう…! 誰が…!?!」

俺がそう言っている、誰かが走ってくる。

一条「大丈夫か!!」

想「一条さん! 早く救急車を！」

俺は急いで!と急かす。一条さんが生徒に近づきながら救急車を

呼ぶ

一条「お前がやったんじや…ないよな?」

想「俺じゃないです…!」

その時、紗夜が走ってくる。

紗夜「大丈夫ですか…」

その上に剣を持った何者かが紗夜目掛け飛んできていた

想「危ない…!!」

俺は間一髪、紫のクウガになり紗夜を突き飛ばして攻撃を受ける。

想「ぐっ…ぶはあ…！」

紫のクウガの鎧を易々と貫通する。自身の腹から夥しいほどの血が溢れ出す。

一条「八意!!」

紗夜「想さん！」

燐子「想さん…！」

紗夜に続き、影から飛び出してきた燐子達、

想「なんで…あんなことをしたんだよ…！クソ野郎！」

俺は自身に剣を突き立てている相手に目掛け叫んだ

父「殺そうと思ったのに…ちっ…」

想「ぶぐっ…！」

苛立ったかのようにそう告げると、更に剣に掛ける力を強くする。剣は更に奥へと進み

貫通した

想「…っ…ぶっ…」

一条「八意!!」

掠れゆく意識の中、一条さんが叫んだ気がした。そして銃声が鳴り響く。

父「次から次へとお！今日はやめだ…萎えたわ」

そう言う俺から剣を抜く。そしてもう一度違う箇所突き刺し、貫通させる。また剣を抜き、どこかへ行った

夥しい血が中庭の草を赤く染めていく。その血を気にせず周りに群がる。紗夜達

美咲「——ん！」

燐子「——！」

聴こえる、みんなの声が、俺が守りたいって思えた声が…

そうして俺の意識は沈んだ

く弦巻家・病院く夕方く

医者「運ばれてきた当初は死んでもおかしくない重症でした…でも今はバイタルも安定し、ですがどうしても血液が足りず…貧血を通り越してます…」

弦巻家優秀の医者にそう言われた時、嫌な汗がじつとり流れた

美咲「大丈夫…なんででしょうか？」

美咲が恐る恐る尋ねる。

医者「あのまま無事に目覚めれば…の話です。ですが仮に目覚めたとしても血が足りなさ過ぎて…最悪視力を失ったりする可能性が…」

全員「…!?!」

花音「そんな…」

彩「でも…ほら！輸血とかは？」

彩がそう提案する。

燐子「それなら…!」

だがその希望も呆気なく打ち砕かれる

医者「彼の血液型が分からないんです。に血を取って検査といっても血が無さすぎるので…下手に手出しができない状態なんです。一応鉄分を点滴で入れていますが…」

千聖「…大丈夫よ…」

花音「千聖ちゃん？」

千聖「彼は今まで何度も死に目にあってきたわ、血が足りないくらいで死ぬような男じゃないはずよ」

リサ「そうだね…!」

香澄「うん！信じよう!」

医者「というか皆さん…?」

全員「…?」

医者「流石に30何人と部屋に入りますとスペースがきついのです
が…」

美咲「あ、すみません…」

↳病院・夜↳

この後、各自解散となった。なんやかんや言いながら彼は全員から大切に思われていた。ちなみに残ったのはつぐみ、美咲、リサ、彩、日菜、紗夜だった。

全員「…」

全員が全員、八意を恋愛的に見ているわけで…

――気まずい雰囲気、病室に漂っていた

日菜「想くんいつ目覚ますかな〜」

今だ心電図モニタは機械的な音を鳴らしている。運ばれてきた当初は彼の周りには様々な機械があったのだが、今はそれも多分外されていた。

リサ「いつも病院送りにされてるよね〜」

美咲「でもいつも化け物みたいな速度で回復してますけどね…」

美咲が苦笑いする。それに釣られてみんな笑う

彩「でもいつもすごいよね、あんなに戦えて…」

美咲「私達も一条さんみたいにサポート出来たらいいのになあ…」

美咲がそこまで言った時だった

想「守ろうと思ってるのに助けられたら意味ねえじゃねえか…あと戦うのは俺一人で充分だ…」

全員「!?!」

ゆっくりと起き上がりながら八意が喋っていた。その顔は妙に白く、本当に血が全く無いことを改めて認識させられる

想「くそ…頭がふらふらする…目が上手く見えねえ…」

日菜「まだ無理しちゃダメだよ!」

紗夜「日菜の言う通りです…!」

つぐみ「大人しく寝てください!」

起き上がろうとした俺をみんながベッドに押さえつける。今の俺では到底抵抗出来るはずもなく、寝かされた。

その後、慌ててやってきた看護師たちにあっちこっち検査されて、何故か日菜達が1回ぶつ交代交代で俺にご飯を運んでくれたおかげで2時間立った今では普通に歩けるし走れる。

美咲「相変わらずの回復力…」

リサ「ゲームじゃあるまいし…あはは」

今はビートチェイサーを押しながらリサ達と家に帰っていた。みんな1日で退院したのでめちゃくちゃ心配しているのだが、俺が走ったりするとようやく信用してくれたのか今こうやって帰っている
彩「すごい…としか言えないね…」

その一方で、既に未確認は活動を始めていた

タクシー運転手「はあ…今日も疲れた…」

いつも通り、今から会社に帰ろうとした時だった。目の前に柄の悪そうな女が立っていた。男は面倒くさそうにドアを開けようとした時、相手はピアスを取り…

化け物に姿を変えた

タクシー運転手「えっ…?」

理解出来ぬまま、男性はガラスを割られ、ピアスから変化した爪をつけた化け物に溶かされた

否、殺されたが爪で引つかかれたわけではない

タクシーごと、溶かされたのだった

〜現場〜

一条「タクシーごと溶かすなんて…」

杉田「ああ、信じられないよな…でも現実こうだ。未確認の事件が相次いでる、被害にあった人達は…全員乗り物ごと溶かされてる…」

一条「何故建物に乗った人たちだけを狙うんでしょうか…」

杉田「さあな、でもこれから操作を続ける感じだ。で、八意くんの方はどうだ？大怪我したそうじゃないか」

一条「ああ、はい。今は元気にしてますよ」

杉田「そうか…よかった。しかし大変だなあ、まだ高校生なんだろう？彼、よくやるよ。」

一条「ですね」

杉田「その分俺達も徹底的にサポートしてやらないとな、大人としての面目がたたねえぜ、よし！」

杉田は現場に気さくに声をかけてゆく、一条は微笑みながらそれについて行くのであった

〜路地裏〜

ゴオマ「これが…ダグバの…ベルトの破片…」

一番最初にゲゲルに失敗し、バルバに下僕として扱われてきたズ・ゴオマ・グ

彼は今、究極の闇、ン・ダグバ・ゼバ復活に向けて散らばっていたベルトの欠片を集めていた。もちろんバルバの命令だ、決して逆らえない。だが…

ゴオマ「これを…俺の体に入れれば…」

今まで散々バカにされた。同じズ集団にも、メ集団にもこき使われて、太陽の下も歩けず、クウガには毎回負けて、何か失敗する度にバルバに、誰かに殴り飛ばされて

もうこの生活にはうんざりだ

もう、これからは誰の元にもつかない。

俺がダグバを殺す。そして自分が究極の闇になる。

ゴオマ「今に…今に見ている…！俺は…俺は！」

その執念、怨念の力に突き動かされ、ゴオマは自分のベルトの辺りにダグバのベルトの破片を埋め込んだ

ゴオマ「グツ…ウアア…！」

直後、凄まじい激痛がゴオマを襲った。それに耐えられず地面に倒れる。草を噛みちぎり自分の肉を引っ搔いて抉る。それくらいしないと身体が持っていかれそうだった

ゴオマ「ウアアアアアア!!」

夕方の、人気のない路地裏に、絶叫が響いた

〈circle〉

想「修学旅行？」

俺はモツプをしている腕を止めて振り返る

リサ「明日なんだ！しかもこれがまた花咲川との合同らしくて！」

紗夜「ええ…」

はしやぐりリサ、だが紗夜は頭を抱えていた。多分日菜だろうな、あいつまたなんかやったんだろうな

想「ところで何処に行くんだ？」

俺は話を変えなるべく聞いてみる

隣子「長野…です」

想「へえ…長野なんだ、いいなあ…」

確か長野は自然が綺麗な場所だったはずだ。ネットでも有名である。修学旅行は3年生の思い出作りの1つと言っても過言ではない
大イベント

想「楽しんでこいよ！」

俺は親指を立ててそういった。それにリサが返す

あこ「Roselia私だけじゃん！」

後ろであこがボソツと呟く。寂しいんだろうな、きつと

想「俺少しはギターでできるし…練習手伝おっか？」

あこ「いいの!? やったあ〜！」

リサ「何それ2人きり!? ずる〜い! ずるいずるい！」

想「お前は子供かよ…」

紗夜「…」

想「紗夜？」

黙ってこちらを見る紗夜に俺は聞く。我に返ったのか紗夜は何故か顔を赤くしながら「いいえ…! なにも!」と聞いてくくと歩いてしまった。

想「そういえばもう終わるのか？」

友希那「明日が早いからよ」

想「へえ〜、お疲れ様」

そうしてRoseliaは帰って行った。

想「そうか、明日か…」

花咲川の3年…彩と千聖と…花音と…燐子と紗夜がいなくなるのか…

それに少し寂しさを感じながら俺はモップ掃除を再開した。

〜次の日・早朝〜

想「:!!」

俺は朝早い4時半に1本の連絡で叩き起された。それは

想『はい…? 一条さん?』

一条『八意! 朝早くに済まないが至急来てくれ! 未確認生命体が現れた!』

そこで俺の意識は覚醒する

想『:!? 分かりました!』

一条『杉田さん！大丈夫ですか？』

杉田『ああ、中に2体いた。片方はあの溶解液を使う未確認だ。少し吸っただけでも肺がやられそうだった』

一条『もう一体は？』

杉田『ああ、3号だった。でも前とは少し違ってな、身体が全体的に黒くなって毛も生えてた…』

想「…」

そんな会話を無線越しに聞きながら俺はまだ暗くて少し冷える町をビートチェイサーで走っていた。

想「…？」

途中、何台かの大型バスとすれ違った。あの中にリサ達もいるんだなど思いながら走る。

くバス内く

リサ「あれ！想くんだ！」

燐子「ほんとですね…また未確認でしょうか？」

く別バス内く

日菜「あっ！想くん！」

麻弥「すぐ行っちゃいましたね…」

想「…杉田さん！」

杉田「八意くん！まだ中で争ってる。一条は爆破予定ポイントを探してくれてる。溶解液を使う方が少し厄介だからな…」

想「ありがとうございます、それじゃ俺頑張ります！」

杉田「ああ、頼んだ」

想「変身！」

俺は赤のクウガに姿を変え建物の中に入る。

想「うっ…」

扉を開けて進むと、何かが腐ったような…不快な匂いが鼻をおおった

想「これはやばい…」

そう言いながら青のクウガに姿を変える。そして上に上るハシゴのようなものを見つけ、一気に飛び上がる

想「…！」

そこで最初に目に入ったのは、机などを蹴散らしながら戦う2体の未確認だった。周りはあっちこっち溶けている。戦っている片方が溶解液を使うのだろうか、華麗に舞いながら爪のようなものから血を出して相手を攻撃していた。もう片方は避けながら互角の戦いをしている。

想「あいつ…」

俺と何度もたたかっているので記憶はある。あのコウモリ男だ、しぶといやつめ…

想「…！」

俺は大体の様子を見終えると、近くにある壊れかけている鉄パイプを手に持ち、振り回す。鉄パイプがキュイン、と言う音と共に青のロッドに変わる。

想「はああ！」

それをせめぎ合 う2体に目掛け上から飛びながら振り下ろす

ゴオマ・ザザル「…！」

2人は手を離し、俺の攻撃を避ける。すかさず床に着いたロッドを振り回し、溶解液を出す相手に当てる。

ザザル「グッ…！」

相手は呻きながら後ろへ机を巻き込みながら倒れていった。

想「おりやあ！」

俺はもう片方のロッドの先っぽをゴオマの顔目掛け突き出す。

ゴオマ「…！」

想「…っな…!?!」

だがロッドの先端を手で掴まれる。意外に力が強くロッドがビクともしない。

ゴオマ「まさか…この俺を甘く見てるんじゃないだろうな…？」

想「:!?」

そう言いながら片方の拳で顔を殴られる。

想「ぐあっ!？」

俺の体は後ろへ吹き飛び、角に頭をぶつける。

ゴオマ「逃げたかザザル…まあいい、俺の力でバルバを探す」

そう言いながらどこかへ行くコウモリ男。俺は何とか立ち上がりながら考えた。

想「バルバ…？一体誰なんだ…」

そんな疑問が、俺の頭の片隅に残る

俺は来た道を帰って外に出る。杉田さんが気づいたらしくこちらに手を振る。

想「すいません…2体とも逃がしました…」

項垂れる俺の肩を叩きながら杉田さんが

杉田「大丈夫だ！気にするな、次があるだろ？」

と励ましてくれた、俺はそれに元気づけられる。

杉田「今は…まだ朝の五時か…1度帰って寝るといい、今日も学校だしな」

想「ですね、ありがとうございます」

俺はそう言いながらヘルメットを被り、その場を後にして家に帰った。

く八意houseく

想「すう…すう……ん？」

ソファで大爆睡していた俺は目を覚ます。涎が垂れていたの
それをティッシュで拭く。

想「ふわあ…やけにいい匂いするな…？」

つぐみ「ふんふん♪」

へえ…つぐみって料理できたんだ。たしかにケーキ類を作れるの
は知ってたがまさかモーニングまでできると……は？

what?

想（ちよつとまてなんでいるんだなんでなんだ!?!）

起きたばかりの俺に、訳の分からない事が降募る。何故つぐみが俺
の家にいるのか、何故平然となんか美味そうな料理を作っているの
か。俺はしばらく考え込む

つぐみ「あ、起きたんだ！おはよう！」

想「お、おう…おはよう…じゃなくて!!」

俺はつぐみの肩を掴み、顔を近づける

想「なんでいるんだ俺鍵閉めたよね!？」

つぐみ「え…？だつて扉開いてて…靴も散乱してたから中入ってみ
たの！そしたらソファで寝てたから…料理作って待ってたの！」

そうか…優しいなあ……じゃなくて！（2度目）

想「お母さん達は!?!まさか無言で抜け出したんじゃないだろな？し
かもこんな朝早くから…」

つぐみ「大丈夫！ちゃんと許可は取ってきてあるから…！」

想「そうか…そうなのか…？」

俺は頭を押えながらソファアーにどっかり座り込む。もういいや、料理も作ってくれたし…いいか、

つぐみ「く♪」

とか言ってる間にもつぐみは着々と準備を進めていく。今日のつぐみはいつもとは違ってやけに積極的だなと思いつつ出された食事を2人で食べる。

意外と話が進んだのであった。

その後は、ビートチェイサーでつぐみを学校まで送って行ったのだ。

つぐみ「想くんはなんで着替えないの？」

降りながら聞くつぐみ。俺は少しもの悲しげに言う。

想「俺…学校退学になったから」

つぐみ「えっ!?なんでですか？」

想「クウガの事がバレたんだ…」

つぐみ「あのニュースですか…」

連日報道されているニュース、ココ最近4号は敵だと言う意見が相次いでいた。もっとも流されている映像がただ俺が一方的に殴るシーンだけなのでそこは仕方がないのかな

つぐみ「酷いよ!普段みんなを守りながら戦ってるのに!」

頬を膨らませ怒るつぐみを宥める。そんなことをしていると Af ter glowのみんなが集まった

蘭「おはよう」

モカ「おはよう〜」

巴「おはよう!」

ひまり「おはよう〜!」

つぐみ「みんな!おはよう!」

想「おはよう」

蘭「…行くよ」

そういえばそうだった。羽丘はあのこと知らないんだったな。となるとこんな態度でもしかたがない

つぐみ「蘭ちゃん…?」

想「じゃあ俺、行くよ」

モカ「想くん…」

俺は寂しい気持ちが無理やり抑え込みヘルメットを被る。そのままビートチエイサーで走り去った

巴「蘭…いくらなんでもあれは…」

八意が走り去った後、巴が一番最初に声を出した

く花咲川女子学園・生徒会室く

沙綾「さて…どうやって想くんを学校に戻せるか…」

有咲「うくん…昨日話してみたが先生の決断は意外と硬かったぞ

…

イヴ「でもあのままでは納得が行きません!」

たえ「そうだね…」

香澄「でもどうすればあ〜!」

香澄が頭を押えながら呻く。

はぐみ「うくん…」

美咲「思った以上に…難しいですねこれは…」

りみ「こころちゃんは…何かある?」

こころ「そうね…想を信じてくれるためにみんなで何かをしましよ
!」

有咲「何かって…何するんだ?」

美咲「嫌な予感しかない…」

こころ「みんなでポスターを配るのよ!想はとってもいい人だーつ
て伝わるような!」

はぐみ「いいね!それ!」

沙綾「迷子かな?」

はぐみ「でもそれがいいかも!想くんの長所を書いて!写真貼つて
!」

美咲「指名手配かな？」
疑問を浮かべる沙綾や美咲を他所に、香澄やこころ、はぐみなどは盛り上がったいた

警察署

一条「学校退学!?!」

想「そうなんですよ、前のあの戦いで色々あったんでしようね…」
一条「でしょうねってお前…他人事か?」

想「今は…退学してませんが…アイツらがきつとどうにかしてくれま
すよ。俺はそう信じてます」

俺はそう言い、前を見る。きつとアイツらがどうにかしてくれる。
やるときはやる、そんなヤツらだから

その時、険しく部屋に入ってきた杉田さんが口を開いた

杉田「おい一条!…と八意くん!? まあいいか…」

一条「どうしたんですか!」

杉田「未確認生命体が現れた! 2匹いるらしいんだがどうやら争っ
ているらしい! とりあえず行くぞ!」

一条「八意!」

想「はい! いきます!」

俺はビートチェイサーがある方へ、一条さんと杉田さんはパトカー
の方へ向かった

ゴオマ「:!?」

ガドル「今になってわかると言ったものの力は:こんなものか: ?」

自力でバルバを見つけだし、ダグバの居場所を聞き出そうとしたゴオマ、だがバルバはまるでごねる子供を見るような目をしながら何も言わなかった。それに腹が立ち、ゴオマは力を見せつけるべく腕を振り上げたところに:

ゴ・ガドル・バが現れた。

数々のゴ集団の最強格。強さを求めるためなら何をしようが構わない。

ゴオマ「ガドル:!?」

バルバ「後は頼んだぞ:」

そう言いながら歩き出すバルバ、だが追いかけても、掴まれた右腕はビクともしなかった。だが背中を向けて歩き出したバルバの右頬を、

1発の銃弾が掠めた

バルバ「:!?」

ガドル・ゴオマ「!?」

一条「ちっ:!!外したか!八意!」

想「変身!」

その横から、若者が1人飛び出す。何やら奇妙なポーズをしてから

:

ガドル「クウガ:」

バルバ「あれが:今の世代のクウガか:幼い子供だ:」

次の瞬間、バラを巻き散らかしながらバルバは消えていった。

ゴオマ「俺が相手だろ:!!」

想「:!?」

俺が相手目掛け走り出した時、謎の重圧が俺を襲う。3号の横にいるもう1人の未確認、あいつからひしひしと伝わるオーラ

そのオーラに足が竦んだ次の瞬間、3号が俺の目の前に飛んできた
想「は…?」

俺は飛んできた3号に巻き込まれ、大量の缶を巻き散らかしながら後ろへ吹き飛んだ

想「ぐはっ…なんだよこの力は…」

ゴオマ「…!」

俺より先に立ち上がったゴオマは、ガドル目掛けて走り出すが、また違う方向へ殴り飛ばしていた

想「…!」

冷や汗がでる。上にアッパーを入れただけで俺まで吹き飛ぶあの威力…もしあれが俺にあたったら…

間違いなく死ぬかもしれない

想「…」

全身が粟立つ。足腰に力が入らなくなりそうになる。

ゴオマ「ぐはっ…!だが俺は…」

ガドル「…」

ゴオマ「俺は手に入れた…ダグバの力を…」

想「ダグバの力…?」

そう言いながら飛びつこうとするゴオマ、だがしかし途中でそれは止まる。

想「…?」

腹を抑えながら地面に倒れもがくゴオマ、何かが腹の中で起きているのだろう。人の姿になったゴオマは、なにやらいながらふらつく足取りでどこかへ行ってしまった

ガドル「…」

相手がこちらに目を合わせる。ゴオマは追わないのだろうか…?

想「…!?!」

ガドル「今のクウガの力がどれほどのものか…試してみるか…」
想「…うあ？」

次の瞬間、凄まじいスピードで目の前に現れたガドル、その右手はストレートを決めるために限界まで引き絞られていた

想「…っ!?!」

咄嗟に拳をクロスさせガード体制をとる。だが俺を襲った衝撃はまるでガードなどしていなかったに等しかった

想「ぐあああ!?!」

一気に後ろまでとび、壁にぶつかる。その壁には穴があき、俺はその場に倒れる。

ガドル「まさかこの程度…とは言わないな？」

想「っ!」

俺が立ち上がる前に、ガドルは俺の前まで歩き、俺の首を掴む

想「ぐふっ…ぐあああ…あああ…」

首の骨がミシミシと嫌な音を立てる。俺は両手で相手の手を掴むがビクともせず、俺は首を絞められるだけとなった

ガドル「…」

想「ぐほっ…!?!」

ガドルはそのまま俺にアッパーを決めて吹き飛ばす。俺はビートチエイサーにぶつかり、一緒に倒れる。

ガドル「ゲゲル以外で人間を殺すのはやってはならない…また今度…次は俺のゲゲルで会おう、クウガ」

そう言い後ろを向いて歩き出した。

想「うあ…ごふっ…」

俺は白のクウガになった手を懸命に相手に伸ばすが…

一条「おい！八意！しっかりしろ！」

その言葉を最後に、俺の意識は沈んだ

グ

その程度か…

今のクウガはその程度か？

く弦巻家・一室く

想「うあああ!!」

こころ「!？」

俺は大声を出しながら叫ぶ。夢の中にまであいつがでてくるなんて…

こころ「大丈夫かしら？」

想「え？あ、ああ…こころか？」

こころ「えええ！一条って人から運ばれてきたの！」

想「そうか、ありがとう…」

こころ「ねえ想？」

想「ん？どうした？」

こころ「どうしてそんな顔色が悪いのかしら？手も震えてるわ…寒いのかしら？」

想「…震えてる？そんな…」

俺は手を見る、かすかに震えていた。腕を握って止めよえとするが止まらない

俺はあの未確認に対し、体の底から恐怖を抱いているのだろうか

ガドル『次は、俺のゲゲルで会おう』

これは、次こそ…次こそ会えば間違いなく死ぬ。

想「…！」

その時、恐怖に怯えていた右手を、こころがそつと優しく、暖かく包み込んでくれた

想「こころ…」

その暖かさは俺の体に染みていき、恐怖に支配された冷たい心を、暖かく溶かしていく

こころ「あ、震えが止まったわ!」

こころがぱあつと横で、嬉しそうに微笑む。その笑顔も今じゃ俺には暖かい

想「はあ…ありがとうこころ」

俺は1度深呼吸をしてから言う

こころ「きつとさつき寝てる時に怖い夢を見たのね!私もたまに見るの…!」

想「こころも見るんだな…怖い夢」

あれが全部、夢なら良かったな…でも俺はもう戻れないとこまで来たんだ

こころ「ええ!でもその夢をハロハピのみんなが来てくれてやつつけてくれるの!」

聞いてて思う、相変わらずこころはすげえ夢を見る。現実でも色々凄いがまさか夢まで桁違いとは…

こころ「そしてその先にあるのはミッシェルランドよ!ミッシェルがいつばいいの!!」

目をキラキラさせて言うこころに

想「お、おう…?」

俺はやや困惑した声で返す。そこに誰かがやってくる。

黒服「おはようございます、八意様」

想「黒服さん」

黒服「体調もよくなりましたようで」

想「はい、お陰様で。あとこころのお陰でもあります
こころ「…?」

黒服「…そうですね。そういえばビートチエイサー、修理完了しました。一体あのような損傷…何をしたらああなるんですか?」

想「めちやくちや強い敵と戦ったらああなりました」

黒服「はあ…？」

いまいちよく分からないオーラがある言葉を黒服が言う。

こころ「大丈夫よ！そんな敵はクウガがやつつけてくれるわ！」

想「え？」

いや今戦ったって言ったよね？たしかこころたちの前でも変身してたし…あれ？

そういえば前、美咲が…

美咲『私がミツシエルだーって、目の前で着替えしてもはぐみも薫さんもこころも全然信じてくれなくて…私とミツシエルは違う人って思われてます』

とか言ってたな…とゆうことはつまり…

黒服「はい…こころ様は分かっているらしいやいけません」

想「うっそだろおい…」

俺は頭を抱え上を見る。相変わらずホコリひとつないシャンデリアがあつた。

黒服「はい…はい…わかりました」

突然電話を始めた黒服、俺達が何事かと見ていると電話を終えた黒服が声を出す

黒服「一条様から、未確認生命体が出てきたとの事です。場所は…」

想「わかりました！今行きます！」

俺はこころの手をそつと離す。不思議そうな顔のこころを後目に俺はビートチエイサーへ走り出した

ザザル「なんでどいつもこいつも動く箱に乗ってねえんだ！ゲゲルが進まないだろ！」

イライラしたまま、感情のままに叫びながら歩く。ザザルのゲゲルの法則性を警察は見破り、対策をとった。まず周りの避難と車に乗らないように、エレベーターもバスも電車もタクシーもストップ

これは苦難の判断だった。今は夕方、家に帰ろうとしている通勤

ラッシュだからだ。駅では大混乱がおこっているのだろう。だからこそ、必ず、倒さなければいけない

ザザル「…？」

ザザルがイライラしながら歩いていると、突然後ろからバイクが過ぎ去り止まる

想「あいつが…本当にヤンキーみたいだ…」

ヤンキーと言う言葉はよく分からんが何となく不快に感じる

ザザル「んだてめえ！」

想「…！」

俺はベルトを出す。変身ポーズを決め赤のクウガに姿を変えた

ザザル「…」

相手は耳のイヤリングの様なものを引き抜く。

想「…！」

俺は構えをとる。相手が化け物に姿を変え、イヤリングが爪に変わる。その爪を手の甲に突き刺した

ザザル「…！」

痛そうな音と共に、爪に血のようなものが補充される。あの爪から強酸性の毒を繰り出す…

ザザル「ラアッ！」

想「っ!?!」

華麗に舞い始めながら毒液を爪から飛ばしてくる。俺は地面に転がり避ける。そのまま毒液が当たった場所を見ると

コンクリが溶けていた

想「超変身！」

相手が舞いながら飛ばす毒液を避けながら青のクウガに姿を変える。

ザザル「ハアッ！ウリヤア！」

想「ふっ…！はあっ…！」

華麗に舞いながらする攻撃を、避ける

想「うおっ…！」

飛び上がりながら避ける

想「うぐっ…！」

右に、左に転がる。その間に、まるで何かを予感したようにゴウラムが飛んできてビートチェイサーにくつつき待機する

想（このままじゃ埒が明かない…！）

そう思いながら右に転がる。その横に柵があった。

想「失礼…！」

俺は柵の1番上のパーツをアッパーで吹き飛ばし自分の手に持つ。一回転させると青のロッドに変化した。綺麗な鈴の音を鳴らしながらロッドを振り回す

一か八か、相手が毒液を放つ前にロッドを手の甲に当て、あの爪を落とす…！

想「うおおお…！」

ザザル「ハアア！」

互いに叫びあい相手は爪を、俺はロッドを振りかざす。

ザザル「!?」

ほんの一瞬のタイミングで俺が相手の爪を弾き飛ばすことに成功した。ついでに手の甲には爪の代わりに紋章を1つ

想「…！」

だが相手は諦める気もさらさらなく、俺に向かおうとしていた時だった。大量の銃声が鳴り響き、相手から煙がふきでる

ザザル「グッ…アア…！」

俺が後ろを振り向くと、そこには駆けつけてくれた沢山の警官がライフルを構えていた。

想「ありがとうございます！」

俺はそう言い相手と距離をとる。この一撃で仕留める

距離をとる最中に赤のクウガへ姿を変え、一定まで離れたところで腰を低くし両手を広げる。右足に熱がこもるのを確認しながら相手目掛けて助走をつける

想「おりやあああああ！」

俺は赤のクウガのキックを、確実に胸部に叩き込む。弱った相手は、右手の甲、そして胸部に紋章を浮かべていたが…

ザザル「ウアアア！ハアアアアア！」

一体何があいつをそこまで生き残らせるのか、相手は気合で全ての紋章を消し飛ばした

想「…！」

だが俺も数々の戦闘で学んでいる。俺はゴウラムが付いたビートチエイサーに乗ると、ザザルを轢き、車体にのせて運び出す。

桜井『八意さん！』

警察隊の真ん中を通り過ぎる時、桜井さんが俺に拳銃を投げてきた。俺はそれを受け取りさらに速度をあげる

杉田『八意くん聞こえるか！』

想「はい！」

杉田『こつちで勝手に色々仕切ったんだが、奴の強酸性は身体中にあるらしい！だから地下で倒す。八意くんが相手をこつちまで持ってきて倒してシャッターを閉める、これなら大丈夫のはずだ！場所は…』

俺は場所を告げられる、さすがは杉田さん。作戦の練りが凄く
想「わかりました！」

俺は速度を上げ、速く現場へ向かった

花咲川

P M 1 : 2 0

杉田「…！」

しばらく待っていると、バイクの音が聴こえる。気づけば自分たちの前をクウガのバイクが通り過ぎて行った

想「地下の駐車場…」

俺はしばらく走ると、急ブレーキをかけ相手を向こうに吹き飛ばす。タフすぎる相手はまだ立ち上がる。俺は拳銃を構えながら無線越しに杉田さんに言う

想「杉田さん！シャツターを1枚目から閉めてください！」

杉田『でも…大丈夫なのか？』

想「はい！大丈夫です！」

俺は緑のクウガになる。そのまま全身に電気が走り、俺は緑の金のクウガへ姿を変えた。拳銃を弓に変え、その弓を引き絞りバイクを動かす。

ザザル「…!!!」

俺は走りながら弓を放つ。6発連射した矢は相手の体に全て当たる。俺はバイクを横にたおし後ろに振り向きざまに金の力を解除。赤のクウガに姿を変え来た道をバイクで走り去る

ザザル「…死ぬもんか…！」

地下の駐車場で1人、ザザルは呻く。腹が立つ。まだ自分は死んではいないのにクウガに背中を向けられ逃げられた

ザザル「舐めんじゃ…ねえ！」

だが6発連射した矢から紋章が出始める

ザザル「死ぬもんか…!!!」

それに逆らうように叫ぶ。クウガがいた方向へ手を伸ばす

ザザル「ウワアアア!!」

絶叫が響き、その後凄まじい爆発が地下の駐車場に広がった。

想「…！」

俺は走りながら閉められ始めているシャツターを潜る。1枚、2枚
想「っ!!」

そして最後の3枚目は、少し車体を斜めにしてぐり抜けた。ゴウラムが地面に掠り、火花を散らす。

俺はバイクを止めて、杉田さんの横に並ぶ

しばらくすると、凄まじい爆発音が響き…

目の前のシャッターが歪んだ

全員「…！」

それにその場にいた全員が構えるが…

何も起こらなかった。

想「これ…桜井さんに返しといてください」

杉田「ああ、ありがとう」

俺は杉田さんに、桜井さんから借りた拳銃を渡す。ほっとしてその場に座りかけた時だった

無線が響く

無線『本部から通達！未確認生命体第3号が長野県に飛び立つのを警官が目撃しました！』

俺はその無線を聞いた途端に、戦慄する

長野県には…アイツらが修学旅行で行っている。

想（クソっ…！）

無線『最新の情報によれば埼玉県内を飛び去っている模様』

想「杉田さん俺行きます!!」

俺はただ間に合え、間に合えという一心でゴウラムの離れたビートチェイサーに跨りその場を後にした

く長野県内・PM6:00く

ゴオマ「ここに…ダグバが…眠っている…」

ゴオマは前の戦いでやむなく逃走した。それは身体に埋め込んだダグバの欠片が徐々に変化していく。だかしかし強靱な精神力…というよりは執念、怨念で変化を耐え抜き、遂に「闇の力」を制し究極体に変化を遂げたのだ

警察1「未確認生命体第3号を発見！応援要請を頼みます
！」

パトカーを止め、警官がわらわらとやってくる。約20人だろうか、だがそんなこと今のゴオマにはどうでもよかった、それに体が変化して気分がいい

ゴオマ「ダグバが来るまで…何人死ぬかな？」

といい、近くの警官の血を吸い付くし、殺した

警官達「う、うわああ！」

拳銃すら通用しない一方的な殺戮が始まった

く長野県内・旅館く

リサ「いやあくお風呂気持ちよかったね！」

燐子「そう…ですね」

日菜「今日はあるんっ♪てくるが多かったなあく」

彩「もう2日目…明日が最後か…」

テレビ『本日1時頃、花咲川で未確認生命体第43号が、4号によって撃破され…』

紗夜「あら？想さんが…」

リサ「また倒したんだ！忙しいだろうね」

麻弥「でもそれを簡単にやってのけるのが想さんですよね」

千聖「ほんと…彼は…」

テレビ『ここで速報です。長野県内に未確認生命体第3号が出現、警察隊と交戦を開始したようです。長野県内の人たちは…不要不急の外出を控え…』

花音「どこだろう…近いよ…!?ふええ…」

花音が指を指し、半泣きになる。

先生「みんな集合！テレビ見た人は分かっているかもだけどめっちゃちや近いところに未確認生命体がだよ！とりあえず部屋待機命令がでてるから部屋で大人しく！」

全員「はい！」

↳長野県内・PM7:00↳

警官「応援は…応援はまだですか…！今来てくれた隊員30人のうち…もう26人が第3号に殺されました！」

ゴオマ「…。」

警官の亡骸を踏みながらゴオマが近づいてくる

警官「うわああ！」

その時、警官とゴオマの真ん中に、バイクが止まった

警官「4号…！」

それに続きパトカーが1台やってくる

想「…！」

俺はバイクから降りて周りを見渡す。あっちこっちに血がつき、そこから警官の死体が転がっている。そのまま相手を見回す。

ゴオマ「クウガ…」

その見た目は、本当にあの第3号なのだろうかと疑いたくなるほど変わっていた

ゴオマ「お前など…呼んでいない…」

何かに失望したように言うと、その場に佇む

想「お前…！」

俺はほとばしる怒りに任せ、ビートチェイサーのハンドルを抜き、紫のクウガに姿を変えた

想「…」

俺は剣を片手に持ち、相手に1歩、2歩と近づく。相手は何もせずその場に佇む

想「はあっ！」

俺はゴオマに向けて、肩から袈裟斬りにする。だが、紋章は一瞬で消し飛び、斬られた傷もすぐ消えた

想「!？」

ゴオマ「フン…雑魚が…」

想「…!」

俺は剣を両手持ちに変え、2回、3回と斬撃を相手に繰り出すがもはや皮ひとつさえ斬れない、刃を肩にあて、押し込む、だが相手は後ろに下がるだけ

ゴオマ「…!」

想「ぐっ…」

片手で剣を弾かれる。だが俺は何とかして体勢を持ち直し、相手の腹めがけ剣を突き刺す……が

もはや刺さりすらしなかった。相手が硬すぎる

ゴオマ「…」

相手に剣の先端を持たれ、右の拳で殴り飛ばされる。俺は紫のクウガだったにも関わらず、後ろに飛ばされ、近くの木に頭をぶつけた

想「くっ…」

突然頭をぶつけたせいで目眩がする。そこに容赦なく繰り出されるパンチ、キック。単純な技だったが今の俺には全て生身の人間が金属バットをフルスイングで受けてるとほぼ同じ痛みを感じていた。

想「ぐあっ…!」

まるで遊ぶかのように俺に蹴りや拳を打ち込む。後ろに吹き飛ばす
想「ぐはっ…!」

半場意識を失いかけていたときだった

ゴオマ「グウ…!ウア!？」

ゴオマが頭を抑えながら呻く。俺は何事かと思ひ後ろを振り向く。
一条「…！」

生き残った警官を避難させた一条さんが、なにか機械を片手に調節していた。多分超音波を出す機械なのだろうか、

想（感心してる場合か…！今しかチャンスがない！）

俺は身体に鞭打って立ち上がり、後ろに下がる。

後ろに下がりながら赤のクウガに姿を変え、そこに更に金の力を使う。

想「…！」

赤の金のクウガに姿を変えた俺は、腰を低くして両手を広げ構えをとる。俺が今一番出せる技でないと倒せないかもしれないからだ。

想「はああ…おりやあああああ！」

俺は助走をつけて飛び上がって回転し、相手目掛けてキックを放とうとするが…

ゴオマ「…っ！」

当たるギリギリで俺の右足を叩き落としたゴオマ

想「!?」

そのまま片方の足で俺を蹴り飛ばす。

想「うわああ！」

俺は後ろに吹き飛ぶ。次に腕を見ると、白くなっていた。恐らく時間切れだろう

想「一条…さん！」

俺はいつの間にか横にころがってきた一条さんを抱き抱える。向こうではゴオマが超音波を出す機械を踏み潰して壊していた。

ゴオマ「お前らは…ここで殺す」

そう言いながら近づいてくるゴオマ、俺は白のクウガになつてはいるが、戦う意思を見せる。その時だった

ゴオマ「!?」

風が吹き、木々がざわめく。ゴオマはそれに足を止め、俺たちでは

なく、右の方向を見る

一条・想「…?」

俺達も風が吹く方向を見る。木々がざわめく音のせいか、本能がそう感じてるのか、あまりいい風とは言えなかった。なにか嫌な予感がする

ゴオマ「出てきたなダグバ…」

想「ダグバ…」

ゴオマ「やってやる…必ず殺す…!」

ゴオマがそう言い、風の吹く方向へ翼を広げて飛んで行った。

〈旅館内〉

薫「何か…嫌な風が吹いてるね…」

旅館待機を命じられ、暇つぶしにトランプをしていた薫が突然言う

リサ「えっ…お化け…!」

そう言い頭を抱えるリサ

日菜「なんか嫌な予感がするな…」

日菜もその風に嫌な予感を感じていた

ゴオマ「出てこいダグバ…!お前を殺す…!」

そう言いながら木々をかき分けゴオマは進む。究極の闇を倒して自分が最強になる。今の自分ならそれが出来るはずだ。

ゴオマ「…!」

そして突然、風が止んだ。

鳥の声すら聞こえない。

ゴオマは辺りを見回す。倒す。絶対に、

その後ろに…影が現れる。

ゴオマ「…!!」

ゴオマが気配を感じ、その方面を向き…

想「大丈夫ですか…?」

一条「ああ…ありがとう」

俺たちは、一条さんを抱えながら、2人で木々をかき分けゴオマが飛び去っていった方向へ歩いていった。

その時だった。

凄まじい音が俺たちの鼓膜を叩いた。

想「なんだ!?!」

一条「八意！あれを見ろ！」
一条さんが指さす方向を見ると、

一筋の光……いや稲妻が

地から雲へと登って行った。

想・一条「…！」

しばらくすると、凄まじい衝撃波が俺たちを襲い、たまらず吹き飛ば。おかしい、まだそれなりに距離があるはずなのに、そのはずなのにこの衝撃波

凄まじい風が、俺たちを襲う。立てない程の勢いだった

その日、長野県内全域を停電が襲った。

く旅館く

リサ「きやあああ!？」

千聖「なんなのこの音!？」

近くから一筋の光が舞い上がった瞬間、やはり凄まじい音が皆の鼓膜を一斉に叩いた。そして次にあっちこっちの電気が消える

生徒1「なに!?!停電!？」

花音「ふええええ!？」

彩「なにになに!？」

友希那「!？」

日菜「…!？」

紗夜「日菜！大丈夫!？」

それぞれがそれぞれ、様々なことを心配する。

リサ「あ、ついた」

停電も一瞬、直ぐに電気があつちこつちでつく。

麻弥「なにかあつたんでしようかね…」

燐子「雷魔法…?」

大体が予想する。これは未確認生命体の仕業なんだと

テレビ『速報です！長野県内に現れた未確認生命体第3号は、4号と交戦し…え!?!…ただいま長野県内全域に停電が発生しましたが…復旧…』

テレビから「どうなってる！」や最新の情報はどこだ！などと怒声が飛び交うのが聞こえる。

リサ「一体何が…」

リサ…いやリサ達は彼を真つ先に心配した。

想「はあ…はあ…」

一条「大丈夫か…?」

想「はい、大丈夫です…」

口ではそんなことを言うが実際はそれなりにキツかった。ゴ集団の1人をギリギリで撃破したあとと休む暇もなく長野県まで行き、ポコポコにされ、今はこうやって少し足場の悪い場所を一条さんを抱き抱え歩いている

家に帰ったら寝たらそれこそ死ぬくらいに寝そうだ

スマホのライトを頼りに歩く。今はもう8時、周りは真つ暗だった

ポタツ…

想「…？」

自分の手に何かが滴り落ちた。木から水滴でも落ちたのだろうか
と思い落ちた箇所、手のひらを見る。それをスマホのライトで照らす

一条「どうした…八…意…？」

想「え…？これって…」

俺の右に落ち水滴は…

赤色だった。

俺は一応触る。その水滴は、やけにドロっとしていて、改めてただ
の水ではなかったことを自覚させる

想「…」

さあつと、自分の体から血の気が引くのを感じながら俺は真上の木
の枝にスマホのライトを照らす。

身体から嫌な汗を流しながら少しずつ、少しずつ明かりを内側へと進めていく。

想・一条「!？」

根元に何か引掛かっていた。木の枝と言うにはあまりにも白く。何かが枝分かれしているように…

想「…！」

一条「…」

それが髪の毛だと理解するのに、時間はいらなかった。

そのまま明かりを下にずらす。焼け爛れた皮膚があり、それは腕だった。指先には血が滴り落ちており、先程俺に落ちた血はこいつのものと言うのを嫌ほど知らされた

想・一条「!？」

やがて支えきれなくなったのか、バランスを崩し、地面に落ちてきた身体。俺と一条さんは数歩下がり回避する。

かわいた音を立てて落ちる何か。

想「…」

俺はスマホのライトを再び照らす。

想「うぷっ…」

一条「見るな…」

それは人の顔だった。死に顔はまともじゃない。あつちこつちは焼け爛れ、皮膚が所々破け、中身が見えている。

俺はスマホを落とし、その場に嘔吐した。あんなものを見るのは初めてだった。全身を寒気が包み、再びあの顔を思い出し胃の中の物を吐き出す

一条（彼はまだ子供だ…たとえクウガだったとしてもこんなものを見たら一溜りじゃない）

想「ゲホゲホッ…！おうっ…！」

一条は、吐く少年を見やり、スマホを取り出し警察に連絡する。

〽旅館〽PM10:00〽

テレビ『ただいま速報です！未確認生命体第3号が4号により撃破されたと、正式に発表がありました！』

それに旅館が湧く。みんなの心配が一気に解けていく。

リサ「よかった…！」

日菜「さすが想くん！」

紗夜「なんであなたがドヤってるのよ…！」

花音「よかったあ…！」

千聖「大丈夫よ、花音」

〽花咲川内・PM11:30〽

黒服「先程から…八意様はあのような様子で…？」

へりで迎えに来た黒服が、一条と影で会話をする

想「…！」

彼の目には殆ど光が宿っていなかった

一条「はい、彼は今日、慣れないものを見すぎました。しかも連続で2体の未確認生命体と戦ってくれました…ゆつくり休ませてください」

頭を下げながら一条が言う。それに黒服が答える

黒服「了解しました。では私達はこれで…！」

一条「ありがとうございます。俺はもう少し現場にいるので」
想「…！」

ビートチェイサーと八意想を乗せたヘリコプターが飛び始める。
それを一条は見送り、現場へ戻った

↳弦巻邸一室・AM9:00↳

想「はあ…」

俺は頭を抱え、昨日の出来事を忘れようとする。だがあの顔、あの悲惨な死体は目に焼き付いてしまい中々離れなかった。

想「はあ…」

再び、ため息をつく。あの後、ほとんど記憶がなかった。次日覚めた時は弦巻家の部屋に寝かされていた。

黒服「お目覚めになられたでしょうか？」

想「今起きました…学校は…そうだった」

弱々しく言う八意に、黒服が目を瞑る。自分達の権力を使つてもどうしようもなかった。弦巻家よりも上の資産家の手によって八意は辞めさせられた。

黒服（本当なら…今も学校に行けて皆様と笑われていたでしょう…）

だがそれを今の本人に言う訳には行かなかった

黒服「お食事は…どうしましょうか？」

想「今はいらないです。ありがとうございます」

黒服「承知致しました。なにかご要件があればお呼びください」

想「分かりました」

そう言つて黒服さんは出ていった

想「俺は…あんなやつと戦わなくちゃいけないのか…」

めちやくちや強くなつていたゴオマを一撃で葬り、更に長野県内全域を停電させる。果たしてそんなやつと戦つて勝てるのだろうか

想（いや、やれ。俺が…俺がやらないと…）

その俺の思考に、声が響く

燐子『何かあつたら…私達を頼つてください…』

小川『それくらいでへこたれるようなやつじゃないだろ』

紗夜『それくらいで私達は離れたり見捨てたりしません』
言われてたなそんなこと…俺は1人じゃない…

想「そうだったな…」

俺は少し微笑み、外の空気を吸いに行った

警察署・未確認生命体対策本部

杉田「なんだよこれ…」

一条「わかりません…けどこれは…」

一条達が見ているとあるネットサイト、何故それを見ているのか

ジャーザと名乗る女が投稿した内容だった

『これから567人殺す』

杉田「殺害予告…」

一条（また八意を頼るか…？いや…）

あれだけ無理をさせた。なのに帰ってきてきて即座に未確認生命体。

それは可哀想だと思う

杉田「八意くんはどうしてるんだ？彼を呼べばどうにかできるんじゃない…」

一条「いや、今はそつとしておいてあげてください」

杉田「…一条」

杉田は現場に行つて八意の様子を見たひとりだった。あれだけ無理をして、頑張つて戦つたんだなと思うと。守るはずの我々が惨めに見える。

杉田「そうだな…少しは頑張つてみるか…」

想「久しぶりのドライブ♪」

俺はビートチェイサーに乗りながら海岸沿いを走っていた。この海岸は、俺とトライチェイサーが最後に走つた場所だった。

そこを通り抜け、近くの街にでる。しばらくするとライブハウスcircleの看板が見える

想（やつべ…バイトやらないとなあ…）
そのまま近くの道に出る。

想（ここが俺が初めてこの世界に降り立った場所か…このあとすぐ
グモンと戦ったっけな？）

我ながら笑ってしまふ。ここに来てからそろそろ1年になる。時
が流れるのも早い

想（もう、あの世界には戻れないか…）

この世界は楽しい、だが元いた世界を思うと、少し寂しく感じるの
だ。でももう戻れない

第一向こうに戻っても何も無いし…

無線『ピー！ピー！』

想「…？」

俺は突然鳴り響いた無線に驚きながらも応答ボタンを押す。

無線『本部から転写！老人会を乗せたツアー船が、未確認生命体第
44号に襲われた模様！44号はその後行方を眩ませましたがツ
アー船最後の通信によると、上陸地点は…』

想「!？」

最近のツアー船、すげえ。一体誰が乗ってるんだすげー気になる。
と思いながら俺も向かうべくビートチェイサーを走らせる。

〈花咲川内・PM1:00〉

一条「…!？」

予想上陸地点に向かうべくパトカーを飛ばす一条。その横に誰か
が着く

一条「八意…！」

ビートチェイサーに乗った八意が手を出し、言う

想「一条さん！拳銃を貸してください！」

なぜ来た。あれだけ悲しそうにして、ろくすっぽ睡眠だつて取れて

ないはずだ。なのに何故…

想「…」

一条は何かを言いかけたが八意の目を見て諦める。今の彼は止められない。

一条「頼む！」

一条は懐から拳銃を渡すと、八意はスピードを上げて走っていった

一条「強いな…あいつは…」

一条はそう言つて、少し微笑んだ

〈予想上陸地点・PM1:15〉

想「…！」

俺はバイクを地上ギリギリで停める。あと少しミスったら海に落ちるところだった。近くは倉庫街、情報によれば相手は海にいる。倒すならいまだ

想「変身！」

俺はベルトを出し、赤のクウガに姿を変える。そのまま拳銃を取り出し、構えて時間まで待つ

想「…」

俺は、何か嫌な気配がしていることに気づく。誰かに見られているような…そんな気配だ

想「…」

近くを目だけで見回すが何も見当たらない。だが気配だけでわかる。これは人間じゃない

想「…！」

気持ち悪い感覚を抱えながら俺は緑の金のクウガに姿を変える。ハッキリと音が聞こえる。

さらに気配が気持ち悪くなった。だがモヤがかかっているかのよう

に遮られ分からない

想「!?」

だが突然、そのモヤが晴れ、自分の後ろに異様すぎる気配が感じ取れた。

それに気を取られ、海から飛んできた1本の槍に反応が遅れた。

想「っ!？」

俺がボウガンを放つより早く

俺の左肩を槍が貫いた

想「ぐわあああ!!ぎいああああああ!」

凄まじい痛みを感じながら俺は後ろに吹き飛ばされ、近くの倉庫に宙ぶらりんになる。それを止めるのは左肩に貫通した槍。

想「ぐっ…うあ…!」

緑の金のクウガのせいもあり、その痛みは凄まじいものだった。まるで全身を刺されているような…

肩から地面に血が滴り落ちる

想「ぐっ…!」

俺は左肩を貫く槍を持ち、引き抜こうとする。

想「ぐい…!あああああ!うあああああ!あああ!」

少しでも気を抜いたら気を失いそうな痛みを全身が襲う

まだ抜けないのか。どれだけやってもまだ抜けない。

想「ぎあああああ!ぐあっ!!」

肩から槍を引っこ抜く。周りに血と肉片が飛び散る、俺はふらつく足取りで槍を投げ捨てる。その時に腕を見たのだが、白色だった

その槍はアクセサリーのようなものに姿を変え、その場に落ちる

想「ぐっ…うう…」

俺はパトカーの音がした瞬間、俺の中で何かが弾けたのか、その場に倒れ意識を失った

一条「…か！…！」

最後に聞こえた声は、一条さんの叫び声だった。

↓弦巻家・PM3:45↓

想「っ！」

美咲「おわっ…！」

俺は飛び起きて、辺りを見回す。あの未確認はどこに行った。だが目の前でおどろいた顔をしている美咲を見た途端に…ここまさか弦巻家か？またここにリスポーンしたのか？と考えた

想「…！」

上を見る。相変わらず綺麗なシャンデリアだ。

美咲「そんないきなり動いて大丈夫なんですか？」

想「ああ」

俺は肩にある包帯をとりながら言う

美咲「えっ…ちよなに…！」

美咲が途中でとまる。それもそうだ。貫通した傷は塞がって完治していた。

美咲「傷が…無い…？」

俺は頷く。美咲はしばらく目を擦っていたりしていたが、やがて俺に聞く

美咲「そのお腹にある石？となにか関係があるんですか？普通の人間ならそんなすぐ治りませんよ…前だって死んだのに生き返ったりとか…」

想「ああ、普通の人間なら出来ない」

美咲「その言い方じゃまるで自分は普通じゃないって…」

言えない。このままでは戦うだけの、アイツらと同じ存在になってしまうことなど、

ココ最近、改めて自覚することが増えた。最初は使う時に激痛が走った金の力も、最近じゃ自分の意思でなんの痛みもなく出せる。それほど中身の構造が変わったのだろう。戦うために、その最適解を指すために

想「もうこうやって戦ってる時点で普通の人間じゃないだろ…」

俺は笑いながら言う。美咲もそれに釣られる

美咲「ですよねえ…というか次は一体どんな敵と戦ってますか？」

想「姿は見えてないし…分からんなあ…」

美咲「え？相手は空にいたんですか？」

想「違う、海の中だった。緑の金のクウガだったんだけどな」

美咲「あく…なら余裕…とは言えなかったんですね」

想「ああ、何かに邪魔されて気が散ったんだ。その時にグシャァって」

こころ「美咲ー!!あ!想も起きたのね!」

美咲「こころ…」

想「おう、お陰様でな!」

こころ「ちようど良かったわ!」

想「ん?何がだ?」

こころ「美咲!船上ライブをするわよ!!」

そう言いながらこころが紙を広げる。そこには大きく、

『circle合同船上ライブ!!』

と書かれていた。

美咲「はい?」

想「へえ…」

横で美咲が口を開けている。俺はもうほとんど慣れてしまった…

美咲「船上：ライブ？」

「こころ「ええ！ここでみんなでライブをするの！」

そう言つて船の地図を見せてくれる。その地図には、でかいたくさんの部屋、温水プール、バイキング、ライブの練習室などがあつた
想「バイキング：美味そう：」

美咲「え？そこ？それにしてもこころ、この船でやるの？」

「こころ「ええ！黒服の人達に買ってもらったわ！」

買 っ て も ら っ た ？ いやい

やちよいまで、まるで誕生日プレゼントみたいな感覚で船買うの？弦巻家本当にどうなつてるの？

美咲「買ってもらった：」

美咲も頭を抱えて唸る。ここで全バンドやるのか…

想「でも許可はとつたのかよ、ほら、こようゆうのは他のバンドの許可がないと」

こようゆうのは大体AfterglowとかRoseliaとかが拒否しそうだ。ポピパはノリノリでやりそうだけど…

「こころ「問題ないわ！circle合同ライブだもの！」

想「：」

「こころが自慢げに胸を張る、俺は絶句してしまった。誰かこの無軌道の1度発車したら止まらないロケットを縛り付けてくれ

美咲「こころはこようゆう子なんですよ…」

美咲が頭を抱えながら言う。流星はハロハピ唯一の常識人と言われているお方、格が違う…

想「じゃあもし嫌つて言われたら？」

「こころ「circleでやるわ！」

想「：」

もう、最初からcircleでやればいいんじゃないかな

「こころ」

「そんな俺の考えを他所に、こころは鼻歌を歌いながら踊っている。想（まあ…でも楽しそうならいいかな…）」

俺はそう思いながら再び寝転んだ。

美咲「あ、また寝ちゃった…」

想「：Z z z」

美咲（ほんと、無防備だよね…いつもはあんな奴らと戦ってるのに…）

「こころ」「あら？寝ちゃったのかしら！」

踊っているこころが足を止めて八意を覗き込む。所々垂れた髪が八意の顔をくすぐるが起きないようだ

美咲「うん、そうみたい、寝かせてあげよう」

「こころ」「それにしても不思議だわ…！」

美咲「ん？何が？」

「こころ」「いつもみんなを笑顔にしてくれるのに、寝てる時を見ると何故か守ってあげたくなるの！」

美咲「確かに…言いたいことは分かる」

「いつかどこかへ行って戻って来なさそうな」

美咲（もし…未確認生命体の事件が終わったら…想さんは一体どうするんだろ）

ふと気になった。今は未確認からみんなを守る為に戦っている。だが未確認が解決したら？八意がこの街にいる必要なくなってしまう

「美咲（いや…私達が作ればいいんだ…想さんの居場所を…！）」

自分から考えておいて思う。私何考えてるんだろ…

もしかしていなくなったら寂しいと私は感じるのだろうか…

「こころ」「美咲…？」

美咲「ふえっ!?わっ!こころ!？」

いつの間にか自分の目の前にいたところ。透き通るような金色な目をこちらに向けている

美咲「な、なんでもないから！ほらいこ！はぐみを待たせてるから！」

そうして美咲はそそくさところを連れ、ハロハピ会議室へ向かった

く羽丘女子学園く

リサ「はあく！久しぶりだ！想くんに連絡！…あれ？」

日菜「想くんに連絡しよつと！…あれ、繋がらない…」

く花咲川女子学園く

花音「久しぶりだね…」

千聖「ええ、そうね。彼にお土産を渡しに行こうかしら」

彩「私も！」

く弦巻家く

想「…zzz」

スマホ「ピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコン」

日菜やりサ達からのスタ連で莫大通知の八意のスマホ。この大惨事に気づくのはあと少し…

く警察署く

一条「乗客200人全員殺害…!?!」

杉田「ああ、しかも老人ツアーだ…前に殺された船は保育園児だけ…わざと弱い物を狙ってる！くそっ！」

杉田が机を叩く。一条も歯噛みする。

一条「早く…止めなければ…」

杉田「その件だが…海上保安庁が手を貸してくれることになった。今上が作戦を立ててる」

一条「そうなんですか？」

だが杉田は顔を暗くしたままだった。

杉田「あの未確認、海を泳ぐのが早すぎる…彼を頼るしかないんだが…体調はどうだ？」

その時一条は、憑き物が無くなった八意の顔を思い出す。あいつならきつと…嫌と言つても着いてくるのだろう

一条「分かりました、とりあえず連絡を取ってみます。海上保安庁を使った作戦日はいつですか？」

杉田「まだわからん…だが早く2日、だそうだ…」

一条「2日も…」

その間に未確認が出てこないとは限らない。その声が聞こえていた場の人間は、ただ出てこないのを祈るだけだった

〈弦巻家一室〉

黒服1「もうこんなに…」

黒服2「はい…八意様の体内にある霊石は徐々に八意様の体の神経、筋肉を強靱にしています」

いつの間にやらとったレントゲンを見ながら、黒服3人が唸る。

黒服3「金の力を使い始めてからはさらに急速にその発達が見られます…このままでは…」

黒服1「あの敵と同じ、戦うための生物兵器に…」

黒服2「彼は沢山の人に好かれています…なのにもし生物兵器なんかになつたら…」

黒服3「はい…間違いなく我々の前から姿を消すかもしれません…彼は優しすぎますから」

その3人の先には、レントゲンに映った霊石がキラキラと輝いていた

く弦巻家一室 PM9:45

想「…ん？」

俺は目を覚ます、やけにいい匂いがすると思ひながら横をむく

想「おう…」

こころ「…Zzz」

やけにいい匂いがする原因は何故か俺の横で寝ているこころだつた。

想「はあ…なんで寝てるんですかねこころで…」

俺はこころを起こさないように慎重に布団から出る。真ん中にこころを寄せ布団を被せる。机にはこころが書いてたであろうライブの計画表が沢山あつた。

『circle合同船上ライブ!』

と書かれたを手に取り、1つずつ目を通す

想「こころらしい、いい案だな…」

沢山の笑顔が溢れる…そんなライブにしたいな。だから…

想「俺は…絶対に勝つ…」

そう言いながらスマホを手に取り…

想「なんだこれ…」

Limitに溜まる999件以上の通知、恐る恐る開くと日菜や千聖、リサなどから大量に送られていた

想「明日が大変そうだ…」

確か明日バイトがあつたな…明日こそちゃんと行かないとな…

俺はカーテン越しに月を見ながら、今までの笑顔を思い出した

想「俺がもし死んだら…誰か悲しんでくれるかな…」

そんな声を漏らして…

く想の自宅・AM2:00く

想「久しぶりに帰ってきたな…」

相変わらず弦巻家から送られてきた家具だけしかない家、あとはゲーム用のパソコンだけ、しかも最近ゲームしてないしする暇ないし…

とりあえず冷蔵庫から水を取りだし口に運ぶ。

想「さて…久々にゲームするかな！」

俺はそう言いながらパソコンの電源をONにし、マイク付きのヘッドホンを付けてゲームを起動する

想「ん…？誰かログインしてるな…」

俺の数少ないNFOのフレンド、3人しかいないが…

想「燐子とあこと紗夜だ…」

とりあえずチャットを送ってみる。すぐに帰ってきたくチャットく

あこ『ええ!?!起きてたの!?!』

想『お前らこそ、早く寝ろ…』

燐子『あともう少して限定装備が…』

紗夜『はい、あともう少して』

想『お前ら明日は休みだが修学旅行帰ってきたばっかだろ…眠たくないのか?』

燐子『限定装備は剣なんです(?^?ゞ』

想『よしやろう、今すぐ行こう。俺も着いてく』

紗夜(チョロい…)

その後、1時間かけてボスを倒し、何とか限定装備の剣を手に入れる想たちだった

想「ふああ〜…」

我ながら間抜けに盛大に欠伸をしながら起きる。最初に見たのはパソコン、寝落ちしたのか画面は付けっぱなしだった。ヘッドホンは外して床に置いてある。

想「今何時だ…?」

確かバイトは昼の1時、何気に人が多い時間帯だ。俺は手探りでスマホを出し、画面を見る。

昼の11時、まだ余裕がある。

想「あく〜!」

再び床に寝転ぶ。最近肌寒くなってきたというかももうすぐ冬か…こたつ買わねえと、そう考えていると。家のインターホンが鳴る

想「はいはい今出ます」

そう言いながら玄関を開け…

リサ「やつほー!☆」

ボタンツ!!

俺は何故か驚いて扉を反射的に閉めてしまった。ドアの向こうでは『え!?なんで!?!』などと声が聞こえる

想「おかえり、リサ」

ベースを背中に背負い、両手に袋を抱えたリサは頬を膨らませながら

リサ「修学旅行から帰ってきてまだテンション上がってたのに台無しだよ〜!!…ただいま…」

と言った。最後のただいま、可愛かった

想「とりあえず入れ…部屋は少し汚いが…」

リサ「気にしない〜!」

そう言いながら元気よく家に入っていく。俺もそれに続き歩く

そこからリサの話は三十分に至った。修学旅行の思い出たちを話してくれた。山登りで花音さんが迷子になったり、バスで友希那が酔ったり、色々だった

リサ「2日目の夜…めちやくちや大きい音鳴って停電したんだくめちやくちや怖かったよ…ってかあれ確実に未確認生命体の仕事だよ！」

想「ああ、俺も長野まで行った…」

リサ「やっぱりかく、だつて第3号が第4号に倒されたーって言うてたし…」

想「うん…」

違う、本当に倒したのは俺じゃない

リサ「でもすごいよね、やっぱり！」

想「そうか？ありがとう」

リサ「…なんか隠し事してるでしょ？」

想「…!?!」

リサ「一応ずつと見てきてるんだからそれくらいは分かるよ？」

リサはジト目で俺を見てくる。うつ…と息詰まる俺

想「…」

リサ「ほーら！いいなさい！おねーさんがなんでも聞いてあげる！」

想「わかったわかった…わかりました」

俺はその日にあつたことを全て話した

リサ「それは嫌だっただろうね…私だつてそんなものを見たら暫くは無理だよ…」

想「今はもう大丈夫だけどな」

リサ「今も確か出てるんでしょ？未確認生命体、早く終わって欲しいな」

想「そうだな…」

リサ「終わつたら、またみんなでゆつたり海に行つたりしたいな！」

あつちも行きたい、こつちも行きたいと言い出すリサを見ながら時計を見る。リサも時計を見る

リサ「もうこんな時間！…送ってくれる？」

想「元からそれ目当てだろ？」

リサ「あーわからないなー」

想「はあ…いいよ。俺もバイトだし」

リサ「ほんと!? やったあー!」

想「それにしても…この大量の食材どうするんだ？」

リサ「とりあえず冷蔵庫に、後でもう1回想くんちに行つて色々する!」

想「ええ…」

そう行つてる間にも、刻々と時間は過ぎていく。俺はとにかく、ビートチェイサーにリサを乗せてcircleへ向かった。

〈circle〉

まりな「みんな集合〜!」

まりなさんがみんなをフロアに集める。ハロハピ、ポピパ、afterglow、Roselia、パスパレ、

ましろ「…」

あれ?なんか増えてる?

まりな「あつ、言つてなかったね!最近circleに新しく入つてくれたバンド、Morfonicaだよ!」

想「なるほど…初めまして!ここでバイトさせて

貰つてる八意想です!」

ましろ「よ、よろしくおねがいします。倉田ましろっていいます」
瑠唯「八潮瑠唯と申します。」

つくし「双葉つくしです!よろしくおねがいします!」

七海「広町七海だよ!よろしく〜」

透子「桐ヶ谷透子だよ!よろしくね!」

みんな元気なこと何より、挨拶もそこそこにまりなさんからの話が始まる

まりな「みんなでcircle合同ライブをしようって考えてるの

！」

香澄「やりますやります！大賛成！」

友希那「それはいいけど……」

まりな「場所は…船の上よ！」

蘭「…船の上？」

イマイチピンと来てない一同、まりなさんはパンフレットをみんなに回し見てもらう。パンフレットを開いては固まる人達。ああ…これは叫ぶなと思

爆音に備えて対ショック姿勢をとる。耳を全力で塞ぎ、口を少し開ける

めつちや響いた

瑠唯「…この船はあの有名な…」

透子「しってるの？るいるい！」

ましろ「いや…だってこの船……」

つくし「ましろちゃん!？」

混乱のあまり卒倒するましろ。その近くでは胸を張りながらころがドヤ顔を決めていた。意外と可愛いものだな

まりな「うん…私も正直びつくりしてる。」

千聖「これは弦卷さんが…？」

こころ「ええ！みんなに笑顔でライブをして欲しいの！」

あこ「ステージ規模が武道館並…」

燐子「人が…いっぱい…？…」

リサ「ちよ燐子!？」

まりな「とりあえずやるかやらないか…どうする？」

一同「やります!!」

まりな「よしよし…予定は明日のお昼の2時に集合！いきなりだと思うけどみんななら出来るよね？」

香澄「大丈夫です！」

蘭「いつも通りやるだけだよ！」

彩「がんばります！」

友希那「ええ、全力でやるわ」

こころ「私達もやるわよ！」

ましろ「が、がんばります…」

それなら早速練習だ！とみなそれぞれ張り切りながら練習を始めるべく奥に入る。俺はそれをしばらく見ながら…

想（電話だ：一条さんから？）

俺は一条さんからかかってきた電話に出る

一条『一条だ、八意聞こえるか？』

想「はい、聞こえますよ？どうしたんですか？」

一条『実は、海上保安庁と協力して未確認生命体を追うことになった。作戦予定日は明日、いけるか？』

想「明日…!？」

明日はみんなのライブを手伝わなければ行けない。だがしかし…優先しなければいけない

一条『どうした？八意』

想「いや、なんでもありません…明日ですよね？」

一条『ああ、明日の昼の3時からだ』

それじゃあまた、といい電話を切られる

まりな「予定…出来ちゃった感じ？」

想「聞かれました？まりなさん」

まりな「うん…また未確認と戦うの？」

想「はい…」

まりな「でも最初より随分と顔つきが変わったよね！お姉さんの介抱が聞いた感じかな？」

想「それのおかげもありますし、みんなのお陰でもあります。みんな

ながいなかったら今頃俺は…」

まりな「そうすぐにマイナスにいかない！いつでも突っ切る！それが八意君でしょ？」

想「突っ切る！というキャラでもないんですけどね…」

まりな「あははは…明日、想くん抜きで頑張るね！」

想「いや、お客さんを船に乗せるくらいはしますよ」

まりな「T w i t t e rとかで宣伝してるけど凄い反響だよ！明日は人が多そうだね！」

想「まじっすかあ…でも手伝いますよ！」

まりな「大丈夫なの？」

想「大丈夫です！」

つくし「やっぱりなんか怪しいなあ…八意って人…」

ましろ「え…？そうかな？」

七海「なーんか隠してそうなのだよ」

瑠唯「ええ、そうね」

影から八意を見るM o r f o n i c aであった。彼女達が彼の秘密を知るのは少し先のお話

??? 「あはは！」

バルバ「気分がいいのか？」

??? 「うん、とつてもね。この時代にもいたんだね」

白い服を着た青年は笑う

??? 「クウガが…」

〈港・AM 11:15〉

想「うわあ：でつけえ船：」

海の方からやってくる船を見ながら俺は自前のコンビニ弁当を食べる。服装は一応人に見せられるものだ

まりな「毎日コンビニ弁当食べてる：？」

想「ひは：そんなわけ：」

俺は弁当を食べながら言う

小川「なんとなく想像できるよね、うん」

まりなさんの後ろから気さくに話しかけてくる小川

想「んなつ!?!なんでお前がここにいるんだよ！」

まりな「あれ？知り合い？」

想「知り合い：と言えば知り合いですね」

小川「友達じゃないか、君からそう言ってきたくせに」

前よりかは幾分か女っぽくなった小川、それと同時に俺に絡んでくるのが増えた。一体何故なのか、本人に聞いても教えてはくれなかった

小川「はあ：ほら早く手伝ってよ。機材運ぶから」

見れば機材が積まれた箱が、紐でビートチェイサーに括り付けられていた

想「俺のバイクはトラックじゃないんですか？」

小川「え、いいじゃん。楽だし」

いくらなんでも機材がないから無理だぞこれは…、そう行ってる間にも船が到着する。客を載せるための橋を設置し、しばらくしてから荷物が運ばれていく。

黒服「これはこつちです、慎重におねがいします」

黒服さん達がテキパキと指示を飛ばす。俺たちスタッフはそれを手伝う

想「にしても：マジの豪華客船だな：？」

小川「私も…人生で一生乗ることは無いって思ってた…」
人生ほんとは、何があるかわからない。俺の場合、まず一回死んでるし

小川「ほわあ…綺麗なベッドだ…後で寝るか」

ほわあ…とか言うの？こいつ

想「お、ゲーセンあるぞ！」

小川「あっ！料理店！」

想「カジノ！俺たちやらねえけど…」

気付けば俺たちは、機材を運ぶより探検をしていた。だって…

黒服「完了しました」

全部黒服さんが終わらせたし…

まりな「うおー！おお！」

まりなさん興奮しっぱなしだし、てかあとは入場だけだし…

まりな「あっ！あともうちよつとでお客様来るよ！手伝って〜

！」

想・小川「はい！」

香澄「こんにちは！」

想「お前ら全員来たのか！」

何故か香澄を先頭に全員やってきた。それぞれまりなさんや俺に挨拶やお礼を言い、船に入っていく。練習とリハーサルだろう

リサ「これ、差し入れ！」

そうやって渡されたのは、可愛くラッピングされた袋、その中にはクッキーが入っていた

想「サンキュー！久しぶりだな、リサのクッキーは」

リサ「小川さんの分もあるよ！」

小川「ありがとうございます！」

リサ「じゃ！頑張って！」

そうやって入って行く

美咲「お疲れ様です」

花音「が、頑張ってるね！」

つくし「…。」

何故か Morfonica のみんなは俺に冷たかった。まだ会ったばっかだし緊張しているのだろうか。別に怪しまるようなことはしてないし…

まりな「えつと…小川ちゃんはチケットを配ってあげて！で、八意くんはチケットにスタンプ、乗車確認表をおす！」

想「こんな形でライブすんの…うちが初めてだろうなあ…」

小川「ほんと…弦巻って何者なんだ…？」

そう言っている間にもお客さんが並び始める。まだ入場まで30分なのに…大行列だ

まりな「circle 史上初かもしれない…」

想「そうですね…あつ、もう時間だ」

まりな「頑張つて！私は機材のセットとかあるから！」

想「はーい、お客様！こちらへお並びください！」

つぐみ父「やあ！想くんじゃないか！」

想「つぐみのお父さん、お久しぶりです！てことはお母さんも一緒になんですネ」

俺がそう言うと、お父さんの後ろから母が現れる

つぐみ母「ええ、それにしてもまさかここで会えるなんて！」

想「そうですね！中でつぐみが頑張ってます。ちゃんと見てあげてください」

そう言いながら中へ通す。1番初めから知ってる人に会えるとは幸先がいい。

〈10分後〉

沙綾父「おお！八意くん！」

想「沙綾のお父さんですか！」

「ああー」という沙綾父の手には袋詰めされたパンを持っていた。大方みんなへの差し入れだろう。山吹ベーカリーのパンは美味しいからね仕方ないね

想「どうぞ、ごゆっくりお楽しみください！」

そう言って通す。次は何かセレブのような人だった

「こころ母「貴方が八意さんね？」

想「えっ…なんで俺の名前を…？」

「こころ父「君の話は常々娘から聞いてるよ。」

想「娘…？」

それでもまだ分からない俺を察してくれたのか

「こころ母「申し遅れました、弦巻こころの母です」

「こころ父「弦巻こころの父です」

と二人して頭を下げながら言う。

想「え…ええええええ!!」

俺の絶叫が響き渡る。周りが何事かと騒ぎ出す

想「けほん…いつもお世話になってます」

「こころ父「こちらこそ、娘が世話になってるな！」

父母あって子供あり、父が俺の肩を笑いながら叩く。それを見た近くの黒スーツの男が一瞬怪訝そうな顔をするが直ぐに治る

「こころ母「こころがいつも電話で貴方の話をする時はハロハピよりも笑顔で話すのよ」

「こころ父「ハロハピのお陰でこころはあんなに笑うようになった、それに八意くんのお陰でさらに笑顔が増えた。嬉しい限りだよ」

想「え？それじゃあまるで昔は全く話さないみたいな…」

「こころ父「その通りだ…どんなおもちゃを買おうがぬいぐるみを買おうともこころは笑いもすらしなかった…私達も忙しくて中々会えずにいてな…父として申し訳ない」

想「そうだったんですか…」

今までのあの言動、行動にも辻褄が合う。あれだけベタベタ触れてくるのはきつと甘えたかったのだろう。

「こころ父「これからも彼女をよろしく頼む」

そう言う中に入る。俺はその背中を見ながら思う。構ってやりたくても構えない、金で人の心は動かせない…か…

想（仕方ねえな…）

??? 「あの子すみません」

想「あ、すみません」

俺はすっかり他の客のことを忘れていた。次のお客さんはOLのような見た目をした女の人だった。カバンを手に持ち眼鏡をかけていた

想（すげー美人だな）

俺はそう思いながらチケットにスタンプを押し、中に通す

??? 「ありがとう」

そう言いながら中に入る。俺は何故かあの女性が引つかかり姿を目で追う

想「っ!？」

中に入りこちらを1度見る。その口端は…何故か歪んでるように見えた。笑いをこらえるような、それに俺は猛烈に嫌な予感がする
だが、次から次へと来る客に押し通されて見えなくなってしまうた。

??? 「ふっ…ここでなら一気に殺せる…ザギバスゲゲルの為だ…無駄な殺しはさつさと終わらせよう」

そう言つて笑う。その片手にはPCがあった。

〈港・PM2:30〉

想「じゃあ俺はこれで」

何とか全ての客を中に入れ、俺たちは一息ついた。そろそろ作戦が始まる時間になるはずなので、俺は一息つく暇もなくビートチェイサーに跨る

まりな「私達も頑張るからね!」

小川「生きて帰ってきなよ!」

想「変なフラグたてるな!」

その会話を最後に、俺はビートチェイサーを走らせる。後ろでは、2人がまだ手を振っていた。

〈警察署・PM2:50〉

想「一条さん！」

一条「来たか八意！」

俺はビートチェイサーを止めて一条さんに歩み寄る。周りには武器に身を固めた集団と警察がなにやら話し合っていた。

想「あれが…」

一条「ああ」

俺はその集団を見る。普通なら心強い味方なのだろうが俺には到底そうとは感じられなかった。

想「…」

一条「服装、どうにかしないのか？」

想「え？ああ…」

今の俺の服装は、胸あたりに大きく『circle』と刻まれた赤のTシャツを着て、その上にジャンパーを羽織っていた。まあ場違いな服装ではある。

想「別に…大丈夫ですよ」

一条「そうか？支障が出ないならいいが…」

刑事「え？誰だあの子…」

とか何とか聞こえるが俺は聞こえないふりをする。あーあー聞こえないーい

警察署・PM5:00

張り詰めた空気の中、杉田さんの声でみんなが動く

杉田「来たぞ！ネットの殺害予告だ！…なんだ…？6つのバンドが5:30に消え去る…」

想「6つのバンド…？」

俺はしばらく考え…

思い当たる

か
しまった。まさかアイツらもいつの間にか入れてしまっていたの

6つのバンド…思い当たる節はひとつしかない。

あの船だ。リサ達が乗った船だ

想「クソが…！」

俺は考えるより先に動く。ビートチェイサーに跨り一気に走り出す

一条「八意!!」

一条さんの声がするが俺は無視する。

想（頼む…間に合ってくれ!）

〜船・PM5:05〜

リサ「うわ…人多いね〜」

ステージに入る前に、客席を通るみんな、既に人は集まりつつありその中には小川やまりなさんが指示を飛ばしていた

あこ「あれ？想兄がいない？」

隣子「さっきまではいたのに…トイレでしょうか？」

たえ「意外と船に弱い？」

はぐみ「あつ！すみません！」

はぐみが女の人にごぶつかる。だが女の方は笑顔で微笑むだけだった。そのまま外に出る

???「いえ、お気になさらず」

りみ「あの人めっちゃ綺麗な人やね…」

美咲「ほんとですね…お忍び芸人か何かですかね？」

〜港付近・PM5:08〜

想「…！」

俺は赤のクウガに姿を変えて港へ向かっていた。

杉田『聞こえるが！八意くん！』

想「はい！」

無線越しに杉田さんが言う。俺が途中で抜けたにもかかわらず、情報をくれた

杉田『あいつな居場所には検討がつくんだな…！頼む！』

想「ありがとうございます！」

杉田『あとネット上の書き込みにはこんなものがあつた！』

『どうでもいい殺しはさっさと終わらせて、もつと大事なゲームを始めたい』

想「…!？」

そんなどうでもいいことで、アイツらの…その場にいる人達の未来を平気で奪う…

リサ『私たち…FUTURE WORLD FES.に出たいんだっ！』

そう言つて微笑むリサの顔を思い出す。

ゴウラム「…！」

ゴウラムが空から飛んでくる。俺は青のクウガに姿を変え、ゴウラムの足に捕まり海を飛ぶ。これが一番最速の方法だった。飛んでいる途中、緑のクウガに姿を変え探していた

く船上・PM5:50く

??? 「ふっ…」

デッキでワイングラスを口に入れながら時計を見る。既にライブが始まり、人が賑やかになっている。

あと少し…あと少し…

そう言いながら人の姿から化け物に変わる。幸い近くに人はいない

ジャーザ「…！」

まずはあの女を狙おう。そう思い体を引き絞る。

その時だった、彼女の手の甲にひとつの矢が当たる

ジャーザ「!？」

槍は、床にかわいた音を立てながら落ち、その場に転がる。手の甲には紋章が現れるが…なんなく消しとばす

想「お前が…！」

ジャーザ「クウガ…」

俺は船のデッキに着地する、姿は青のクウガに変えておいた。相手は再び腰から何かを引きちぎり、槍に変える。

ジャーザ「…っ！」

その槍を俺に投げる。凄まじきスピードで投げられた槍を肩にかすりながらも転がり避ける。

想「ぐっ…！おおっ！」

そのまま転がり相手に蹴りを入れる。

ジャーザ「…」

だが相手には効かなかった。足を掴まれほおり投げられる。

想「ぐうっ！」

そのまま壁にぶつかり、走ってきた相手に首を捕まれ締めあげられる。腕も足も自由を奪われ動けない

想「ぐううああ…！うああああ…！」

近くからRoseliaの曲が聞こえる

4人 (We went all out to win)

友希那 Passionate Gaze

4人 (We went all out to win)

友希那 Passionate Voice!

想「おおっ！」

俺は相手の胸部に蹴りを入れ、怯ませる。その間に隣に突き刺さった槍を引っこ抜き、振り回して青のロッドに変える。その間にも曲は聞こえる

4人 (We went all out to win)

友希那 Passionate Soul

4人 (We went all out to win)

友希那 『眼差しは 唯ひたすらに愚直さを込めて』

友希那は曲を歌う。

友希那 『魂と本能をくすぐっていった』

ジャーザ「…!」

想「ぐお…!」

青のロッドと槍がぶつかる。単純なせめぎあいのはずだが明らかに俺の方が力量不足だった。あつという間に押し込まれる形になり、片膝が地面に着く

友希那 『新たな挑戦が 本物へと近づく…!』

ロッドを支える右腕に相手の槍が当たり、押さえつけられる

想「ぐつ…ああ!」

骨が軋む嫌な音を聞きながら俺は踏ん張る。負ける訳には行かない、こんな奴には

友希那 『どんなステージだって 微笑みをあげるわ』

想「ぐつ…!」

横に逸れて攻撃を交わす。再びロッドを構え直して横に振る。だが相手はジャンプして交わし、後ろから蹴りを入槍を振る。俺の背中を一撃が襲い、血が舞う

(Breaking out!)

友希那 『逆鱗に触れた先に落ちた』

想「ぐつ…ああああ!」

こんな奴に負けてたまるか、遊びで人を殺す。みんなの未来を壊す。笑顔を壊す。今日のライブは邪魔させてたまるか、こころが頑張って考えたんだ。

想「っ！」

立て、踏ん張れ前を向け、背中を斬られたからなんだ。足が動く。腕が動く。それだけでいい

全員 (Breaking out!)

友希那

『産声が激しくぶつかり合う宴！』

槍とロッドが何度もぶつかる。相手の手にロッドをぶつけ隙を作る。その間に金の力を使い相手の胸部に打ち込む

ジャーザ「グアアツ！ウウウ！」

だが蹴り飛ばされる。俺はその間に金の力を解除し、青のクウガになる。今ので5秒使った。あと使えるのは25秒、その間に倒さなければならぬ。

Roselia

『競い咲くように 命の Anthem 鳴

らして！』

ジャーザ「うううう！アアアア！」

ジャーザが突如として全身を抑え呻く。何事かと考えていると、体に変化が起こる。

Roselia 『磨き上げてゆく それぞれのダイヤを胸に抱き！』

そして肌の色がより一層不気味になったジャーザは腰についてるものを引きちぎる

想「っ!？」

それは先程の槍ではなく、分厚い剣に変わる。それを1度振り回し、構えながらこちらへ近づいてくる。俺も負けじとロッドを構え、最初の上からの一撃を受け止める

はずだった

想「ぐっ!？」

ぶつかりあつた瞬間、俺のロッドは真つ二つにへし折れた

Roselia 『自らの音を 信じているからと 高らかに
!』

相手の力がさらに増してる。ならこちらも力重視の姿へ変えなければ

Roselia 『妥協はしない 譲らない 決して揺るがないものは…!』

想「超変身！」

俺も紫のクウガへ姿を変える。折れたロッドは剣に変わる。右手に一本

――左手に1本

俺は右手と左手に紫の剣を携え立っていた。夜の海の風が靡く。

ジャーザ「…!」

想「負ける訳には行かない…! 必ずお前を倒す！」

俺はそう叫び2本の剣を突き出す。

Roselia 『誇りある この想い!』

俺にだってクウガとしての誇りがある。そしてみんなの笑顔を守りたいという想い。

Roselia (We went all out

o win)

ジャーザ「…っ!」

俺は相手の一撃を2本の剣で受け止める。だがまだ力量で押し切られる。俺の剣はさらに沈み、片膝立ちになる。

友希那 『Passionate Gaze!』

想「おおっ!」

俺は金の力を使い、紫の金のクウガへ姿を変える。両腕に携えた紫の剣も、金の力を帯びて装飾が増える。さらに重量がました両腕を振るい、俺は最大の一撃を入れる

Roselia (We went all out to

Win)

想「はあっ！」

相手の剣を押し返し、相手に二刀流で通り側に切り裂く。

ジャーザ「っ!?!」

友希那『Passionate Voice!』

想「おおおあああああ！」

Roselia (We went all out to

win)

ジャーザが見たのは、クウガの腰に着いた霊石がさらに光ったところだった。

俺は最大最後のチャンスを見逃さない。

友希那『Passionate Soul!』

友希那の歌声を聞きながら俺は剣を2本、相手の腹部に突き刺す。

ジャーザ「グアアアアッ！」

想「これで終わりだああああアアア！」

Roselia (We went all out to wi

n)

歌い終わったと同時に上を見る。吹き抜けた天井に一瞬何かが…

Roselia「!?!」

一瞬映ったのは、紫のクウガと化け物だった。だが何かがおかしい。だって、クウガが相手を押している方面には…海しかない

そう、八意想は船の上で爆発させないと自分事海へほおり投げた。それしか手段は無かった。

リサ（想くん！）

リサや燐子が舞台からデッキに走る。客がザワザワしていたが耳

を傾ける暇もない

あこ「え…」

デツキに出た、だがそこは地獄だった。

あつちこつちに飛び散る血。壁に穴はあき…

Roselia「!?!」

海の方から爆発が起きた。少し離れていたのも誰も気づいてはいない。Roseliaとハロハピ、パスパレを覗いて

出番が終わってRoseliaを追いかけたハロハピ、パスパレ。ちようど着いた瞬間に爆発が起こったのを見た

リサ「想くん!!」

デツキの手すりに手を置きリサが叫ぶ

彩「え…?」

日菜「嘘でしょ…?あの爆発に想くんが?」

燐子「そんな…」

みなが絶望に打ちひしがれた時だった。

想「ちよつ、冷たい!タンマタンマ!この季節の海は辛い!!助けて溺れる!」

下から声がした。みな一斉に海を見る。角が短い白い姿…

白のクウガだ。八意思が必死に登ってきていた

想「はあああ…!」

何とかデツキに登り、変身を解除する。背中への傷はもうふさがって
いるらしく痛みも感じない

リサ「想くんっ!」

突然リサが抱きついてくる。濡れて冷えた身体に暖かい体温がじんわりと滲む

想「ちよい離れる!濡れるだろ!」

俺はそう言いながらリサをひっぺはがす。

燐子「心配…したんですよ?」

千聖「ほんと…無茶で無軌道ね…」

想「あはは…ライブの音、Roseliaの音聞こえたぞ」

正直あれが力になったと言っても過言ではない。

美咲「まだまだありますし…一緒に楽しみましょうか」

想「うん、と言いたいんだが…」

全員「？」

想「寒いししぶ濡れだし着替えたい」

そして俺のくしやみが響き渡った

!

客船の一室・PM7:30

想「:」

俺はひとつの部屋のシャワールームを借りてシャワーを浴びていた。露天風呂もあるらしいがこっちの方が落ち着くし今は一人がいい、というか船に露天風呂とは:?

想「なのになんでお前がいるんだ:小川:」

小川「えーいいじゃん、服も持ってきてあげたんだし」

シャワーの扉の向こうに小川が立っている。さつきからもう大丈夫だって聞いてくれない

想「それは助かった。だが別に今もいる必要ないだろ?バイトサボりかよ」

小川「ほぼサボってる人に言われたくありません!それに:」

想「:?:」

小川「今は2人きりがいいだろ:バカ」

想「え!?!なんて?」

シャワーにかき消されて聞こえなかった。だがアイツにしては声が小さいのは珍しい。

想「まあ:いいか」

俺はそのままシャワーを浴び、服を貰い着替えた

小川「ふふつ:似合って:ふふふつ:!!」

想「おい、どうゆう訳だコノヤロウ:!!」

そういう俺の服装は、黒のタキシードとかいうどこの結婚式だよ!みたいな服装だった

想「:はあ」

小川「ちよつ:?:w?w写真いい??w?w」

想「やだ、脱ぐ」

そう言い脱ごうとしたら、小川が駆け寄ってきて止めた

小川「分かった分かった笑わないから！」

想「はあ…」

俺はしばらく、こんな服装で作業しなければならぬのかと思うと、背筋がゾツとした

く舞台裏く

まりな「あ…八意くん…？」

俺の姿を見るなり駆け寄ってきたまりなさんが途中で固まる。理由は痛いほどわかる。この服だろう

まりな「似合ってるじゃん！いい！いいよそれ！」

想「うそお…」

笑いながら肩を叩く。だがその笑い声はバカにしているという感じの笑い声では無かった。

彩「おーい…想くん？」

彩がはしつて来るがまた止まる

想「いらつしやいませ、プリンセス？」

彩「ふにやつ!？」

とりあえずそれっぽい立ち居振る舞いをしてみると彩さんはみるみる顔を赤くし倒れた。

想「え…？彩？大丈夫か？おーい？」

千聖「何なのかしらその服装は…」

日菜「似合ってるじゃん！」

麻弥「八意さん、そういう服似合いますね…」

イヴ「イケメンです！」

ライブがちょうど終わったのだろう。パスパレのメンバーが次々と裏に来る

香澄「次で最後！最後はもちろん！」

全員「みんなでやるー！」

想「仲良いなイツら…」

盛り上がっている全員を見ながら作業をする。隣で同じことをし

ているまりなさんが微笑みながら言う

まりな「いつもこんな感じなの。最初は色々会ったけど…今だこんなにも仲良しになって、新しいバンドも増えて」

想「いい事じゃないですか」

まりな「あつ、そうだ！想くん！」

想「はい？」

まりな「客席、みんなのライブ。見てあげて！」

想「いやでも手伝いが…」

小川「いいから早くいけ！始まるだろーが！」

2人にグイグイ押され俺は仕方なく客席に座る。しばらくすると5バンド全員がステージに上がる

香澄「この曲は！私達の作り上げた曲からひとつ選んでみんなでおうって言った曲です！」

蘭「いつも、人知れず頑張って」

彩「いつも、笑顔でいてくれて」

友希那「そんな人に贈る」

こころ「とーってもスペシャルな曲よ！」

全員「それでは！afterglowから！」

全員「I love your way！」

そう言い出すと同時に演奏が始まる

全員 (サンキュー！)

全員 「Forever and ever 君が必要なんだ」

ポピパ 「偶然こそ大切に」

沙綾 (どんな時にも笑顔で、見守ってくれて)

afterglow 「奇跡こそ永遠に」

つぐみ (私が誘拐されちゃった時も全力で助けてくれて)

モカ (危ない人かなくて思ってたけど、実際はとても暖かくて)

パスパレ 「気持ちさえあれば どんな心も動かす」

千聖 (私達のバイトをしてくれた時も、最初はただのバカだと思っ

てたけど、みんなを守るために血まみれでも頑張って)

日菜 (私が悪いことした時も、笑って、許して、励ましてくれた)

Roselia 「想いこそ 君へ」

リサ (アタシ達が初めてあった時は、それはもう無茶苦茶だった)

紗夜 (どんな時でも、見捨てないで、でもたまに自分で悩みすぎなこともある)

燐子 (もうちよつと、私達を頼ってください。私たちは想くんが…)

ハロハピ 「声と目で伝えたい」

こころ (想が来てから毎日ワクワクが止まらないの!)

美咲 (私達を庇って毒で倒れた時も、笑顔で戻ってきて、怒りもせず許してくれた)

Roselia 「人生は無限じゃないからさ」

全員 「強く 熱く」

全員 (サンキュー!)

リサ (いつもアタシ達を守ってくれてありがとう)

全員 「『あたりまえ』の言葉に」

全員 (サンキュー!)

燐子 (でも…たまには、私達を頼ってください)

全員 「あったかさが いっぱい」

全員 「For you! For you!」

紗夜 (だって貴方は、私たちにとって)

全員 (サンキュー!)

つぐみ (大事な…)

全員 「君といると 何度も勇気をもたらえる」

全員 (大事な人だから!)

(Wow wow wow) 大事な人のため

想 (大事な人の為：か)

(Wow wow wow) 常に全力全霊

そう言えばこの世界に来てからは常に全力全霊で頑張ってきたっけ

その素晴らしい生き方へClap, Clapping!

俺にとって素晴らしい生き方：

(I love, love your way)

(I love, love your way)

そうして演奏が終わる。みんなの顔は、やり切った表情に満ちていた

全員「ありがとうございました！」

そう言つて舞台裏に消えていく。俺も舞台裏に歩いていく。まだバイトの途中だったんだ

〜舞台裏〜

想「みんな、お疲れ様！」

俺はみんなに労いの言葉を言いながら一人一人にスポーツドリンクを配る。

リサ「ありがとう！」

つぐみ「ありがとう！」

有咲「ありがとう」

とりあえず全員配り終える。まだMorfonicaは俺に警戒心があるのか少し微妙な感じだった。

リサ「そんな警戒しなくても大丈夫だって！」

巴「見た目より良い奴だぜ！」

巴は俺をからかっているのか？

想「見た目は余計だ！」

俺がそう叫ぶと周りから小さな笑いがおこった。そして時は流れる。楽しい時間はあつという間だった

俺が何故かソロギターしたり

モ力達と大食い対決したり

みんなでハチャメチャしたり

こんな日が、一生続けばいいのに

そう感じる時間だった。

く港・PM10:00く

みんなそれぞれ幸せな顔で我が家へ帰っていく。バンドメンバーはほとんどが家族と一緒に乗っていて車で帰るらしい。今日の出来事を楽しそうに話しながら帰っていく

想（よかった…みんなたのしそうに…してて）

突然カゴを持つ自分の視界が揺れる。

まりな「想くん！大丈夫!？」

まりなさんが慌てて駆け寄ってくる音が聴こえる。それを最後に俺の意識は沈んだ

まりな「…」

突然倒れたかと思いきや、しばらくすると寝息が聞こえてくる

小川「何かあったんですか!？」

慌てて駆け寄ってくる小川に静かにとジエスチャーする

まりな「疲れてるみたい、寝かせてあげて」

小川「あははっ、寝てるのかよ…まあそれ程頑張ってたからな」
寝ている八意の目には、光るものが流れていた

く科警研く

職員1「完成した!」

職員2「やつとだな…」

ゴオマの遺体を回収し解剖し調べる。その中身は人間とは大きく

異なった神経回路をしていた。それを何とか解析して作り上げた

職員1 「神経断裂弾と筋肉弛緩弾……」

そのふたつの弾は、寧猛に輝いていた

く想の自宅・AM10:00

想「ん…?ふああ」

俺はいつも通り、ソファで目覚める。というかなんで俺は自分の家にいる?昨日確か…

想「!？」

そこから一気に意識が覚醒し辺りを見回す。誰もいない、だが机にひとつ紙があった。俺はその紙を手に取り目を通す

紙の中身はこうだった

小川『寝すぎだばーか、私がお前をここまで運んだんだ。きつちり礼は貰うからな』

想「そうか…あいつが…」

俺は微笑みながら紙を置く。最初よりずっとあいつは人間らしくなった。

想「さて…今日は日曜日か」

まだ昨日の夢みたいな感覚が残っているが無理やり振り払う。

想「さて、どうするか」

大抵こういう時は俺は暇になる。特にやることもないし、というかこういう時いつも家にリサが来たりするが、今日はそんな日でもないらしい。

想「腹減ったな…」

とりあえずコンビニに買い物に行こうとして立ち上がる。

くコンビニ付近

想「…お」

俺はビートチェイサーで走っていると、歩道から手を振る人物がいた。俺は急ブレーキを掛けて端に止まる

日菜「おーい！」

紗夜「そんなに大きな声を出さないで…！」

想「よお、お前ら。こんなとこで何してんだ？」

仲良く言い合うふたりに聞く。前よりさらに関係が丸くなってる

気がする

紗夜「ええ…少し散歩に」

日菜「そう！おねーちゃんは無理やり連れてきた！」

想「そ、そうか…」

相変わらずの無茶苦茶な日菜、それに俺は苦笑する

紗夜「そんなあなたこそこんな所で何を…？また未確認でも？」

想「いや、腹減ったしコンビニ行こうかなって…」

紗夜「栄養バランスに気を使ってください…」

俺が言ってる途中に紗夜が言う。別にいいだろ、食えりやいいんだ食えりや

日菜「わー！改めて見るとビートチエイサーカッコイイ！」

紗夜と栄養バランスがどうの言いかつていると、ビートチエイサーの周りをうろちよろしてる日菜がそう言う

日菜「おお…！色変わった！黒くなったよ！」

想「あいつ…!?!」

俺だつて最初は忘れかけていた暗証番号をささつと入力する。これだから勘で動く天才は…

想「やめろ…」

俺は日菜の手を優しく払う。それから日菜はなにか思い出したかのように俺を手招きする

日菜「あ！そうだ！見せたいものがあるから家来てよ！なんか作るから…！おねーちゃんが…」

紗夜「なんで私なの！」

日菜「てへぺろ…」

想「やっぱお前可愛いけど小悪魔だな」

日菜「可愛いだけでいいの！小悪魔は余計だよ！」

想「まあでも紗夜の料理か…食べてみたいな」

紗夜「想さんまで…!!…特別ですよ…」

日菜・想「やったー!!」

紗夜「…」

氷川家・PM12:00

想「：美味しい：」

紗夜が作ってくれたパスタを一口口に運び俺はそう呟く。隣の日菜も「美味しい！美味しいよ！」と言いながら次々口に運び、むせる

紗夜「ちゃんと噛んで食べなさい：ほらお水」

日菜「げほっ：！ありがとうおねーちゃん」

想「ところで日菜が見せたいものってなんなんだ？」

日菜「あ、そうだった」

完璧に忘れていたと言わんばかりの顔をする日菜

想「撫でくりまわしてやろうかこんやろう」

紗夜（それ、脅しにもなってますんよ）

そうだそうだと言いながら部屋へ行く日菜、しばらくしてから帰ってくる。その手には1冊のノート

『八意くん成長日記！』

と書かれている。

想「なんだこれ：ストーカーと変態のノートか？」

1歩引く俺を無視しながら中身を開ける。そこには、クウガの全ての姿が色鉛筆で丁寧にスケッチされ、特徴が沢山書いてあった

想「これ：」

日菜「まだ書いてる途中だけどね、ポピパとafterglow、パスペレやRoseliaやハロハピのみんなで書いてるの！いつか役に立つかなーって！」

紗夜「はい、情報収集も立派なサポートですから」

そう言われながら手渡されたノートを見る。赤のクウガ、青のクウガ、緑のクウガ、紫のクウガ：金の力、ゴウラム

『紫のクウガはカツコイイ！凄いカツコイイ！』

と書かれている文章に危うく吹きかける。多分：いや絶対これを書いたのはあこだ、奴しかいない

日菜「そういえば金の力って時間制限みたいなのあるの？」

想「あ、ああ：一応あるが：なんでだ？」

紗夜「いえ、金の力を使ってからの想さんはすぐに戦いを終わらせ

たがりますから」

想「まあ：今んとこ30秒だしな…」

あれだけの痛みを伴って金の力を引き出したのだが、今の俺にはまだ使いこなせないらしい。

日菜「30秒…」

紗夜「たったの30秒で今まで戦ってきたんですか？」

想「うん、大体タイミングを掴めてきたし…でも最近はずっと30秒じゃ足りない気がするんだよね」

日菜「おねーちゃん…」

紗夜「日菜…」

肩を回す八意とは違い日菜と紗夜の顔は少し暗かった。最初より戦いになれてきてしまってるから…、彼はホントなら今も普通に生活していたはずなのに。

想「どうした2人とも顔がくらいぞ〜！」

紗夜「いえ、少し考え事を…」

日菜「あ！そうだ！」

想「ん？」

日菜が上手いこと話を切り替える

日菜「ゴーちゃんんだけどさ！」

想「あ？うん？ゴーちゃん？」

日菜「え、あくゴウラムの事。みんなであだ名つけたらゴーちゃんになった！」

想「…」

日菜「そのゴーちゃんなんだけどね！今は何してるの？」

想「あーうん、弦巻家にいるはずだ」

あいつ偉いから仕事終わったらちゃんと場所へ帰るのだ。あいつは偉い！（2度）

日菜「ふーん」

想「ゴーちゃ…ゴウラムがどうした？」

日菜「いやあのね！ゴーちゃんってバイクにくつつくじゃん？」

想「確かにくつつくな」

日菜「それで体当たりして倒したりするじゃん？」

想「まあな、一回使ったらあいつ石になるけど」

日菜「えっ！そうなの！…でね、ゴーちゃんがくっついてるバイクに乗った想くんが金の力使ったらゴーちゃんも金になるのかなって！」

想「あーなるほど？」

日菜「前に見たゴーちゃんの背中、石、なんか想くんの石と似てるからって思ってた」

なるほど、確かに考えたことは無かった。もしかしたらできたりするのだろうか

日菜「ね！ここで一回クウガになってみて！」

紗夜「日菜…！」

想「うーんとな…なれないんだわ」

日菜「えー！なんで？」

想「誰かと戦わないと、何とかしないとって思っていないとベルトが現れないんだ」

日菜「ちえ…なんか未確認でないかな」

想「おいおい不吉なこと言うなよ…」

そう言いながら紗夜がテレビを付ける。一番最初に目に飛び込んだのは

『地下街に立てこもり、約1000人以上が人質に』

と書かれた文章だった。地下街に立てこもりなど普通ありえない。

そして次に出てきた写真は…

紗夜・日菜「…！」

想「…なっ!？」

石のようなもので崩落した地下街への入口だった。出れる場所は全て封じられており、到底人間にできることではない

想「予言的中か…！」

俺はそう言いながら家を出てビートチェイサーに跨りヘルメットを被る。

日菜「き、気をつけてね！」

想「ああ！」

俺はそう言い走り去る。

↓地下街↓

リサ「こつちこつち！隠れて！」

ひまり「ありがとうございます…なんなの…？」

2人で地下街に買い物に行っていた。普段から人は多いが、休みのせいもあってかさらに人が多い。だが大半は体の一部が欠損し、その場に横たわっていた

男性「やめ…やめてくれ…！」

近くで男性の悲鳴が聞こえる。次にミシツ…ゴリツ…と嫌な音を立てる。水が滴るような音の次に倒れる音。それは嫌という程誰かが死んだと思わされる音だった

ひまり「怖いよ…！」

リサ「ひまり…！大丈夫だから…！」

ひまり「想さん…助けて…！」

リサ（想くん…）

祈る2人の向こうでは、さらに死体が増え続けていた

↓地下街への入口付近↓

想「一条さん！」

俺は半分倒れかけながら一条さんに駆け寄る

一条「ダメだ…この石ビクともしない…！」

一条さんは俺を見るなりそう言う。他の警官も悔しそうに顔を歪める。俺も変身して中に強行突破したいが、何せ人が多すぎる。警官も、一般人も

警官「困ります…！やめてください！」

母「娘が！娘が中にいるんです！」

警官「落ち着いてください！」

母「う、うう…！ううああ！」

聞こえる悲痛な叫び声。それに俺の心は突き動かされる。その場に倒れ込む母親の元へ行く

一条「八意：お前まさか：」

想「大丈夫です、必ず俺が助け出します」

母「え：？」

そう言う俺は再び立ち上がる。ビートチェイサーの横へ立ち

想「：！」

腰に手を当て、ベルトを出す。

全員「！？」

想「変身！」

俺は大量の人の中、赤のクウガへ姿を変えた。近くにいたニユースキヤスターがなにかを言い始める。周りにいた人も何かを叫んだりする

母「：お願いします：！娘を：！」

想「分かりました」

俺はそれだけを言うと、ビートチェイサーに跨り。ボタンを押す。カラーリングが黒へと変わり、上からゴウラムが降りてきてビートチェイサーと合体する

静まるその場、俺はただ全員に向けて親指を立てる。

一条「八意：」

次にその場は沸き立つ

女性「頑張つて！4号！」

男性「少年！頑張つてくれ！」

俺は沢山の人から暖かい歓声を貰いながらビートゴウラムで石の壁に体当たりをする。ゴウラムが強いのか、壁が案外もろいのか、すぐに崩れ落ちた

一条「無理やり行つた：！？」

一条はしばらく惚けていたが、八意の後に続こうとそれぞれ準備を始めた

く地下街く

想「なんだよこれ…」

俺はまるで地獄と化した地下街を見て息を呑む。空気は血生臭く、辺りに欠損した死体が転がり落ちていた

??? 「きやあああ!!」

想「…!」

俺はその声を聞き、反射的にビートゴウラムを動かす。これ以上、被害者を出さない為にも

リサ「こつち!」

リサがひまりの手を引き走る。その後ろには、化け物がゆうゆうと笑いながら歩いてきているのだ

ひまり「もうやだああ!」

ひまりが泣きながら走る。だが途中で人のカバンに足をつまづきコケてしまう

ひまり「きや…!」

リサ「ひまり!」

リサが手を伸ばしてひまりを掴む。だがひまりは起き上がれない。コケたせいで恐怖で動けなくなったのだ。地下街十字路の真ん中でひまりを引つ張るリサ、化け物はゆうゆうと歩いてくる。

想「はああああ!」

十字路の右から今1番聞きたい声が聞こえた。

??? 「グオオアアア!」

相手は何かにつぶやき飛ばされて転がる。そして自分たちの前に横向きでバイクを止めた人物

ひまり「想さん!」

リサ「想くん!」

想「2人か!怪我はないか!」

2人の目から涙が零れ落ちる。心が自然と安心に包まれる

想「2人に手出しはさせない…」

2人を庇うようにたった先に倒れていた人物がゆつくりと起き上

がる

バベル「俺は、究極の闇をもたらす！ゴ・バベル・ダだ！」

想「お前ら…このバイクに2人乗りして地下街から出る…」

やばい、こいつは強い。体に纏うオーラが比では無い。もしかすると前に出会ったあの化け物並に…

リサ「え…でも運転できないよ…！未成年だし！」

想「くつついてるゴウラムが何とかしてくるはずだ…あとは気合
いだ…」

バベル「行くぞ！」

そう言うのと相手は俺めがけ突進をかまして来る。俺はそれをギリギリで躲し、後ろから掴む。だが直ぐに振り飛ばされそうだ

想「早く行け！早く！」

リサ「…行こうひまり！」

ひまり「で、でも…！」

最後まで言わせず後ろに乗せ、リサがハンドルを握る。アクセルを回し、一気に加速する

想「行ったか…うお…！」

後ろ姿を見てから俺は振り回され壁にぶつかる

想「ぐお…！」

壁に少しめり込み、地面に落ちる。さらに迫る追撃の拳を避け、俺は隙だらけの腹に蹴りを入れ、さらにアッパーを決める。

バベル「くつつ…！」

想「…！」

相手は少し後ろに下がると、まだどこか片言な日本語を話し始めた
バベル「確かに、今度のクウガは骨があるな…」

想「なんだと…!?!」

俺は言葉の意味がわからずに聞く

バベル「これだけ強い拳があれば、たくさんの獲物を殺せただろう
に」

まるで俺たちと同じにならないか？と言わんばかりに手招きをしてくる。その後ろに抱き合った母子の遺体を見る。ゲームのためだ

けに殺された：

想「：！」

その姿を見て俺は一瞬またあの時のように拳を振るいかけた。動きかけた腕を止め、何とか頬の肉を噛みちぎり抑える。

バベル「そうか：残念だがここで：殺す」

そう言うと相手は片手のメリケンサックを握りしめ構える。俺も拳を握り構える

想「はあああ！」

バベル「：っ！」

少し大振りに拳を降ってしまった。その隙、左胸にメリケンサックがヒットする。それは赤のクウガの鎧をいとも簡単に貫通し、心臓の1歩手前で止まる。

想「ぐあっ：！？」

俺はそのまま殴り飛ばされる。左胸から血が吹き出し、今も流れ続けている

想（こいつ：心臓を狙ってきてやる：！）

俺は確実なる殺意を前に、足が1歩後ろへ下がった

想「…！」

恐怖で自分の足が1歩下がる。左胸から溢れ出る血が滴り落ちる

想「…！」

俺はそれを誤魔化すかのように数歩下がり、キックの構えをとる。

そのまま助走をつけ

想「おりやああああ！」

右足に炎を纏わせ相手に蹴りを放つ。俺はその場に膝立ち、相手は後ろに吹き飛び、瓦礫に埋もれる

想「…!？」

だが相手はすぐに起き上がる。右胸に食らわせた蹴りの場所に紋章が浮かび上がる。だがそれはすぐに消された

想「なんだと…!？」

バベル「骨はいい…だがその程度では俺を超えることは出来ない…！」

そう言いながら相手もまた、姿を変えた。先程より毛深く、肩に尖った角を生やした。腰の飾りを取り外し、武器に変える

それはまるで肉たたきのような、大きな武器だった。確かミートハンマーともいう…それを構えながらこちらへ近づく。

想「…！」

俺は死を覚悟し後ずさった。

く入口付近く

一条「まだか…八意…！」

付近の人は全て避難させ、万全な警戒で待っている一条達だったがいくら立っても4号が戻ってくる気配はない

リサ・ひまり「きやあああああ！」

突如として地下街から飛び出してきた2人組に警官隊は一瞬混乱する。

リサ「はあ…はあ…怖かったあ…！」

ひまり「速すぎません…？そのバイク…」

一条「君たち…それにそのバイク…！」

リサ「違うんです！彼が…想くんが私たちを逃がすために…！」

一条「八意が!？」

ひまり「はい…！助けてあげてください！」

自分より真っ先に八意を心配する彼女達を見る一条は八意の勇気を知る。彼は本当に優しい。優しすぎる

一条「バイクは見逃すから、早く後ろに隠れてなさい。彼が戦い終わったら1番にはげましてやってくれ…」

肩を叩き持ち場に戻る。帰れと言わなかったのは彼女達が1番八意を理解しているだろうと思っただからだ。その時、なにかがぶつかる痛々しい音と共に、八意が地上へ吹き飛んできた。

想「ぐふっ…！」

ひまり・リサ「!？」

一条達「…!？」

否、足は地面についてない。転がり、止まる。転がった後には血が付き、かなり痛々しい光景となっていた

バベル「…」

悠々と歩きながら地上へ出てくる化け物、前より姿はだいぶ変わり、その手にはミートハンマーが握られていた。先端の針には血がつき、それに殴り飛ばされたことを改めて自覚させられる

想「ぐっ…うう…！」

手を付き、立とうとするが立てない。恐怖が足を竦ませている。

杉田「撃て！援護しろ…！」

杉田の声に弾かれ、射撃が始まる。だがしかし何も効かなかった。煙が出る前に体外へ排出される

杉田「今までのライフルじゃダメか…！だが取りに行く暇もない…クソ！」

想「行って…下さい…！」

戦慄する杉田に、八意の音が響く。彼は血を垂らし、息を切らしながら立ち上がりこちらを見ていた

想「時間は俺が稼ぎます…!だから!」

杉田「だが…」

一条「俺が取りに行きます。八意の為にも」

杉田「一条…:分かった…」

それに一条が領き、パトカーに乗り科警研へ向かう。

想「…」

俺はそれを視界の端で確認する。後ろにはひまりとりサが俺を見ている。男としてここはカツコつきたいのだが現実そうはいかないらしい。

想「はああ…!」

俺は震える拳を握りしめ、相手に拳を打ち込もうとするが、相手はそれより先にミートハンマーを下から振り上げ俺を後ろに吹き飛ばす

想「ぐあつ…!?!」

半場吹き飛ばされる形で俺は地面に頭からぶつかる。

リサ「…!」

ひまり「…リサさん…」

ひまりがりサの手を握る。互いに震えている

想「…超変身…!」

俺は1秒でも多く、反撃のチャンスを見る為、紫のクウガへ姿を変え、構える。

近くに剣になるような物は落ちておらず、だいぶ絶望的だ

想「…!」

歩き出す前に俺は敵が目の前にいることに気づく。相手はミートハンマーを振り上げ…

戦場に悲痛な音が響き渡る

ミシッ

杉田「……！」

ゴリッ

桜井「……っ！」

バキッ

リサ・ひまり「……！」

想「くう……！ぐうああ……！」

攻撃を3発くらい、俺は地面にうつ伏せで倒れる。4つの姿のうち1番硬いはずの紫のクウガの鎧には

3個、ミートハンマーの後が着いていた。

想「ふう……ぐあっ!？」

立ち上がろうと膝立ちになった所に下から振り上げ攻撃をくらい、また、今度は仰向けに倒れる

リサ「もうやめて……！」

ひまり「想さん……！」

目の前で行われる一方的な攻撃にリサが口にする。これ以上はやめて欲しい。だがそんなことを行ってる間にも容赦のないこうげきはつづく

心臓付近に

肩に

足に

想「…うあ…」

痛みにより半場意識を失いかけている俺は、さらに攻撃で上に打ち上げられて転がる。近くに階段があり、次の攻撃を喰らえば階段を転がり落ちる。

相手は心臓を狙いミートハンマーを執拗に振り下ろす

1度

2度

想「…」

だが三度目は無かった。三度目が出る前より一瞬早く1発の銃声が響き渡る。

想「!?!」

杉田・桜井「!?!」

バベル「…っ!グウ!?!」

途端に相手はミートハンマーを落とし、まるで力が抜けたかのように倒れ、階段を転がり落ちて行った

想「一条さん…!」

銃声の主は一条だった。随分と厳ついカスタムが施されたライフルを片手に、俺に頷く。

今がチャンスだ

そう言わんばかりに

想「…!」

俺は身体に鞭打ち立ち上がる。ビートゴウラムに跨り

想「超変身…!」

赤のクウガへ姿を変え、ビートゴウラムを動かす。何とか立ち上がるバベルに体当たりをぶつけそのまますくいあげて運ぶ。ここでは

リサ達に被害が行く。だから別の場所で倒さなければ…

一条「…！」

一条も後を追う為に柵をこえ、パトカーに乗ろうと手を掛けた時だった

異様な気配が体に伝わる

一条「…!？」

何者かがこちらを見てるような、気持ち悪い雰囲気だった

一条「…」

だが辺りを見回しても誰もいない。一条は気の所為だと思いパトカーに乗った

〈近くの廃墟・PM3:00〉

想「またここか…」

俺は無線から伝わる指示を聞きながら走ると、確か初めて赤の金になった廃墟に来了。まあ既にほとんど更地に近いが…

想「…！」

俺は急ブレーキを掛け、相手を吹き飛ばす。相手はそのまま転がる日菜『ゴウラムも金になるのかな〜！』

想「…！」

頭に浮かんだ日菜の言葉。それは俺を突き動かした

俺はビートゴウラムに乗りながら赤の金のクウガへ姿を変える。

片足に金の装飾が着くのを確認してから

想「…！」

アクセルを踏み込み、一気に加速する。するとくっついてるゴウラムに異変が起きた。雷がゴウラムに走り…

想「流石は日菜！天才美少女！」

金のビートゴウラムと化した乗り物の上で俺は叫びながら相手との距離を詰める。

想「はあああああ！」

先端に炎と雷が宿る。それをそのまま相手にぶつける。

バベル「ウワアアア！」

相手は数十メートル後ろに吹き飛び呻く。呻きながら立ち上がるうとするが、ひび割れがベルトまで到達し…

大爆発を起こした

俺は相手が爆発したのをただ見ていた

想「…」

しばらくすると、無線になる

一条『今…爆発がしたがやったのか!？』

想「はい！金のゴウラム合体ビートチェイサーボディアタック効きました！日菜には感謝です！」

一条『…長すぎないかその名前…?』

想「ですよね…」

俺は苦笑する次の瞬間

ゴウラムが崩れ落ちた。必殺技を使ってエネルギーを大量消費したのだろう

想「お疲れ様…」

俺は今は石になったゴウラムにねぎらいと感謝を伝えた

↓地下街、階段付近・PM5:00↓

リサ「…。」

ひまり「そろそろ暗くなってきましたね…」

リサ「そうだね…」

冬のせいもあるがあたりが暗くなり始めた中、ひまりとリサは立って彼の帰りを待っていた。傷ついて戦った彼を労う為に、それが一条

さんから託された仕事、いや自分達のやれること

ひまり「…！あれ！」

ひまりが少し興奮しながら指を指す。

リサ「……あ」

あつちこつちの街灯が着き始める道路に、1つのバイクがこちらへ向かって走ってくる。聞きなれたエンジン音が入る。そして自分達の横で止まる

想「…！」

リサ「お疲れ様あ…！」

ひまり「うわああああん！」

ヘルメットを外してサムズアップをした途端2人とも号泣しながら俺に頭を預けてくる。本当は笑顔でお疲れ様と言いたかったのだろう。でも涙が溢れたんだな…

想「ただいま…」

リサ・ひまり「うわあああ！」

号泣する2人、俺は自分の肩が濡れるのにも構わず、2人を撫で続けた

ガドル「あれが…今のクウガか…」

ただの子供だなと鼻で笑いながら、だがしかし絶対に油断しない。そう考えながら歩いていく人物がいた

↳弦巻家・研究室、PM4:00↳

黒服「…」

様々な写真を見ながら黒服が唸る。今までの戦い、自分達の電気ショックにより強化された。そのかわり今も肉体はグロンギに変わりつつある。彼にはこれ以上戦って欲しくない、変身しなくてもいいようにしたい

黒服「…どうするべきか」

だが今現状、対応出来るのは彼しかいなかった。そして、黒服は打ち明けるべきなのか迷っていた。伝えればきつと彼女達は混乱するだろう。中には彼に好意を寄せている人だっている

↳同時刻・とある道路↳

想「…」

俺はビートチェイサーを走らせ、circleへ向かっていた。そろそろクリスマスが迫る、それに合わせてcircleを飾り付けしようと言うことなのだ…

↳2日前↳

まりな「沢山頼み過ぎちゃった…」

想達バイト「…」

とまあ、こんな感じである。飾り付けも相当苦労しそうだ。そう考え、少し笑みを浮かべながら走り…

想「!?!」

またあの気持ち悪い気配を肌で感じ、急ブレーキをかけて止まる。

想「…!」

ビルの屋上に白の服を身にまとい、俺を見ている少年がいた。俺は何かを感じ咄嗟で青のクウガに姿を変えビルの屋上へ飛び上がる

想「…?」

だがもう既にそこに人はいず、だがあの気持ち悪い気配は取れず
いた

想「なんなんだ…!?」

俺は少し歩き回り辺りを見回す。だがやはり何も見当たらない。
俺はさらに感覚を鋭くすべく

想「超変身！」

緑のクウガに姿を変えて辺りを見回す。前、海であつたようにさら
に気配が強くなる。なにか…なにかを感じ…

想「っ!?」

何者かの記憶が俺の中に入り込んでくる。

白い見た目

金色の4本角

無邪気に笑い、人を殺害する。

想「…!」

俺はそれらを見てしまい、膝を着く。その時には白のクウガに
想「…っ!」

仰向けに倒れた時には既に変身解除していた。冬場だというのに
全身は汗でびっしょりと濡れ、震えは止まらない

想（なんだ…?なんだこれは…一体…）

俺は恐怖に襲われた。あんなやつ…俺に勝てるのだろうか…?今
の俺で…

俺はしばらく、その場から動けずいた

〈circle・PM6:30〉

まりな「八意くん遅い…?」

入店してきた彼を見て、私は叱ろうとするが…

想「遅れてすみません…」

やけに元気がない彼を見て、その気が失せる。私にかざすその手は震えている。上手く隠そうとしているのだがまったくもって隠せていない

沙綾「どうしたの…？震えてるよ？」

練習が終わり帰ろうとしていたポピパの中、沙綾が声をかける。

想「え…？」

俺は改めて自分の手を見る。先程よりマシだがやはり少し震えていた。もう片方の手で抑えるが止まらない

想「あ、ああ…ごめん…」

たえ「えいつ」

沙綾「おたえ!?!」

たえが暖かい手で俺の手に触れる。

想「たえ…？なにしてんの？」

俺は目をぱちくりさせてたえをみる。たえは見るで当たり前のように言い始めた

たえ「確かに、今日さむいもんね、ほらこれで暖まるでしょ？」

想「確かにそうだが…年頃の女子が簡単に男に触れません」

俺はそう言いながらたえの手を優しくのける

たえ「あ…」

想「ありがとたえ、いくらかマシになった」

俺はそう言いながら控え室へ歩いていった

まりな「大丈夫かな？」

まりなさんが心配そうに言いながら振り返る

有咲「なんかあったんですかね？」

たえ「やっぱり寒いのかな？」

りみ「多分違うよ…」

香澄「うーん…」

まりな「とりあえず早く帰って、そろそろ期末テスト？でしょ？」
香澄「あつ！」

たえ「忘れてた」

香澄「よーし！有咲の蔵でやるぞー!!」

有咲「ちよま…！」

賑やかにポピパの皆が出ていく。それをまりなは見送る。

想「心配かけてすみません…俺は大丈夫です！」

そう言いながら持ち場へ戻ろうとする俺の腕をまりなさんは掴む。

微かに心配した声で

まりな「本当に大丈夫？」

想「…！」

俺はサムズアップをする。もう癡づいたそれを見たまりなさんは一瞬キョトンとしていたが、すぐにふふつと微笑み

まりな「よーし！飾り付け！やろ！」

と張り切り言う

想「うげつ…へーい」

俺は渋々頷きながらイルミネーションを用意し始めた

〈警視庁〉

杉田「あの筋肉モリモリ肉たたきハンマー野郎から1ヶ月か…」

一条「すごいネーミングセンスですね…」

あの件以来1ヶ月も未確認被害が出ていない。それを不審に思いながらも少しいつも通りの日常が戻り始めていた。

桜井「でも最近各地でおこる不審な停電…毎回毎回奪われる電力がデカすぎます…」

杉田「クリスマスシーズンに出てくるのは辞めてくれ…」

一条「もつともですね…でもその停電…もしかして…」

桜井「油断は…出来ません。しかもその停電被害も、各地の発電所が襲われていますね…」

杉田「でも一昨日から毎日あった停電被害もさっぱり無くなっただろ？もう諦めたんじゃないか？」

一条「そうだといいですよね…」

くとある森く

ガドル「…!!」

木に拳を叩きつける。木は根からへし折れ豪快な音と共に倒れる
ガドル「これが…金の力…」

拳を握りしめ、歓喜に震える。あれだけ電気を自身の身体に浴びせた。激痛に耐えたかいがあつたというものだ。

ガドル「待っている、究極の闇を倒す…」

ガドルは夜の森を、笑みを浮かべながら歩いた

くcircle・PM8:00く

小川「うわっ…もうこんな時間だ…」

想「これ絶対残業手当もんだろ…」

俺と小川は今circleの看板飾り付けのためにはしごを使いながら屋根に登ったりして飾り付けをしていた

想「落とすなよ…うおっ!あぶね!」

小川「言ってる傍から自分が落としかけてどーすんのさ」

想「お前が器用なだけだろ…」

小川「戦闘以外不器用だね…ほんと」

そう言いながら自分の仕事を終えた小川が、俺の分まで手伝ってくれる

想「…いいよ。俺がやるから…」

小川「あんた独りだと日が暮れる…」

そう言いながら絡んでいるイルミネーションを手早く解いていく。俺はcircleの看板の光に照らされている小川になぜか見惚れてしまう。

く5分後く

小川「どうよ、こんなもんでしょ」

想「おお…すげえなお前…」

小川「ドヤ」

想「凄いけど口に出されると腹立つなお前」

小川「酷いな…」

まりな「2人ともお疲れ様！ありがとうございます、これ2人に！」

まりなさんは俺に缶コーヒーのブラック、小川にはカフェオレ、ちなみに両方ともホットだ

想・小川「ありがとうございます！」

まりな「じゃあ今日は解散！」

まりなさんにそう言われ、俺達は帰る準備を始める。イルミネーションが俺たちを照らしていた

〜帰り道〜

想「なについてきてんだよ…」

俺はビートチェイサーを押しながら何故か横にいる小川を見る。

小川は「あ、ばれた」と言う

小川「でも歩くのに合わせてバイク押すところ、八意っぽいね」

想「ほって走るぞ」

小川「私のセリフを返せ」

想「つたく…お前家逆だろ？」

小川「…確かに、気づかなかった…」

気配と器用なのに、こういう所はアホみたいだ

想「はあ…今日家泊まってけ」

小川「え？警察行った方がいい？」

想「俺のセリフを返せ」

小川「嘘だよ、じゃあお言葉に甘えさせて頂こう！」

どこか嬉しそうな声をしていたがまあ気の所為だろう

想「…ほら、乗れ」

小川「いいのか？」

想「寒いから早く帰りたいんだよ」

俺はビートチェイサーに跨りながら後ろに乗れと促す。小川は微

笑み、それから後ろに跨る

俺はビートチェイサーを走らせて、自分の家に帰った

1人の来客を連れて

コラボ回！ 八意想 時空を超える

想「…！」

俺はいつも通り、未確認生命体を追ってビートチェイサーを走らせていた。思いのほかその未確認生命体はすばしっこくて苦戦している

一条『八意！大丈夫か？』

無線越しに一条さんの心配する声が聞こえた。俺はそれに答える

想「はい！俺は大丈夫です…でもこいつすばしっこくて中々…」

一条『そうか！俺達も今先回りしてルートを確認する、そこまで頼む！』

想「はい！」

その時だった。僅かに世界がズレた。もちろんそれに俺は気づかなかったが…なにか異変が起きた

想「なっ…消えた!？」

目の前を走っていた未確認生命体が消えたのだ。ふっと…ロウソクが消えるように。俺はただらぬ何かを感じ無線を触る。だが…

想「なんでだ…？無線も繋がらない…？」

無線を触るがどこにも繋がらない。普段の一条さんなら無線を消すことなんか絶対はないのに

人通りも多くなった気がする。今は未確認生命体がでて危ないのに、まるでそんなものがなかったような笑顔をしている

近くにある電光掲示板には未確認生命体など書いてはなかった。

想「ははっ…」

口から乾いた笑みが漏れる。まさか全て悪い夢だったのだろうか？

だがそれは違う。ビートチェイサーがそれを示してくれている。なら確認するのは1つ、羽丘女子学園か花咲川女子学園があるか確

認するだけだ。たしかここ付近だと羽丘女子学園が近い

想「行くしかないか…」

俺はビートチェイサーを走らせ、羽丘女子学園へ向かった

〽羽丘女子学園門前〽

想「ついた…!」

俺は羽丘女子学園の門前で止まる。今はちょうど帰宅時なのか生徒が沢山いた。大体が俺を見て何事かとギョツとしている。まるで初めての人を見るように…

想「誰かいなか!」

俺は叫びながら羽丘女子学園へ入り、数歩歩いたところだった

???「何してるの?君」

想「:!?!」

横から異様な気配を感じ俺は横を振り向く。そこには羽丘の制服を着た男子がひとりいた。羽丘女子学園に男なんかいただろうか?俺と同じ年だろうが何かが違う。

まるで普通の人間では無いみたいだ。

想「お前…何者だ…?」

嫌な汗が勝手に流れる。相手は俺をじっと見つめながら言った

廻里「桜廻里だけど?君こそ何者?普通の人じゃないよね」

想「俺は八意思…」

廻里と名乗る少年は白い髪を風になびかせながら俺を見る。なんかイケメンで腹立つ

日菜「廻里くん!」

その後ろから来た人物、日菜に俺を思わず「日菜!」と言ってしまふ。1度動きが止まった日菜は俺を見てぱちくりとする

廻里「知り合いですか?日菜さん」

日菜「うーうん!知らない人だよ!ファンかな?」

想「:!?!」

俺は驚きとショックのあまり地面に膝を着きそうになる。どういう事だ…?記憶から俺という存在が消された…

何が一体どうなってる？ どういうわけだ…

廻里「もういいでしょうか？ 今からパスパレの練習があるので」

想「…時間をとって済まなかった…」

俺はそう言いながらバイクに跨る。その後ろには更にリサと友希那がいたがどちらも俺に気づくこと無く去っていく。やはり…俺という存在が消えたのだろう。俺は無言でビートチェイサーを走らせた。行くあてもどこにもないのに

日菜「なんだか変な人だったね」

廻里「そうだね」

去っていく彼を見ながら廻里は思った。彼はなにか違う。能力者なのだろうか…

くとある公園

想「イタズラにしちゃあ分が悪いだろうがよ…」

空が曇り始める中俺は天を仰ぐ。リサも友希那も日菜を俺を知らなかった。

???「やめてください!」

チンピラ1「あれこいつ天才子役じゃん!」

近くにいるいかにもチンピラオーラが凄いやつが女子を囲っていた。今はあまり余裕が無いのだが、天才子役と言う言葉に反応する。もしやまさか…

想「お前ら…やめとけ」

俺は可能性を信じてチンピラを1人殴り、彼女の元に近寄り庇うように立つ。この髪色。目。間違いない

千聖だった

チンピラ1「いつてえな!」

チンピラ2「なんだ!?!ヒーロー気取りか!?!ああ!」

チンピラ3「殺すぞ!どけ!」

想「チンピラかよ…」

チンピラ123「んなあ!?!」

完全に頭に血が登ったのだろう。こめかみに血管が浮き出る程

千切れた3人組は俺を殺すべく襲いかかる

千聖「貴方！危ないでしょう…！」

想「貴方…か」

俺はふっ…と笑いながらまずチンピラ1の拳を躲し、首にチョップをいれる。あと2人

想「っ！」

顎にアツパーを決め込み2人目を気絶させる。後ろからの裏拳を何とか避けて1度離れる

千聖「す、凄いわ…」

後ろでそうつぶやく千聖

想「お前ら…甘すぎる…」

チンピラ3「なっ、なんなんだよお前！化け物！」

腰が抜けた3人目に近寄る

想「化け物と戦ってるからな…こっちは…お前らみたいにくだらな
い理由で拳を振るってる訳じゃねえ」

そう威圧を込めながら言うと相手は白目を向いて卒倒した。なんだ、案外腰抜けじゃないか。俺は倒れている千聖に手を差し伸べる

想「大丈夫ですか？歩けます？」

千聖「え、ええ…ありがとうございます」

俺の手を取り立ち上がる千聖、そっぴや向こうからすれば初めての
人だな

千聖「貴方…！怪我してるじゃない！」

顔を触られそう言われる。さっきの裏拳が額に掠ったのだろう。

想「これくらい大丈夫ですよ…」

千聖「大丈夫じゃないでしょ、今絆創膏貼るから…」

想「…わかった」

こっちの千聖は、なんとというか優しい。俺はただじっとして千聖の
処置を受けた

くパス。パレ事務所く

俺は千聖にいいからついてきて、と言われパスパレ事務所にやってきた。相変わらず変わってない事務所を見て何となく泣きそうになる。駐輪場にビートチェイサーを停めて中へ入る

イヴ「千聖さん！大丈夫で…どちら様ですか？」

彩「まさか…かれ…!？」

千聖「アヤチャン？」

彩「…ごめんなさい」

想「あつ…」

廻里「あつ…貴方…」

俺はまたあの少年と出会った。同い年なんだけどね…

廻里「千聖さん達は先に練習を始めてください。ちよつと話がしたいんです。この人と」

想「…わかった。」

俺は廻里について行く。しばらくすると屋上に出た。夜空が綺麗に輝いていて、俺は一瞬目を奪われかけた

廻里「単刀直入に聞きます…」

想「…？」

廻里「貴方は…“能力者”ですか？」

そう言いながら廻里は手を広げる。そしてその手に1本の剣が生み出された。それは鮮やかな赤、まるで人の血のような…

想「…!？」

俺は何とか転がりながら初撃を避けた。なぜ俺は攻撃されてる…何故？

想「俺がお前と戦う理由はないだろ！」

俺は遠距離から放たれる斬撃を紙一重で避けながら言う

廻里「…」

聞く耳がない。俺はやむを得ず腰に手を当てる
ベルトが出現し、手を広げ…

想「…っ！」

相手の攻撃が腕に掠る

廻里（やはり能力者か…だがあんな能力は知らない…）

想「変身！」

俺は赤のクウガに姿を変え、構える。相手はそれに少し驚いた顔をする。

想「言っとくが俺は攻撃しないからな……！」

廻里「……」

想「俺はお前と戦う意味はないって思ってる。お前はパスパレを守ろうとしてる……伝わってくるよ……たとえば俺が能力者だとしても、同じことをしてるだろうな」

廻里「……」

そう言うのと相手は剣を……落とした。落ちた剣は灰のように消えた。それを停戦の意思表示と見て俺も変身を解く

廻里「貴方は悪い人じゃない、それは分かりました」

俺はそれを聞いて肩の力を抜いて微笑む。

想「なあ……廻里の言ってる能力者って……なんなんだ？」

廻里「……分かりました。少し話しましょう」

そう言う廻里の腰からなにか赤いのが生えてくる。赤色のそれはまるで触手のようにうねりながら俺たちの周りを回る

想「んなっ!?!」

廻里「このように、様々な能力を使えることを能力者と言います。他にも身体強化や聴覚強化、気配遮断や空間認識機能などがあります」

想「その赤い触手みたいなのは？」

廻里「これは“鱗赫”です」

そう言いながら触手を引っ込める。

想「なんかもうチートだな……」

廻里「貴方もその赤い姿……チートに近いのでは？貴方の能力……」

俺は首を横に振る。

想「これ以外にも青、緑、紫があるんだ。だけどいい感じにバランス調整がされてて……金の力……ビリビリで進化できるけど30秒だし……」

廻里「……そうなんです。自分もデメリットはあります。たまに暴

走したりとか」

想「怖っ…」

廻里「それにしても…貴方一体どこから？未確認生命体ってなんなんですか？」

想「違う時間軸…そう呼ぼう。俺はそこから来た」

廻里「…」

想「まあ信じれないかもしれないが…」

廻里「嘘ついてるようには見えないので、信じますよ」

想「良い奴だなあ…！お前え！」

あまりに聖人すぎた。変なやつとか言つてごめん！（手のひらくるっくる）

廻里「戻りたいですよね…」

想「ああ…」

廻里「私でよければお手伝いしましょうか？」

想「ほんとですか!？」

俺はあまりの衝撃に手を取ってしまう

廻里「え、ええ…」

はしゃぐ俺にどういうテンションで話せばいいかわからず困惑する廻里。それを見守る、いや見ている人物がいた

???'「時空転移ってこんな感じなんだ、へえ…後はあの二人を消して

…幸せになろう。支配しよう」

その目は血走っている。片手には雷、もう片手には氷を、

その能力者は…夜の闇の中を走り去った

…次の日の朝

想「…ん」

廻里「あ、起きました？」

横で制服に着替えている廻里。その体はあっちこつちがボロボロだった

想「その傷…」

廻里「…」

想「すまん、嫌な過去を思い出させたな…」

俺だつて過去に嫌なことが沢山あった。

廻里「僕は…引き取られた場所で実験を受けました…そして能力者になつてしまった…」

想「そうなんだな…」

廻里「自分は学校に行きますが…貴方は？」

想「もう少しこの世界を見て回りたい…なにか見つかるかもしれないから」

廻里「分かりました。ではまた後で」

そう言いながら廻里は外へ出る。俺もしばらくしてからビートチェイサーに乗り、見て回つた

↓PM1:00・羽丘女子学園↓

廻里「何かが来た…」

空間認知能力で捉えた能力者の気配、だがモヤがかかつてようではつきり分からない。近くなつたり、遠くなつたりを繰り返す

その時だつた

生徒1「外がくらいよ！」

廻里「なんだ!？」

羽丘女子学園が空間から“切り取られた”皆突然、先生も含めて動揺と混乱が押し寄せる。だが廻里は冷静に、今の状況を整理する。何者かが羽丘女子学園を空間から切り取つた。しかも運動場も含めだ
ということとは能力者がこの羽丘女子学園にいる

リサ「廻里！」

廻里「リサ…来るな！」

リサ「え…!？」

リサと廻里の間に一筋の雷が迸る。それは見た目はシヨボイが当たれば死ぬ。それ程鋭かつた

廻里「っ！」

??? 「防がれちゃったか…」

廻里 「何者だ…」

チャラい見た目をし、コインロールをする男性に言う

??? 「おれ？ ああ…雄也とでも言っとくわ」

廻里 「っ！」

武器を作り出し構えた時だった。

雄也 「おっと！ 動いちゃいけないよ？」

日菜 「…！」

氷で手足を拘束された日菜と、いつの間にか囚われたリサがが雄也の前に出される。

雄也 「女の子を傷つけたくはないな」

相手もまた、武器想像能力持ちだった。しかも氷を使う

廻里 「氷と雷…」

氷はゴリ押しで溶かすが雷はまずい。リサと日菜以外はいないが

…2人に雷が分散すると危ない

友希那 「リサ！」

雄也 「…」

廻里 「友希那ちゃん下がって！」

幼馴染みの身を案じ、駆けつけてきた友希那目掛け放たれた氷の弾丸を甲赫でガードする

廻里 「…！」

最高強度を誇る甲赫を使い、ガードするが後ろに押される。肩甲骨から出てる影響もあるだろうが…

友希那 「廻里！」

肩に氷の弾丸が当たり、皮膚が裂ける。しかもそこから体が凍てついていく。いまは甲赫に全力を注いでいるので溶かす暇も無い。なにか…隙は…

廻里 「っ…！」

想 「おりやああああ！」

その時だった。八意思が窓を蹴破り雄也に飛び蹴りを放つ
雄也「っ!？」

雄也は横に吹き飛ばされ転がる。能力が解けて日菜とリサが地面に立つ。八意はその2人を持ち上げ廻りの横に立った

想「大丈夫か!？」

廻里「うん、大丈夫。」

超回復を使い、傷を治した廻里。

想「行くぞ…」

廻里「ああ…」

2人が友希那、リサ、日菜を庇うように立つ。

日菜「君…なんでそこまでするの?」

日菜が疑問を投げ掛ける。俺はそれに笑顔で答えた

想「守りたいから守る。それだけだ」

そう言いながら腰に手を当てる。ベルトが出現し…

想「変身!」

俺は赤のクウガに姿を変え、構える

廻里「リミッター解除…」

廻里は羽赫を発現させる。羽赫の形状は変化し、身体を覆うようになった。

想「なにそれかつこよ…」

廻里「まあね」

その羽赫はふくよかな羽毛にも見えた。

廻里はいつの間にか作り出したランスとレールガンを両手に持ち構える。向こうでは相手が地面を叩きながら起き上がった

雄也「死ねえええ!」

やけくそに放たれた氷の弾丸と雷。俺が身構えるよりも早く、廻里が甲赫を発動させみんなを守る。

廻里「っ!」

想「無茶苦茶やりやがる…！違う教室にはあこもいるだろ…」
俺はそこで思いつく

想「廻里…なんでもいい…銃を作り出せないか？攻撃できるもの
じゃなくてもいい」

廻里「…わかった」

廻里は1つの拳銃を作り出した。それを八意に渡す

想「ありがとう…」

そう言いながらベルトに手を当てる。霊石が赤から緑に変わる

想「超変身！」

俺は緑のクウガに姿を変えた。拳銃がボウガンへ変わる

廻里「モーフィングってやつか…」

想「っ！」

凄まじい情報量に頭がおかしくなりそうだ。だが俺はそれを無理
やりねじふせボウガンを引き絞る

雄也「っ！」

その矢は相手の手にあたる。能力が少し途切れ隙ができる

廻里「っ!?!ちよつと！」

レールガンを持ちながら駆け出す。相手に隙を与えた、だがそれを
無駄にできない

想「超変身！」

青のクウガに姿を変える。レールガンを相手の腹にぶつけると、青
のロッドに変わる。綺麗な鈴の音を鳴らしながらロッドが伸びる

雄也「ぐっ…！」

想「はあっ…！」

ロッドを相手の顔にぶつける。そのまま振り回し膝を叩き、雄也を
地面につかせる

雄也「調子に乗るなア！」

想「ぐあ…！」

雷の一撃が俺を襲う。俺がロッドで雷を何とか絡めとる。その雷
を宿ったロッドを投げつける。だが相手は氷の壁で塞いだ

想「厄介だな…！」

場所が狭い上に一般人がいる。あいてには関係ないからあれだろうが俺たちにとつちや不利もいいところだ

想「どうする…?」

廻里「…分からない」

横に並んだ廻里の顔を見ながら言う。だが廻里もさすがにどうしようもないらしい

想「…ちよつと武器想像して…なんでもいいから」

我ながら無茶振りもいいところだ。だがそこで期待に伝えてくれるのが廻里。剣を創り出し俺に渡す

想「超変身！」

俺は紫のクウガに姿を変えた。貰った剣を紫に変える

想「今から30秒だけ稼ぐ…」

廻里「でも…」

八意は既に金の力に身を包んでいた。全身に雷が迸り、姿を変えていく

想「飛んできた攻撃からリサ達を守ってやってくれ、必殺技くらい撃てるだろ…」

廻里「…わかった」

そこら辺に落ちてる破片を拾い、剣にする。あの時やった二刀流だ
想「…!」

相手が放つ氷の弾丸を身体の鎧で受ける。半歩後ろに下がるが前へ進む

廻里「…そうか」

まれに飛んでくる氷の弾丸を甲赫で防ぎながら廻里はふと考えつく

想『30秒しか使えないからな…』

八意の言葉が頭に浮かぶ。もしかしたら…もう一度雷を浴びれば…時間制限は無くなるのではないか?

だがそれに八意が耐えられるのか…

廻里「やるしかない…」

意を決する。やるしかない

廻里「…！」

想「っ！」

驚く八意、だが廻里の目を見る。まるで“信じてくれ”そう言われてる気がした。だから八意は何も言わない

雄也「2人まとめて死ね！」

相手が雷を最大限に貯めて放電する。教室が揺れ、凄まじい音と共に、雷の鳥が迫る。二刀流をガツチリと構え、防御体制を取る

廻里「すいません！」

想「えっ…？」

廻里は何故か鏡を作り出し、俺に反射させてきた。ある程度弱まった雷は俺にぶつかり…

廻里「…！」

想「ぐあああ!？」

直後、視界が白く染まる。何も見えない中、雄也の笑う声だけが響

く

雄也「馬鹿め！自爆したな！」

廻里「…！」

雄也「…？」

想「…！」

だが八意は死んではいなかった。彼の姿は黒くはなっている。だが姿を変えていた

想「黒くなった…！」

廻里「…なんかすいません」

想「死んだかと思っただよ!? まあ…なんか力がみなぎるしいけど…」

赤の金の時に生えていた飾りが両足に着いている

廻里「行きますよ…！」

想「ああ…！」

廻里は片手にランスを構え、八意は借りた剣を持つ。

雄也「クソがアアア！」

廻里「っ！」

想「——らあっ！」

2人は走りながら雷と氷の攻撃を躲し——時にはランスと剣で受け流す。

廻里「終わりにしよう…身体強化10倍…」

想「いくぞ…ふっ…」

2人はそれぞれ武器を捨てる

八意の両足に炎と雷が宿る。廻里は赤い稲妻が宿る

想「おりやああああ！」

廻里「はあああああ！」

キックを叩き込む。相手は凄まじい断末魔と共に校舎の壁を突き破り、運動場に落ちて転がる、それに続き2人が軽やかに着地をする

雄也「なんで…どうして…そんな…」

相手が事切れたかのように倒れる

想「はあ…はあ…」

廻里「…」

羽丘女子学園が元の時空へ戻る。あるべき場所へ、それを行った能力者が死んだからだ

その能力者は、灰のように消えた

廻里「ありがとうございます…」

日菜「すごい！2人であるっ！だね！」

リサ「廻里と…誰だろう…お疲れ様！」

想「ああ…」

廻里「うん」

青空が照らす。みんなが笑顔になる。それを見て、廻里と八意は顔を合わせ微笑む

——その時だった

廻里「…八意さん！体が！」

八意の体が下から光が分散するように、消えていく

想「…あいつが能力で俺を引き連れてきた…それが持ち主が死んで全ての時空が元に戻る。当然俺も元の時空へ帰る訳だ」

冷静に答える

廻里「そうなんです…楽しかったですよ…」

想「俺も…短い間だったけどな…」

記憶はきつと、残らない。だけど…きつとこの2日の思い出は…

想「ここにある…」

廻里「…ですわね」

リサ「あの…名前は…？」

リサが歩み寄り、俺に聞いてくる

想「八意想だ。」

リサ「八意くんか…」

まるで確かめるように繰り返す

想「ありがとう…廻里」

廻里「はい…」

想「さよなら、またいつか会えるなら」

そうして、完全消滅する。最後まで笑顔でいた八意

リサ「あれ…？何でここに？」

日菜「学校がめちやくちやだ!？」

それぞれ記憶が消され、騒ぎ始める。その中廻里はただその場を見下ろしていた。何故か無性に悔しかったのだ。あんなにいい人だったのに、なぜ記憶に残してくれないのだろうか

廻里「…」

八意が立っていた場所に何かが太陽に照らされながら落ちている、それを廻里が拾い上げる

赤の石には、クウガのマークが掘られていた。

想『それ、付けといてやれ。お守りみたいなもんだ』

廻里「八意さん…」
その指輪はまるで答えるかのように赤く光った

く八意宅・PM1:00く

想「…」

家に泊まった小川を学校へ送り、俺は1人ゆったり過ごしていた。学校はもう始まって大体は昼休みだろう。あいつらの事だしまた俺を学校に引き戻そうとしてくれているのだろう

あと少しで期末

紗夜『もうちよつと勉強してください！貴方はまったく…』

それが終われば冬休み

凜『メリークリスマス！』

冬休みはたしかcircleでライブをやる

香澄『みんなでキラキラドキドキしよう！』

それが終われば年末年始

凜『お年玉ちよーだい！』

まだまだ楽しそうなことばかりだ。

想「そういえば…」

最近一条さんと連絡してないことに気づく。ココ最近未確認事件がスッパリと消えてから会ってない。ニュースでは未確認生命体事件解決か？と言われているが俺はそうは感じない。むしろ何かの準備期間のように思えた…

想「また今度食事にでも誘ってみるかな…」
俺は1人、ソファ―に座りながらそう呟いた

〈同時刻・隣町の警察署〉

警察官「ぐっ……はあ…」

男性は骨を折られ絶命した。その死体はそこら辺に転がる大量の死体の1部となる

その死体は全て、ここの警察署の人達だった。たった10分で120人を全滅させたのだ

誰が一体どういう目的でこんなことをしたのか…

ガドル「…弱すぎるな」

ガドルは、戦う人間……つまり警察官を狙うゲゲルをしていた。何故そのような非効率的なゲゲルをしているのだろうか

ガドルは強さを求めるならなんだってやる。昔からそうだった。最近の人間は昔とは違い我々に対抗する手段をいくらか持っている。とドルドやバルバから聞いていた。

大体の奴らはその忠告を無視し、戦う人間達にいいように踊らされ追い詰められてクウガにやられた。

だから戦う人間を潰せば、対応出来る人間を排除できて一気に人数を稼げる。その点ではある意味効率的だ。だがしかしガドルは失望していた。バカの一つ覚えのようにただ傷つきもしない武器を放つだけ、なぜこんな奴らに今までのグロンギが倒されたと思うと非常に情けない

ガドル「クウガ…」

クウガは1番最後に殺す。自分が手に入れた新たなる力で、古代の屈辱を晴らす、そしてクウガを殺せば

ガドル「そしてダグバ……貴様は俺が殺す……」

空中で拳を握りしめ呟く。それだけで周りのガラスは割れた。どれだけの覇気が彼に宿っているのだろうか

ドルド「中々いいな……」

ドルドはそれを見下ろし、カウンターに殺害人数を記録していく。

その横にいる白い服を着た青年が無邪気に笑う

??? 「あははっ！ガドルはやっぱ強いね！」

ドルド「…！」

笑ってるだけで何故か背筋が凍る。それを何とか表に出さないようにドルドは何とか表情を取り繕う

ガドルはそれに気づかず、次なる目標目指して歩き始めた

（警視庁）

一条「10分で120人全滅!？」

無線で送られてきた内容に一条は、嫌、一条達は激震した。

杉田「そんな馬鹿げたことあるかよ…」

杉田が力が抜けたようにへたりと座り込む。周りの人達の空気も重くなり始める

一条「そして応援要請がきました…」

警官1「そんな…」

警官2「勝てるんですか…?」

桜井「やるだけやるしか…」

それぞれがざわつき始める。それはそうだ120人を短時間で殺したようなやつにどうやって勝てと、一条もそう思っていた。そこに杉田の声が入る

杉田「やるしかねえ！お前ら根性入れろ！」

そう叫ぶ体はどこか震えている。だが本人はそれを我慢して叫んだ。そして後ろに振り向く。その背中が今はとても頼もしく、とてもかっこよかった

全員「おう！」

それぞれ覚悟を決めて行動開始する。ライフルを手に取り、そこにガス弾を入れてコッキングをする。上から支給されたコルトパイソン357を腰ポケに入れ、パトカーに乗り込み現場へ走るのだった。

一条「八意…！電話に出てくれよ！」

運転する杉田の横で一条がスマホで連絡をする

杉田「彼か…？」

一条「ええ…彼の力を借りなければどうしようもありません…本来なら人を守る立場の我々が…情けない」

杉田「その通りだ…彼はまだ学生だろ？学生にしては根性がありますぎだよ…」

一条「ん？無線が来てる…こちら一条！」

警官『こちら今未確認生命体と交戦中！ですが…奴に効かないんです！それに場所が羽丘女子学…』

そこまで言っただけ音が消える。次の無線からは雑音しか聞こえなかった。

〜八意宅〜PM2:00〜

想「一条さんから連絡…？」

俺はスマホを手に取り、まさか連絡人が一条さんだったことに気づく。

一条『八意！聞こえるか！』

想「はい、どうしましたか？」

やけに緊迫した声に聞こえる銃声、俺は弾かれるように立ち上がりビートチェイサーへ向かう

想「未確認生命体ですよね！」

一条『察しが良くて助かる！場所は…羽丘女子学園だ！』
想「!？」

俺はその言葉を聞いた瞬間、背筋が粟だった。まさかリサたちが狙われているのかと思いつきながら電話を切り、羽丘女子学園へ向かう

〜羽丘女子学園〜

リサ「なんなのよ！あれ！」

突如として羽丘女子学園に現れた未確認生命体。生徒と先生は安全の為に2階と3階へいた。その未確認生命体の姿を見ようと運動場に面する窓ガラスに大量の人が張り付く。だが見えるのは地獄だった。

巴「酷い…」

駆けつけてきた応援を片っ端から薙ぎ倒す。また応援が増え、死体が増えの繰り返しだった

ひまり「うっ…」

つぐみ「ひまりちゃん！大丈夫？」

あまりの光景にモカが目を伏せ、ひまりが危うく出しかける

一条「…！」

8人で横に並び、前から迫る未確認を撃ちながら下がる。だが相手には何も効かない。そこら辺にパトカーが転がり、大量の死体が転がる

友希那「リサ…あれは…！」

その光景の端に、1つのバイクが止まる。降りてきたのは既に赤のクウガに姿を変えた八意想だった。それに全員が湧く

生徒2「4号だ！」

つぐみ「想さん！」

リサ「想くん！」

巴「カツコイイぜ！」

六花「でらかっこええ…」

想「…！」

俺は運動場の隅に追い詰められている一条さん達を見る。相手は俺に背中を向けて堂々と歩いている。その背中は見ることがある。だが二回目だ。もう怖くはない

想「…お借りします」

警官の死体付近に転がっていた拳銃を手に取り、パトカーの上に乗った。ジャンプした瞬間に既に緑のクウガに姿を変えている

拳銃が緑のボウガンへ変わる

想「…っ！」

俺はそれを引き絞る。狙いを定め…

相手の背中目掛けボウガンを放った

ガドル「…」

相手は歩くのを辞める。その背中に着いている紋章はすぐに消された

想「!?」

あまりにも早すぎる。しかも気合いを入れる様子も何も無かった。つまり今の攻撃は雀の涙程度しか無かった訳だ

ガドル「…!」

ガドルもまた、背中に放たれた紋章を消す。そして、その目は赤から

緑へ変わった

肩の飾りを取り、ボウガンへ変える。

想「…!?!」

振り向きざまに放たれたボウガン、俺はそれを緑のクウガの力でもはや感覚で避けた。俺が乗っていたパトカーは木っ端微塵になり吹き飛ばす。

想「超変身…!」

これがって避けた際に青のクウガに姿を変える。今の攻撃は回避するしかない。

ガドル「…」

俺はこちらを向く怪物に目を向けながら構える。次は避ける。

そう考えた時だった

想「っ!?!」

体を凄まじい衝撃が襲い、後ろへ吹き飛ばす。

想「ぐっ…あああああ!」

遅れてやってきた痛み……いや激痛に視界が白熱する。俺は確かに相手の動きを見ていた。ならば……

相手が凄まじいスピードでボウガンを放ったということになる。

想「!？」

—— 2度目の衝撃が身体を襲い、さらに後ろへ、校舎の壁に凹みを作り、俺はうつ伏せに倒れる

想「……っ……っ」

心臓と肺を圧迫されて一瞬機能が止まり、息が出来なくなる

青のクウガの鎧はボウガンが当たった箇所から白い煙が出ている。あれは俺と同じ力だ。緑のクウガだ

想「—— ぷはっ！」

ようやく呼吸器が修復され、息をする。その間にも相手ボウガンを放とうとする

想「……！」

再びもう一撃、俺は這いずりながら避けた。もはや反撃の隙すらない

リサ「……」

友希那「……リサ」

彼が来た、誰もがそう希望を抱いた。だがそれも消えようとしている

巴「嘘だろ……あの八意が……」

麻弥「まさか……」

薫「……」

日菜「負けないよ！きつと……！」

モカ「……」

あこ「……！」

想「……！」

這いずり避けた先に木の枝が落ちている。俺は無我夢中でそれを

手に取り立ち上がる

想「超変身…！」

俺は紫のクウガに姿を変えて歩きだす。腰が引き気味になっているのは誰がどう見てもわかった

想「…！」

ボウガンの一撃を鎧で受ける。両足が半歩下がる、俺は再び歩き始める。

想「…っ！」

再びボウガンの攻撃。今度は右半身が後ろへ下がるが何とか耐える

想「…!!」

今度は左半身、俺はもう剣の間合いに入れた

想「はあっ！」

相手がボウガンを放つより先にボウガンを剣の下からの斬撃で吹き飛ばす。

巴「よし！」

リサ「…いける！」

ボウガンは相手の手から離れた所に落ちる

想「…っ！」

剣を突き刺そうと体を引き絞った時だった。

——ガドルの目が緑から紫へ変わった

想「はあ！」

俺は剣を突き刺す。だが手応えがない。全くといっていいほど無いのだ。刺さってはいるのだがこれ以上進まない。更に奥に刺すべく力を込めた時だった

ガドル「小癩な…」

そう言いながら腹に刺さっている剣に触れる。

想「…な!？」

血も凍るような驚愕が体を襲う。俺が今まで紫の剣として使っていたのが、ガドルの剣へ変わったからだ。驚愕する俺を殴り飛ばす

想「ぐっ…!」

なんとかよるめきながらも踏ん張る。この剣を握る手は離してはいけない

ガドル「…離せ」

そう言いながら俺は腹を蹴られる

想「ぐっ!」

俺はそれにやられ、手を離してしまい後ろに倒れる。紫のクウガの防御など相手に通用しなかった

ガドル「…!」

自分の腹に刺さっている剣を片手で引き抜き、右手に持つ。おかしい、こいつは今までのグロンギとは比べ物にならないほど強い

想「…!」

相手の縦斬撃を両腕でガードするが、両腕の装甲に斬撃跡がつき、腕が下に払われる。

想「っ!」

横に斬られ、胸の装甲に横に斬撃跡がつく。もはや装甲が紙に等しかった

想「っ…!」

心の底から溢れ出す恐怖を無理矢理沈める。

ガドル「…」

俺は立ち上がるが肩に斬撃を食らい、うつ伏せに倒れてしまう。

リサ「…!」

つぐみ「…!」

リサ達から悲痛な声が漏れる。モカも薫も目を伏せる。

想「ぐっ…あああああっ!」

肩の装甲が切り落とされた。それにより肩に激痛が走る。俺はみつともなく地面に蹲る。

ガドル「…どうした？その程度か？」

ガドルはそう言うのと近くの木の棒を拾い上げ俺に投げしてきた。俺は咄嗟に受け取る。木の棒は紫の剣に変わる

想「舐めやがって…」

心の底から腹が立つ。俺はその怒りを表すかのように立ち上がり、上から剣を振り下ろすが

——— すぐに剣で弾かれ、柄で腹を殴られる

想「ぐ…ううっ！」

俺は痛みに吐血しながら何とかふみとどまる。今度はガドルが上から下へ剣を振り下ろす。その件は恐ろしい速度で俺の身へ迫り――

想「っ！」

何とか膝立ちのまま剣を両手で持ちガードする。だが剣が軋む音と共に剣が下へ下がる。

想「うっ…ああ！」

剣を片手で支え、相手の腹に拳を打ち込む。

ガドル「!？」

不意をつかれたのか相手も流石に後ろへ少し下がる。俺は後ろに転がりながら――

想「超変身…！」

赤のクウガに姿を変える。上から再び迫る剣、俺はその手目掛けキックを放つ。

ガドル「…！」

手応えは無かったが俺の目的通りに剣は相手の掌から消えて、近くの地面に突き刺さる。だが相手は手のひらの紋章を見せつけるかのように消した

想「…！」

俺はもう今自分が叩き出せる全てを込める決意をする。少し距離

をとる、助走の構えをする

—— 全身を雷が迸る。右足に装飾がつき、ベルトが金色になる。俺は赤の金のクウガになる

想「：っ！」

俺は敵めがけて走り始める。右足が地面に着く度に炎と雷が迸る。それがどれだけの威力を持つのかは一目瞭然だった

先生「みんなふせて！」

先生の声で弾かれるように皆伏せる。リサ達もそれに続いて伏せる。

想「ふっ…！」

タイミングを見計らいジャンプをして一回転、そして右足を突き出しキックを決める

想「おりやあああああああああ!!」

相手の胸部あたりにキックを叩き込む

—— が、ガドルは半歩下がるだけで終わる

想「ぐあっ!?!」

俺は後ろに吹き飛び転がった。まるで俺がダメージを食らったかのように…

ガドルの胸部あたりにあった紋章も即消える。

想「ウソ…だろ？」

—— これも効かないとなると為す術もない。だが俺は諦めない。絶対だ

ガドル「そんなものでは俺は倒せない。この力は…こう使え…」

相手が構えた直後、ガドルを雷が迸る。目は金色になり全身も金の箇所が増えた。この雷…

想「金の力…!?!」

ようやく結びついた、今まで起きた停電は全てこいつが電気を食べ
て力を溜め込んでいた

日菜「あ…!あれって!」

目だけを覗いて見ていた日菜が指を指す

友希那「想と同じ力じゃない…!」

ガドル「…!」

想「っ…!」

相手が構え、助走をつけてくる。俺は足が後ろへ下がるがすぐに相
手目掛け走り始める

相手は雷を纏った両足を回転しながら俺に叩き込む。俺の拳はと
どかなかつた

一条「八意!」

想「ぐああああああああ!」

回転ドロップキックを胸部に直撃した俺は後ろへ吹き飛ぶ

リサ「ああっ!」

リサ達が我慢ならないと思い、想目掛け走り出すため教室から出る
俺は近くにあった運動場の倉庫にぶつかり

想「ぐあ…!?!」

扉を突き破る。そしてその倉庫は壁が内側に倒れ、激しい音を立て
ながら崩落する。コーンやボールが散乱し、ホコリが舞う

リサ「…!?!」

ガドル「…ほう」

崩落した倉庫を蹴散らしながら八意が出てきた。まだ赤の金のク
ウガになっており、諦めてないようだ

想「お…まえ…だけは…」

両膝が震えながらも必死に立ち上がりながら1歩、2歩と進む。だ
がダメージの蓄積により、白のクウガになってしまう

想「た…お」

白くなったクウガは、地面に膝を着き、うつ伏せに倒れた。うつ伏

せに倒れた時には、強制的に変身解除され人の姿に戻っていた

想「――」

口から、血が出始める

日菜「想くん！」

日菜達が近寄り想の肩を触り揺さぶる。その手を麻弥が止める
麻弥「あまり触らない方がいいです！」

ガドル「…」

薫が、みんなを庇うように立つ。その向こうにはガドルが歩いてきていた

薫「…！」

ガドル「俺は、破壊のカリスマ。ゴ・ガドル・バダ」

そう言いながら薫立ちを無視して歩いていく。だが1度だけこちらを振り返り

ガドル「そんな力では、ダグバには勝てないぞ」

そう言い残し、歩いていく。

リサ（ダグバ…？）

リサはただその言葉を聞いていた。八意はいつもクウガの話をする
と笑って誤魔化すか大抵逸らされる。そろそろ自分達もなにがどうなっているのか、彼の恐ろしいくらいの体の回復速度、

リサ（黒服さん…だよね）

リサが悩む間、その場に沈黙が続く

黒服「八意様！…まずい、急いで病院へ！」

その沈黙を破ったのは、黒服だった。いつも通りどこから来たのか
分からない黒服3人組は、テキパキと八意を担架に乗せ、運び去る。

黒服「…丁度、お話したいことがあります。放課後、Roselia
の皆様を連れて病院まで来てください。全てをお話いたします」

リサ「…!?!」

それを聞いたのはリサと隣に寄り添っていた友希那だけだった

く白い世界く

想「…」

久しぶりにきたこの白い世界。俺は歩きながらしばらく辺りを見
回す

アマダム「よお」

想「あつ、いたいた」

もうすっかり慣れてしまったもう一人の俺事アマダム。

想「いやく…強かったなあいつ」

アマダム「ああ、昔より力をつけてやがる」

想「今の俺達じゃ勝てない説…」

冗談交じりに言う。だがアマダムはうんうんと頷きながら

アマダム「今の俺たちじゃ勝てないな、明らかにわかる」

想「ウソだろ…なら勝てる手段があるはずだ。もつと俺に力があれ
ば！」

アマダム「落ち着け落ち着け！お前今まで力が欲しいなんて思った
ことないだろ！」

想「でも…あいつを倒すためには…第一言つたはずだぜ、俺はこの
身を、全身全霊でアイツらを守るって…教えてくれ」

アマダム「他人の為にやるのか？」

想「ああ、大切な親友達なんだ」

アマダム「————— わかった。ひとつだけの手段を教える」

想「…」

アマダム「もう一度心肺蘇生の電気ショックを受けるんだ。金の力
を使えるようになったのはあの電気ショックのおかげでもある。だ
からそれを更に増やせば…」

想「金の力が使えるって訳か！」

アマダム「だがその代わり…」

想「…人間を辞めるんだろ？」

アマダム「なんでそれを…」

想「薄々勘づいてはいたさ…金の力を使うと身体の筋肉が形を変え
る。アマダムと金の力が合わされば神経だつて戦うために改造され

る。より強くなるために、な」

俺は歩きながら話す。アマダムは少し慌てている

アマダム「そこまで知ってんなら…辞めようとはしないのかよ。」

想「だって俺がやるしかないじゃん、皮肉にもこの霊石のお陰で今までどうにかなって来たわけだし」

アマダム「リサって子達が泣くかもしれないんだぞ？」

想「黙ってたらバレんだろ…」

アマダム「…そうか、止められんか…」

想「ああ、やってくれ」

アマダム「お前なら…究極の闇に勝てそうだな…」
「凄まじき戦士」
にならなくても」

想「“凄まじき戦士”…？」

アマダム「古代に究極の闇と戦う為に造られた、4本角の戦士」

想「…まて見たことがある」

ジャラジの時に1度だけ見た事がある。目は黒く、全身トゲトゲ
だった。

アマダム「…少しだけ、昔の話をしよう…」

page 93 何人もその眠りを妨げることなか
れ

〈病院・緊急治療室前・PM6:00〉

黒服「…！」

リサ「黒服さん！——！！」

ガラス越しに見守る黒服、そしてRoseliaが横からやってきた、それぞれ反応する。その先では

〈緊急治療室〉

医者「色々と不味いぞ！」

医者2「患者の内蔵が破裂してます…！骨も何ヶ所か砕けています！——」

椿「はやく場所を特定しろ！」

ガドル戦で重症を負い緊急搬送され、今は緊急治療室にいる八意は苦しそうに呻いている。全身を汗で濡らしもがく、その体に目立った外傷は無い。だが内側までは治せてはいないようだ

紗夜「想さん！」

叫ぶ紗夜達に手を伸ばし、必死になにかをしようとしている

想「…っ…！！——！！」

そして突然、その手がベッドに落ちる。今まで動いていた体が突如としてその動きを止める。

想「——」

目が虚ろになり、汗ばむ医者たちの姿を映す。それに一瞬、その場の動きが止まる。だがその沈黙を破ったのは

——心肺停止を告げる機械音だった

医者「心肺停止！」

R o s e l i a ・黒服「…!？」

「医者「…心肺蘇生だ！」

そう言いながら動き始める医者たちをただ見るリサ達、さつきまでは戦いに身を投じていた彼の顔は、今は静かに寝ていた。その体が大きく揺れる。電気ショックだ

医者「ダメか…！もう一回！あんたが死んだらあそこで見てる彼女達はどうなる！八意さん！」

だが一向に目を覚まさない。

そして処置が始まって1時間した時だ

看護婦「…先生」

誰一人、作業をする者はいなかった。だが医者1人は…：椿緋色は諦めずずっと処置し続けた。

椿「…：みんなありがとう…後は俺に任せてくれ」

その場に医者達は一礼して病室から出ていく。それに変わり、R o s e l i a と黒服が入ってくる。

P M 7 : 1 6

八意想

死亡確認

その場にへたりこんだリサが涙を流す。それに釣られあこ達も涙を流す

だが

リサ「きつと何かあるんだよね…」

涙を流しているが、その声は冷静だった。それに紗夜が尋ねる。

紗夜「今井さん？一体それは？」

リサ「前だつて戻つてきてくれたもん！だから今回もきつと何かが

あるんだよ！」

前のは奇跡に等しい、今回も…2度目なんてあるわけない

あこ「そうだよ！想兄はみんなを置いて先に死んじゃう人じゃないもんね！友希那さん！」

友希那「ええ、そうね」

紗夜「…」

想『なあ紗夜、突然だけどき、俺戦いが終わったらRoseliaのマネージャーでもしよつかないかな…なんちゃって』

ある日のそういう彼の横顔は、酷く優しかった。

紗夜『…いいんじゃないですか？それよりも今に集中してください…』

あの時はそう冷たく言い放ってしまった

蘇る彼の声、紗夜は唇を開く

紗夜「そうですね…だから想さん、ちゃんと帰ってきてください、そして…」

紗夜（全てが終われば…Roseliaのマネージャーとして、Roseliaに全てをかけてください）

願わくば彼に普通の生活をして欲しい、恋愛も、たとえば自分が自分で無かったとしても、自分は応援したい

紗夜はそう、今はまだ眠る彼に祈った

（警察署・同時刻）

警官「う、ぐ…」

ガドル「…」

警官がまた1人絶命する。本部が連絡するより早く、その警察署は

全滅する。それを上から見下ろし、カウンターに記録していくドルド
ドルド「流石は“ゴ”だな、今までのヤツらとは別格だ」

そう言いながらドルドが化け物へと姿を変えて飛び去ろうとした
時だった

ドルド「っ!？」

自身が持つていたカウンターに何かが飛び、バラバラに壊れた。何
事だと思いい飛んできた方向を見る

父「はあ…つまんね…お前遊び相手になれよ！」

ドルド目掛けその人間——いや黒いクウガはもう1発矢を放つ

ドルド「!？」

羽の根元に当たり、羽がちぎれ飛ぶ。

ドルド「貴様…！」

ドルドはそう言いながらトンファーを持ち、構える

父「おっ、やる気になったか」

そう言いながら警官の死体を踏みつけながら歩いてくるクウガに
ドルドは何か嫌なものを感じた。同じ人間のはずだ。今まで自分が
見てきた中で、人が人の亡骸を踏みつけるなど見たこと無かった。ド
ルドは冷や汗を流す

——こいつは、人間じゃない

こいつは欲望の塊だ。悪魔だ。

ドルド「グッ…ガア…」

そう考えている間に、自身の腹を貫かれていた。そして上へ刃を突
き上げられる。腰から真つ二つにされたドルドは、苦悶の表情を浮か
べながら

悪魔を見ながら…

父「くくっ…アッハッハッハッア！」

ドルド「あ…くまめ…」

爆散した。

くとある屋上く

白い少年「あ…ドルドが死んじやった…」

バルバ「…！それは本当か!？」

白い少年「うん、もう1人のクウガによってね…」

バルバ「やはり邪魔か…」

白い少年「でも僕達は手を出さないよ」

バルバ「何故だ？仲間がやられたと言うのに」

白い少年「…だってクウガにはもつと強くなって貰いたいもん！そのための糧だよ、あいつは！」

バルバ「…今は殺さないのか？」

白い少年「そうだなく、殺して面白くなったら殺す！古代の屈辱を味わってもらいながらなね！あははっ！」

バルバ「…」

く病室く

リサ「そうなんですか…想くんは…もう」

黒服はRoseliaのメンバーを見て、目を伏せる

こころ『想にまた会いたいわ！頑張らないと!』

脳裏にこころの声が蘇る。八意がもし、自分が人間ではなくなってしまったと分かったら、きつと姿を消してしまう。誰かの迷惑になりたくないから、彼は優しいから…

その沈黙を破ったのは、以外にも燐子だった。いつものように途切れ途切れに、でも芯は強い声が響く

燐子「でも…それでも私は…想くんを信じます」

紗夜「ええ…人間じゃなくなつたとしても私…私達は白金さんと同じように信じます」

あこ「うん！」

友希那「ええ、それに元から彼には普通の人間じゃ出来ないような

ことばかりを見させられているわ。今更ね」

リサ「あはは…確かにね…」

黒服「…」

黒服は呆気に取られた。もつと早く言ってくれなどと言われると思ひ覚悟はしていた。だが彼女達の反応は予想とは違った。それには彼への信頼が見える

黒服（ほんとに…すごい方です。八意様は）

椿「…ん？」

事情を知っている椿が、八意の遺体を一応調べていた。腹辺りに触れた手が止まる

リサ「どうしたんですか？」

——微かに体温が上がっていた。

椿「体温が…上がってる…？」

Roselia・黒服「…!?!」

また起こるのだろうか、あの奇跡が。いや起こる。

あこ「ちよつと失礼します!」

あこが先陣切つて八意のお腹に触れる。

あこ「ほんとだ…!皆!生きてるよ!リサ姉たちの言う通りだよ!」

隣子「まさか…前みたいに死者蘇生が…」

想「…」

指が微かに動く。

リサ「…!」

次に目が開く。その目はまだ虚ろだが、次第に光を取り戻す。

かわいた唇を湿らせながら起き上がり——ギョツとする。それも

そうだ、Roseliaがいるから

想「…:…ただいま?」

紗夜 「…あなたって人は…」
リサ 「バカ…おかえり」

想「早く…やつを止めないと…！」

そう言いながら立ち上がり、ベットから出ようとするが力が入らず床に転んでしまう。

リサ「大丈夫!? 想くん！」

リサが駆け寄り俺をベットに座らせようとする

リサ「無茶しないの！ 体も突然動かせるわけじゃないんだから…！」

想「でも…！」

こうしている間にも未確認は人を殺してる。どこかで血が流れてるはずだ。今の俺は強くなつたはず…！

今の俺なら勝てるはず…！

想「!?」

そう考えていた俺の右頬を、乾いた音を立てて紗夜が叩く。

紗夜「落ち着きましたか？」

相変わらずのクールなボイスだが顔は怒りを隠しきれていない。

俺もそれを見て流石に状況を理解し、静かにベットに座る。紗夜怖い

想「すまん…俺としたことが…慌てて…」

アマダムにも言われたはずだ。力を求めすぎるな。求めすぎはいつか身を滅ぼすと

燐子「水を…買ってきました…これ飲んで…落ち着いてください…」

想「ありがとう、燐子」

俺は燐子にお礼を言いながら水を貰い、キャップを開け口に流し込む。冷たい液体が体にしみ渡る。

想「…？」

このメーカーの水は確かほんのり甘かった。俺はいつもそれが好きで飲んでいたので…

味がしない。

ただ液体を口に流し込んでるだけだった

リサ「どうしたの：？」

心配そうな顔をしたリサが覗き込む。

想「あ：いや何でもない」

そう言いながらペットボトルを置いてとりあえず深呼吸

想「黒服さん、その後未確認の様子は？」

黒服「あ、ええ：1時間前の殺人を最後に姿を消しています。犠牲者が240人、決して油断してはいけません。しかもあの敵は赤、緑、紫、そして金の力を使っていました。青は見えていませんが：多分あるでしょう：」

あこ「なにそれチートじゃん：」

あこがげんなりとしながら言う。

リサ「金の力？も確か30秒が限界って：」

想「ああ、それなんだが：」

アマダム曰く、一応さっきの電気ショックで金の力の強化となる基礎は出来上がったらしい。だがあともう一押し、何かが足りない。

想「黒服さん、放電施設みたいなのって：あります？」

黒服「はい：？」

今日中に強化を施さなければならぬ。なら効率的なものはない。ただ一つ。自分に電気を浴びせればよい。

???'『すいません!!』

何故か突然、自分の記憶に蘇る光景。自分めがけ、鏡を展開し、俺に雷を向けてきた人物：

燐子「自分に雷を当てて強化する：確かに効率はいいかもしれませんが：」

紗夜「そんなの：身体が耐えられるわけがない：今度こそ死ぬかもしれないんですよ」

紗夜が深刻な顔で告げる。俺はその頬を掴み、引っ張る

想「ぐにーん！」

紗夜「?!?!」

その後、頭に手を乗せてポンポンと叩く。

想「なんていう顔してやがるんだ、美人が台無しだぞ?」

紗夜「…っ!?!」

紗夜の顔が一気に赤くなる。それにぎよつとするが怒っているわけでは無さそう。だから俺は撫でるのを続ける

想「心配してくれてありがとな、でも俺は大丈夫。黒服さん…」

俺は黒服さんを見る。

黒服（覚悟を決めてる目だ…もうこれは止められない）

黒服は1度目を伏せ、そして開く

黒服「私達の屋敷に、実験施設があります。そこなら…八意様の言っていることを出来るかと…」

想「はい、とりあえずいつて試してみましよう」

リサ「ねえ」

黒服さんと部屋を出ようとした時、リサに袖を掴まれた

リサ「アタシ達もついて行っていい?」

想「…」

黒服「いいですよ」

想「…!」

そして、俺とRoseliaは、リムジンに乗り弦巻邸へ行くことになった

〜弦巻邸〜

こころ「想!久しぶりね!」

想「久しぶり、こころ」

こころ「あら?リサ達もいるのね!いらっしやい!」

紗夜「お邪魔します」

リサ「お邪魔します〜」

そこで俺たちはしばらくこころ達と部屋へ行く。黒服さんは準備をすると行って出ていった。

こころ「おかしと紅茶でパーティよ!」

リサ「ありがと、こころ」

ひとまずリラックスしようということで俺達は座る。

こころ「この紅茶はとーっても美味しいのよ！」

紗夜「ええ、テレビで見たことがあるわ…流石は弦巻さんね…」

リサ「ほんとだ…美味しい！」

皆が紅茶とお菓子で舌づつみしているが、俺にはわからなかった。

お菓子も、紅茶を

——味を感じられない

想「やっぱわからん…」

俺はそうつぶやく

リサ「…ねえ想くん」

想「…ん？」

リサが何かを探るように俺を見る。

リサ「ちよつと目つぶって？」

想「なんで…？」

リサ「いいからはやく！紗夜達も手伝って！」

紗夜「今井さん…突然…」

俺は渋々目をつぶる。こそこそと話す声が聞こえる。俺は耳を塞ぎ、しばらく時を過ごした

想「…もういいか？」

5分経ち、もうそろそろいいだろうと思い、俺は口を開く。

こころ「ええ！いいわよ！」

答えたのはこころだった。俺はそれに頷き目を開く。一番最初に目に入ったのは何かサンドされたクッキー、それとお水？だった

リサ「これ食べてみて！」

リサ達が俺に勧めてくる。俺はとりあえずバレないようにひとく

ち口に入れ、「美味しい」と言う

想以外「!?」

燐子「お水も…飲んでみてください…」

燐子に勧められたお水を口に流し込む。ただの水だろうか分からないが味がしない

燐子「…」

想「どうしたんだよ…いきなり」

俺はこころを含め、少し悲しい顔をしている皆に声をかける

紗夜「味が…分からないんですね…?」

想「…!」

紗夜が悲しげに告げるその言葉は、俺の頭の中でグルグルと回った。わざわざ俺に食べさせたのはそれを確証へ持っていくため

リサ「そのお水…酢だし…クッキーには申し訳ないけどワサビをたっぷりサンドしてある…」

燐子「それを食べて…普通にしてる…それはもう…味覚がないのと同じじゃないですか…!」

想「…隠そうと…思っただけだな…」

リサ「どうして想くんだけがそんな目にあうの!」

想「…リサ」

リサ「別に想くん以外の人でも良かったじゃない!想くんじゃなきゃダメなの!?なんで…どうして想くんなの…?」

想「ほんと、なんでだろうな…」

次第に声が小さくなっていく。次に聞こえたのは、リサの嗚咽だった。紗夜の目にも光るものがある。燐子にも、あこにも、そして…友希那にも

それぞれなにか思うことがあるのだろうか

こころ「想…私…おかしいわ…!」

想「こころ…」

俺は驚愕した。あのこころの目に、光るものがある。こころはそれ

を必死に堪えようとするが“それ”は次々と目から降っていく。そしてついに…

「……うわあああ……！」

大きな声で泣きながら俺に飛びつくところ。俺はそれを受け止める。

「ほんとうに…なんでだろうな」

別にトラックに轢かれて死んでも良かった。何も思い残すことは無かった。だけど神様は俺に命と力を与え、この世界に俺を流した。

「……俺はもう人間じゃないんだ…リサ達にはもう勘づかれてたけどな…」

黒服「八意様、準備が整いました。……様たちは……でお待ちを」

「じゃ、行ってくる。話は後でしょう…」

リサ「…」

俯くりサの顔はよく分からない、がきつと悲しんでいる。俺はそう考えながら黒服さん達と歩いていった

「放電施設」

「……」

いかにもそれっぽい施設だ、コンクリと金属で出来ており、操作盤の前はコンクリとガラスで仕切られており、その奥が、放電をする場所なのだろう

黒服「はい、では早速…ここに立つてください」

俺は部屋の真ん中に立つ。腰からベルトを出す。

「変身…」

俺は赤のクウガに姿を変えた。それを見た黒服は1度頷く、そしてスイッチを押し…

「っ!？」

俺の体を、激痛が襲った

想「ぎい……! ああ……!」

痛みのがあまり声が出ない。膝をつきそうになるが必死に堪える。俺がやり出すと言ったことだ。本人が倒れてどうする

黒服「八意様!」

想「大……丈夫……! です……! 止めないで……! 下……!」

俺は途切れ途切れながらも言葉を返す。それに黒服は息を詰め、信じたとやわんばかりに続けた。

ただ俺の脳裏には、リサたちの笑顔があった

八意が去った部屋は、まるで葬式のような雰囲気にもまれていた。あこ「あのお腹の石が……想兄を人間じゃ無くならせてるんだよね……? ならあのお石を取り除いたら……」

紗夜「椿さんや黒服さんが言っただけはいいましたがあれを取り除くのは今の人類には不可能。出来たとしても想さんは……」

友希那「生きてはいない……というわけね」

リサ「……」

リサに更なる絶望が襲いかかる。もし戦いが終わったとしても一生をその石と一緒に過ごすということになる

燐子「戦いで……壊れるというの?」

紗夜「その場合も椿さんから聞いています。今の想さんの一部となりかけているあの石は、壊れたりすると……死に至るらしいです……」

なら、一生をあのお石と共に過ごすことになる。

あの石はもう、八意の体の一部と化していた。

リサ「そんな……」

紗夜「今井さん……」

なぜ本当に彼だったのだろうか、彼を選んだのだろうか。あれだけの過酷な運命を、なぜ彼だけに背負わせたのだろうか

想「俺は戦うよ……みんなの笑顔を守る為に、だからリサ達には笑顔

でいて欲しい、それが俺の願い…』

いつかの日の彼の言葉が蘇る。あの日は、まさかこんなことになるとは微塵も思っていなかった。まさかこんなに長続きするとは、誰も予想していなかっただろう

リサ（そうだ…そうだよね…）

ならせめて、自分たちは笑顔でいよう。

リサ「よし…！元氣出すぞ！私たちがメソメソしててもどうにもならないもん！」

そう言いながら近くにあつたクツキーを掴み口に入れる

隣子「あ…」

リサ「辛っ！これ辛っ！口がああ！」

リサが口に入れたのは、八意に用意した激辛のサンドだった
こころ「リサ！大丈夫かしら？」

こころ達が慌てて駆け寄る。その場には、笑いが起こった

く放電室く

黒服「…！」

想「黒服さん…！はあはあ…やりました！」

汗だくの八意、その姿に驚愕する。だが驚く原因はもうひとつあつた

——金の力を30秒以上使えるようになった

想「やった…！全身が凄い力に包まれてる感じがする…！」

そう言いながら飛び跳ねる八意、そのいつも通りの元氣さにほっとする。

黒服「お疲れ様です…八意様」

黒服はそう呟き、タオルを取りに行った。

リサ「金の力を30秒以上使えるようになったの!？」

想「そうなんだよ!今もなんか身体がビリビリくって!」

あこ「静電気人間!？」

想「違うそうじゃない!！」

燐子「雷魔法が使えるようになったり!」

想「しないなあ!」

紗夜「身体の方は大丈夫なのですか?」

紗夜が俺を見回しながら言う

想「全然大丈夫、むしろめちやくちや好調、さっきまでのだるさが嘘みたい」

紗夜「それはよかったです!」

想「みんなもさつきとは打って変わって笑顔だし、なんか俺も笑顔になるわあ」

友希那「!」

俺を見る友希那の目は、何故かゴミを見るような目をしていた

想「何その目!まるでゴミを見るような目してんだけど!」

友希那「!いいえ、何も無いわ」

想「意味ありげなこと言うのやめてくれない?俺そういうの気になるから!」

笑いが巻き起こる。その後はしばらく、おれはいじられたおされながら、でも楽しい雑談タイムをしていた

く八意宅・AM5:00く

想「…ん？」

俺はいつも通り家のベッドで目覚める。

想「頭痛い…」

俺は頭を抑えながら昨日のことを思い出す。リサがあのもちやくちや辛いらしいクッキーを食べたことや友希那が俺の事をゴミを見るような目で見ていたことへの追求で、忙しかった気がする…

想「まだ5時か…」

俺はそう言いながら寝室から出る。すっかり冷え込んだ部屋は意外と寒く。俺は身震いを1つ。暖房を付けながら朝のニュースをやってるチャンネルを探し、テレビをつける

想「もうクリスマスか…」

もうそろそろこっちに来てから約1年になる。最初は波乱万丈だった…

いつかは終わるはずのこの戦い、もし終われば、俺は何をしようか？

circleで今まで通りバイトでもするか？

パスパレスタツフにでもなるか？

世界を旅して回る。それも悪くないかもしれない…

また1から青春し直すか…？いや、俺を好きになる奴なんかきつと
いない

想「クリスマス予定あるな…そう言えば、circleライブだったな。正確に日にちがきまってイブの日か…」

それにしても今日circleでライブが決まったってまりなき
ん慌ててたな…

手伝いに行かなくちゃ…(使命感)

そう思っていると、俺のスマホが鳴っている

想「一条さんから電話？」

この時間から一条さんから電話が来る時は大体がなにか急用じゃないと来ない。——まさかまたあの未確認が…？

想「はい！俺ですけど…？」

俺はしばらく一条さんの要件を聞いた

（警視庁）

想「一条さん！」

俺は先程の電話で呼ばれ、まだ薄暗くてクソ寒い朝の街をビートチェイサーで走ってきた

一条「八意！ケガは大丈夫なのか？」

会って早々俺の心配をする一条さん、俺は腕を振りしながら答える

想「はい！元気ですっ！一条さんのほうも…」

俺の元気を聞いて微笑む一条さんの頭には包帯が巻かれていた。きつとあの未確認にやられた傷だろう

一条「ああ、これか。すぐ治るから心配するな。それよりあの未確認生命体なんだが…」

想「凄く強かったですよね…」

あの強さ、どれだけ修行を積み重ねてきたのか。強さを求め続けて

ガドル『この力は…こう使え…！』

俺の金の力さえ自力で習得した奴を、俺は舐めてかかった訳では無い。だが敵は俺が想像していたより遥かに強かった

一条「ああ、だがあの後まだ活動してないらしく警察各署はとにかく対策をねってる所だ。そこでまた俺達に力を貸してほしい…頼めるか？」

一条さんはそう言うと言を深く下げた

想「何言ってるんですか…当然協力しますよ。今まで通り、俺とみ

んなの力で頑張りましたよ！」

俺は素晴らしいサムズアップをする。一条さんは微笑み俺の肩を叩いてきた

一条「ありがとう……！」

想「それにしても……」

俺は辺りを見回す。警視庁に行くとは必ず見る人も、今はいなかった。人の数も心無しか減っている感じがする

想「少なくなりましたね……人」

一条「ああ……なにせ警官だけを狙うからな……その代わり民間人には絶対に手を出さない」

想「なんでそんな非効率的なことするんですかね……？警察って最近は何故警官だけを狙うのか、今までなら民間人、最悪は子供までが殺

されていた

想（あの時だって……リサ達を狙わなかった……）

一条「それは俺たちにも分からない。だけどやはり、君のいう“ゲーム”に関するものかもしれない……」

想「俺も……早く見つけて倒さないと……」

一条「ああ、我々も最善を尽くす……」

その後、俺達は少しの雑談を楽しみ。それぞれ別れた

……とある警察署・AM10:00

警官「……！うおおお！」

血塗れで己の死期を悟った警官は、最期の抵抗に拳銃を放つ。娘と妻を残すのは辛い……

きつと必ず……俺達の死は無駄じゃなかったと思える時が来る……絶
対に……

警官「……」

腹を蹴られ、絶命する警官を見下ろすガドル。倒れている死体付近に何か光るものがあり、それを拾い上げる。

そのペンダントを開けると、中には一枚の写真があった。

女とこの警官が1人、桜の木の下に写っていた。それに挟まれた小さい女が1人、警官に抱き抱えられて無邪気に笑っている

ガドル「…！」

その写真を見た途端、ガドルの胸に鋭い疼きが走った。

ガドル「なんだ…今のは…」

理解が出来ない。なぜだ？ただゲームに沿って…人を殺しているだけなのに…

ガドル「こいつも…こいつも…」家族”をもっているのか…？」

家族、それはもうとうの昔に忘れたもの。戦闘民族である我々には必要の無いもの。なら何故今一瞬心が揺らいだ？

ガドル「私は…何故…？」

ガドルは呻きながらそのペンダントをいつの間にか人の姿に戻った手でそつと握りしめる。

初めてだ

心がこれほど揺らいだのは

気持ち悪い

今すぐ忘れてしまいたい

ガドル「安らかに眠れ…」

ガドルは、亡き警官にそう伝え、その場をふらりふらりと歩き出した。理解が出来ない感情と共に

父「さて…俺も動き出すかな…今度は誰を味わってやるかなあ…想…お前の絶望した顔…見せてもらおうぜ…」

そう言いながら、明るい町を歩く。父親

いや…八意俊介…

俊介「そうだ…ライブハウスcircleだ…あそこにはあいつも行ってるって聞いたからなあ…」

〈circle・PM4:00〉

一条「ここがあいつのバイト先か…いい店じゃないか…」

まりな（何あのイケメン!?)

一条はそう言いながら外の景色を眺める。ライブハウスの奥からは様々な楽器の音が聞こえる

香澄「いえーい!!」

こころ「いえーい!!」

有咲「お前らあ!」

リサ「元気だなあ…」

一条（…練習…だよな?）

練習を…しているのだなと思わせる。それらを聴きながら、アツサムティーを飲む。本来なら休憩などしないのだが…

杉田・桜井『お前は1回休め!!』

と二人に押し切られた。言い方は乱暴でも優しい人達だ。そしてそれに少し甘えて今ここにいる。

一条「クリスマスライブにライブか…」

確か八意も手伝いで出ると聞いていた。

そう考えた一条は1度頷いてから

一条「そうだな…見てみるか…戦闘以外のあいつも…」
と呟くのだった

くとある道く

俊介「ふんふくん」

陽気に歩く俊介、それに3人が絡む

チンピラ1「おい！お前！」

チンピラの1人はニヤニヤしながら囲み、言う

チンピラ1「俺に当たっただろ！謝れよ！あと慰謝料な」

チンピラ2「逆らうなよ！」

俊介「なんだお前ら、いま俺は機嫌がいいんだ。はやくどけ」

そう言いながら通り過ぎようとすると、チンピラ3が行く手を阻む

チンピラ3「逃げんなよおっさん…」

俊介「…」

チンピラ1「ごっ…ごあ…」

チンピラ2・3「…？」

咄嗟のことで理解が追いつかない。チンピラ1は痙攣しながら口から血を吐く

チンピラ2「え？」

おぞましい量の血をみて後ずさるチンピラ2、だが今度はチンピラ2の首が落ちる。

チンピラ2「…」

その場を赤い噴水が汚す。ようやく状況を理解したチンピラ3がその場にへたりこみ、後ずさる

チンピラ3「…ひっ…ああ…化け物…！」

俊介「やつば楽しいなあ…人を殺すのは。この感覚が忘れらんねえ！ひひっ！ははははっ！」

チンピラ3「あああああっ!!」

そう言いながら黒い剣を持ち上げ、チンピラ3を切り刻む。その周りにいる人達も巻き込みながら

女性「うぐっ…！」

子供「おかーさん…？」

俊介「あーあ、おかーさん死んじやったね」

子供「…え？」

突如として動かなくなった母親をゆずぶつっていると、上から声がした

俊介「大丈夫」

子供は微笑む黒い人を見あげ……

俊介「すぐにおかーさんのとこに送るからねえっ!!」

子供「…ぐふっ…」

次の瞬間には、腹を串刺しにされ、宙ぶらりんになっていた。

それを引き抜きながら、母親の上に子供の遺体が乱暴に重ねられる
俊介「ははっ!あはははっ!」

悪魔は、circleへ歩みを進めていた

〳路地裏〵

ガドル「家族…」

昨日のあの件からガドルはずっと、自身がむしゃくしゃしていた

ガドル「守るべき…弟?妹…」

今まで殺してきた警官は、いつも家族を呟きながら死んだ。当然それを
見て悲しむ遺族を見たことがある。人間は人が死んで泣く弱い生き物、
そう思っていた。だが今は、それを思い出すと、胸が苦しくなる。

ガドル「一体…なんなのだ…」

その時だった。ライブハウスがある方角から凄まじい嫌な気配がした。
ガドルは瞬発的に立ち上がる。化け物の姿に変わり、青色の目になり一気に走る

普段ならどうでも良いと思えたが、放って置けなかった

〳circle・PM4:30〵

一条「もうこんな時間か…」

一条は時計を見あげ、もうこんな時間になっていたことについて少し驚く。
何か一つに集中するとすぐ周りが見えなくなってしまうのだ。外は少し曇りがかっ
ていて、少し雨が降りそうだ…

そろそろ会計をして、本部に帰ろうとした時だった。

俊介「ふんふーん…」

独特な気配を発した男性が1人、店に入ってきた。やけにニヤついた顔をした男だった。鼻歌を歌い、薄気味悪いオーラを発していた。

一条「なんだ…何か嫌な予感が…」

一条はじっくり観察しながら行動を見ていた。男は歩きながらとある女性スタッフに近づくと

女性スタッフ「どうしましたか？」

いつも通りに発した言葉、それに返ってきたのは…

俊介「ばいばーい」

一条「!？」

その言葉の意味を即に理解した一条は反射的に拳銃に手をかける。あの男は、まるで闇の影に包まれるがごとく

黒のクウガになった。目は紫、4本角

一条「うおおお！」

黒のクウガが女性を剣で切り裂くより早く。一条の拳銃から放たれた弾が手の甲に当たる

俊介「…なんだあ？」

女性スタッフ「え?…え?…」

その場の思考がフリーズし、止まっている中、一条は拳銃を構え思考を無理やりはたらかせ言葉を放つ

一条「お前…何者だ?なぜクウガの姿になれる…何が目的だ…」

相手は1度首を傾げる。そして頷き、答える

俊介「俺の名前は八意俊介…八意思の父だ」

一条「なんだと!？」

一条の体が驚愕で震える。それは何事かと影から見守るリサ達もそうだった

燐子「あれが…想くんの…?」

美咲「そんな…」

俊介「八意思を知ってるな？」

一条「ああ：それがどうした？」

俊介「そうかそうか：あつはつはっ!!」

突然笑い出す俊介に一条は警戒を強める

俊介「そうか、なら冥土の土産話に1つ。昔俺はあいつの大切なものを全部奪ってやった！めちやくちやにしてやったぜ！全身味わい尽くしてなあ！あいつの彼女！凜子って名前してたなあ：！」

一条「んな：」

驚愕に体が強ばる

そういえばあいつは昔の話を何もしなかった。なにか聞いてはいけないような気がして、一条は今まで聞いてこなかった。

それを聞いていた——盗み聞きしていたリサ達は、絶句した。なぜ今まで自分達をある程度離れたところで見守り、絶対に心の距離を近づけなかったのは…

凜子という女の子を思い出すから、八意が近づけば自分達が不幸になるとおもって

俊介「この奥にいるんだろ？想の大切なものは…」

その言葉にリサ達は息を詰め、身を隠す…

俊介「あはっ、やっぱりいるんだ」

だが声はこちらを向いていた。次に聞こえたのは一条さんの呻き声。

一条「ぐっ…ああ…！——ぐふっ…」

俊介「そこで大人しくしてくれや」

そう言いながら背を向け、奥へ——彼女達がいる方へ悠然と歩いていく。だが一条は動けずにいた。

まるで何かに縛られたかのように、体が動かなかったから

くとある道く

想「…！」

俺は法定速度をガン無視して、ビートチエイサーを走らせていた。さっきのんびりと休憩していた時に「circle辺りで騒ぎがあった」と言う声を耳にして、今俺はこうして走っている

もしかするとあの未確認が警官以外を狙い始めたかもしれない。早くしなければ、まりなさんが、リサ達が…！

想「…!?!」

その時だった。俺の目の前に人影が降ってきた。俺は慌てて急ブレーキをかけ、前を見る。だがその姿は…

人ではなかった。

想「なんでお前が…！」

そう言いながらベルトを出そうとするがその手が止まる。なにか様子がおかしい

ガドル「クウガ…何故お前は…我々と同じ種族でありながら、人間を守る？」

俺はそう聞かれ、咄嗟に反応が遅れる。

ガドル「人間は俺たちとは違い脆い、すぐに命は尽きる…なのに何故、その一瞬の命のために自らの身を犠牲にしてまで戦う？何故守る？」

クウガはグロンギと同じだったのか…、俺はそれに考え込むが後回しにする。

想「何故、守るか…」

俺は1度目を閉じる。脳裏に浮かぶのは、リサやつぐみ、日菜や紗夜。様々な人達の笑顔。俺が守りたいと本気で思えた物

想「確かに、人の命は一瞬かもしれない。でもそれが、堪らなく愛おしいんだ。儂いんだ。必死に生きて、夢を叶えて、時に失敗をしても支え合う仲間がいて…だから…」

ガドル「…？」

俺は憎しみを込めながら言う

想「それを、その一瞬の人生を、ゲームの一環で奪うお前たちを俺は許せないんだ…」

俺はビートチェイサーのハンドルを握りしめながら言う。あまりに強すぎて一瞬ハンドルがミシツと音を立てた。

ガドル「…」

ガドルはしばらく黙り込む。今まで自分がやってきたことは正しいのかという迷いと自身のプライドが葛藤する。だがその葛藤も一瞬で壊れる

— circle 方面から悲鳴が聞こえた

想「悪いと思ってるなら！せめてもの罪滅ぼしに俺と一緒に戦え！本当は守りたいんじゃないのか！」

ガドル「俺は…」

そう言いながら俺の手を取る。俺は1度微笑み、アクセルを加速させた。

〈 circle 〉

まりな（私が守らなきゃ…）

最年長としての意地なのか、それともただ単に見捨てられなかっただけなのか。まりなは先頭に立つと手を広げる

香澄「まりなさん!!」

後ろから心配の声上がる。だが現実是非情。近づいてくるクウガ——俊介が面倒くさそうに黒い剣を振り上げる。

まりな「…？」

だが斬られる感触はなかった。その代わりに「キン」という金属どうしがぶつかる音がして…

つぐみ「あ…」

そんな声が次々漏れる。まりなを守って剣を受け止めていたのは

紫のクウガ、八意想と

想「…っ！」

紫の目をした、ゴ・ガドル・バ

ガドル「…っ！」

即効で作られたガタガタチームの初戦の火蓋が

想「よお…！」

切って落とされた

相変わらずの気色の悪いくらいの欲望が体にまとわりつく。まるで待っていたかのような反応をした俊介は、剣を押し込む。ギギッと剣が軋み、接触点がズレていく

想「…！」

ガドル「…！」

この二人がかりでもこの剣をはじき返すことが出来ない。ならば…

想「ガドル…！」

ガドル「了解した…！」

そういうと二人は片手で持ち、それぞれ右手、左手で俊介の腹を殴る。コンビ結成から全く時間が経ってないとは思えない順応速度だ

俊介「…っ！」

あまりダメージは無さそうだが怯ませることには成功した。相手は少し下がったところで止まり、俺を見る

俊介「前もそうだったか？俺の邪魔をして、必死に抵抗して、どうせ無駄なんだよ…ガキが大人に勝てるわけないんだ…」

まるで俺を憐れむかのような言動に怒りが湧く

想「なんだと…!？」

ガドル「なぜだ…」

俊介「あ？何だこの化け物風情が…」

ガドル「人間は人間を守り、育てる。なのになぜお前は人の命を奪おうとする…？」

その言葉は、静かな怒りを伴っていた。

俊介「そんなのお前ら未確認？だって同じだろ。何を今更ヒーロー気取りしてんだ？」

ガドル「…っ！」

想「ガドル！」

ガドルは青の目になり、俊介との距離を一気に詰める。剣とロッドが激突し、互いに軋む。俺はその間に後ろにいる彼女達に話しかけた

想「大丈夫か！」

まりな「うん…みんな大丈夫…！でも…」

まりなが指さす先には一条さんがぐったりと倒れていた。全身からぽたぽたと血を流している

想「一条さ…」

ガドル「グウ！」

俊介「行かせねーよ。ばーか！」

俺は一条さんに駆け寄ろうとしたが、ガドルが俺に激突しそれは叶わなかった。机と椅子を壊しながら店内を転がり、壁にぶつかる

想「げほっ…！大丈夫か…！」

ガドル「ああ…」

大丈夫と伝えるガドルだがその体は痛々しかった。血を流している。その精神力は今まで鍛え上げたものなのか…

想「同時に行くぞ…行けるか？」

ガドル「誰にものを言っている？」

俺は赤の金のクウガに、ガドルは赤の目になる。互いにその場から飛び上がり…

想「おりやあああああ！」

ガドル「ハアアア！」

2人の右足が燃え上がる。相手にダブルキックをぶちかます。

俊介「くっ…！」

流石の俊介もそれには耐えれず、ガラスを突き破り、店の外へ転がる。外の椅子や机を壊しながら

想「…！」

ガドル「…！」

2人は外に出て俊介を追う。外は土砂降りの雨が降っており、2人に着いた血を洗い落としていく。それは体も冷やしていく

俊介「…つたくよお…！」

想「…!？」

ガドル「気をつけろ…！」

俊介「俺が…俺だけがなんでこんな痛い目見なきゃ行けねえんだよお…」

そういう俊介の姿はさつきとは少し変わっていた。

想「嘘だろ…」

—— 白く光る目

—— 4本の角

—— 黒とブラッドオレンジの色をした身体

俺が1度見た。“凄まじき戦士”と姿が似ている。俺もガドルも後ろに下がってしまう。欲望だらけのオーラがさらに増す。

ボソボソと言いながら何かを両手に宿していた。黒いオーラのようなものをこちらに向ける

想「ガドル！ガードしろっっ!!」

それが何かわかる前に、俺は紫の金のクウガになり、防御姿勢をとる。

ガドル「わかった…！」

ガドルも横でガードする。絶対に後ろには行かせない、何があつても…!!

相手の手から放たれる小波動の様なものをも2人でガードする。

想「ぐおおあああああつ！」

ガドル「…っ!!」

直後、2人の腕を焼けるような痛みが走る。それはやがて激痛となり、2人の体と、精神をジリジリと焼き尽くす

紫の金のクウガの生体鎧さえ、ほとんど意味をなさなかった。

想「た、耐えろ…！絶対後ろに攻撃を届けさせるな…！」

ガドル「…！」

ガドルは肩の飾りを取り出し、緑の目になる。飾りがボウガンへと変わる。

想「そうか…」

だがしかし、緑のクウガは感覚を…金になれば今の痛みに耐えれず失神してしまうだろう

ガドル「…っ！」

そうこうしている間に、ガドルがボウガンを放つ。圧縮され、凄まじい威力を持った空気の矢は、波動を突き進み、相手の顔へ――そのまま相手の胸に矢が突き刺さる

〈circle店内〉

まりな「大丈夫ですか…！」

一条「あ、ああ…」

まりなはとりあえずの応急処置をしながら一条に話かける

日菜「ここからでも暑いよ…」

店内は無惨に所々破壊され、外なんかやばい事になっている。

燐子「そんな攻撃に…あの2人は…ずっと…」

――耐えている、ただ自分達を守る為に

まりな「みんな！」

――その直後、凄まじい音が鼓膜をたたきつけ、視界が白く染る。

あこ「きや…！」

それは一瞬だった。目を開け、最初に前を見る

巴「おい…」

蘭「…え？」

そこには、倒れた2人がいた

想「——お……ごふっ……」

ガドル「グッ……ゴホッ……」

直後、2人の体から恐ろしいほどの血が流れ出す。それはcircleの木の床を紅に染めていく

リサ「想くん!!」

叫び、近づこうとするが、それは出来なかった。

俊介「ようやく黙ったか……めんどくせえなあ……」

歪な形をした剣を肩に乗せながら歩く俊介を見て、恐怖で動けなかったのだ。

想「て、めえ……触らせね……ごふっ……!」

俊介「あー邪魔」

最後まで話すより先に、脚が想を蹴り飛ばした。近くの机を巻き込みながら転がり、呻く。

俊介「もう片方の奴はもう動かねえし……」

そう言いながら横たわるガドルを、まるで汚いものを触るかにように脚で突く。

俊介「さてさて……お楽しみタイムだあ……」

うってかわって感情の籠った声で言う俊介に、背筋に冷たい何か走り、恐怖という感情が心を支配する。それはひとつの鎖となり、体に絡みつき、足を竦ませる

俊介「またお前は守れなかったなあ……想。力を手にしても所詮はガキ!無理なもんは無理だっつーの。あの時も馬鹿だよなあ……猫なんかにあんなにムキになっちゃって、タマーツ!タマーツて!はっはっはっ!傑作だよ!」

そう言いながら笑い声をあげる。

巴「とんだ屑野郎が……」

俊介「……あ?」

蘭「巴!」

モカ「ともちん!」

俊介「なんか言ったか？」

そう言いながら巴に近づく。手には剣を持っていて、100%こ
で殺す気だと嫌でもわからせる

俊介「お前みたいなのが餓鬼は…黙って死んでろ」

そう言いながら剣を振り上げる。

つぐみ「巴ちゃん!!」

想「うあああああああ!」

俺が無理やり立ち上がり、巴を守ろうをした時だった

ガドル「…!」

巴「…!」

巴と俊介にガドルが身体を割り込ませ、自身の身体で剣を受け止める

俊介「お前え…邪魔をするなあああ!」

叫びながら切り裂こうとするが、相手の肉が硬くそれ以上刃が進まない。目は金色に輝き、身体が金に染まっていた

俊介「このっ!死に損ないがっ!死ねっ!」

蹴られ、殴られようとガドルは屈しなかった。その変わり、剣を
体に刺されたまま、拳を握りしめる

その拳に、雷が宿る

ガドル「ウオオアアアア!!」

恐ろしい量の血を吐きながら雷の拳を相手の顔にぶつける。

俊介「なんだと!? ————ぐおあああ!」

相手は回転しながら空中を舞い、転がる。

ガドルも、その場にへたり込む。

想「ガドル…!」

剣は、ベルトがある腹に刺さっていた。

想「おい！死なせねえぞ！お前には…今までの罪滅ぼしをさせるまで生きてもらうぞ！」

俺は全身の痛みさえ忘れ、ガドルの近くに寄り添う。

ガドル「あ、ああ…だが無理だ…もうすぐ、ベルトが壊れ、死ぬ」
想「諦めんよ…！やつと…やつと罪滅ぼしが1つできたって言うのに…！そんな…これからだろ？」

ガドル「クウガ…お前は優しい…な」

巴「…助けてくれて、ありがとな…」

ガドル「…！」

ガドルは不意に、人間体に戻る。もう怪人の姿を維持すら出来ないらしい。その目には涙が溢れていた。俺たちの目にも、涙が浮かぶ

ガドル「これが…感謝…という…ものか…」

想「…」

ガドル「中々…悪く…は無いな…まさか…こんなに…あたたかな…気持ちで…死ねるとは…」

俺の肩に触れようとした手が、床に落ちる。目の光が失われ、それは俺たちに“死”を伝えた

想「ガドル…？おい！ガドル！」

俺は抱き抱え、揺らす。だがその次に、ものの破碎音と共に相手が起き上がる

俊介「クソが…！死に損ないが！邪魔しやがって…でももう死んだか…あははっ！」

俺はガドルの遺体を床に優しく置き、立ち上がる

想「このクソ野郎があああああああああ!!!」

土砂降りの雨の中の circle に、俺の絶叫が響き渡った

想「このクソ野郎がああああああああ!!!」

俺はありったけの声で叫ぶ。アイツといた、戦った時間は確かに少ない。だがあいつは本気で罪を償おうとしていた。その結果がこんな死を招くのか…?

そんなことあっていいはずがない。

想「…!」

俺は迸る怒りのままに、蹴りの構えをする。赤の金ではかなわないだろうが、今はどうでもよかった。あいつを、殺さなければ…

タマとガドルの仇を討たなければ

直後、左足に異変が起こる。それに想本人は気づいていない

日菜「おねーちゃん!左足にも金のやつついた!」

紗夜「ええ…そうね、でもあれは一体?」

八意の身体を雷が包む。それは足から姿を変えていき…

あこ「黒くなった…!!」

全身が、赤と金から、黒と金に変わる。

俊介「ちよつとは楽しませてくれるかあ?」

想「うおおあああ!」

俺はニヤニヤと笑う俊介目掛け、両足でのドロップキックを放つ。

それはもちろん無意識に近い行動だった。

俊介「うおっ!」

想「おりやあああああ!」

俺は足にありったけの力を込め、俊介を蹴り飛ばす。相手は再び外へ、俺も体制を崩すがすぐに持ち直し外に出る。まりなさん達には外に出るなど伝えた

俊介「いてえ…なあ!」

想「…ぐっ!」

いつの間にか立ち上がった俊介に俺は蹴りを食らう。そのまま腹に拳を打ち込まれる。

俊介「ははっ、やっぱ惨めだなっ…!」

俺の角を掴みながら言う。そのまま俺は投げ飛ばされた。
想「……！」

いつの間にか黒くなった全身を見ながら立ち上がる

俊介「まだ立ちあがんのかよ……しっこいなあ」

想「……！」

俺はへらへらとする俊介に拳を打ち込む。

俊介「親子喧嘩かあっ！」

腹に蹴りを打ち込まれる。

想「ぐふっ……げほっ……ああっ！」

俊介「っ！」

想「おらあ！」

俊介目掛け蹴りを放つ。左足を掴まれたがそれを軸にし、空中を横に回りながら右足で頭を蹴り飛ばす。俊介はそのまま横に倒れ、俺はその場に倒れる

想（失血で目が回る……！）

これ以上戦えば間違はなく死ぬだろう。そうなったとしても、決着をつけなければならぬ。最悪相打ちになったとしても

俊介「しっけえなあ……」

想「……！」

瓦礫を蹴り壊しながら俊介が出てくる。俺は震え始めている足に鞭打ちながら身構える。

モカ「すごい執念だね……」

つぐみ「想君がなにしたっていうの……！」

つぐみが手をにぎりしめる

ひまり「つぐ……」

ひまりが慰めるが、つぐみの怒りは相当なものだった。確かにそうだ、事情もわからず突然ただ一方的にボコボコにされるつぐみ達にとってはただのいじめだった。

俊介「おらっ！ほらっ！どうしたよっ！」

想「ぐほっ……！げはっ！ぐあ……！」

斬られ、殴られ、蹴り飛ばされる。

リサ「もうやめて…」

リサの口からそんな言葉が出る。それはみんなも同じだった。あまりにも酷すぎる。

美咲「私達になにか出来たらいいのに…悔しいな

…いつもみてるだけで…」

千聖「それは皆同じよ…勝ってって、祈るしかないの…」

「…」

俊介「はあく…くだらねーしもういいよ、お前」

そう言いながら俺に近づく。俺は拳を握りしめ顔めがけ打ち込むうとする。

想「おお…!」

俊介「はいはい」

軽く俺の拳をうち払った俊介が蹴りを入れ、背中に拳を打ち込む

想「げほっ…」

俺はcircleの床に血を撒き散らしながら蹲る。

俊介「さてさて、死なれても困るし…固定でいいか」

そう言いながら剣を俺の背中目掛け突き刺した。

想「…! ———— づあっ!?!」

そのまま剣を押しさえつけられ、貫通する。そのまま床に突き刺し、俺は地面に固定される形になる。まるで念を押すかのように、俺は2本の剣に背中を貫かれ、その場に倒れた

リサ「…!!」

俊介「俺が前と同じようにしたことをするだけだよ! またお前はそうやってうづくまつて見てりやあいんだよっ!」

想「やめ…ろっ! この…クズが…!」

俊介「そんな芋虫みたいに這いずり回って言われてもなあ、さつさと大人しく…なれっ!」

想「ぐあああああああ!」

俺は背中を蹴られ、激痛に喘ぐ。今はどんな痛みでも身体が引き裂かれたように痛い。もう既に身体中の血は出し切っているのではな
いか、だがまだ血はあるらしく、貫通した箇所からドクドクと流れ出
している

想「…っ…！」

俊介「さてと…まずはどいつからやってやろうかなあ〜」

品定めをする気持ちの悪い目をcircleの中の彼女達に向け
ながら歩きだす。俺は手を伸ばすが、虚しく宙を切る。

一条「…！」

八意の代わりに彼女達を守りたいと思う一条だったが、既に体は動
かず、声も出せず、死へと刻一刻と近づいていた

想「クソっ!!」

俺は床を思いっきり殴りつける。また守れないのか…？また俺は、
力がありながらも…目の前で弄ばれるのをただただ見ていることし
か出来ないのか…？

——いや、もっと力があれば

守れる力があれば

奴を殺せる力があれば

力が、力が力が力が力が力が力が力が力が力が力が力が力が力が力
が力が力が力が力が力が力が力が力が力が力が力が力が力が力が力

オレニ、マモレル…コロセルホドノチカラヲ…

チカラガホシイ、チカラガホシイ。

俺は何故か、黒い世界に立っていた。

想「…？」

黒いはずなのに、何故か暑い。何も無い黒い世界のはずなのに、だ
が突如として前に扉が出てきた
力が欲しければいくらでもくれてやる

想「力が…」

俺は手を伸ばし、扉を開こうと…

だが後ろから気配がし、振り返る

想「…！」

リサ「…！」

そこには、彼女たちの姿があつた。皆涙を流し、俺に訴えかけてい
る。何かは聞こえないが、きつと俺を呼び戻してくれているのだろう
暖かいものが、心を満たし…

力はいらないのか？そんな希望などで勝てる訳がない

またしても頭の中で声が響く。

希望、それは無意味なもの？そんな訳ない…とわかっているても…

想「ごめんな…ごめんなあ…」

俺は、自身の欲に負けてしまった

俺は再び、扉のある方へ向く。扉を開けば、きっと二度と戻って来
ることは出来ない。薄々そう感じている。

この扉を開けた先には何が待っているのだろう。せめて、せめて：

彼女達を襲いたくはない：

???・??? 「諦めちゃダメだ！」

不意に、2人の声がして、俺は手を止めた。先程よりもあたたかな
光を、後ろに感じながら

???・??? 「諦めちゃダメだ!!」

俺はいつの間にか、黒い世界では無く、白い世界にいた。後ろには青年が2人立っていた

想「お前達は…一体？」

左にいた青年が、サムズアップをしながら俺に答える。

五代「俺の名前は…五代雄介！君と同じ、クウガとして戦ってる」
もう1人も、サムズアップをしながら言う

小野寺「俺は小野寺ユウスケ、五代と同じクウガとして世界を旅してる」

俺以外にもクウガはいたのかという驚きと、この人達は俺とは違い、全てを守った。そんな目をしていた。

途端に自分の自信がなくなっていくのを感じる。気づけば俺は、こんな言葉を口にする

想「おれは…クウガになんかあったらダメだったのかな…」

2人は黙って俺の方を見ていた。

五代・小野寺「…」

俺は続けて言葉を発す。

想「あなた達には分かりませんよ…今までちゃんと守ってきたんですから…でも俺は…」

また、失ってしまうかもしれない

また失うのが怖い。だから…失わない為にも力が欲しいんだ…

五代と名乗る青年は、拳を抑えながら言った。

五代「確かに…失うのは怖いよね…独りぼっちは、寂しいし、辛い…」

小野寺「でも君には、俺たちと同じように仲間がいるじゃないか」
想「でも…」

俺はまだ、迷い続けていた

（circle）

リサ「想くん！」

近づいてくる俊介の後ろに倒れていた八意がピクリとも動かなくなる。死んだのかと思ったが、まだ変身が解けていないからその可能性は低い

日菜「おねーちゃん…」

紗夜「大丈夫よ…日菜」

俊介「なんだお前らその目つきは!!?」

机を蹴り飛ばし、こちらに近づいてくる。

全員「きや…!」

美咲「…!」

蘭「こんなことをして…一体何になるんですか…?」

蘭が恐る恐る聞く

俊介「…教えてやるぜ、前にも言った通りさ！俺はこいつの全てを奪う！言うことを聞かないやつは殺す…」

そこで1度大袈裟に息を吸う。

俊介「アイツに助けを求めても無駄だ、あいつは臆病だからな…!」

巴（とんだ糞野郎が…）

だがその思いは言葉に出来なかった。俊介にまとうオーラが体につたわり、恐怖で動けないのだ。

リサ（助けて…想くん…）

美咲（想さん…）

リサ達は、ただクウガ——八意想の復活を祈った。

リサの涙がcircleの床に落ちる…

再び絶望しかけた俺の耳に再び五代と小野寺が話し始める

五代「でも俺は、周りの人達を最後まで信じたからこうやって戦えた。一条さんや、桜子さん、他にも色んな人達が！」

小野寺「俺だって、姉さんや士、夏海ちゃん……海東達がいてくれたから今の俺がいるんだ！」

五代「ほら、よく聞いてみて、1人なんかじゃない。たくさんの人が待ってるよ」

リサ「想くん！」

想「……！」

後ろから声がある。後ろを振り向くと、涙ぐむリサ達が出た。俺を止めようとしてくれてるのだろうか……

つぐみ「こっちに戻ってきて！想くん！」

日菜「またるんっ！てくるものを見せてよ！だからいっちゃダメ！」

美咲「私達！待ってますよ！」

紗夜「また学校に来るんじゃないんですか！」

隣子「あこちゃん……！紗夜さんと……！Roseliaのみんな……！ゲームしましょうよ……！」

沙綾「おいで！！みんな待ってるよ！」

ポピパ、afterglow、パスパレ、ハロハピ、Roseliaの全員が出た

暖かく、愛おしく、守りたい人達の手を伸ばし、必死に俺を掴もうとする。

想「……あ」

そうか……戦いは1人で、孤独じゃ何も出来ないんだ……

色んな人達と手を取り、一緒に悩み、苦しみ、勝ったらみんなで喜ぶ

想「なんで俺はこう…いつも身近な優しさに気づけないんだろうなあ…」

我ながら情けなくなり涙が出てくる。それを見る五代と小野寺、2人は優しい目でこちらを見る。

その時だった。リサから金色の光が出てくる。

想「…!？」

その光はふよよと漂い、俺の体に入っていく。

あたたかな金色の光はあこや友希那、こころや薫、その場に立つ全員から、俺に暖かく、優しく染み渡る。

全身が暖かく包み込まれていく。

五代「綺麗な心だね…」

小野寺「そして暖かい…いい仲間じゃないか」

想「ああ、皆…ありがとう…」

五代・小野寺「俺達も、力を貸すよ」

2人が俺に手を差し出す。その手から、赤い球体がふわっと浮かび上がり、俺に染み込む。

想「みんな…一緒に戦おう…!」

それに全員が頷く。俺も笑顔で頷く

俺の意識は、白い世界から戻っていく…

〈 c i r c l e 〉

俊介「さてさて、まずは誰からにしようかな」

品定めをしながら歩いてくる。そしてもう数歩というところで泊まり、全員は息を詰める

全員「…っ！」

俊介「じゃあまずはリサって子からにしよう！まずはどうするかなく！」

下品な目をしながらリサを指名する。紗夜達は安心というより、仲間が失われる絶望が体を襲う。

リサ「いや…やだ…」

リサが後ずさる。その反応を見て、俊介は「こいつがリサか」と言いながら近づく。

巴「やめろーっ!!」

巴がたった一つの勇気を振り絞り、俊介に体当たりをする。だが所詮は人間、俊介はビクともしなかった。俊介が舌打ちをする

俊介「ちっ…邪魔なんだよっ!!」

巴を掴み、外へ投げ飛ばす。凄まじい速度で外へ飛ばされた巴の先には、尖った椅子があった。刺さったら間違いない死ぬ。それほどの…

巴「うわああ！」

蘭「巴!!」

蘭たちが涙ながらに叫ぶ。俊介は興味無さそうに再びリサの方へ歩みを進める。蘭達は目を塞ぎ――

――だが、いつまで経っても突き刺さる音がしなかった

ひまり「…?」

最初にひまりが目を開ける。

つぐみ「…！」

つぐみは目を開くと、すぐ涙をこぼし始めた

巴「…ん?」

巴は死を覚悟して目を閉じたが、刺さる感覚も何も無かった。あるのは暖かい感覚、まるで誰かに支えられてるような…

巴「…!!」

巴は目を開く、最初に入ったのは赤色の目。いつも頼もしく、カッ
コよくてあこも憧れの存在

想「ごめん…おまたせ」

その声に促され、続々と目を開ける。

リサ「…！」「想くん…！」

俊介「なに…!？」

赤色の目

金色に光り輝く体

4本の角

その周りを炎が渦巻いている。だが不思議と巴は思った。熱くな
い、むしろ暖かな日差しのようにだ。

想「…」

抱き抱えていた巴を下ろす。そして一際強い炎が俊介に襲いかか
る。

俊介「くっ…!!てめえ…！」

だが俊介はすぐ横に逸れる。そのまま炎はリサ達に当たり、包み込
み、燃え盛る

俊介「ははははっ！自らの手で殺しやがった！」

可笑しいと思いつつながら笑う。

俊介「…?？」

だが匂いがしない異変に気づく。人が焼ける時のあの匂いがしない

想「無駄だ…」

俊介「なに…?」

炎が晴れる。その中からは、さつきと変わらぬリサ達と建物があった。

想「この炎は変幻自在に扱って仲間には暖かいだけだ。だが敵には…」

そう言うと、小さな炎の玉を作り出す。

俊介「ぐあああああああ!!」

身体が後ろに吹き飛ばされる

想「相手を燃やしたり、ぶつ飛ばしたり…変幻自在だろ?」

そしてすぐにリサ立ちに駆け寄る。

リサ「想…くん…」

想「後は任せて…一条さんを頼む」

いつも通りの優しい声にリサは「うん」とだけ言った。いつの間にか回収した一条さんをまりなさんの横に寝転ばせる。その奥にはガドルが横たわっていた。俺はそれを見つめる

だいぶ遠いがパトカーの音もする。これだけ暴れれりやさすがに
来るか…

想「…」

俊介「くそがアア!なんでいつもそうやって…クソっ!」

叫び散らしながら立ち上がる俊介、八意はただ構えながら…

想「終わりにしよう…」

そう言ったのだった。

想「はあああ！」

俺は両足を揃え飛び上がり、それと同時に右拳に炎を纏わせる

俊介「調子に乗るなあアアアアア！」

絶叫しながら剣を俺に振りかざす。俺はその剣に真正面から拳を叩き込む。

想「ぐう…！うあああああああ！」

拳に刃が食い込み、激痛が右手を襲う。だが…

俊介「何!?!」

刃が碎け散り、俺の拳は相手の頬に直撃する。

想「ぐあつ…！」

俺は頭から床に落ちる。着地のことをすっかり忘れていた

俊介「…っ！」

背中から床に叩きつけられた俊介も、しばらく呻くが起き上がる。俺も同時に起き上がる

俊介「殺してやる…絶対に…」

殺意という名のスパークが、中央で弾ける。その威圧にリサ達はただ息を飲んで見守ることしか出来なかった。

今ここに入れば死ぬ。それは誰にでもわかるから

想「俺もお前を殺す…絶対にだ…」

腐つても家族は家族、手にかけるのは抵抗があるが、なぜだが自然と、こいつにはその感情が沸き上がらなかつた。

俊介「おらあああああ！」

相手が拳を握りしめ、俺に走ってくる

想「おおおおおおおお！」

俺も拳を握りしめ走り出す。

想「ぐふっ！」 俊介「ごはあ…！」

俺たちは互いに胸部に拳がぶつかり、派手に血飛沫を上げながら後ろへ吹き飛ぶ

俊介「おらあ！死ねえ！」

先に立ち上がった俊介がいたぶるように蹴る。

想「ぐふっ…！ごほっ…！——おらあっ！」

俊介「うおっ…!？」

俺は足をつかみ、転けさせる。

想「…！」

俺は俊介に馬乗りになり、ただ拳を振るう

俊介「ぐっ…！ぐあ…！」

想「ううっ！ああっ！」

俊介「調子に…乗るなあ!!」

想「…!？」

背中を蹴られ、俺は前に倒れる。そのまま持ち上げられ、地面に叩きつけられた。衝撃に激しく咳き込み、吐血する

想「げほ…！げほっ！ごふっ…！」

身体がそろそろ限界を迎えている。この凄まじき雷神は多分二度と使えないし、今は奇跡でどうにか入るが1人で変身すると…身体が耐えれず死ぬ

俊介「どうした…？もう終わりかあ？」

想「なわけ…ないだろ…！」

俺は息も絶え絶えで立ち上がり、構える。何を今更死を恐れている。

俊介「ははっ…！はははっ！」

笑い声を上げ、俺を殴り付ける。

想「ぐうっ…！」

俊介「…！」

殴りつけた後、近くの椅子の破片から剣を作り出す。俺は拳を握りしめ構える。

俊介「おらあああああああああああ！」

想「おあああああああああああああ!!」

互いに叫ぶ。俺は拳を握りしめ、俊介は剣を振りかざし

想「ご…ああ…!？」

肩に刃が食いこみ、血が吹きでる。だが…

俊介「ぐ——ぐがっ…！」

俺の拳は、相手のベルトに当たり、ヒビ割らせていた。

俊介「な…なんだと…!?この糞ガキがああああ！」

想「ぐう…!うああああああああ！」

肩に更に刃がくい込む、やがて付け根から切断されかけるが、俺はギリギリで食い止める。

想「おおおおっ…らあああああつ！」

1度気合いをためてから相手の腕を掴み、胸部を殴り飛ばす。

俊介「ごああつ！」

相手が後ろへ吹き飛んだ。俺はその隙を見逃さず相手に詰め寄り蹴り飛ばそうと——

リサ「危ない——!!」

想「…!?!」

俊介「おつらあああああ！」

相手はいつの間にかモーフィングを使い、剣を作り出していた

——回避不可能の一撃は俺の腹に刺さり、貫通する。

想「ご——ああ…！」

だが腹を貫通する痛みを耐えながら俺は俊介を蹴り飛ばす。

俊介「…！」

まりな「…。」

泥沼な戦いを、circleの建物から見ていたまりな達はただただ見ていた。もう戦闘が始まってから約2時間、雨はとつくの昔に止み、月が浮かんでいる

つぐみ「なんだか…彼の姿、綺麗ですね」

月に照らされ、真紅に輝く彼はどこか綺麗に見えた。身体中に着いてるのは血だけど…

美咲「確かに…もう何だかすごいとしか言えないや…」

頭を抱えながら笑う美咲、花音はただただ見とれている。

花音「何回も見てきたけど…すごいね…」

沢山の戦いを見てきた Roselia だってそう感じる。ただただ人間の域を超えた戦い。

日菜「でも思うんだけど、やっぱり想くん戦い方が上手になってない？」

日菜が首を傾げながら言う。リサも紗夜も、想をよく知る者はうなずいた

モカ「嬉しいのか悲しいのか…」

モカにしては珍しい声でそう告げる。後ろでは巴がひまりに質問されまくっていた。まあ初めて抱き抱えたしね…

想「そろそろ…終わりにしよう…」

息も絶え絶えで、足がふらついて、血まみれの想が言う。それに俊介が笑い、答える

俊介「ああ…お前そろそろ死ね…！」

投げかけられた辛辣な言葉、だが俺はそこから意識を外していた。

互いに少し離れ距離をとる

———この一撃で終わらせる

もうこれ以上は身体がもたない。だから今ここで、トドメをさして終わらせる

想「…！」

腰を低くし、両腕を開き構えをとる。俺が1番使い、1番特訓して手に入れた技を使う

右足に雷と炎が迸る。

想「…づあ！」

右足を焼け付くような痛みを襲うが顔をしかめて食いしばる。

俊介も、キツクの構えをしていた。足に雷と黒い炎が迸る

想「はあああああ…！」

俊介「…っ！」

互いに走り出す。両方とも右足が地面に着くと、雷と炎のエネルギーが炸裂する。

同時に飛び上がり、同時に叫び声が響く

想「おりやあああああ!!」

俊介「おるあああああ!!」

互いのキツクが空中でぶつかる。

まりな「…！」

直後、凄まじいエネルギーのぶつかりが激しい風となりあたりに吹き付ける。それは壊れた椅子や机をなぎ倒し、circleの残りのガラスを全て割る勢いだつた

有咲「——やべえ、伏せろ——！」

有咲が叫ぶと同時にガラスが割れる。2人の近くにあつたガラス達は碎け散り、椅子や机は吹き飛ばす

花音「ひやああああ!!」

千聖「花音！」

薫「花音！」

飛ばされそうになった花音を2人がかりで掴み、何とか耐える
千聖「後で巻き込んだお説教ね…」

想「おおあああああああああああ！」

俺はただ、全力を込めた。右足以外に感覚はもう既になく、自分が生きているのかすらあやふやだ。

俊介「糞ガキイイイイイ！」

俊介が叫びながら力を込める。

——直後、エネルギーが暴発し、2人は吹き飛んだ。俊介は外へ、八意はcircleの中、リサたちの前へと

俊介「ごほっ……!ぐはっ!」

想「…」

俊介は直後激しく咳き込み起き上がるが、八意が起き上がる気配は無い。リサ達が息を呑む。まさか…

俊介「ははっ、やっぱ勝てねえじゃねえか…!所詮は餓鬼だな」
今度こそ終わった。リサ達は再び追い詰められる。だがそこで、八意の身体が動く

想「まだだ…」

リサ「想くん…」

そう言いながら立つ彼はもう目を当てられないくらいに血だらけだった。何故そこまでして闘うのか、いつもそうだ、辛いことは何も言わず、人知れず頑張って、傷だらけになって、味覚だって失って、なのに…

想「お、おおおらあああああつ!」

俊介「は、はああああああ!」

互いに叫びあい、走り出す。右拳を突き出し、命を刈り取らんと

想「ごふっ!」

俊介「ぐふっ!」

互いに頬を殴りあい、倒れる。もう出す血もないのか辺りには何も飛び出さなかった。

想「…っ」

俊介「はははっ!ははははははははっ!」

地面に膝をつき、激しく咳き込む想。だがそれに対して、俊介はまだ立ち、笑っていた。

俊介「はは…:…ごふっ!」

だがすぐに、地面に倒れる。

想「…、…!」

何とか立ち上がり、俊介を見下ろす。

俊介「負ける…なんてなあ…」

想「…」

俊介「最期くらい…息子って言う顔しろよ…」

想「…」

ふざけるな、そう言いたかった。沢山の命を奪っておいて、何を最期に息子ヅラしろと？馬鹿げてる

俊介「はっ…じゃあ先に行くわ…」

最期に1度大きく深呼吸し――二度と息をすることは無かった

――八意俊介は、死んだのだのだった

想「…やっと、仇を取れた…」

俺は凄まじき雷神の姿になったままそう呟く

『よく…頑張ったぞ！えらいえらい！』

想「…！」

風に運ばれた声、すぐに消えてなくなったが、俺にはつきり聞こえた

想「うぐっ…うううああ…！」

俺はみつともなく、情けなく膝をつきながら泣き叫ぶ。凄まじき雷神の変身が徐々に解けていく。金色のオーラを巻きながら、解けていく。

リサ「想くん！」

美咲「想さん！」

皆が、俺に走ってくる。一条さんも足を引きずりながら笑顔で、みんなも何故か涙を流しながら――それでも笑顔で

想「みんな…」

日菜「ひゃあ!？」

俺は安心に包まれ気を抜かしてしまった。ふらりと倒れた先、俺の頭をやけに柔らかい感触が襲う。だがそれを堪能する暇もなく、俺の意識は途切れた

想（また意識失うパターンか…）

く弦巻邸く

リサ「…」

私達 Roselia は、今は彼のお見舞いに来ている。あの戦いから約2週間、彼はまだ目覚めない。お医者さん達曰く疲労や骨折らしいが…

あこ「まだ起きないねー」

あこが椅子の上で足を振りながら言う。

燐子「黒服の…方達が、毎日看病してくれてる…おかげで大丈夫…

だと思うよ…？」

紗夜「まったく…人の気も知らないで…」

紗夜がこう言う、それに皆うなずいた

あの戦いの後、まず1番めんどくさかったのは警察だ。まさか変身した2人が戦ってる！だなんてとてもじゃないけど信じて貰えないだろうし、周りの景色はぐちゃぐちゃだし、椅子や机は散乱してるし、一条さんは傷だらけだし…

その次は荒れた circle の修繕と、片付けだった。修繕は弦巻家が何とかしてくれたが問題は片付けだった。木の破片などで少し指に傷ができたりとハプニングがあったものの片付けは終わった。

あこ「ねえねえ!」

あこが想を指さし叫ぶ。どうしたのだろうかと思いつつ

想「…んあ?」

第一声は、そんな間抜けな声だった。続いて彼が目を開ける。久しぶりに起きたからかまだ目は虚ろだ。だが少しずつ正気が戻り…

想「…なんだお前ら、いたのか…おはよう?」

紗夜「…おはようございます…じゃないでしょ!人がどれだけ心配したと思ってるんですか!」

想「ちよつとまで頭痛いから！な！腹減ったし喉痛いし！とりあえず、な！」

そこで激しく咳き込む。紗夜はそれで正気に戻り、部屋にある水のペットボトルを差し出す。

友希那「ラツパ飲みね……」

紗夜「先程は……取り乱しました……」

紗夜が顔を赤らめながら呟く。

想「はあへんへんはいしようぶ！」

だが肝心の彼は、沢山の料理を口に詰め込みながら聞いていた。病み上がりが食べる量じゃない。絶対に

リサ「よく食べるね……」

ちようどハンバーグを丸々飲み込んだ想が話す

想「ああ、前までならおにぎり1個が限界だったけどなあ……今じゃ腹減ったしとにかく詰め込まなきゃって……腹の石の回復の促進剤になるらしいから」

今、俺の中にある石は活動が弱まっている。前回の無茶な戦闘、そして俺の体を治す為に力を使い果たしたらしい

リサ「……そっか」

彼には味覚がない。だから手当り次第に食べても何も感じないのだ。ただ体の石を回復するため……また戦う為に……食事をする。楽しむ暇もないのだ……

あこ「味……する？」

幼さゆえの純粹さだろう。あこが質問する。だが想は笑いながら言った

想「しないなあ……だからヤケ食いしてる！」

そう言いながらパスタを二口で食べおえる。

燐子「でも…元気そうで…よかったです…」
燐子が微笑みながら言う。

想「そうだなあ…なんかすつきりしたっていうか…吹っ切れたって
いうか…」

ナプキンで口を拭きながらそう言い、また食事に戻る八意、心配し
て損した…といえ損したが元気そうでよかった。

想「あ、そう言えば…」

リサ「ん？どうしたの？」

突如として顔を青くした想が口を開く。

想「circle…大丈夫？」

紗夜「はあ…」

紗夜の大きな溜息が、部屋に響いた

くどある屋上く

??? 「邪魔者は消えたね…でも僕達グロンギもあと二人しかいない
…」

バルバ「始めるのか？」

??? 「そうだね、始めよう…」

白い青年が立ち上がり笑みを零しながら

??? 「究極の…闇を」

く弦巻邸・一室く

想「だあく!!もう俺は元気だからな!?日菜!落ち着け!」

日菜「やーだ!やっどめぎ目覚めたもーん!」

そう言いながら俺の頭に自身の頭をスリスリしてくる日菜、それに

イヴは

「仲良しですね！私もハグを……！」

と言い、麻弥と彩は呆れていた。だが1人、明らかになんかもうすげえオーラをまとっている人がいた

千聖「……」

想「あ、はは……千聖……さん？」

頭をスリスリする日菜を撫でながら俺は震えた声で千聖を呼ぶ。表情こそ笑顔だがその目に意思の光はないように感じる

千聖「言いたいことが沢山あるのだけれど……」

そう言い1度溜める

想（ゴクリ……）

千聖「その……お疲れ様だったわね……」

想「………へ？」

俺は驚きのあまりフリーズする。あの千聖が俺に向かって頬赤らめながらお疲れ様？

ファンにやったら、多分死者大量に出るだろ。という感じだ

千聖「……」

想「あく……うん」

俺はとりあえずうん、とだけ言っておく。それに千聖は少し黙ってから……

千聖「……」

それからずっと黙る千聖に変わり、麻弥が俺になにか手渡しする。

想「これは？」

麻弥「パスパレの皆で選んだんです！早く良くなるようにって」

想「おー！まじか！ありがとう！」

そう言いながら開けると、中には青と黒の色をしたハンカチがあった。

彩「いつもハンカチ持ってなさそうに見えたから、これがいいんじゃないかって」

想「確かに……持ってなかったな……」

イヴ「身だしなみは大事です！」

想「うん、ありがとう。大事に使わせてもらおうよ」

俺はそう言いながら頷く。なんかこう人に物を貰うのが新鮮で嬉しいのである

想（そういやいつもアンハッピーばっか貰ってたな…）

そうしてしばらく雑談を楽しみ、レッスンがあるらしいので帰って行った。俺は寝ようと、布団に潜り込み…

香澄「やつほー！ー！！」

有咲「騒ぐなあ！！」

とまあ初っ端から元気な集団がやってきた。香澄と有咲がいると
いうことは…

想「ポピパの皆さんですか…相変わらずお元気な事で…」

俺は溜息をつきながら言う。正直、ポピパはもううるささと天然の
集団だと思ってる。りみと沙綾は多分別…

りみ「こんにちは…！」

沙綾「あ、起きてる！よかった〜」

そう言う沙綾の片手には、何かが入った箱がある。箱には山吹べー
かりーと書かれているので…

想「それまさか…」

沙綾「じゃーん！山吹べーかりーのパンですー！」

中にはメロンパンから始まるめちゃくちゃ美味しい物が入って
いた。俺は山吹べーかりーがめちゃくちゃ好きなのである。どれくら
いかと言われると…

戦闘の後に傷ついた身体を引きずりながら行くくらい好きなので
ある。大体沙綾に怒られて治療を受けることになるのだが

りみ「チョココロネ…！」

りみが目を輝かせながら俺のパンを見ながら言う。俺はやれやれ
と思いつつチョココロネを取り出し、1つりみに差し出す。

想「ほら、食べるか？」

りみ「いいの…！ありがとうございます！」

沙綾「甘いよ…」

想「別にいいだろ…また買いに行くから…」

沙綾「ならおまけつけないとね！」

たえ「お元気ですか？」

想「初めて顔合わせる人ですか？」

たえ「想さん、ですよね？」

想「顔みたら、分かるよね？」

たえ「うん、わかる」

花咲川女子学園でも顔の良さは話題になるほど。三年生の白鷺千聖と並んでも遜色ないほどだが、口を開けば飛び出す頭の中の花園ラップ。

香澄「あ！そうだ！これ受け取ってください！」

そう言いながら香澄が差し出してきた箱、circleと書かれたそれを受け取る

想「…おお」

意外と重いその箱を受け取り、開ける。中には5つの金属のストラップがあった

想「これは？」

1人1人の名前がバンドごとに刻まれ、ポピパは星、などのモチーフをした物も刻まれていた。

香澄「皆で作ったの！」

俺はそれを手に取りながら香澄の話を聞く。それは紗夜と燐子から始まったらしい

紗夜『私たちは彼から沢山のものや経験を貰いすぎています。いつも守ってもらったりと…』

燐子『だから…私達で、私達なりに…お返しするんです…』

最初は5バンドだけだったが、次第に協力者は増えていき、いまの金属ストラップになったらしい

想「そうか…そっか…」

俺は様々な感情が込み上げ、それは涙となって目から零れ落ちる。零れ落ちた涙は、ストラップにあたり、弾ける

たえ「傷痛むの?」

たえなりに心配してくれてるのだろうがだいぶ見当違いなことを言っている。――だが今はそれも、安心できる心地よいものだった

想「嬉し泣きだ…花園ランド…!」

俺は泣きながらそういった。この日はきつと忘れられないものになるだろう

それは、沖縄でおきた。

警官「ぎいああああ!」

燃えている。どこの人を見ても、燃えている。自身さえ、燃えている。

その日確認できたのは……

確認できただけで、沖縄の約半分の人口が、たった1人の手によって、焼き尽くされ、殺されたのだ

??? 「ふふっ、ははははははっ」

燃えている人を見ながら、笑う未確認が1人いた。

??? 「クウガとは、あの場所で…思い出のあの場所で戦いたいな…」

死にゆく人間には目もくれず、ただクウガのことを考えていた。殺して楽しかったら、殺す。ただそれだけを考えて…

circle

まりな「いや〜！もう大丈夫なの？」

まりながお客様の注文を聞きながら俺に話しかけてくる。流石は先輩、凄まじい速度だ

想「はい！もうバツチリ治しましたよ！それにしても

今日クリスマススライブだったですね…！」

俺もそれに負けじと飲み物を作り、客に運んでいた

まりな「人手不足だったから助かったわ〜！」

俺は今、circleでバイトをしていた。なにかと心配してきていたまりなさんに、大丈夫と伝えに行こうとしたらこうなってしまう。しかもめっちゃくちゃ人が多い…あの5バンド人気あるんだなど改めてわかる。

香澄「こんにちは〜！」

ポピパを先頭に、5バンドがcircleに入ってくる。

沙綾「もう動いて大丈夫なの？」

見てまっさきに心配してくれた沙綾に「おう」と伝える

巴「驚異的な回復力だな…！」

日菜「あつはは！いつもの想くんだ！」

その言葉に、場がどつと湧く。リサが俺のポケットを見て、微笑んだ
想「…？」

リサ「いや、皆で作ったストラップ、持ってくれてるんだねって。往
来の使い方とは違うけど…！」

想「ああ、うん。無くしたら多分俺泣くから…身近にあった方がいい
いだろ？」

リサ「なるほど…！」

そう言いながらリハーサル室へ入ってくる5バンドを見守る。その
時だった、俺のスマホがなる

想「一条さん？まりなさん！ちよつと電話に出てきますー！」

まりな「できるだけはやくね！」

それにサムズアップで答え、裏から外に出る。

想「一条さん、どうしました？」

一条『あ、ああ…今やばいんだ…』

想「…？」

一条『ああ…まだ公表はしていないんだが…』

想「大丈夫ですか？落ち着いてください…」

一条さんの声は酷く脅えていた。いつも冷静沈着な一条さんのこの様子。俺はなにか危機感を覚える

一条『沖縄県の人口確認出来ただけで半分の人が…たった1人の未確認生命体によって…殺害された…残された監視カメラに映っていたんだが…今日は…このくらいにしてあげると…』

想「…な、半分…!？」

一条『あ、ああ…俺も信じられない…第1…もし戦闘になったら…勝てるのか…?』

想「……」

一条『八意…?』

想「…いや、勝ちます。何があっても…彼女達を、みんなを守る為なら…」

凄まじき雷神はもう使えない。無理矢理体を酷使すれば使えるかもしれないが…命が持たない…

なら道はあとひとつ…

“凄まじき戦士”になるしかない…

だができる限り使いたくはない。アマダムから聞いた話だと、過去に1人を除いてはだが…

——理性を失い。ただ暴れる存在になってしまう可能性がある。俺も1度ジャラジの時、憎しみのままに剣をふるった時、アマダムからの警告で見たことがある。

だがらできる限り、あれにはならないように自分から心の制御をしてきたつもりだ。

一条『まさか…なるのか?』

究極の闇と同質の存在、凄まじき戦士。

想「最悪の場合は…でも、もしなったら…」

これは、残酷なことだろう

想「俺の…ベルトを撃つて、破壊して、俺をとめてください」

一条『…!』

電話越しに息を飲む音がする。そう、アマダムを破壊すれば変身は解け、凄まじき戦士は止まる。だがもうすでに体の全てをアマダムから伸びた神経に支配された俺は、活動が止まり、死ぬ。

分かってる。一条さんには悲しすぎる決断だと…彼女達も知ればきつと悲しむ。だから言わない

想「まあ…最悪、ですけどね。もちろんならず倒したいとおもってます」

息を吐く。すっかり寒い空に俺の白い息が舞い、散る。

一条『…ああ、わかってる。だから俺達も全力で手伝う』

想「あ、ごめんなさい!今バイトなんでそろそろいいですか?怒られそうなんです…」

一条『済まなかった。また連絡する!』

そうして、電話を切り、俺は裏から戻る。

〈circle〉

まりな「あ!遅いぞ〜!」

さつきより人が賑わい返っているこの場所。まるで未確認生命体なんていないかのような…

まりな「想くん…?」

想「…いや、なんでもないです。手伝いますね!」

俺は1度思考を切りかえ、再び作業に戻った。

〈空中〉

“それ”は突然街にやってきた。東京のとある街に、白い青年が…
??? 「見つけた…クウガ…!」

まるで待ち望んでいたような弾んだ声を出し、もうほとんど潰れてひしゃげた車の上に乗っていた。

その周りのガラスは砕け散り、人はもう見るに堪えない姿になりそこから中に散らばっていた。

??? 「次は楽しいかなあ…あははっ！楽しみだなあ…！」

魔の手は着実と、ライブハウス *circle* へ向かっていた

バルバ「とうとうぶつかる…これが最後になるだろう…クウガが勝つか…ダグバが勝つか…」

circle

想「：はあ」

12月24日のクリスマスライブは順調に終わり、今は打ち上げの真っ最中だ。テンションが上がったはぐみやこころを何とか引き止めて、俺は座っていた。

リサ「お疲れ様〜！」

想「：おう、お前らもな」

俺はリサからオレンジジュースを貰い、口をつける。熱くなった身体に冷たいオレンジジュースが染みていく

想「Roselia、今日も絶好調だったな」

リサ「そうかな…ありがとう…」

想「全員頑張るよな…クリスマスと言えば家で過ごすのが鉄板だけどまさかライブするとは…」

モカ「もはや恒例行事ですよ〜」

想「モカか…てかパン啜えながらよくちやんと話せるな…」

モカ「へへへ…」

想「あはは…」

リサ「あはは！なんか面白いよ〜！」

他愛のない日常、皆で笑いあって、楽しんで

だけどなんで、すぐに砕けるのだろう

紗夜「きやあああ！」

想「どうした！」

少しだけ片付けをしていた紗夜達が、俺たちの所へ駆け込んでくる。俺はオレンジジュースを置き、紗夜達と交代で外へ出る

???「あ、やっと見つけた」

笑顔でたつ青年の周りには、さっきまで一緒に働いていたバイトの女性達が死んでいた

想「てめえ…！何しやがった…！」

腹の中で感情が煮え繰り返る。

???「この人達黙ってばっかで全然話してくれないから…殺しちゃった…」

想「殺しちゃった…だと…？」

頭が冷える。今まで悩んでいたものが一気に消えていく。だがそれを、なんとかして、無理矢理理性で抑え込む。

想「てめえが…究極の闇か…」

ダグバ「僕の名前はン・ダグバ・ゼバ、君の言う、究極の闇…」
想「変身！」

俺は黒の金のクウガに姿を変え、両足で地面を蹴り飛び上がりながら拳を構える

この季節に似合わない雨が降り始める。

ダグバ「あははっ！あはははは！」

笑いながら化け物へ姿を変えたダグバ。その姿は

白と金

そして4本角

凄まじき戦士と瓜二つのその姿

想「おおあああああ！」
俺は本能的な恐怖を奥歯で噛み殺し、雨が降り始めたなか、戦いを
始めた

リサ「想くん！」

リサ達が慌てて駆けつけた時には、もうすでに八意は床に倒れ呻いていた。戦闘というものは終わっていたのだ。その先で不気味に笑う白い化け物を見る。見るだけでもリサ達は足が震えた

ダグバ「あはは…どうしたの？ほら、僕はいるよ？」

想「リサ達は下がってる…」

八意が立ち上がり、リサ達を後ろに下げ、circleの中へと帰す。リサは八意の腕を掴むが…

リサ「でも…」

想「いいから！」

大きな声でそう言われ、やむを得ず従う。

想「…！」

俺自身、こいつは強すぎると肌で感じていた。実際俺は一撃も与えられずに床に倒れていた

〈30秒前〉

想「おおあああああ！」

俺は黒の金、現時点最高火力を出せる姿で挑んだ。だが次の瞬間、腕を上げた相手に首を捕まれ、腹を膝蹴りされていたのだ。

想「おぐっ…！」

内蔵が何個か潰れる感触を全身で感じる。だが何とか踏みとどまり、立っていたが、直ぐに蹴られ、さっきのように床に倒れてしまった。

想「…ぐう…！ああ…！」

途端に腹に激痛が走る。

想「…！…！…っ！」

その内側から吹き出る異様な痛みには耐えられず、戦いの途中だと分かっていても、ふらつきながら近くの窓ガラスに振り返り、自身を見るとき……

——ベルトに、微かだがヒビが入っていた。

日菜「想くん！」

それをcircleの扉を閉め、みんなと隠れていた日菜が、見つけてしまった。咄嗟に名前を叫ぶ。紗夜が「どうしたの！」と言う、日菜はそれに半分泣きながら答えた

日菜「ベルトが……！」

つぐみ「ほんとだ……ベルトが……」

薫「そんな……」

「……！」

その場にいる全員は、もしベルトが壊れてしまったらどうなるかを、黒服から八意に内緒で知らされていた。

ベルトが壊れてしまったら死ぬ。だから無理しないように見守ってやって欲しい。

そういつた黒服を思い出す。

だが次に更なる驚愕が目の前で起こる。

想「くっ……！はあ……はあ……」

俺はふらつきながらも立ちあがり、何とかしてもここでアイツを倒そうとしていた時だった

想「……？」

ダグバ「……」

相手が不意に、右腕を上げ、こちらに手をかざす。何が来るのかと身構えた時だった。

想「ぐっ……！あああああああああ！」

身体が炎に包まれ、燃え始めたのだ。雨が降っているのに、その炎は消えない。それはなぜか……

俺は、体の内側から燃やされているからだ。

想「…っ！くっ…！」

呻きながら辺りを見回せば、地獄が広がっていた

そこら中の道路を走っていた車の中にいる人が燃えていた。

そこら辺にいた警察官が燃えていた

燃えた人が乗っている車同士がぶつかり、爆発し、炎上する。それが、そこら中に広がっていた

老人も

女も

男も

子供も

何一つお構いなく燃えている。俺はその中、どうすることも出来ずに、その炎に身体を炙られていた。アマダム力で何とか防げてはいるが、これは身体がもたない

ダグバ「どうしたの？」

想「ぐっ…ぐう…！」

地獄絵図の中、1人笑い声を上げながら俺に言う。

ダグバ「もっともっと強くなって…僕を笑顔にしてよ…」

それはまるで、待ち望んでいるような声をしていた。" 凄まじき戦士" になれと、促しているような

想「…うっ…くっ…」

俺は身体の限界が訪れ、意識が朦朧とする中、倒れる。次見た時は、奴は消えていた

まりな「想くん！」

巴「想！」

想「…」

みんなが呼びかけている中、俺は意識を失った。

——その時には、火は消えていた。

巴「何がどうなってんだよ…！」

あこ「こんなの…無茶苦茶だよ…」

あつちこつちで救急車の音が鳴り響く夜。想のために救急車を1台手配し、それを待っていた。circleの中は、酷く暗かった。運が良かったのか否か、この中に燃やされた者はいなかった。だがしかし、あの惨状を見てしまったのだ、誰もどうすることも出来ない。

燐子「少し…トイレに行ってください…」

青い顔をした燐子が、ふらつきながらもトイレへ向かう

有咲「ああなるのも仕方ないよ…あんなもん見ちまったら…」

テレビをつけたまりな、どのチャンネルでも、今日のことを速報で告げていた。避難勧告や、外出自粛などを促している

千聖「都内だけで確認出来るだけで…3万人の死者…」

イヴ「確認出来るだけということは…もつと他にもたくさんのが…」

彩「…ネットも混雑してる…」

何か情報を見ようとした彩も、肩を落とす

老人『4号は一体何をしとるんじや!!早く倒しておけば…!うちの孫は…うああ!』

ニュース越しに老人が泣き崩れる。それを見た全員は、ただ何も言えなかった。だがしかし…4号を、想だけを責めるのは間違っている。紗夜「…そんなの…想さんだって頑張ったはずです…!」

こんなになるまで傷ついて…!

人間に戻った八意には、火傷で皮膚が爛れていたり、普通なら死んでいる。今も稀に呻きながら冷や汗を流している。すでに頭に敷いているタオルは2枚目だ

紗夜「なのになんで…彼だけが責められないと行けないんですか…！」

リサ「紗夜…」

涙を零し始める紗夜。1連を見た自分達は悔しくなった。

母『4号の役立たず!!うちの娘を…夫を返してよ!』

悲痛な声で叫ぶ母。もう見てはいられなかった。リサがリモコンを持ち画面を切る

リサ「世間って…酷いね…」

美咲「彼を責めるのは…なんとなく違うって私は思いますけどね」
花音「美咲ちゃん、大丈夫だよ。多分ここにいるみんながそう思ってると思うよ…」

それに全員が頷く。

一条「八意!」

そこに男性が1人、息を切らしながら走ってきた

リサ「一条さん…!」

一条「はあ…はあ、ようやく着いた…いま大混乱しててな…中々救急車も回らない…だから俺たちもこうやって手伝ってる…」

蘭「そうなんですね、でも…」

一条「ああ…大体の人達が亡くなってる…八意は…た戦ったんだな…」

後ろに寝かさされる八意を見て、目を伏せる

つぐみ「戦いっていうよりは…一方的でしたけどね…」

思い出すだけでも背筋が凍りそうになるあの光景

一条「そうか…下手に聞いてすまなかつた…。1度病院へ連れていく」

そう言いながらも1人の警官がやって来て、担架を持ち、運んでいく

ひまり「大変そうですね…」

一条「ああ、君達も早く帰った方がいい。分かったか?」

香澄「分かりました」

香澄達は大人しく従いそれぞれの家に帰っていく。一応警察官を

1人つけ、一条はその場を後にした

↓次の日・PM6:00弦巻邸↓

「……」

「……」

あの惨劇から1日、もちろん学校はしばらく休校になったし自肅が
広まっており外も人気がない

だがまだあちこちに消防車や救急車が走り、事後処理を行っている
未確認生命体0号も姿を消し、警察もレーダーで追っているよう
だ。1部ネット記事では新型レーダーを開発中と書いてあるが真偽
は不明だ。

想「……ん、」

目を覚まし、起き上がる八意

「……」

想「……」

「……」

「……」

俺の無事にこころはぱあつと笑顔になる。そんな笑顔を見て、俺は
微笑む。

今からこの笑顔が、悲しみに塗り替えられるかもしれない

想「なあこころ、みんなをcircleに集めたいんだが……」

「……」

想「話があるんだ。重要な、話」

（circle）

想「突然でごめん、みんなに話したいことがあるんだ。」

皆はこんな遅くだと言うのに、誰一人欠けることなく集まってくれた。その事に感謝しながら俺は言葉を発する

想「俺は…0号と…戦って、勝たないといけない。だけどその後はどうしようか、迷ってたんだ」

その言葉に息を飲む全員。

想「俺…旅に出ようと思うんだ！この世界に来て、あまり花咲川から出てないからさ、この目で何かを見て、そして触れたりして感じたんだ」

その言葉に、全員が黙り込む。だが次に起こったのは、クスクスという笑い声だった

リサ「あははっ！想くんらしいね！」

美咲「いや…まさかなにかあるんじゃないかって冷や冷やしましたよ…！まったく…」

はぐみ「旅ならコロッケ沢山持ってってね！」

沙綾「そうだ！うちのパンも！」

想「全員一気に喋るなあ…！」

俺は頭を抱えながら叫ぶ。それに笑いが巻き起こる

日菜「旅する前に！絶対勝ってね！約束！」

想「ああ…！」

俺は日菜と指切りげんまんをした。だが…

——ごめんな

俺は彼女達に嘘をついている。確かに0号と戦い、決着はつけるつもりだ。だが大切なことを伝えていなかった

“凄まじき戦士”となることを、心の闇に飲まれ死ぬかもしれない

のに…

だがしかし、俺が生き残れる確率は10も無いだろう。多分リサ達はほとんどのことを黒服から聞いてしまってるはずだ。もし俺が本当の事を言ってしまうばきつと俺を止める。

だが例え、相打ちになったとしても倒す。それで彼女達…いや世界中が笑って過ごせるなら…

↓次の日・まりな宅↓

まりな「凄まじき戦士…それになるのね…そして戦って勝って旅に出ると」

想「はい、短い間お世話になりました」

俺は頭を下げる。この人には本当にお世話になった。

まりな「死んだら…ダメだよ?」

想「はい、分かっています」

俺は微笑み、まりなさんに答える。俺は他にオーナーや、スタッフさん達に声をかけに行った。もちろん、亡くなった人にも必ず仇はとると伝えた。

↓弦巻邸・PM11:35↓

俺はバイクで弦巻邸へ、入って行く。しばらく進むと相変わらずでかい玄関が俺を迎えた。そこに立つ女性が1人

想「黒服さん…」

黒服「お待ちしておりました。第0号は未だ行方を眩ませています…」

想「そうですか…」

黒服「なにか憑き物が落ちたような顔ですね…もしかして、なるんですか、凄まじき戦士に…」

想「はい…」

黒服「…もう止められないでしょう…」

想「そうですね、多分俺も聞かないと思います…」

1番お世話になったのはこの人達かもしれない。記憶喪失の俺を何一つ疑うことなく…こころのお陰でもあるだろうが何から何まで用意をしてくれて、未確認生命体関連でも協力してくれて、

想「お世話になりました。これを…」

俺はそう言いながら手紙の入った封筒を黒服に渡す。1度それを見てから目を瞑る

想「もし、俺が死んだら…これを、アイツらに渡してください」

黒服「…わかりました」

そこで、無線が鳴り響く。一条さんからだった。俺は少し離れたビートチェイサーに走り「俺です」と言った

一条『対0号用の特殊レーダーがあともう少しで完成する！目安は…あした午前10時だ』

想「はい、分かりました。一条さんは？」

一条『俺は…また後で連絡する…！』

そう言われ、無線を切られる

想「ちよ…一条さん…！一条さん！」

俺はビートチェイサーに跨り、走り出そうとした時だった。いつの間にか、弦巻邸のメイドや調理師、黒服などが俺の前に立ち、敬礼をしていた

黒服「ご武運を、私達はあなたの無事を祈っています…」

想「ありがとうございます、それともうひとつ…！」

黒服「…？」

俺はとある頼み事をした

〜とある廃墟・PM11:42〜

一条「すまなかったな…八意…お前にこれ以上負担を背負わせたくなかった。」

一条は、特殊レーダーを伝え少しほつとした。これで後は杉田や桜井あたりがどうにかしてくれる。自分は今この状況に集中出来る。

それは1時間前の事だった。警察に1本の連絡が入ったのだ。

『B1号と思われる人が廃墟に入っていくのを見た』

それは各地の警官に無線で伝えられ、一条もそれを無線越しに聞いて、今ここにいる。

いわゆる独断行動だ

一条「俺も昔なら勝手に行動しなかったからだろうな…」

そう呟く一条の全身は雨に濡れ、右手には神経断裂弾が5発入った拳銃を持っていた

バルバ「人間も…変わったな…」

一条「バラのタトウの女…」

バルバ「昔の人間は、我らグロンギ族にただ殺されているだけだった」

一条「また何を言い出す…」

そう言いながら拳銃を構える。

バルバ「これが私の最期になるか…？戦う人間よ」

そう言っている時には既に一条はハンマーを引き起こしていた

一条「終わりだ…0号もすぐに倒される。」

バルバ「そうだといいな…」

一条「何故戦おうとしない…？」

バルバ「私は戦うグロンギでは無い。だがしかし…！」

相手は予備動作無しに薔薇の刃を打ち出す。数発放たれたそれを、一条は長年の感で躲し、神経断裂弾を打ち込む

バルバ「!？」

一条「うぐっ…！」

足に数発刺さってしまった。そこから血が吹き出し、口から血を吐き出す。寒気が全身を襲う

バルバ「耐えるか…だがその薔薇には毒が入っている。クウガなら耐えられるかもしれないが…人間はもって1分だな…」

そこまで言いかけた所でバルバの腹から何かが突き出す。見慣れ

た金色の刃

一条「…！」

バルバ「クウガ…！ダグバは…そう簡単には死なないぞ…」

そこで尽きたのか、がくつと倒れ、動かなくなった。その奥から走ってくる影が1つあった

一条「あのバカ…」

俺は無線が途切れた場所を、黒服に頼み込んで調べてもらった。その通りに行ったら、今、一条さんが刺さっていて、俺は咄嗟に紫の金のクウガになり、後ろから突き刺した。

想「一条さん！一条さん！」

抱き抱えられ、馬鹿の一つ覚えのように自分の名前を呼ぶ。続いて自分の頬に彼から流れた涙が落ちる

一条「八意…」

想「一条さん！いま救急車を…！」

救急車を呼ぶ手を掴み、止める

想「なんで…！」

一条「もう俺は無理だ…助からない…貴重な救急車を使いたくはない…」

想「そんな…」

話せるうちに、話しておきたい。

一条「今まで…様々なことに君を巻き込んですまなかった…君には、普通の青春を、送って…欲しかった…」

八意は目を見開き、さらに涙を流す。

想「…っ！一条さん…！でも俺…良かったって思ってますよ…？一条さんと…沢山の人と出会えましたから…！」

一条「…！」

気づけば、一条自身も涙を流していた。

一条「…0号を…頼んだ…」

そろそろ、潮時のようだ。体の痛みが遠ざかり、視界が白く、染まっ
ていく

一条「…君…と…もっ…と、話を……した……かった…」

一条悠介は、心優しい少年に看取られ、短い人生を終えた

想「ううっ…ううううっ…！」

俺は一条さんの骸を抱き抱え、ただ泣いた。あともう少し早けれ
ば、助かっていたかもしれない。

想「ううううっあああああああああああ！」

夜中の廃墟に、1人の少年泣く声が、響き渡った。

↓次の日・廃墟・AM7:00↓

想「…」

いつまでボーツとそこにいたのだろうか、朝日が顔を照らしても、
俺は何も感じなかった。ただ、自分が抱いている、大切な人の体の温
度が下がっていくのを感じていた

杉田「おい、2人とも…一条！」

一条さんの同僚の杉田さんが現場に来た。俺は虚ろな目を杉田さ
んに向ける

杉田「一条は…そうか…」

俺はポツポツと、昨日のことを話した。杉田さんは黙って聞いて、
聞き終わった後、俺の肩を叩き、言った

杉田「ならそこでボーツとしてるな、一条が託してくれたんだ。そ
の分まで俺たちが頑張らないでどうする。前を向いて、歩き出さなけ
れば…」

想「…！」

杉田「きつと…一条も見守ってくれてるさ、不器用で生真面目なあ
いつだからな…」

想「杉田さん…」

俺は涙を零しかけるが、何とか止める。それに満足したように頷
く。杉田さん

特殊レーダーが作動するまであと3時間。

つまり、八意の自由時間はあと3時間という意味でもある

〽羽沢珈琲店・AM7:30〽

想「…」

味のしなくなつたブラックコーヒー、味のしなくなつたケーキ、だが今は、無性に食べたくなつたのだ。無理矢理訪問してしまったことは申し訳なく思っている。だがつぐみも母も父もこころよく出迎えてくれた

つぐみ「…」

遠くからつぐみが心配そうな顔で八意を見る

想「つぐみ…?」

つぐみ「いや…!」

想「…ちよつと話、しないか?」

つぐみ「…、うん」

つぐみはエプロンをしまいながらこちらへ歩いてきて、俺の前に座る。

つぐみ「…」

想「…」

しばらくの静寂、先に口を開いたのはつぐみだった

つぐみ「…やっぱり、戦うの?」

想「うん、そのつもりでいるよ。あと2時間もすれば、多分この街にいない」

つぐみ「そつか…リサさんには、ちゃんと言つた?」

想「言つてないなあ…あいつ絶対止めるだろうし…」

つぐみ「あはは…確かに」

2人で苦笑する。

つぐみ「私は…止めたいけど…止めないよ?だって…止めても聞いてくれなさそうだもん」

どこか拗ねたように聞こえたその声、俺は苦笑いをする。

想「おつと…」

俺はそろそろ行かなければと思い、立ち上がろうとするが、何故かふらついてしまった。

そういえば、2日くらい寝ていなかったし食事もロクにしていなかった気がした。それを今思い出し、一気に体を疲労が襲う

つぐみ「大丈夫…？」

つぐみもあとから立ち、俺の近くによる。

想「ああ…大丈夫だ…つぐみ…」

つぐみ「わっ…！」

ラッキースケベというもののだろうか、体が限界を迎え一気に眠る八意は、頭をつぐみの胸に乗せていた。

つぐみ「…やっぱり…無理してるじゃん…」

つぐみは胸の中で眠る彼を見ながら

つぐみ「好きだよ…」

と呟いた。だがきつと、この恋は叶わない。だって彼には沢山の恋敵がいる。自分より魅力的な女の子は沢山いるからだ、自分じゃそこには到底並べない

だからせめて、戦いに勝って、いい彼女さんを見つけて幸せに、普通の生活を送って欲しい

つぐみ「…」

そして、自分という存在が、記憶の片隅にありますように。

〽羽沢珈琲店、つぐみの部屋・AM9:00〽

想「…ん、」

俺はやけにいい匂いがする部屋で目覚めた。いつの間にか布団が被せられ、その近くで頭を置いて眠ってしまったている1人の少女。

その姿を見るだけで、誰が俺をここまで運んでくれたのかを知れた。た。

想「ありがとな…」

静かに起き上がり、俺に変わってつぐみを布団に入れる。すやすやと寝息を立てているので、多分バレていないはずだ。

想「…」

黙って出ていく事には少し申し訳なくなりながら、歩みを進める
つぐみ「…想さん…」

想「…！」

呼ばれたことに驚いて振り返るが、寝言だった。涙を流しながら寝
ているつぐみ。

想「…：行ってくる」

つぐみの頭を少しだけ撫でて俺は窓から飛び降りる。受身をと
りながらビートチェイサーの横に着地、すぐに跨り羽沢珈琲店から走り
出した

〜とある道路・AM9：30〜

想「…雨がすごいな」

俺はバイクで道路を走り抜けていた。対向車線にも、自分がいる車
線にも、何一つ車は通らなかつた。歩いてる人もいない。まるで花咲
川はゴーストタウンのようだった

俺はあと一人に、別れの言葉を告げたかつた。何より俺を心配して
くれた人物に

残りの自由時間も少ない中、自分は早く会いたいと一心でバイクを
飛ばした

〜リサ宅・玄関、AM9：45〜

リサ「それで私の家に来たと？」

想「あはは…まあそうだね…」

俺は微笑みながら言う。リサは「ふーん」と言ってから俺に近寄つ
て来た

リサ「黒服さんから電話で聞いたよ？…凄まじき戦士になるんだっ
てね…」

想「…そうだな」

リサ「正直アタシにはわかんないけど…凄まじき戦士がなんかやば

そうに聞こえるのは分かるの…」

想「うん…」

リサ「死なない…よね？」

想「…どうだろうな」

リサ「…じゃあ、目、瞑って」

想「…え？」

俺は瞬きをしながらリサを見る。その顔は赤く、何かをしやろうと
しているようで…

リサ「いいから…！」

想「お、おう…！？」

俺が目を閉じた瞬間、俺の唇にリサの唇が重なる。いわゆるキスを
リサはしてきたのだ。

しばらくした後、息が続かなくなったのか「ぷはっ」と互いに唇を
離す

想「はあ…何すんだよ…びっくりした…」

リサ「これで出来たでしょ…？」

想「…？」

リサ「帰る理由…！ちゃんと倒して帰ってきて！女の子の初めての
キスとっておいて死んだら許さないよ…！」

とった…？俺はとつてない…リサからやってきたんだよ…

というのを俺は我慢する。その代わり、サムズアップをひとつ

想「分かった、必ず勝つ。勝ったらさ…みんなでパーティーだな！」

リサ「うん！約束！」

俺とリサは指切りげんまんをした。

（埼玉県）

ダグバ「…」

相変わらずの不気味な笑顔で街の道路に佇むダグバ、だがその周り
には、花咲川のように、車や、人の遺体があり、地獄絵図となってい
た。駆けつけた警官も瞬殺され、埼玉の警官は全滅寸前となってい

た。

警官「現場に到着！でも…0号がいません…！」

あとから駆けつけた警官は、地獄絵図を見回し0号を探す、だがいなかった。

その後0号は驚異的な移動スピード…いや、殆ど瞬間移動というものに近い…そして、あちこちで目撃され、殺戮という“遊び”をしていた。

茨城で

青森で

京都で

死者は6万人を上回る…

〜とある道路・AM10:00〜

想「…」

俺は次々と来る0号の出現と、殺戮を無線越しに聞き、戦慄していた。叩きつける雨が体を冷やしていく

杉田『聞こえるか？』

想「…！」「はい！」

無線から杉田さんの声が聞こえる

杉田『対0号の特殊レーダーが今作動し始めた！0号はまだ観測できてはいないが…発見次第すぐに連絡する！』

想「分かりました！」

俺はさらに速度を上げ、行くあてもない道路をただひたすら走る。

ただ、
ひたすら…

〜羽沢珈琲店、2階・AM10:30〜
つぐみ「…ん」

目をぱちくりさせ、起き上がる。だがさつきまで布団は彼が使っているはずだと思い、一気に意識が覚醒する

つぐみ「…!」

机に紙が1枚、置いてあった。裏返したそれを見て、息を飲む

『ありがとう』

『さよなら』

と綴られていた。つぐみは咄嗟にAfterglowの全員に連絡する。

〜モカ宅〜

モカ「嫌だよ…そんなの」

〜蘭宅〜

蘭「…」

〜巴宅〜

巴「さよならって…」

あこ「お姉ちゃんどうしたの？」

巴は、いつの間にかスマホを覗いてきたあこにビックリするが、何とか声に出さずに抑え込む

あこ「さよなら…?これ誰から？」

巴「あいつだよ…八意だ…」

あこ「え…!?!」

巴「…あいつ多分、死ぬ気で行くつもりだ…」

あこ「やばいよ!それ!あこ、Roseliaのみんなに知らせてくる!」

素晴らしい、自室へドタドタへと上がっていく。

巴（いくらなんでも…）

巴はそう思い、スマホを握りしめた。

くリサ宅く

リサ「嘘…さよなら…？」

さつき、あんな約束をしたはずなのに、まさか…

リサは頭が真っ白になった。だがすぐに落ち着きを取り戻す。大丈夫だ、彼は戻ってくる

く紗夜宅く

紗夜「…！」

日菜「おっねーちゃん…」

後ろから驚かしに来た日菜でさえ、文章を見て止まる

紗夜「彼が…0号と戦いに行ったらしいわ…」

日菜「そうなんだ…」

紗夜「…大丈夫よね？」

日菜「おねーちゃん？」

紗夜「彼…ちゃんと戻ってくるわよね？」

珍しい姉の泣きかけた顔、日菜は1度返すのに戸惑う。本当に帰ってくるのだろうか

日菜「うん…大丈夫だよおねーちゃん…！きつと戻ってくる…！」

く燐子宅く

燐子「…！」

燐子は送られてきた内容を見て、少し驚く。誰かに隠れて何かをするのはよくある彼だ。だがしかし、ちゃんと頼つてとはいったし、自分たちも極力、サポート出来たはずだ…だが

燐子「今回ばかりは…無理なのかな…」

何せ相手はこの3日で約10万人を殺した化け物だ。それに勝てる人間はもちろんいないし、クウガでも勝てるかは、怪しい

悔しい思いを、スマホを握る形で表現した

くとある道路・AM12:00く

想「…」

昼だと言うのに空はまるで夜のようだった。雨が激しく降り、俺の体を冷やしていく。この異常気象さえ、あいつが引き起こしているの

かと思うと笑いたくなる

警察と連携を取り始めてから約2時間、中々進展が掴めないでいたその時だった。誰もいない道路に、1つバイクの音が聞こえる。同じ車線を逆走してくるバイクは、やけに懐かしく感じ…

想「トライチェイサー…!?!」

俺は目の前に止まるトライチェイサーを見て、あまりの懐かしさに目を見開く。ヘルメットを上げて誰が乗っているのかと確認する

黒服「私も、ご一緒させて頂きます。八意様」

想「黒服さん…!」

あの3人のうちの1人、髪が長い黒服さんだった。トライチェイサーが直っていたことにも驚きだが相変わらずなぜ居場所がわかるのか…

黒服「今までのようにカラーは変えられませんが、一応直せました」

想「あ、そうなんですか…」

困惑する俺に、無線が鳴り響く。それは黒服さんのトライチェイサーも同じだった

無線『本部から転写、たった今レーダーシステムが0号を捉えました。』

無線から聞こえた女性の声、俺と黒服さんは同時に顔を見合わせる

想・黒服「…!」

無線『京都を離れ…この進路…東京へ来てます!』

想「都心…!?!」

都心部であの時のような殺人行為なんかしたら…想像するだけでゾツとする。俺と黒服さんは、背筋が凍る感覚を味わいながら走り出した

く東京く

ダグバ「…」

だがもう、八意達が高速道路で走っていた時には遅かった。都内の中心で発火現象を引き起こし、

10万人の人が犠牲になった

突如自身から沸き上がる炎に、訳が分からず死ぬ親子。市民を守るために立ち上がった警官も…

——何もかも

そしてその死体を踏みつけにしながら立っていたダグバ。どれだけ殺せばクウガは僕と同じ者になるのだろうか、だがそれを引き起すのは容易い。

あの女の集団を殺せば、僕と同じになる。だがそれは同時に、触れてはいけない禁忌に、決してやってはいけないとダグバさえ思っていた

だから回りくどいし面倒臭いが、周りの物を…

殺して——殺して——殺せば、きつと戦ってくれる。楽しい戦いになる

ダグバ「…」

この場に似つかわしくないバイクの音が聞こえた。それは真つ直ぐ、真つ直ぐ自分を目指し…

想「…！」

俺は前輪を上げ、相手を轢殺をしようとした。だが次の瞬間、ダグバは消えて、前輪は焼死体を踏みつけにしてしまった。

周りを見渡す。

あちこちが死体だらけだ。だがそこに立つ白い青年、雨が激しく降っているのに、まるでそこだけ降っていないかのように乾いていた。

ダグバ「今度はなれるのかな…僕と同じに…」

相変わらずの作り物の笑顔で俺に話しかけてくる

想「…」

ダグバ「待ってるよ…思い出の、“あの場所”で」

想（あの場所…？）

だが答えを聞くより先に、相手は消えてしまった。さつきまで立っていた場所には雨が降り、死体の火を消していく

黒服「……！」

遅れてやってきた黒服のトライチェイサー、その場を見渡し、地獄絵図に顔をしかめる。次に八意を見て、呼びかけるが返事は返ってこない

想（思い出の場所……？なんだ……いや、まて……アマダムの言っただことを思い出せ……アイツらが封印された場所……）

黒服「八意様！」

想「……!？」

いつの間にか横にいた黒服に、珍しく大きな声で名前を叫ばれる。

黒服「奴はいましたか……!？」

想「……消えました……でも次現れる場所は……九郎ヶ岳だと思えます……」

黒服「……九郎ヶ岳……まさか……そこで決着をつけるつもりでは……!？」

想「……!……行きましょう！」

それに黒服は無言で頷き、2人は走り出した

〳八意宅・PM1:00〵

リサ「やっぱりいない！」

寝室を探すが八意はいなかった

美咲「こつちもです！」

はぐみ「いなかったよ……！」

こころ「……いなかったわ！」

リビングにも、キッチンにも……トイレにも、お風呂にも彼はいなかった

25人が全員一致で彼を探している。街の中を隅から隅へ、だがどこを探しても、人が一人もない街を探しても、見当たらなかった。最終的に全員が辿り着いた結論は……

リサ「弦巻邸に行つて……黒服さんに聞こう……きつとあの人達なら何か知ってるはず……」

全員その意見に賛同する。実際今まで様々な協力を見てきたわけだ。知らないわけがない

〔 高速道路・PM1:24 〕

想「…」

今更だが何も言わずに放って来てしまったことを後悔した。多分今頃、俺のことを心配して色々しているのだろうか？ 否、さすがにそれは無い。政府が自粛を強制してくるくらいだ。俺を探すより、自身の身を守ってくれた方が俺も嬉しい。

犠牲が出てしまったら：俺は多分、自身の感情を抑えきれなくなってしまう。

黒服「…」

最後まで、着いてきてしまった。最初は、こころ様が命じて、それに従い彼をサポートしてきた。だが今は、命じられなくてもやるつもりだ。

ここまで来たのなら、最後までサポートするつもりだ。弦巻邸の黒服の名に恥じないように…

あの白い悪魔に勝てるのかは正直言って分からない。アマダムにはヒビがはいり、もし壊れれば死ぬ状況。弱点を晒しているのも同然だった。

なぜ彼は戦っているのだろうか。

必然的なのか

運命のイタズラなのだろうか

仇もとつたと聞いた。大切な相棒を失ったのも知っている。なのに何故、彼は戦うのだろうか…

わざわざ、普段なら絶対に行く必要も無い場所へ向かい、決着をつけるのだろうか

想『俺：戦う意味を見つけました。彼女達を：世界中の人々の笑顔

を守る為に…もちろん、黒服さんもですよ』

まだ出会って間もない記憶が頭をよぎる。あの時は内心無理だろうな、すぐに諦めてしまおうだろうなと思っていた。だが彼は諦めなかった。

ハロハピの皆を庇って1度はその生命を失い――

こころ様を救う為に爆発に巻き込まれ――

circleを、そこに生きる全員を守る為に人間であることを捨て――

今一度考えれば、本当に自分の為になることが何一つない。学校のことだっただけだ。まだちゃんと登校出来てないじゃないか…

（弦巻邸）

こころ「教えて頂戴、想はどこにいるの？」

美咲（メイドさんたち…黒服さん達…すみません…）

やけに静かな態度を取るこころにハロハピ全員は少し変わった空気を発す。あまり大人数も良くないので、ハロハピ5人だけに行くことになった。

黒服「お答えできません…」

目を伏せながら、髪の高い黒服が言う。

花音「ど、どうしてなんですか…？」

黒服「あなた達に言ってしまうと…止めに行ってしまう。彼の覚悟を、無駄にする訳にはいかないんです…」

はぐみ「でも…！」

黒服「私達だつて止めたかつた…でも、彼はもう私たちでは手をつけれない…今更行つたところで…多分間に合わないかと…」

こころ「決めつけるのはよくないわ」

黒服「…！」

こころ「そうやって悩むより、行動した方がきつと何かになると思うの！バスがあるでしょ？それに乗るの！」

薫「相変わらず凄い案だね…」

黒服「…」

「……早く行くわよ！間に合わなかったらみんなで迎えに行くわ！」

美咲「……そうだね、迎えに行かないとなんか迷ってそうだもん……」

黒服「負けた場合は……考えないのですか？」

「……いいえ！彼は負けないわ！——あら！」

花音「……雪？」

先程まで土砂降りだったのに、今は雪が強めに降っていた。

黒服「……わかりました。車を手配します……」

ハロハピ「「やった〜！」」

長野県・九郎ヶ岳、PM2:40

想「……」

黒服「……」

2人はヘルメットを被り、ただひたすら走り続けた。高速道路から一般道に入り、山道をひたすら曲がったり坂を昇ったり、体を打ちつける雨がいつの間にか雪になっていたりしても、ただひたすら……

少し山奥に入り、自然の道をバイクで走り続ける。だがトライチェイサーとビートチェイサーはそこを難なく通り抜けた。

しばらくすると、バイクが入れない場所まで来た。2人は止まり、互いにヘルメットを外す

その奥は、まるで普通の人間には通れない。そんな境界線があるのかというほどの威圧感があり、この奥に奴がいるのだと実感させられる

しばらくの沈黙を破ったのは、八意の声だった

想「髪が短い黒服さんに聞いたんですけど……ベルトの傷、やっぱ治ってなかったみたいですよ。だから狙う時は、ここをお願いします」

黒服「八意様……」

想「いや、もちろん……方が一ですけどね。もし俺が、究極の闇をもたらず存在になってしまったらですよ……？」

そして再び沈黙。次は黒服だった

黒服「本当なら、本当なら今もこんな所にいずに、いつも通りを過ごせていたはずですよね…」

想「…」

黒服「だから…」

黒服は、謝罪の言葉を入れようとした時だった。

想「いや、俺むしろこっちに來れてよかったです。」

黒服「…!」

想「ここに来てから、色んな人と出会えました。リサ達やガールズバンドのみんな、黒服さん達が…サポートだつてそうです。黒服さん達がいなければもつと早くに死んでたかもしれないし、彼女達にもここから励まされました。だから…」

想「ありがとうございます」

サムズアツプをしながら笑顔で答える彼、その瞳には、綺麗なくらいに迷いがなかった。

黒服「…!!」

黒服も初めて、サムズアツプをする。それを満足気に見た八意は黒服の前に立つ

想「じゃあ見ててください…俺の、変身」

俺はすっかり慣れてしまった動作で、腰からベルトを出し、構える。もう心には殺意も憎しみも何も無い。ただ、みんなが平和に過ごせますように、そう願う心が、俺を平常心にする。

想「…!」

構え、ベルトの横のスイッチを稼働させる。瞬間、ベルトに金の装飾がつき、全身に力が漲る。

足から姿が変わっていく。

吹雪の中、黒服はそれを見守る。拳銃も抜かずに、祈りを込めて体が変わっていく。黒と金に覆われ、全身が刺々しくなっていく。

想「…」

ひとときわ高い音を立てて、顔まで覆っていき、変身が完了する。ただ無言で、それを見る。

静かにこちらを見てくる。その目は…

いつも通りの赤だった

黒服が何かを言う前に、奥へ走り去っていく。黒服は、目から浮かぶ涙を、いつも付けていたサングラスを取り拭いながら…

黒服「いつてらっしやいませ…どうか、ご無事で…」
と言った。

く高速道路く

リサ「ほんと誰もいないね…」

気を紛らわすために窓から景色を覗くが…誰も、何も無かった。

はぐみ「あ！タイヤの跡がある！」

はぐみが道路を指さし叫ぶ。その場所を見れば、2つ、並ぶように走った跡があった

殆どが雪で埋もれてきえかけているが…

沙綾（一体どこまで行つたの…彼は…）

全員は尽きない不安を隠せずに、場所へ向かった

く九郎ヶ岳く

想「…」

しばらく走ると、1番開けた場所に来た。如何にも決戦場所だ。始めてくる場所なのに、それを感じさせない。それは――アイツがいるからか…

ダグバ「…なれたんだね、究極の…力を持つものに」

まるで待ち望んでいたかのように弾んだ声。俺はただ、無言でその場にたつた。

―― 相手が、白の化け物に変わる

なんの一言もなく、互いを見つめ合う。

ダグバが、右手を差しのべ、俺に手を伸ばす。

想「…っ！」

―― 途端に体が炎に包まれるが、黒の金よりかはまりました。だが皮膚が焼ける感触は未だある。だが俺は歩くのを辞めない…

ダグバ『僕と同じに…』

その時、ダグバの言葉が脳裏を過った。あいつと同じなら、俺もできるとは。俺はダグバと同じ動作を行う

ダグバ「…!?!」

―― ダグバが炎に包まれる。

―― 互いは吹雪の中、燃えながら距離を詰める

―― 徒歩が、走り変わる

想「はあっ…!!」

ダグバ「やあっ…!!」

互いに鋭い気合いを込めて胸部を殴りつける

―― 白い景色に、赤の模様を描きながら2人は倒れる

―― 最後の戦いが、幕を開けた

く九郎ヶ岳く

想「ぐっ…!」

ダグバ「っ!」

互いに白い世界に赤を描きながら、互いに倒れる。だが2人ともすぐに立ち上がる。次の一撃を入れるため…

想「ぐっ…ううああああああ!!」

俺は、最初の一撃を打ち込んだ瞬間、右腕の骨が粉々に砕けたのを感じた。腕に激痛が走り、喚きかける。

想「ぐう…ああ…うう…!」

だが次に起こったのは、自然の摂理に反した回復能力。それを使い右腕を治すが、それにも激痛が走る。

想「はあ…はあ…」

つまり、相手に一撃を入れる度、硬い装甲を壊し、内側にダメージを入れるには

——これを繰り返さなければならない

ダグバ「ふっ…!」

想「おぐっ…」

俺に早く立ち上がったダグバは俺の頭を掴み、殴り飛ばした。再び転がる俺、今度は頭蓋骨が砕ける

想「!?!」

だが脳みそまではいかず、骨を再生する。そのまま追い打ちを入れようとしたダグバの腕を掴み、拳を打ち込み、胸骨を砕き、一撃をいれる

ダグバ「っ!?!」

想「ぐっ…うう…!」

また繰り返す現象。結局好きになれなかったこの人を殴る感触。それが続く

ダグバ「はあっ!」

想「ぐうう…!」

ダグバが俺の胸辺りを殴り、俺は後ろによろめく。さらなる一撃を入れようと走り出したダグバを目掛け…だが

想「はあ…！」

今度は俺がふらつきながらも腹部に蹴りを入れる。血飛沫がまるで華のようだ

想「ぐう…！」

ダグバ「あはははっ！」

俺に拳が2発打ち込まれ、血を出しながら呻く。だが俺も負けずに、拳を入れ、相手を殺すためにまた殴る

想「はあっ！」

また殴る

ダグバ「あははははあっ！」

殴られる

それをただひたすら、馬鹿みたいに繰り返す。雪景色がどんどん染まっていく。

白き悪魔は笑いながら壊すために…

黒き化身は守るために…

〜高速道路〜

黒服「あともう少しで長野県です、皆様準備を」

運転手をしていた黒服が、カーナビを見ながら指示を出す。

美咲「結局人…いませんでしたね…」

友希那「こんな事態だから…仕方ないのかもしれないわ…」

あこ「まさか…全滅してる場所があるとか…」

巴「あこ！不吉なことを…」

紗夜「無いとは…言えないわ。だって約2日で20万の死者を出したのよ？当然村の1つや2つ…なくなっただって…」

リサ「あー、もう！やめよこの話！」

リサがやってられないとばかりに頭を掻きながら叫ぶ。それに全員がビツクリする。

モカ「後ろばっか見て後ろ向いても何も変わらないしねー、彼だつていつも前見てたんだから」

花音「大丈夫：かな？」

薫「花音、心配することは無い。彼は：負けない」

千聖「たまにはまともなことを言うのね：」

燐子「信じるしか：ありません。」

く九郎ヶ岳く

想「おお：！」

ダグバ「はははっ！」

互いに雪に埋もれながら殴り合う。時に俺が上に馬乗りになりただひたすら殴る

時にダグバが俺の腕をへし折りみぞおちに蹴りを入れる。

想「はあ：はあ：」

ダグバ「楽しいね：はあ：はあ：あははっ」

今どれ位の時間が経ったのだろう。もはや痛覚すら無くなってしまったに等しい。寒さなどつくの昔に消えてしまった。

想「はあ：はあ、」

凄まじい音を立て再生した右腕を見やる。相手も右腕を再生させたのか笑い声を上げる。

想「おおおあああ：！」

ダグバ「はああああ！」

俺は右腕を上げ、殴り掛かる。だがそれより一瞬早く放たれたダグ

バの拳が

——バキツと音を立てて俺の腹、霊石アマダムをほぼ全壊にさせた。ヒビ割れが酷くなり、もう潰れていると言っても過言では無い。

想「くう…ぐあ…！——ああ！」

今まで味わった痛みを遥かに凌駕した痛みが俺を襲う。全身の血液が沸騰しているかのような熱。神経系全てに直接入った痛み。今すぐ雪に全身を埋めたい。だがそれらを堪え、拳を放つ

ダグバ「ぐう…！」

——だがその拳は、ダグバのベルトをヒビ割れさせ、ほぼ全壊にした。

互いに腹を抑えながら後ろに下がる。相手も同じくらい痛みを体にかけているはずなのに相変わらず笑っている、心底狂気じみている。理解できない

想「…っ！」

俺たちは互いに掴み合い、その身を雪に叩きつけた

く九郎ヶ岳付近く

黒服「…！」

バスが急ブレーキをかけて止める。それに全員揺られ、一体何事かと前に詰寄る

黒服「雪が酷すぎてここから先はバスでは行けません…！」

悔しそうに絞られた声。全員が今度こそ諦めかけた時だった

彩「いや、まだ大丈夫だよ。歩けば…行けるはず…！」

蘭「本気で言ってるの？」

彩「え…？」

蘭「外、めちやくちや寒いから多分私たちじゃすぐに死ぬ…！」

確かに、蘭の言っていることは正しい。この異常気象、凍える寒さ、だがここまで来て諦める訳には行かない

有咲「それでも、行くしかねーだろ…」

蘭「市ヶ谷さん？」

有咲「あいつはそんな中戦ってた。歩くくらい、私たちならできるだろ…——だあく！恥ずかしいな！」

香澄「有咲…！うん、行こう！」

美咲「ま、ミツシエルで登山よりかはましかな…」

燐子「はい…行きましよう…」

互いに励まし合い、共に手を取り進んで行く。これが素晴らしい人間の光景なのだ

（10分後）

有咲「寒すぎだろおおおおお！あと足が…！」

有咲の絶叫が山中に響き渡る。歩き始めてから約10分、雪に足を取られるせいで体力を余計に使うのか運動できる組さえ少し息が上がつている

美咲「ちよ…思ってたより…キツイ…」

燐子「はあ…はあ…！」

紗夜「大丈夫ですか…？白金さん…」

はぐみ「まだまだ…！」

それに寒さが加わり、流石にキツイ。これ以上は命に関わってしまいうつすらしい人もあるため、一旦引き上げようとした時だった

つぐみ「あ、あれ！」

つぐみが雪景色の先を指さす、強い吹雪で見えにくい意識すればうつすらうつすらと見え…

蘭「あ…あれ…！」

流石の蘭も叫ぶ。そこには、トライチェイサー。そしてビートチェイサー、そして…

黒服1「…。」

1人、そこに立つ黒服だった。全員なにかに押されるように走り出

す。立っていた黒服に詰め寄り、話しかける

リサ「想くんは…!?」

黒服1「もう…行かれました。全てを終わらせるために、凄まじき戦士となって…」

黒服2「究極の闇をもたらす者には…!?」

全員「…!」

そうだ。凄まじき戦士になれば、究極の闇をもたらす者になり、全てを破壊してしまう。もしそれになっていれば取り返しがつかないことになる。それだけは避けなければ

黒服1「いえ、なつてはいません…」

だが元から居た黒服からは、想像と全く違うことを言われた

黒服2「どうゆう事だ…!?」

黒服1「私が見た目の色は…いつも通りの赤でした。」

それに全員が驚き、涙をうかべる人物もいた

あこ「伝説を塗り替えただ…!想兄は…!」

いつものあこの厨二病が入った言葉も、今では何故かしつくりくる。

友希那「彼らしいわね…、皆を守る為に伝説を塗り替えるなんて」
リサ「ほんと、すごいよ…」

美咲「さて、迎えに行きますか。多分…彼すごい傷おってますよ…」

苦笑いしながらさらに奥を指さす美咲。全員がそれに少し笑う。

隣子「ですね…早く行きましょう…」

日菜「よおーしっ!早く行って!帰ろう!」

頷き、また再び歩き出す。

黒服1「…」

黒服2「…」

2人は互いに見つめ、微笑む。

く九郎ヶ岳・決戦場く

彼女達が思っていたよりも、その場は地獄だった。ただひたすら交

互に殴り合い、どちらかが先に倒れるかを競い合ってるのと同じだった

想「おあ…！」

ダグバ「あはあっ！」

俺はもう人間にもどっていたダグバの頬を、思い切り殴り飛ばす。

ダグバ「あははあっ！」

想「ぐふっ！」

ダグバからの拳が、変身が解け、人間になっている俺の頬にあたる、俺は口から血を吐きうしろに倒れかける。当たりは吹雪でも覆えない速度で赤色が染められていった。

そして、互いのベルトの破片がそこら中に散らばっていた。

互いに既に心臓より重要なベルトを失って生きているのか。執念か、奇跡か…

だが既に、もう戦いの意味はなかった。

もう、どっちも生き残ることはないのだから

想「うっ…ぐう…」

なんのためにこんなことをやっているのだろうか。一体この拳が何になるのだろうか。なぜ大昔、人間とグロンギで別れてしまったのか、なぜ互いに滅ぼし会おうとするのか。

俺は気づけば泣きながら拳を振るっていた。なんの意味もない暴力の悲しさからか、痛みからか、もうそのようなまともな考え方は既に消えてしまっていた

ダグバ「あはは…！あはははっ！」

思い切り振りかぶった拳を俺はまた頬に受ける。からっけつの血がさらに無くなり、意識が掠れていく。

想「ううあっ！」

ふらつく視界のまま俺は拳を振るう。握力があるのかなのか、それすら分からない。

ダグバ「あはははっ！あはははっ！はははは！」

想「うう…！ああ…！」

——一方が笑い

——一方が涙を流し

互いに譲れぬものを背負い戦う。だがそれももう終わる。次の一撃が、互いの残り少ない寿命を、根こそぎ刈り取るからだ。

想「おおおっ！」

ダグバ「あはははははははあっ！」

互いに大きく振りかぶり、拳を構える。互いの頬をめがけ、命を刈り取り、勝者を決めるために…

ダグバ「ゴフツ…！」

ダグバの頬に拳が打ち込まれ、残りの血をを全て吐いた。

想「はあ…はあ…」

だがダグバが放った拳は、ギリギリ想の頬を掠めた場所で止まっていた。

ダグバ「…」

後ろに倒れたダグバは、一度笑ってから、二度と目覚めることはなかった。

想「…はあ、勝った…でも俺も…ダメみたいだわ…」

誰もいない場所で1人笑い、その場に倒れ込む。もうほとんど目が見えていない。身体感覚がうっすらと消えていくのがわかる。

——ああ…これが死か…

俺はここで、1人で死ぬ、誰にもみられずに…

想「…？」

だがその願いも、今打ち壊された。大人数の足音がこちらに来る。

黒服1「八意様！…っ、0号！」

黒服2「大丈夫です、死んでます…！」

想「黒服…さん…？」

リサ「想くん！想くん！」

黒服Ⅰ「あそこに散らばってるのは…ベルトの破片…！——まさか…」

想「ごめんな…リサ、俺…お前との…約束…破りそうだわ…」

リサ「…え？」

想「黒服さんなら…分かりますよね…ベルトが、壊れてしまったら…どうなるか…」

黒服は目を見開き、呟いた

黒服Ⅰ「命を…落とす…」

リサ「そんな…」

美咲「嘘でしょ…」

つぐみ「…」

あっちこつちからへたり込む音が聞こえ、俺は弱々しく苦笑する

想「なんだ…全員来てたのか…俺もこれだけの、人数に、…見送られるとは…幸せ者だな…」

俺の頬を、暖かい雫があたる。きつと、泣いてくれているのだろう。

まさかここまで幸せな死が来るなんて、想像すらしていなかった。

リサ「嘘つき…」

想「…ごめん…」

沙綾「ちゃんと生きてよ…！新作パン食べてよ…！」

想「…ごめんな」

美咲「生きてくださいよ…！私まだあなたに伝えたいこと、話したいこと沢山あるんですよ？」

つぐみ「私も…沢山伝えたいことがあるんです…」

薫「…ここで生命を散らしてはいけない…まだ沢山のお姫様達が待ってる…」

たえ「オツちゃん…まだ見てもらってないよ…？」

想「うう…ごめん、みんなほんと、ごめんなあ…」

リサ「こんなので平和を貰っても、私たちいらぬよ！平和になった世界で…みんなのライブ見に来てよ…！遊びに来てよ…！」

俺は涙が溢れ出る。約束を破る情けなさに、もつと行きたいという願いに、死にたくないと初めて思った。

想「皆…今まで色々迷惑かけて、悪かった」

リサ「誰も迷惑だなんて思っただけだよ…！お願いだから死ぬのはやめて！」

「…死なないで…想…！」

美咲「…こころ…！」

見ればあのころでさえ涙を流し、想には死んで欲しくないとそう訴えていた

想「よかった…じゃあ、俺…いくわ…。あんまり…はやく…来たら…押し返すからな…！」

全員から涙が溢れ、一部の者は大号泣していた。

リサ「いやだっ！いやだよお…！」

想「俺の…代わりに…この平和な…世界で生きる…！」

美咲「やめてくださいよ！そんな事言わないで…！」

想「ちやんと…学校いつて…彼氏作って、結婚して…家族つく…て…、幸せにな…！」

俺は震える手を伸ばし、泣きじゃくるリサの頭を撫でた。

想「…あ……りが……とう……」

虚ろな目がリサ立ちを捉え、その僅かな輝きさえも消えてしまう。

——全員が泣きじゃくった。

リサ「わああああん！あああああつ！」

ダグバがもたらしていた吹雪が止んだ。だがそれを彼女達は喜べなかった。

想『…』

俺は白い世界に立っていた。そうか、死んだのかと思いつきながら歩き出そうとした時だった。後ろから懐かしい声がした

一条『八意！』

想『一条さん…！』

一条『…終わったな』

想『はい…おわかりました』

一条『…そうか、じゃあ行こう。』

想『はい、そういえば…』

2人はまるであの時のように、笑いあつて

白い世界の彼方へ消えた

最終回

戻ってきた日常

ニュースキャスター『未確認生命体第0号の死亡を本日、警視庁が発表しました。未確認生命体事件は、終わりました!』

晴れやかな顔ではきはきと、嬉しそうに伝えるニュースキャスター。やつと訪れた平和。それに誰もが喜び、涙した

——だが彼女達は違った

失ったものが…あまりにも大きすぎたから

～葬式会場～

リサ「…」

美咲「大丈夫ですか…?」

ぼーっとしているリサに美咲がおずおずと話しかける

リサ「あ、美咲…」

美咲「意外と人数おいですよね…。」

彼の葬式は、彼を知る人だけで行われている。弦巻家ができる限り華やかに彩られている

杉田「馬鹿野郎…お前…」

彼女達25人含め、警官が何十人か、そして彼女達の母や父。全員が彼の遺体を見て、涙していた。

沙綾「なんやかんやで彼、色んな人に愛されてたんですね。」

～1週間前～

九郎ヶ岳の戦いで0号を倒した八意想は、すぐに病院に送られ、心肺蘇生が行われた。もう誰もが分かっていた。もう戻ってこない…それでも、その事実を否定したいがために館内の医者は全力を尽くした。

医者1「嘘だろ!?!おい!しっかりしろよ!」

叫びながら何回も、何回も電気ショックを行う。だが彼は帰ってこ

ない。途中から諦めかける人もチラホラと出かける。だがそれに構わず――ただ3人になっても…

〈2時間後〉

医者2「…すいませんでした。1月9日：19：50分：死亡を確認しました…」

戦いから2時間たった夜。医者達の尽力も虚しく、彼は死んだ。それに全員が絶望し、中にはへたり込む人もいた

リサ「そんな…」

ふらつきながら部屋に入る。顔こそ綺麗になつてはいるが身体の方は傷だらけだった。だがそんなことお構い無しに、リサたちは部屋に入る。

つぐみ「大丈夫…ですよ？、彼…前みたいに戻ってきますよね…？」

つぐみが泣きながら黒服の肩に手を置き、言う。

黒服2「…」

キノコ種怪人の毒を食らい、1度は命を落とした八意だった。あの時は腹の霊石の力か、奇跡か、八意は再び立ち上がりその拳をふるい討伐した

黒服1「いえ…そのことはもうありません…」

腹の霊石の欠片はもう既にその輝きを失い。活動を停止していた。

霊石の意味なのか―――彼が望んだことなのか

花音「そんな…みんな待ってるのに…」

リサ「想くん…」

もう冷たくなった頬に触れ、語りかけてもなんの反応も帰ってこない。改めて帰らぬ人となってしまったことを自覚させられる。

〈葬式会場・pm9：00〉

リサ「…」

お経を読み終わり、彼女達だけが残った会場。警察官は、涙をふいて会場を出ていった。未確認生命体以外にもやるべきことがあるから

黒服「皆様、おすわり下さい」

全員「…?」

それぞれが重苦しい空気を漂わせながら椅子に座る。黒服は全員が座ったのを確認してからひとつの封筒を懐から取り出す

巴「それは…」

黒服「八意様からの手紙です。もし自分が死んだらみんなに…そう仰られています。では読みます」

黒服が丁寧な動作で封筒を開封し、紙を広げる

お前らへ

これを黒服が読んでいるってことは俺はもう死んでいるってことだな、色々隠して勝手に出ていって申し訳なかった。本当なら生きてみんなに言おうとしたことがまああったりする

・味覚が無くなった

とかな、まあ大体が知ってると思うけど、俺はもう人間じゃない。それでも、逃げずに最期まで着いてきてくれてありがとう。その場にいた25人に感謝を伝えたい。

ありがとう。こんな俺を支えてくれて

平和になった世界はどうだ？、結局花見出来なかったなあ…。モルフオニカの皆には嫌われっぱなしだし仲良くなりたかったなあ…。あとRASとも、ますきと六花？だっけな、よろしくと伝えてくれ

俺が死んだからって後追いしようとするのはやめろよ？、そんなことしたら追い返すぞ？ちゃんと生きろよ？

飯食って、寝て、学校いって、進学して、風呂入って、彼氏作って、結婚して、子供産んで幸せに死んだら迎えに行くからな、俺は100年だろうが待ってやる。一条さんと話しながらでもな。いやでも、できる限り長生きしろ。

でもまあ…いつまでたってもその記憶の奥にでも俺を置いてくれ、そうしてくれると嬉しいかも

ビートチエイサーは将来誰か乗りこなしてくれ。ちなみに最高時速は420km。モンスターマシンだから…最悪博物館に飾ってくれ。ホコリだらけでしまい込むのはやめろよ？

黒服さんへ

いつも最高のサポートありがとうございました。トライチエイサーもビートチエイサーも、家も居場所も、黒服さんが基礎を作ってくれたものですよ。

Rosealiaへ

最高の演奏、いつも聞かせてもらったぞ。お前らが目指す場所！WF目指して頑張れよ！

ハロハピへ

粹にハマらないド派手なパフォーマンス。いつも見てた。DJにクマはすごいとおもうけど、これからもみんなを笑顔にするために演奏しろよ

パスパレへ

なんかもうお笑い芸人でいいんじゃないかなって思う所もあったが、実力は本物だ。これからも最高のアイドル目指してがんばってくれ、俺も応援するからな

afterglowへ

なんかこれだけフルネームだな…、いやだつてどう省略しようとかフロつて…。なんかダサいし…、

…いつも通り全員頑張れよ

ポピパへ

いつでも元気。沙綾のパンは美味しい。あとは猫かぶりの書記が印象的だったな…あと異様なチョココロネ好き

いつも…キラキラドキドキ目指して頑張れよ

あー腕疲れた。このくらいでいいか。じゃ、またあっちでな。待つてるぞ

彼の手紙は、そこで終わった。最後の文字は所々滲んでいる。彼がそこで泣いていたと思うと……

リサ「うつ……うう……」

リサ達が鼻をすすり、泣きはじめる。読み終わった黒服でさえ、ハンカチで涙をふいていた

リサ「忘れるわけじゃないじゃん……」

美咲「忘れてたくても忘れられませんよ……まったく」

全員がそこで少し笑う。たしかに3桁生きたとしてもセピア色にならないくらい濃い記憶を、短い間に彼は私達にくれた。

リサ「ちやんと、笑って送らないとね！」

未確認生命体事件は終わった。

リサ「ごつめーん！遅れたあ！」

友希那「まったく……行くわよ？」

明日からはいつかの日から失われた当たり前の日常が来る。

こころ「美咲……」

美咲「まったく……いつも元気だねあんたは……」

だが我々は忘れてはいけない。その裏で警察がどれだけ頑張ったか

杉田「お前ら……突撃まで待てよ……？」

警官「了解」

その裏で、どれだけの犠牲があつたか

香澄「有咲……!!」

有咲「あく！はしやぐなあ！」

彩「あはは……、元気だね千聖ちゃん……」

千聖「ええ、そうね。でも……」

忘れてはいけない。1度人生に絶望した少年が、運命のイタズラな
のか力を受け入れて

蘭「モカ…よく食べるね…」

モカ「考えても仕方ないからヤケ食い…」

巴「あはは！」

その拳を振るい、最期まで戦った彼を

たった1人の…高校生を…

〜18年後〜

リサ「ふんふん…」

奏「お母さん、これなんの写真？」

結婚して、一児の母になった今井リサ。子供の名前は今井奏
もちろん八意想から撮った名前だ。

リサ「うくん？あ！懐かしいね、それはね八意想つていうの！」

奏「八意…想？それってお母さんの初恋の人？」

リサ「そうだね、懐かしいなあ。でもその人、ちよつと変わっ
ててさ…誰にも言っちゃいけないこともあるけど聞く？」

奏「うん！聞きたい！」

リサ「実は彼…18年前の未確認生命体事件の4号なんだよ？」

奏「えっ?!あの社会の教科書にのってるクウガってやつ?!未確認
生命体と同じだけどみんなを守るために戦って…最後にはどこかへ
行っちゃったっていう…すごい!もつと聞きたい!」

目をキラキラさせた奏にリサは微笑む

リサ「物知りだね…いいよ、じゃあまずね…」

今日も空は、雲ひとつない青空だった

I F 最終回

おかえり

く九郎ヶ岳く

想「はあ…はあ…」

ダグバ「楽しいね…はあ…はあ…あははっ」

今どれ位の時間が経ったのだろう。もはや痛覚すら無くなってしまったに等しい。寒さなどどつくの昔に消えてしまった。

想「はあ…はあ、」

凄まじい音を立て再生した右腕を見やる。相手も右腕を再生させたのか笑い声を上げる。

想「おおおあああ…！」

ダグバ「はああああ…！」

俺は右腕を上げ、殴り掛かる。だがそれより一瞬早く放たれたダグバの拳が

——バキツと音を立てて俺の腹、霊石アマダムをほぼ全壊にさせた。ヒビ割れが酷くなり、もう潰れていると言っても過言では無い。

想「くう…ぐあ…！——ああ！」

今まで味わった痛みを遥かに凌駕した痛みが俺を襲う。全身の血液が沸騰しているかのような熱。神経系全てに直接入った痛み。今すぐ雪に全身を埋めたい。だがそれらを堪え、拳を放つ

ダグバ「ぐう…！」

——だがその拳は、ダグバのベルトをヒビ割れさせ、ほぼ全壊にした。

互いに腹を抑えながら後ろに下がる。相手も同じくらい痛みを体を感じているはずなのに相変わらず笑っている、心底狂気じみている。理解できない

想「…っ！」

俺たちは互いに掴み合い、その身を雪に叩きつけた。

く九郎ヶ岳く

ただひたすら交互に殴り合い、どちらかが先に倒れるかを競い合っているのと同じだった

想「おあ…！」

ダグバ「あはあっ！」

俺はもう人間にもどっていたダグバの頬を、思い切り殴り飛ばす。

ダグバ「あははあっ！」

想「ぐふっ！」

ダグバからの拳が、変身が解け、人間になっている俺の頬にあたる、俺は口から血を吐き後ろに倒れかける。当たりは吹雪でも覆えない速度で赤色が染められていった。

想「ああっ…！いてえな！」

先程雪にたたきつけられた時に、壊れかけていたアマダムは何故か体に引っ込んだ。

——だが何となくわかる。奇跡がおこらない限り

俺はもう変身は出来ない。

ダグバのベルトは既に壊れ、そこら中に散らばっていた。もうすぐ死ぬはずだ。なのに何故まだ戦いを続けるのか

ダグバ「はあ…はあ…楽しいね…」

想「お前…狂ってやがるな…」

軽口を叩き会いながら——でも2人とも殺すことを諦めない。

その証拠として、2人の拳は血が滲むほど握りしめられていた。

今込められる最大の握力で——トドメを刺すために

想「おらああっ！」

壊す者と守る者、互いに譲れぬものを背負い、その拳を握る

ダグバ「はあああっ！」

俺が放った拳は、ダグバの頬にあたった。口から血が吹き出し俺の右手につく。もう既に見なれてしまった光景、だがそれも一瞬だった。

ダグバの放った拳も、俺の頬に当たっていたからだ。

想「ごふっ…」

ダグバ「ぐふっ…」

2人は後ろにふらつき雪に倒れ、遅れてからつけつの血を吐き絞る。

ダグバ「はは…楽しかったよ…。クウガ…」

そういい、1度大きく息を吸い——二度と呼吸をしなかった。

俺は白い息を吐きながら立ち上がり、一言発する

想「俺の…勝ちだ…」

そうしてもう1度雪に後ろから突っ込む。

想（ああ…やべえ…意識が…）

俺が気を失いかけた時だった。前の方から沢山の足音が聞こえた。そして声がする

黒服「…さん！」

リサ「…ん！」

俺の意識は、闇に沈んだ

黒服「八意様！」

しばらく進むと、景色が一気に開けた。そしてその広がった景色のあちこちに血が滲んでいる。進めば進むほど赤は濃くなり…1番濃くなった所に、八意と――もう1人、0号が横たわっていた

1度近づくのを躊躇った。0号が生きていたらどうしよう…だがすぐに見てわかった。もう死んでいる。

リサ「あれが…0号…？」

黒服「はい、もう死んでいます…」

意外と見た目はいい0号の反対に倒れている八意に近寄る。死んでいるのではないかと思ったが、一番最初に近寄った日菜が八意の胸に耳を当て、顔が明るくなる

日菜「あ！まだ想くん息してる！」

有咲「血が…頭痛くなってきた…」

美咲「ほら、めちやくちやケガしてる…」

美咲な呆れたような声を出す隣で、有咲が頭を抱えていた。だが全員が喜んでいた。彼が生きているから

想「ごふっ…」

有咲「ちよまま！血吐いてる！」

美咲「やばいやばい早く運ばないと！」

叫ぶ全員の後ろにいた黒服が担架をどこかから取り出す。

紗夜「いつのまに…？」

――こうして、たった1人の戦士の戦い。世間では未確認生命体事件は幕を閉じたのだった

2週間後・リハビリテーション科

想「ああ〜！サボりてえ…」

俺は右腕にある杖をつき、頭に包帯をぐるぐる巻きにされていた。今はリハビリの途中

2週間前、あの時に両足と両腕がぐちゃぐちゃだったそうな、そのあと5日くらい死の淵をさまよったりしていた。その後遺症により、俺は左腕を失った。あるんだが動かないのだ

医者「まったく…今日でそれ8回言ってますよ?」

俺の専門の医者が呆れ声で言う。俺はそれに口をとがらせ反発した

想「いてえんだもん…!嫌だア!」

医者「はあ…こんな人が本当にあの“英雄クウガ”なのか…?」

想「失礼な…でも元クウガですよ。今は腹の中で眠ってるみたいだし」

俺は腹を撫でながら言う。生きる代わりに変身能力を失った俺。だがその代わりに平和を手に入れた

〜2週間前〜

ニュースキャスター『未確認生命体第0号の死亡を本日、警視庁が発表しました。未確認生命体事件は、終わりました!』

誰もが待ち望んでいたそれは、突然の冬の寒い日にやってきた。誰もがそれに喜び涙した。俺はその時病院で寝ててわからなかったがリサたち曰く喜びようが異様だったそうなの

〜現在〜

医者「ほら、そんなこと言ってるよ…“彼女”に嫌われますよ?」

医者が意地悪に笑いながら言う。俺はそれに抵抗を辞める

想「げっ…それはめんどくさいな…」

リサ「誰がめんどくさいんだっ

て?」

想「あっ…」

気づけば、後ろにリサがいた。顔こそ素晴らしい笑顔だが目が笑っていない

リサ「ちゃんとリハビリして…はやく遊びに行きたいじゃん…」

怒ったかと思いきや突然顔を赤くして呟く

想「可愛いな…」

医者「ですぬ…」

友希那「そうね…」

リサ「皆で茶化さないでよ!!」

それに俺も医者もリサの隣にいた友希那も頷く。

俺とリサは、1週間前に恋人になった。まあ俺まだ身体が動かなくて病院恋愛になっていたが、リサは毎日学校帰りに友希那と見舞いに来てくれていた。早く退院せねば…

病室へ

リサ「うん！1週間前より体つきが良くなってる！」

満足そうに頷くリサ。だが俺は中々あれだった。所々くすぐったいし…あれがあたるし、わざとやってんのか？と聞きたくなるくらいだ

想「くすぐりたいからもういいか…?」

リサ「あ、ああ！うん！大丈夫だよ！」

ほんと、ベタベタ触ってくる癖にこういふところはすぐしおらしくなる。

想「そうだ、学校始まってからどうだ？」

俺は話題を変えた。リサは1度考える素振りを見せてから話し始めた

リサ「授業がすごい忙しいくらいかなあ…あと学校の人数、だいぶ少なくなつたよ」

想「そうか…、やっぱり亡くなった人いたんだな？」

リサ「うん、仲良い子とか後輩がいたからショックだよ…」

想「守つてやれなくてすまん…」

俺は悔しげにそう言う。俺がもっと強ければ止められたかもしれないあの火の地獄。

リサ「いや！想は何も悪くないよ！充分頑張ったよ！、あとそうだ。つぐみとモカの落ち込みようが凄かった…」

想「そつか…」

俺はリサと付き合った後、2人から告白を受けた。多分2人ともわかっていたのか、俺が断つても笑ってはいた。だが俺はそれを素直に見過ごせなかった。2人の頭を抱き寄せ撫でたのだ。気持ちに答えられなくてすまないと…2人は泣きじやくって俺を叩いた。そんなこともあったな…

リサ「また謝つとかないとね！」

想「ほんとだな…謝りに行く相手は沢山いるし、感謝を伝える人も沢山いる。リサにも感謝してる」

リサ「…!？」

想「あの日、俺と出会ってくれてありがとう」

リサ「…私も！出会ってくれてありがとう！」

木漏れ日の指す病室の中、2人はキスを交わした。

〜2週間後・墓場〜

想「よいしょ…」

俺は杖をつきながら墓場を歩く。今では退院し、通院となっていた。退院したら行きたい場所、その目的地はそろそろだった。

沢山ある墓の中により一層綺麗な黒い墓石、それに刻まれた名前は

リサ「一条悠介さん…」

想「うん、一条さんだよ」

隣にいるリサが手を合わせる。まだ新しいお供え物の横に、俺はまんじゅうが入った箱を置き、手を合わせた

想「一条さん…終わりましたよ。俺、勝ちました。ちゃんと…」

たまにぶつ壊れたエイムをつかう一条さん、俺ともいつのまにか相棒になっていた。

ダグバと戦う前に、バラの女にやられ命を絶った。

リサ「相棒みたいになってたもんね」

想「ああ、そうだな。決して楽な戦いじゃなかったよ…」

リサ「でもちやんと乗り越えて前に進まないと！あの人達も笑ってくれないよ？」

想「そうだな。ありがとうリサ」

俺は雲ひとつない空を見て微笑んだ。

リサ「青空、綺麗だね!」

想「確かにな…」

リサ「今日Roselia練習あるけど来てよー!」マネージャー

“さん!”

想「ヤケクソでやるとは言ったがいざ言われると恥ずかしいな」

俺たちは歩んでいかなければならない。どれだけの犠牲がでたとしても

———この命がある限り

く長野県・九郎ヶ岳く

まだ、全員が蘇っているわけではなかった。2人は取り残されてしまっていた。

??? 「俺はなぜ、蘇ってきてしまったんだ?」

自身の体を見回し、落胆し声を出す。その体は未だ不透明であり、まだ完全には蘇ってはいなかった。そこにもう一人が歩いてくる

??? 「蘇ったのか、ガミオ」

ガミオ「ジイノ…」

6章 戻ってきたはずの日常

page 1 新たな始まり

くライブ会場く

リサ「いやく…緊張するなあ…」

リサはベースを肩にかけながら手を揺らす。それを見た俺は少し緊張をほぐすためにある手段に出た

想「よし、Roseliaの全員ちよいとこつち来い」

友希那「え、ええ…」

想「円陣組むぞ」

リサ「いいねく！」

紗夜「円陣…ですか？」

あこ「あこはやりたーい！」

燐子「私もです…」

想「という訳だ。やるぞ、ほら！肩組んで！」

俺は半場強制的に全員を円に並べ肩を組む。半分がノリノリ、半分が渋々だった俺は気にしない。

想「よし！頑張ってこいお前らッ！」

俺は叫んだ

Roselia「…。」

他バンド「クスクス…」

その場が凍りつく。他バンドはクスクスと笑い。Roseliaは全員真顔。俺は顔を赤くして黙り込んだ

想「大スベリしたわ…死にたい」

俺はそう呟き、その場に蹲った

く夕方く

リサ「今日のライブも大成功じゃない？みんな！」

紗夜「そうですね、お客さんの反応も中々でした。」

友希那「ええ、でも満足してはいけないわ。Roseliaならもつと高みへ行ける。そうでしょう？想」

想「そうだな、まあでも程々に。体調崩すつてのがいちばんダメなやつだからなあ…」

燐子「そう…ですね。」

未確認生命体事件が終わってから3ヶ月。世間は復興作業などに勤しみ、落ち着いた場所もあった。4号は0号討伐後、行方不明と表沙汰はそうなっている。まあ本当は今もこうやってRoseliaマネージャーとして毎日をすごしているわけなのだが

紗夜「確かに、あなたのおかげでRoseliaは急成長しました。ですがあれは別です。」

想「はい、すみません…」

あれ、というのはさっきの円陣の事だろう。まあ確かに、あれは後悔してる。大恥かいた。もうやだ

想「二度としません…」

俺は項垂れながら反省していた。その時だった

男性「うわあああ！」

女性「きゃあああああ！」

Roselia・想「!?!」

俺たちがいる左の方から人の叫び声。しかも多数。俺たちは何事かと走り出し現場へ向かう

だがその現場で待っていたのは、予想外の野郎だった

リサ「未確認…生命体…!?!」

想「なんでだ…!?!全員倒したはずなのに…!」

俺たちは焦燥にかられる。おかしい、終わったはずのやつらがなぜここにいる。

蘭「いやっ…!」

巴「蘭ッ!」

想「っ!」

リサ「想くん!」

俺は襲われかけた蘭をなんとか助ける。左腕が機能しなくなった生活にも慣れたおかげか右腕だけでもたすけられた。

想「あいつらなんで…!」

呟く俺の隣にいた、助け出した女子高生が震えながら言う

蘭「ひまりが…目の前で…」

想「なに…!?!」

過去にも、一般人が未確認生命体に変えられたことはあった。だがその能力を使えるのは俺が知ってる人物ならただ1人

想「まだアイツは…生きていたのか…?」

俺の父親だった。

否、そんなはずは無い。アイツは俺の目の前でたしかに死んだ。その後は火葬したのだ。

ギヤリド「ガアアアッ!」

想「ぐっ…!」

ギヤリドと化してしまったひまりの攻撃を、俺は右手で受止める

想「いつてえ…!」

鉤爪が腕にくい込み、血が滲む。それに泣きたくなるが

想「おっ…らあっ!」

左腕を鞭みたく振り回して叩く。だが威力は雀の涙ほどしかない。相手をさらに刺激したらしく吠えていた

想「リサ達は蘭を連れて隠れてろ」

リサ「分かった…でも想くんは?」

友希那「貴方…」

友希那達 Roselia は心配そうな目で見てきた。分かっている確かに、俺は変身能力を失った

想「ああ、でも警察が来るくらいまで時間稼ぎはする」

俺はそう言い、サムズアップをする。

燐子「ご無事で…」

想「ああ」

それをスイツチに俺はリサ達を後ろに隠れさせる。

ギャリド「ギャアアツ！——ガアアアアツ！」

想「ひまり：っ！」

ひまりの攻撃をただただ避ける。攻撃力がないし相手はひまりだ、傷つけたくはない

想「クソっ：！やっぱ変身できねえ：！」

隙があれば俺は腰に手を当て変身しようとするがやはり出てこない。いつそ奇跡とやらを信じてみたいくらいだ

蘭「無理だよ：！」

後ろで蘭が叫ぶ。蘭は俺の事を警戒してるのかいつも態度が素っ気なかった気がする。つぐみとモ力を振った時はフルスイングでしばかれたくらいだし

想「無理だと分かってても：放っておけないんだよっ！」

俺は肩に掴みかかる——だがすぐ振り落とされる

想「ぐあっ！」

受け身も取れず、地面に転がる。この3ヶ月でなまってしまった。まず普通はやらないか：

ギャリド「ガアアアツ！」

理性を完璧に失っている。それを鎮められるのはクウガのみ、肝心のクウガは変身不可

想「きついな：！?——ああ！」

俺は逆ギレした。とりあえず自身の腰に語りかける(?)

想「おい！アマダム！起きろ！いつまで寝てんだ馬鹿野郎！またお前の力が必要だ！内臓だろうがいくらでもくれてやる。あとでちゃんと元に戻せよ？」

——無反応。嫌になりそう

リサ「あれ何してるんだろ：」

腰に話している彼は傍から見ても、自分たちがみても変な人だった。その不審すぎる動きにはギャリドも警戒していた。ただ話しかけてるだけだけど…

モカ「本当に何してるんだろ〜変身は？」

首を傾げるモカの横にいた蘭が立ち上がり言った

蘭「ふざけないでよ…」

友希那「美竹さん…」

蘭「何遊んでんのさ…こっちは、こっちはひまりが大変なのにつ…！なんで遊んでるのよあいつは！」

叫ぶ蘭の目には涙が浮かんでいた。リサはそれを見ながら言った。分かる、自分が同じ状況だったらああなってるかもしれない

リサ「彼は決して遊んでなんかないよ」

蘭「じゃああれは…」

リサ「言い訳になるかもしれないけど彼は、左腕と変身する力を失ったの…」

A f t e r g l o w 「…!？」

リサ「だから今、彼なりに探してる。戦う方法を…ふざけてるように見えても、あれが彼なんだ」

蘭「…」

想「くそ…！おおつ！————ぐふつ…！」

アツパーを受け、後ろに少し飛び、木に体をぶつけて激痛に喘ぐ
想「ああ…！クソツ…！」

そろそろ本気でまずい、色々とやばい。前とは違って再生能力がないから多分今ので骨いったわ…

ガドラ「ガアアアツ！」

想「っ!？」

本能的な危険を感じ、俺は右に転がる。木を破壊し俺が元いた場所を走り、ギャリドと並ぶ

想「最悪のタイミングだな…」

俺はあつという間に、2 v s 1 となってしまうのだ
想「…クソつ」

その時だった。彼の腹の靈石が…周期的にほんのり淡く輝き、その輝きが少しずつ増していたのであった

蘭「…」

そう、Afterglowにとっては“いつも通り”のはずだった。3ヶ月前に始まった未確認生命体事件。その時から変なあの男がいた。いつもヘラヘラとして、そして世間で言う未確認生命体第4号で、怪しいヤツ感満載なのにみんな惹かれて行って…

正直いつて嫌いだった。

でも未確認生命体事件が終わり、あいつとはもう会わないだろうかと思っていた。それがまさか、突然ひまりが変な粉浴びて未確認生命体になって

またあいつと出会った。だが何かが違う、いつもなら変身して戦はずなのに一向に変身しない、それなのに、ひまりが苦しんでいるのに腰に話しかけてふざけていた。

だがリサさんの言ってる通りなら…

リサ『彼は今、変身能力を失ってるの…』

本当にその通りなら…

今アイツはひまりのために生身を傷つけて戦っている。自分には到底できないことだ

蘭「…」

蘭は、悔しさと情けなさにスカートを握りしめた

想「クソっ…」

俺は転がりまくって今をしのいでいる。だがこの時間稼ぎもいつまで持つか…

頼む、1度だけでもいいから

寿命を削ってでもいいから

俺に、ひまりを助ける力を…

心にそう強く念じた時だった。体の何か、取られては行けないものが吸われる感覚が体を襲う

想「…っ！」

全身に寒気がはしり、冷や汗が流れた。それに体がついていけず一瞬意識を失いかける。――が、俺はギリギリのところでなんとか意識を保ち、熱くなった腹を触る

想「っ！」

火傷しそうな腹の熱さ

力が体にみなぎるあの感覚。俺が待ち望み――同時に恐れたあの力。

もしも、戻ってきてしまっているのなら、もう一度戦えるだろう。その望みにかける

想「はあぁっ！」

俺は右拳にありつただけの力を込め、ガドラを殴りつける。

想「…っ！」

右腕が見覚えのある白色に変わる。それを目に捉えながら俺は右足、左足を使いそれらを白に変える

想「っ！」

動かない左腕を無理矢理ぶつけ、白の姿に変える。最後に顔が変わり、ベルトが浮き出る。

ガドラ「グッ…！」

ガドラを蹴り飛ばし、ギャリドを受け流した彼の姿は、人間では無かった

――白のクウガ

あこ「あゝっ！あれ！リサ姉！」

リサ「想くん…！」

喜ぶあこ、だがリサは素直に喜べなかった。また戦いに戻されるのかと思うと寂しい気持ちはどうしても勝ってしまった。

蘭「…！」

つぐみ「想くん！」

驚く蘭の横で友希那が微笑み、紗夜が頷く

友希那「彼、またやったのね……」

紗夜「本当に彼といると、心臓がもちませんね……」

燐子「……でもまたあれで、戦えますね……！」

想「はああつ！」

俺はガドラを蹴り飛ばす。まだまだ万全とは言い難いが人間で戦うよりかは全然マシだった。

ガドラ「ギヤアアツ！」

想「お前じゃ……ねえつ！」

俺はガドラに捕まり、地面にたたきつけられるがなんとか投げ飛ばす。

ガドラ「グツ……！」

ガドラは1度殴り、蹴り飛ばすと悔しそうにどこかへ走っていった。追っては行きたいが今はそれよりするべきことがある

想「ひまり……！」

ひまりを助け出さなければ

俺はもう忘れてしまったはずの構えをとる。両足を広げ腰を落とす。

懐かしい感覚——右足が熱くなる

想「はああああつ！」

俺は向かってくるギヤリド——ひまりに対して空中で一回転してからキックを浴びせた

——相手の胸部に封印マークが浮かぶ。

ギヤリド「グツ……うう……」

化け物の声が、ひまりの声に戻る。そのまま解けるように化け物の姿が消えていき……

巴「ひまり！」

想「よかった…戻った」

ひまりは俺の腕の中で、すやすやと寝ていた。

モカ「変身しちゃいましたな〜」

モカが珍しく驚いた顔で近寄る

想「そうだな、奇跡だな…」

ひまりを抱っこしながら立ち上がる。正直びっくりしている。まさか本当に変身できるとは…

想「おっ…？」

つぐみ「大丈夫!？」

俺は少しふらつき、よろめいた。視界が少しグラツと揺れ霞む。だがそれも一瞬だった。

想「あ、ああ…大丈夫だ。」

俺は少しだるくなった体を何とか奮い立たせひまりの家へと向かった

↓次の日・羽丘女子学園屋上↓

想「…左腕、治ってるな」

俺は羽丘女子学園唯一の男子高校生として今はすごしている。花咲川女子学園を退学になって、戦いが終わったあと羽丘女子学園が拾ってくれた。校長を含め全先生がいい人で忙しいが充実した日々を送っている。

今は昼休み、昨日の未確認生命体事件で世間はざわつき、同時に4号生存が確認され何故か賑わっていた。羽丘女子学園でもその話題はちらほら聞く

モカ「ふんふーん！」

巴「やっぱ屋上だよな！」

蘭「そうだね—————あ」

つぐみ「あっ…」

想「おっ」

一瞬の沈黙。気ますぐなり俺がダツシユするまで時間はかからなかった。だがすぐにそれも終わる

ひまり「あひゃ?」

想「あっ…」

ひまりとぶつかり、吹き飛ぶ。俺は何とかひまりの被害を避けるべく自分の体を下敷きにして倒れる

想「ぐふっ…」

ひまり「え?、あ!大丈夫!」

ひまりがあたふたしながら俺が無事かと聞いてくる。体は無事なのだが…

想「ひまりさん?あの…:はい」

ひまり「:あ」

そう、ひまりが意外に気にしている“あれ”が俺の頭を覆いかぶさっていた

ひまり「ごめんなさいっ!」

モカ「おく、これがラツキースケベ…もご」

クスクスと笑うモカの横にいた巴が口を塞ぐ

巴「:言っちゃいけない。」

その時、最悪のタイミングで1番会っては行けない人物と会った

リサ「想くくんっ!…:ねえ」

想「あっ」

リサの笑顔が一瞬で凍る。

友希那「:これは一体」

ひまり「あ…」

想「ちよっ…:ちよつと待っててくださいっ!まって!助けてッ!アアアアアアツ…」

俺の悲痛な叫びは、空に木霊した。

ガミオ「この世界にも…クウガはいるのか」
それにガドラが頷く。

ガミオ「今はまだ完全に力を出せんが、それも時間の問題だ。待つていろ」

ジイノ「今の奴は白だ。倒せるんじゃないのか？」

ガミオ「ふん、それだとつまらんだろ。」

ジイノ「そうかい、なら待つてやるよ」

（circle）

想「なあ、すまんよりサ〜！」

リサ（ぷいっ…）

紗夜「一体何があつたんですか…」

ことは数時間前、ひまりのあれに覆いかぶさっていた俺は、本当に最悪のタイミングでやって来たりサに見られ、こうなっている。

想「わざとじゃないんだ！それは信じてくれ！な！」

故意的では無い、事故なのだ。と話してもふいつと向かれる。困ったものだ…

だが俺は諦めずにひたすら無罪を訴え続ける

リサ「ほんと？」

想「ほんと！」

俺の必死さが伝わったのか分からないがとりあえずひと段落してくれたらしい。

リサ「よかつた〜…！」

リサが抱きついてくる。唐突のことでとりあえず受け止める

友希那「2人とも…練習はいつやるのかしら？」

だがそんな雰囲気も、友希那によって壊された。

マネージャーとはいえ、俺は何を練習しろ〜だの、あーだのこーだの言う気はさらさら無い。いつも通り練習して何が良くて何がダメ

か、それを言う。本番は緊張をほぐすために様々なことをするのだ
想「56…!57っ…!」

Roselia「…。」

現に俺は今、練習用のステージの端で腕立て伏せをしているくらいだから

なぜ腕立て伏せをしているのか、それは未確認生命体に対して更に強くなろうと俺は思っているからだ。前の戦いで2対1になった時、白のクウガでは少々きつかった。

だが他の色になろうとしてもかつての体力が無いせいか、全然なれなかった。

ちなみに移動手段であるビートチェイサーはもう活躍がないだろうと思いだいぶ前に黒服さんに回収してもらった

想（また必要かもだし…あるならまた借りよう…!）

リサ「ちよーつと!」

想「ん…? ——— あったあ!」

俺は考え事に熱中しすぎたせいでリサの呼び声に気づけなかったらしい。そのリサに

——— あこのドラムスティックで叩かれたのだ

想「いてえ…」

リサ「呼んでも返事しない想くんが悪い」

俺は謝りながら立ち上がる。体がそれなりに温まっており部屋が暑く感じる

想「んで…何用だ…」

黒服「八意様」

懐かしいと言ったら懐かしいこの声。俺はその声がした方向へ振り向き、名前を呼ぶ

想「黒服さん…!」

黒服「また変身、出来るようになったんですね?」

笑顔ではあるが俺は違和感を感じる。こう、なんというか少し悲しそうな…そんな印象があった

想「はい、前みたいにごう——めちやくちや強い！みたいな感じではないですけど…」

黒服「なるほど…？」

燐子「少し…伝わりにくいですね…」

想「語彙力が足りない…」

黒服「本題を言ってもよろしいでしょうか？」

想「あつ、すみません…リサ達はちよつと練習しててくれ。俺は黒服さんと話すから」

友希那「分かったわ。じゃあ後で」

想「ああ」

〈circle廊下〉

想「話つてのは…未確認生命体の事ですか？」

黒服「はい、まずひとつ。ビートチエイサーをcircleの駐輪場に置いておきました。」

想「まじっすか…！」

黒服「そして2つ目、この写真を」

大きくプリントされた紙を渡され俺は目を通す。

想「っ！——これ…」

片方は、牛のような見た目をした。どちらかと言えばバベルに似ている。だが武器は刺叉を持ち、ザインのような構えをしていた。

黒服「先日未確認生命体事件の時に路地裏で撮影されたものです。こいつが人を未確認に変え、それを見ていたのではと我々は考えています」

想「なるほど…」

俺は写真を何回も何回も繰り返し見通す。言っちゃ悪いがこんな見た目で未確認生命体を操れそんな脳はなさそうに見える。

黒服「何か…？」

想「いや、なんでもありません——わかりました。俺もそれで動いていこうと思ってます。」

黒服「わかりました。…そういえば今の生活はどうですか？」

想「居心地は良いし先生たちもいい人だし。良かったとおもってます」

す」

俺はそう答える。

黒服「そうですか…たまには弦巻邸へ」

想「…?」

黒服「こころお嬢様が寂しがっておられます」

なんだかあいつが寂しがるのは少し予想外だった。

想「…わかりました。また行きます」

俺はそう答えた。黒服さんはそれに笑顔で頷き、その場を後にする。

想（本当にお世話になりっぱなしだな…、というか黒服さんは寝てるのかな?）

俺はそう思いながら、Roseliaの元へ帰った

〜夜の街〜

マンションの屋上に座り、退屈そうに足を振る。

ガミオ「クウガは厄介だな…八意想…」

ジイノ「なあ!次俺やつてもいいか!」

ガミオが退屈そうにしてる反面、ジイノはすごく上機嫌だった。

ガミオ「ああ、そうだな。もうゲゲルのルールも何も無い。好きなだけ殺せ。奪え」

ジイノ「りょーかいっ!」

ジイノはそう叫ぶと、とりあえず〃飛び降りた〃

飛び降りた横に女がいた

女性「え?」

ジイノ「おらっ!」

ジイノは刺叉を突き刺し、女性を掴む。そして左手で…

首を折った。

男「う、うわあああああつ!」

女「未確認生命体…!?」

ジイノ「さあ、始めようか…」

夜の街に、刺叉を振り回し、悲鳴が響いた

くとある公園く

リサ「屋台の焼き芋おいひく！」

あこ「そうだね！」

Roseliaと全員で帰宅していた時だった。公園にたまたま石焼き芋の屋台という珍しいものがあり、俺たちはよって食べていた

紗夜「悪くありませんね！」

友希那「はふっ！」

燐子「友希那さんの…熱そうですね…」

頬張る友希那の隣にあったビートチェイサーが、ピーという無線の音を出した

想「なんだ？俺今焼き芋食ってただけど…」

その無線の意味を忘れた俺は少し愚痴りながら話し始める

想「はい、俺です」

杉田『おお…！通じてくれたな！』

想「杉田さん？」

久しぶりに聞くその声。あの日以来一度も話せていなかった杉田さんだとすぐ分かった。だがその声は妙に緊迫を催しており、所々サイレン音が聞こえる

想「どうかしましたか！」

俺は久しぶりの無線に戸惑うが、すぐに思い出す。

未確認生命体事件が起きたんだと

杉田『あいつ…今までとは違って無差別に人を殺してる』

悔しそうな声が聞こえた。

想「え…!？」

今までの奴らは、何かルールを儲けそのルールの中でやっていた。1度法則性を掴めばこちらが対策して未然に防ぐのだが…

杉田『ああ…しかも今の死者は450人…！警官が向かってるが車

「ごとなぎ倒される…」

想「——な!？」

俺はその数の多さに驚愕した。いくらなんでも多すぎる…ダグバを除けばTOP3くらいには入りそうだ…

杉田『今、遺体を運んだりしているが…そっちは?』

想「…」

俺はリサ達の方を見る。全員が笑顔で焼き芋を頬張っていた。ホントならもうちよつとここにいたい。まだ食いかけの焼き芋も手にある。

想「わかりました…!場所はどこですか?」

杉田『忙しそうなのに…すまん。場所は…』

想「…。すぐ行きます!」

杉田さんから場所を伝えられ、俺はすぐさまリサたちの横へ走る
リサ「どうしたの?」

本来ならちゃんと伝えておけばいいのだろう。だが下手な心配はかけたくないもし仮に伝えたとしても追いかけてくるのは目にわかっていた。もうすぐRoseliaはFWFの予選ライブがある。下手な心配をかけさせて練習に影響がでるとマネージャーとして失格だ

想「ちよつと用事が出来た、先帰つててくれ」

リサ「え?——あ、うん。」

少し…いや大体から疑いの眼差しを向けられながらビートチェイサーにまたがる。そして久しぶりにアクセルを回し一気に加速したのだった

あこ「…?——急いでたね、なんでだろ」

走り去ったあとを見ながらあこが話す

燐子「急用…でしょうか?」

紗夜「色々と不審ですね…」

友希那「——これは…!」

スマホを触っていた友希那が突然こちらに画面を向けてくる。一瞬わからずにいたがすぐに彼が行った理由が分かった

紗夜「未確認生命体事件…！」

リサ「じゃあ想くん…!？」

友希那「多分現場に言ったんでしょうね」

燐子「黙ってたのは…私たちに下手な心配をかけさせないため…？」

リサ「わかった！よくわかった！じゃあアタシたちその場に行く！」

その気遣いが気に入らないのか頬を膨らませたりサが口を開く。

紗夜「自ら危険に突っ込む必要は…」

横で止めようとする紗夜を逆に止めたりサ

リサ「いいの！マナージャーを見るのも私達の仕事です！」

友希那「まあ…そうなのかしら？」

ズケズケと歩き始めるリサに続き、Roselia達は現場へ歩き始めた

〈現場〉

想「なんだこれ…」

俺は現場に着き、ヘルメットを上げて光景を見た瞬間、そんな一言を発した。あっちこっちに車が追突し、沢山の遺体が散らばっていた。

杉田「おい…！八意くん…！」

拳銃を持った杉田さんが俺を見るなり近づいてくる。だがその杉田さんは頭と肩から血を流し、歩みも心無しか危なっかしい

想「大丈夫ですか…!？」

俺の近くに来るなり倒れかける杉田さんを支え、とりあえず近くに座らせる

想「一体何があつたんですか…！」

杉田「ああ…あいつの攻撃がなかなか厄介でな…！———八意くん後ろ！」

想「…！」

俺は杉田さんを抱えながら右に転がり避ける。後ろから飛んでき

た何かは俺たちがいた近くのパトカーに刺さった

想「刺叉：!？」

それは長さ2〜3メートル程度の柄に大きなU字型の金具がついた。だがその先端の金具が異様に尖った刺叉だった。

ジイノ「避けられたか？」

想「：：！」

その飛んできた方から聞こえた声に俺と杉田さんは身を震わせた。

杉田「あいつが：俺の言っていた未確認だ：」

俺は思考を戦闘モードに切り替え、杉田さんに話す

想「杉田さん：わかりました。あとは俺に任せてください」

杉田「頼む：」

安心したのか、杉田さんは意識を失った。俺は優しく地面に寝かせ、相手を見る

ジイノ「やるか？人間：」

想「：：！」

俺は手をかざし、腹からベルトを出す

想（まただ：：！）

また体の何かが奪い取られる感触。

ジイノ「まさか：：！」

何かを察したジイノは作り出した刺叉を手に俺に突進してくる。

想「：っ！」

倒れ込んだ俺を刺そうとした刺叉を手で掴む。そこが白の腕に変わる。

想「はあ：：！」

ジイノ「っ！」

がら空きの腹部を両足で蹴飛ばし、両足が白くなったことを確認しながら立ち上がる。

想「おらあ！」

白くなった腕で相手を殴り付け、体と頭が白くなり、俺は白のクウガへ姿を変えた

ジイノ「ふっ…白か——くだらんッ！」

そういう俺を刺叉で殴り付け蹴り飛ばす。

想「ごはアツ！」

俺は衝撃に揉まれながら後ろへ吹き飛び、壁に体をうちつけ地面に横たわる

想「くっ…——！」

ジイノ「オラアア！」

お構いなく突っ込んできた相手をなんとか躲す。後ろで刺叉が何かを壊した音がした。壁を突き刺し無理やり破壊したのだ。

想「どんな馬鹿力だよ…！」

ジイノ「すばしっこいな…！」

度重なるラツシユ攻撃をギリギリでかわす。時に地面に穴が空き、時に壁が壊れ、時に木が折れる。

さらに周りが地獄絵図になるのにも時間はかからなかった

想「はあ…はあ…」

ジイノ「おいおい…もう終わりかよ。それでも本当にあのゴの三強と究極の闇を葬ったクウガか？」

だが体力の限界は、俺が先に来たようだった。体から血が流れていくのを感じながら俺は立ち上がる

想（現状白のクウガにしかねないのが痛手だ…！というか何故変身できない…！）

俺は腰に手をかざしベルトの反応を見ようとするが

全然変わらなかった。

ジイノ「はあ…：終わりにするか…：」

失意の色を滲ませながら眩く相手を視界に捕える。

ジイノ「…ん？———なんだあの女たちは…：」

俺はトドメを刺さなかったジイノが見た方面を見る。次に襲ったのは様々な複雑な感情だった。

想「な…：!？」

リサ「はあ…：はあ…：」

紗夜「…：！いましたよ…：！今井さん！」

燐子・友希那「…：。」「」

あこ「友希那さん?!りんりん!？」

想「ぼつか…：なんで来たお前ら！」

叫ぶ俺、だがリサは唇を出しながら言った

リサ「無理して戦うマネージャーがいるから見に来たんですうー
！」

ジイノ「ほう…：まずはあいつらからだ！」

驚く俺の横にいたジイノが刺叉を手に走り出す。

想「!？」———やめろおおお！」

リサ「えっ…：!？」

想「ぐっ…：!？」

ジイノ「ウアアア！」

危うくやられかけたリサをかばい、俺の左肩に刺叉が刺さり、そのままに投げられる。俺は近くの地面にたたきつけられ吐血した。

想「うわああっ！———げほっ…：!？」

ジイノ「貴様…：!？」

想（まずい…：クソ…：俺にもつと力を…：）

ジイノ「先にこいつを潰すか…：」

そう言いながら1度刺叉を俺を離し、もう一度突き立てようとした

あこ「ああ…：!？」

くガシッ…

ジイノ「…！」

その刺叉を俺は両手で掴み、抵抗する。

ジイノ「貴様アア！」

苛立った相手がぶつきらぼうに叫びさらにその力を強める。その力におし潰れそうになった時…

想「うあああつ！」

——その時だった。霊石が赤く光る

想「おおおっ！」

ジイノ「…なんだ!？」

驚くジイノの腹部を蹴り飛ばし、後ろに転がり距離をとる

想「ふっ…！」

俺は腰のベルトに手を当て、1度深く呼吸する。

想「超変身！」

俺は久しぶりにその単語を叫び、腰についたスイッチを稼働させる。命令を受けた霊石がその姿を具現化させて行く

——白い箇所が赤へ変わる。

紗夜「赤の…クウガ…！」

リサ「…！」

ジイノ「ふっ…、それでこそ俺の獲物だ！」

そういうと刺叉を振り回し柄を地面にたたきつけ、こう高らかと叫んだ

ジイノ「俺は当たって砕く！ゴ・ジイノ・ダだ！」

想「お前ら、危ないから下がってる…」

明らかに雰囲気が変わったのを肌で感じながらリサ達を後ろに俺は立つ。

リサ「う、うん…」

想「じゃあ俺も名乗るか…」

かつてcircleでやって大滑りした名乗りを…だが少し今回は違う

想「俺はクウガ…：戦士クウガだ！」

俺もジイノに負けず劣らずそう言い放った。

あこ「かつこいいっ！りんりんかつこいい！」

友希那「今のは様になっていたわね」

そういうRoseliaを後ろに、戦闘は始まった

ジイノ「行くぞ！クウガ！」

刺叉を振り回し、叫ぶ。

想「来いや！ジイノ！」

俺は拳を握りしめて叫んだ。ジイノは低く構えて一気に突進をましてくる。

想「っ！」

俺は突っ込んできたジイノを何とか力で押しとどめ、顔めがけ膝蹴りする。

ジイノ「…っ！」

顔を上げて怯んだ相手の腹と頭に連撃を入れ、刺叉を回転しながら避け――片膝立ちになった俺はチョップと肘打ちを腹部に

叩き込んだ。久しぶりにしては驚異的なラツシュ。俺さえ驚いた

ジイノ「やるなツ…！」

腹部を抑えながら後ずさったジイノが言う。俺は相手の出方を見ながら拳を握る。

ジイノ「はあっ！」

想「…っ！――な!?!」

相手が突進してくると思いきやまさかのフェイント攻撃。刺叉を投げつける。

投げられた刺叉は俺の左肩に嵌りそのまま後ろへ吹き飛ばされ地面に叩きつけらる。

想「ごあつ…！――抜けねえ…！」

どんな馬鹿力をしているのか、俺の左肩を固定した刺叉はそのままコンクリートを貫いていた。決して痛くはないが固定され動けない。

ジイノ「刺叉にはこんな使い方もあるんだよ」

そう言いながら近くに落ちているコンクリートの欠片を拾い――

それを刺叉に変えた。

想「…！」

ジイノ「トドメだ…中々いい戦いだっただぞ」

刺叉を俺の首元を狙い構える。俺は死を覚悟した。

<ドオンツ!

想「:!?」

Roselia「!?」

拳銃にしては重々しい音が響いた。

ジイノ「ぐっ…!ううっ…!」

ジイノが突如として苦しみ始める。刺叉を地面に落とし、足を震わせ、腕を必死に抑えていた

想「:!!」

前に見た事がある反応。俺はまさかと思ひ銃弾の方向を見る。

桜井「:!!」

その場には、桜井さんがいた。ライフルを持ち俺と目が合うと頼もしく頷いてくれた。つまりあれ

――神経断裂弾だ。

想「っ…」

一瞬だが一条さんの影と重なり、様々な感情が押し寄せてくる。

だがそれをすぐに抑える。まだ俺にはやるべきことがある――

想「うおおおおっ!!」

雄叫びを上げ刺叉を引き抜く。そのままバク転しながら立ち上がりジイノとの距離をとる。

想「っ!」

腰を落とし、両腕を開いて腰を落とした構えを取る。足に確かな熱さが灯る。

敵に向かって走り出す。右足が地面に突くたびに、足の裏から炎が上がる。

ジイノ「:!!」

想「ふっ…!」

タイミングを見計いジャンプ
「おりゃあああああああっ！」

と叫びつつジイノの胸部を蹴り飛ばす。

ジイノ「うおああああっ！」

ジイノは後ろへ吹き飛び、呻く。

想「…。」

俺は膝について着地し、ジイノを見る。ジイノの胸部からはあの紋章が浮かび上がっていた。

ジイノ「俺は…まだだ…」

だが紋章からひび割れが続き、それはやがてベルトに達し……

ジイノ「クウガアアアッ！」

爆発を起こし四肢が吹き飛ぶ。俺はそれをこの目で見届けた。

戦いが終わり少しだけ杉田さんたちと話した。ほんの3分の会話だったが終わった時の杉田さんと桜井さんの顔は笑顔だった。そして今、俺はRoseliaの前に立っていた

なぜあんな危険を顧みずここまで来たことについてだ

想「お前らなんで来たんだよ…」

リサ「心配だったから！ね、紗夜！」

リサが隣にいる紗夜を揺らす。紗夜は驚いてから顔を赤くし俺と目を逸らした

紗夜「い、いえ！別に私は……」

想「それもそれで傷つくなあ…俺」

紗夜「……っ！…無事でよかったです」

顔を赤くし、今にも煙が出そうな紗夜がさういう。

友希那「リサが私たちを連れてきたのよ？ねえ燐子」

燐子「はい…」

想「おー、そうかそうかー」

リサ「えっ！みんなアタシを売ってない!?ね！違うよね！紗夜！あこ！」

あこ「リサ姉だよ？」

紗夜「今井さんですね」

想「…って、言ってるがどうする？」

俺は再びリサにそう言うのと、リサはしゅんと丸くなりこう言った

リサ「…ごめんなさい」

想「素直でよろしい。というわけで帰るか…」

紗夜「キズは大丈夫なのですか…？」

リサ「えっキズ!?どこどこ!?ほら早く治さないと…」

想「そんな心配するな…唾つけときや治る」

リサ「そういう訳にはいかないよ!!」

想「あっ！…用事を思い出し…」

友希那「逃がさないわよ？」

想「圧を感じる…」

木くベキイツ

恐るべし幼なじみ…。ここはビートトチェイサーに乗り一気に逃げ

ようとするが…

想「ハンドルないやん…」

ところがどっこい、ハンドルはあこに奪われていた。逃げ場無し。

はい終わりイ！

想「助けてくれええっ！」

俺の叫びは、虚しく響き渡った。

ガミオ「ジイノがやられたか…」

椅子に座り、外を見ていたガミオはふとそう呟いた。その姿は青年のように見えた。

別にあいつはどうでもよかったし悲しみといった感情もわからない。

元々グロンギ族に感情というものはない。それらがあるのは人間に汚染された裏切り者か…

ガミオ「残るグロンギは俺だけ…」

ガタンと立ち上がりそう告げる。

ガミオ「究極の闇を始めよう！」

自身の能力で全人類をグロンギ化させる “究極の闇” をもたらす
ために…ガミオは動き出した

く羽丘女子学園・屋上

昼休みく

想「…」

俺は屋上でぼーっとフェンスに肘を置いていた。今までの記憶が頭の中で走っていく

クウガになったこと

沢山のグロンギ…人を殺したこと

父親を殺したこと

最高の相棒を失ったこと

究極の闇を止める為に人であることをやめ、凄まじき戦士になり殺したこと

殆どが殺したことだったが、反対にいいことも沢山あった。

リサ達に出会ったこと

タマに出会ったこと

沢山の出会いがあり、別れがあった。だが俺は後悔したりしない。たとえどれだけ困難があろうとも…この命がある限り進まなければならぬ

それらを考えていたせいで、俺は横で俺を呼ぶモカに気づかなかった

モカ「おーい」

想「おわっ!?!」

俺は大きくモカと距離をとる。しばらくし頭が働き始めてからは現状を理解した

想「お前ら…来てたのか…」

つぐみ「あはは…だいぶ前からいたよ…?」

羽丘女子学園の屋上は前にも言ったが不良たちが独占していると聞いて、多少身構えしていたのだが…

想（こいつらのことか…まあ確かに、蘭が不良っぽいな…）

蘭「…何?」

想「いや、なんでもない。」

どうやら本当に蘭とは打ち解けられないみたい。めちやくちや睨みつけてくるもん…

ひまり「らくん！いつまでもそんなんじや話せないぞー！」

蘭「別にいいよ…八意と話す必要ないし…」

巴「ごめんな、八意。普段はこんな奴じゃないんだけど…」

想「いやいや、一応俺は未確認生命体。いつお前らに危害を及ぼすか分からんからな…」

蘭「っ！——やっぱり…！」

モカ「いい加減認めたら〜？蘭」

蘭「なによモカ」

俺を殴ろうとした蘭をモカは止めた。

モカ「想くんは悪い人じゃないよ。そんなの今まで見てきたなら分かるでしょ？」

蘭「…っ！」

モカにしては珍しい真面目な声を聞く。空気が一気に冷たくなった。

ひまり「モカ…！」

モカ「意地っ張り。わからず屋。」

蘭「っ！」

かわいた音が屋上に響いた。見れば蘭がモカをしばいていた。

巴「おい蘭！」

蘭「ほつといてよ…！」

咎めるために止めようとした巴を突き飛ばし下へ降りる蘭。モカはそれを黙って見ていた

モカ「…」

やけに寂しそうに見える背中。俺は1度手を差し伸べるのを躊躇いかけるが…

想「モカ…大丈夫か？」

俺はモカに近寄り話しかける。モカは1度俺を見てから笑った
モカ「しばかれると、意外と痛いね〜…」

左頬を擦りながらモカが言う。

つぐみ「大丈夫：!？」

巴「あんにやろう：!！」

拳を鳴らしながら巴が怒りを露わにする。

想「巴、やめろ」

俺は今にも殴りに行きそうな巴を手で制し、俺は話す。

想「元はと言えば俺の責任だ。俺に任せてくれないか」

つぐみ「想くん：」

巴「：わかった」

想「モカ、一応それ冷やしに行つとけ」

モカ「うん：わかった」

俺はそれを最後に、扉を開け階段を降りた。

蘭「私：バカみたい：」

想「蘭！蘭！」

俺は叫びながら廊下を走る。

日菜「どうしたの〜？」

少しばかり眠たそうな声が後ろからして俺は振り返る。日菜だっ

た。多方向回りでもしてるのだろう

想「日菜！蘭見なかったか？」

日菜「見てないなく、でもどうして？」

想「事情はあとで説明する：すまん」

俺はそう言い、その場を後にした。

日菜「あーあ、言っちゃった：」

く放課後く

想「どこ行つたんだよ…！蘭ッ！」

俺はビートチエイサーを走らせながら眩く。ちなみに服装は制服。午後の授業は全部サボった。今頃つぐみ達は大慌てだろう。でも俺だけじゃない

想「お前まで授業をサボって逃げる必要は無いだろうがよ…！」
段々と怒りが込み上げてきた。あいつ見つけたら泣くまでどやす。しばらくなら俺にしろよ。幼なじみしばいてどーすんだよ。モカめちやくちや泣きそうだったよ。しばらくなら俺をしばけよ何回だつてしばかれてやる。

想「あの意地っ張りが…！」

俺は歯噛みしながらビートチエイサーを飛ばした

蘭「…。」

嫌になった。私は全てを失つたんだ。幼なじみも、何もかも…

チンピラ1「おねーさん1人？危ないでしょこんな所に1人じゃ」
3人に囲まれた。見た目からしてまともなやつじゃないのは分かっていた。

チンピラ2「俺達と遊ぼうぜ！」

蘭「…好きにすれば」

チンピラ3「面白いやつだ！来いッ！」

そうして蘭は、人気のない場所へ連れていかれた。

想「ちっ…！」

あれから15分。俺はただ阿呆みたいに探し回った。結論から言えば見つからん。あいつ隠れんぼ上手いタイプの人間だこんちきしょう

想「そろそろ俺も限界だわ。」

そう言いながらプラグをビートチェイサーに突き刺し、もう片方をスマホに繋げる。1度蘭に電話をかける

蘭「…。」

スマホが鳴っていた。だが取る気にもなれなかったし取る気はなかった。

男「なかなかいい女じゃん」

アルコールやたばこの匂いが充満したいかにもな部屋に、気づけば座らされていた。自分が何をされるか大体検討は着いている

チンピラ2「久しぶりですね…」

男「やれたらいいんだよ」

蘭（あ…やっぱりそうか。私今から…）

想「出ねえよな！知ってたよ！！！！」

俺はそう叫んだ。だが蘭、電話を取らなかったことに後悔しろ。

俺が今やってるのは逆探知ってやつ。

これで蘭の居場所が分かるはずだ。

想「おっ、でたでた…ってどこだよ…」

意味のわからん廃墟が映し出された。確かつぐみの時にもこんな

ことが…

想「まずいぞ…！これ…！」

俺は目的地に走り始めた

蘭「…。」

今私はベッドの上にいる。隣にいた男は笑った。

男「大人しいな。まあそのほうがやりやすいんだがな」
ブレザーを脱がされ、ボタンを外されていく。

もうこのまま、何もかも忘れたい。

??? 『忘れさせるかよバーカ』

男・蘭「!?!」

今1番聞きたくない声が聞こえたことに驚く。周りの男が約30人がいつせいに上を見る。

チンピラ1・2「うぎゃあああああつ！」

2人が床に落ちてピクリともしなくなる

チンピラ3「うげえっ！」

倒れたチンピラを踏みこちらを見下ろす人がひとりいた。1番会いたくなかった。あれだけのことをしたのに…

蘭「なんで来たの…！」

その人物は不敵に笑い、右手に持っていた警棒状態のビートアクセラーを肩に乗せて言った。

想「隠れんぼは終わりだ…美竹蘭…！」

最後に凶暴な笑みを浮かべ、その場から飛び降りた。

想「…」

俺は辺りを見回す。あと一歩遅ければ不味いことになっていたかもしれないな…

数は30：俺は1人

——ちようどいいハンデだ↑言ってみただけ

チンピラ「おらアアツ！」

想「…っ！」

俺は殴りかかってきた男の腹を左手で殴り、峰打ちでビートアクセラーを当てる。当てられた男は倒れ、気絶した

それが火種と化した

「死ねやアアツ！」「このガキイ！」

想「…」

ところがどっこい。⑨！

俺が余裕発言を言ってみたらいつも最悪展開33—4！

相手は29人、全員それぞれスタンガンやナイフを持っていた。俺が同時に相手出来るのは最大5人まで、それ以上はちよつと…

クウガになれば出来るがその力を使うの未確認生命体が出た時だけと自信に誓っている

想「やってるわボケエツ！」

俺はヤケクソに叫び、敵陣に突っ込んで行った。

蘭「…。」

なんでなのか、なんでいつもそうなのか。つぐみがさらわれた時だってボロボロで帰ってきた。いつも戦いになると自分より周りを優先して、どれだけボロボロになっても笑顔でいて。まるで漫画の世

界にいるようなみんなの英雄。それが嫌いだった。どうせ表は愛想振りまいてるだけで裏でなにか企んでる。そう考えてた。

だが今はどうだ、わかるはずのない場所までわざわざ来て、武器を持った人達と戦ってる。私を助けようとして…

蘭「本当…馬鹿だ…」

想「危ねえ…！おわっ！」

ドラム缶を投げ捨て、ビートアクセラーを振り回す。そこら辺に落ちてた箱を投げ捨て、またビートアクセラーを振り回す。まるで作業ゲーだった。

想「はあ…はあ…」

一体どれくらいの間がたったのだろうか。いつの間にかチンピラ共は全員倒れ、残すのは男だけとなった。

男「な、なんなんだお前は…！」

すっかり腰が抜けた相手は、俺を指さしながら叫んだ。俺はそいつに歩み寄り、話しかけようとした時だった。

窓ガラスが全て砕け散った。

想・蘭・男「!?」

想「まずい…！」

俺は蘭の前に立った。最悪蘭だけでも…

だが窓ガラスはこちらまで吹き飛ばすことは無かった。そこから歩いてくる化け物が1人…

想「あいつは…！」

俺はその化け物を見て、思わず声を出した。

ガミオ「クウガは…貴様だな？」

虎のような…ガドラのような見た目をした相手…だが風格が圧倒的に違う。

蘭「…！」

蘭が俺のブレザーを掴む。俺は少しでも安らげるようにブレザーを蘭に渡した。

蘭「これ…」

想「とりあえず羽織つとけ、寒いだろ？」

蘭「：ありがとう」

蘭は俺のブレザーを着る。少しダボツとした見た目だが大丈夫だろう。

想「なんでそれを…」

それを言おうとした時だった。

ガミオ「：！」

相手の体が膨らみ、そして…

想「蘭俺に隠れる!!」——変身ツ！」

蘭「!？」

赤のクウガになった俺は咄嗟に蘭を庇い、口と鼻を手で覆った。その直後…

——部屋を黒い煙が覆った。

想（なんだこれ…！何も見えねえ…！）

蘭（何があつたの!?!）

男「ぎやああああああつ！」

蘭・想「!?!？」

さつきまで蘭を襲おうとしていた男の叫び声があった。俺達の疑問が増える中、煙は少しずつ晴れていく…

男「う…ぐあ…お…」

煙が晴れて、一番最初に俺達が見たものはあの男が苦しみ悶える姿だった。それをあの化け物は見下ろしていた

ガミオ「ほう…今のを耐えるか」

想「アイツに何しやがった…！」

込み上げる恐怖を必死に飲み込み、俺は言う。それに相手はなんと答えたか…

ガミオ「今にわかる…」

想「は…?」

男「ウ…グア…」

段々と声が人間から離れていく。最初に変化が訪れたのは腕だった。白い腕は人間離れしたカラーへ変わり、服を裂きながらいくらか太くなる。

蘭「ひっ…」

想「…!」

あつという間に相手は人間から未確認生命体が変わっていた。

ザイン「ウガアアアツ!」

相手は1度叫び、構えていた。もうすでに理性は残っていないさそうだった。

想「なんだと!?!お前…これはどうゆう事だ!」

俺は意味の分からないことに襲われ混乱していた。なぜ人間がグロンギになったのか

ガミオ「これが俺の能力だ。対象を破壊し、グロンギへと変える…」

想「:!?」

あの煙を吸った人間はグロンギとなる。いや————さて————今こいつはなんと言った?

破壊?今こいつは破壊と、そう言った。ならおかしい、仮にも今までのグロンギに変わったのがあいつの仕業だとしたら…

想「じゃあ今までの…?」

ひまり達がグロンギになった時、俺は確かにそのグロンギに必殺を叩き込んでいた。だがあの時はひまり達は消えることなく普通にしていた。

ガミオ「あれも俺がやった。ただの試しだ。復活してからすぐだったから…」

想「なんだと…!?!」

あの事件のせいでひまりはみんなを傷つけそうになった。ひまり自身もそれを酷く後悔しているが幸い誰も気にする人物はいなかった。だがこいつは今なんと言った。試し?そんな事のために…

俺の頭にひとつの考えが浮かぶ。

やはりこいつらグロンギとは分かり合えない

俺が悔しさと怒りに拳を震わせていると、同じように血が滲むぐらい拳を握りしめていた蘭が途切れ途切れに口を開く

蘭「：そんなことでひまりを：！」

ガミオ「人間が俺に勝てるわけないだろう？」

怒る蘭に毒を垂らすようなガミオの言葉。俺でさえとうとう限界が来た。

想「てめええええッ！」

俺はそこから一気に走り出し距離を詰め

ガミオ「行け」

ザイン「ガアララッ！」

今まで何もせずに突っ立っていたザインが、あいつが命令した瞬間、俺に殴りかかった

想「っ!？」

俺は何とか両腕をつかみ、拮抗状態へと持ち込む

まさか操れるとまで言うのか。こんな奴が街に出たりなんかしたら…

ここで倒さなければ行けない。だが俺は蘭を守りながらの戦いになる。俺はそこまで器用では無いため、やはり撮る最善手は1つ

俺はザインを蹴り飛ばし、距離をとる。

想「超変身！」

俺は青のクウガに姿を変えて蘭を抱き抱えた。

蘭「!？」

想「お前だけでも外へ逃がす。黒服さん達に連絡しろ。ビートチェイサーが外にある」

蘭「え？それじゃあんたは…？」

まさかこの短時間で俺の事を心配してくれるまで上がるとは…俺はそれに嬉しく思い、微笑む

想「多分今の俺じゃ時間稼ぎが精一杯だ…でも戦う」

蘭「無茶だよ…」

そう言つて止めようとする蘭を制す

想「無茶でもやるしかないんだ…」

俺はビートチェイサーに蘭を乗せて、ハンドルをしつかり握らせる。

想（久しぶりのゴウラム…!）

俺がそう念じると、羽音が聞こえた。

ゴウラム『ご主人様、お久しぶりです』

想「久しぶりだな、早速で悪いんだが…蘭をあのでかい家に運んでやってくれ」

ゴウラム『了解しました』

俺たちの目の前で、ゴウラムがビートチェイサーと合体する。

想「頑張つて運転してくれ、半分オートだから」

そう言い想は蘭に背中を向けた

蘭「ねえちよつと待って…!」

そこまで言つた時だった。近くの壁が粉碎され、中から奴が歩いてきた。

想「…!」

相手が俺を見るなり膨らみ始めた。あの黒い煙を出すつもりだ。俺はそれを察し、直ぐにビートチェイサーを発進させた。

蘭「っ!」

蘭がなにか叫んでいたが、ビートチェイサーの音にかき消され、聞こえなかった。

想「ごめんな…嘘ついたわ…」

俺は去つていく蘭の後ろ姿を見ながら、そうやって呟いた。本当は時間稼ぎすら出来ない。やっと少しは打ち明けられたかなと思つたが…

それもここまでのようだ

ガミオ「女の人間を逃がしたか…」

最大まで膨らんだガミオが俺に問いかける。

想「ああ…」

俺は短い一言を発し、構える。それを開戦と判断したのか

ガミオ「ハア！」

想「!？」

相手の身体中から黒い煙が広がる。先程とは違いその威力は増しているように見えた。俺はその煙に飲まれてしまった。避けられなかった

想「どんな速度だよ…!」

くそっ!」

俺の意思とは反対に、煙は何故か俺の中へ入ってくる。

想「やめろっつ! やめろお!」

体の自由は奪われ、なにかの闇が俺を覆い尽くす。

想「お…ご…!り…サ!」

完全に意識が沈む前、俺はかすかに見える光に手を伸ばし、ひとつ祈る。

彼女達に光がありますように

次の瞬間、俺の意識は底知れぬ闇に覆われた。

ガミオ「はははっ!!」

ガミオは高らかと笑い声を上げた。煙が晴れ、その姿が見えた。ザインは耐えきれず砕け散ったがどうでもよかった

ガミオ「これで俺の勝ちは確実なこととなる！」

ガミオの隣に並ぶ影、そいつの目には…

——意志の光が無かった

↳道路↳

蘭「止まってよ！ねえ！」

蘭は必死に叫ぶ。ゴウラムに対して、だって――――後ろに

あの黒い煙が炸裂していたからだ。あの中にきつと彼はいる。時間稼ぎをしようとしている。あんなことをした自分に……

蘭「……！」

死ぬなら私が死ぬべきだ。そう考え、ハンドルから手を離し飛び降りようとした時だった。

ゴウラム『ご主人様の気持ちを……くんであげてください。』

蘭「……!？」

ビートチェイサーについての甲虫ゴウラムが機械的な声でそう告げた。機械のほずなのに……蘭には感情がこもっている――――そんな風に聞こえた

蘭「心配……してるんだね」

無意識にそんな言葉を口にしていた

↳弦巻邸↳

黒服「あれは……ビートチェイサー？――美竹様……？」

今日は非番だった。だが特にやることも無く、たまたま外を眺めていると、見覚えのあるバイクが門を突き破りこちらへ走ってきた。

蘭「いた……！」

黒服はとりあえずビートチェイサーが止まった場所まで走っている。こちらへ気づいた蘭も走ってきた。

蘭「八意が！八意が私を庇うために1人で……！」

飛びついてくるなり大粒の涙を流す蘭に黒服は何かただ事ではない案件だとわかった。

黒服「分かりました……！1度落ち着いて下さい……！」

黒服は慌てる蘭に自分のペットボトルの水を差し出し、近くのベンチに座らせる

しばらくすると、蘭が落ち着いたのか
ペットボトルをこちらへ返し、深呼吸をした。

黒服「一体何があったのですか？」

できる限り優しく発言する黒服。蘭はそれに安心し、口を開いた
蘭「実は…」

黒服「そんな…!？」

蘭から何があったかを聞いて黒服は思わず叫んでしまった。自分が
思っていた内容より重すぎる内容が現実を襲った。

蘭が誘拐され、それを助けてくれた

「ダグバと同じ」究極の闇が、人間をグロンギに変えたこと
蘭を守る為に自ら戦いに行つた八意思

そして最後に見たのは…煙に飲まれる彼

黒服「…」

蘭「私が学校を飛び出して逃げたせいで…!」

再び自身を責め始める蘭。黒服はどう口を開いたらいいかわから
ずにいた

黒服「美竹様…」

巴「蘭、いるか？」

蘭「!？」

その時だった、いるはずのない声が横から聞こえた。反射的に振り
返ると、Afterglowの4人がいた

蘭「ごめん…」

蘭は反射的に謝った。今日自分が一体どれほどなことをしたのか、
もう既にわかっていたからだ。

巴「確かに、お前はモカをしばいたりしたな…」

そう言いながらこちらへ歩み寄る巴。蘭は目をつぶった。しばか
れるくらいどうって事ない。だって自分はそれほどの事を

蘭「:!?!」

だがそんな自分を待っていたのは、殴られるでも
———しばかれ
るでもなかった。

巴「蘭……よかった……無事で……!」

巴に抱きしめられていたのだ。それに続き、つぐみ、ひまり、モカも蘭を抱きしめる

ひまり「無事で良かったああああつ!」

つぐみ「無事でよかった……!蘭ちゃん!」

モカ「しばかれたことなんか気にしなく、あ、やっぱパン奢って
く」

蘭「モカ……皆……」

最初は混乱していた蘭だったが、次第に目から涙を流し始めた。

蘭「皆……!皆……ありがとう……!ありがとう……!」

黒服「……」

黒服は黙ってそれを見ていた。ちなみに呼んだのは黒服だ。気付かぬうちにそれぞれへ連絡し来てもらった。

黒服「後は……八意様……」

蘭を救った八意想。だが今ここにあるのはビートチェイサーだけだった。一体彼はどこで何をしているのだろうか……

く羽丘女子学園・昼休み

屋上く

リサ「想くんが行方不明!」

珍しくAfterglowに呼ばれた友希那とリサ、八意が来ていないことに不安が募るリサだったが……その理由を蘭たちから聞き、リサは声をでかくして叫んだ。

友希那「リサ、声が大きいわ…」

蘭「私のせいで…」

ひまり「蘭ちゃん…」

自身を責める蘭に、ひまりたちが目を伏せる。

リサ「蘭：大丈夫だよ。想くんはきつと」

その時だった
―――
昼休みの運動場に何か落ちてきたのだ。

友希那「!？」

蘭「…!？」

つぐみ「何…!？」

衝撃にもまれ吹き飛ばす生徒多数。

生徒1「きゃあああつ!」

リサ「あつ…!」

ガミオ「ほお…ここが…」

砂嵐が舞うが、それもしばらくし止む。その砂嵐の真ん中に、化け物は立っていた。なにか興味深いものを見ているかのように周りを見回す。

蘭「あいつ…!」

蘭がその化け物を指さし、言葉を発する。

リサ「会ったことあるの…!？」

蘭「あいつが…八意が戦ってははずの敵なんです!」

つぐみ「でも…なんでここに…」

何故ここにいるのか…

友希那「まさか…」

友希那が重苦しく口を開く。嫌でもわかってしまう…考えられる可能性はひとつしかない

―――
彼が敗北した。

リサ「そんな…」

リサは膝を着く。つぐみも、ひまりも床に膝をつき「そんな…」と
呟いていた。

先生「こつちだ！こつちに逃げろ！」

先生が生徒を誘導する。リサ達も震える足で屋上から離れる。

ガミオ「ふっ…まずは…」

「!？」

手を広げ、近くの人間を一人殺そうとした時だった。何者かの発砲
で腕が吹き飛ぶ。

杉田「どんな威力してたんだ…！このライフル…！」

羽丘の先生が真っ先に通報し、駆け付けた警官達だった。その中に
は杉田と桜井の姿も見える。

桜井「大丈夫ですか…！杉田さん！」

杉田「ああ…俺は大丈夫だ。あいつ凄まじく強いぞ！」

吹き飛んだ腕を再生し、こちらへ歩みよるあの化け物。見た目のせ
いもあるだろうが凄まじいオーラを放ち、見ているだけでも腰が抜け
そうだった。

杉田「お前ら…！撃てえええ！」

杉田の叫び声に続き、鼓膜を破るような大量の銃声。パトカーの後
ろに隠れているリサ達は耳を塞いだ。

桜井「全然効いてるようには見えませんよ！」

杉田「分かってるけど言うな！耐えろ！」

それをパトカー越しから見ていたりサ達、気づけばあこと日菜もい
た。

あこ「想兄は？」

日菜「想くんは…？」

リサ「今はいないの…だけど…」

つぐみ「絶対来てくれるよね…！負けてないもんね！」

自分達のヒーローは一番来て欲しい時に来てくれる。

それが八意想なのだ。都合が良くて、綺麗事だらけで、でもそれが
彼なのだ。

——その時だった。

リサ「きやあつ！」

巴「おわっ……！」

上から凄まじい音とともに何か落下してきた。それはパトカー達を吹き飛ばし、警官やリサ達もを後ろへ吹き飛ばした。

杉田「ぐっ……大丈夫か……！」

近くにいた桜井を起こし、杉田は言葉を発する

桜井「は、はい……俺は……！」

杉田「いつたいなんだ……！」

煙が晴れていく。誰かがそこに立っていた。こちらに背中を向けではなく、こちらを向いていた。

リサ「いたっ……皆大丈夫……？」

蘭「はい……誰もケガして————え？」

蘭は突如として黙り込んだ。口を押え何かをこらえている。

日菜「……なんで」

日菜も突如として黙り込み、涙を流しかけている。リサは倒れた体を起こして、全員が見ているところを見る。

リサ「日菜もどうした……の？————え……？」

夢だと思いたい————夢だと願いたい。

完全に煙が晴れてゆく。

杉田・桜井「……!?!」

——その場に立っていたのは……

——黒と金の体

——4本の角

——いつも勇気をくれる、赤色の瞳ではなく…意思の見えない
そこが見えない黒い瞳をこちらに向けていた。

リサ「そんな…どうして…」

その場に立っていたのは—— 4本の角のクウガだった。

想「…」

日菜「想…くん…？」

名前を呼んだ日菜の方を向く八意、何をするのか——

薫「危ないっ！」

突如として割り込んだ薫が日菜と一緒に横へ倒れ込む。その横を
黒色の弾が飛んで行った。先生のバイクにぶつかり、爆発する。

日菜「え…なんで？」

混乱する日菜。状況が掴めない。

リサ「想くん！」

ガミオ「無駄だ。こいつはもう私の意のままに操る人形…お前らの
知ってる八意想は死んだ」

つぐみ「人…形…？」

友希那「死…んだ…？」

蘭「いや…いやあああああつ！」

想「…」

その蘭の叫び声にも動じず、黒い瞳はリサ達を捉えていた

リサ「想くん…！」

ふらつきながらも必死に歩み寄ろうとする、だが彼の反応はリサ達
が想像していたより、最悪だった。

想「…」

近くにあつた小石を拾い上げ――― 剣へと変えた

リサ「え？」

困惑するリサ。その体目掛けて振り下ろす。

日菜「やめてっ！」

だがその直前、何者かがリサと八意の間に割り込み、こう叫んだ。

??? 『甲赫！――― 羽赫！』

想「!？」

ふくよかな羽毛と最高硬度の盾がリサを守った。それに続きもう
1つ

《必殺読破！ドラゴン1冊撃！ファイヤー！》

??? 『火龍蹴撃破！』

何者かが紅の龍と共に降り注ぎ、クウガを後ろへノックバックさせ
た。

「八意さん……」

「この人も仮面ライダー……」

リサ「あなた達は……？」

想「うつ……ぐつ……」

底知れぬ闇の中、今どれ位の時間が立ったのだろうか？何をしている
のだろう。

――― 腕を動かそう

動かない

—— 足は？
動かない

なら俺は一体…何をしているんだ？

く羽丘女子学園く

想「…」

廻里「そんな…、しっかりしてください！——貴方はそんな人では無いはずですよ…！」

廻里は剣を甲赫で受けとめ、黒い瞳を見つめながら心から叫ぶ。その廻里の指にある赤い指輪が輝く。これに呼ばれて時空を超えてきたのだ。

修一「大丈夫か？——とりあえずあっちに行って隠れるんだ。」
リサ「あ、ありがとう…！」

修一は違う世界の仮面ライダー、赤いワンダラーライドブック。“ブレイブドラゴン”が彼をこの世界へと導いたのだ。

廻里「君…！見てないで手伝ってよ…！」
そろそろ限界に近いのだろうか。甲赫が震え、それを支える廻里の体も震えていた。

修一「あ、ああ！わかった！」
そう言うと修一“仮面ライダーセイバー”は、懐から“ワンダラーライドブック”西遊ジャーニーを取り出す。

それを自身の剣“火炎剣烈火”にスキャンする

《西遊ジャーニー… ふむふむ…》

廻里「ふむふむ…!?!」

修一「いつせーのーで、で屈んでくれ！」

廻里「わ、わかった！」

困惑する廻里を気にせず自分が今できることをやる。

修一「今だ！」

そう言い、火炎剣烈火のトリガーを押す。

《習得一閃！》

直後、火炎剣烈火は紅の棒に変わり、クウガ目掛けて——
くボキッ

修一「折られた!?!」

廻里「ええ…」

これには流石の廻里も混乱した声を漏らす。だってあんなに自信満々にふむふむ言わせてたのに――

修一「ぐっ…!」

直後秀一を容赦のない紫の拳が襲う。

廻里「危ない!」

廻里が庇おうとするものの、間に合わず胸部にモロにくらい後ろへ吹き飛んでしまった。運動場を転がり、何とか剣を突き立て止まる。

廻里「一体あなたに何が…」

眩きながら武器生成を行う。片手に剣を持ちもう片手にハンドガンを作り出す。

廻里は知っている。彼の優しさを、彼の本当の姿を――だから攻撃できない。

修一「よし…倒す…!」

改めて立ち上がり剣をベルトにしまう。懐からワンダーライドブック“ストームイーグル”を取りだしベルトにセットする。火炎剣烈火を引き抜き…

修一「変身!」

《烈火抜刀!》

日菜「うわ…!鳥燃えてる…!」

《竜巻ドラゴンイーグル!》

『烈火二冊!荒ぶる空の翼龍が獄炎を纏い、あらゆるものを焼き尽くす!』

修一「…!」

ドラゴンイーグルに変身したあと1度剣をしまいもう一度引き抜く

《必殺読破!烈火抜刀!》

《ドラゴン!イーグル!2冊斬り!ファ・ファ・ファイヤー!》

修一「火炎竜巻斬!」

剣を振り、巨大な炎の竜巻を作り出す斬りこもうとする。狙うはあの4本の角を持った黒い瞳の奴。

廻里「ダメだ！」

だがそれは紫色の壁に防がれる。廻里の能力のひとつ“甲赫”だ。

修一「おい！何すんだよ！あいつはどう見ても敵だぞ！」

自身の必殺技を防がれ、叫ぶ修一。だが廻里はこう言った

廻里「違う！あの人は…戦士クウガなんだ！決して人を襲う人じゃない…！」

修一「じゃああれはなんだ！あの女の子達に手を出そうとしたんだぞ！」

廻里「それは…！きつと何か訳が…！」

そこまで言った時だった。廻里と修一を黒い炎が襲い
爆発した

修一「うわあああつ！」

廻里「ぐっ…ぐああつ！」

2人は羽丘女子学園の1回の壁を突き破り、椅子や机をぶちまけながらなんとか止まる。

修一「げほっ…！——おい！お前…！」

修一は剣を突き立て廻里に近づく。全身の皮膚が焼け爛れ、所々骨が見えている。常人ならとつとつに死んでいるが……

廻里「うっ…、大丈夫…！」

修一「け、ケガが…塞がってる…!？」

目の前でみるみる治っていく傷。それを見た修一は驚いた。あの変な鎧と言い…こいつだだもんじゃない…

廻里「気にしなくていい…今は、八意さんを止めないと…！」

修一「…勝算は？」

廻里「どうだろう…分からない…！」

修一「…。——危ない！」

修一が廻里を掴み、ストームイーグルの力で羽を開きその場から飛び立つ——直後今までの場所に紫色の波動が襲い、ガラスが割れ様々な物が壊れる。

廻里「ありがとう！——くそっ…！このままじゃ…！」

これ以上羽丘女子学園に被害は被らせたくない。違う時空だとし

でも守りたい。しかも八意の後ろにいる敵がいつ邪魔してきてもおかしくはない。状況は最悪だった。

ガミオ「ふむ…邪魔だな、あの二人は…」

遠くから眺めていたガミオが、その光景に頷く。本来ならこの場所にいる人間を残らず皆殺しにして洗脳を解除、生きていたならそのまま絶望を味わって死んでもらおうと思っていた。

ガミオ「どれ、手始めに――」

そう言いながら恐るべき脚力で飛び上がったガミオはまず空を飛ぶ赤い戦士目掛けて攻撃をはなとうとする

リサ達「!?!」

廻里「――なっ!?!」

修一「…!?!」

気づけば自分たちの真上にいたガミオが手に禍々しい球を作り出して放とうとしていた。

廻里「っ!」

多少強引ではあるが廻里はとある手段に出た。無理な体勢からレールガンを作り出し、頭上にいるガミオに向ける。

廻里「えーつと…お名前は?」

こんな状況でなんてことを聞いているのだから…自ら笑いそうになるがそれをこらえ自分を支える赤い戦士に聞く。

修一「保丈修一…!」

廻里「修一さん!一旦俺を離して!」

修一「…。わかった!」

何か言いそうになる修一だったが、それを飲み込み廻里の掴んでいた手を離し“ストームイーグル”を1度タッチする。

《ストームイーグル!》

多少の時間稼ぎになるかは分からないが、左手から小規模の竜巻を作り出し相手にぶつける。

修一「おらあつ！」

それは奇跡なのか右手の甲にあたりわずかだが球体の軌道が逸れる。

ガミオ「!？」

自身の球体が逸れ、少しばかり混乱するガミオ目掛けて廻里が作り出した“レールガン”を相手目掛けて最大出力で放つ。

廻里「っ…！」

神頼みに近いレールガンは見事ガミオの胸部に当たった。貫きはしなかったものの空中にいたガミオはわずからながら身体を仰け反らせた。

修一「おお…！——つて！」

修一は感心していたがそう言えば——廻里つて奴は翼が生えていただろうか。だが気づいていた時には遅かった。廻里の体はもう地面に落ちかけ——

廻里「身体強化…10倍ッ！」

頭から落ちかけた体制を何とか整えながら落ちても1番ダメージが少ないであろう受け身の構えをとる。——直後衝撃

が廻里の体を襲い、運動場の砂が舞い上がる。

廻里「流石に…無茶だったかな…っ！」

制服のあちらこちらが破け、腕が変な方向に曲がっている廻里。だがその体もすぐに治し、立ち上がる。

修一「大丈夫か！」

廻里「うん…ありがとう…」

羽を飛ばたかせ横に着地する修一、廻里を立たせ上を見やる。まだ上半身を仰け反らせたままだったが——

ガミオ「…中々だな」

修一・廻里「…!？」

ガミオ「ならば私も本気を出さねばならない…舐めてすまなかったな……」“召喚”

その一言を唱えた瞬間、空が突如として黒くなる。

廻里「なんだ…あれ…」

その黒くなった空から雨のように降り注ぐ緑色の球体。まるで魂のように浮かぶ。それはガミオの元に集まりひとつの塊になる。それを手をかざして一斉に解放する。それは突如として光を強め

羽丘女子学園の運動場半分が、何かに覆われた。

ガミオ「今まで倒されたグロンギの魂を解放し、従わせた！」

修一「嘘だろ…？」

廻里「なんだって…」

この運動場半分を覆い尽くすのは全てグロンギだと言うのか……
想「…」

その集団の真ん中に立つ八意想。彼の瞳はまだ黒い。だが彼を信じる以外に手が無いのだ。自分たちがこれを全て倒しきれるかどうかは分からない。

廻里（八意さん…貴方は、まだ生きてますよね…？）

ガミオ「クウガ以外は一斉に行けえええ！」

グロンギ達「ウオオアアアアッ！」

廻里「はあああつ！」

修一「ここまで来たらやってやる！うおおおつ！」

廻里に続き修一が飛び出す
—— 不利な戦いが幕を開けた。

く羽丘女子学園・校舎内く

修一に逃がされ校舎内へ入った日菜達、彼があんな姿になったのをまだ信じれないのか。全員から活力が全く見えなかった。だが日菜はまだ諦めてなかった

日菜「想くん…どうする？」

リサ「日菜…？」

ひまり「無理だよ…！私達があんな場所に行ったら…」

日菜「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

ひまりの声が、日菜の怒声にかき消された。全員が日菜の反応に驚き目を開く

日菜「私達今まで沢山助けてもらったよね！だったら今度は…私達が想く人を救わないと！」

麻弥「でも日菜さん、ジブンたちじゃとてもそんなこと…」

日菜「できないなんて言わせない…、できないんじゃない、やるしかないでしょ…」

薫「私は、着いていこうじゃないか…：…お姫様の頼み事だ…行かない訳には行かないからね…」

蘭「私も行くよ…」

あこ「あこももちろん行くよ！皆で救いだそーよ！」

巴「あこが行くならアタシも行かねーとな！」

ひまり「…私も！」

つぐみ「うん…！」

リサ「アタシも！」

友希那「私も行くわ…」

薫「作戦はあるのかい？」

日菜「あるよ〜！」

麻弥「聞かせてもらっても…？」

日菜「皆であの大群をくぐり抜けて抱きつく！」

屈託のない笑みでそう言う日菜。だが周りには口を開けていた。

全員「…。」

突如として雲行きが怪しくなった集団だった。

廻里「はあ…はあ…」

血が付き斬れ味の落ちた剣をへし折りまた作り出す。その間に自己再生を行う。そしてまた襲い掛かる軍団を蹴り――斬って――

また繰り返す。

いくら身体強化を重ねてるとはいえ体力と精神が崩れてゆく、一体いつまで殺ればいいのかだろう。

修一「はあ……くそっ……」

剣を持つ手が震える。疲労は修一の体を徐々に蝕んで行つた。廻里みたいな身体強化もなくここまで耐えきっているのは奇跡に等しい。

修一「っ!?!」

剣を振るがもう握力が無く、火炎剣烈火は弾かれてしまい、どこかへ飛んでいく。

修一「っ……」

拳を握りしめ殴ろうとするが逆に蹴られ後ろに転がる。だがすぐに立ち上がり、己を鼓舞するかのように叫んだ

修一「まだ……、諦めない……!絶対……!俺達は勝つ……!」

そう叫んだ時だった。ワンダーライドブック、ブレイブドラゴンが光り輝く。その光は紅の光となり空高く――黒い雲を突き抜けた。その場所が赤・白・黒に輝く

グロンギ達「……!?!」

ガミオ「!?!」

廻里「なんだ……?」

その光から三体のドラゴンが修一の元へ降り注ぐ。そのドラゴンにまるで導かれたかのように触れようとする――

修一「……!?!」

三体のドラゴンは一層輝きを増し、修一の手になまった。それと同時に、導かれたかのように火炎剣烈火が手に収まる。それをソードライバーに差し込む

修一「ワンダー……ライドブック……!」

普通より大きめのサイズのワンダーライドブックを開く。

《勇気・愛・誇り……3つの力を持つ神獣が、今ここに……》

ブレイブドラゴンを抜き、そこに差し込む。

修一「……!」

待機音がなり始めると共に先程出てきた三体のドラゴンが周りを囲む。

修一「変身!」

《烈火拔刀!》

辺りが炎に包まれる。

《愛情のドラゴン! 勇気のドラゴン! 誇り高きドラゴン!》

修一「はあっ!」

《エモーショナルドラゴン!》

廻里「すごい…!」

《神兽合併! 感情が溢れ出す…》

修一「すげえ…!」

Gumun「ゴアアツ!」

後ろから襲いかかる Gumun。廻里は「危ない!」とこえをだすが

修一「はあっ!」

いとも容易くそれを火炎剣烈火で切り裂く。斬られた Gumun はその身体を震わせ――塵となり消えた

廻里「強い…!」

修一「廻里さん…俺まだやります!」

修一「おらあつ！——はあつ！」

廻里「すごい……」

次々と迫り来るグロンギを火炎剣烈火でなぎ倒していく修一。

廻里「はあ……！」

廻里も負けずに剣を振るい——小刀を大量に創り出しそれをがむしやらに振るう。

「グワアアツ！」「ゴアアツ！」

次々と倒されていく手駒達を見ながらガミオは1つ、呟いた。

ガミオ「ほう……やはり邪魔だな……」

剣を持つ赤い戦士、そして謎の人間。2人はイレギュラーな存在だった。だがすぐに消せると思ったがああ二人、予想外な成長を見せた。だからこそ——

ガミオ「まずはお前からだ……死んでもらおうツ！」

修一「——なっ!？」

足を使い全力で飛び立ち一気に間合いに入る。修一はかろうじてそれに反応し左手に付属する盾で防ぐ——が、予想外の奇襲により少し後ろに吹き飛ぶ。

修一（腕が……痺れる……!）

ガミオ「所詮はその程度か……！」

修一「ちっ……！」

再び突進をするガミオに対し、舌打ちをしながら迎撃体制をとる修一だった。

廻里「…っ！」

甲赫を使い、攻撃を耐え凌ぐ。だが疲労もあつてか甲赫もそれなりに弱っている。

廻里「身体強化…！10倍！」

あちらこちらの骨が砕ける音を耳に捉えながら身体強化を重ね、上へ飛び立つ。

廻里「“羽赫”…！」

廻里がそう呟くと、肩あたりに羽のようにうねりながら赫子が現れる。

廻里「はああっ！」

空中から赫子による高速攻撃を寄ってくるグロンギにがむしやらに当てる。一気に辺りのグロンギが蹴散らされていく。まさにそれは戦場に咲く血肉の華。だがこの羽赫には欠点が存在する――

廻里「はあ…はあ…」

廻里の羽赫が消え、地面に肩から落下する。――羽赫の唯一の欠点、それは“持久力が無すぎる”ことだった。

廻里「げほっ…！」

口から血を吐き、その血に足を取られる。

修一「ぐあああつ…！――がはっ…！」

先程までガミオと戦いを繰り返していた修一が横に転がってくる。ガミオ「2人まとめて地獄行きだ…！やれ！――クウガ！」

想「…」

ただ無言で頷き、こちらへ歩みよるクウガ――八意想。その手には紫の炎が灯され、今放たれようとしていた

廻里「八意…さん…」

修一「おい…！やめろ…！」

2人がそう言いながら防御姿勢を取ろうとした時だった。後ろから数人の叫び声が聞こえた。

想「!？」

リサ「やっぱ日菜無茶だよお〜！」

ひまり「むりむりむり!!」

日菜「意外と辛いかも…!」

廻里「リサちゃん…!?日菜ちゃん…!?」

修一「…なんで戻ってきた?」

リサ「あ、いた…!その2人!」

リサ達が廻里たちの横で止まる。周りにいるグロンギは突如として現れた女の獲物に今か今かと命令を待ち続けていた。

修一「馬鹿野郎…!なんでもどって…」

戦場に入ってきた彼女立ちを叱り付けようとした修一を、回復を終えた右手で制しながら言う

廻里「どうしたの?」

リサ「私達が想くを元に戻したいの!それに協力して、お願い!」

日菜「私からも!お願い!」

ひまり「わ、私も!」

薫「しばらくでいいんだ、頼めるかい?」

つぐみ「お願いします…!」

次々と頭を下げる彼女達、修一はそれに目を見開く

彼女たちの覚悟は違う。本当に救いたいのだと、そこまで大事に思っている

修一「…」

廻里「…わかった」

2人で目配せして廻里はその結果を口に出す。それに彼女達は顔色を一気に明るくさせる。だがまだこれからだ、上手くいかなければ彼女達は命を落とし、最悪自分たちも死ぬ。クソツタレた賭けだ。バカバカしい。だが俺達だって“男”だ。時空は違えど知ってる女に頼まれて断る訳には行かない。

修一「稼げても3分…廻里は?」

震える手で火炎剣烈火を持っていた修一が疑問をなげかける

廻里「もって5分…それ以上は僕が暴走する可能性がある…」

状況は最悪——彼女達の戦力は0。覚悟はあれど足が震えている
——自分達もだが…

ガミオ「作戦会議は終わったかな？」

ガミオの質問に、廻里は「修一は——彼女達は立ち上がり答えた
廻里「ええ、終わりましたよ？」

修一「今度はこっちの番だ…覚悟しろよ…！」

想「…」

『よくも俺を殺したな！人殺し！』

うるさい

『私を殺した…人殺しめ』

うるさい…黙れ。仕方が無いだろ。お前らが人を襲うから俺はそれから守ろうとしただけだ。

『だからなんだ。俺達だって人なんだぞ？』

お前らはもう人じゃない、悪魔に魂を売ったグロンギだ。

『ならお前は悪魔に魂を売った奴なら全員消すと？——たとえそ

れが彼女達だったとしても…？』

想「——っ!!」

俺は目の前で嘲笑うグロンギどもの魂に拳を振るう——が、

虚しく空を切るだけだった

想「あいつらは関係ないだろ…！」

僅かな怒りを込めてそう発す。だが魂どもの煽りはいつそう増す
だけだった。

『ほら、そうやってひとつの可能性から逃げる』

『鼻負ってやつじゃん？』

『僕たちの時は容赦なく殴ったりしたのに？』

『クズじゃん』

黙れ、黙れ、黙ってくれ——頼む…やめてくれ。

俺はその場に蹲る。来るはずのない助けを…待ちながら

廻里「カウント5で同時攻撃をして彼女達の道をあげましょう！」

修一「ああ！わかった！」

お互いに腕を組み回転しながら攻撃を与える

廻里「5・4・3…」

カウントダウンが始まった。修一は火炎剣烈火をベルトにしまい、トリガーを1回押し、剣を引き抜く

《必殺読破！》

《烈火抜刀！エモーショナル必殺撃！》

廻里「2・1…」

廻里はレールガンを両手に構える。腕が折れるだろうがそこは回復に任せよう

修一「情龍神竜斬！」

廻里「最大出力…！——今です！」

廻里・修一「はあああああつ！」

修一は横に剣を振る。炎の斬撃が迫り来るグロンギ立ちを薙ぎ倒し——レールガンで横にいたグロンギ立ちを焼き払う。

修一「今だ！——行けっ！」

廻里「任せましたよ！」

リサ「ありがとう！みんな行こう！」

日菜「うん！」

わずかだができただ一本道をリサ達はがむしやりに走る。

巴「いたぞ！——あそこだ！」

——少し走り、巴が奥を指さす…彼が立っていた。まるで木みたいな彼が、こちらを見ながら…

リサ「想く…！」

薫「っ！」

涙を流しかけたリサが抱きつこうとした時、薫がとっさにリサごと

地面に伏せさせた――直後自分たちの頭上を紫の炎が走っていく。

本来リサ達を狙った攻撃はグロンギ達に当たり、爆発四散する。

リサ「薫…ありがとう…」

薫「…」

日菜「どーんっ！」

想「!？」

その隙を狙い抱きつく日菜、顔はいつも通りの笑顔だった。だが…ひまり「日菜ちゃん!？」

――抱きついた箇所が焦げていた。

日菜「あはは…、女の子に火傷させるなんて…一生物の罪だよ…!」

つぐみ「日菜さん!――リサさん!」

リサ「想くん!――つあ…!」

リサも続いて想に抱きつく。身を焦がす程の熱さが体を襲い、手を離しそうになるが寸前で止める。

想「…!」

リサを離そうと髪を掴み、振りほどこうとする。

リサ「…っ!」

リサの髪飾りが破け、長い髪を露わにする。

日菜「リサちー!？」

リサ「大…丈夫だから…!」

薫（さつきみたいに火の玉を撃たない…?）

薫はふと疑問を感じた。先程までなら容赦なく放っていた球を今は放たない。まるで抵抗しているのか――それとも偶然か

つぐみ「私も…!」

つぐみが走り出し想に抱き着く。やはり身体は熱く――つぐみの皮膚が所々焦げていく…

リサ「ねえ!戻ってきてよ!」

想「!？」

リサたちの涙が地面に落ちる。

『戻ってきてよ!』

想「:!？」

戻ってきて――そう聞こえた気がした。俺は声のした方を振り向く。

だがそこにはただの黒い世界が広がっていた。

――気の所為か:

そう考え再び暗闇へ歩き出そうとする。

『皆待ってるよ!』

想「:~!」

さつきよりもはつきりと聞こえた声。

『るんって来るもの見せてよ！今の想くんただの殺人兵器だよ！』

想「日菜…なのか？」

『おい！八意！いい加減に帰ってきたらどうだ！』

巴らしき声にする。

『あんた…ちゃんと私に謝らせてよ…！』

想「蘭…？」

『想くん!!ねえ！』

想「リサ…？」

——不意に、視界の端が黒から…白へと変わっていく。

『なんだと…!?!』

魂がその現象に驚く。

想「…」

想「グオオオオアアアアアアアアアッ！」
突如として、彼の声では無い声が耳に響き渡る。

——気づけばリサ達は無理矢理振りほどかれ、そこから中に横たわっていた

リサ「…あ」

日菜「げほっ…！」

巴「っ…！」

想「ジャアアマアアアアアアアアアアアアアッ！」
両手に色濃い闇を纏わせながらそう叫ぶ。

廻里「まずい…！」

グロンギたちと戦いを繰り返していた廻里、そして修一は襲われようとしているリサ達を捉え助けに行こうとするが——

修一「間に合わねえ…！」

剣で爪を受け止めた修一も、想を見て歯噛みする。時を止める以外ではどうしても間に合わなかった。そんな能力はさすがの廻里にも出来ない。

ガミオ「ふん…：…やめろ！」

だが突如として横から蹴りが入る。想は反応出来ずに蹴られてしまい、その場から30mほど吹き飛ばす。

想「…！」

ガミオ「お前が殺したらつまらんだろ…トドメは俺が指す。見ておけ」

リサ「っ！」

廻里「やめろ——！」

想「…」

声が聞こえた。俺を呼ぶ声が…

想「お前らは…勝者は今まで殺してきた者の怨念を背負いながら戦わなければいけないって言ったな？」

『何が言いたい…！』

想「確かに…俺はそれに怖気付いてた。けどようやく分かったさ…」

『…は？』

想「怨念を背負ったとしても…今を生きる者を…人を守る。それが戦士だ…仮面ライダーなんだよ！」

俺は顔を上げ、魂を見る。

「想くん！」「想兄！」「想！」「八意！」

想「ああ…聞こえる…！」

俺は光から伸びる手を掴む。俺はこんなところで立ち止まる訳にはいかない。

八意想は、暗闇から…彼を呼ぶ光へ…手を伸ばした。その先にある未来を――掴むために

ガミオ「女の人間共…まとめて死ね！」

廻里「やめろおお——！」

修一「うあああつ！」

2人がこの攻撃を止めようと走り出す、だがもう遅い。こちらの勝ちだ

リサ「…ごめんね」

日菜「…っ」

全員が悔しさに涙を流す。彼を戻すことも出来ず——2人に迷惑をかけ——拳句には死んでしまう。

『待たせたな』

ガミオ「っ!？」

だがいつまで経ってもこちらへ攻撃が飛ぶこと無かった。誰かがその腕を掴んでいる。

一体誰が

「あ…」

そんな声を漏らしたのは誰か…

想「ようやく目が覚めたぜ…！」

腕を掴み、攻撃を辞めさせたのは彼だった。さつきとは打って変

わってその目はいつもの赤だった

リサ「想…くん」

ガミオ「貴様…なぜ…!?!」

本来なら身体が崩壊し死ぬはずだった。なのに何故こいつは生きている。

想「はあっ!」

俺はそんな疑問をなげかけるガミオを容赦なくドロップキックで吹き飛ばす。

廻里「八意…さん…!戻ったんですね!」

グロンギ達を薙ぎ倒しながらこちらへ来る誰か…

想「…廻里!なんでお前が!?!」

俺は何故か廻里がいることに驚く。そして何事も無かったのよえにさりげなく出てくる赤い男。

修一「おお…!戻ったんだな!」

想「いや誰…!?!」

廻里「修一っていう人です。多分僕と同じかな…?、一緒に戦ってくれてたんで悪い人じゃないです」

修一「よろしくな」

想「へ、へえ…、それにしてもすまなかったな」

俺は頭を下げる。大量の傷…きつとりサ達を守る為に戦ってくれたのだろう

廻里「…?」

想「ありがとう…」

修一「…!」

ガミオ「貴様ら…!——やれ!グロンギ共!あいつらを殺せ!女ごとだ!」

『ウオオオオオオオオオオツ!』

想「グロンギ達に囲まれてたの?」

俺は辺りから嫌という程聞こえる雄叫びを聞きながら廻里に質問

した

廻里「実は…はい」

修一「逆に知らなかったの？」

想「うん…」

俺たちはリサ達を囲うように立つ。リサ達には無数の火傷後があり、俺を止めようと必死にしてくれていた事を痛感する。

日菜「想くん、火傷のこと一生償ってもらおうからね？」

リサ「…バカ」

他にもつぐみ達からも一言貰う。巴からはゲンコツをプレゼントされるらしい——いい病院探してこなきや

想「ごめんな、終わらせてから話は聞く…」

リサ「ちゃんと…勝つてよね…」

想「うん…じゃあ終わらせようぜ！」

リサ「想くん…これ！」

想「おっと…」

俺はリサから投げられた物を手に掴む。いつも耳につけてる大事なピアスの両方だ。

想「…」

俺はモーフィングを使い、リサのピアスを…両方共黒の金の剣に変えた。

リサ「よかった…」

そう呟くりサに頷く。

想「決着を付けよう…修一、廻里、一緒に戦おうぜ…！」

修一「ああ！いこう！」

修一は火炎剣烈火を再び握り直し、答えた

廻里「もちろん…！任せてください！」

廻里は自身が使える能力全てを解放させて答えた

想「うおおあああつ！」

俺はリサのピアスから作り出した二刀を携えて…

羽丘の運動場を再び埋めつくしたグロンギ達に…真っ向から挑む。

—— 守る為に……

想「おらああっ！」

走りながら数体を切り裂き、前にいた奴を蹴りながら空中で後ろに回転。

想「俺の台になってくれてご苦労さんっ！」

そう言いながら左手の剣を黒の金のボウガンに変え、引き絞り撃ち抜く。そしてまたすぐに二刀に替えて再び切り始めていく。

修一「はあああっ！」

火炎剣烈火を振り回し炎の斬撃をただひたすら与える。至ってシンプルな技だが強力だ。

修一「はあっ！——たあっ！」

自分でも器用だと尊敬したくなるレベルの斬撃……リサ達にはまるでそれは空に龍を描くように見えていた

《ストームイーグル！ふむふむ……》

修一「回転して……炎の竜巻だあああっ！」

そう叫びながらトリガーを押す。

《習得一閃！》

荒ぶる炎の竜巻が舞い起こる。それに巻き込まれ様々なグロンギが消えていく。

想「何それすごい……」

俺がその必殺技に呆けて——後ろからきたグロンギに気づけなかった

想「しまっ……！」

その時、シヨットガンのような異様な爆発音が響き渡り、俺を襲おうとしていたグロンギが粉微塵に吹き飛ぶ

廻里「八意さん！」

想「おうおうありがとう……だけど相変わらず色々ぶっばなすよ

なあ…」

俺は剣を肩におき、そう言うと廻里もやれやれといわんばかりにため息を吐きながら言う

廻里「八意さんも大概ですよ…?」

想「そうかよっ…!」

軽口を叩き会いながら

お互いがお互いの後ろに来て

いたグロンギに剣を刺す。刺されたグロンギは呻きながら爆発した。

想「やつぱし気づいてた?」

俺は突き刺した剣を引き戻しながら言い…

廻里「当たり前じゃないですか」

廻里も剣を引き戻す。気づけばリサ達を襲おうとしなくなったグ

ロンギ共が2人の周りを囲んでいた

想「どうやらまだまだいるそうだが——いけるか?」

廻里「…もちろん、八意さんの方こそ…やられないでくださいよ?」

2人は獰猛に微笑む。それはまるで

血を求める獲物のようだった。

ガミオ「何故だ…!」

八意想といい、次々と倒されていく駒と言いい、まだ何も出来ていない。

ガミオ「チツ…使えないヤツらだなあアアッ!」

そう言いながら両足に力を込めて――最大最凶のスピードで空を切る。

――敵も見方も関係なく

『グアアアツ!』『グアアアツ!』

修一「っ!?」――がはっ…!」

廻里「んなっ…!?」――ごほっ……!」

想「2人とも…!」――があっ!?」

廻里と修一が見えない速度で吹き飛ばされた。俺は2人を助け出すために走り出そうとした――だが飛んできたガミオに首を絞められ、身動きが取れなくなってしまった。

ガミオ「貴様が大人しくしていれば…!」

くゴリツ…!

想「――があっ!?」

廻里「八意さん!」――よくも…!」

廻里が怒りを込めながら走り出す。

ガミオ「黙れ!」

俺の首を持つ反対の手――左手に紫の何かを溜め込み…:雷となつてスパークし、廻里を狙い飛んでいく

想「があ…!」

俺はやめろ、そう言いたかったのだが首を絞められていてそれはただのうめき声となった。

廻里「しまっ…!?!」

自身に迫る雷を目で捉えながら――だが捉えるだけで回避…:防御は間に合わなかった。リミッターをもう一段階解除すれば防御も回避もできる。

廻里（だが今すればおそらく暴走する…!八意さん達には迷惑をかけたくはない…）

自身の体に――その雷が当たろうとした時：

《習得三閃！》

荒ぶる炎の竜巻と：一人の人影が廻里と雷の間に滑り込む。

修一「うおおおあああああああつ！」

廻里「修一さん!!」

ガミオ「また邪魔を……！」

明らかに怒りが芽生え始めている。それに右腕の力が少し弱まり

想「……つらあ！」

ガミオ「なっ……!?!」

俺は右足にエネルギーを込め、相手の腹部目掛け蹴りを放つ。攻撃は修一から逸れて、羽丘女子学園3階にあたり、攻撃が止む。所々壁が崩れたが崩落まではいってないらしい。

想「かつ……!――がはっ！おえっ……！」
首を拘束する腕が離れ、俺は地面に落下してマスク越しに嘔吐する。

ガミオ「お前ら人間ごときが……！」

また再び両手をクロスさせて“何か”を溜める動作をする。周り
にある魂が1つに集合し激しくスパークする。

想「なあ……あれどう思う？」

俺は再生した喉で横にいる2人に声をかける。

修一「言わなくてもわかる……あれはやばい……」

廻里「修一さんの言う通りです……」

だが今の俺たちでは止められない。焦るう

ガミオ「全員まとめて“消してやる”」

腕を広げ、俺たちにそう言う。

想・廻里・修一「…!?!」

俺たち3人は何かが来ると、身構える。だが俺たちが予想していたのと――現実とは厳しかった。

日菜「緑色の球が…あの人に集まっていく…?」

流星の日菜も怯えたような声を出す。一体何がおこってしまうのだろうか

想「…!?!」

変化が起きたのは魂だけでは無かった。俺たちの周りを取り囲んでいたグロンギ達も突如機能を停止する。

グロンギ「…」

想「なんだ…?」

その体から抜き取られた“魂”…それが1つのガミオへ集まっていく。

やがて虎のような体は…魂を食らいつくし、その体を、成長させて行く。

リサ「な、なに…?」

蘭「…!?!」

リサ達…羽丘女子学園の生徒は全員後ずさった。俺たち3人でさえ、恐怖に後ずさる

ガミオ「ガアアアアアアアアアアアツツ!」

――羽丘女子学園に、その体を巨大化したガミオの叫び声が響き渡った。

想「なんなんだよ…これ…!」

修一「うそだろ…!」

ガミオ「潰してやるウウウツツ!」

その巨体の腕を持ち上げ、紫の雷を溜める動作をする。人のサイズであの威力…巨大化した今の威力は未知数に近い。

想「っ!」

廻里「まっってください!」

修一「…!」

反射的に転がり避けようとした俺と修一を廻里が止める

修一「何やってんだ!避けないとまずいだろ!」

廻里はその言葉に「分かっています!」と叫び答え…「でも…」と言った

想「そうか…!」

俺はその意味を理解した。

廻里「自分達は避けられても…彼女達が…!」

リサ「…!」

後ろで恐怖するリサ達を見る。もちろん彼女達を捨てることは論外。だがこの3人のうちの誰かを欠けさせる訳には行かない。ならば…答えはひとつ。

廻里・修一「…」

俺がそれを言う前に、廻里と修一と目が合う。2人とも同じ結論に至ったのか頷く

想「俺たちの全力で…あの攻撃をガードするぞ…」

修一「ああ…分かっている」

廻里「…やりましょう」

リサ「…」

それを遠目から見ていたりサ達は言いしれない不安に駆られた

あこ「逃げないとやばいよ！あれ！」

雲が黒くなり、雷が振り注ごうとしている。ゲームの世界で雷魔法の威力を分かっているあこは人一倍戦慄した。もちろんゲームとリアルは違う。だがどうしても今の現実が受け入れられなかった

友希那「…まさか、彼らは…」

そこで、後ろにいた友希那が呟く。薫は瞬時に理解し、重たい口を開く

薫「…あの攻撃を防御する気でいる…」

全員「…!?!」

ひまり「あんなのどう見ても無理だよ…!」

蘭「もしかして…私達を守る為に…?」

また守られるのか…、自分たちはいつも守られてばかりでいる。

巴「蘭…、そう思ってるのはお前だけじゃない…!」

どうしようもない無力感が彼女達を襲う

だが時間は進む。

廻里「来ます!」

廻里は最大まで身体強化を施し、甲赫をリミッター限界まで解除する。今自分が出来る完璧な防御。

《必殺読破！烈火抜刀！》

修一「情炎神竜斬!」

火炎剣烈火をベルトに差し込みトリガーを押し、ベルトから剣を引き抜く。

想「…！」

2人とは違い決め手にかける俺は両手に炎を宿し、炎の盾をイメージする。それなりに大きなサイズの盾を創り出し、足に力を込め構える。

——次の瞬間…今までのうちで史上最強の一撃が俺たち3人を

襲った。鼓膜をつんざく轟音と、目を焼き尽くす程の光が3人を襲う

想「た、た…があ…！」——耐えろおおオオオオツ!!」

八意の耳から血が吹き出る。それは鼓膜が壊れた証明だった。

廻里「ああああああアアツ!!」

修一「おおおおおアアアアツツ!!」

リサ「きやあつ…！」

3人が全力で防ぎ、こちら側に被害がないものの光と音は凄まじい。

蘭「八意…！」

麻弥「八意さん…！」

全員が自分達を守る人を呼ぶ。後のふたりは誰かは分からないが自分達を守る為に戦うのを見た。

日菜「頑張つて…！」

だが現実是非情だ

想「…!?!」

俺は先頭の最中、自身のベルトの異変に気づいた。

廻里「ベルトが…」

隣にいた廻里も、その異変に気づいたのか声を出す。力の使いすぎのせいかは知らないが俺の霊石が少しずつ色褪せているのだ。まるで俺が取り込む前の石の塊だった頃のように…

修一「おい…！盾がひび割れてきてるぞ…！」

廻里「!?!」

甲赫と炎で造り出した急ごしらえの防御もそろそろ限界に近い。あつちこつちの盾が破けそこから雷が盛れだしている。

想「があ…！」

手に雷があたり視界が白く点滅する。

想（意識が…！）

廻里「八意さん…！」

ガミオ「「そろそろ終わりのようだなッ！」」

ガミオの嘲笑が入った声が聞こえた。生き物の死ぬ前の絶望は素晴らしい。このまま石にして飾りたいくらいに…

ガミオ「「…う？」」

だが人間達の反応は絶望などでは無かった

修一「ふ…ぎげんな…！誰が終わらせるか…！」

廻里「その通りです…！絶対に終わらせない…！」

想「俺たちは…絶対に諦めない…！この生命が尽きるまで…！何度だつて立ち上がる…！」

ガミオ「「いつまでそんな口を…！」」

リサ「…」

何も出来なくて…震える手を抑え込むのが精一杯。悔しい…何も出来ない自分たちが…

巴「…!」

何も出来ない腹正しさが渦巻く。

つぐみ「頑張れ!」

誰も何も言えない…絶望的な空気が漂う場所で、一番最初につぐみが叫んだ。『がんばれ』と

巴「頑張れー!ぶっ倒せ!」

それに便乗して巴が叫び、Afterglowが叫ぶ

蘭「頑張つて…!」

ひまり「頑張れ!!」

友希那「頑張つて!」

友希那も珍しく叫んだ。それに周りがどよめくが…

生徒1「頑張れ!」

生徒の中にも、頑張れと叫ぶ人がいた。それがきっかけとなり…

『頑張れ〜』『頼む!倒してくれ!』『やれ〜』『3人とも、頑張つてくれ!』

生徒から始まり…先生さえ涙ながらに叫ぶ。

リサ「想くん!頑張つて!」

想「ああ…聴こえる…」

後ろから聞こえる様々な声。全員が絶望を否定し、俺たちを応援する

廻里「聞こえます…!」

修一「聞こえるぜ…」

リサ「頑張れ！クウガ！」

涙が地面に滴り、光る。

リサ「…？」

リサの体が光に包まれる。自分だけかと思いつつ周りを見回すと

つぐみ「…!?!」

日菜「…光ってる！」

つぐみも日菜も、友希那も、全員が光っている。その光は彼らがいる真上に集まっていく

そこにいるすべての人達の願い。希望が1つになる。

ガミオ「「なんだ…!?!」」

その光はひとつの球体になり、俺たちを包みこむ。

想「…人の祈りが聞こえる…」

廻里「暖かい…光ですね…」

修一「なんだ…？」

その光に包まれ、修一がもつ“火炎剣烈火”と“ブレイブドラゴン”が光る。

廻里「これは…？」

廻里は八意がくれた赤い指輪が光り

想「…光ってる？」

俺は腹のベルト“アークル”が光り輝く。その光は1度眩しく輝き…

想「おおっ…！」

その光るアイテム達から金色の線が伸びゆき、頭上でひとつに集まる。

修一「いこうぜ！」

廻里「いきましよう！」

想「ああ！負ける気がしないな！」

俺たち3人は手を繋ぎ、その光へ手を伸ばす。

ガミオ「「ガアツ!？」」

自身と同じように巨大化した光、その光から伸びてた拳がガミオの頬を捉え、殴り飛ばす。

リサ「…なにがおこったの…？」

眩しい光で姿が見えない。だが安心出来る気配はする。

その光がやんで行き…姿を露わにする。

巴「すげえ…」

その姿を見て、全員が言いようのない感動を襲う。自分達は何も出ない訳では無い。自分達の応援が…力になる時だ…であるのだから…

ガミオ「「なんだその姿は…!？」」

自身が1歩後ずさったのを誤魔化すかのように吠える。俺たちは構えてこう言った。

想・修一・廻里「「俺たちを思ってくれる人々の…希望の力だ!？」」

くノアの内部く

想「すごいな…」

俺達は光に包まれ、ひとつになった。沢山の人の願いや祈りが今も聞こえる

廻里「そうですね…」

修一「力が湧いてくる…!」

想「確かに…やっぱこの光のお陰なのかな」

廻里「多分、そうでしょう。さあ…行きますよ?」

お互いに軽口を叩きあいながら微笑み――だがその時間も
終わりだ

修一「ああ…そうだな!」

想・修一・廻里「最後の戦いだ!」

く外側く

ガミオ「「貴様がどんな姿になろうとも…俺には絶対に勝てぬ!」

そう叫び相手の背後に回る。相手は1歩も動く素振りもなかった。現に自分が後ろに回っても何もしてこないからだ。

ガミオ「「俺の…勝ちだアアアツ!」

リサ「危ない!」

そう高らかに勝利宣言をし、拳を光の巨人のみぞおちに叩き込もうと…

想・修一・廻里「…っ!」

だが光の巨人は見向きもせずとその攻撃を片腕で受け止める。

ガミオ「「なっ…!?」

想・修一・廻里「「はあっ!」

代わりに飛んできた光を宿した拳がガミオを殴り飛ばした。少し

家を巻き込みながら転がる

く花咲川女子学園く

紗夜「光…」

紗夜達もまた、花咲川女子学園の屋上から見えるだけのものは見ていた。雷が降り注ぎ――化け物が巨大化したり…

――銀色の巨人が現れたのを…見ていた

燐子「すごい…まるで…ゲームのキャラクターみたいなの…」

「こころ「銀色の巨人だわ！…きつと想ね！」

こころが笑顔でそういう。後ろにいた美咲がやれやれと首を振りながら言う

美咲「また無茶したんですかね…」

その横にいた千聖が歩み寄り、美咲に微笑みながら言った。

千聖「彼の事だしやりかねないわね…」

2人は苦笑した。

美咲「でも…勝って欲しいな」

千聖「彼を誰だと思ってるの？奥沢さん」

美咲「そうですね、負けませんよね。自分達の知ってる彼なら…」

千聖「ええ…」

その時だった。2人から水色と黄色の光が銀色の巨人に飛び立った。

美咲・千聖「あ…」

そんな声を漏らした美咲と千聖、だが他にも彩やイヴ、その場にいる人が…

「こころ「綺麗な光ね！」

こころがはしやぎながら飛び跳ねる。その光は花咲川女子学園全員から溢れだし、とまることを知らず銀色の巨人に流れていく。

ガミオ「俺は負けんぞオオツ！」

恐怖を押し殺し、そう叫びながらこちらへ走ってくるガミオ。

想・修一・廻里「たあっ……！」

俺たちは息をひとつにし、ガミオの腕を掴み背中を転がせて地面に叩きつけた。

ガミオ「ガアッ……!?!」

叩きつけられたガミオは苦しそうな声を漏らす。だが諦め悪く立ち上がり俺達に死角から蹴りを放とうとする……

ガミオ「っ!?!」

想・修一・廻里「……っ」

だが俺達はまた片手で防ぐ。腕をのけ払い今度は俺たちが振り向きざまに肘打ちを腹部に叩きつける。

ガミオ「グッ……!?!」

叩きつけた瞬間、何かが爆発するように俺たちの腕からエネルギーがスパークする。

さながら追い討ち攻撃だ。

呻きながらよろめくガミオに、俺達は――今度は両腕にエネルギーを灯し、十字に切り裂くように肘打ちを叩き込む

ガミオ「ゴアアアアッ……」

民家を巻き込みながら吹き飛び、膝を着くガミオ。

想・修一・廻里「……」

俺達はガミオに近づいていく。

ガミオ「何故だ…何故だアアアアアッ！」
ガミオは心から湧き上がる恐怖を叫びで押し殺し、先程俺達を襲った雷を放とうと構えた。

〽羽丘女子学園〽

ひまり「やばいよ…！」

ひまりが近くの巴の方を揺さぶる。

巴「大丈夫だ…ひまり…！」

だが巴は恐怖を何とか噛み殺しひまりにそう言う。

〽花咲川女子学園〽

紗夜「あれは…！」

それぞれが先程を見ていて知っている、あの威力…流星に銀色の巨人でももしかすれば耐えきれないのかもしれないかもしれない。

リサ「…！」

リサも再び危機に落とされる。だがそんな場所に似つかわしくない優しい風がなびく。

想『大丈夫…』

その風と共に聞きなれた声が入る。リサだけでは無く後ろにいたあこと友希那、Afterglowにも聞こえたのである。

いつも勇気をくれる彼の『大丈夫』

それはこんな状況にも優しく心に染み渡り、恐怖という名の氷を優しく溶かしてくれる。

ガミオ「死ねエエエエッ！」

先程よりも一段と威力の増したように見える電撃が銀色の巨人を

襲う。

想・修一・廻里「…っ！」

蘭「っ!？」

羽丘女子学園では蘭達が意味もない、そう分かっているながら身構える。迫り来る電撃に備え…

美咲「危ないころっ！」

花咲川女子学園では、1番先頭に立っていたところを助けるべく美咲が抱え込もうとする。

そこから分裂したエネルギーが民家を焼き付くし…羽丘女子学園や花咲川女子学園を襲う…

はずだった。

日菜「あれ…?」

自分たちに迫ってきたはずの電撃が無かった。確かにさっきまでは眼前に迫っていたはずだ。その事につぐみも友希那も蘭も

千聖も美咲も紗夜達も全員が疑問を浮かべていた。だがその疑問もすぐに解けた

ガミオ「ッ!？」

ガミオは『勝った』そう高らかに宣言しようとしていた。だがそれは妄想だけで終わった。心底腹ただしい。だがより一層の畏怖が襲う。

想・修一・廻里 「もうその攻撃は分かってんだよ！」

俺達は光から造り出した球体を片手にそう叫んだ。球体の中では先程ガミオが放った電撃が溜め込んであり、今か今かと激しくスパークしていた。

あこ 「すごい…かつこいい…！強い！」

ノアの内部へ

修一 「とどめだ！」

そう言いながらエネルギーをバーストさせようとした修一を止める

想 「いやまて…！」

修一 「なんでだよ…!?もう倒せるんだぞ！」

想 「ああ、それは分かっている。だがアイツらグロンギは爆発力が凄まじいんだ。ダグバの時は殴りあって爆発はしなかったが…こいつはそうはいかないらしい…！」

廻里 「なら…宇宙に飛ばすとか？」

修一・想 「それだ！」

俺達2人は声を揃え叫ぶ。廻里はそれに目をぱちくりさせてため息をひとつ

廻里 (この人達本当に今までどうやって戦って生き残ったのだろうか?)

一気に2人が心配になってしまった廻里。だがそれも一瞬、すぐに思考を戦闘に変える

想・修一・廻里 「せあつ！」

俺達は暴発しそうな電撃を宿した球体を左手に流し込み、構える。

ガミオ「ガアアアアアッ！」

俺達を殺そうと走り迫るガミオ。その右手には俺と同じ電撃を宿していた

想・修一・廻里「はああああッ！」

俺達は走り迫るガミオと同じように走り始め
——————
タイミ
ングを見計らい全身を右回転させる。

想・修一・廻里「吹……き飛べええッ！」

回転し、さらに威力の増した左手をガミオの腹部に持ち上げるように叩きつける。

ガミオ「ゴアアアアアアアッ!!」

アツパーのように叩きつけた左拳から電撃の波動が飛び出し、ガミオを空高くに吹き飛ばす。

——————
ガミオは花咲川1高いビルを超え、黒く広がる雲を超え、大気圏を超え……

——————
遥か彼方の宇宙までやってきた

ガミオ「フンッ！」

流星に宇宙まで行くと銀色の巨人のアツパー光線の威力も落ちるのか、ガミオはその光線を両手で振り払った

ガミオ「はあ……はあ……あの人間どもがあ……！」

怒りのあまりこめかみに血管が浮く、何故人間共にこれだけの力があるのか……

かつての人間にこのような力はなかった。我々グロンギが一方的に殺戮を繰り返しそれに怯えるだけだった。怯えてればよかったのだ。何故抗う、何故絶望を否定する

く地球く

想・修一・廻里「ふっ…！」

俺達は宇宙空間でトドメをさすべくあえて技で倒そうとする。一か八かの賭けだ

俺達は両腕を縦に構える。炎のようなエネルギーが腕に流れ込んでくる

エネルギーを貯めて放つ。今の俺達は自然と見えない力に押されるようにその行動をしていた。

両腕を広げ右手と左手にエネルギーを凝縮させる。凝縮させたエネルギーが激しく光る。

あこ・巴「いけええええっ！」

想・修一・廻里「…！」

気づけば俺達はたくさんの人達に…彼女達に応援を貰っていた

紗夜「やってください！」

燐子「が、がんばれ…！」

日菜「やっちやええ！」

沙綾「頑張って…！」

廻里「…いきましよう！」

修一「ああ…！やろうぜ！俺達3人の力で！」

『頑張って!!3人の“ヒーロー”!!』

想「ああ…！やるぞ！これで最後だ！息を合わせて光線を放つぞ！」

修一・廻里「分かった！」

腕を広げていた銀色の巨人が動き出す。

ガミオ「させるかアアアッ！」

それより少し前に動き出したガミオ、宇宙空間から出ることは叶わずとも妨害はできる。電撃を最大まで溜め込み、右手首に左手をうち

つけ、光線のようにして放つ

想・修一・廻里「ライトニング・ノア!!」

対する俺達は、右手首に左拳を打ちつけるように腕を組み、幾重もの超絶光子プラズマを重ね合わせて放たれる眩い七色の光線が俺たちの手から放たれる。

大気圏辺りで黒い電撃と七色の光線が激突する。その衝撃は凄まじく、こちらにまでその波動のような風が吹く。だが誰も目を閉じようとはせず、ただただ放たれる虹色の光線に見惚れていた。

日菜「虹みたいだね…」

日菜がそう呟く。隣にいたりサも「そうだね…」と涙を流しながら言った

六花「でら綺麗や…」

く花咲川女子学園く

こころ「美咲! 凄いわ、虹よ!!」

こころがさつきよりもはしやぎながら走り回る。美咲はいつも通りのこころに苦笑いしながら…虹に見惚れていた

美咲「光…かぁ」

ガミオ「負けるものか…! ———— この私が負けるものかアアアアアツ!」

こんな奴に負けるなど自身のプライドが許さない。もう何がなんでも倒す………例え相打ちになったとしても…

腕により一層の力を込め、迫りくる七色の光線を押し返そうとする。

ガミオ「…よしっ…!!」

辛うじてだが、少しずつ…少しずつ、着実と押し返せている。

想・修一・廻里 「うおおおおおッ!!」

俺達は再び迫り来る電撃を必死に押し返そうと吠える。自身の力を全て振り絞るように…

外で応援してくれている皆さんの人たちのために

……!

ガミオ 「っ!?!」

先程まで押していたはずの光線が、再び自身に向けて戻ってきてくるのをガミオは見た。

ガミオ 「何故だ…! 何故だ何故だ何故だ!!」

込み上げてくる畏怖を押し殺し叫ぶがこちらへ迫り来る光線は止まらない。

『頑張れ!!』『いけええ!』『倒せええ!』

俺達は今まで感じたことの無い全能感を感じながら再び光線を押した。

想・修一・廻里 「これで最後だ!!」

そう3人で叫び腰を低くする。腕から放たれる光線がいつそうそ

の輝きを増す。

想・修一・廻里「「おおおおっ!!」」

輝きをました光線が、ガミオを貫くまで時間はかからなかった。

ガミオ「「グオアアアアッ!」」

ガミオの光線を押し戻し、体にぶつかる。七色の光線はそのままガミオを貫き……

——宇宙に、かつてないほどの爆発が起こった。

く地球く

想・修一・廻里「「はあ…はあ…はあ…はあ…」」

俺達は光線の体勢をやめ、一気に崩れ落ちかける。その時だった。想・修一・廻里「「…!?!」」

周りの景色が突如として小さくなってゆく。それはまるで…光が消えていくような…

——そして、極めつけ強い光が俺たちを包み込んだ

想「…っ！」

気づけば、俺達3人は元通りになり、羽丘女子学園の運動場に立っていた。

廻里「終わった…終わったんですね…！」

修一「ああ…そうみたいだな…！青空が眩しいぞ…！」

想「勝った…やった…！」

俺達3人は一気に崩れ落ちた。だがまだそれだけで終わりではなかった。

気づけば、沢山の人達が俺たち3人を囲んでいた。

修一「あ…？」

顔を上げるのもつらそうに修一が呻くと同時に…突如として浮遊感が体を支配した

想「なあっ!？」

修一「おわっ!？」

廻里「えっ!？」

日菜「バンザーイ!!」

つぐみ「ば、バンザーイ！」

巴「お疲れ!!バンザーイ！」

様々な生徒や先生達から俺達はいわゆる“胴上げ”をされていた。俺達は浮き沈みを繰り返しながら微笑む。

約5分間…胴上げは続いた

想「俺と戦ってくれてありがとう、2人とも」

俺達は1度集団から抜け出して羽丘女子の屋上に来ていた

修一「いや、困ってる人を助ける。当たり前のことをしたまでさ」

廻里「はい、リサ達を放つてはおけませんから…」

想「2人とも…ほんとにありがとう…」

俺は笑いながら――涙を零していた

廻里「そろそろ：お別れみたいですわね：」

修一「なんだか名残惜しいなあ：！つたく！」

2人からも光るものが流れていく。彼らの体が光に包まれ、下から消えていくのだ

俺は知っていた。この世界で自身の役目を終えれば元の世界へ帰る。俺も1度は体験したことがある――なぜか記憶からは抜け落ちていたが廻里の時にあったのだ。

想「この日あった事は絶対に忘れない：」

修一「当たり前だ：そもそも忘れられないっての：」

廻里「修一さんの言う通りですね」

そういうふたりは、もう顔しか残っていないなかった。

想「あはは：：：じゃあ、また会えたらいいな」

廻里「また会えたら：今度こそ話が見たいですね」

修一「ああ：3人で盛大に話したいよ！」

想「叶えられたら：いいよな：」

それを最後に、2人は消えていった

いや、元いるべき世界へ帰って行った

想「うう：うああっ！」

俺はまた泣いてしまった。確かに過ごした時は一瞬だったかもしれない。だけれども：その少しの間で素晴らしい程の“絆”を紡ぎできた

リサ「みーつけた」

気づけば、いつの間にかリサがいた。俺は涙を見せまいと必死に拭き取る。だが溢れる涙は止まることを知らない。そんな俺を：リサは優しく包み込むように抱き寄せ：頭をそつと撫でた

想「：リサ」

リサ「1人で泣かなくて大丈夫だよ」

想「泣かしに来てるだろ：それはよお：」

リサ「辛かったよね：苦しいこともあったよね：」

想「だからそれは…泣かせにきてるって…」
喋るのも困難になるくらい、俺は鳴咽を漏らしながら泣きじやくる。リサはただずっと…俺の頭を撫でていた。

〜2時間後〜

日菜「あゝっ！、みーつけ!!」

リサ「しー…」

しばらく探し回ったのだろう日菜が、大声で言おうとした時だった。リサはそれを優しく止め、下を指さした

想「すう…すう…」

夕日に照らされた羽丘女子学園屋上に、彼はリサに膝枕をされながら寝ていた。目は真っ赤に腫れ、それ程泣いたのだなと思わせた

リサ「彼…疲れちゃったから…寝かせてあげて」

日菜「うん、わかった。」

そう言うと日菜は隣に座り、寝顔を楽しそうに観察し始めた

日菜「前にもこんなことあったよね〜」

そんな日菜の質問にリサは苦笑する

リサ「ふふっ、あったね〜」

あれはまだ最初の頃、羽丘女子学園をトライチエイサーで走り回りあのヒョウの怪人を倒した時だった。夜になるまでひたすら日菜を膝枕していた彼を思い出す

日菜「あの時のことはほんとに後悔してるよ」

リサ「彼…めっちゃくちや怒ってたよね」

日菜「でも許してくれたな〜」

クウガのベルトを欲しいと言った日菜、彼は当然断った。だが日菜には分からなかったのだ。

想『これはそんな簡単に触れていいものじゃないんで』

だがその言葉の意味もすぐ思い知らされた。化け物との戦いで、彼はどれだけの覚悟で戦っているのか…

戦いが終わった後、日菜は自分の過ちを素直に謝った。怒られるか

と思いきや彼は優しく許してくれた。

日菜「ほんと…想くんって不思議だね」

リサ「そうだね…」

友希那「あら、2人ともこんな所にいたのね」

丁度、片手にペットボトルを持った友希那がいた

リサ「友希那…それは？」

リサは友希那の持つペットボトルを指さした

友希那「ええ、彼ずっと戦ってたから水くらいはいるかなと…寝ているのね…」

友希那は眠る彼を見て少し微笑む。

友希那「花咲川女子学園にいたバンドメンバーも来てくれたわ」

日菜「じゃあおねーちゃんいるのか！会いに行ってくる！」

その言葉を置き去りに、日菜は走り去って行った。

リサ「ほんと紗夜のことが好きなんだね…」

友希那「ええ、そうね…」

想「すう…すう…」

自分たちを照らす夕日が少し眩しい中、この戦いの功績者は眠りに
ついていた

最終回

笑顔を作る物語

く2ヶ月後・羽丘女子学園、屋上く

想「街もだいぶ元通りになってきたな」

リサ「そうだねく」

ガミオが来て、俺達がひとつとなり戦ったあの事件から2ヶ月。町は順調に復興を進め、今はほぼ元通りになっている。

だがこの事件で失われた命は戻ることは無かった。

一方この事件は、世界的なニュースとなりそれを救った俺はめっちゃくちや偉い人から勲章的なものを貰うためにアメリカに飛び立った。めっちゃくちや偉い人やのセレブやのに囲まれて食事が通らなかつたのを覚えてる。まあ味覚ないし何食べても一緒だけど

本来ならあの二人も受け取るべきなのだが：

俺はそこまで考え…その考えを辞める。その代わりにリサ達にとって重要なことを聞いた

想「そういえばリサ、そろそろ大学受験じゃなかったか？」

俺は隣にいるリサに首を傾げる。それにリサは頷き、笑顔で答えた
リサ「うん、今友希那と猛勉強してる！」

想「そうかそうか…」

最初は大学なんか行かない、そう言っていた友希那が今じやリサと同じ大学に行くと言っているらしい。その為に猛勉強中なのだとか

リサ「想くんこそ、進学できるの？留年しない？」

からかうように聞いてくるリサに俺は心臓を跳ねさせる。

想「あー、うー…正直キツイかも…」

今まではグロンギに追われ、中々出来ずに、今必死にやってはいるのだが…全然ついていけない…

やっぱグロンギって分かり合えんな（自業自得）

リサ「未確認で忙しかったのは分かるけどね…時間縫えばできたはずだよ？」

想「はい…反撃できません…」

俺は完璧に項垂れるだけとなった。そこにとある集団がやってきた。

モカ「やつほく」

リサ「モカ！とひまり達じゃん！」

ひまり「こんにちは！…あ」

ひまりは俺とリサを交互に見て、その場を離れようとした。

想「ちよいまてや、なんで帰ろうとした？」

俺は慌ててひまりの肩を掴み話した。それにひまりは顔を赤くしながら言う

ひまり「2人は恋愛してて屋上…そういう事じゃないですかあ！」

想「ちげえよ!!」

俺は「はわわ…」と言うひまりに大声でツツコミ返した

想「ったく…とんでもない誤解だよ…」

巴「あのなひまり…」

ひまり「すいません…」

リサ「まあまあ…蘭？」

リサはえらく端にいて、少し居心地悪そうな蘭に話しかける。

リサ「なんでそんな端にいるの？」

蘭「いや…彼にまだ謝れてなくて…」

リサ「なるほど…蘭はどうしたい？」

蘭「もちろん…謝りたい…！」

蘭は未だ自身のせいで今回の件が起こってしまったと言っている。もちろんそんな事彼は気にしていない。リサはここでひとつ、考えたリサ「お〜い！想くん！」

ひまりを囲みながらあーだこーだ言ってる彼を呼ぶ。彼は1度「自分？」と言いたそうに指をさし、リサが頷くところらへ来てくれた

想「どうした？」

蘭「あの…」

リサ（頑張れ〜蘭！）

蘭「前のこと…私のせいで…ごめんなさい…！」

想「…」

蘭「私がわがまま言つて…助けてくれて、庇つて…」

想「蘭…」

俺は涙を流しながら謝る蘭の頭を無意識に撫でる。視界の端で騒ぐつぐみ達は無視しよう…

蘭「…！」

想「俺はもう気にしてないし…大丈夫だ。今こうやって生きてるからな」

蘭「…」

想「だからもうそんなに思い詰めんな、分かったな？」

蘭「…ありがとう」

リサ「じゃあこれで解決！戻ろ！」

想「そうだな…行くぞ蘭」

蘭「うん…」

そうやって俺達3人は歩き始めた。何をしてたかを問い詰められたのはまた別の話…

〈circle〉

まりな「いや〜、まさかcircleのスタッフのひとりがかこまで有名人になるとは…おねーさん嬉しいなあ〜！」

想「あはは…まあでも有名になっても俺のやることは変わりませんよ」

まりな「今まで通りRoseliaのマネージャーやるの?」

想「はい、全てを賭けるって誓いましたから…」

まりな「そっか!なんだかいつも通りの想君で安心した!」

想「え?」

まりな「ほらだって…未確認達と戦い続けてどんどん強くなっちゃって…私達じゃ追いつけないようなところまで来て」

想「まあ…そうですね」

味覚を無くして、グロンギとなった俺。それでも彼女達は俺を受け入れ、いつも通り接してくれていた。

まりな「でも…その調子だったら大丈夫そうだね!」

想「あはは…、あ!そろそろ来るな…」

俺がそう言った瞬間、circleの扉が勢いよく開く。

あこ「こんにちは〜!」

紗夜「宇田川さん…!静かに入ってください!」

リサ「紗夜も大概だけどね…」

紗夜「え…!?!」

隣子「あはは…」

紗夜「白金さん…!」

友希那「…リサの言う通りね…」

紗夜「湊さんまで…!」

俺は入ってきた瞬間はしやぎ始めるRoseliaの元へ歩み寄り言葉を放つ

想「はいはい…お前ら静かにしろ…」

リサ「想く〜ん!!」

想「いきなり抱きつくなあ!!」

あこ「あははっ!じゃあ私も!」

紗夜「なら私も…!」

そんな俺達を見守るように…青空が輝いていた。

〈7年後〉

想「おうおう…」

俺はリサから渡された紙を見てアザラシになった。

リサ「おうおうおう…」

リサも俺に並びアザラシになる。俺は吹き出る嫌な汗を懸命に拭きながらお茶を飲もうとする

リサ「アタシ…お母さんになった」

想「ブフォツ!!」

汗を拭きながらお茶を吹くというもう訳が分からん体験をしなから、俺は机を拭き改めて口を開く

想「つまり…できた…という訳ですか？」

リサ「そうだね、しばらくRoseliaもお休みかな」

想「リサがお母さんか…」

FWFを大盛況で終え、今では世界的にあつちこつちに引つ張りだこのRoselia。一方でそのマネージャーである俺もなぜか有名になり、様々なスカウトを受けている——全部断つただか…

今人気のRoseliaのベーシストが妊娠でお休みします。そんなもの世間が知れば多分俺は明日にでもこの世界を追放されるかもしれない…

リサ「そんなガチガチにならなくてもいいでしょ？アタシ達正式に結婚してるじゃん！」

想「あ、ああ…確かにそうか…うん、そうだよな！大丈夫だな！あつはっはっ！」

結婚式…あれはほぼカオスなことになった。祝いに来たのが日本でそれなりに人気なポピパ、地元で大盛況な after glow、アイドル界で今や最強のパスパレ、幼稚園や小学校のイベントに引つ張りだこのハロハピ。その他まりなさんなど…

日菜が俺にケーキぶちまけたり…

思い出すだけで頭が痛くなる。

想「そうか…それにしてもさ、リサも変な奴だよな」

リサ「いきなり変な奴呼ばわり!？」

想「だつてさ…一軒家で暮らそうかなと思いきやまさか俺が住んでるこのマンションで暮らしたいって…」

リサ「ええ、いいじゃん！黒服さん達も許してくれてるし…」

想「あの人達にお世話になった分のお金はちゃんと返さなきゃな」もちろん黒服達には「大丈夫」と言われたが俺が大丈夫では無い。

約1時間ゴリ押しした結果受け取ってくれた。

リサ「でもビートチェイサーだけは手放さないよね？」

想「あれで俺は気晴らしに風と一体化するんだ…」

リサ「大体寝坊した時に急いでるけどね…」

想「…うるせーやい」

リサ「あははっ、ごめんごめん」

2人は苦笑する。こうやって他愛もない夫婦の会話も沢山してきた。もちろんこれからもするけど…

その時、インターホンが鳴った。俺とリサは顔を見合わせて微笑む

想「来たな」リサ「来たね、じゃ出てくる!」

想「おう、じゃあ俺は飲み物でも入れてくるわ」

俺はキッチン、リサは玄関へ歩み寄る。

あこ「お邪魔します!!」

友希那「お邪魔するわ」

燐子「お邪魔します…」

紗夜「お邪魔します…おや、この匂いは…」

想「ああ…新作パイと言うものを作ってみたんだ」

あこ「ほんと!?!あこ想兄の作るパイ大好き!!」

リサ「いや…まさか、こんなに上手になるとね…」

想「いい趣味になってるよ」

俺は飲み物とパイを差し出す。

今まで趣味というものを作らなかつた俺だったが、リサの料理を思い出して自分も作ってみようと思った。味覚が無いという欠点をなんとか乗り越えて、今はようやく人に出せるようになった程だ。

友希那「味覚は…まだみたいね」

想「ああ…でも不便はしてないしいよ。しかも食べ物食べたらいつか戻るだろ…」

俺はそう言いながら味のしない食べ物を口に入れ……………

想「美味しい…」

R o s e l i a 「!?!」

俺の一言に R o s e l i a の全員が驚く。俺は1口、もう一口とパイを口に入れる。味がする。美味しい。

想「…あ」

俺は気づけば涙を流していた。

リサ「今…美味しいって…?」

想「ああ…美味しい…味がするんだ!」

あこ「やったー!!味覚が戻ったんだよ!!」

リサ「ほんと!?!じゃあ色々食べて欲しいんだけど…」

想「だあく!?!お前から感動を台無しにする気か!?!」

友希那「ふふっ…」

紗夜「ふふっ…」

隣子「よかつたですね…」

想「隣子は許せるがお前ら2人!?!許さんからな!?!」

この後しばらく色々食わされて、しばらくトイレから戻って来れなかつた八意想であった。

（墓地）

リサ「これだけは欠かさないね…」

想「ああ…俺にとつてとても大事な人だからな」

俺は今、一条さんのお墓に来ていた。7年間、絶対に1週間に1回は行く決めていた。例えばどれだけ忙しくても…

リサ「とつても強い人だよな」

想「ああ、もうそりやすごいぞ」

リサ「ふふっ…多分一条さんも喜んでるよね、きつと…」

想「うん、でも多分無理しすぎだろ！って、怒られそう」

リサ「あははっ、でもそれは無茶する想くんが悪いかな」

想「まじか…」

俺は墓に歩み寄り、手を合わせる。

想（未確認生命体事件から7年経ちました…俺も味覚が治って結婚もしました…）

『頑張ったな…お疲れ様…』

想「…!？」

一瞬だが風に乗って一条さんの声が聞こえた気がした。俺は目を見開き、涙を零す。

想「一条さん…!」

リサ「想くん…?」

想「いや…なんでもない…」

俺は立ち上がり、リサの手を繋ぎその場を後にする。一条を埋葬した墓は、まるで彼らを見守るような、そんな気がしていた

たくさん辛いことがあった。

だけどそれ乗り越える力があった。

そして彼を信用する仲間があった。

そして究極の闇を打ち砕いた。彼らの勝ちだ

これはある日全てを失い、それでも必死に生き続けたとある高校生の“人生”という冒険記、彼はこれからも困難と出会おうだろう

でも：彼：彼らなら大丈夫。

自分の笑顔を守り：他人の笑顔を作る：

想「笑顔を作る物語、そういう日記にしようかな？」

ノート1冊とペンを手に持ち唸る。それにリサが昔から変わらな
い笑顔で答える

リサ「あははっ！想くんらしい名前だね！」

〈 F i n 〉

特別篇 今井リサの誕生日

くそこら辺の歩道く

「…うくん…? ……違うだろうなあああ…!!ホントなんで俺、こんなに恋愛…わかれななんだ…!?!」

心の底から自分の育ってきた環境を呪った。かつてないほどに、心の底から……………

「リサの誕生日プレゼント…、一体何にすればいいんだよおおおお!!!」

近所迷惑お構い無しに、俺は心から叫んだ。

く羽沢珈琲店く

「という訳なんだ小川。力を貸してくれ」

俺は机が抜け落ちるくらいの力で頭を付けていた。つぐみとイヴが一体何事かと覗いているのをお構い無しに…

「なんで私に聞く? ……普通聞く?元殺し屋に、恋愛とはかけ離れた世界にいた私に」

「お前も俺と同じか…!?!」

選ぶ相手を間違えたかもしれない。何でも知ってると思っていたが見当違いだった。そういやこいつも俺と同じで掛け離れた世界に生きてたんだった…

「…まあいいや、どうせ暇だし…」

「まじ?」

「大マジ」

「ありがとう…いつか礼するわ」

俺はそう言い、早速話し合いをしようとした時だった。

「私達も手伝いましょうか？」

「お手伝いします！」

「イヴ…！つぐみ…！」

奥から眺めていた羽沢珈琲店の看板娘約2名が仲間となってくれた。よし!!頑張るぞ!俺!!!

〜5分後〜

イヴとつぐみが揃い、菓子類をつまみつつ、それぞれコーヒーや紅茶を片手に話し合いが始まった。

「下着なんてどうでしょう!？」

「ブフオツ!!?!」「イヴちゃん!？」

イヴが突然言い始めたことに俺はコーヒーを吹き出し、つぐみが驚く。

「ほーん、中々いいじゃん」

小川だけは、何か知らんが賛同的な意見を出していた

「よくねえよ!!入りにくいにも程があるだろ!？」——俺は男だぞ」

「でも1番使うだろ、女は…イヴもつぐみもそうでしょ?」

デリカシーの欠けらも無い質問に、イヴもつぐみも頷く。

「…他だ!他!」

俺はこれ以上小川の流れにしないように話を切った。

「花!!」

「枯れちやうともつたいない…」

「水着…!とか?」

「うん、とりあえず下着系統から離れよう」

「香水？」

「俺がわからん。変な匂いだとりサも困る」

「小説！」

「恋愛小説好きだったな……ありかも」

「そーいや八意、お前もうプロポーズしたのか？」

小川がふと、気になったように聞いてきた。

「……してねえよ……どうすりゃいいか分からんし……」

俺は顔を逸らし呟いた。実際もうしてもいいくらいには……多分、大丈夫なはずだ(?)

だが俺はその面に関しては信じられないくらいへのたれだ。もし……とか考えてしまうともうダメだ。

「そーやって悩んでる間に盗られるかもよく?」
——リサって10
0年に1人くらいの良物件だから」

「…………盗られる……か」

そーいえば前の彼女……も俺が迷ってる間に……、

「指輪……か」

「ネックレスもありかもな?」

「じゃ両方だ」

「まじかよ……」

値段は考えない。もう考えるのはやめよう、

「で、これってどんなのがいいんだ?」

「……………はあ…」

イヴとつぐみはお店があるのでお別れし、小川と二人でアクセサリーショップに来た。まあ…恋愛に疎い2人が来ると、首を傾げてばかりだ。

「これとか?」

「キラキラしすぎじゃね…」

「じゃあこれとか?」

「…なんだこれ」

「ダイヤモンドで作られたカエルの指輪」

「……………無駄に作り込みあるな…却下」

「ちえ……………じゃあおでんの卵の指輪」

「なんだここ…本当にアクセサリーショップか?コンビニ見てえだな…」

そんなふたりを見兼ねたのか、とうとう奥にいた店員が俺たちに声をかけてきた。

「あの……………結婚指輪ですか?」

「あ、はい……………全然選べなくて…」

俺がそう言うと、店員さんが俺と小川を視線で往復する。そして……………

「お似合いですね!!」

「違います!!!」

俺と小川は顔を見合せ、同時にツツコんだ。

〜2時間後・夕方〜

「だあああつ！疲れたあああ！」

公園のベンチに思いつきり腰掛け、項垂れる。

「お疲れ、ほら」

「おっと…さんきゅ」

近くの自動販売機から買ってきた飲み物、その片方を俺に投げて横に座る。

「あとは本人に渡すだけ、お前出来るよな」

「えっ、ああ…もちろん…」

「そっか、なら…お、来た」

「…？——まじかよ…!？」

指さした先にはリサがいた、まだ俺と小川には気づいていないが多分数十秒足らずで見つかるだろう。逃げるべきか…!？」

いつもは見なれた顔が見れない。心臓が痛いくらいにバクバクする。

「らっ！行ってこい!!」

「はっ!?!——えあああつ!?!——いてっ?!!??」

「えっ!?!想くん!?!」

俺はカッコつけるどころか、リサの前の地面に顔から着地し倒れるというお笑い芸のようなことをやった。

「えっ?小川さんに呼ばれて来たんだけど…」

「あ、ああ…」

「…?何その紙袋…」

「へあつ!?!——ああ!!これ…ああ…えつと」

ダメだ、顔が見れない。自分の心臓の鼓動が痛い。今リサはどんな顔をしているだろう。怖い……

『人と話す時は相手の顔を見るんだ』

リサの後ろに、誰かの姿が半透明に現れた。

見なれたスーツ。見なれた髪型。そして…声

「一条………さん………」

風に吹かれたら消えそうな声で、俺は名前を呟いた。

『どうしたんだ？俺の知ってるお前は、いつでも迷わず突っ込む奴だったぞ？』

今にも吹き出しそうな顔で一条さんが喋る。

「………ああ………」

俺はそれに応えると、どこか安心したように消えていった。ほんとは何やかんやで俺を心配してくれる優しい人だ

「リサ、伝えたいことがある」

俺はリサの瞳を捉え、話し始めた。もうさっきのような迷いはない。リサも真面目な話なのだろうと悟ってくれ

「うん」

と言った。

「…そのく、なんだ。俺達も付き合って2年くらいだ…」

自分なりに気持ち伝えよう

「あはは、もうそんなに？———最初はほんと…信じられなかったや…」

「俺はリサに迷惑かけてばっかで…彼氏っぽいこともまだちゃんと、してやれてない」

「先に逝ったと思ったら帰ってくるし…ほんと心臓何個あっても足りないよ…」

「それは…すまん…それでだ…」

頭が…白くなる。考えていたことが全て白紙になってしまった。日本語がおかしくなる…

「俺と……俺と………」

紙袋から中身を取り出しつつ、舌を噛んだ。決められない…

「俺と…結婚してください…!!」

「!?」

白い箱を開けて、リサに向けながら俺はそう言った。さつきまで見れていたリサの顔がまた途端に見れなくなった。

(落ち着け俺…俺は…きつと大丈夫だ…)

「ふふっ…」

「…?」

リサが笑い、俺はリサを見た。彼女は目から涙を流しながら、笑っていた。

「……喜んで…」

そして、涙を拭った顔で、俺にそう言った。

—— 周りの景色が見えなくなるくらいに、綺麗な笑顔で

「ほんとアイツって鈍感…」

隠れたところで見守っていた小川の瞳にも涙があった。それは喜び、そして…悲しみを含んだ涙。

「…まあいいや……」

ベンチから立ち上がり、彼らの元へ行く。そして伝えなければならぬことを

「八意、リサの誕生日明日な?」

「あ」

第7章 不可能犯罪

page 1 あれから2年

科警研・AM4:00

「ふう…」

PCから目を離し、メガネを外して伸びる榎田。助手の1人がコーヒーを片手に話しかける

「お疲れ様です。先生」

「あ、ありがとう！」

渡されたコーヒーを一口口に含む。

「もうすぐ、完成しますね」

「うん、もしこれが上手くいけばきつと…」

そこから先は誰も何も言わなかった。この計画が始まってから既に2年、科警研と警視庁全体は同じ目的を持って動いていた。

あの日、ある高校生が運命に選ばれ、傷つき、それでも立ち上がった戦った物語。忘れるはずがない、忘れられるはずがない。

休憩がてらコンビニに行こうと思いきや立ち上がって、ふと足を止める。35人の女子高生に囲まれて撮られていた写真。その真ん中に写る二人の男。

「ねえ、一条くん…」

その片方の男の名前を呼んで、そつと呟いた

「この計画に君がいてくれたら…どれだけ頼りがいがあっただろうね…」

呟いて、その先は口を噤んだ。そうして足早に去る。

榎田のPCのディスプレイにはこう書いてあった

〜八意宅AM8:00〜

「……」

俺、八意想は今日から大学一年生である。正直大学に行けるとは思ってたなかった。

「実感わかねえな……」

未確認生命体事件が終わり、その後の1年で死ぬ程勉強した。お金は……言わずともわかるだろう弦巻家が出してくれた。そろそろ頭が上がらないどころか頭が埋まって行きそうさ。

ちなみにRoseliaのマネージャーにもなった。デビューをした彼女達を何気なく支えている。

「んで、入学式の時間が……何時だっけ？」

「9時からだよ？」

「ああそっか………っておい!？」

「おはよう想くん!」

誰もいない部屋で呟いたはずだったのだが誰かいた。正確にはリサがいた………というべきか……

「お前……いつの間に……」

俺は頭を抱えながら言った。今井リサはRoseliaのベーストであり自分の彼女だ。こんな俺を今でも見捨てずに一緒にいてくれる。

「合鍵だよ〜!ってかまだ用意終わらせてないの?」

「ああ……めんどくさ………いたっ!」

めんどくさいを全て言う前にリサの鉄拳制裁が待っていた。ホントいつから暴力するようになったんだこの子……

「ほら〜しゃきっとして〜!」

「へいへい……」

俺はそう言っ立ち上がり、残りの準備を全て終わらせた。

「よいしょつと……あ」

「もー！また駐車場行こうとするく、まだ慣れないの？」

ビートチエイサーを取りに駐車場に行こうとしたのを、リサに止められて気づいた。

ビートチエイサーはことが終わったあと、悪用防止のために弦巻家に預けた。処分してるかしてないかは分からないが、何せ使うことがないために今はきつと……

「……生なれないかもな……」

俺は無意識に呟いた。リサも何かを察したのだろう、顔を少し暗くする。

もう2年が立ったはずなのに、胸にはぽっかりと穴が空いたようで、今もそれはふさがらない。

(杉田さん、桜井さん、榎田さん……元気にしてるかなあそれに……)

一条さん。今はもう二度と会えない、遠くに行ってしまった存在。

「……大丈夫？」

「あ、ああ……」

リサに声をかけられ、意識が現実へ戻る。

「ちよつと、あなた達……」

「おはようございます……」

「紗夜：燐子もか」

駐車場から出た瞬間に、紗夜と燐子に声をかけられる。この2人は同じRoseliaで紗夜がギター、燐子がキーボードである。

多分リサに付き合わされて待っていてくれたのだろう。リサとは違って勝手には上がらないからこの2人は賢い

「…想くん？」

「ハイイヤナンデモナイデス」

これ以上言えばリサの機嫌を損ねかねない。今はただ前を向いて歩こう。

俺は昔の記憶を奥にしまい込み、再び歩き出した。

～海岸沿い・PM18:00～

「やっぱりこの風、いつ来てもすきやわあ～…」

「ははっ！ロックは本当に好きだなこー！」

夕陽が見える海岸沿いに、RASのロックとますきがいた。2人はチユチユの買い出しの帰りで、絶賛寄り道の最中である。

「怒られませんかねえ…」

「大丈夫だって！」

「…そうですよね！」

時間を忘れて、海を眺める。

「…ん？なんだ…？」

海を眺めていたますきが、ふと見回すのを止める。海辺に、人影が見えたような気がして…

「なあ、ロック？あれって…」

ますきが指さした所をロックが見る。

「ん…？…　　…つてええっ!？」

正体に気づいたロックな大声をあげる。

———人が、浜辺に打ち上げられていた。

くチュチュのマンションく

「で、アタシの家に連れてきたと？」

目線はPCに行っていたが、チュチュは今までのますきとロックの話聞いていた。

事は2時間前、海岸沿いでサボっていた2人は、浜辺に打ち上げられていた男性をなんとかかんとか持つて帰った。一応死んではおらず生きていた。

本来にはすぐさま警察に出すのが吉なのだろうか、焦った2人は何故かこのような行動に出た。

「すごい運の良い奴だぜ、まだ冷えてるのにな」

なんとという生命力なのだろう。

「しかも服まで着替えさせて今は寝かせてるって…ここは病院じゃないんだけど？」

「うぐっ…」

正論を突かれますきが黙る。チュチュは作業に集中していたため何をしたかは具体的には覚えていなかったが、なんかパレオがノリノリだったのは記憶にある。まるで母親だ…

「でもあの人に一体何が…持ち物も何も無かったですし…」

「いや、封筒が近くに落ちてたぞ。ほら」

そう言いながらますきが空の茶封筒を机に置いた。

「何も入ってないじゃない」

チュチュが中身を見ながら答える。他に何か書いてないかと思いい見回してみる

「…津上、翔一…？」

差出人の箇所に、津上翔一とだけ書かれていた。送り先は不明。

「アイツの名前か…？」

ますきが首を傾げつつ言う。

「かもですね…」

とりあえず本人が起きなければ事が始まらない。今はただ待つだけだ。

「…で、なんで2人は泊まり道具1式なわけ!?」 パレオまで!」

チュチュがさらなるツツコミを入れる。ますきとロック…そしてパレオの3人は何故か泊まり道具一式を持ってきていた。

「アイツ男だぞ、しかも多分アタシ達より年上。2人きりで安全な保証なんかないだろ?」

「た、確かにそうね…邪魔だけはしないでよ?」

「へいへい!」——とまあ許可も貰ったし!」

「…?」

「レイヤさんも呼んでRASの皆でパーティしましょう!!」

「What!?!ちよつと邪魔は…んぐつ!?!」

「はいはい静かにく!!」

それから先を言う前にますきがジャーキーで口を閉じさせた。

「チュチュ様!やりましょう!!」

キラキラとした目にチュチュの良心が揺さぶられる。昔からこういうのには極端に弱い。

「……………もうっ!!好きにしなさい!!」

一応部屋には所在不明の男性が寝ているのにも関わらず、RASの突然のパーティがはじまった。

↳羽沢珈琲店・PM・19:00↳

「はあ、もう疲れた不登校になりてえわ」

想がそう言っただけに伏せる。大学の入学式はそれはそれは大量の人の中行われた。想た単純に人が多いのが嫌いだである。

「すごい人もいっぱいいたよね!紗夜!燐子!」

「ええ、個人的に興味があったのがトランプを見ずに裏を当てる。不正を疑いましたが微塵もありませんでしたし…」

「私は…金庫を一瞬で開ける人でした…」

「胡散臭い超能力者まみれの大学に入っちゃまった俺…ここは芸人目指しの専門学校かっての…」

想と紗夜、燐子が入った大学にはもはや超能力レベルの人間が沢山いた。まあ見た目からして結構な陽キャだろう。俺は普通に過ごすを目標にしているためにできる限り関わりたくないメンバー達だ。(いやでも1部男から目線が痛かったつけ?)

そりゃあそうだ。初日から女3人、しかもそれなりに美人な奴らと歩いてるからな。羨ましいだろ。

「お待たせしました〜!」

「サンキューつぐみ、もう俺もすっかり常連だな」

つぐみが丁寧にお皿を置いて、頭を下げた。俺はつぐみを見ながらそういう

2年の月日のうちに、つぐみもだいぶ変わった。今では羽沢珈琲店の看板娘だ。

「いつでも来てくださいいね!」

「毎日行ってるよ…てかこれ見た事ないな…ひよつとして新作か?」

「あつ!ほんとだ!よく気づいたね〜!」

リサが感心しながら言う。

「当たり前だ。色んな試作食わされてるからな、舐めんな」

様々な新作のケーキやタルト、クッキーなどをさりげなく試食させてくるようになったつぐみ。最初は気づかずには食べてたら怒られたっけな。それから注意して見ていると試作大量にあった。

稀に交じっていたゲテモノも何作かあったな…

(思い出すだけで胃が…)

「…そういうやAfterglowは最近どうなんだ」

既に店仕舞いを終え、店内には俺たち5人だけだった。つぐみがリサの横に座る。

ちなみに俺は1人席、その横に4人席だ。1人席は個人的に大好きなので、Roselia全員で来ようが俺は近くの1人席に座る。

「こっちは順調!いつも通りで頑張ってるよ!商店街のライブだって

人が沢山なんだから！」

「ああ、知ってるよ。見てたし」

A f t e r g l o wの人気は根強い。メジャーデビューも夢ではないと思うのだが、蘭たちはその道を選ばなかった。

「ストーカーも現れたことあったなあ…巴ちゃんがやつつけてくれたけど…」

「げっ、ストーカーかあ…」

「俺なら3秒で潰す」

「貴方なら否定できないですね…」

リサがうへえとなり、潰す発言をした俺に紗夜が呆れ声で言う。燐子は…タルトを頬張っていたため静かだ

「…ははっ！——にしても皆元気かなあ」

俺はタルトを一口口に入れ考えた。

ポビパにパスパレにハロハピ、RASにモニカ。circleでの集まりが少しづつ減りつつあった。予定が合わなさすぎるのだ。

(なんかまた全員で集まりてえな…)

仲良く話す4人を片目にタルトをもう一口いこうとした瞬間だった。

『お前が、クウガか』

「っ!?」——誰だッ?!?!?」

俺は謎の声に反応し、椅子から立ち上がって叫んだ。俺の突然の奇行に4人が困惑する。

「…あの、想さん?」

燐子が俺の名前を呼ぶ。

「今誰かが話しかけてきやがった…少なくともクウガって言いやがった…」

「っ!?」

クウガという単語に4人が驚きの声を上げる。

「どこだ…出て来やがれっ!!」

俺は気配を探そうとして周りを見るがまるで気配がない。気配がないということはない

(まさか…未確認…!?)

『我々は、神に仕えし者…』

「神だと…!?!」

誰かがそういつた瞬間、近くで悲鳴が聞こえた。

「4人はここにいといてくれ!」

俺は4人を制してそとにでた。きっと見せては行けないはずの光景。俺の感が何となくそう言っていた。

「…嘘だろ」

外に出た瞬間、商店街の道の真ん中に――人が倒れていた――

――否、死んでいた。

何者かに全身を裂かれたような傷、そして大量出血の跡…

こんな短時間、しかも人目が多いところでこんな傷を残して逃げられるはずがない、つまり…

（人間の、仕業じゃねえ…）

俺はそう思い、戦慄した

救急車とパトカーのサイレンが、近づいていた。

「科警研AM3：23」

「そつちは？……わかった、できる限り早くしてね！——装着者候補？…そんな時間あるの!?——ああく!!もうっ!!」

(榎田さん…いつもにも増して荒れてる…)

科警研では、G3プロジェクトが急がれていた。研究員たちは昼夜問わず仕事を続け、本来より3日、G3の稼働日を早めていた。それは何故か……

前日、商店街で起こった事件は警察の上層部に激震を走らせた。1部では未確認がまだ残ってた、また1部ではこれはただの卑劣な殺人だなどと上でも意見は別れて対立した。

だが数時間後、同じ事件が起こった瞬間——殆どが未確認だといった。場所はショッピングモールの二階、1件目の商店街同様どちらも人目に着くためそんな一瞬で体に傷をつけしかもバレない。そんなことができる人間はいるはずがない

(もし未確認だったら、私達のG3プロジェクトで絶対に終わらせる…!)

かつて約束した彼の為に、もう二度とあんな痛い思いはゴメンだ。高校生を戦わせ、自分達は見てばかりしかいなかったあの時…

(もう今は違う…!)

緩みかけていた集中力を再び戻し、目の前のPCに張り付く榎田。

「あの…榎田さん…」

「今度は一体何よ……つてなにこれ!?でかくない…!?」

研究室に新たに運ばれてきたものを見て、榎田の閉めたはずの集中力が消し飛んだ。

でかいサイズの十字架のようなものだった。

「これって…ダイヤル?まるででかい金庫じゃない…!」

「でもこれ見つけた人によると、勝手にダイヤルが回ったっていうんです。だから私たちに回されたのかなと…」

「ええ…？——私たち忙しいんだけど…」

「そのために、人員も強化されるらしいです！」

「それならOK、私も気になってたからね！」

（手のひら返し!!）

その場にいる研究員が全員、榎田に対しツツコミを入れた。

つぐみの部屋・AM3:50

「…ん」

俺はいつもとは違う匂いが鼻をくすぐり、目を開けた。

「あれ、ここって…」

どう考えても俺の家じゃない、じゃあ一体誰の家

「すう……すう……」

その先は考える前に見て理解した。ここは…

「つぐみの家だ…」

「…ん？、ああ想くん……？おはよう…」

「おはよう……？」

俺のつぐやきが聞こえたのか、布団に頭を埋めていたつぐみは頭を上げた。

「…悲鳴があったあと、想くん外出てパトカーとか来たから何事かと思っ行ってたら想くん倒れてて、そして私たちが運んだんだ」

寝起きの目を擦りながらつぐみが状況説明をしてくれた。

「すまん、なんか迷惑かけたな」

「全然大丈夫だよ！むしろ…久しぶりだね」

「ああ、だいぶ前にもこんなことあったな」

俺は笑いながらつぐみを見る。

「昨日の件、ニュースになってるのかな？」

そう言いながら自室にあるテレビをつぐみがつけた。

『未確認生命体事件の仕業か』

と書かれたテロップが、一番最初に俺とつぐみの目に入った。

「そういえば昨日のあの時、クウガがどうこう言ってなかつた?」

ニュースを見ながら、つぐみが声をかけた。俺はそれに「ああ」とだけ返事した

「きつとなにかの間違いだよ。入学式で疲れてたりするんじゃない?」

「…疲れてるのかもな、俺」

「……想くん」

「あれ?おーい?——寝た?」

まあそれもそうか。寝てたとはいえ座っている体勢。疲れはあるはずだ。

「よいしょっと」

俺は起き上がり、つぐみを布団に寝かせておいた。

〜チュチュのマンション・AM4:20〜

「あの〜…」

誰かに揺さぶられた感覚に、ロックが目覚めます。

「…ん?」

「あ、おはようございます…?」

目を覚ますと、シャツに身を包んだ——男性がいた。

「ん、ああおはようござい…ってうわあああつ!」

「っ!」

突然の男性にロックが驚いて叫び、周りもそれに驚いて飛び起きた。

「ロック!どうした…ってお前、起きたのか…?」

ますぎが一番最初に飛び起きて、目をぱちくりしながら声をかける

「あ、はい…おかげさまで…」

「そうか、怪我とかなさそうで何よりだ」

「でも…ひとつ聞きたいことがあって…」

「ん?なんだ?」

「俺の名前って……分かります?」

「わからん」

「ですよ…」

〜科警研・AM9:00〜

「お久しぶりです!榎田さん!」

声をかけられ、デスクから目を離した榎田が、想を見る。

「久しぶりじゃない?!!」

今日はだいぶ朝早くから榎田さんに来てくれと言われ、久しぶりに警視庁に足を運んだ。

「あはは、てか研究所めちやくちや散らかってるじゃないですかあ…人もいっばいいるし…」

人をよけ、大量の紙を避けて榎田の元まで歩み寄った想が言う。

「いま大量に仕事があつてねえ、もう大変!」

「そんな榎田さんに差し入れです!555の肉まんつす!」

俺はそう言いながら肉まんを箱から出してひとつ渡す。

(この世界は550じゃなくて555なんだな)

「ああ!ありがとう!!」

そう言いながら榎田さんが1口頬張る。だが流石555、その匂いは周りの人間の食欲を一気に掻き立てていく。周りの目が肉まんについている。だろうなと思いつつ、俺は紙袋から更なる箱を取り出した。

万が一を考えて一応は買っておいた。肉まんがどれだけ凶悪か、俺

は知っている…

「よかったら…皆さんもどうですか？」

足りるかは知らんがそう言いながら周りの人達にそういう。

直後、やったああああという研究員達が群がり、ある意味で混乱したのだった。

〜1時間後〜

「ぜえ…はあ…」

俺は研究室で膝を着いていた。周りには肉まんを食べてきちんとゴミを捨てた研究員たちが再び作業に取り掛かっていた。

あの後、当然足りなかった肉まん。俺は見捨てることも出来ずに再び肉まんを買いに店までダッシュしたのだ。店員さんの「またこいつか」という視線が刺さる…

「ありがとうね〜想くん！」

「全然大丈夫ですよ！」

正直思わぬ出費だったが全員元氣を取り戻してくれたので、悪くは思わない。

「…ていうか、改めて見るとめちやくちやでかい研究室になりましたね〜」

「未確認の件で功労が認められてね、元からでかかったんだけど色々やりたかったら施設の強化お願いしてもらったの——弦巻さんの力もあるけど」

最後に関しては聞かないことにした。黒服達の力がここまであるとは…

「だからガレージのような場所に大量のトライチェイサーが…」

「トライチェイサーの量産化は簡単にいったわ〜、何せどっかの誰かさんがトライチェイサーの試作品壊れるまで使ってくれたし〜？」

「うぐっ…」

多分、俺が使つてぶっ壊して黒服さんに預けたはずのトライチェイ

サーのデータを受け取り、それを元に改良されたんだろうなと思う。
「榎田先生！到着なされました！」

「あ、来たのね〜！はいはい！——あとG3ユニットの3人呼んで！」
(G3ユニット…?)

この感じ、警察の上層部が来たのだろうか。榎田さんが立った後の
PC画面を、少し覗き見する。

(G3計画…?)

その後、研究員に連れられ入らされたのは…どこか実験施設じみた場所だった。

少し遅れて、幹部じみた3人が入ってきて、そしてさらに2人…恐らくG3ユニットのメンバーだろう。

「ねえ榎田さん、この人は？」

女性が1人、俺を指さした。榎田さんはああ、とだけ言っただけ俺の紹介を適当にしてくれた。

「へえ、彼が…私は小沢澄子。よろしく」

「八意です。よろしくお願いします」

「あつ、僕は…」

「じゃあG3機能テストを始めるわよ！」

「え、ちよ…」

(ガン無視とかうっそだろ…)

そう思っていると、ガラス越しの部屋に何者かがどこか機械的な動きで歩いてきた。そして部屋の中央で止まる。

「あれって…」

俺はそのシルエットが見えた途端、思わず声を出した。まるでクウガのような姿…いやスーツだろう。右手には小さめだが威力はありそうな銃を持っていた。

『じゃあ行くわよ、氷川くん！』

「はい…」

そう小沢さんが言うのと、スイッチを押す。するとG3がいる部屋の

端に穴が開き——そこから黒い塊が何個も放出される。

「あれ、なんすか…?」

俺は榎田さんにそう聞くと、にこにこで答えてくれた。

「特殊な金属でできたボール。素手で受け取ろうとするとまあ、骨折かな!」

「うへえ…」

そう言いながら視線を戻す。G3はまるで最初から軌道がわかるのかと言うくらいに、それも最小限の動きで躲していく。そして数発躲すと——おもむろに右手の銃を向けた。

「すげえ…」

そこから俺はただ驚くことしか出来なかった。連続で発射された球体に全て銃弾を当て、しかも粉々に破壊している。

——そして更に数十個破壊し、1個を片手で受け止めた所で、テストは終了した。

くAM9:30・チュチュのマンションく

「美味しい…!——これも!——あれも!」

「おお! 食べ食べ!——翔一!」

「はーい!!」

男が起きてからは、様々な質問をなげかけたが全て分からなかった。住んでた場所も、名前も…

『なあ! 封筒に津上翔一って書いてあるしとりあえずこれで呼ばね?、なんか名前ねえと呼びにくいし…』

彼が唯一持っていた封筒に書いてあった名前をつけた。ロックとレイヤはそんな簡単に決めていいの!?!という顔をしていたが、翔一本人が気に入ったので、可決された。

今は朝ごはん、ますきとパレオが作った料理を、翔一が食べていく。
「すごい食いつぶりね…見てるこっちがおなかいっぱいになりそうだわ…」

チュチュが食いつぶりを見ながら、フォークで野菜をつつき——さりげなく翔一に入れようとした所をパレオに止められた。

「まあ飯食える元気があるのはいいんじゃないやねえか？——作りがいがあ
るしな！パレオ！」

「はいっ！好き嫌いもしませんしね！」

「うぐっ…」

「え、チュチュさん好き嫌いしてるんですか？」

「う、うるさいわね！」

「ちやんと食べなきゃダメですよ！」

「ぎゃあああ！やめなさいっ!!」

(なんかお母さんみたい…)

ほんの数時間で打ち解けた。それは元からある翔一の性格なのだろうか…

「これもそれも美味しいですね!!」

ただ見てるこっちも悪い気はしない。これだけは言えることだった。

「4日後・ある公園」

「これは…、一体…!?」

そう言いながら氷川が遺体をみる、正確に言えば見上げる。

遺体は木に埋まっていたのだ。

「よう氷川、俺も驚いたよ——なにせ木に穴を開けたとかどこも見当たらねえんだ。ほんとに最初からそこにあつたみたいになってやる…」

「杉田さん、おはようございます。これで同じ事件が3人目ですね」

「ああ、しかも3人とも血が繋がった家族だ。遺されたのは弟1人だけ——ありやあだいぶ精神に来てやがる…」

「未確認生命体対策本部が本格的に動き出しそうですね」

「いや、もう動いてる。だから俺と桜井も来てるんだ」

未確認生命体対策本部。2年前にあらわれたグロンギに対抗すべく警視庁が作った部だった。全滅したあとは1度畳まれたが、今再び復活し——G3ユニットの3人と杉田、桜井の2人が入ってきた。

「目撃情報もなし、頼みの監視カメラは死亡推定時刻辺りになると歪みやがってダメだ——存在が神秘すぎて映せねえってか」

愚痴にも聴こえる言葉を吐きながら杉田が現場に指示を出す。

その後遺体がようやく地に着いた時は、その2時間後だった。

「同日、弦巻邸・ガレージ」

「また再び…ですか？」

相変わらず全身が黒い黒服さんに言われ、俺は頷き返す。

「最近の事件、我々も探ってはいませんが今のところ全くもって情報が掴めません…、お役に立てず申し訳ない…」

「いえいえ…！ほんとありがとうございます！」

「ところで八意様」

「…？」

「アークルの調子はどうでしょうか？」あの日、戦った後からなにか進展は？」

俺の変身ベルトであり、ある意味自身の心臓でもあるアークルは三人で戦い、ガミオを打ち倒した際にあまりの無茶から半ば再起不能の傷を負った。正直様子はよく分からないがひとつ言えることがあった。

「俺が生きてるってここは全然大丈夫っすよ！」

「そうですか——ではこれを」

そう言いながらガレージの奥にある袋を被ったひとつの物。その袋を取り外すと、中から見えたのは見慣れたバイクだった。

「ビートチェイサーです。我々も捨てるに捨てれずずっと整備をしてました」

「ありがとうございますー！」

俺は礼をして、ビートチェイサーのハンドルを握る

(懐かしいな、この感覚)

試しにビートアクセレーターを取り出してみる。

(うん、あのまんまだ)

ビートアクセレーターを再びしまい込み、ビートチェイサーに跨る。

「じゃあ俺行つてきます。また何かあったら連絡しますんで！」

「了解しました。こちらでも再び探りを入れてみます」

俺と黒服さんはお互いにサムズアップをする。俺はエンジンをかけて弦巻邸から出て行った。

(また時間があれば、こころ達にも会いに行くか…)

〜チュチュのマンション〜

「ぐぬぬ〜…」

パレオが悔しそうな顔をしながらある場所を見つめる。見つめている先はキッチン、そこには鼻歌を歌いながら料理をする翔一がいた。

「…?——どうしたんですかパレオさん!」

「い、いえ!!別に!!料理できるのはパレオだけで充分とか思っていないですよ!」

「…?——まあ待っててください!」

「ぐぬつ…!!」

そんなやり取りを遠目に見るますきはこう思った。

(本人に悪意がねえのが1番タチが悪いよなあ…)

記憶喪失の翔一が来てから4日あたり、元からああいう性格なのかあまりにもポジティブなやつになってしまった。おまけに飲み込みが早く家事全般は全てこなせるようになった。しかも料理は美味いときた

パレオが唸っているのも、自分の役目が取られそうで気が気じゃないのだ。

(なんやかんやでチュチュもこいつが元からいたような顔してるし…)

まあとにかく居場所が出来て良かったと思うべきなのだろうか…

「そういえば翔一!」

「どうしましたますきさん!」

ますきが呼ぶと、翔一から返事が帰ってきた

「なんか思い出したりしたかー!」

「何も思い出せませんね…、霧がかかったみたいで」

「…そうか」

「でも!今こうやって生きてるからいつか見つかると思いますよ!」

「お前ほんとのんきっていうかなんというか…」

「まだ日数も経ってないからね」

レイヤがそう言う。意外とレイヤは見ているだけの人物だった。過保護になつたりしねえかなとか思っていたのだが…

く月ノ森学園付近・P.M. 6:00く

「ち、ちよつと…！やめてください！」

「えー！いいじゃーん！」

「君月ノ森でしょ！」

月ノ森学園付近で、倉田ましろは男集団に囲まれていた。みるからに柄が悪く着いて行ったら最後だろう。

「連れていこーぜ！」

金髪の男がそう言うのと、ほかのメンバーが賛成する。そうしてましろの腕を掴んで――

「おい」

「あ？なんだてめえ」

気づけば、男たちの後ろにバイクから降りてきた男性が肩に手を置いていた。

「邪魔だ！あっちいけ！しっしっ！」

「お楽しみの邪魔だつてのツ!!」

「あ、危ない…！」

そう金髪の男が言った瞬間、拳が男性に突き刺さり――

「ストレートすぎるぞ」

「ぐえつ…!?!」

そう男性が発すと、拳を避けて顎めがけアツパーを打ち込む。打ち込まれた男はそのまま白目を向いて動かなくなった。

「お前らも同じ目に会いたいのか？」

威圧的に男性が発すと、取り巻きふたりは即座に逃げ出した。

「た、助かった…」

そういつた途端、地面に座るましろ。足に力が入らなくなっていた。

「大丈夫かお前」

「あ、ありがとうござい——あ…」

そう言い、手を差し伸べてきた男性。ましろは掴んで立とうとするがまだ恐怖があり立てなかった。

「…ほら」

男性は今度はましろに背を向けてしやがむ。

「え？あの…」

「はやく、背負ってやるから」

「おーい!!しろー!!」

「ましろちゃん!」

その時だった。ましろを呼ぶ声がして2人は振り返る。桐ヶ谷透子と双葉つくしだった。

「友達か？」

「あ、はい…」

「ならもう大丈夫そうだな」

そう言いながら立ち上がり、バイクに戻っていく。大丈夫!?!など様々な言葉をかけられましろは2人に両腕を担がれ立ち上がる。

「あの!!」

ましろが大きな声で男性を呼び止める。男性はヘルメットを被るのをやめて——ヘルメットを落として男性も横に倒れた。

「え？」

「ウソ…」

「…!?」

ましろを担ぎながら男性に近寄る。

「くっ…！——うあ…!!」

「…苦しんでる?」

「つくし!はやく救急車呼んで!!」

「わ、わかった!——ましろちゃんちよつとごめん!」

そう言われ、腕を離される。一応立ち上がりは出来ていた。

一体何が起こったのか、理解が出来なかった。

〜同時刻・チュチュのマンション〜

「あともうちよいですからね〜!」

そう言いながら味付けをしていく翔一、手先が器用なのか綺麗に出来ていた。

「パ、パレオもできますよ!!」

(張り合ってる…)

その横でパレオが手伝い——というより勝負が始まっていた。
だが——

「っ!?!」

次の瞬間、翔一の手から皿がずり落ちて割れる。

「なんだ!」

皿の割れる音が聞こえたメンバー達がキッチンに集まる。

「し、翔一さんが…!!」

「う、ううあ…!!——ぐあああっ!!」

翔一が頭を抱えて倒れ込んでいる。さっきとは打って変わって額には汗が浮かび、見ただけで相当苦しんでいるように見えた。

「翔一!!——翔一っ!!」

チュチュが叫びながら揺する。

「はやく救急車呼べ!!」

ますきの一言でようやく意識が現実に戻る。翔一は未だに苦しんでいた

〈同時刻・ある公園〉

(…外れか?)

八意想は、ビートチエイサーに跨りながら今回の被害者遺族の生き残りの監視をしていた。俺以外にも氷川誠も警護に着いていた。俺は近くの公園から監視し、氷川さんは車で監視

なんとなく血族が狙われてるのではないかという杉田さんの情報を頼りに見張ってはいるが一向になにか空気が変わる気がしない。

「これは黒服さんも居場所を掴みにくいわな…」

そう呟いて、氷川さんにちよつと見張りまかせて晩飯でも買うかなと思つた瞬間だった。

(なんだ……)

さつきまで鳴いていた鳥が静かになった。風も吹いていないのに近くからガサガサという音が聞こえる。まるで何かが高速移動してるような…

「…あの——っ!?!?」

念の為に無線越しに氷川さんに警戒を頼むように言おうとした瞬間。俺は首を捕まれ投げられた。

「…ほっ……げほげほっ……!!」

一瞬だが息が出来ずにいたせいで俺は仰向けになりながら咳き込む

(野郎……張ってる奴から狙うつもりか……!?)

すぐさま立ち上がり、俺は姿を目にした。

「ヒョウ柄の、未確認……!?!」

ヒョウ柄の怪物は俺を見ているが一切喋らない。獲物を捉えるがごとく目を光らせていた。

(アイツらは言葉を発した…名乗ったりするとき、こいつらは違うのか……?)

アイツら——グロンギには戦う前には必ず名乗る謎のルールがあった。だがコイツは一切喋らない…

「……」

俺は疑問に頭を抱えつつも腰に手を当てる。俺の戦うという意思に霊石アマダムは応え、アークルが腰に装着される。

「変身っ！」

久しぶりの変身ポーズをきめて、腰のスイッチを作動。アマダムが赤く光り——俺は赤のクウガに姿を変えた。

『ツ…!?』

目の前の青年が姿を変えて、ヒョウ柄の怪人——ジャガーロー

ド パンテラス・ルテウスは警戒レベルをMAXに引き上げた。

アギトではない…ならこいつは何者だ…

だがしかしこれだけはわかる。コイツは我々の任務を邪魔する者。

なら殺すまでの事だ

「ある公園」

「ふっ……」

俺はヒョウ柄の怪人の攻撃を避けて後ろに転がる。やつは攻撃自体は凄く単純なのだがそれを厄介にしているのは奴自身のスピードだ。

(はええ…!!)

今は半ば勘で避けているが、これがいつまで持つかも分からない。どこかで逆転のチャンスを見極めなければ…

「っ！——らアッ!!」

『ッ!』

相手が飛びかかりながら攻撃をするが、俺はそれを下にしやがみ避ける。そして奴のから空きの腹部に拳を叩き込んだ。

空中で拳を叩き込まれた相手はそのまま地面に落ちる。俺はすぐ立ち上がり反撃の蹴りを叩き込み、相手を転がす。

転がった相手はすぐさま立ち上がり構える。俺もそれに警戒し距離を詰めずにいた。

「っ!」

だが突如として、別の存在に気づき後ろを振り返る。

『…』

「…おいおい、今度は黒豹かよ」

俺は鼻で笑いながら2人の豹に囲まれて構える。マスク越しだがその額には汗が流れていた

「氷川side」

(…あれ、八意さんがいない?)

公園のそばにあったビートチェイサーから八意が消えることに気づき、少し疑問に思う。あの人ならトイレにいつてる可能性もあるのだが任務をサボる人ではないと杉田さんは言っていた。

「見に行くか…」

車を降りて、ビートチェイサーまで駆け寄る。相変わらず八意はいずりにいた。そして同時に——殴り合いのような音が聞こえる
(なんの音だ…?)

音の方向的に公園、時間帯もそうなので、ヤンチャなやつらが喧嘩でもしてるのだろうか…などと考えながら公園に入る。

「なっ…!?——未確認生命体!?それにクウガ!」

公園に入った瞬間、空気が変わるのを感じながら前を見ると、2体のヒョウ柄の未確認に劣勢になっていたクウガがいた。

「はあっ!!——くっ…!!」

片方に拳を叩き込み、もう片方にも打撃を与えようとするが躲され拳を叩き込まれる。

「…何を見てるんだ!」

一瞬恐怖に支配されかけたが何とか振り切り携帯を取りだした。

〜Gトレーラー〜

「ねえ、小沢さん」

「なに?」

「僕達…仕事あるんですかね?——今んとこ書類整理しかしてないんですけど」

「文句言わない!仕事!」

「はーい」

文句を垂れる尾室隆弘を一喝し、デスクに視線を戻す。確かに言い方は悪いが未確認生命体が出てきて欲しいとは思う。実績も何も無いために他の部から税金泥棒など言われており肩身が狭いのも事実。
『もしもし!聞こえますか!?』

その時だった。Gトレーラーにどこか焦った様子の氷川誠が連絡を入れてきた。小沢が直ぐにヘッドセットを取り出して応答する。

「氷川くん?どうしたの?」

『未確認生命体出現!!G3システムの手配を!!』

そう氷川が言った瞬間、尾室がコーヒを吹き出し、小沢が歓喜の

声を上げる。

「よーし!!きた!!行くわよ尾室くん!——G3トレーラー出動!!」

準備だけは万全にしてある、Gトレーラーはすぐさま動き出し、現場に向かい始めた。

くチュチュのマンションく

「…うつ、くつ…!」

汗を浮かべながら苦悶の声を上げる翔一を見ながら、ロックが呟く。

「ずっと苦しんでる…大丈夫やろか…」

「ほんとだよな、突然苦しみ出したし…」

「タオルもすぐびしょびしょになるくらいの汗…」

額の汗を拭いながらパレオが言う、もうこの状態が続いてはや15分。そろそろまずいレベルになっってしまう——RAS全員の不安が限界に達しかけていたその時だった。

「っ!!」

突如翔一の目が開き、半ば飛び起きるようにして起き上がった。

「翔一!!」

「…行かなきゃ」

みんなが心配の声を出すが、翔一は声が聞こえていないらしく、しかも何かを呟いた。

「おい翔一、心配した…」

ますきが翔一の肩に手を置こうとして——

「すみません俺行かなきゃダメなんです!!」

「おわっ!?!」

ますき突き飛ばし、走り出した翔一。玄関付近に置いてあったますきのバイクの鍵を取り部屋を出ていく。

「翔一さん!!」

最初に走って追いかけたのはパレオだった。流石の運動神経で部屋を出るが——

「ええええええっ!?」

パレオが驚きの声を上げて固まる。ここはマンション、エレベーターが階段でないと降りれない。

「パレオ！翔一は!？」

追いついたレイヤが驚いているパレオに声をかける。ハツとなったパレオが急いで状況説明をする。

「ここから飛び降りていきました——しかも着地する寸前に…変身して、姿を変えて…!」

「パレオ…！落ち着いて!」

そう言っている間に、バイクがマンションを出ていった。

「あーっ!!あれアタシのバイクッ!!!」

その後、ますきの大声が響いた。

〈同時刻・八意side〉

「っ!!——畜生ッ!」

『…!』

俺はヒョウ柄の拳を避け、横に立っていた黒豹を蹴り飛ばす。両腕で蹴りを受け止めた黒豹——その頭上に白い何かが現れた。

「なんだと…」

白い何かに腕を突っ込み、引き抜くとその手には槍が存在していた。

(ヒョウ柄はなんもしてこねえから能力は無しか、だがこのこいつら連携がとてつもなく上手い…!)

2対1の状況は過去にくらでもあった。だがこいつらはグロンギとは違って連携を取っている。グロンギは連携ではなく獲物を先に殺すのはなにか競っていた。だから隙があるからそこを狙い倒す——だが目の前の奴らは完璧な連携だ。

『…』

肩の傷に手を触れる、ヒョウ柄の爪にやられた傷だ。

『ッ!』

傷がバレたのか、黒豹が突進——槍をこちらに突き刺そうとする

俺は何とか躲して1度距離を取り、アマダムに意識を集中させる。

「超変身！」

『…!?!』

俺の意思に応え、アマダムが青色へと変わり——俺は青のクウガに姿を変えた。

『ッ!!——ッ!』

槍を2度突き刺すが、俺は身軽さで躲していき——槍の手元に蹴りを叩き込む。

『グウツ……!』

ダメージは大したことではないが槍が手元からずり落ちる。

「っ！」

俺はその槍を奪い取り、黒豹の胸部を蹴ってヒョウ柄の攻撃を躲す。

それと同時に、俺の手にあつた槍が——ドラゴンロッドにかわり、鈴の音と共に伸びる。

『き、さま……なにもの?』

(人の言葉を話した…!?)

こいつら戦闘力だけじゃなくて知性もあるのか、やはりグロンギとはどこか違う…

「俺……俺はな」

↳Gトレーラー内部↳

「遅いですよ……」

「仕方ないでしょ?!?ターゲット近くにいるんだから音消さないと!」

「そんなこといいですから早くスーツつけますよ!」

着いた瞬間乗り込んだ氷川が愚痴、速攻で小沢が反論しどうでもいと感じた尾室が仲裁に入った。

「じゃあ装着するわよ」

そう言われながら足、腕、胴体、頭、そして最後にバッテリーユニットを起動。頭を微調整してG3が完成した。

「初陣、かっこよく飾ってきなさい!」

背中を叩かれ（g3はダメージ0）、氷川が領いてトレーラーを出ていった。

「私達もオペレーション行くわよ尾室くん!」

「はい!」

「ふっ……!」

敵の爪が迫った瞬間に跳躍力を生かし飛ぶ。そして背後に周りロッドを叩きつける。

『グッ……!』

（だめだ……さつきから浅い……!）

こいつらには効きにくいのだろうか。確実に急所をついても、ダメージどころか紋章すら表れない

「はあ……はあ……」

人間、そこまで体力がある訳では無い。俺は既に限界を迎えようとしていた。

「想さん避けて！」

「はっ？——おわああああああっ!？」

後ろから声が聞こえ振り返ると、クウガのようなスーツがグレネードランチャーを構えていた。しかも既に弾は発射済み。それを下に屈むことで何とか躲し、俺の後ろにいたヒョウ柄にヒットする。

「これがG3……ってかあぶねえだろ!？」

一瞬だけ簡単の声を漏らすですがすぐさま説教に変わる。だが氷川はそれを振り切った。

「想さん説教は後で！まだヤツら動けます！」

「ああもう！わかった！——てかその声、氷川さん……？」

「ええ、年下に暴言吐かれると心に来ますね」

「うつわ棒読み」

「…僕がヒョウ柄をやりませう。想さんは…黒豹を」

「……わかった。任せる」

2人はお互いに構える。2vs2の戦いが始まろうとしていた。

〈circle〉

「今井さん、さつきから練習に身が入っていない気がします？」

「うう…ごめんね？」

「そういうば今日こないね〜!想さん」

「たしかに…いつも何かしら片手にきてくれるのに…」

練習の休憩の間に、Roseliaのメンバーが会話をする。

「彼にも事情があるんじゃない。それに私達だって彼が居なきゃ何も出来ないバンドじゃないわ」

「そうですね…」

(想くん、何か嫌なことに巻き込まれてなければいいけど…)

それぞれが練習に打ち込む中、リサだけが不安を拭えずにいた。

「っ！——らあっ!!」

俺は相手を蹴り飛ばし怯ませ、ロッドを振り回して着実に相手を弱らせていく。一対一になったらたとえ相手が長物を使ってきたとしても勝てる、経験の差がものを言う。だが…

「氷川さんッ!!さっきからフルボッコじゃないですか!!」

G3に止めを刺そうとしていたヒョウ柄を吹っ飛ばしてG3に駆け寄る。氷川さんは驚きの声を上げて固まっていた。

「な、なぜ…!?こんなはずでは…!!」

夕日が沈み、電灯の明かりが差し込んで来るがまだ目がなれない。しかもG3は正直役立たずだ

(でもなんでだ…対未確認用兵器としては俺、クウガすら殺せるはずのG3がなんで負けてるんだ…!?)

「うっ……」

「ちよっ…!?!」

ジリジリと詰め寄る怪人2人から離れようとG3を掴むが、逆に引っ張られて動けなくなってしまった。氷川さんが恐怖で動けなくなってしまうのだ…

「何やってるんですか氷川さん!!」

「だ、ダメだ…俺たち…!殺されるのか…!?!」

『氷川くん!?!氷川くん大丈夫!?!』

半壊したヘルメットから無線越しに誰かの声が漏れているがどう見ても聞こえてるようには見えなかった。

「うえっ!?!なんだよこれ!?!」

「なっ…!?!有咲!?!」

「お、お前…!?!——ってか何この状況!」

「なんでこっつち来た!?!」

「帰り道だよ!!私の!!」

「あーっ!!」

『氷川くん!?民間人の声がしたけど、氷川くん!?』

「…あ、ええ…!はい!——もうどれから言えば…!?!」

だいぶまずいことになった。周りの家はどこかで見ることがあるとは思ってはいたが今思い出した、ここはPoppin Partyの有咲の家が近くにあるんだ。

(どうする…、ここはどうすればいい…!?!)

ギリギリと詰め寄ってくる2体の怪物、使えないG3、そして有咲。俺一人ではどう考えても守りきって戦う自信がない。

そのときだった——1つのバイクが2体の未確認の後ろに止まった。

「…あれは?」

(あのバイク…どこかで…)

「な、なんだよ…」

1人の人物が降りてきてこちらに歩み寄ってくる。バイクのライトが眩しく顔は見えないが体格的に男なのは分かった。2体の未確認は俺たちにとどめを刺すより先に歩いてくる人物に襲いかかる。

「まずい…!」

俺が立ち上がって走ろうとしたが、もうその時には既に男と未確認は接触していた。だが男は殺されるという俺たちの予想に反して2体の未確認と互角にやり合っていた。長物を叩き落とし、ヒョウ柄のマフラーを掴み投げ飛ばす。

「っ!?!」

投げ飛ばした瞬間、男から眩しすぎるくらいの光が輝いた。そして
…
「なっ…!?!」

俺と似たような見た目をした仮面ライダーが、そこに立っていた。

『オマ、エは…!?!』

『…ア、アギトッ…!!』

「アギト…?!」

「そうか、お前たちが」アンノウン「か…」

(言語を話した…?)

さつきとは明らかに様子の変わった2体が一斉に襲いかかった。だがその2体を確実に叩き、地面に踏みつけた。

「ア、アギト…!?!八意お前いつの間に仲間なんて…」

「いや俺はアイツを知らない…!」

「はっ…!?!」

小突いてくる有咲に俺は答えた。初めて見る奴のはずだ——な
のに何故…どこかで見覚えがあるのだろうか

「八意さん…!」

アギトの討伐を諦めたのか黒豹を見捨てたヒョウ柄のアンノウンが俺達に襲いかかってきた。絶妙角度から放たれるストレート、回避も間に合わない…

「超変身!」

俺は赤のクウガから紫のクウガに姿を変え、そのストレートを受け
る。重々しい音が響くが何とか俺はノーダメージだった。そのまま
腕を掴み俺はアンノウンに話しかける

「お前らは一体なんなんだ…!」

『…』

「答える気は無しかよ…!——ぐおっ…!?!」

そういった直後、アンノウンが鎧の隙間を狙い俺に蹴りを入れて怯
ませた。短時間で弱点を見抜いてきやがったとしかいいようがない。

「超変身ツ!!」

俺は赤のクウガに姿を変えて距離をとる。どうやら相手もその気らしく距離をとってマフラーをなびかせた

足に籠もる、熱い炎の感覚。俺がかつて何度も使い未確認を殺してきた技…

「はあああああつ!!」

叫びながら走り、地面を蹴って飛びあがり空中で一回転し勢いをつける。

「おりやあああああツツ!!」

蹴りがアンノウンの胸部を捉え吹き飛ばす。俺は地面に着地し足から上がる煙を見ていた。

『クツ…!!ウアアア…!!』

胸部に紋章が現れ相手が苦しみ始めた。そして次の瞬間――頭上に白い輪つかのようなものが現れて……

相手は爆発四散して死んだ。

それと同時にアギトとやらも黒豹…アンノウンを蹴りでしとめて爆発四散させていた。

「…」

炎が揺らめく中、クウガとアギトが見つめ合う。

「なあ、お前…」

八意がそこまで話しかけた時だった。

「ツ!!はあつ!!」

助走をつけたアギトのパンチが、クウガを襲おうとしていたのだつた。

「いきなり何してやがんだよ!」

G3の横にいた有咲が指さしながら叫ぶ

『氷川くん!?状況を説明して!!』

「未確認を2体撃破したあと、そのうち一体を撃破した謎の生命体が…4号と戦い始めました!」

『謎の生命体!?見た目は!』

「どこことなく…4号に似てます…」

『ますます分からなくなってきたわ…』

「僕もです、なんで…」

そう言いながら有咲と氷川の2人は、戦い始めた2人を見ていた

「っ…!!お前何もんだよ…!」

右から振るわれた拳を後ろに転がって避け、直ぐに立ち上がり蹴りを入れる。だが右手で受け止められ横に流された

(何も喋らねえ…目的が見えねえぞこいつ、アイツらを倒したのになんで俺にまで…)

「まさか俺がアイツらと同じに見えてんのか!」

そう叫んだ瞬間に、俺はストレートを顔面に受けた

「待て!話し合おう!!」

拳を腕で抑え込んで、俺は対話をもちかけた。至近距離に耳があるはずだから声は聞こえるはずだ

「…」

しばらくこちらを見つめる目。俺も見つめ返す、だが次の瞬間には俺は足をかけられ地面に転がり、蹴りを食らって一気に吹き飛んだ

「げほっ…!!」

グシャツという音が聞こえ、腹部あたりに激痛が走り血を吐く。

(っ、ダメか…!!)

「無茶です！そいつは明らかにあなたに敵対している！」

「分かってる…！わかってんだよ…!!」

でもそう簡単に見捨てる訳にも行かない、いや…見捨てられるはずがない。自分は今まで1人で戦ってきたのだ、似たような奴を見つけた気分になってしまってるのだろうか。

「避ける!!」

葛藤する俺に有咲が叫ぶ。次の瞬間明らかにアギトの拳の射程範囲外から何かが振るわれた

「っ…！————青くなってやがる…！パクリで訴えてやるからな…！」

左半身から胸部にかけて全て青くなっており、左手にはさつき攻撃したであろう薙刀が握られていた

(長え…！)

「また来ますー！」

「超変身ツ!!」

氷川さんが叫んだと同時に俺は青のクウガに姿を変えて攻撃を回避、アギトの後ろに立つ。

「くっ…！」

その辺に落ちている木の棒を拾い上げロッドに見立てて振り回す。木の棒がドラゴンロッドへと変化、鈴の音と共に両側が伸びる

「っ—」

薙刀をドラゴンロッドで受け流して上に弾く。だが相手は俺のロッドの上に乗ってジャンプ、上に舞い上がった薙刀を手に取りそのままこちらに攻撃を与えようとする

「なっ…!?! ———くっ…！うあ…!?!」

押し込まれる形となり、俺は膝をつきながらもなんとかロッドで受け止めていた。上から掛る力はどんどん増していく…

薙刀が肩まで迫りこんだ瞬間だった。

「は…っ!?!」

「…っ?」

アギトが突如薙刀にかける力を緩めた。その後すぐに薙刀を落と

して自らの頬などを触ったりしていた

「おい…」

俺が声をかけた瞬間、その場から立ち去るように乗ってきたバイクに跨りその場を去った。

「まて…！」

「おい八意！ここにいる人倒れたぞ！」

立ち去ったアギトを追おうとビートチェイサーに跨った時に有咲が声を上げてこちらに走りよってきた、氷川さんが倒れたのだ

俺は追うのを諦めて氷川さんの元に向かった。有咲にも少し手伝ってもらおう

〈5分後〉

「なあ、なんでお前がまた戦ってたんだ？」

氷川さんからG3を剥がし、救急車とG3部隊の到着を待っているときだった。缶を持って黙っていた有咲が口を開いた

「さあ…」

「さあつて…お前あの時からもう戦う必要無くなったんじゃないのか？」

「俺もそう思ってたんだけどな…、まためんどくさいことになりそうだ」

さつきまで殴り合っていた拳を見つめながらつぶやいた

「他人を見捨てられないほどお人好しなのは知ってるけどよ、リサさんだけには迷惑かけさせんなよ」

「わかってるよ」

「二年前もお前の前ではあんな感じだったが裏ではすげー心配してたからな」

「それは初耳」

「当たり前だろ、無駄な心配かけさせたくなかったんだと思うぞ。」

「無駄な心配ではないと思うぞ」

俺がそういうと有咲は肩を落とした

「リサさんなんでこんな女心読めない奴と付き合ってたんだよ…」

「失礼じゃないか有咲、俺も頑張ってはいるぞ」

そこまで言った時だった、遠くから誰かが走ってきた。確かあれはG3部隊の…

「誰だっけ…?」

「尾室です!」

「あ、ああ…尾室さんねうん尾室さん…」

「絶対忘れてたこの人オ!」

「それより氷川さんどうにかしないと…!」

俺は何とか話を逸らす。この人G3ユニットの中でも存在感がなさ過ぎて時々、いやかなりの確率で記憶から消えてしまう。本人もかなり気にしてるせいで忘れてたりしたら毎度うるさい、まあ忘れてやるなっていう話だよな…

「この子は?」

尾室さんが有咲を指さして訪ねた、ここはあえて言うべきかそれとも巻き込まれないように避けるべきか…

「いえ、たまたま通りかかって手伝ってくれて」

(有咲…)

「そうか、もう夜も遅いから早く帰りなさい。あと手伝ってくれてありがとう」

「はい」

そう言っ立ち去る有咲、花女の猫かぶりは今も健在らしい。立ち去る寸前有咲はこちらに向けて親指をたてた、俺はそれに小さく返し氷川さんの処理を手伝った

〜八意宅〜

後処理や今回現れた未確認やアギトなどの情報を小沢さんたちに伝えてたりすると、家に帰ったのは0時を回った。鍵を開けて中に入ろうとした瞬間――背筋が冷えた

「り、リサさんこんばんは…」

「おかえり想くん」

笑ってはいる、だが目は笑っていない。周りに漂うオーラも先ほど戦ったアギトか・・・それ以上だった、ふと目線をしたにやる、靴が多い、つまりRoseriaメンバーがいるということになる。それすなわち詰みだ

「すまんかった」

俺はRoseria5人の前で過去一きれいな土下座を決めていた。

「理由はわかりました。こんなに遅くなったことも」

紗夜が腕を組みながら座っていた

「まさか想くんを戦わせないように作ったG3がやられちゃったなんて・・・」

あこが頭を抱えてうなっていた

「Roseriaのマネージャーが遅れてどうするの」

「おっしやる通りですゆきなさん」

「ま、まあまあ・・・！理由もわかったことですし想さんも反省している

ようですので…」

この状況でも俺をかばってくれる燐子、女神やんけ

「心配したんだから…!」

「すまんリサ、心配かけた。紗夜たちもすまん」

「うん…」

俺に頭をうずめるリサ、はたから見ればなかなか恥ずかしい光景ではあるが、Roseriaの前だから大丈夫だ。こいつらもう慣れている

俺は新たな脅威に不安を抱きつつ、今は目の前の幸せを見ることにした

「…」

津上はますきのバイクを道の端に停めて座っていた。その手はとてつもない震えに襲われており、はたから見たら不審者そのものである。

なんだったんだ、頭痛に襲われたかと思いきやいつの間知らない場所に立っていて戦っていた…

「俺…これからどうすればいいんだ」

気づけばそんな声が、ふと漏れ出ていた。

（八意宅）

翌日、当たり前のように未確認生命体と大きく書かれた見出しのニュースがあちこちで流れ：再び未確認生命体事件が幕を開けるのではないかという最悪の流れや4号はまだいるのかなどと言ったキャスター達の声を聞きながら、想は自身の家のソファへ腰掛ける
「4号はここにいますし、またアイツらが来たら俺はストレスで死ぬね」
「えー、そんな事言ったらリサ姉泣いちゃうよ！」
「……やめとくか」

キッチンの方で朝ごはんを作っているリサの方へと視線を向けながらあこ達の話す。

「お前らも徹夜してまでやることかあ？」

「ええ、当たり前よ」

「そもそも貴方が遅れてさえなければ…」

「はい、その件に関しては申し訳ない…」

バンドに熱が入りRoseliaはさらに前へと進もうとしている、その中俺だけがその熱に入り込めていないような気が最近してなくもなかった

リサ達はもちろん大事だ、だが大事だからこそまずは身体をいたわって欲しいという気持ちもある

「ま、未確認生命体が出てても想さんがばーってやっつけてくれるもんね！なんてったって凄まじき戦士があるもん！」

「あのなああこ、あれは頻繁に使える代物じゃねえぞ」

「そうなんですか…？」

「ああ、あれをダグバに使った時…俺の中には大切な人達を守りたいって気持ちで凄まじき戦士を正義の戦士にすることが出来た…だがほぼそれ以外考えてなくて…まあ無我夢中だったから…」

今やれば確実にまた破壊の衝動に飲まれてしまう可能性がある。

できる限り使いたくは無手ではある

「金色の凄まじき戦士は…、どうなんでしようか？」

「あれに関してはもはや分からねえよ…ほぼ奇跡みたいなものだったし…」

名前すら聞くことが出来なかったあの二人の戦士…：おそろくか
つて…いやもしくは別の世界でクウガとして戦う人物なのだろう。

拳を眺めふと考え込む

今再びおころうとしている事…そして俺にそっくりな見た目を持
ちながら襲いかかってきた人物。奴らはその男をアギトと呼んだ…

(それにあのバイク…どつかで見たことあるような)

今の所分らないことだらけである、警視庁に存在する謎の十字架
…それに呼応するように現れる敵…

(こんな時一条さんがいてくれたらなあ…)

ふとそう考えて、すぐに頭を振り忘れようとする。別れはしつかり
している…それでもやはり…辛いものは辛い

今は新しいチームと動く予定と言われている、G3チーム…だが初
陣は華々しい敗北だった

(未確認生命体に凄まじい特攻を持つてるはずのG3が負ける…)

1番考えたくもない可能性が頭をよぎる。

「未確認生命体以外の何か…」

もしそうとなれば確実に俺一人の手では追いつかなくなってしま
う。先日戦った2匹でさえ2年のブランクがあればどこまで手こず
る相手ではなかったと思う…

それを易々と一匹片付けた彼とは確実に交渉を測りたいところで
はあるが…

(あの感じじゃ…そう簡単にはいかないよなあ)

歳をとった…とまではいかないだろうがやはり2年という月日は
デカすぎる。

——俺が平和を満喫していたこの2年…一体また何がおころう
としているんだ…？

くちゅちゅのマンションく

「…」

先日の感覚…頭痛が酷いと思ったたら突然意識を失って、それです
きさんのバイクで俺…何を…？

翔一の頭の中で溢れるのは昨日の感覚。

誰かを殴る感覚

武器を向ける感覚

そして化け物を1匹殺した感覚…

「うっ…」

慌てて口を抑え“モノ”が出そうになるのを堪える。恩人の家を
汚す訳にはいかないからだ。

「俺は…俺は一体なんなんだ…」

人間…？

それとも“化け物”？

「突然ますきさんのバイクを借りて行って帰ってきたら：暗い雰囲気
に…」

最初に自分が目覚めた部屋に籠りはや数時間、置いておいた朝ごはんにも手をつけた形跡がなく余程辛いことがあったのだと見て取れた。パレオが器用に物事をこなしながら口を開く

「ニユースにもありますが昨日どうやら未確認生命体による事件があつたようです」

「未確認生命体：あの二年前の？」

「はい、翔一さんもしかしたらそれに巻き込まれて…」

「：見たくないもん、見せられたって訳か…」

ますきが頭を抱えながら言葉を話す。

「何はともあれ、本人に聞くしかねえよな。アタシのバイク勝手に使ったことも聞きてえし」

「科警研」

「あれ、八意くんじゃない!どうしたの?」

いつも通りに職場へと向かった榎田が最初に見た人物はまさかの八意想だった。手にビニール袋とヘルメットを持ちビートチェイサーで向かってきたのだと理解出来る

「お疲れ様です榎田さん、その後どうですか?」

「あー、あれね。無理無理…今んとこぜんぜんダメ」

十字の形をしその表面には大量のダイヤルを付けている、今ん所通称“オーパーツ”と言われ科警研が解析中の物。

「今総動員してダイヤルを自動回転させて合うまで回し続けてる、でもまだ時間がかかりそうよ…それに未確認生命体だってまた現れるし…」

「その事なんですけど…」

「ん…?」

「俺はアレを、未確認生命体だとは思えないんです」

「え…?それってどういう…」

「アイツら…グロンギは戦闘民族的な感じがしたんです…でもアイツらからは個々の戦闘より集団での戦術が長けている」

「まだあのヒョウ柄のやつらとしか戦っていないがそれだけは明らかに異なっていた。グロンギは何故か俺を倒すとかいう名目なら仲間さえ手にかけてたりする割とヤバい集団である。上の奴らに従わない者もいるみたい…」

「だがアイツらは何かに従っているようにも見えた。これに関してはおもはやカンとしか言いようがないが…」

「ふーん…八意くんもわからない未確認生命体…アンノウンって感じ?」

「アンノウン…?」

「そう、UNKNOWNって意味」

「はあ…」

はつきり言っただけで英語とかなんだとか正直よく分かってはいない。だが一言言うことがあるとすれば……やはり奴らは得体の知れない未確認生命体だ。

「あの事件も、上がとにかく未確認生命体ってことにして片付けようとしてるけど…世間はそう甘くは無いためだ」

そう言っただけで今朝の新聞を開くと、どの新聞も未確認生命体のことについて持ち切りだった。

“ 2年前の悲劇再び…!! ”

果たして未確認生命体の仕業か!?

学者はこう語る…!!

「ひでえなこりゃ…」

悲劇が巻き起こるなどといった不安を蔓延させるような記事や無駄に確証に近づこうとしている記事。はたまた陰謀論に走り出す記事…

「でしょ、貴方達には悪いけど…今は正体を隠しておいた方がいいかも…。4号の正体は不明だけど一応は正義の味方扱いにはなってるわ…一部を除いてね」

「一部…?」

「ええ、過去に少し流行ったのよ…4号は自作自演をしているんだのなんだの警視庁に好き勝手言っただけ」

「…」

自作自演だとしたら俺は相当命を懸けている。もはや役者でも目指せるのではないだろうか…?

「いいですよ、それでも世界の…彼女達さえ平和でいてくれれば」

「ふーん…あ、八意くん、一応忠告ね」

「…?」

榎田さんが白衣を羽織り、自らのデスクに着いて言った

「彼女達彼女達、言うのは言いけれども…あまりそれに固執しすぎるといつか大切な物を手に掛けるわよ」
「…気をつけておきます」

～病院～

「……………」

深い海底から上がってきたような感覚と共に、目を覚ます。まず視界に入ってきたのは知らない天井…

「あつ、起きた…！」

「ツ…!?!」

次の瞬間、見知らぬ女性が目に写り思い切り飛び上がる

そして再びクラッと視界が揺れ倒れ込む。

「こら動かない！2日も寝ててその間ずっとうなされてたんだから…」

(2日…!?)

俺が最後に覚えているのは幼い少女達を暴漢のような集団から助け…その後倒れたところまで…

「そうそう、名前聞いてなかったけど少女達が貴方にお花置いていてくれたわよ」

(彼女達か…、全員無事だったみたいだな…)

あの後の記憶は無いため今流れてくる空白の情報の中に彼女達が写り、心配になっていた

「とりあえず今は安静、また後で検査したりするから…大人しくしててちょうだい」

「…はい、すいません…」

そうして看護師が立ち去っていく、だがそんな彼の身体は汗ばんでいた。

(クソ…身体が全身痛い…、まただ…、あの時からずっとだ…)

バイクに乗り旅を楽しんでいた数年前、突如不慮の事故に巻き込まれ本来ならそこで死んでいた。だが奇跡的に生き残った男はその日から奇つ怪なモノに悩まされていた

検査によれば全身の筋肉が異様に発達しそれが自分の身体の容量を超えようと今も増大していること…

このままでは発散場所を失い内部から破裂、死に至る…

(彼女からも縁を切られ、大学からも見放され…俺はこのまま孤独に死ぬだけなのか…?)

皮肉にも窓から見上げた空は、その男の心情とは打って変わって明るく青く…今はそれが無性に腹が立った。

「ッ…!!」

直後、全身の筋肉が一気に膨張し全身を張り裂けそうな痛みが襲う。

(またダ…ッ!!なんなんだ…クソッ…クソッ!!)

布団を引き裂き投げつける。直ぐに騒ぎを聞きつけた職員達に押さえつけられるが…しばらく男の暴れは続いた。

く同時刻・チュチュのマンションく

「っ…ぐあ…!?!」

翔一を襲ったのは、2日前と同じ痛み。とてもでは無いが耐えられる訳でも無く胸の奥にある心臓を掻きむしりたくなる不快感。そして…自身の中にある未知なる力に対する恐怖。

翔一自身は理解している、人類を脅かすあの怪物共を倒さなければ
ならない。そして戦わねばならぬ相手がいる。

(でも…制御できない……！…！…！できるわけが無い…！！)

く同時刻く

「な、なんだコレっ…!?!」

男が苦しみ始めたと同時に時刻、縄文時代の地層を研究、発掘して
いた大学のチームが見つけた物。

それは人間の骨でもなく、誰かの生活していた物でも無い。

まだ肌が明るい肌色をしていた……女の遺体だった。

〜事件現場〜

「また酷いな…」

杉田と桜井が到着した時には現場は日が沈もうとしていた時間帯だった。

「遅いじゃないですか、未確認生命体対策本部という名前が泣ける」

男が1人こちらを見るなり素晴らしい鼻で笑う。それに耐えれず桜井がつかかろうとするが杉田が手で止めた、そしてその男の肩をついてもう1人の男が口を開いた

「そう言っつてやるな北條」

「河野さん…」

「コイツらも色々忙しいんだろ、ひでえ事件だ。犯人も特定できない…そして従来人間にはできない殺し方をしている…、そうなりや対策本部に色々課されるのも仕方ない」

「…」

そう河野と呼ばれた男が言うのと、北條も大人しく引き下がった。だが最後まで桜井達を見る目はどこか見下しているような…そんな目だった

「なんなんですかあの人…」

「北條透、氷川と同じ超エリートだつて聞いてる。何やらあいつとはG3プロジェクトで一悶着あつたみたいだ」

「だからって俺たちに当たらなくてもいいじゃないですか？」

「まあな、俺達未確認生命体対策本部は今んとこ戦果もクソもねえからなあ…」

「八意くんとはあまりかわらせない方が良さそうですね…」

「それは同感だな桜井、とりあえず俺達も仏さん見に行くぞ」

2人は手袋をはめ込み、奥の方へと進んで行った。

「……」

その近くでは、俺達人間を監視するように2人の影が潜んでいた

くチュチュのマンションく

「翔一がいらない!?!」

「はい…、パレオが常時見張って起きながら…申し訳ないです」

部屋に籠もり始めて何日が経っただろうか、置いてあるご飯には少しだけ手を付け…それでもやはり元通りとはいかなかった。話を聞こうにも一向に大丈夫と言い張りまだ心を開かない翔一にメンバーも不信感などを募らせて行つた。

だがそれでも尚、何故か見捨てはしないチュチュの姿があつた。

「とりあえず探すわよ! バイクは!?!」

いつも鍵を放り投げてある場所を見る、そこにはいつものように鍵が置いてあつた。

「ある! アイツ徒歩でどこか行きやがつたのかよ…!」

「ああもう…! パレオ!」

「はい! チュチュ様!」

2人は今までとはうってかわつて探し出す為に外へと出る

「私も探す…、彼を見てるとなんだかほっておけなくて…」

「拾つたのはアタシらだ…一応探さねえと」

チュチュとパレオに続き外へと走り出すレイヤ、そんな3人を止めようとするますきだったが半ば流されるように外へ出ようとする。だがそれを止めたのは六花だった。

「ウチらのはあの人の世話係やないのに…」

「ロツク…」

「ますきさんは…いや、皆さんはなんでそんなに彼のことを…!?!」

六花を見て止まっただますき、そして既に外に出た彼女達にも言うよ

うに言葉を放った

「とんでもない意気地無しで皆に迷惑かけて…、心配ばかり掛けさせるのに…!」

確かにその通りではある、津上翔一を拾ってからなんだか色々忙しい…第1名前だって彼が持っていたぐしゃぐしゃの封筒にあったからその名前をとっただけで怪しいところまみれだ。

それを家に置くという判断を下して、それから少しだけは明るくなったと思ったら今度は人様のバイクを勝手に乗り捨て帰ってきたと思つたら今度は何を言わずに引きこもる。本来なら追い出してもいいレベルの人間具合だった

「覚えてるか…、アイツがちよつとだけ明るくなって家庭菜園とかに手を染めてた時」

「覚えてます…」

「あの時、アイツの手際に喋り方。本当に楽しそうにやっててさ…失敗しても笑って直ぐにチャレンジするアイツを見るとなんだかバンドやってるあたしらみたいじゃないか?それに…」

「アイツは今何かに苦しんでる…いや苦しめられてるんだ。明るい翔一がいることはあたしらも見てる。それが突然苦しむなんて絶対なにかあつたんだ…あたしは見捨てられねえんだよ」

「…」
それだけ言い家を飛び出すすぎ、ただ1人取り残された六花は手をぎゅつと握る。そして誰居なくなつた部屋の中ボソツと一言だけ呟いた

「皆…優しすぎなんや…」

「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…!」

逃げ出してしまった、迷惑をまたかけてしまった。記憶をなくした自分を拾ってくれて場所をくれたのに…

(まだ恩すら返せてないのに…！)

内心わかっている、逃げてもこの力…呪いから逃げれるわけが無い。だがそれでもただ走ればきつと彼女達遠ざかることが出来る。

巻き込まなくて済む…

(いつその事…ここで死ねば…俺なんて死んでしまえばいいのに…！)

何故この力があるのか、どうして俺にあるのか。それを知る事もなく死ねば…楽になれる

(この世界には俺以外にも戦ってくれる人がいるじゃないか…)

ニユースにも出ていた4号と呼ばれているヒーロー、みんなの英雄

…

みんなの居場所を護るヒーロー。

(なれる訳が無い…俺なんか)

だが呪いは呪い、それを簡単にぬぐい去る事は不可能だった。

“戦え”そして“守れ”

「っ…！また…あ…!!」

突如として意識を焼き焦がす程の感情の並が翔一を襲う、分かっている…原因はこの奥にある呪いだ。

(呑まれるな…、クソ…!!呑まれるなあ…!!)

もう戦いたくなんてない…、俺が戦わなくてもいいんだ。戦わなかったって4号が何とかしてくれる。だから収まれ

頼むから収まってくれ

』
そして同時刻、2人の女が走っていくのを2匹のアンノウンがそれを地面の下から覗くように見ていた。

片方はまるで海亀の特徴を身に纏う銀色のアンノウン”トータスロード テストワード・オケアヌス”

そしてもう片方、まるでオケアヌスとついでを成すかのように陸亀の特徴を捉えた銅色のアンノウン”トータスロード・テストワード・テレストリス”

』
お互い一言も発することは無く目を見つめ頷く。既にこれで数回目になっていた。

そして一体どういう運命なのだろうか、あの二人からは”アギト”と何らかの形で接触している形跡があった。

あの忌々しい力は辺りの人間にさえ影響を及ぼす。かつてのよう
に…

『殺せ』

2匹の脳内に声が響いた、それは単純であり…残酷な命令。

「はあ……はあ……」

「チュチュ様大丈夫ですか？」

木に手をつき、肩で息をするチュチュを支えるパレオ。最初に出た2人だったが彼を見つけれられていなかった。

「まったたく……どこに行ったのよ……！」

「お水です！」

「ありがとう」

相変わらずの手際の良さのパレオから水を受け取り飲む、冷たい液体が疲れた体に染みていく。

(近くに自販機がなかったような気がするのだけれど…、まあいいわパレオだし)

そうして潤いが戻る、ペットボトルを閉めパレオに渡そうとした瞬間パレオがチュチュを抱え近くの木へと身を隠した。

「どうしたのパレ…むぐっ…!?!」

突如どうしたのかと問おうとしたが口を塞がれた。息を潜めるようにするパレオに気圧されチュチュも黙り込む

「先程から私たちを見る〃何か〃が……っ!?!」

パレオの言葉が止まり、目が今までにないくらいに開いていた。まるで見たことを信じられないと言うほど…

「…!?!?」

チュチュも息を潜めながら目線を映す。そこには銀色と銅色の甲羅の様なものを背負った2人…いやその立っているものを人と仮定していいのだろうか…

そう、目線の先には……かつて世間を震わせた未確認生命体があった。

ただのコスプレかもしれない、何かのドッキリなのかもしれないと考える。だが脳内の危険信号は最大限に反応していた。お互いに無意識に身体をくっつかせ冷や汗を垂らす。

土に染みていく汗すら相手に気づかれるのではないかという不安が思考を鈍らせていく。

(まず第一にチュチュ様を守らなければ…、私はそれからでも遅くない…!?!)

隙を見て逃げ、警察などを呼べば即座に来てくれるはず…そう考えチュチュに言葉を伝えようとした時だった。不意に映った人物に意識を持っていかれる。

(あれは…翔一さん…!?!)

そう、逃げ出したはずの翔一だった。2人を見つめるその目はパレオさえ気圧される程の圧を放っていた。怯えた様子もなく、かといえ前のように明るくなつたとは思えない異質さ……

「パレオ……、アイツ……」

「はい……翔一さんが、でもなんでここに？」

もう一步翔一が前に進むと、2匹の亀形の未確認生命体は気配に気付き翔一の方を見る。

『……………“アギト”』

(アギト……?)

テレストリスが放つた一言は、一種の地獄耳であるパレオには聞き取れた。横にいるチュチュは状況が飲み込めず黙っていた。

パレオはただ、じつと翔一の方を見つめるしか無かった。

く大学く

「……」

大学デビューをして、そして同時にスタートダッシュに失敗した男。八意想

正直これだけ人がいたらボツチでも誤魔化しようがある気がするが……何せリサ達に絡まれる度に男からの視線がすごく痛い。俺も同性の仲がいい友達が欲しい……

そんなことを思いながら歩いていると突如としてスマホが鳴り響いた。誰からだよと思いつつ出るとまさかの黒服さん。

「もしもし、久しぶりですねこの感じ」

『そうですね八意様。それよりも少しばかり事件が……』

「まさか……」

『その“まさか”でございます』

『未確認生命体が、ある場所に…』

息を潜めたパレオ、そしてチュチュ：彼女達が見つめる先には探していたはずの翔一が立っていた。だがその立ち姿からいつもの翔一の面影はなく：まるで別人のように二体の化け物と相まみえていた「チュチュ様…」

「言わなくても分かってるわよ…」

草木に身を潜めた2人が見える場所から覗き、小さく囁く。

「なんで翔一さんが…」

「あつ…！」

パレオ達が見ていた先で、2匹の未確認が翔一へと襲いかかった。咄嗟に翔一を助けようとパレオだったが次の瞬間に目に入った光景に脚が止まる。

「パレオ…、あれは本当に…」

喉元まで出かかった言葉を強引に飲み込み、二人は並んで立っていた。た。

その目線の先では翔一が二体の怪物を相手に生身で戦っていた、その動きはやはり想像できない鋭さがあった

『——！』

「パレオ…！」

その時だった、翔一の飛び蹴りを喰らい二人が隠れていた近くへと転がる。翔一へと再び近づこうとしたオケアヌスは後ろからの視線に気が付き振り返った。

「っ…！」

普通の人間が得体の知れない者と視線が合いそれでも息をひそめるなどということは不可能だ。チュチュよりも先にパレオが怖気づくようにして声を出してしまった。

『—————』

(逃げる…でも足が動かない…、言うことを聞かない…！)

「チュチュ様、申し訳ありません…！」

先に声を出してしまったパレオをかばうようにして立つチュチュ、だがその足は一步も動いておらずまるで磔にされた獲物のようなものだった。

「誰か…、お願い—————翔一!!」

チュチュは気が付けば、目の前の翔一に声をかけていた。

(こいつらを殺せば…、俺も少しは誰かの役に立てるだろうか)

名前も居場所も記憶も、すべてを失い拾われ…この津上翔一という名前ですら唯一の持ち物であった封筒に書いてあった名前だった

(腹部から出てくるはずのベルトも出てこない)

あの時、あの夜化け物を殴り飛ばした化け物の手…感触もすべて記憶に焼き付いていた。

(どうして俺がこんな力を持ったのか、どこで手に入れたのか分からない。でももう分からなくてもいい…)

ベルトを出すことすらせずとも戦えている、その事実がここにある。そして嫌になる…

自分は、人間では無いということを示すかのような…

「翔…っ!!」

「っ…!?!」

突如、聞き覚えのある声が翔一の耳に届いた。無意識に声が出た方を向いてしまう

(あれは、チュチュにパレオさん…!!なんでこんな所に――)
逃げるようにして離れたはずなのに…、それでも翔一の体は2人を守ろうとして駆け出していた。

「その2人に…近づくなアツ!!」

眼前にいたテレストリスを無視し2人を襲おうとしていたオケアヌスを背後から蹴り飛ばし宙に浮いたところをテレストリスの方面へと投げ捨てる。

「翔…」

後ろから聞こえた声に顔を歪めてしまった、振り返れない…今のふたりの顔を見たくなかった。

「どうして…!!」

「探すのにどれだけ時間がかかったと思ってるの!?!」

翔一が聞くより先にチュチュの大きな声が目をつんざいた。

「私達だけじゃありません、レイヤさん達も探してくれているんです！」

「どうして…僕なんかの為に…!!」

目尻に涙が溜まる、自分にそんな権利などないと理解していても…

「あんたが居ないと色々不便なのよ！花壇も最近ほったからしで！」

「そんなの、捨ててといってくださいよ…!!」

「皆さんが心配してるんです、私だって…!!」

「そんなに長く居ないのに…、なんでそんなことが言えるんですか…!!」

「あーごちやごちや言うんじゃないわよ!!さっさと帰りなさいよ!!私は親!」

「もうほつといってくださいよ——っっ!!」

振り返って2人に声を粗げようとした瞬間、翔一の額を拳がめり込み横へと吹き飛ばされた。

「がっ…あっ…ゴボ…ッ!!」

近くのベンチを破壊しめり込む。そのまま咳き込み口から血を吐き出す。だが2体の攻撃はそれだけでは済まなかった

地面にめり込み気配を消した2人が翔一の近くへと接近。そのまま飛び出した衝撃でオケアヌスのアッパーを顔へと打ち込まれる

「ぐあ…!?!」

「翔一さん…!!」

上へと吹き飛ばされ、高く飛び上がったテレストリスの蹴りを受け再び地面へと叩きつけられぼろ雑巾のように舞う。

(当たり前前だ…、敵は俺のこの力と…人間を狙う)

今も頭の隅にあるこの力を使って皆を守るビジョン。

(俺に、務まらなかった…)

まだ立てずに座り込む翔一の元に足音が1つ近づいてきていた。

(1つ…1人だけって事なのか…)

必死に頭を動かし足音の方角を見る、血と目眩で揺らぐ視界が捉えたのは2人を殺そうとする敵の姿だった。

「や…めろ」

その人達は関係ない、狙うなら俺だけを狙えばいい。だがその言葉を吐く前に翔一も首を掴まれる。

「ぐあ…あ…！」

化け物に表情があるのかは定かでは無いが、翔一を殺そうとする目は…笑っているように見えた。

「翔一!!アンタさつきまで動けてたじゃない!!何とかして!!」

「っ…!?!」

敵に怯みながらも声を張り上げたチュチュ、その言葉は翔一の耳を伝い…心まで響いた。

「頼む…、今少しだけでもいい…!!」

死ぬならせめてあの二人を守る、だからそのために

「俺に力を…っ!!!」